頭註

國譯本草綱目

第五册

春陽堂藏版

原著　明　李時珍
監修・校註　理學博士　白井光太郎
顧問　木村博昭
考定　理學博士　牧野富太郎
考定　理學博士　脇水鐵五郎
考定　岡田信利
考定　矢野宗幹
考定　木村康一
譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目　第五册

目次

本草綱目草部第十五卷

夏臺

本草綱目草部第十六卷

草部第十六卷目錄

本草綱目草部第十七卷　上

本草綱目草部

第十五卷

本草綱目草部目錄第十五卷

草の四　隰草類上五十三種

胡盧巴 嘉祐　蠡實 本經 即ち馬蘭子。必似勒を附す　惡實 別錄 即ち牛蒡。

葈耳 本經 即ち蒼耳。　天名精 本經 即ち地菘、鶴蝨。　豨薟 唐本

箬 綱目　蘆 別錄　甘蕉 別錄　蘘荷 別錄

麻黃 本經 雲花子を附す。　木賊 嘉祐 問荊を附す。

石龍芻 本經 即ち龍須草。　龍常草 別錄 即ち糉心草。

燈心草 開寶

右附方　舊一百四十四　新二百八十六

菊（本經上品）

和名　きく
學名　Chrysanthemum sinense, Sabine.
科名　きく科（菊科）

釋名　**節華**（本經）　**女節**（別錄）　**女華**（別錄）　**女莖**（別錄）　**日精**（別錄）　**更生**（別錄）　**傅延年**（別錄）　**治蘠**（爾雅）　**金蕊**（綱目）　**陰成**（別錄）　**周盈**（別錄）

時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『菊はもと蘜と書き、鞠に從ふ。鞠は窮の意味だ。月令に、九月菊に黃華ありとあつて、是が華の窮極だから蘜と謂ふ』とある。節華なる名稱は、やはりその節候に應ずる意味を取つたものだ。崔寔の月令には『女節、女華は菊の花の名、治蘠、日精は菊の根の名』とある。抱朴子には『仙方に所謂、日精、更生、周盈とあるは、いづれも一の菊に對して根、莖、花、實を異る名で呼んだのだ』とある。

頌曰く、唐の天寶單方圖には、白菊を載せて『原は(一)南陽の山谷、及び田野の中

(一)南陽ハ晉ノ郡名、朮ノ註ヲ見ヨ。

に生じたもので、(二)潁州地方では回峰菊と呼び、(三)汝南では茶苦蒿と名け、(四)上黨及び(五)建安郡、(六)順政郡ではいづれも羊歡草と名け、(七)河內では地薇蒿と名ける』といつてある。

(八)【集解】別錄に曰く、菊花は(九)雍州の川澤、及び田野に生ずる。正月に根を採り、三月に葉を採り、五月に莖を採り、九月に花を採り、十一月に實を採り、いづれも陰乾する。

弘景曰く、菊に兩種あつて、一種は莖が紫で氣が香しく味が甘い、葉は羹にして食へる、これが眞の菊である。一種は莖が青くして大きく、蒿艾の氣があつて味は苦く、食ふに堪へない、これは苦薏と名くるものだ。眞の菊ではない。葉は如何にも似てゐるが、ただ甘と苦とで識別が出來る。菊は南陽(一〇)酈縣に最も多く、今は近道の處處にあつて、種を取つて栽ゑる。又、白菊といふものがあつて、莖、葉はすべて似てゐるが、ただ花が白い。五月取るものである。仙經では菊を妙用といふ。但し多く得難いものだ。常にこれを服するがよいのである。

藏器曰く、白菊は平澤に生ずる。五月紫白色の花を開く。

(二)潁州、大觀ニ州ヲ川ニ作ル。潁川ハ晉ノ郡名、許昌、即チ今ノ河南省許縣ニ治ス。

(三)汝南ハ晉ノ郡名、王孫、苦參ノ註ヲ見ヨ。

(四)上黨ハ晉ノ郡名、人參ノ註ヲ見ヨ。

(五)建安郡ハ晉ノ郡名、建安、即チ今ノ福建省安齋縣ニ治ス。

(六)順政郡ハ梁ノ郡名、興州、即チ今ノ陝西省略陽縣ニ治ス。

(七)河內郡ハ晉ノ郡名、野王、即チ今ノ河南省懷慶ニ治ス。以上七郡ハスベテ前朝州郡ノ制ニ因リテ稱シタルモノナリ。

(八)木村(康)曰ク、現今市場ニ出ヅルモノハ白菊花ニシテ、茶劑トシテ嗜好飲料ニ好ンデ用ヰラル。

（九）雍州ハ今ノ陝西省南部、長安ヲ中心トシタル一帶ノ地ナリ。水部井泉水、金部金牙石ノ註參照。
（一〇）酈縣ハ今ノ河南省内鄕縣境ノ地ニ在リ。
（一一）菊潭、卽チ漢ノ南陽酈縣ノ地ナリ。縣ノ西北ニ菊潭水アリ、附ニ因テ縣名トス。前註酈縣參照。
（一二）大、大觀ニ小ニ作ル。
（一三）小、大觀ニ大ニ作ル。

○頌曰く、處處にあるが、南陽の（一一）菊潭のものを佳しとする。初春に地に布いて細苗が生え、夏茂り、秋花咲き、冬實るものだ。しかし頗る種類の多いもので、ただ莖が紫で氣が香しく、葉が厚く柔く、嫩葉のうちは食し得て、花は微し（一二）大きく味は甚だ甘いものだけが眞なるものである。莖が青く太く、葉が細く氣が烈しく、蒿艾に似て花が（一三）小さく、味の苦いものは苦薏と名ける。眞の菊ではない。南陽の菊にも兩種あつて、白菊といふは、葉が大きく艾葉のやうで、莖は青く、根が細く、花は白く、蕋は黄色だ。黄菊といふは葉は茼蒿に似て花、蕋すべて黄色だ。現に服餌家は多く白いものを用ゐてゐる。又一種、小やかな花を開き、瓣の下が小さい珠子のやうなものがあつて、珠子菊といふ。藥に入れて佳良だといふ。

〔菊〕

○○宗奭曰く、菊花は、近世では二十餘種あるが、單葉で花が小さくして黄に、葉の

綠色が深く小さくして薄く、九月の季候に應じて花を開くものが正しいのである。
(一四)鄧州の白菊で單葉のものもやはり藥に入れる。その他は皆醫經には用ゐない。
○瑞曰く、花が大きくして香しいものは甘菊である。花が小さくして黃色のものは黃菊である。花が小さくして氣の惡いものは野菊である。
○○時珍曰く、菊の品種には凡そ百種もあつて、舊根から自から莖、葉が生える。花の色は品種に由りそれぞれ同じくない。宋朝の劉蒙泉、范至能、史正志などがそれぞれ菊譜を書いてあるが、やはり全部を網羅し盡したとはいへない。その莖にも獨株のものあり、蔓延するものあり、紫、赤、青、綠の殊があり、その葉にも、大、小、厚、薄、尖、禿の異があり、その花にも、(一五)千葉、單葉、有心、無心、有子、無子、黃、白、紅、紫、中間色、深色、淺色、大、小の別があり、その味にも、甘、苦、辛の差異があり、又、夏菊、秋菊、冬菊といふやうな區別もある。しかし、概して藥に入れるには、單葉にして味の甘いものに限ることになつてゐる。菊譜所載の甘菊は鄧州黃、鄧州白といふがそれだ。甘菊なるものは、始めは山野に生じたものだが、今では一般に栽培してゐる。その花は細碎なもので、品委は甚だ高雅では

(一四)鄧州ハ隋ノ開皇年間ニ置キ、大業年間ニ南陽郡ト改メ、唐ニ鄧州トナス。明清皆河南省南陽府ニ屬シ。今ハ縣トナス。春秋ノ鄧國ノ地ナリ。

(一五)千葉ハ重瓣。

(一六)捺ハ字典ニ乃入切、手按ナリトアリ、播ノ意トスベシ。

(一七)鼃黽ハ蛙屬ノ一種金線蛙、和名トノサマカヘル。

ない。蕋は蜂窠のやうで中に細子がある。やはり(一六)捺種する事も出來る。嫩葉、及び花はいづれも煠でて食へる。白菊花は稍や大きいが味は甚だ甘くない。これも秋季に採る。菊の子無きものは牡菊といふ。燒灰を池中に撒けば能く(一七)鼃黽を殺すといふ說が周禮に出てゐる。

花　葉、根、莖、實、いづれも同じ。【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し。損之曰く、甘きものを藥に入れる。苦きものは藥に入れない。杲曰く、苦く甘し、寒である。升るべく降るべく、陰中の微陽である。

時珍曰く、本經には『菊花は味苦し』といひ、別錄には『菊花は味甘し』といひ、その他の本草諸家は、甘きものを菊とし、苦きものを苦薏とし、甘きもののみを藥に入れることになつてゐるが、謹んで按ずるに、張華の博物志には『菊に兩種あつて、苗、花は一樣だがただ味に小異がある。苦きものは食ふわけに行かない』とあり、范至能の菊譜の序には『ただ甘菊の一種のみは食物にもなり藥にも入れる。その他の黃、白の二花はいづれも味が苦く、食ふわけに行かないが、いづれも藥には用ゐ得る。頭風を治するには白いものが就中良い』とある。この二說に據れば、菊

(一八)文獻―藥誌三二六(明、四二)三一七。

なるものの種類には自から甘、苦の二種あるので、食品には甘菊を用ゐるが、藥に入れるには諸菊いづれもよく、野菊、卽ち苦薏と名くるものだけが用ゐられぬといふことになる。故に景煥の牧豎閑談に『眞菊は齡を延べ、野菊は人を泄せしめる。正に黃精は壽を益し、鉤吻は人を殺すと同樣な關係だ』といつたのだ。

之才曰く、朮、及び枸杞根、桑根白皮が使となる。

(一八)**主治**　【諸風の頭眩、腫痛、目が脫けるやうに覺えて淚の出るもの、皮膚の死肌、惡風、濕痺。久しく服すれば、血氣を利し、身體を輕くし、老衰に耐へ、天年を延べる】(本經)【腰痛去來して陶陶たるものを療じ、胸中の煩熱を除き、腸、胃を安んじ、五脈を利し、四肢を調へる】(別錄)　陶陶とは縱緩(ハナレ、ユルム)の貌である。【頭、目の風熱、風旋で地に倒れるもの、腦骨の疼痛を治し、身體の表面の一切の游風を消散せしめ、血脈を利す。いづれも忌む所のものはない】(甄權)【枕に作つて用ゐれば目を明かにする。葉も目を明かにする。生のもの、熟せるもの、いづれも食つてよし】(大明)【目の血を養ひ、翳膜を去る】(元素)【肝氣不足に主效がある】(好古)

白菊　**氣味**　【苦く辛し、平にして毒なし】

主治　【風眩。白髮にならぬ】（弘景）【髭髮を染めれば黒くする。】巨勝、茯苓、蜜に和して丸にして服すれば、風眩を去り、白髮を黒く變じ、老衰せず、顏色を益す】（藏器）

發明　震亨曰く、黄菊花は土と金とに屬し、水と火との性を含み、能く陰血を補するものだから目を養ふのだ。

時珍曰く、菊は春生じ、夏茂り、秋花咲き、冬實り、完全に四季の氣を受け、飽くまで露、霜を經凌ぎ、葉は枯れても落ちず、花は槁れても零れず、味には甘、苦を兼ね、平にして和なる性を稟けてゐる。往昔の人は、この物のよく風熱を除き、肝を益し、陰を補することを謂つて居るが、蓋しこの物は金、水の精英を稟受すること就中多く、能く金、水の二臟を益するものだといふことには氣が付かなかつたのだ。水を補することは火を制する結果となり、金を益すことは木を平にする結果となるのであつて、木が平になれば風が息み、火が降れば熱が除ける。これを用ゐて頭目の諸風を治すといふは、理論的に機微なる關係が存するのである。黄花のものは金、水の陰分に入り、白花のものは金、水の陽分に入り、紅花のものは婦人の血

(一九)斚ハ斝ノ俗字、音賀、玉爵也トアリ、サカヅキナリ。
(二〇)落英ハ落チタ花瓣。
(二一)湖廣ハ湖南、兩廣。
(二二)羸ハ瘠ナリ、風羸ハ瘠ル風土病ヲ云フカ。
(二三)穎ハ英ニ通ズ。

分に入るものであつて、いづれも藥に入れ得るものだ。入神の妙はすべてこれを用ゐ扱ふその人に據るのである。菊は、苗は蔬とすべく、葉は啜るべく、花は餌ふべく、根と實とは藥とすべく、之を囊にすれば枕とすべく、これを釀しては飲とすべく、本より末に至るまで如何なる部分も有功ならざるところはない。前賢はこれを君子に比し、神農は之を上品に列し、隱士は採つて酒(一九)斚に入れ、騷人はその(二〇)落英を餐したといふも、誠に然るべきことである。費長房は『九日に菊酒を飲めば不祥を辟け得る』といひ、神仙傳には『康風子、朱孺子、いづれも菊花を服して仙と成つた』とあり。荊州記には『(二一)湖廣の地は舊くから(二二)風羸の病がある不健康地だが、菊潭の水を飲むのでその地の者には長壽者が多い』とある。かやうに菊の植物として貴重なること、到底他の多くの花卉類の比肩し得べきところではない。鍾會の菊に五美あるの讃には『圓花高く懸るは天の極に準ずるなり、純黄にして雜らざるは后土の色なり、早く植ゑて晩く發くは君子の德なり、霜を冒して(二三)穎を吐くは貞質を象はすなり、盃中に體輕きは神仙の食なり』とある。西京雜記には『菊の花、莖、葉を採り、秫米に雜へて酒に釀し、翌年九月に至つて始めて熟するものを

（二四）本草發揮ニ成チ戌ニ作ル。

用ゐる』とある。

附方　舊四、新七。【甘菊の服食法】玉函方には『王子喬の白髮を變じ、年壽を增す方は甘菊を用ゐ、三月の上の寅の日に採つた苗を玉英と名け、六月の上の寅の日に採つた葉を容成と名け、九月の上の寅の日に採つた花を金精と名け、十二月の上の寅の日に採つた根、莖を長生と名ける。以上四味をいづれも百日間陰乾して等分を取り、（二四）成の日に合せて千杵擣いて末にし、一錢匕づつを酒で服す。或は蜜で梧子大の丸にして酒で七丸を服す。一日三服づつ百日繼續すれば、身體が輕く潤澤になり、一年で髮の白が黑に變ずる。これを服すること二年すれば一旦落ちた齒が再び生え、五年すれば八十歲の老人も變じて兒童となる』とある。孟詵は『正月葉を採り、五月五日に莖を採り、九月九日に花を採る』といふ。【白菊の服食法】太清靈寶方には次の方を擧げてある。九月九日に白菊花二斤、茯苓一斤を、いづれも擣き篩つて末にし、一日三回、二錢づつを溫酒で調へて服す。或は煉つた松脂で和して雞子大の丸にし、一丸づつを服すれば頭眩に主效があり、久しく服すれば顏色を好くし、老衰せしめぬ。藏器曰く、抱朴子に『劉生の丹法では、白菊汁、蓮花

汁、(二五)地血汁、㯶汁を丹に和し、蒸して服す』とある。【白菊花酒】天寶單方に『男子、婦人頭風の久患で眩悶し、頭髮が乾落し、胸中に痰壅し、發作する毎に頭旋し、眼昏して覺えず倒れんとするものは、その發作の兆候を認めたとき、先づ兩の(二六)風池に各二(二七)七壯づつ灸し、同時に此の酒、及び(二八)散を服すれば永く瘥える。その法は、春末夏初に白菊の軟苗を取り收めて陰乾し、擣いて末にし、一日二回、空腹に一方寸匕づつを無灰酒に和して服し、漸次に三方寸匕に增加する。若し酒を飲めぬものならば、ただ羹か粥汁に和して服するもよし』とある。また秋八月に花と共に採收して暴乾し、切つて三大斤を生絹袋に入れ、酒三大斗の中に七日間貯へ、日毎に三回服す。常に酒の氣を繼續するが佳し。(蘇頌圖經)【風熱頭痛】菊花、石膏、川芎各三錢を末にし、一錢半づつを茶で飲む。(簡便方)【膝風疼痛】菊花と陳艾葉で護膝を作り、久しく用ゐれば自から除く。(吳旻扶壽方)【瘢痘の目に入りたるもの】瞖障を生ずるには、白菊花、穀精草、綠豆皮等分を末にし、一錢づつを乾柿餅一枚、粟米泔一盞と共に煮て、泔が盡きたときその柿を食ふ。かくして一日三枚づつ食へば、發病後日淺きものは五七日、久しきものは半月で效が現はれる。(仁齋直指方)【病後

(二五)紫草、茜草幷ニ地血ノ名アリ。
(二六)風池ハ耳後髮際ニアル經穴ノ名。
(二七)大觀ニ七ヲ十ニ作ル。
(二八)大觀ニ散ヲ丸ニ作ル。

冒を生ずるもの】白菊花、蟬蛻等分を散にし、二三錢づつに蜜少量を入れて水で煎じて服す。大人、子兒共に屢〻效驗を得た。（救急方）【疔腫で垂死のもの】菊花一握を搗いた汁一升を口に入れれば直ちに活きる。これは神驗の方である。冬季なれば根を採る。（肘後方）【婦人の陰腫】甘菊苗を搗き爛して湯に煎じ、先づ熏じてから洗ふ。（危氏得效方）【酒醉の醒めぬには】九月九日に採つた眞菊花を末にし、方寸匕を飮で服す。（外臺祕要）【眼の昏花】雙美丸——甘菊花一斤、紅椒を目を去つて六兩を末にし、新地黃汁で和して梧子大の丸にし、就寢時に五十丸づつを茶湯で服す。（瑞竹堂方）

花上水 主治 【色を益し、陽を壯にし、一切の風を治す】（大明）

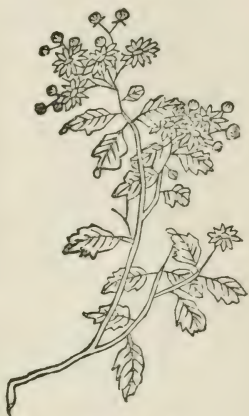
（一）野菊（拾遺）

和名 あぶらぎく、又、しまかんぎく
學名 Chrysanthemum indicum, L.
科名 きく科（菊科）

釋名 **苦薏** 時珍曰く、薏とは蓮子の心のことだ。この物は味が苦く、それに似てゐるから同名を呼ぶのである。

集解 藏器曰く、苦薏は澤畔に生ずる。莖は馬蘭のやう、花は菊のやうだが、

（一）牧野云フ、今ノ人ノ稱スルあぶらぎくハ Chrysanthemum lavandulaefolium, Makino. ノ學名チ有スルモノデ、我邦關東地方ニ多イモノデアル。又滿洲方面ニモ産スル、此品ハ多分植物名實圖考卷ノ九ニアル野山菊デハナイカト思フ、私ノ

此ニあぶらぎくト稱スルノハ右ノあぶらぎくデハナクしまかんきくト云フモノデアル、此花ヲ往時肥前長崎ナドデ油ニ漬ケテ藥用ニシタノデソレデあぶらぎくノ名ガ出來タノデアル、故ニあぶらぎくハ宜シク此種ノ名トスベキモノデアル。

菊は甘く、薏は苦い。諺に『苦いこと薏のやうだ』といふそのものだ。時珍曰く、苦薏は處處の原野に極めて多い。菊と異らないが、ただ葉が薄くて尖が多く、花が小さくて蕋が多く、蜂窠のやうな形狀のものだ。氣味は苦く辛くして慘烈である。

〔野菊〕

根　葉　莖　花　**氣味**　【苦く辛し、溫にして小毒あり】震亨曰く、野菊花を服すれば大いに胃氣を傷める。

主治　【中を調へ、洩を止め、血を破る。婦人の腹內の宿血によし】(藏器)【癰腫、疔毒、瘰癧、眼瘜を治す】(時珍)

附方　新四。【癰疽丁腫】一切の無名腫毒。孫氏集效方では、野菊花を莖共に搗き爛し、酒で煎じて熱服し、汗を取り、渣を傅ければ直に癒える。○衞生易簡方では、野菊の花、莖、葉と蒼耳草各一握を共に搗き、酒一椀を入れて絞汁を服し、

滓を傳けて汗を取れば直ちに癒える。或は六月六日に蒼耳葉を採り、九月九日に野菊花を採つて末にし、三錢づつを酒で服するもよし。【(二)天泡濕瘡】野菊花の根と棗木の煎湯で洗ふ。(醫學集成)【瘰癧の未だ破れぬもの】野菊花の根を擣き爛して酒で煎じて服し、滓を傳ければ自から退く、退かなければ自から破れる。(瑞竹堂經驗方)

(一)菴藺

音は淹閭(エンロ)である。(本經上品)

和名　無し
學名　Artemisia vulgaris, L. var. (?)
科名　きく科(菊科)

釋名 覆閭　時珍曰く、菴は草屋、閭は(二)里門である。この草は蒿の屬で、その老莖は菴閭を蓋覆する材料になるところから名稱となつたのだ。貞元廣利方には菴藺蒿といひ、又、(三)史註に『菴廬は軍行の宿室なり』とあるところを見れば、閭の字は廬と書くべきものかも知れぬ。

集解 別錄に曰く、菴藺子は(四)雍州の川谷に生じ、また(五)上黨、及び(六)道邊に生ずる。十月實を採つて陰乾する。弘景曰く、形狀は蒿、艾類のやうだ。近道の處處にある。仙經にも時にこれを用ゐ、民家ではこれを種ゑて蛇を辟ける。

(二)天泡ハ楊梅瘡ノ一名。

(一)牧野云フ、よもぎニ酷似シタモノデアルガ、葉ノ面背トモ緑色ナノデソレトハ異ツテ居リ、今其何ノ種タル事不明デアルガ多分 A. vulgaris, L. ノ一變種デアラウト思フ、我邦ノ學者之レヲいぬよもぎ(A. Keiskeana, Miq.) トスレドモ中ツテ居ナイ。

(二)里門ハ村ノ入口ノ門。

(三)史註ハ歴史ノ註。

(四)雍州、菊ノ註ヲ見ヨ。

(五)上黨、菊ノ註ヲ

頌曰く、今は江淮にもある。春苗が生え、葉は艾、蒿のやうで高さ二三尺になり、七月花を開き、八月實を結ぶ。(六)九月實を採る。

時珍曰く、菴䕡の葉は艾には似ない。菊葉に似て薄く、細丫多く、表、裏共に青い。高いものは四五尺あり、その莖は色白く、艾の莖のやうで粗い。八九月に細い淡黄色の花を開き、細い艾實のやうな實を結ぶ。實の中に細子があつて、極めて繁殖し易いものだ。藝(七)苑者はこれを以て菊を接ぐ。

子

氣味　【苦し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。普曰く、神農、雷公、桐君、岐伯は苦し、小溫にして毒なしといひ、李當之は溫なりといふ。權曰く、辛く苦し。時珍曰く、降るもので、陰中の微陽である。足の厥陰の經の血分に入る。之才曰く、荊實、薏苡が使となる。

主治　【五臟の瘀血、腹中の水氣、(八)臚脹留熱、風寒濕痺、身體の諸痛。久しく服すれば身體を輕くし、天年を延べ、老衰せぬ】(本經)【心下が堅く、膈中の寒熱するもの、婦人の月經不通を療じ、食物を消化し、目を明かにする。(九)駏驢がこれを食つて神仙となる】(別錄)【氣を益し、男子の陰痿不起に主效があり、心腹脹滿を

見ヨ

(六)道邊、此ニハ上藁郡ノ北境、國境地方ヲ指ス。

(七)苑、金陵本ニ花ニ作ル。

(八)臚ハ腹前ヲ云フ、

(九)駏驢ハ牝騾・牡馬所生ノ雜種獸。

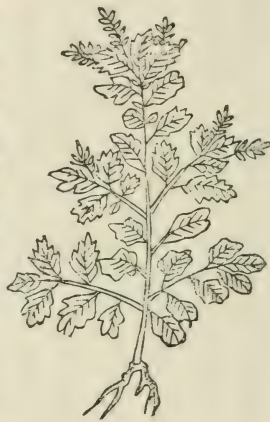
(二〇)閃挫ハ關節捻挫、クジキ。

(二一)大觀ニ大ノ上ニ皆ノ字アリ。

治す】(甄權)【腰脚重痛、膀胱痛、及び骨節煩痛、食物の落付かぬもの】(大明)【酒に播つて飲めば(二〇)閃挫腰痛、及び婦人産後の血氣痛を治す】(時珍)

【發明】 頌曰く、本經に『久しく服すれば身體を輕くし、老衰せぬ』とあるが、古方には服食するものは稀であつて、ただ諸種の雜治の藥中に入るものである。胡洽の驚邪を治する狸骨丸の類の如きでは(二一)大方中にこれを用ゐてある。孫思邈の千金翼、韋宙の獨行方には『踠折瘀血に主效ある。いづれも菴䕡の單味煮汁を服す。また末にして服するもよし』とある。今は一般に打撲を治するに多く此の法を用ゐ、或は飲にし、或は散にし、その效は最も速かだ。

〔菴　䕡〕

時珍曰く、吳普本草、及び名醫別錄に、いづれも『駏驉が菴䕡を食つて神仙となる』とあるが、これもただその壽命の長いことを謂つただけのことで、駏驉とは獸

の名だ。騾に似て小さく、前足が長く、後足が短く、自から物を食ふことの出來ぬ動物で、毎に（二）蟨鼠を負ふてゐてそれに物を嚙ませて食ふものだ。

【附方】 舊一、新二。【瘀血の散ぜぬもの】變じて癰腫と成るものである。生菴蕳蒿の擣汁一升を服す。（廣利方）【月經不通】婦人が持病の風冷で留血が積聚し、月經の通ぜぬには、菴蕳子一升、桃仁二升を酒に浸して皮尖を去り、研匀して瓶に入れ、酒二升に浸封して五日後に、一日三回、三合づつを日毎に服す。（聖惠方）【産後の血痛】菴蕳子一兩を水一升、童尿二盃で煎じて飲む。（瀕湖集簡方）

【附錄】 對盧（別錄） 有名未用に曰く、味苦し、寒にして毒なし。疥瘡の久しく癒えずして死肌を生じたるものに主效があり、大熱を除く。煮汁で洗ふ。菴閭に似たもので、八月採收する。

（一）蓍

音は尸(シ)である。（本經上品）

和名 未詳
學名 Artemisia sp.
科名 きく科(菊科)

【釋名】 時珍曰く、按ずるに、班固の白虎通には『孔子は、蓍なる文字の意味は

(二)蟨ハ蟨ヲ正トス、一種ノ鼠ニシテ駏驉ト共生スルモノ。

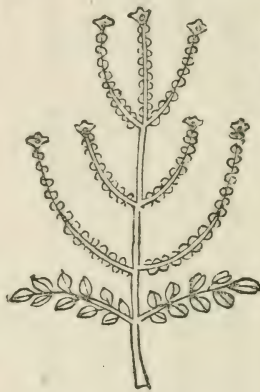
(一)牧野云フ、從來我邦ノ學者之レヲのこぎりさう(Achillea sibirica, Ledeb.)ニ充テタレドモコレハ誤リデアツタ、蓍ハArtemisia屬ノ一種ナレドモ其種ハ尙ホ未詳デアル。

(二)少室ハ嵩山ノ一峰、嵩山ハ河南省登封縣ニ在リ。

(三)蔡州ハ金部金ノ註、上蔡ハ防風ノ註ヲ見ヨ。

蓍であるといつた。老人は長い年處を經て多くの事物に遭遇し、よくすべてを知つてゐることを表はしたものだ』と記載してある。陸佃の埤雅には『草にして壽命の長いものだ。故に文字は耆に從ふ』とある。博物志には『蓍は千歲にして三百莖となる。その本がかやうに老たものだから吉凶を知るのだ』とある。

【集解】別錄に曰く、蓍實は(二)少室の山谷に生ずる。八月、九月に實を採つて日光で乾かす。

〔蓍　草〕

恭曰く、この草は所在にある。莖を筮に作り得るものだ。陶氏は誤つて楮實をこの物としてゐるが、楮實は味が甘く、この物は味が苦いのである。今此に正して置く。

頌曰く、現に(三)蔡州上蔡縣の白龜祠の旁にこの草が生える。蒿のやうで叢をなし、高さは五六尺、一本に十莖、二十莖から多きは五十莖もある。その莖が眞直に長く伸びる點が他の多くの蒿類と異る特

微だ。秋後に枝端に紅紫色で菊花のやうな形の花が咲き、艾實のやうな實を結ぶ。
史記の龜策傳に『龜は千藏にして乃ち蓮葉の上に遊び、蓍は百莖が一根を共にする。これが生ずる土地には獸に虎、狼が無く、蟲に毒螫がない』とあり、徐廣の註に『劉向の言に、龜は千歲にして靈なるもの、蓍は百年にして一本に百莖を生ずる』といひ、褚先生は『蓍が百莖に滿つればその下に必ず神龜が居てこれを守り、その上に常に靑雲があつてこれを覆ふ。傳に「天下和平にして王道正しきを得れば、蓍の莖が一丈の長さになり、その叢に滿百莖を生ずる」といふ。今の時世では蓍を取るに八十莖以上、長さ八尺のものさへ已に得難いので、ただ滿六十莖以上、長さ六尺のものを取つて用ゐ得るだけだ』といつてある。現に蔡州から朝廷へ獻納するが、いづれもさやうなことといふを言はない。して見れば、これ位のものもやはり神物に屬するもので、普通にはないものなのだ。

時珍曰く、蓍なるものは蒿屬の神草である。故に易には『蓍の德は圓にして神なり。天子の蓍は長さ九尺、諸侯は七尺、大夫は五尺、士は三尺』といつてある。張華の博物志には『末が本より太いものを上とする。次は蒿であり、次は荊であつて、

皆滿月の時に浴する』とある。して見れば、卦を數へるに蓍のないときは荊、蒿を代用してもよいのである。

實 〔氣味〕【苦く酸し、平にして毒なし】

〔主治〕【氣を益し、肌膚を充たし、目を明かにし、智慧を聰明にし、先見の明を得る。久しく服すれば饑を覺えず、老衰せず、身體を輕くする】（本經）

葉 〔主治〕【瘧疾】（時珍）

〔附方〕新一。【腹中の痞塊】蓍葉、獨蒜、穿山甲末、食鹽を、共に好き醋を用ゐて搗いて餅にし、痞の大、小を量つて適當に貼る。兩炷香の時間を度とする。痞は化して膿血となり、大便に從つて排出するものだ。（劉松石保壽堂方）

艾（別錄中品）

和名 よもぎ
學名 Artemisia vulgaris, L. var. indica, Maxim.
科名 きく科（菊科）

〔釋名〕**冰臺**（爾雅）**醫草**（別錄）**黃草**（埤雅）**艾蒿** 時珍曰く、王安石の字說に『艾は疾を乂（意義は治に同じ）め得るもので、久しく經たものほど善い。故に

文字は乂に從ふのだ』とある。陸佃の埤雅には『氷を圓く削つて手に持ち、日光に向けて透る光を艾に受ければ火が付く』とある。この物に氷臺なる名稱があるのはこのためであらう。醫家でこれを用ゐて多くの病に灸するから灸草といふ。灸の一灼きを一壯と云ふは、壯健の人を標準とするのである。

【集解】別錄に曰く、艾葉は田野に生ずる。二月三日に採つて暴乾する。

頌曰く、處處にあるが、(一)復道、及び(二)四明の產が佳いとしてあつて、この種が多くの病を治するに尤も勝れてゐる。この草は初春に地に布いて苗が生え、莖は蒿に類し、葉の背は白く、苗の短いものが良い。三月三日、五月五日に葉を採つて暴乾する。久しく歲月を經た古いものを用ゐるがよい。

時珍曰く、艾葉は、本草には產地の記述がなく、ただ『田野に生ずる』とあつて、宋の時代には(三)湯陰、復道のものを佳しとし、四明のものの形態を圖してあるが、近代では湯陰の產を北艾と謂ひ、四明の產を海艾と謂ひ、成化年代以來は(四)蘄州の產が勝れたものとして用ゐられ、方物にも充てて天下に重きをなし、蘄艾と稱して喧傳されてゐる。他の地方の艾は酒壜に灸しても透らないが、蘄艾ならば一灸

(一) 復道、大觀ニ複ニ作ル。唐、宋ニ復州アリ、或ハソノ地ヲイフカ。唐ニハ山南道ニ屬シ、宋ニハ湖北路ニ屬ス。即チ今ノ湖北省漢陽府沔陽州治ナリ。未詳。

(二) 四明ハ山名、今ノ浙江省鄞縣ノ西南百五十支里、餘姚縣ノ南百十支里ニ在リ。江南ノ一名山ナリ。故ニコノ山ヲ中心トスル一帶ノ地ヲ四明ト稱ス。

(三) 湯陰、即チ漢ノ

蕩陰ナリ。隋ニ湯陰ニ改ム。今ノ河南省彰德府ノ湯陰縣ソノ地ナリ。

(四) 蘄州ハ言聞、時珍父子ノ生地ナリ。北周ニ置キ、元ニ路トナス。明初ニ府トナシ、尋デ州トナシ、黃州府ニ屬ス。今ハ改メテ湖北省蘄春縣トナス。

(五) 茸ハ毛茸チ云フ

(六) 人ハ虎ノ誤。支那ノ古代艾虎懸門ノ風アリシナリ。

で直ちに透徹する點が特長である。この草は山原に多く生ずるもので、二月に舊い根から苗が生えて叢をなし、その莖は直く伸びて色が白く、高さ四五尺、葉は四邊に廣がる。葉の形狀は蒿のやうだが分れて五尖となり、椏上にまた小尖があつて表が青く裏が白く、(五)茸があつて柔く厚い。七八月に葉の間から車前の穗のやうな穗が出て細い花を開き、實は枝に盈ちて累累と結び、その中に細子があり、霜が降つてから後に枯れる。一般に五月五日に莖のまま刈取り、暴乾して葉を採り收める。予が父月池子、諱は言聞の著書に蘄艾傳一卷があつて『山陽に產し、采るに端午を以てす。病を治し疾に灸するに、功小補に非ず』といふ讚がある。又、宗懍の荊楚歲時記には『五月五日の雞鳴前に艾を採る。人の形に似たものを取集めて貯へ、それで病に灸すれば甚だ效驗がある。この日艾を采つて(六)人の形を作り、門の戶に懸けて置け

〔白艾〕

ば毒氣を禳ふ。その莖を乾して麻油をしめし、火を付けて灸炷に點ずれば灸瘡を滋潤ならしめ、癒えるまで疼まない。また蓍策の代用にもなり、燭の燈心にもなる』とある。

葉【修治】宗奭曰く、艾葉を乾して擣き、青滓を去つて白い部分を取り、それに石硫黃末少量を入れたものを硫黃艾と謂ひ、灸家で使用する。米粉少量を入れて擣いた末は服食の藥に入れる。

時珍曰く、凡そ艾葉を用ゐるには、久しく置いた古いものを修治して細軟にして用ゐねばならぬ。これを熟艾といふ。生艾を用ゐて灸を點じては肌脈を傷めるものだ。故に孟子に『七年の病に三年の艾を求む』といつてある。淸淨な葉を揀り取つて塵屑を拂ひ去り、石臼に入れて木杵で搗き熟し、渣滓を篩ひ去つて白い部分を取り、再び綿のやうに柔く搗き爛れる程度に搗き、使用に際して焙じ燥して用ゐれば灸火に效力を發揮する。婦人の服する丸、散藥に入れるには、熟艾を醋で煮乾かし、搗いて餅にして烘き乾かし、再び末に搗いて用うべきものである。糯糊に和して餅にしたものや酒で炒つたものもあるが、いづれも佳くない。洪容齋の隨筆に『艾を

(七) 木村(康)曰ク、よもぎノ成分ハ〇、〇二%ノ精油ヲ含有シ、ソノ主成分ハチネオール(五〇%)ニシテ、他ニツヨーン及ピセスキテルペン、セスキテルペンアルコールノ類ヲ含有ス。中尾万三、澁江忠三—藥誌五一〇(大、一五)六三六。

(八) 木村(康)曰ク、艾葉ハソノ含有スルクロールカリウム及鞣酸アルカリニヨリ解熱ノ效ヲ致スト雖モ、家兎ニヨル艾葉越幾斯ノ試驗ニヨレバ、ソノ解熱セシムルニ必要ナル量ハ致死量ニ近キ故、解熱藥トシテハ用ウルヲ得ズト。大橋秀吉—東醫、一〇(一九二七)一一六。

強く有力ならしめるは六ケ敷いものであるが、白茯苓三五片を入れて共に碾り、即時に細末にして用ゐるも特殊な一方法だ』といつてある。

(七)氣味　【苦し、微温にして毒なし】恭曰く、生のものは寒、熟せるものは熱である。元素曰く、苦し、温である。陰中の陽である。時珍曰く、苦くして辛し。生のものは温、熟せるものは熱、升るべく降るべく、陽であつて足の太陰、厥陰、少陰の經に入る。苦酒、香附が使となる。

(八)主治　【あらゆる病に灸する。煎にして用ゐれば吐血、下痢、下部の䘌瘡、婦人の漏血を止め、陰氣を利し、肌肉を生じ、風寒を辟け、子を儲けしめる。煎に作るには風に當ててはならぬ】(別錄)【搗汁を服すれば傷血を止め、蚘蟲を殺す】(弘景)【衄血、下血、膿血痢に主效がある。水で煮、または丸、散の隨意にして用ゐる】(蘇恭)【崩血、腸痔血を止め、金瘡を搨し、腹痛を止め、胎を安らかにする。苦酒で煎にして用ゐれば癬を治するに甚だ良し。搗汁を飲めば心腹一切の冷氣、鬼氣を治す】(甄權)【帶下を治し、霍亂轉筋、痢後の寒熱を止める】(大明)【帶脈の病となつて腹が脹(九)滿し、腰が溶溶として水中に坐する如くなるを治す】(好古)【中を温め、冷を

逐ひ、濕を除く』(時珍)

【發明】○詵曰く、春季に艾の嫩葉を採つて茶にして食ひ、或は麪に和して彈子大の餛飩にして三五箇を呑み、飯を食つて上から壓すれば、一切の鬼、惡氣を治す。長きに亙つて服すれば冷痢を止める。又、嫩艾で作つた乾餅子を生薑煎で服すれば、瀉痢、及び產後の瀉血を止めること甚だ妙である。

○頌曰く、近世では艾を單服するものがあり、或は蒸した木瓜と和して丸にし、或は湯に作つて空腹に飮むものもある。甚だ虛羸を補するものではあるが、けれどもやはり中毒を發すことがあつて、ために熱氣が衝上し、狂燥して始末がつかなくなり、眼を攻め、瘡が生じ、出血するに至る場合がある。誠に妄りに服すべきものではない。

○○震亨曰く、婦人の不妊症は、多くは血が少いために受精不能となるのである。俗醫は、子宮の虛冷と考へて辛、熱の藥を投じ、或は艾葉を服さしめたりするが、何ぞ知らん艾は性至熱なるものであつて、火を用ゐて灸すれば氣が下行し、藥に入れて服すれば氣が上行するものなのだ。本草にはただその性を溫なりといつただけで、熱

(九) 滿、本草洞玄ニ痛ニ作ル。

(一〇)太陽ノ眞火ハ日輪ノ火。
(一一)肅殺ハ嚴厲摧殘ノ意。
(一二)沈ハ深ナリトアリ、重病ヲ云フ。
(一三)熱因ハ熱性ニ同ジ。

といつてないところから、世人はその溫を喜んで率ねこれを多く服し、久しきに亙つて中毒を發してゐる。しかし罪を艾に歸するわけには行かない。予は蘇頌の圖經を讀んで、この問題に關し深く感ずるところがあつた。

時珍曰く、艾葉は、生では微苦にして甚だ辛く、熟では微辛にして甚だ苦い。生は溫、熟は熱、純陽である。以て(一〇)太陽の眞火を取るべく、以て絕るに垂たる元陽を回らすべく、これを服すれば三陰に走つて一切の寒濕を逐ひ、(一一)肅殺の氣を轉じて融和をなし、灸すれば諸經に透つて百種の病邪を治し、(一二)沈痾の人を起たしめて康泰にする。その功まことに大なるものである。蘇恭が『その性は寒なり』といひ、蘇頌が『毒あり』といふは、一はその能く諸血を止めるを見、一はその熱氣の上衝するを見て、性の寒なるもの、毒なるものと誤認したのだ。蓋し血は氣に隨つて行り、氣が行れば血が散ずるものであつて、(一三)熱因のものを久服すれば火の上衝を惹起することに理解を缺いたのだ。そもそも藥の目的は病を治するにある。病に的中して作用を十分に發揮すれば、それで能事畢るのだから、直ちにこれを止むべきものである。若し元來虛寒、痼冷のもの、婦人の濕鬱、帶漏の患者の場合ならば、それ

に對しては艾を用ゐて當歸、香附の諸藥を和し、以てその病を治するといふ方法に何の不都合なところがあらうか。而るに、ただ妄りに妊娠を圖るに急にして、間斷なく艾を服し、更にその藥力を助くるに辛、熱のものを以てするが如きは、藥性久しきに互つて偏の現象となり、遂に火を躁する結果となるのである。そもそも何ものの罪であるか、艾に何の罪ありと言ひ得るか。艾附丸には、心腹、少腹の諸痛を治し、婦人の諸病を調へるに頗る深い效力があるではないか。膠艾湯には、虛痢、及び妊娠、産後の下血を治するに就中著しい效驗があるではないか。老人の丹田の氣の弱きもの、臍腹に冷を畏るるものには、熟艾を布袋に入れてその臍腹を覆ひ溫むれば言ふべからざる妙がある。寒濕脚氣にもやはりこれを足袋の裏に夾むがよいものだ。

附方　舊二十四、新二十七。　【傷寒時氣】溫疫で頭痛し、壯熱し、脈盛なるには、乾艾葉三升を水一斗で一升に煮取つて頓服し、汗を取る。(肘後方)　【妊娠傷寒】壯熱して赤斑を生じ、變じて黑斑となり、尿血するには、艾葉を雞子大ほどを酒三升で(一四)二升半に煮取り、二回に分服する。(傷寒類要)　【妊娠風寒】突然風寒に中つて人事

(一四)大觀ニ一ニ作ル

不省となり、中風の如き症狀には、熟艾(一五)一兩を米醋で炒つて極熱し、絹に包んで臍下を熨すれば良久して甦る。(婦人良方)【中風口喎】長さ五寸の葦の筒を用ゐ、一方の端を耳中へ刺入れ、四面を麪で密封して風の透らぬやうにし、一方の端へ艾で七壯灸する。右を患ふものには左へ灸し、左を患ふものには右へ灸する。(勝金方)【中風口噤】熟艾で(一六)承漿の一穴、頰車の二穴に各五壯を灸する。(千金方)【中風掣痛】(一七)不仁のもの、不隨のもの、いづれも乾艾を(一八)斛ほどの量を揉み團めて(一九)瓦甑の中に入れ、甑の下方の孔を盡く塞いで只一箇の孔を殘し、その孔に患部を當てて中の艾を燒く。二時間經てば反應が現はれる。(肘後方)【舌縮口噤】生艾を搗いて傅ける。乾艾をしめしてもよし。(聖濟錄)【咽喉腫痛】醫方大成では、艾の嫩葉の搗汁を少しづつ嚥む。○經驗方では、青艾の莖、葉一握を醋で搗き爛し、喉の上に傅ける。冬季は乾艾を用ゐるも(二〇)可し。李臣(二一)が所傳の方である。【癲癇諸風】熟艾を陰囊の下、(二二)穀道正門の中間に當て、患者の年齡の多少に隨つて灸する。(斗門方)【鬼擊中惡】突然感染し、胸、脇、腹中が刀で刺されたやうに疞刺切痛して觸れることも出來ず、ともすれば吐血し、鼻中出血し、下血するは、一名鬼排とい

(一五)本草發揮ニ三ヲ一ニ作ル。
(一六)承漿ハ下唇下ノ正中ノ穴、頰車ハ耳前腭ノツガヒノ穴。
(一七)不仁ハ無感覺。
(一八)斛ハ日本ノ三斗九升餘。
(一九)瓦甑ハ瓦製ノ蒸籠和名コシキ。
(二〇)大觀ニ奇ヲ得ニ作ル。
(二一)大觀ニ臣ヲ亞ニ作ル。
(二二)穀道正門トハ肛門ヲ指ス。

(二三)撮口ハ口チ閉ヅルコト。

ふ病である。熟艾雞子三箇ほどを水五升で二升に煎じて頓服する。(肘後方)【小兒の臍風】(二三)撮口するには、艾葉の燒灰で臍中を塡め、帛で縛つて置けば效がある。或は蒜を敷いて上から灸し、口中に艾の氣が出るやうになれば立ろに癒える。(簡便方)【狐惑蟲䘌】病人が齒に色澤がなく、舌上が白くなり、或は睡ることを好み、痛さ痒さが何れの部分にあるかを知らず、或は下痢するには、急に下部に治療を加ふべきものである。それを知らずして上部に治療を加へると、下部に蟲を生じて肛門を食ひ、爛れが五臟に現はれるやうになつて死亡するものだ。これには管の中で艾を燒き、下部を熏じて烟を入れる。或は少し雄黃を加へるが更に妙だ。罌中で烟に燒いて入れるもよし。(肘後方)【頭風の久痛】蘄艾を揉んで丸にし、時時に嗅ぐ。黃水の出るを度とする。(靑囊雜纂)【頭風の面瘡】痒くして黃水の出るには、艾二兩を醋一升で砂鍋で煎じ、一日三囘、汁を取つて紙上に塗つて貼る。(御藥院方)【心腹の惡氣】艾葉の搗汁を飲む。(藥性論)【脾胃の冷痛】白艾末二錢を沸湯で服す。(衞生易簡方)【蚘蟲心痛】刺すが如く痛み、口より淸水を吐くには、白熟艾一升、水三升を一升に煮て服すれば蟲を吐出する。或は生艾の搗汁を取り、深夜五更に香脯一片を食つてそ

(二四)野雞痔ハ形狀雞心、雞肝ニ似タルヲ云フ。

の汁一升を飲む。蟲を下出するものだ。(肘後方)【口より清水を吐くもの】乾蘄艾の煎湯を啜る。(怪證奇方)【霍亂吐下】止まぬには、艾一把を水三升で一升に煮て頓服する。(外臺祕要)【老人、小兒の白痢】艾薑丸——陳北艾四兩、乾薑を炮いて三兩を末にし、醋で煮た倉米糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを空心に米飮で服す。甚だ奇效がある。(永類方)【諸痢久下】艾葉、陳皮等分の煎湯を服す。また末にし、酒で煮爛した飯に和して丸にし、二三十丸づつを鹽湯で服す。(聖濟總錄)【暴泄の止まざるもの】陳艾一把、生薑一塊を水で煎じて熱服する。(生生編)【大便後の下血】艾葉、生薑を煎じた濃汁三合を服す。(千金方)【(二四)野雞痔病】豫め槐柳湯で洗ひ、艾でその上に七壯を灸して效を取る。郎中の王及が騾に乘つて西川へ往く途中、數日にして痔病が甚しく發り、胡瓜のやうになつて腸の端が貫かれるやうに覺え、熱は火の如くにして忽ち打ち倒れた。途中のこととて手當の施しやうもなく、困つてゐた。その時その驛の長が『これは灸すれば瘥える』といつて、前記の方法で三五壯灸すると、忽ち一道の熱氣が腸中に入るやうに覺え、夥しく轉瀉して同時に血穢を併出し、瀉出して後は胡瓜のやうなものの所在がなくなつた。(經驗良方)【妊娠下血】張仲景は『婦

人には、漏下のものあり、半產後に下血の絕えぬものあり、妊娠下血のものもある。いづれも膠艾湯を主として用ゐる。阿膠二兩、艾葉三兩、芎藭、甘草各二兩、當歸、地黃各三兩、芍藥四兩、水五升、淸酒五升を三升に煮てから、膠を納入れて盡く溶かし、その溫酒一升づつを一日三回に服す。（金匱要略）【妊娠胎動】或は腰痛し、或は心を搶き、或は下血して止まず、或は逆產で產兒が腹中で死亡したるものには、艾葉雞子一箇ほどを酒四升で二升に煮取り、二回に分服する。（肘後方）【胎動で心を壓迫するもの】痛みを覺ゆるには、艾葉を雞子ほど、頭醋四升を二升に煎じ、分けて溫服する。（子母祕錄）【婦人の崩中】連日止まぬには、熟艾を雞子ほど、阿膠を炒つて半兩、乾薑一錢を用ゐ、水五盞で先づ艾、薑を二盞半に煮て傾け出し、それに膠を入れて溶化し、三服に分けて一日の內に服し盡す。（初虞世古今錄驗）【產後の瀉血】止まぬには、乾艾葉半兩、炙熟した老生薑半兩の濃煎湯を一服する。立ろに妙效がある。（孟詵食療本草）【產後の腹痛】死せんとするは寒に感ずるが原因だ。陳蘄艾二斤を焙じ乾し、搗いて臍上に鋪き、その上に絹を覆ふて熨斗で熨す。口中より艾の氣が出るまで試むれば痛が自から止む。（楊誠經驗方）【突然の吐血】一二口吐き、或は心

衄し、或は內崩するには、熟艾三團、水五升を二升に煮て服す、ある方では、燒灰二錢を水で服す。(千金方)【鼻血の止まぬもの】灰を吹く。また艾葉を煎じて服するもよし。(聖惠方)【盗汗の止まぬもの】熟艾二錢、白伏神三錢、烏梅三箇、水一鍾を八分に煎じ、就寝時に溫服する。(通妙眞人方)【火眼腫痛】艾を燒き烟をたてて盌を覆ぶせ、烟の盡るを待つて盌の上に著いた煤を刮下し、溫水で調化して眼を洗へば直ちに痊える。更に黃連を入れるが尤も佳し。(斗門方)【面上の皯黯】艾灰、桑灰各三升を用ゐ、水で三回繰返して淋汁を取り、五色の布に入れて共に煎じ、丸にし得る程度に煎じて少量づつ傅ける。自から爛れ脫ちること甚だ妙である。(外臺祕要)【婦人の面瘡】粉花瘡と名ける。定粉五錢を菜子油で調へて盌內に泥り、艾一二團を燒いてその烟で熏じ、烟の盡くるを待つて地上に覆ひ、一夜置いて取出し、調へて搽る。永く瘢痕が無くなり、また肉も生じ易い。(談埜翁試驗方)【身體、面部の疣目】艾火で三壯灸すれば取れる。(聖惠方)【鵞掌風病】蘄艾の眞のもの四五兩を水四五盌で煮て五六回たぎらせ、大口瓶に入れ麻布を二層にかけて縛り、手の心をその瓶の上に置いて熏じ、冷えれば再び熱する。神の如き效がある。(陸氏積德堂方)【疥

(二五)疳瘡ハ甜瘡ノ誤ナラン、甜瘡ハミヅガサ。
(二六)大觀ニ爛上ニ黃字アリ、黃爛瘡ハ黃水瘡和名ミヅガサノコトナラン。
(二七)韓字ハ本草發揮ニ幹トアリ。

瘡の熏法】熟蘄艾二兩を用ゐ、木鼈子三錢、雄黃二錢、硫黃一錢を末にし揉んで艾中に入れ、分けて四本の撚りにし、一本づつを陰陽瓦中に入れ、寢具中に置いて烘き熏じ、後に通聖散を服す。(醫方摘要)【小兒の(二五)疳瘡】艾葉一兩を水一升で四合に煮て服す。(備急方)【小兒の(二六)爛瘡】艾葉の燒灰を傅けるがよし。(子母秘錄)【臁瘡口冷】瘡口の合はぬには、熟艾を烟に燒いて熏ずる。(經驗方)【白癩風瘡】乾艾を多少に隨つて麴に浸し、普通の方法のやうに酒に釀して日毎に飲む。痺を覺えれば瘥える。(肘後方)【疔瘡腫毒】艾蒿一擔を灰に燒いて竹筒中で淋汁を取り、一二合で石灰を和して糊のやうにし、先づ針で瘡を痛いまでに刺してその藥を點ける。三回試みればその根が自から抜ける。玉山(二七)韓光が此の方で一般人に治療を施して神驗があり、貞觀の初年、衢州の徐使君が此の方を求め傳へたものである。予も此の方で三十餘人を治療して效驗を得た。(孫眞人千金方)【發背の初期】未だ成らざるもの、及び諸熱腫。濕紙を上に搨つて見て、先づ乾いた部分が頭になるものだ。その部分へ艾を著けて壯數に拘はらず灸する。痛むものには痛まなくなる迄灸し、痛まぬものには痛むまで灸する。それで毒は散ずるものだ。散せずとも內攻を免かれるの神

方である。（李絳兵部手集）【癰疽の合はぬもの】瘡口の冷滯である。北艾の煎湯で洗ひ、後に白膠で熏ずる。（直指方）【咽喉骨哽】生艾蒿數升を水、酒共に一斗で四升に煮て少量づつ飮めば下る。（外臺祕要）【誤つて銅(二八)錢を呑みたるとき】艾蒿一把を水五升で一升に煎じて頓服すれば下る。（錢相公篋中方）【諸蟲蛇傷】艾で數壯を灸するが甚だ良し。（集簡方）【風蟲牙痛】蠟を化して少量を紙にのし、それに艾を鋪いて箸で筒に卷き、烟に燒いて左右に隨つて鼻を熏じ、また烟を口に滿てて氣を吸ふ。疼きが止まり、腫が退く、蘄季謙はこの病で月餘に亙つて苦しんだが、この法を一回試みて直ちに癒えた。（普濟方）

實

氣味 【苦く辛し、暖にして毒なし】

主治 【目を明かにし、一切の鬼氣を療ず】（甄權）【陽を壯にし、水臟、腰、膝を助け、また子宮を暖める】（大明）

發明 詵曰く、艾子と乾薑と等分を末にして蜜で梧子大の丸にし、空心に(二九)三丸づつ服し、飯三五匙を食つて壓する。一日二回づつ服すればあらゆる惡氣を治し、其鬼神は速かに走出する。農家の患者などには此の方を與へるが甚だ適するものだ。

(二八)錢字ハ大觀ニ從フ。

(二九)大觀ニ三ヲ三十ニ作ル。

附錄 (三)夏臺（別錄） 有名未用に曰く、味甘し。百病に主效があり、絕氣を濟ふ。弘景曰く、この藥にも神異があつてさうなのだが、一向に用ゐることを識らぬのは遺憾なことだ。時珍曰く、艾を氷臺と名け、このものを夏臺と名けるが、艾には百病に灸し、能く絕氣を回すといひ、このものには百病に主效があり、絕氣を濟ふといふのだから、恐らくこれは一物を重複して掲げたものであらう。故に艾の後に附錄して置く。

(一)千年艾（綱目）

和名　もくびやくかう（木白蒿）
學名　Crossostephium chinense, Makino.
科名　きく科（菊科）

集解　時珍曰く、千年艾は(二)武當の太和山中に產する。小莖で高さ一尺ばかり、その根は蓬蒿のやうなもので、葉は長さ一寸餘で(三)尖椏がなく、表面は青く背面は白い。秋野菊のやうで小さい黄色の花を開き、青珠や丹顆のやうな形の實を結ぶ。三伏の日に葉を採つて暴乾するものだ。その葉は艾に

〔千年艾〕

(三)夏臺、李時珍ノ說ニ據レバ、よもぎ即チ艾ト同物ナラントノ事デアル。

(一)牧野云フ、海邊ニ生ズル亞灌木デ莖葉灰白毛ヲ布キ異觀ヲ呈スル、學名ハ一ニ C. artemisioides, Less. ト稱スル、我邦デハ琉球、臺灣、小笠原島ニ產スル。

(二)武當ノ太和山、武當ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。太和山ハ今ノ湖北省均縣ノ南武當山ノ東南ニ相接ス。

(三)尖椏ハ欠刻ヲ云フ。

は似て居らぬが、艾の香氣があり、磨り揉めば碎ける。艾葉の樣に毛茸をばなさぬものだ。道士間の交際に贈答用品として用ゐられる。

華　［氣味］【辛く微し苦し、溫にして毒なし】［主治］【男子の虛寒、婦人の血氣諸痛に水で煎じて服す】（時珍）

茵蔯蒿(一)（本經上品）

和名　かはらよもぎ
學名　Artemisia capillaris, Thunb.
科名　きく科（菊科）

［釋名］藏器曰く、この草は蒿類ではあるが、冬を經て枯れず、更に舊苗に因つて生ずるものだ。故に因陳と名ける。蒿の字は後に加へたものだ。時珍曰く、按ずるに、張揖の廣雅、及び吳普本草には、いづれも因塵と書いてある。何の意義か判らない。

［集解］別錄に曰く、茵蔯は太山、及び丘陵、坡岸の上に生ずる。五月、及び立秋に採つて陰乾する。弘景曰く、今は諸處にある。蓬蒿に似て葉は緊つて細く、秋後に莖は枯れるが冬を經て枯れず、春になるとまた生える。韓保昇曰く、葉は青

(一) 木村（康）曰ク、茵蔯蒿ハ我邦ニ於ケル市販品ハ、立秋ノ候採集乾燥セルかはらよもぎノ果穗ヨリ成レドモ、上海品ニヨレバ越冬狀態ノかはらよもぎノ全草ヲ用ウルモノナルガ如シ。

蒿に似て背面が白い。大明曰く、茵蔯は(二)和州、及び(三)南山の嶺上に生ずる。一名石茵蔯といふ。

頌曰く、近道いづれにもあるが、太山のものの佳きには及ばない。春初に苗が生えて高さ(四)三五寸になる。蓬蒿に似て葉は緊つて細く、花、實は無い。五月、七月に莖、葉を採つて陰乾する。今はこれを山茵蔯といつてゐる。(五)江寧府の一種の茵蔯は、葉は大きく、根は粗くして黄白色だ。夏になると花を開き實を結ぶ。(六)階州の一種の白蒿は、(七)一に青蒿に似たもので背が白い。それをその地方では皆茵蔯と稱して藥に入れてゐる。現に南方の醫師間で用ゐる山茵蔯には數種あつて、種種の說を爲し『山茵蔯は、汴京、及び北地で用ゐてゐるものは、艾蒿のやうで葉が細く背が白く、氣はやはり艾のやうで味は苦い。乾せば色が黑くなる。江南で用ゐるものは、莖、葉すべて家茵蔯に似て大きく、高さ三四尺あり、氣は極めて香しく味は甘く辛い。俗にまた龍腦薄荷と名ける。吳中で用ゐるものは、あれは石香葇で、葉は至つて細く黄色だ。味辛く甚だ香烈で性の溫なるものだ。若し誤つて脚を解する藥として服すれば大に煩せしめる』といふ。これを本草の記載に照して見るに、本

(二)和州ハ石部馬腦ノ註ヲ見ヨ。
(三)南山ハ石部五色石脂ノ註ヲ見ヨ。
(四)大觀ニ四ニ作ル。
(五)江寧府ハ草部芳草類當歸ノ註ヲ見ヨ。
(六)階州ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。
(七)大觀ニハ一ヲ亦ニ作ル。

(八)大觀ニ腦ニ作ル。

草にはただ茵蔯蒿とあつて山茵蔯とはないが、註に『葉は蓬蒿に似て緊つて細い』とあるのだから、今の汴京、北地で用ゐる山茵蔯がそのものに當つてゐる。ところが大體世俗の方では、山茵蔯を、(八)體痛を療じ、傷寒を解し、汗を發し、肢節の滯氣を行り、痰を化し、膈を利し、勞倦を治する肝要のものとして用ゐてゐるが、本草の本文に就て考ふるに、茵蔯はただ黄疸を療し、小便を利すとあつて、世俗の方とは全然合致しない。現に實驗に據れば、汴京で用ゐ

〔茵　蔯　蒿〕

る山茵蔯は、肌を解し、汗を發する藥としては灼然たる效が少く、江南の山茵蔯は、傷寒、腦痛を療する點に於いて非常に優れた功力がある。近頃醫界の議論では『所謂家茵蔯なるものもやはり能く肌を解し、膈を下し、胸中の煩を去るものだといふが、方家では用ゐることが少で、ただ研つて飲として服する位のものだ。これは本草には記載がなく、俗間の方から發見されたもので、茵蔯蒿とは確に別の一種

の植物だ。主治の功用も自ら異ふ。茵蔯蒿、卽ち山茵蔯なりとは斷じ得ない』といふけれども、此の說もやはりまだ正確な根據とはなり得ないやうだ。要するに、功力の點で比較すれば江南のものが勝れてゐるが、文獻上の權威なる本草經に、其事が記載されなかつたといふわけだから、醫方に用ゐるには更に硏究の餘地あるものといふべきだ。

○斅曰く、凡そこれを用ゐるには、葉に(九)八角あるものを陰乾し、根を去つて細かに剉んで用ゐる。火を犯さしめてはならぬ。

○時珍曰く、茵蔯は、古代には多く栽培して蔬菜にした。故に藥に入れるには山茵蔯を用ゐたのであつて、それが家茵蔯との區別を生じた所以である。洪舜兪の老圃賦に『酣糟、紫薑の掌、(一〇)沐醯、靑蔯の絲』とあるその靑蔯はこの物だ。今は淮揚地方では、(一一)三月三日にやはり野茵蔯の苗を採つて粉麪に和し、茵蔯餠といふものを作つて食ふ。後世では、各地それぞれ傳はるところに據つて使用し、名稱を付したので、ために名稱と事實に混亂を生じたわけである。現に山茵蔯は、二月に苗が生え、莖は艾のやう、葉は淡色の靑蒿のやうで背面が白く、葉は岐れて緊つて細く、扁な

(九)八角トハ八ツノ分岐アルモノノコト。

(一〇)沐、當ニ沬ニ作ルベシ。

(一一)三字救荒野ニ據テ改ム。

ると整なるとあり、九月に細い黃色の花を開いて大さ艾子ほどのの實を結び、花、實いづれも菴䕡(えんろ)の花、實と似てゐる。また花、實の無いものもある。

莖葉(一二)【氣味】【苦し、平にして微寒なり、毒なし】普曰く、神農、岐伯、雷公は苦し、毒なしといひ、黃帝は辛し、毒なしといふ。權曰く、苦く辛し、小毒あり。大明曰く、石茵蔯は苦し、涼にして毒なし。硇砂(たうしや)を伏す。張元素曰く、苦く甘し、陰中の微陽であつて、足の太陽の經に入る。

(一三)【主治】【風濕寒熱、邪氣熱結、黃疸。久しく服すれば身體を輕くし、氣を益し、老衰に耐へ、顏色を白くし快活にし、天年を長くする。白兎は食つて仙となる】(本經)【全身の發黃、小便不利を治し、頭熱を除き、(一四)伏瘕(ふくか)を去る】(別錄)【關節を通じ、滯熱を去る。傷寒にこれを用ゐる】(藏器)【石茵蔯は、天行時疾の熱狂、頭痛、頭旋、風眼の疼(うづ)き、瘴瘧(ちようか)、婦人の癥瘕、竝に(一五)閃損乏絕(せんそんはふぜつ)を治す】(大明)

【發明】弘景曰く、仙經に『白蒿を白兎が食へば仙となる』とある。而るにここには茵蔯としてあるが、これはこの本文の方の誤だ。

宗奭曰く、張仲景は、傷寒(しやうかん)で熱甚しくして發黃し、身體、顏面悉く黃色なるを治

(一二)木村(康)曰ク、かはらよもぎノ成分ニハサントニンヲ含有セズ、又全草精油ヲ含有スレドモ精査ヲ經ズ。刈米、木村、邦產藥植再、(昭四)五。

(一三)木村(康)曰ク、驅蟲ノ效ニ就キテハ猪子吉人氏ノ報告アリ。猪子吉人・東醫四(明三三)一二七、一三三九。

(一四)伏瘕ハ腹中ノ結聚。

(一五)閃損ハ閃挫ヲ云フ、乏絕ハ氣絕。

するに、これを用ゐれば極めて效ありといふ。ある僧が、傷寒後の發汗が徹底せずして、ために留熱があり、身體、顏面が黃色となつて熱多く、一个年近くも癒えなかつた。醫師は食治の方法を講じたが、少しもその病證に對應せず、(一六)而して食慾は減ぜなかつた。そこで予がこの藥を與へて五日間服ませると、病は三分の一を減じ、十日にして三分の二を減じ、二十日にして悉く除き去つた。その方は、山茵蔯、山梔子各三分、秦艽、升麻各四錢を散にし、三錢づつを水四合で二合に煎じて滓を去り、食後に溫服して(一七)知あるを度とするのである。この藥は山茵蔯を基本としたものだから茲に記錄する。

王好古曰く、張仲景の茵蔯梔子大黃湯は、濕熱を治し、梔子蘗皮湯は、燥熱を治す。(一八)苗が澇すれば濕黃し、苗が旱するときは燥黃すると同樣なもので、濕なれば瀉し、燥なれば潤せばよいのである。この二藥は陽黃を治するもので、韓祇和、李思訓は陰黃を治するに茵蔯附子湯を用ゐたが、大抵茵蔯を君主藥として大黃、附子を佐とし、それぞれ寒熱の程度に隨つて用ゐたのである。

【附方】 舊二、新六。【茵蔯羹】大熱黃疸、傷寒頭痛、風熱瘴(一九)瘧を除き、小便

(一六)大觀ニ而字無ク病不去ノ三字アリ。
(一七)知アルトハ效能ノ表ハレルコト。
(一八)苗トハ一般ノ植物ノ苗ヲ指ス。澇ハ淫雨ニ遭フナリ。
(一九)大觀ニハ瘧ニ作ル。

（二〇）癧瘍ハ汗斑、即チあせなまづ。

（二一）牧野云フ、集解ノ文ヲ玩味スルニ誠ニ能クかはらにんじんト合フ。

を利す。茵蔯を細に切つて羹にして食ふ。生で食ふもよし。（食醫心鏡）【全身の風痒】瘖疥を生ずるには、茵蔯を煮た濃汁で洗へば立ろに瘥える。（千金方）【（二〇）癧瘍風病】茵蔯蒿二握を水一斗五升で七升に煮取り、先づ皂莢湯で洗つて次にこの湯で洗ふ。冷えれば更に作り、隔日に一回洗ふ。然らざれば恐らく痛むものである。（崔行功纂要）【風疾攣急】茵蔯蒿一斤、秫米一石、麹三斤を和し、普通の方法のやうにして酒に釀して服す（聖濟總錄）【金の如き色の癇黄】好く眠り、涎を吐くには、茵蔯蒿、白鮮皮等分を水二鍾で煎じて一日二回に服す。（三十六黄方）【全身黄疸】茵蔯蒿一把を生薑一塊と共に擣き爛らし、日毎に胸前と四肢に擦る。【男子の酒疸】茵蔯蒿四根、巵子七箇、大田螺を殻のまま一箇を擣き爛らし、煮沸した白酒一大盞を注ぎ入れて汁を飲む。秘方である。【眼熱赤腫】山茵蔯、車前子等分を湯に煎じ、茶調散を調へて數服する。（直指方）

（二一）青蒿（本經下品）

和名　かはらにんじん
學名　Artemisia apiacea, Hance.
科名　きく科（菊科）

(一)菣音牽又去刃切音キン。
(三)狃ハ狸ノ一種。
(四)華陰ハ石部白石英ノ註ヲ見ヨ。

【釋名】 **草蒿**(本經) **方潰**(本經)(一)**菣** 音は牽(ケン)である。去聲に發音する。**狃蒿**(蜀本) **香蒿**(衍義) 保昇曰く、草蒿は、江東地方では狃蒿と呼ぶ。氣臭が(三)狃に似てゐるからだ。北方では青蒿と呼ぶ。爾雅に『蒿は菣なり』とあり、孫炎の註に『荊楚地方では蒿を菣といふ』といひ、郭璞の註には『今人は青蒿と呼ぶ。香菜中で炙いて啖へるものが菣である』といつてあるがそれである。時珍曰く、晏子に『蒿とは草の高きものなり』とある。按ずるに、爾雅に、蒿類の中で獨り菣のみが蒿の單稱となつてゐるのは、他の諸蒿は皆葉の背面が白いが、この蒿のみ獨り青い點が他の諸蒿と異つてゐるからではあるまいか。

【集解】 別錄に曰く、草蒿は(四)華陰の川澤に生ずる。弘景曰く、諸處にある。卽ち今の青蒿だ。世間ではやはりこれを取つて香菜を雜ぜて食ふ。

保昇曰く、嫩いうちに醋に漬けて菹にすれば自然に香しいものだ。葉は茵蔯蒿に似てゐるが背面が白くない。高さは四尺ほどになる。四月、五月に採つて日光で乾して藥に入れる。詩に『呦呦たる鹿鳴、野の蒿を食ふ』とあるは卽ちこの蒿である。

(五)白井曰ク、青蒿、黄花蒿相似テ稍異ナル、一類二種トハ之チ指スモノノ如シ。
(六)銀ハ銀州、山草類柴胡ノ註チ見ヨ。
(七)綏ハ西魏ニ置キタル綏州、卽チ今ノ陝西省綏德縣ノ地ナリ。

頌曰く、青蒿は、春苗が生え、葉は極めて細い。食し得る。夏になれば高さ四五尺になり、秋後に細かい淡黄色の花を開き、花の下に粟米大の子を結ぶ。八九月に子を採つて陰乾するものだ。根、莖、子、葉、いづれも藥に入れて用ゐる。乾し炙いて飲に作れば香しくて尤も佳い。

〔青蒿〕

宗奭曰く、青蒿は春を迎へることが最も早く、一般に摘み採つて蔬菜にする。根は赤く、葉は香しい。沈括の夢溪筆談に『(五)青蒿は一類に自から二種あつて、一種は黄色だ。一種は青色で、本草に青蒿と謂ふものが是である。やはり區別はあるのだ。陝西、(六)銀(七)綏の地方の蒿叢中に、時に一兩株特に目立つて青いものがあつて、その地方ではこれを香蒿といふ。莖、葉は通常の蒿と同一だが、ただ通常の蒿は色が淡青で、この蒿は深青だ。杉や檜の色のやうであつて、秋深くなれば他の蒿はいづれも黄になるが、この蒿だけは猶ほ青く、その氣は芬芳である。恐らく古人はこの深青のも

のを用ゐて勝れたるものとしたのであらう。然らずんば諸種の蒿の一として青くないもののあつたためしはない』とある。

時珍曰く、青蒿は、二月苗が生え、莖は粗く、指ほどあつて肥えて軟かい。莖、葉共に色は深青だ。その葉は微し茵蔯に似てゐるが表裏共青く、その根は白く硬い。七八月に細かな黄花を開いて頗る香しい。大さ麻子ほどの實を結び、中に細子がある。

【修治】斅曰く、凡そこれを用ゐるには、中ほどが妙であつて、(八)膝に到れば仰ぎ、腰に到れば俛す。子を使ふときは葉を使つてはならぬ。根を使ふときは莖を使つてはならぬ。子、葉、根、莖の四件を同時に使へば忽ちに痼疾となる。葉を採つて用ゐるには、七歳の小兒七人から取つた尿に七晝夜浸し、漉出して晒し乾して用ゐる。

葉莖根子(九)【氣味】【苦し、寒にして毒無し】時珍曰く、硫黄を伏す。

【主治】【疥瘙、痂痒、惡瘡、蝨を殺す。留熱の骨節の間に在るを治し、目を明かにする】(本經)【鬼氣、尸疰の伏(一〇)留、婦人の血氣で腹内の滿するもの、及び冷熱

(八)此文解シガタシ。膝ニ到ルト云フモノハ成長ノ中途ニアルモノ、腰ニ到ルト云フモノハ充分成長セルモノヲ指スモノカ。

(九)木村(康)曰ク、成分ハ苦味質、精油及ビアプロタニン。
W. P. 783.
U. S. D. 1224.

久痢。秋、冬は子を用ゐ、春、夏は苗を用ゐる。いづれも擣汁を服し、また曝乾して末にし、尿を入れた酒で和して服す』(藏器)【中を補し、氣を益し、身體を輕くし、勞を補し、顏色の衰ひを駐め、毛髮を長く黑くし、老衰せず、兼ねて(一一)蒜髮を去り、風毒を殺す。心痛、熱黃には生で(一二)擣いて汁を服し、幷に貼る】(大明)【瘧疾寒熱を治す】(時珍)【生で擣いて金瘡に傅ければ血を止め、疼を止めるに良し】(蘇恭)【燒灰で紙を隔てて淋汁を取り、石灰に和して煎じて用ゐれば、惡瘡の瘜肉、黶瘢を治す】(孟詵)

【發明】頌曰く、青蒿は骨蒸、熱勞を治するに最たるもので、古方ではこれを單用してある。

時珍曰く、青蒿は、春木、少陽の氣を受けることの最も早いものだから、主たる治效のある病證は皆少陽、厥陰の血分の病である。按ずるに、月令通纂に『(一三)伏の內の庚の日に青蒿を採り、屋敷の內に懸けて置けば邪氣を辟ける。陰乾し末にして貯へ、冬至と元日とに家族が各二錢を服するもよし』とある。これに由つて觀れば、青蒿が鬼疰、伏尸を治すといふも、蓋し伏する作用のあるものと見える。

(一〇)留、大觀ニ連トアリ、尸疰ノ伏連ハ尸病一種伏尸ヲ指スモノナラン。病名彙解ニ說アリ。

(一一)蒜髮ハ斑髮ノコト、ワカシラガ。

(一二)擣、大觀ニ搗ニ作ル。

(一三)伏トハ三伏ヲ云フ、夏至後第三庚日ヲ初伏トナシ、第四庚日ヲ中伏トナシ、立秋後第一庚日ヲ末伏トス。

附　方　舊四、新十三。【男女の勞瘦】青蒿を細かに剉み、水三升、童尿五升と共に一升半に煎じ、滓を去り器に入れて煎膏し、梧子大の丸にして空心の時、及び就寢時に二十丸づつを溫酒で服す（斗門方）【虛勞寒熱】肢體がだるく、疼くには、男女に拘はらず、八九月青蒿の實を結ぶとき採つて枝梗を去り、童尿に三日浸して晒乾して末にし、二錢づつを烏梅一箇の煎湯で服す。（靈苑方）【骨蒸鬼氣】童尿五大斗を澄淸し、八九月に子を帶びた最も適當の時に採つた青蒿五斗を細かに剉んで和し、大釜に入れて猛火で三大斗に煎じて滓を去り、釜を一旦洗ひ淨めて再び微火で二大斗ほどに煎じ、豬膽一箇を入れて共に一大斗に煎じ、火を去り冷えるを待つて甆器に盛り、服用せんとする時は、甘草二三兩を炙熟して末にし、それと煎じ和して千杵擣いて丸にし、空腹にして二十丸を粥飮で服し、漸次に三十丸まで增加して止める。（崔元亮海上方）【骨蒸煩熱】青蒿一握、豬膽汁一箇、杏仁四十箇の皮尖を去つて炒り、童尿一大盞で五分に煎じて空心に溫服する。（十便良方）【虛勞盜汗】煩熱して口乾くには、青蒿一斤の汁を取つて熬膏し、人參末、麥門冬末各一兩を入れて丸にし得るまでに熬り、梧子大の丸にして每食後に二十丸を米飮で服す。これを青蒿煎

と名ける。(聖方總錄)【瘧疾寒熱】肘後方では、青蒿一握、水二升の擣汁を服す。○存仁方では、五月五日未明に採つて陰乾した青蒿四兩、桂心一兩を末にし、發作せぬ前に酒で二錢を服す。○經驗方では、端午の日に採つて陰乾した青蒿葉、桂心等分を末にし、一錢づつを、先づ寒するには熱湯で、先づ熱するには冷酒で、發作する日の五更に服す。絶對に(一四)發物を忌む。【痰の甚しき温瘧】熱するのみで寒せぬには、青蒿二兩を童尿に浸して焙じ、黃丹半兩と末にして二錢づつを白湯で調へて服す。(仁存方)【赤、白下痢】五月五日に採つた青蒿と艾葉等分を豆豉と共に擣き、餅にして日光で乾したものを蒿豉丹と名ける。これを一餅づつ水一盞半で煎じて服す。(聖濟總錄)【鼻中衄血】青蒿の擣汁を服し、幷に鼻中を塞ぐが極めて效驗がある。(衞生易簡方)【酒痔の便血】青蒿を用ゐ、葉を用ゐるときは莖を用ゐず、莖を用ゐるときは葉を用ゐずに末にし、排便前には冷水で、排便後には酒水で調へて服す。(永類鈐方)【金瘡、撲損】肘後方では、青蒿を擣いて患部を封ずれば血が止つて癒える。○ある方では、青蒿、麻葉、石灰等分を五月五日に擣き和して晒し乾し、使用の際に末にして搽る。【牙齒腫痛】青蒿一握を水で煎じて漱ぐ。(濟急方)【毒蜂の螫傷】青

(一四)發物詳ナラズ、刺擊性ノ物ヲ指スカ。

蒿を嚙んで封ずれば安全である。(肘後方)【耳に濃汁の出るもの】青蒿末を綿で裹んで耳中に納れる。(聖惠方)【鼻中の息肉】青蒿灰、石灰等分の淋汁を熬膏して點ける。(聖濟總錄)

子 [氣味]【甘し、冷にして毒なし】[主治]【目を明にし、胃を開くには、炒つて用ゐる。勞瘦を治し、身體を壯健にするには、尿に浸して用ゐる。惡瘡、疥癬、風瘮(一五)を治するには、水で煎じて洗ふ】(大明)【鬼氣を治するには、末にして酒で方寸匕を服す】(孟詵)【功力は葉に同じ】(時珍)

[附方] 新一。【積熱の眼澀】三月三日、或は五月五日に青蒿の花、或は子を採つて陰乾して末にし、二錢づつを空心に井華水で服す。久しく服すれば、目を明かにし、夜間讀書に堪へる。これを青金散と名ける。(十便良方)

節間の蟲 蟲部を見よ。

黃花蒿 (綱目)

和名 くそにんじん
學名 Artemisia annua, L.
科名 きく科(菊科)

(一五)大觀ニハ瘮ノ下ニ發蝨ノ二字アリ。

（一）木村（康）曰ク、成分ハ精油〇・三％サントニンハ含マズ。

文献

C. M. P. 37 (1923) 150——.

W. P. 779.

藥誌四二〇（一一九）

同　四二四（四八九）

同　四三九（六六五）

同　四六四（八三七）

（一）牧野云フ、今プレットシュナイデル氏ニ據ツテ姑ク下ノ學名ヲ本品ニ加ヘテ置ク、同氏ノ記スル所ニ據レバ支那北京

〔釋名〕　**臭蒿**

〔集解〕　大明曰く、臭蒿（しうかう）、一名草蒿といふ。時珍曰く、香蒿、臭蒿共に通じて草蒿と名けて差支ないわけだ。この蒿は青蒿とよく似てゐるが、この蒿は色が緑色で淡黄色を帯び、辛く臭く、食ふわけに行かぬ。民家で採つて醬黃（しやうわう）や酒麴（しゆきく）の蔽ひにするものがこれである。

〔黄花蒿〕

葉（一）〔氣味〕【辛く苦し、涼にして毒なし】〔主治〕【小兒の風寒、驚熱】（時珍）

子〔氣味〕【辛し、涼にして毒なし】〔主治〕【勞を治し、氣を下し、胃を開き、盜汗、及び邪氣、鬼毒を止める】（大明）

（一）白　蒿（本經上品）

和名　無　し
學名　Artemisia Sieversiana, Willd.
科名　きく科（菊科）

〔釋名〕　**蘩**（爾雅）　**由胡**（爾雅）　**蔞蒿**（食療）　**蔏**　音は商（シヤウ）である。時○

ノ山地ニテ其處ノ士人ハ此學名ノモノヲ白蒿ト稱シテ居ルトノ事デアル、我邦ノ學者ハ之レヲしろよもぎ(A. Stelleriana, Bess.)ニ充テ居レドモソレハ誤リデアル、又是レハおほよもぎデモナイ。

(一)爾雅ニ類ニ作ル。

(三)中山ハ石部石灰ノ註ヲ見ヨ。

(四)大觀ニ皤上ニ蘩ノ字アリ。

(五)錯、大觀ニ粗ニ作ル。

○珍曰く、白蒿には水、陸の二種あつて、爾雅には通じて蘩といふ。繁殖し蔓衍し易いものだからである『蘩は皤蒿なり』とあるは今の陸に生ずる艾蒿のことで、辛くむれ臭くして香氣が美くない『蘩は由胡なり』とあるは今の水に生ずる蔞蒿のことで、辛く美き香氣がある『蘩の(一)醜は秋に蒿となる』とあるは水陸二種に共通の言葉である。かやうに言つたわけは、この物は春期にはそれぞれ各種の名稱はあるが、秋になつて老いれば一樣に蒿と呼ぶからである。藾といひ、蕭といひ、荻といふも皆老蒿に共通の名稱で、秋氣の蕭藾の氣を形容したものだ。

集解　○○別錄に曰く、白蒿は(三)中山の川澤に生ずる。二月に採收する。○○弘景曰く、蒿は種類の甚だ多いものだが、俗間で白蒿といふものを聞いたことがない。方藥家でも用ゐない。また一向に識るものもない。

○恭曰く、爾雅にいふ(四)皤蒿、卽ち白蒿で、所在にある。葉は頗る細艾に似て表面に白毛があり、(五)錯澀して靑蒿よりも粗い。生えた當初から秋に至るまでやはり他の蒿よりは白いものである。

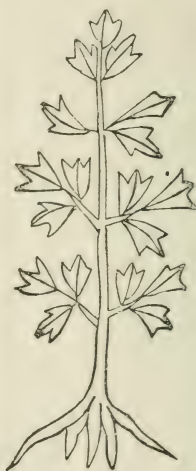
○○禹錫曰く、蓬蒿は蔬菜として食へるものだ。故に詩箋に『豆を以て蘩菹を薦む』

(六)大觀ニ皤下ニ蒿ノ字アリ。

(七)牧野云フ、蔞蒿ハ我邦ノ學者ハ之レヲおほよもぎニ充テテ居ル、此品ニハいぶきよもぎ、ゐまよもぎ、うらじろよもぎ等ノ別名ガアル、やまよもぎハ此レト同種デアルト考ヘル。

とあり、陸機の詩疏に『凡そ艾の白色なるものを(六)皤といふ』とある。現に白蒿は多くの諸草に先んじて發生して、香が美(よ)く、食料となるものだ。生でも蒸してもよし。

頌曰く、この草は古には葅にしたものだが、今は蔞蒿(ろうかう)は食ふがこれは食はない。

〔白蒿〕

或は白蒿、卽ち蔞蒿ではないかと疑ふものがあるが、孟詵の食療本草には、また別に(七)蔞蒿の一箇條を揭げてあつて、その所說の同じからぬところを見ると、明かに二種別箇のものである。そこで古と今とでは食品そのものに相異のあつたことが判(わか)る。又、現に階州では白蒿を茵蔯といふ。苗、葉はやはり似てゐるが、藥に入れては恐らく用ゐられぬものだらう。

時珍曰く、白蒿は處處にあつて、水、陸の二種類ある。本草に用うべしとして揭げたのは蓋し水に生ずものだ。故に中山(ちうざん)の川澤に生ずるとあつて、山谷、平地とはいつてない。二種共に形狀は相似てゐるが、ただ陸に生ずるものは辛くむれ臭く、水

に生ずるものの香美なるには及ばない。詩に『呦呦たる鹿鳴、野の苹を食ふ』とある。苹とは卽ち陸に生ずる皤蒿のことで、俗にいふ艾蒿のことだ。鹿といふ動物は九種の解毒の草を食ふもので、この白蒿もその一なのである。詩に『于に蘩を采る、沼に沚に』とあり、左傳に『蘋蘩、蘊藻の菜、以て鬼神に薦め王公に羞む可し』とあるは、いづれも水生の白蒿を指したものである。これ等の根據から言へば、本草の白蒿は蔞蒿なること疑ないのである。鄭樵の通志に、苹を蔞蒿なりといふは誤だ。鹿は山獸である、蔞は水蒿ではないか。陸機の詩の疏に、苹を牛尾蒿としたのも誤りだ。牛尾蒿は色が青い、白いものではない。細葉で直上に伸び、形狀が牛尾のやうなものである。蔞蒿なるものは川の堤や澤の中に生ずるもので、二月苗が芽生え、葉は艾の嫩葉に似て岐が細く、表面が青く裏面は白い。莖は或は赤く、或は白く、根は白くして脆いものだ。その根、莖を採つて、生または熟し、または葅にし、曝して、いづれも食物になる。蓋し(八)嘉蔬なるものだ。景差の大招には『吳の酸蔞蒿は沾薄ならず』とあつて、吳の地方では巧みに蔞蒿を瀹で酸く調理して虀菜にするが、その味が沾(味重きをいふ)ならず、薄(味淡きをいふ)ならずして甘美なものだ。それ

(八) 嘉蔬ハ良キ野菜ノ意。

（九）心懸ハ懸痛ノ略イタムコト。

を謂つたものである。これは正に水生のものを指す。

苗根 **氣味** 【甘し、平にして毒なし】思邈曰く、辛し、平なり。時珍曰く、瘡疥を發す。

主治 【五臟の邪氣、風寒濕痺。中を補ひ、氣を益し、毛髮を長く黑くし、（九）心懸して食少く、常に饑ゆるものを療ず。久しく服すれば身體を輕くし、耳目を聰明にし、老衰せぬ】（本經）【生で採み醋に漬けて菹にして食へば、甚だ健康に益がある。擣汁を服すれば、熱黃、及び心痛を去る。曝らして末にし、米飲で空心に一匙を服すれば、夏季の暴水痢を治す。燒灰の淋汁を煎じたものは淋瀝疾を治す】（孟詵）【腸を利し、胃を開き、河豚魚の毒を殺す】（時珍）

發明 弘景曰く、服食家の七禽散に『白兎が白蒿を食へば仙となる』とあるは、菴䕡と同一用法だ。時珍曰く、本經には白蒿を上品に列し、功あつて毒なしとしてあるが、古今の方家がこれを用ゐることを知らない。服食する方法祕訣を得なかつたためではあるまいか。

附方 舊一 【惡瘡、癩疾】但しこれは惡疾で、全身、面部に瘡あるものだ。

いづれも服するがよし。白艾蒿十(一〇)束で一升ほどの煮汁を取り、麹、及び米を用ゐて酒を醸すと同一方法で醸し、熟するを待つて少しづつ服す。(梅師方)

子【氣味】(缺)【主治】【鬼氣には末にし酒で服するが良し】(孟詵)

(一)角蒿(唐本草)

和名　はなごま
學名　Incarvillea sinensis, Lam.
科名　のうぜんかづら科(紫葳科)

【集解】恭曰く、角蒿は(二)白蒿に似たもので、花は瞿麥のやうで紅赤の愛すべきものだ。子は王不留行に似て色が黒く、さやになる。七月、八月に採収する。保昇曰く、葉は蛇牀、青蒿に、子角は蔓菁に似て(三)青黒色で細く、秋熟する。所在いづれにもある。宗奭曰く、莖、葉は青蒿のやうで、約三四分徑の淡紅紫色の花を開き、花が終つてから長さ二寸ばかりの微し(四)彎曲した角を結ぶ。斅曰く、凡そこれを用ゐるには、紅蒿、幷に邪蒿を用ゐてはならぬ。この二味は眞に角蒿に似たものだが、ただこのものは香しく、角が短い。角蒿は、採取すると槐砧上で細かに剉んで用ゐる。

(一〇)金陵本束ニ作ル。
(一)牧野云フ、本品ノ角蒿ハ下條ノ馬先蒿ト同一品デアルト云フ、サウスルト名稱ヲ異ニシテ重出シテ居ルト云フ事ニナル。
(二)大觀ニ白ノ上ニ葉字アリ。
(三)大觀ニ青ヲ實ニ作ル。
(四)彎字大觀ニ據ル。

(五)宣露ハ齒縫出血。

(一)牧野云フ、我邦ノ學者ハ之レヲきつねあざみニ充テ居レドモ中ラヌ、きつね

【氣味】【辛く苦し、小毒あり】【主治】【乾濕䘌(かんしつちく)、諸惡瘡の蟲あるもの】(唐本)【口齒の瘡を治するに絶勝のものだ】(宋頌)

【附方】舊二、新一。【齒齦(しぎん)(五)宣露(せんろ)】多くは疳が原因のものだ。角蒿を灰に燒いて夜間上に塗る。絶對に油膩(ゆじ)のもの、沙糖、乾棗(かんそう)を食ふことを忌む。(外臺祕要)【口瘡の瘥えぬもの】胸中に入るものだ。いづれもこれが生じたときは、大人、小兒に拘はらず、角蒿の灰を取つて塗る。やがて出る汁を吐き出せば一夜にして效がある。(千金方)【月蝕耳瘡】蒿灰を摻るが良し。(集簡方)

〔角蒿〕

(一)藘蒿(拾遺)

和名　未詳
學名　未詳
科名　きく科(菊科)?

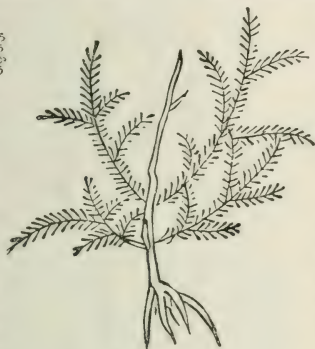
あざみニハ野苦痲ノ漢名ガアルガ此名ハ本書ニハ見エテ居ナイ。

(二)大觀ニハ澤田トアリ。

(三)大觀及本書ニ科ノ下ニ生ノ字アリ。

(四)大觀ニハ生莖葉ヲ中莖ノ二字ニ作ル。

(五)痲ハ痲痺スルコト。

【釋名】　莪蒿(爾雅)　蘿蒿(同上)　抱娘蒿　時珍曰く、陸農師は『廩なる語の意味は高いといふことで、莪はやはり峩(タカクソビユ)の意味だ』といふ。莪とは科の高いことだ。この物は蠶を覆ふ養蠶具に作り得るものだから蘿蒿と謂ひ、根が叢生するものだから抱娘といふ。

【集解】　時珍曰く、廩蒿は高い岡に生ずる。小薊に似たもので、多くの草に先って舊根から生ずる。爾雅に『莪は蘿のことだ』とあり、詩の小雅に『菁菁たるものは莪』とあり、陸機の注に『卽ち莪蒿のことだ。(二)水澤の地、下濕の地に生ずるもので、葉は斜蒿に似て細く科(三)生する。二月(四)生の莖、葉が食へる。また蒸してもよく、香美なものだ』とある。頗る蔞蒿に似てゐるが、ただ味に(五)痲を帶び、蔞蒿ほどの甘、香がない。

〔廩蒿〕
——抱娘蒿——

(一)牧野云フ、馬先蒿ヲしほがまぎくニ充テシ從來ノ說ハ非ナルモノデアツタ、馬先蒿ノ屬ノモノハ一モ我邦ニハ產セヌ。

(二)大觀ニ矢ヲ屎ニ作ル。

(三)南陽ハ朮ノ註ヲ見ヨ。

(一)馬先蒿（本經中品）

和名　はなごま
學名　Incarvillea sinensis, Lam.
科名　のうぜんかづら科（紫葳科）

釋名　**馬新蒿**（唐本）　**馬(二)矢蒿**（本經）　**練石草**（別錄）　**爛石草**（同上）　**虎麻**

時珍曰く、この蒿は臭氣が馬矢（矢は屎に同じ）のやうだから命けたもので、馬先とは馬矢の書き誤りだ。馬新はまた馬先の音の誤りである。弘景曰く、練石草、一名爛石草、卽ち馬矢蒿のことだ。今は方藥には一向用ゐない。

集解　別錄に曰く、馬先蒿、練石草はいづれも(三)南陽の川澤に生ずる。

恭曰く、葉は大きくして茺蔚のやう、花は紅白色だ。二月、八月に莖、葉を採つて陰乾して用ゐる。八月、九月に實が熟する。俗に虎麻といふものがそれだ。一名馬新蒿といひ、所在にある。茺蔚は苗が短小で

〔馬先蒿〕

子が夏季中に熟する。初生時にはこの蒿と二物極めてよく似てゐる。

禹錫曰く、按ずるに、爾雅に『蔚は牡蒿なり』とあり、注に『卽ち蒿の子無きもの』とある。詩には『莪に匪ずんば伊れ蔚なり』とあり、陸機は『卽ち牡蒿だ』といふ。二月始めに生じ、七月花を開く。花は胡麻の花に似て紫だ。また八月に小豆に似た角を生ずるが、その角は鋭くして長い。一名馬新蒿といふものはこれである。

頌曰く、郭璞は、牡蒿を『子無し』といひ、陸機は『子有り』といひ、二說に少異があるが、今は子有るものを用ゐるが正しいとなつてゐる。

時珍曰く、別錄には、牡蒿と馬先蒿とを元來二箇條に別けてある。陸機の所謂子有るものは馬先蒿だ。それに子の無い牡蒿を引用して解釋したのは誤だ。牡蒿の詳細はその本條を見よ。

氣味　【苦し、平にして毒なし】　別錄に曰く、練石草は寒なり。

主治　【寒熱鬼疰、中風濕痺、婦人帶下の病で子無きもの】(本經)　【練石草は、五癃を治し、石淋、膀胱中の結氣を破り、水道、小便を利す】(別錄)　【惡瘡】(弘景)

附方　舊一。　【大風癩疾】　骨肉疽敗し、眉鬚墮落し、身體痒痛するには、馬

（一）牧野云フ、陰地厥ハ醫學正傳デハ陰地蕨ト書カレテアルトイフ、從來我邦ノ學者ハ之レヲふゆのはなわらびニ充テテ居ルガ、私モ此レハ正シイト思フカラ此ニ舊ニヨツテサウシテ置ク、本書ノ圖并ニ植物名實圖考ノ圖ハ其文章ニ基ヅキ想像デ描イタモノト思フノデ、ソレニ信ヲ措ク事ハ出來ヌ感ガアル。

（二）鄧州ハ菊ノ註ヲ見ヨ、

（三）順陽縣ノ內鄕縣即チ今ノ河南省內鄕縣ノ地ナリ。

（四）外家詳ナラズ外科ヲ云フノカ、金陵本ニモ外家トアリ、或ハ外丹家ノ略カ。

（五）木村康一曰ク、民間葉ヲ煎ジテ冷腹ノ痛及ビ下痢止トス。高瀨——植研、二四七、

先蒿、一名馬矢蒿、一名爛石草を炒り擣いて末にし、方寸匕づつを食前に溫酒で服す。一日三服して一年繼續すれば都て瘥える。（肘後方）

（一）陰地厥（宋圖經）

和名　ふゆのはなわらび
學名　Botrychium ternatum, Sw.
科名　はなやすり科（瓶爾小草科）

集解　頌曰く、（二）鄧州（三）順陽縣の內鄕の山谷に生ずる。葉は青蒿に似て莖は青紫色、花は微黃色の小さい穗になる。根は細辛に似たものだ。七月根を採つて用ゐる。時珍曰く、江、浙地方にもある。（四）外家ではこれを採つて丹砂、硫黃を制するに用ゐる。

〔陰地厥〕

根苗（五）

氣味　【甘く苦し、微寒にして毒なし】

主治　【腫毒、風熱】（蘇頌）

附方　新一。【男女の吐血】吐血後に胸膈の虛熱するには、陰地厥、紫荷車、貫衆、甘草各半兩を、三錢づつ水で煎じて服す。（聖濟總錄）

牡　蒿（別錄下品）

和名　をとこよもぎ
學名　Artemisia japonica, Thunb.
科名　きく科（菊科）

【釋名】 **齊頭蒿**　時珍曰く、爾雅に『蔚は牡菣なり。蒿の子無きもの』とあり、牡の名稱はそれから出てゐる。諸種の蒿は葉がいづれも尖つてゐるが、この蒿の葉は獨り廣く開いて禿してゐる、故に齊頭なる名稱を呼ばれたのだ。

【集解】 別錄に曰く、牡蒿は田野に生ずる。五月、八月に採收する。弘景曰く、方藥には一向用ゐない。恭曰く、齊頭蒿である。所在にあるもので、葉は防風に似て細く薄くして光澤がない。

〔牡蒿〕
—齊頭蒿—

時珍曰く、齊頭蒿は三四月苗が生え、葉は扁で本が狹く末が廣く開き、禿岐がある。嫩葉のうちは食へるものだ。鹿の食ふ九草の內の一である。秋細かな黃花を開き、大さ車前の實ほどの實を結ぶ。その實の內にある子は肉眼で見えぬほどの微細なものだ。そのために、世人は子が無

いものと思つてゐる。

苗【氣味】【苦く微し甘し、溫にして毒なし】【主治】【肌膚を充實し、氣を益し、暴かに肥らせる。血脈を滿盛せしめるものだから久く服してはならぬ】（別錄）【水に擂つて服すれば陰腫を治す】（時珍）

【附方】新一。【瘧疾寒熱】齊頭蒿根、(一)滴滴金根各一把を生で酒一鍾に擂つて發作前に服し、渣を男は左、女は右の(二)寸口に傅ければ二日にして止まる。（海上名方）

(一)九牛草（宋圖經）

和名　ひとつばよもぎ
學名　Artemisia integrifolia, L.
科名　きく科（菊科）

【集解】頌曰く、(三)筠州の山岡上に生ずる。二月苗が生え、獨莖で高さ二尺ほどあり、葉は艾葉に似て圓く長く、背面に白毛があり、表面は青い。五月苗を採つて

〔九牛草〕

(一)滴滴金ハ旋覆花ノ一名。

(二)寸口ハ腕頭ノ脈穴ノ名。

(一)牧野云フ、種種ナル點カラ考ヘテ私ハ今此九牛草ヲ下ノヤウニ斷定シタ。

(三)筠州ハ山草類仙茅ノ註ヲ見ヨ。

用ゐる。時珍曰く、陳嘉謨の本草蒙筌に、この草を蘄艾といつてあるは誤だ。

苗　〔氣味〕【微し苦し、小毒あり】〔主治〕【風勞を解し、身體の痛を治す。甘草と共に煎じて服す。その他の多くの藥に入れては用ゐない】（蘇頌）

茺蔚（本經上品）

和名　めはじき、又、やくもさう
學名　Leonurus sibiricus, L.
科名　脣形科（脣形科）

〔釋名〕　益母（本經）　益明（本經）　貞蔚（別錄）　蓷（爾雅）　音は推（スヰ）である。　野天麻（會編）　豬麻（綱目）(一)　火杴（本經）　鬱臭草（圖經）　苦低草（圖經）　夏枯草（外臺）　土質汗（綱目）　時珍曰く、この草、及び子は、いづれも充盛、密蔚なるものだ。故に茺蔚と名ける。その功力が婦人に適し、目を明にし、精を益するところから益母なる名稱があり、その莖が四角で麻に類するところから野天麻と謂ふ。俗に豬麻と呼ぶは、豬が喜んで食ふからである。夏至の後に枯れるところから、また夏枯草なる名稱がある。近效方にはこれを土質汗といひ、林億は「質汗なるものは西方の番夷地方に產し、熱血を諸藥に合せて煎じて作つたもので、金瘡、折傷を治す。

(一) 本經及大觀共ニ火札ニ作ル。

（二）大觀ニ思ヲ恩ニ作ルニ據ル。

益母も煎にして折傷の治療に用ゐ得るところから、土質汗と稱へるのだ』といふ。
禹錫曰く、爾雅に『萑は蓷なり』とあり、その注に『今の茺蔚のことで、又、益母と名ける』といひ、劉歆は『蓷は臭穢だ。臭穢、即ち茺蔚だ』といひ、陸機は『蓷は益母である。故に曾子はこれを見て（二）恩を感じたのだ』といつてある。

集解　別錄に曰く、茺蔚は海濱、池澤に生ずる。五月採收する。弘景曰く、現に處處にあるもので、葉は荏のやう、莖は四角である。子の形は細く長くして三稜がある。方に用ゐることはやはり稀だ。

〔茺蔚益母〕

頌曰く、現に園圃や田野に極めて多い。郭璞の爾雅注には『葉は荏に似て莖は四角、華は白くして節の間に生じ、節每に雞冠子に似て色の黑い實が成る。莖は四方稜になつてゐる。五月採收するものだ』といひ、又、『九月實を採る』といふが、醫方には實を用ゐることは稀だ

宗奭曰く、茺蔚の初春に生えた嫩芽は、やはり採つて浸し洗つて苦味を淘り去り、水煮し菜にして食へる。冬を凌いで凋悴せぬものだ。

時珍曰く、茺蔚は水に近い濕地に甚だ繁茂するもので、春初に蒿の嫩葉のやうな苗が生え、夏に入つて長さ三四尺になる。莖は四角で黄麻の莖のやう、葉は艾葉のやうで背面が青く、一梗三葉で葉に尖岐がある。一寸ほどづつに節があつて、節毎に穗が簇生して莖を抱く。四五月の頃に穗の內に小さい花を開き、その花には紅紫のものと微白色のものとあつて、萼毎に內に四粒の細子があり、一粒の大さは同蒿の子ほどのもので、三稜のある褐色のものだ。藥肆では往往これを巨勝子と稱して賣つてゐる。この草は生えた時は臭氣があり、夏至の後に枯れる。その根は白色だ。蘇頌の圖經に『その葉は荏に似て、子は雞冠子に似て色黑く、九月實を採る』といひ、寇宗奭の衍義に、これを『冬を凌いで凋まぬ』といふはいづれも誤傳である。この草には白花、紫花の二種ありて、莖、葉、子、穗皆一樣だが、ただ白花のものは氣分に入り、紅花のものは血分に入るもので、區別して用ゐるがよいのである。按ずるに、閨閤事宜に『白花のものを益母といひ、紫花のものを野天麻といふ』とあり、

返魂丹の註には『紫花のものが益母だ。白花のものは違ふ』とある。陳藏器の本草には『茺蔚は田野の間に生え、一般に臭草と呼んでゐる。天麻は平澤に生え、馬鞭草に似て節毎に紫花を生じ、花の中に青葙子のやうな子がある』とあり、孫思邈の千金方には『天麻草は莖が火麻のやうだ。冬苗が生え、夏鼠尾花のやうな赤花を著ける』とある。これ等はいづれも茺蔚と天麻とを別種の二物としたらしいが、蓋しこの物は一物の二種なることを知らぬのだ。凡そ植物の花にはいづれも赤と白とがある。牡丹や芍藥や菊花の類のやうなものだ。又按ずるに、郭璞の爾雅注には『萑、音は椎。卽ち茺蔚、又、益母と名けるものだ。葉は荏に似て華が白く、その華は節の間に生える』とあり、又『蓷、音は推。莖が四角で葉が長く鋭く、穗があつてその穗の間に紫、縹色の花がある。これは飲に作り得るもので、江東では牛蘈と呼ぶ』とある。これに據つて見れば、萑、蓷なる名稱は元來同じもので、ただ花の色で區別したものだ。その物の一物なることに疑ない。宋代の重修本草には、天麻草として誤註してゐるが、天麻とは謬も尤も甚しい。陳藏器の本草には又、鏨菜なるものを揭げて『江南の陰地に生ずる。益母に似て莖が四角、節に對して白花がある。產

後の血病の主薬だ』とあるが、これは茺蔚の白花のもののことだ。故にその功用の主として血病に在ることも同一なのだ。

子　**修治**　時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、微し香しく炒り、また或は蒸熱することもある。烈日で曝燥して舂き篩ひ、殼を去り仁を取つて用ゐる。

(三)**氣味**　【辛く甘し、微溫にして毒なし】別錄に曰く、甘し、微寒なり。時珍曰く、甘く辛し、溫なり。灰は硫黃を制す。

主治　【目を明にし、精を益し、水氣を除く。久しく服すれば身體を輕くする】(本經)【血逆、大熱、頭痛、心煩を療ず】(別錄)【産後の血脹】(大明)【仁を舂いて生で食へば、中を補し、氣を益し、血脈を通じ、精髓を充塡し、渴を止め、肺を潤ほす】(吳瑞)【風を治し、熱を解し、氣を順にし、血を活かし、肝を養ひ、心を益し、魂を安んじ、魄を定め、婦人の經脈、崩中、帶下、産後、産前の諸病を調へる。久しく服すれば子を儲けしめる】(時珍)

發明　震亨曰く、茺蔚子は、血を活かし、氣を行らし、陰を補するの功がある。故に益母と名けるのだ。凡そ産前、産後の全體を支配するものは血氣であつて、

(三) 木村(康)曰ク、葉ハレオヌリント云フ結晶性物質、脂肪油、悪臭アル腊分、樹脂等ヲ含有ス。久保田晴光、中島晴吉ー醫海時報一七七一(昭三)二。Peckolt:Ber. Pharm. Gesell. 14(1904) 372. W. P. 654.

（四）此條解說ノ義理稍通暢シガタキモノアリ。

産前に用ゐれば滞なく、産後に用ゐれば虛なく、行中に補するところのあるものである。

時珍曰く、茺蔚子は、味甘く微し辛し、氣は溫である。陰中の陽、手、足の厥陰の經の藥であつて、白花のものは氣分に入り、紫花のものは血分に入り、婦人の經脈不調、妊娠、出産一切の血氣の諸病を治する妙品である。然るに醫方でそれを心得て用ゐるものは鮮いが、時珍は常にこれを四物、香附の諸藥と共に用ゐて一般の患者の治療に甚だ多く效果を擧げてゐる。蓋し包絡は血を生じ、肝は血を貯藏するものであつて、この物はこれに對して血を活し、陰を補する作用のあるものだから、能く目を明かにし、精を益し、經を調へ、婦人の諸病を治するのである。李東垣氏は『瞳子散大したものには茺蔚子の使用を禁ずる。その辛、溫の氣味は散を主とし、能く火を助けるものだ。當歸も辛、溫ではあるが、苦、甘を兼ねるので、能く血を和する作用があるからこれは禁ぜぬのだ』といつてあるが、予の考では、目は血を得て能く物を視るもので、茺蔚は血を行ることが甚だ捷かなものだ。瞳子散大は血の不足だから、これを（四）禁ずるは火を助けるからではないと思ふ。血滯で目を病む

ものに宜いものだから『目を明かにする』といつてあるのだ。

莖　大明曰く、苗、葉、根も同功である。〔氣　味〕藏器曰く、寒なり。時珍曰く、莖、葉は味辛く微し苦し、花は味微し苦く甘し、根は味甘し。いづれも毒なし。(五)鏡源に曰く、硫黃、雌黃、砒石を制す。〔主　治〕【癮疹。浴湯にして用ゐるがよし】(本經)【擣汁を服すれば浮腫に主效があり、水を下し、惡毒丁腫、乳癰(六)丹遊等の毒を消す。いづれも傅ける。又、汁を服すれば胎兒の腹中で死亡したもの、及び產後の血脹悶に主效がある。汁を耳に滴入すれば聤耳に主效がある。擣いて蛇虺の毒に傅ける】(蘇恭)【(七)面藥に入れば顏を光澤にし、粉刺を治す】(藏器)【血を活し、血を破り、經を調へ、毒を解し、(八)胎漏、產難、胎衣不下、血運、血風、血痛、崩中漏下、尿血、瀉血、疳痢、痔疾、打撲內損の瘀血、大小便の不通を治す】(時珍)

〔發　明〕時珍曰く、益母草は、根、莖、花、葉、實、いづれも藥に入れて同様に用ゐ得るものだが、手、足の厥陰の血分の風熱を治し、目を明かにし、精を益し、婦人の經脈を調へる場合には、茺蔚子を單用するが良く、腫毒、瘡瘍を治し、水を消し、血を行らし、婦人の產前の諸病を治する場合には、竝用するが良い。蓋しその

(五)鏡ハ鑑ノ誤。
(六)丹遊ハ丹毒。
(七)面藥ハ化粧藥。
(八)胎漏妊娠中ノ出血。

(九)吉安ハ今ノ江西省吉安縣、卽チ舊廬陵縣ノ地ナリ。

根、莖、花、葉は行らすことが專らであり、子は行中に補の功果があるからだ。

附方　舊十四、新七。【濟陰返魂丹】昝殷の產寶に次の如く記載してある。『この方は、(九)吉安の文江高師禹が禮を厚くして名醫に求め得たもので、その妙效は神の如く、甚だ多くの人命を活かしたものだ。能く婦人の產前、產後の諸疾の危篤の病證を治す。野天麻、又、益母と名け、又、火杴と名け、又、負擔と名ける。即ち茺蔚子を用ゐる。葉は艾葉に似て、莖は火麻に類し、梗は四角で面が凹んだものだ。四、五、六月に節毎に蓼花のやうな紅紫色の花を開く。南方、北方到る處にあるものだが、白花のものは違ふ。端午の日、小暑の日、或は六月六日、花の正に開いた時、根のまま採收して陰乾し、葉、及び莖、子を用ゐる。鐵器を忌むものだから石器で碾つて細末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、病證に隨つて嚼んで服し、湯を使として用ゐ、その根を燒いて性を存し、末にして酒で服す。功效は黑神散と上、下がない。その藥は丸數に一定の限度がなく、病の癒るを度とする。或は梧子大の丸にして五七十丸づつを服し、又は搗いて濾し淨めた汁を熬膏して服す。○產前の臍腹痛で或は音のするには米飮で服す。○產前、產後の臍腹刺痛、胎動不安、下血止

（一〇）五心ハ手足ノ心及頂心ヲ指スガ如シ。

まぬものは當歸湯で服す。○産後に童尿に一丸を溶かして服すれば、能く魂を安んじ、魄を定め、血氣が自然に順調になり、諸病が起らぬ。又、よく血痛を破り、脈息を養ひ、經絡を調へる。いづれも温酒で服す。○胎衣不下、及び横産で順ならざるもの、死胎が下らずして日を經て脹滿し、心悶、心痛するには、いづれも炒鹽湯を用ゐて服す。○産後の血運で、眼暗く、血熱し、口渇し、煩悶し、鬼神を見るかの如く狂言し、人事不省なるには、童尿を和した酒に化して服す。○産後血塊を結成して臍腹奔痛し、時に寒熱を發して冷汗を出し、或は顔が垢黑ずんで赤く、（一〇）五心煩熱するには童尿酒で服し、或は薄荷の自然汁で服す。○産後に惡露が盡きず、結滯して刺痛し心胸に上衝して滿悶するには童尿酒で服す。○産後血水を瀉するには棗湯で服す。○産後の痢疾には米湯で服す。○産後の血崩、漏下には糯米湯で服す。○産後の赤、白帶下には煎膠艾湯で服す。○月經不順には温酒で服す。○産後の中風で牙關緊急し、半身不遂となり、失音・失語するには童尿酒で服す。○産後に氣喘、欬嗽、胸膈不利で、惡心し、酸水を吐き、顔面が浮腫し、兩脇が疼痛し、擧動自由ならぬには温酒で服す。○産後一箇月以内の欬嗽で自汗、發熱するは、久

（二）兩太陽穴ハ目尻ノ處。

しきに互れば變じて骨蒸となる。これには童尿酒で服す。〇產後に鼻衄し、舌黑く、口乾くには童尿酒で服す。〇產後に（二）兩太陽穴が痛み、呵欠し、心悸し、氣短く、羸瘦し、飲食欲なきもの、血風で身熱し、手、足が頑麻し、あらゆる節節が疼痛するには、いづれも米飲に溶して服す。〇產後の大、小便不通で煩躁し、口苦きには薄荷湯で服す。〇婦人の久しく子なきには溫酒で服す。【益母膏】近效方の、產婦の諸疾、及び折傷內損で瘀血があり、曇天の日每に痛むを治する神方。三月に益母草、一名負擔、一名夏枯草を、根、葉、莖、花のまゝ採つて洗ひ淨め、箔上にのして日に曝し乾かし、竹刀で長さ五寸に切る。鐵刀を用ゐてはならぬ。それを大鍋中に入れて水で二三寸深さに浸して煎煮し、草が煮爛れて水が三分の二を減じたとき、草を漉し去つて汁を約五六斗取り、盆に入れて半日澄し、綿で濾して濁滓を去り、その淸汁を釜に入れて慢火で一斗に煎じ、稀餳のやうにして瓷瓶に封じて貯藏し、使用の都度、梨子ほどの量を取り出して暖酒に和し、一日二回服す。或は羹粥に和するもよし。遠隔地の旅行には、丸にし得るまでに煉つて携帶する。七日まで服すれば疼は漸次に平復するものだ。產婦の惡露盡きざるもの、及び血運は一二服で瘥える

その藥は忌むもの無し。又、能く風を治し、心力を益す。(外臺祕要)【婦人の難産】益母草の搗汁七大合を、半減するまでに煎じて頓服すれば立ろに止む。新物の無い場合には、乾けるもの一大握を水七合で煎じて服す。(韋宙獨行方)【腹中の胎兒死亡】益母草を搗き熟し、暖水少量を和して絞取つた汁を頓服する。(韋宙獨行方)【後の血運】心氣絶せんとするには、益母草の研汁一盞を服するが絶妙である。(子母祕錄)【産後の血閉】下らぬには、益母草の汁一小盞を酒一合に入れて溫服する。(聖惠方)【帶下赤白】益母草を開花時に採つて末に搗き、二錢づつを食前に溫湯で服す。(集驗方)【尿血】益母草の搗汁一升を服すれば立ろに瘥える。これは蘇澄の方である。(外臺祕要)【赤白雜痢】困重するには、益母草を日光で乾し、陳鹽梅を燒いて性を存し、等分を末にして三錢づつを、白痢には乾薑湯で、赤痢には甘草湯で服す。これを二靈散と名ける。(衞生家寶方)【小兒の疳痢】死に垂たるには、益母草の嫩葉を米と共に粥に煮て十分に食ふ。瘥えるを度とする。甚だ佳いものだ。汁を飲むもよし。(一二)(廣利方)【痔疾下血】益母草葉の擣汁を飲む。(食醫心鏡)【一切の癰瘡】婦人の(一三)妬乳、乳癰、小兒の頭瘡、及び浸淫黃爛、熱瘡、疥疽、陰蝕には、いづれも天麻草を切つて五升、

(一二)大觀ニ濟ニ作ル。
(一三)妬乳ハ乳房炎及乳房膿腫。

（一四）勒乳ハ乳出ントト欲シテ出デザルヲ云フ。

水一斗半を一斗に煮取り、分けて數回洗へば痒さを殺す。（千金）【急、慢疔瘡】聖惠方では、益母草を搗いて封じ、また絞汁五合を服すれば消する。○醫方大成では、益母草を四月花共に採つて燒いて性を存し、先づ小尖刀で十字に疔根を開いて血を出し、次に根を遶つて開破して血を捻出し、拭き乾してから、稻草心に藥を蘸けて瘡口に入れ、底部に達せしめる。良久して紫血が出るはずだから、そのときはまた捻出して淨め、再び藥を撚り込んで紅血が見えるやうになつて止める。一晝夜に三五回藥を撚り込めば、重きものも二日にして根が爛れ出で、輕きものは一日で出る。瘡が脹起すればそれは根が出るのである。針で取り出して、その後へ藥を傅ければ肌を生じて平易く癒える。風寒、房事、酒、肉、一切の毒物を忌む。【癤毒の已に破れたるもの】益母草を搗いて傅ける。甚だ妙である。（斗門方）【（一四）勒乳で成つた癰】益母を末にし、水で調へて乳上に塗れば一夜にして自ら痊える。生で擣くもよし。（聖惠方）【喉閉腫痛】益母草を擣き爛らし、新汲水一盞で濃汁を絞つて頓服する。直に吐して癒える。冬季には根を用ゐる。（衛生易簡方）【汁の出る聤耳】茺蔚の莖、葉の汁を滴らす。（聖惠方）【粉刺黑斑】閨閣事宜に『五月五日に天麻の紫花のものを根

共に採つて晒乾して灰に燒き、商陸の根を搗いて自然汁に酸醋を和したものでその灰を搜ぜて餅にし、炭火で煆いて半年間貯藏したものを面藥に入れて用ゐる。甚だ能く飢を潤ほす』とある。蘇頌曰く、唐の則天皇后が益母を錬つて顏の澤を出した法は、五月五日に根と苗と完全なものを採り、土の著かぬやうにして曝乾し、搗き篩つて麪と水を和し、雞子大の團にして再び曝乾し、そこで四方に孔をあけた一箇の爐を作り、上下に火を置いて中央にその團を置き、大火で一炊の時間程燒いて大火を去り、小火を留めて火の絕えぬやうにして養ひ、(一五)一伏時經つてから取り出して甆器に入れ、研り篩つて再び三日間研つて取り收める。これを使用するには澡豆を使用する方法のやうにして日毎に用ゐるのである。ある方では十兩づつに滑石一兩、臙脂一錢を加へる。【馬咬の瘡】苦低草を細かに切り、醋に和して炒つて塗る。(孫眞人方)【新生小兒】益母草五兩を水で煎じて浴すれば、瘡疥が生ぜぬ。(簡要濟衆)

(一)鏨菜　音は慙(ザン)である。(拾遺)

和名　きせわた
學名　Leonurus macranthus, Maxim.
科名　脣形科(脣形科)

(一五)一伏時一晝一夜間。伏大觀ニ復ニ作ル。

(一)牧野云フ、集解ノ李時珍ノ說ニ從ヘバ之レハ白花ノ益母草(卽チめはじきノ

白花品）デアルガ、支那デモ之レニ反對シ別ニ一種ノ草デアルト主張スル者ガアル、然レドモ其形狀ノ詳ナル事ハ不明デアル、我邦ノ學者ハ之レチきせわたニ充テテ居ル、然シ其根據ハ極メテ薄弱デアレドモ私ハ姑ク此ニ之レニ從フテ置ク。

集解　藏器曰く、蟸菜は江南の陰地に生ずる。益母に似て莖が四角だ。節に對して白花を開く。時珍曰く、これは益母の白花のもののことであつて、爾雅に所謂蓷といふがこの物だ。紫花のものは爾雅の所謂藬である。蓷と藬とはいづれも同一音で一物の二種なのだから、この條にもやはり主治は血病にあるとしてあつて、益母の功と同一である。郭璞は獨り白花のものを指して益母とし、皆般は白花のものは益母でないといつてゐるが、その說はいづれも明確を缺いてゐる。嫩苗は食へるものだから菜といふのだ。寇宗奭が『茺蔚の嫩苗は煮て食へる』といつてあると合致する。

〔蟸菜〕
——白花茺蔚——

苗　氣味　【辛し、平にして毒なし】　主治　【血を破る。產後の腹痛には煮汁を服す】（藏器）

(一)牧野云フ、從來我邦ノ學者ハ集解ノ文ニ從ツテ薇銜ヲ大呉風草、小呉風草ニ分チ甲ヲちやうりやうさうトシ乙ヲやぶれがさトシテ居ルが是レハ中ツテ居ナイト斷ジ私ハ之レニ從ハヌ、ソシテ此薇銜ノ眞物ハ何デアルカ今判然シテ居ナイ。

(二)⿰月幾大觀ニ肌ニ作ル、

(三)魏興錫山、今ノ陝西省興安府安康縣ハ六朝時代ノ魏興ノ地ナリ。安康ヨリ東、漢水ニ沿ヘル今ノ白河縣ノ地ハ漢ニ錫トイフ。錫山トハ恐ラクソノ地ノ山ヲイフナルベシ。日本寛文版本草綱目ニ魏ノ興錫山ト讀ミタルハ謬ナラン。

(四)漢中ハ石部特生

(一)薇銜　薇の音は眉(ビ)である。(本經上品)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】 **麋銜**(本經) **鹿銜**(唐本) **呉風草**(唐本) **無心**(呉普) **無顚**(呉普) **承膏**(別錄) **承**(二)**⿰月幾**(呉普)

恭曰く、南方ではこれを呉風草、一名鹿銜(ろがん)といふ。鹿が疾のときこの草を銜(ふく)むとやがて瘥える。時珍曰く、蘇恭の說に據れば、薇銜(びがん)、鹿銜とあるは麋銜(びがん)と書くべきことになる。鹿と麋とは一類の動物だ。按ずるに、酈道元(れきだうげん)の水經注に『(三)魏(ぎ)興錫山(こうしやくざん)には薇銜草が多く生えてゐる。この草は、風があつても伏さず、風がなくて獨り自から搖(ゆ)れる』とある。これで見ると、呉風もやはり無風と書くが正しいであらう。その方が通ずるやうだ。藏器曰く、一名無心草といふが、それは草に心の無いものといふのではない。方藥に用ゐることは稀れだ。

【集解】 別錄に曰く、薇銜は(四)漢中(かんちう)の川澤、及び宛句(ゑんこう)、邯鄲(かんたん)に生ずる。七月に莖、葉を採つて陰乾する。

恭曰く、この草は叢生するものだ。茺蔚、及び白頭翁に似て葉に毛があり、莖が

礜石漢中、梁州ノ註參照。宛句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。（五）楚ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。

赤い。また大、小の二種あつて、（五）楚の地方では、大なるものを大呉風草、小なるものを小呉風草といふ。

保昇曰く、葉は茺蔚に似て叢生し、毛がある。その花は黄色、その根は赤黒色である。

〔薇　銜〕

莖葉　【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。之才曰く、秦皮と配合すれば良效がある。【主治】【風濕痺の歷節痛。驚癇の吐舌、悸氣。賊風、鼠瘻、癰腫】（本經）【暴癥に水を逐ひ、痿躄を療ず。久しく服すれば身體を輕くし、目を明かにする】（別錄）【婦人が服すれば妊娠を絕つ】（藏器）【水で煎じて瘭疽、甲疽、惡瘡を洗ふ】（時珍）外科精義に記載してある。

【發明】時珍曰く、麋銜は素問に用ゐてあるもので、風病、自汗を治する藥である。しかるに後世では用ゐることを知らない。誠に醫方上の缺點といふべきだ。その素問の文には『黃帝曰く、ある病は身熱し、懈惰し、汗出ること浴せる如く、

惡風少氣する。これは何の病であるか。岐伯曰く、その病は酒風と名ける。これを治するには、澤瀉、朮各(六)三五分、麋銜五分を以て合せ、三指を以て撮ふ。飯を後にする』とある。飯を後にすとは、先に藥を服することだ。

[附方]　新二。【年深き惡瘡】無心草根、釣苓根、狼毒、白丁香各五錢、麝香一字を末にして摻る。○又ある方では、無心草根、乾薑各二錢、釣苓根三錢を末にして摻る。(いづれも外科精義)【小兒の破傷風】拘急し、口噤するには、沒心草半兩、白附子を炮いて二錢半を末にし、一字づつを薄荷酒で灌ぎ下す。(聖濟錄)

[附錄]　(七)無心草(宋圖經)　頌曰く、(八)秦州、及び商州、(九)鳳翔に生じ、各縣いづれもこれを産する。三月花を開き、五月實を結ぶ。六七月に根、苗を採つて陰乾して用ゐる。性溫にして毒なし。積血に主效があり、氣塊を逐ひ、筋節を益し、虛損を補し、顏色を潤ほし、澼洩、腹痛を療ずる。

時珍曰く、麋銜を一名無心草といふ。此の草の功用と相近い。その圖に描れた形狀もやはり相近い。恐らくは同一物のことであらう。故に此に附記して後の研究に俟つ。鼠耳草にもやはり無心なる名稱はあるが、これとは同一物でない。

(六)大觀ニ三ヲ十ニ作ル。

(七)無心草
(和名)未詳
(學名)未詳
(科名)未詳

(八)秦州、商州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(九)鳳翔ハ石部石蟹ノ註ヲ見ヨ。

(一)夏枯草（本經下品）

和名　うつぼぐさ
學名　Brunella vulgaris, L.
科名　唇形科（唇形科）

【釋名】　**夕句**（本經）　**乃東**（本經）　**燕面**（別錄）　**鐵色草**　震亨曰く、この草は夏至が過ぎると枯れる。蓋し純陽の氣を稟けたもので、陰氣に遭へば枯れる。故にこの名稱があるのだ。

【集解】　別錄に曰く、夏枯草は蜀郡の川谷に生ずる。四月に採收する。

恭曰く、處處にある。(二)平澤に生ずるもので、冬至後に旋復に似た葉が生え、三月、五月に穗になつた花を開く。紫白色で丹參の花に似たものだ。子も穗になる。五月には枯れるものだ。四月に採收する。

時珍曰く、原野の間に甚だ多い。苗は高さ一二尺ばかり、莖はやや四角で葉は節に對して生える。旋復の葉に似たものだが、長大で細齒があり、背面が白くて(三)紋が多い。莖の端が長さ一二寸の穗になり、その穗の中に淡紫色の小さい花を開く。一穗に四粒の細子がある。丹溪が『子無し』といつたのは觀察の粗漏だ。嫩苗は煠

(一)牧野云フ、小野蘭山ハ夏枯草ノ眞物ヲじふにひとへトシうつぼくさヲサウデナイト斷ジテ居レドモ私ハ之レニ反對スル、此じうにひとへハ Ajuga（きらんさう屬）ノ一種で、多分支那ニハ無イ品（然シ其類品ハアッテモ）デアラウト思フ、昔支那デハ夏枯草ト稱スルモノハ幾品カアッタカ知ラヌガ、今日デハうつぼぐさヲ夏枯草トスルヲ正シイ事ダト考ヘル。

(二)大觀ニヨレバ以下頌ノ說ナリ。

(三)紋字金陵本汗浸江西本故ニ作ル通ジ難シ、救荒本草ニ紋ニ作ルヲ正トス。

で浸して苦味を取り、油、鹽を拌ぜれば食し得る。

[正誤] 宗奭曰く、今はこれを臭鬱といふ。秋季から生じ、冬を經て凋まず、春白花を開き、夏子を結ぶ。

震亨曰く、臭鬱は草に臭味のあるものだ。即ち茺蔚のことである。夏枯草には臭味がない。この二種は明かに別箇のものだ。二物倶に春生えて夏枯れるが　夏枯は先に枯れて子が無く、臭鬱は後に枯れて子を結ぶ。

莖葉(四)[氣味]【苦く辛し、(五)寒にして毒なし】之才曰く、土瓜が使となる。汞、砂を伏す。[主治]【寒熱、瘰癧、鼠瘻、頭瘡、癥を破り、癭、結氣、脚腫濕痺を散じ、身體を輕くする】(本經)

[發明] 震亨曰く、本草には、夏枯草の大いに瘰癧を治し、結氣を散ずることを言つて、厥陰の血脈を補養する功力あることに言及してないが、その寒熱を退けるを觀るに、虚せる者には使ふべきだが、實せる者には行、散の藥を佐とし、外治として艾灸を用ゐ、やはり漸次に效を取るべきである。

時珍曰く、黎居士の易簡方に「夏枯草は目疼を治す。沙糖水に一夜浸して用ゐる

(四)木村康一曰ク、本草家ハじふにひとへヲ夏枯草ノ本條トシうつぼぐさヲ滁州夏枯草トスレドモ、本邦市場ニ於テハ普通ノうつぼぐさヲ用ウ。

(成分)うつぼぐさノ全草ハ水ニ可溶性ノ無機鹽類約三・五%ヲ含有シ、其内約六八%ハ鹽化カリヨリ成ル、又水ニ難溶性ノアルカロイド樣物質ヲ含有ス。久保田晴光、中島清吉―滿醫九(昭、三)二六七。

(五)大觀ニ溫トアリ。

(六)即系也ノ三字、醫學綱目ニ目本又名目系ノ六字ニ作レリ之ニヨリテ訂正ス。

のであつて、その能く內熱を解し、肝火を緩にする功力を應用するのだ』とあり、樓全善は『夏枯草は、眼球が疼痛して、夜間特に甚しきものを治するに神效がある。或は苦、寒の藥を點けて、ために反つて甚しく疼くものに神效がある。蓋し眼球は眼本に連つて居り、(六)目本はまた目系と名づくるもので、厥陰の經に屬する。夜間特に甚しきもの、及び苦、寒の藥を點

〔夏　枯　草〕

けて反つて甚しく疼くものは、夜と寒とはやはり陰だからだ。夏枯草は純陽の氣を稟け、厥陰の血脈を補するものだから、右の病證に神の如き治效があるので、陽を以て陰を治するのだ。ある男子は、夜になると眼球が疼き、眉稜骨から頭の半に連つて腫痛し、黃連膏を點すれば反つて甚だしく疼き、諸藥も效がなかつたが、厥陰、少陽に灸して見ると、疼は隨つて止まつたが、半日にしてまた發作し、更に月

餘に亙つてその狀態が繼續した。そこで夏枯草二兩、香附二兩、甘草四錢を末にし、一錢半づつを淸茶で調へて服せたところ、咽を下ると疼が半減し、四五服にして全く癒えた』といつてある。

附方　舊一、新六。【目を明にし、肝を補す】肝虛で眼睛が(七)痛み、冷淚が止まらず、血脈が痛んで(八)羞明し、日光を怕れるには、夏枯草半兩、香附子一兩を末にし、一錢づつを(九)臘茶湯で調へて服す。(簡要濟衆)【赤白帶下】夏枯草を開花時に採つて陰乾して末にし、毎服二錢を米飮で食前に服す。(徐氏家傳方)【血崩の止まぬもの】夏枯草を末にし、方寸匕づつを米飮で調へて服す。(聖惠方)【產後の血運】心氣絕せんとするには、夏枯草を搗き、絞汁一錢を服するが甚だ妙である。(徐氏家傳方)【撲傷、金瘡】夏枯草を口で嚼爛して瘡上を罨すれば癒える。(衛生易簡)【汗斑白點】夏枯草を煎じた濃汁で日毎に洗ふ。(乾坤生意)【瘰癧、馬刀】已に潰れたると、未だ潰れざると、或は日久くして漏と成つたものとを問はず、夏枯草六兩、水二鍾を七分に煎じ、食事と時間を隔てて溫服する。虛甚きには煎汁を熬膏して服し、竝に患部へ塗り、十全大補湯に香附、貝母、遠志を加へて併用するが尤も善し。この物は

(七)大觀ニ痛ヲ疼ニ作ル、血ヲ筋ニ作ル。
(八)羞明ハ腺病性結膜炎。
(九)臘茶ハ蠟茶。

血を生ずるので、瘰癧を治する聖藥である。得易い草だがその功は甚だ多い。（薛已外科經驗方）

(一)劉寄奴草（唐本草）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

釋名　**金寄奴**（大明）　**烏藤菜**（綱目）　時珍曰く、按ずるに、李延壽の南史に『宋の高祖劉裕は小字を寄奴といつた。微賤の頃、(二)新州で(三)荻を伐つてゐて一疋の大蛇に遇つた。その場で射止めたが、翌る日往つて見ると、その附近に臼で何物かを杵くやうな音響が聞える。近寄つて見ると、青衣を著た數人の童子が榛の木の林で藥を搗いてゐた。「何をしてゐるか」と尋ねると、「吾等の主神が劉寄奴に射撃されたので、今それに傅ける藥を合

劉寄奴

(一)牧野云フ、之レヲはんごんさう（きく科）或ハあきのきりんさう、一名きんくわ或ハおとぎりさうニ充ツル說ハ穩カデナイ。
(二)新州ハ新洲ノ訛、新洲ハ一名薛家洲トイフ。今ノ江蘇省江寧縣ノ北、大江中ニ在リ。
(三)大觀ニ荻ヲ狄ニ作ル。

せてゐるのだ」と答へた。裕が「神ともいはれるものが、なぜその射擊した者を殺して了はぬのか」といふと、「寄奴は王者たる人間なのだ。殺すわけに行かない」と答へた。その時裕が童子共を叱咤すると、皆あわてて逃げ散じたが、藥はそのまま取り殘して往つたので、それを取收めて持ち歸り、その後戰場で金瘡を受けた度每に、その藥を傅けると直ちに瘡が癒えるのであつた。世人はこの挿話に因んで、この草を劉寄奴と呼ぶ』と記載してある。鄭樵の通志には『江南地方では、漢の時代から劉の文字を卯金刀といふ。そこで轉じて劉を金と呼び、それからこの草をも金寄奴なる名稱で呼んでゐる』とある。江東地方ではこれを烏藤菜といふさうだ

【集解】恭曰く、劉寄奴草は江南に生ずる。莖は艾蒿に似て長さ三四尺、葉は山蘭草に似て尖長である。一本の莖が直上に伸びて穗があり、葉は交ひ違ひに生える。子は稗に似て細かい。

保昇曰く、今は(四)越州に産する。蒿の類だ。高さは四五尺、葉は菊に似て花の色が白く、實は黄白色で穗になる。夏季に苗を採收して(五)日乾する。

頌曰く、今は(六)河中府、(七)孟州、(八)漢中、(九)滁州にもある。春苗が生え、莖は艾

(四)越州ハ石部蛇黄ノ註ヲ見ヨ。
(五)大觀ニ日字アリ。
(六)河中府ハ石部石中黄子ノ註ヲ見ヨ。
(七)孟州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(八)漢中ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。
(九)滁州ハ人參　註ヲ見ヨ。

蒿に似て表面に四稜があり、高さは二三尺以内、葉は柳に似て青い。四月形が瓦松のやうで碎小な黄白色の花を開き、七月黍に似て細かい實を結ぶ。根は淡紫色で蒿苣に似てゐる。六月、七月に苗、及び花、子を採り、通じて用ゐる。

時珍曰く、劉寄奴は一莖直上し、葉は蒼朮に似て尖つて長く、糙澀で表面は深く、背面は淡い。九月に莖の端が數枝に分開し、一枝每に十朶ほど簇つた小花を開く。花は白瓣黄蕋で、形は小菊の花のやうだ。花が終ると苦蕒の花の絮のやうな白絮が出る。子は細長く、やはり苦蕒の子のやうだ。所謂黍、稗のやうな實のものといふは此の物とは同一物ではないやうだ。葉も蒿に類するものではない。

子 苗も同じ。［修治］斆曰く、凡そこれを採收したならば、莖、葉を去つて實のみを用ゐ、布で薄殼を拭ひ去つて清淨にし、酒を拌ぜて午前十時から午後四時まで蒸して暴乾して用ゐる。時珍曰く、莖、葉、花、子、いづれも用ゐ得る。

［氣味］【苦し、溫にして毒なし】［主治］【血を破り、脹を下す。多く服すれば下痢を起す】（蘇恭）【下血、止痛。產後の餘疾を治し、金瘡の血を止めるに極めて效がある】（別錄）【心腹痛、下氣、水脹、血氣、婦人の經脈、癥結を通じ、霍亂、

（一〇）大觀ニ經驗方ニ作ル。

（一一）陰陽ハ熱ノ有無ニ就キテ云フモノカ。

水瀉を止める】（大明）【小兒の尿血には、新なものを研末して服す】（時珍）

附　方　舊一、新七。【大小便血】劉寄奴を末にし、茶で二錢を調へて空心に服すれば止まる。（集簡方）【折傷の瘀血】腹內に在るものには、劉寄奴、骨碎補、延胡索各一兩、水二升を七合に煎じ、酒、及び童尿各一合を入れ、溫めて頓服する。（千金方）【血氣脹滿】劉寄奴の穗實を末にし、三錢づつを酒で煎じて服す。量を過してはならぬ。吐、痢を起すものだ。これは破血の仙藥である。（衛生易簡方）【霍亂で痢するもの】劉寄奴草の煎汁を飲む。（聖濟總錄）【湯火灼傷】劉寄奴を搗いて末にし、先づ糯米漿を鷄の羽にひたして上を掃ひ、その末を摻る。如何なる場合でも、痛まず、痕の遺らぬ大驗の方である。凡そ湯火傷には、先づ鹽末を摻つて肉を保護し、壞れぬやうにして然る後に藥を摻るを妙とする。（一〇）（本事方）【風が瘡口に入りたるもの】腫痛するには、劉寄奴を末にして摻れば止まる。（聖惠方）【小兒の夜啼】劉寄奴半兩、地龍を炒つて一分、甘草一寸を水で煎じ、少量づつ灌ぐ。（聖濟總錄）【赤白下痢】（一一）陰陽交帶するには、赤、白を問はず、劉寄奴、烏梅、白薑等分を水で煎じて服す。赤には梅を增加し、白には薑を增加する。（艾元英如宜方）

(一)牧野云フ、此者ハ決シテめごしつ一名はぐろさうデハナイ。

(二)均州ハ石部長石ノ註ヲ見ヨ。

曲節草(一)（宋圖經）

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

釋名 **六月凌** 音は令(リヤウ)である。（圖經） **六月霜**（綱目） **綠豆青**（圖經）
蛇藍 時珍曰く、この草は性が寒だ。故に凌、霜、綠豆の名稱で呼ばれる。

集解 頌曰く、曲節草は(二)均州に生ずる。四月苗が生え、莖は四角で色は青く、節がある。葉は劉寄奴に似て青く、軟かなものだ。七八月薄荷に似た花を著ける。子は結ぶがそれは用ゐない。五月、六月に莖、葉を採つて陰乾する。

〔曲節草〕
—六月霜—

莖葉 氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【發背瘡、癰腫を消して毒を抜くには、甘草と共に末にして米汁で調へて服す】（蘇頌）

麗春草（宋圖經）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】仙女蒿（圖經）　定參草

○頌曰く、麗春草は(一)檀嵎山の川谷に生ずる。檀嵎山は(二)高密の管下に在る山だ。(三)河南(四)淮陽郡(五)潁川、及び(六)譙郡、(七)汝南郡等ではいづれも龍羊草と呼び、(八)河北の近山、(九)鄠郡、(一〇)汲郡ではいづれも叢蘭艾と名け、(一一)上黨の(一二)紫團山にもあつて、定參草、又、仙女蒿と名ける。今は所在にある。甚だよく(一三)癊黄を療ずるものだが、一般には知られてゐない。

〔麗春草〕

○時珍曰く、此の草は特殊の功力を有するものだが、その形狀が記載されてない。今は罌粟にも麗春草なる名があり、九仙子にも仙女嬌なる名があつてこの草と同名だが、恐らく同一物でないやうだ。大方の

(一)檀嵎山、未詳。
(二)高密ハ今ノ山東省高密縣ノ地ナリ。
(三)河南郡ハ今ノ河南省洛陽、開封ニ亙ル黄河以南、潁川以北一帶ノ地ナリ。
(四)淮陽郡ハ今ノ河南省ノ柘城、淮寧等安徽省ニ接スル東境ノ地ナリ。
(五)潁川郡ハ菊ノ註ヲ見ヨ。
(六)譙郡ハ淮陽郡ノ東境ニ接ス、今ノ安徽省亳縣一帶ノ地ナリ。
(七)汝南郡ハ山草類王孫、苦參ノ註ヲ見ヨ。
(八)河北ノ近山、河

北ハ石部金剛石ノ註ヲ見ヨ。近山、未攷。或ハ中央ニ近キ地方ノ山ノ意カ。

(九)鄴郡ハ今ノ河南省臨漳縣一帶ノ地ナリ。

(一〇)汲郡ハ今ノ河南省汲縣附近一帶ノ地ナリ。

(一一)上黨ハ人參、及ビ石部長石ノ註ヲ見ヨ、

(一二)紫團山ハ人參ノ註ヲ見ヨ。

(一三)癥ハ心症ナリ故ニ癥黃ハ黃疸ノ一種、心痛アルモノナラン。

研究に俟つ。

花及び根 [氣味] (缺) [主治] 【癥黃、黃疸】(蘇頌)

[發明] 頌曰く、唐の天寶年間に潁川郡の楊正が朝廷に進めた方で、名醫が皆その有效なることを實驗してゐる。その方に『麗春草は、時患傷熱(じくわんしやうねつ)が原因で癥黃に變化し、全身壯熱して小便が黃赤になり、眼は金色の如く、顏はまた青黑く、心頭が氣痛して心臟の周圍が刺すやうに痛み、頭旋して倒れんとし、兼ねて脇下に瘕氣(かき)のあるもの、及び黃疸等を治す。實驗を經たものだ。その藥は、春三月に花を採つて陰乾し、一升を搗いて散にし、排曉空腹にして三方寸匕を生麻油一盞に和して頓服するのである。一日に一回服し、五日を隔てて再服し、知あるを度とする。その根は黃疸を療ずるもので、搗汁(たうじふ)一盞を空腹に頓服すれば少頃して二三回便通があり、疾は立ろに已む。一劑で全癒せぬときは、七日を隔てて更に一劑を用ゐれば完全に瘥える。酒、麪、豬、魚、蒜(さん)、粉酪(ふんらく)等を忌む』とある。

旋覆花（本經下品）

和名　をぐるま
學名　Inula britannica, L.
科名　きく科（菊科）

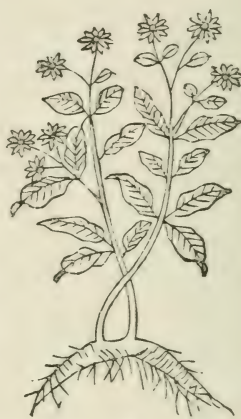
［釋名］　金沸草（本經）　金錢花（綱目）　滴滴金（綱目）　盜庚（爾雅）　夏菊（綱目）　戴椹（別錄）　宗奭曰く、花の緣が圓形に繁茂して下を覆ふから旋覆花といふ。時珍曰く、諸種の名稱は皆その花の形狀に因んで命けたもので、爾雅に『蕧は盜庚なり』とあるは、蓋し庚（カノエ）は金であつて、この草は夏黃花を開いて金の氣を盜むものだといふ意味である。酉陽雜俎には『金錢花、一名毘尸沙。梁の武帝の時に始めて中國へ來たものだ』とある。

［集解］　別錄に曰く、旋覆は平澤、川谷に生ずる。五月に花を採り、日光で二十日間乾かして使用し得るものとなる。弘景曰く、近道の下濕の地に生ずる。菊花に似て大きい。これとは別に旋蕧根といふものがあつて、河南に產し、（一）北國にもある。形は芎藭に似たものだ。旋蕧膏を合はせる以外には用途のないもので、この旋覆花の根ではない。

（一）大觀ニ北チ來比ノ二字ニ作ル。

(二)上黨ハ人參ノ註ヲ見ヨ。

保昇曰く、葉は水蘇に似てゐる。花は黄で菊のやうだ。六月から九月までに花を採る。

頌曰く、今は所在いづれにもある。二月以後に苗が生え、水に近い土地に多く、紅藍に甚だ似てゐるが刺がなく、長さ一二尺ほどになる。葉は柳のやうで莖は細い。六月に菊花のやうな小銅錢大の深黄色の花を開く。(二)上黨の田野の農民が金錢花と呼んで、七八月に花を採るものと、今近道の一般民家で庭や畑に栽培する金錢花とは、花、葉いづれも同一で、繁殖し易いものだ。恐らくそれが旋覆なのだらう。

〔旋覆花〕
——金沸草——

宗奭曰く、旋覆は、葉が大菊のやう、又、艾蒿のやうだ。秋季に大さ梧桐子の花ほどの淡黄色の花を開く。その香は菊よりも高い。別に旋花といふものもあるが、それは鼓子花のことでこの花ではない。別に一條を掲げてある。

時珍曰く、花の形狀は金錢菊のやうなもので、水澤の邊に生えるものは花が小さくて單瓣だが、民家で栽培するものは花が大きくて蕋に簇つて咲く。蓋し土地の肥、瘠に因る相違である。根は細く白い。俗間の言ひ傳ひに『露水が滴下して生えるものだから繁茂し易いのだ』などいふが、蓋しさうではない。

花　〔修治〕斅曰く、花を採取したならば、蕋、弁に殼皮、及び蔕子を去り、午前十時から十二時まで蒸して晒乾して用ゐる。

〔氣味〕【鹹し、溫にして小毒あり】別錄に曰く、甘し、微溫なり。冷痢せしめる。權曰く、甘し、毒なし。大明曰く、毒なし。宗奭曰く、苦く甘く辛し。

〔主治〕【結氣で脇下が滿して驚悸するもの。水を除き、五臟の間の寒熱を去り、中を補し、氣を下す】(本經)【胸上の痰結で唾の膠漆の如くなるもの、心胸の痰水、(三)膀胱、留飮、風氣濕痺、皮間の死肉、目中の(四)眵䁾を消し、大腸を利し、血脈を通じ、色澤を益す】(別錄)【水腫に主效があり、大腹を逐ひ、胃を開き、食物の通らぬ嘔逆を止める】(甄權)【痰水を行り、頭、目の風を去る】(宗奭)【堅を消し、痞を軟げ、噫氣を治す】(好古)

(三)按ズルニ膀胱下ニ氣ノ字脱スルナラン。
(四)眵䁾ハ赤目。

（五）鞭トハ緊張スルコト。

【發明】頌曰く、張仲景の、傷寒で汗下の後に心下が痞堅し、噫氣の除かぬを治する薬に七物旋復代赭湯があり、婦人の病の雜治に三物旋覆湯があり、胡治居士の、痰飲が兩脇に在つて脹滿するを治する薬に旋覆花丸があつて、尤も多く使用されるものだ。

成無已曰く、（五）鞭すれば氣堅するもので、この場合、旋覆の鹹は痞堅を軟かにするものだ。

震亨曰く、寇宗奭は『痰水を行り、頭、目の風を去るもの』といつてゐるが、やはり走り散ずる薬だから、虛する傾向の患者には多く服させてはならない。大腸を冷痢せしめるものだ。警戒を要する。

時珍曰く、旋覆は手の太陰、肺、手の陽明、大腸の薬であつて、治病上の功力はただ水を行り、氣を下し、血脈を通ずるだけに在るものだ。李衞公は『その花を嗅げばよく目を損ずる』といつてある。唐愼微の本草では、誤つて旋花根の方をこの物の項に收載してあるが、訂正して置く。

【附方】舊一、新三。【中風壅滯】旋覆花を洗淨して焙じ研り、煉蜜で梧子大の丸

（六）大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。

にし、夜間臥床時に茶湯で五丸乃至七丸、十丸を服す。（經驗(六)方）【半産漏下】虚、寒相搏ち、脈が弦芤なるには、旋覆花湯——旋覆花三兩、葱十四莖、新絳少量、水三升を一升に煮て頓服する。（金匱要略）【月蝕耳瘡】旋覆花を燒いて研り、羊脂に和して塗る。（集簡要方）【小兒の眉癬】小兒の眉毛、眼睫が癬のために脱け落ちて生えぬには、野油花、卽ち旋覆花、赤箭、卽ち天麻の苗、防風等分を末にし、洗淨して油で調へて塗る。（總微論）

葉　主治　【金瘡に傅ければ血を止める】（大明）【疔瘡腫毒を治す】（時珍）

根　主治　【風濕】（別錄）

青葙（本經下品）

和名　のげいとう
學名　Celosia argentea, L.
科名　ひゆ科（莧科）

釋名　**草蒿**（本經）**萋蒿**（本經）**崑崙草**（唐本）**野雞冠**（綱目）**雞冠莧**（綱目）子を**草決明**と名ける。（本經）時珍曰く、青葙なる名稱の意義は判らないが、胡麻の葉にも青蘘なる名がある。この草もまた胡麻畑に多く生えてその名が同じや

うだ。その物が似てゐるからさう呼ぶやうになつたものではないかと思ふが、青蒿にも草蒿なる名稱があつて、その功力が似たもので、名もやはり同じいのは如何なるわけだらうか。その子は目を明かにする功力が決明と同樣だから草決明なる名稱がある。その花、葉が雞冠に、嫩苗が(一)莧に似てゐるところから、雞冠莧と謂ふのである。鄭樵の通志に『俗に牛尾蒿と名ける』とあるは誤だ。

【集解】　別錄に曰く、青葙は平谷、道旁に生ずる。三月莖、葉を採つて陰乾し、五月、六月子を採る。弘景曰く、處處にあるもので、麥栅花に似て子が甚だ細い。別に草蒿、或は草藁と書く名稱のものがあつて、主治の功力も特に似て居り、形狀も名稱もよく似て居り。疑はしいやうだが、實は兩種別物だ。

〔青葙子〕

恭曰く、この草は苗の高さ一尺餘で、葉は細く軟かい。花は紫白色だ。實は角子になつて黑く扁たくして光があり、莧實に似て大きい。下濕の地に生えるもので、四月、五月に(二)采る。(三)荊襄地方では崑

(一)牧野云フ、莧ハひゆデ支那ノ原產デアルト思フ、學名ハAmarantus inamoenus, Willd. デアツテ我邦ニハ往時支那カラ渡來シタモノデアル。

(二)采字大觀ニ據テ補入ス。

(三)荊襄ハ山草類貫衆ノ註ヲ見ヨ。

崙草と呼ぶ。

○頌曰く、今は江淮の州郡や近道にもある。二月青苗が生えて長さ三四尺になり、葉は濶く、柳に似て軟かい。莖は蒿に似て青紅色だ。六月、七月の内に上が紅く下の白い花を開く。子は黑く光つて扁たく、莨菪に似てゐる。根はやはり蒿根に似て白く、直下に伸び、獨莖の根が生える。六月、八月に子を採る。

○時珍曰く、青葙は田野の間に生ずる。嫩苗は莧に似たもので、食し得る。成長すれば高さ三四尺になり、苗、葉、花、實は雞冠草と一樣で異らないが、ただ雞冠は花穗が大きくて扁たいものや團になるものがあり、この草は梢間から花穗が出て尖つて長く、四五寸あつて兎尾のやうな形狀だ。水紅色のものや黃白色のものもある。子は穗の中に在つて雞冠子、及び莧子と一樣で見別け難い。蘇恭が『角を結ぶ』といつたのは誤だ。蕭炳は『黃花のものを陶珠(四)術と名ける』といひ、陳藏器の所說と同じくない。又、天靈草といふものもあり、やはりこの類の草だからいづれも左に記錄する。

附錄

(五)桃朱術　○炳曰く、青葙の一種に、花の黃なる陶珠術と名けるものがあ

(四)術ハ大觀ニ衍ニ作ル。

(五)桃朱術
(和名)無シ
(學名)未詳
(科名)未詳

る。苗はよく似てゐる。藏器曰く、桃朱術は園中に生えるもので、芹のやうに細く、花は紫色で子は角になる。傍に鏡を置き、それに向けて敲けば子が自から飛び出る。婦人が五月五日にその子を採つて身に帶びれば夫に愛されるといふ。

(六)**鴈來紅** 時珍曰く、莖、葉、穗、子、いづれも雞冠と同じ。その葉は九月になると花のやうに鮮かな紅色になるからかく名けたのだ。呉地方では老少年と呼ぶ。六月葉の紅になる一種は十樣錦と名ける。

(七)**天靈草** 時珍曰く、按ずるに、土宿眞君の本草に『形狀は雞冠花のやうだ。葉も似てゐるが、これを折れば乳のやうな液が出る。江湖、荊南地方の河の堤や池の邊に生える。五月その汁を取つて雄黃、硫黃を制し、雌黃を煮、朱砂を煉るに用ゐ得る』とある。

(八)**思蓂子** 斅曰く、思蓂子、(九)鼠細子二物は眞によく青葙子に似てゐるが、ただこの物は味が違ふ。思蓂子の味は苦い。煎じれば涎が出る。

莖葉 【修治】 斅曰く、凡そ用ゐるには、先づ燒いて鐵の杵臼で擣いて用ゐる。

(六)鴈來紅
(和名)はげいとう
(學名)Amaranthus tricolor, L.
(科名)ヒユ科(莧科)

(七)天靈草
(和名)無シ
(學名)未詳
(科名)未詳

(八)思蓂子
(和名)無シ
(學名)未詳
(科名)未詳

(九)鼠細子
(和名)無シ
(學名)未詳
(科名)未詳

【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】【主治】【邪氣、皮膚中の熱、風瘙で身體の癢きもの。三蟲を殺す】(本經)【惡瘡、疥蝨、痔蝕、下部の䘌瘡】(別錄)【搗汁を服すれば大いに(一〇)溫癘を瘥ず】(蘇恭)【金瘡血を止める】(大明)

子　【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】權曰く、苦し、平なり。【主治】【唇口青】(本經)【五臟の邪氣を治し、腦髓を益し、肝を鎭め、耳目を明にし、筋骨を堅くし、風寒濕痺を去る】(大明)【肝臟の熱毒が眼を衝いた(一一)赤障、(一二)青盲、(一三)翳腫。惡瘡、疥(一四)瘡を治す】(甄權)

【發明】　炳曰く、眼を理するに青葙子丸といふ藥がある。宗奭曰く、青葙子は、本草經には眼を治することを說いてない。ただ藥性論と日華子とが始めて、肝を治し、目を明かにすることを言つてある。今は一般に眼を治するものとして多く用ゐてゐるが、一向本經の文意に該當しない。

時珍曰く、青葙子の眼を治する功力は決明子、莧實と同樣だ。本經には、眼を治すとこそ言つてないが、『一名草決明』といひ、『唇口の青きに主效がある』といふ以上、目を明にする功力の示されてあることは言ふまでもないことだ。目は肝の竅で

(一〇)溫癘ハ熱病。
(一一)赤障ハ結膜炎。
(一二)青盲ハ綠內障俗ニアヲソコヒ。
(一三)翳腫大觀ニ瞖腫ニ作ル。
(一四)疥大觀ニ瘙ニ作ル。

ある。唇口の青きは足の厥陰の經の證である。古方に熱を除くにもやはり多く用ゐてあつて、青葙子が厥陰の藥であることは明だ。況や實驗上往往に目を治する效のあるのが何より有力な權證であらう。魏略には『(一五)初平年代に青牛先生なる人があつて青葙子丸を服してゐたが、年百餘歲に及んでも五六十歲位に見えた』とある。

[附方] 舊一。【鼻衄の止まぬもの】眩冒して死せんとするには、青葙子汁三合を鼻から灌ぎ込む。(貞元廣利方)

雞冠(宋嘉祐)

和名 けいとう
學名 Celosia cristata, L.
科名 ひゆ科(莧科)

[釋名] 時珍曰く、花の形狀に因んだ命名だ。

[集解] 時珍曰く、雞冠は處處にある。二月苗が生え、夏に入つて高さは五六尺になるが、低きは纔かに數寸に止まる。葉は青く柔かで頗る白莧菜に似てゐるが、狹く尖つて赤脈がある。莖は赤色で、或は圓く、或は扁たく、筋が起つてゐる。六七月に梢の間に花を開き、紅、白、黄の三色があつて、その穗の圓く長く尖つた

(一五)初平元年ハ西曆紀元一九〇年ニ當ル。

ものはさながら青葙の穂のやう、扁たく巻いて平らなものはさながら雄雞(ゆうけい)の冠のやうだ。花の大なるものは周圍一二尺ほどのものもあり、層層溢れるやうに巻き出て愛すべきものである。子は穂の中に在つて黒く細かく、光つて滑かだ。莧實と一様である。その穂の形の秕麥(ひばく)のやうなものは、花に最も耐久性があつて、霜が降りてから始めて焦げちぢれる。

(雞　冠　花)

苗　(一)氣味　【甘し、涼にして毒なし】　主治　【瘡痔、及び血病】(時珍)

子　氣味　【甘し、涼にして毒なし】　主治　【腸風瀉血(ちやうふうしやけつ)、赤白痢を止める】(藏器)【崩中帶下を治する薬に入るには炒つて用ゐる】(大明)

花　氣味　同上　主治　【痔漏下血、赤白下痢、崩中。赤白帶下(しやくびやくたいげ)には赤白その花の色で分けて用ゐる】(時珍)

附方　新十。【吐血の止まぬもの】白雞冠花を醋に浸して七回煮て末にし、二

(一)木村(康[illegible])ク、(成分)種子ハ組成不明ノ脂肪油ツエロシア油ヲ出ス。(De Negri u. Fabris: Pharm. Post. 1896. 29. 189(W. P. 187)又 Weisner: R. P. 714 (1927)ニ據レバ緑褐色無臭ノ極メテ徐徐ニ乾燥スルアマランツエーン油ヲ出ス。

錢づつを熱酒で服す。（經驗方）【結陰便血】雞冠花、椿根白皮等分を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを黄芪湯で服す。（聖濟總錄）【便後の下血】白雞冠の花、幷に子を炒り煎じて服す。（聖惠方）【五痔肛腫】久しく癒えずして變じた瘻瘡には、雞冠花、鳳眼草各一兩を水二盌で湯に煎じて頻りに洗ふ。（衞生寶鑑）【下血脫肛】白雞冠花、防風等分を末にして糊で梧子大の丸にし、空心に七十丸を米飲で服す。ある方では、白雞冠花を炒り、棕櫚灰、羌活各一兩を末にし、二錢づつを米飲で服す。（永類鈐方）【經水不止】紅雞冠花一味を晒乾して末にし、三錢づつを空心に酒で調へて服す。魚腥、豬肉を忌む。（孫氏集效方）【產後の血痛】白雞冠花を酒で煎じて服す。（李樓奇方）【婦人の白帶】白雞冠花を晒乾して末にし、毎早朝空心に酒で三錢を服す。赤帶には赤きものを用ゐる。（孫氏集效方）【白帶沙淋】白雞冠花、苦壺蘆等分を燒いて性を存し、空心に火酒で服す。（摘玄）【赤白下痢】雞冠花を酒で煎じて服す。赤には紅花を用ゐ、白には白花を用ゐる（集簡方）

(一)紅藍花（宋開寶）

和名　べにばな、又、くれなゐ
學名　Carthamus tinctorius, L.
科名　きく科（菊科）

釋名　**紅花**（開寶）　**黄藍**　頌曰く、その花の色が紅く、葉が頗る藍に似たものだから藍の名がある。

集解　志曰く、紅藍花、即ち紅花である。(二)梁、漢、及び(三)西域に生ずる。博物志に『張騫が種を西域で得たものだ』とあるが、今は(四)魏の地方でもこれを栽培する。

頌曰く、今は處處にあるもので、民家で畑に種ゑる。冬季よく耕した土地に子を蒔けば春苗が生え、夏になると花が開く。花は下が(五)梂彙になつて刺が多く、花はその梂上に出るのである。栽培に從事するものは露のあるうちにこれを採る。花は採れば復た出るもので、幾度か採り盡すまで採つて罷める。實は梂中に結ぶもので、大さ小豆ほどの白顆である。その花を暴乾して物を染めれば眞紅になる。又、臙脂を作る材料になる。

(一)牧野云フ、紅藍花ハ支那デハ廣ク栽培セラレ、又場處ニヨツテハ多少野生ノ狀態ヲ呈スルモノガアルト云フ事デアル。

(二)梁ハ梁州、漢ハ漢中、石部特生礬石梁州ノ註ヲ見ヨ。

(三)西域ハ今ノ新疆省ヲ指ス。

(四)魏トハ漢ノ魏郡即チ今ノ河南省ノ黄河以北、山西、河北二省ニ境スル漳河流域ノ地ナリ。

(五)梂彙ハ實ヲ盛總苞ヲ云フ。

時珍曰く、紅花は二月、八月、十二月いづれも種を蒔いてよい。雨後に子を蒔くもので、麻を蒔く方法の通りである。生えたばかりの嫩い葉、苗は食し得る。その葉は小薊の葉のやうで、五月になれば花を開く。花は大薊の花のやうで、色が紅い。早曉に花を採り、搗き熟して水で淘り、布袋で絞つて黄汁を去り、また搗いて酸粟米泔淸でまた淘り、また袋で絞つて汁を去り、一夜青蒿で覆ふて置いて晒し乾し、或は捏ね、或は薄餅にして陰乾して貯藏し、藥に入れるときは揉み碎いて用ゐる。その子は五月に採り、淘淨し搗き碎いて煎じ、その汁に醋を入れて蔬菜に拌ぜて食へば、極めて濃厚で美味なものだ。又、車の脂、及び燭火の材料にもなる。

〔紅 藍 花〕

花（六） 氣味 【辛し、溫にして毒なし】 元素曰く、心に入つて血を養ふ。所謂、その苦、溫は陰中の陽だから心に入るのだ。當歸を佐とすれば新血を生ずる。好古曰く、辛くして甘く苦し、溫であつて肝經の血分の藥である。酒に入れるがよ

（六）木村（康）曰ク、紅花ハべにばなノ花冠ヲ採集シテ乾燥セルモノナリ、花冠ハ管狀ニシテ先端分裂シ長サ約一糎ニ至リ、新鮮ナルモノハ外面黄色、陳久品ハ赤褐色又ハ暗褐色ヲ呈ス、本品ハ特異緩和ノ香氣アリ、味ハ微ニ苦シ、板紅花ハ紅花ヲ壓搾シ乾燥セルモノナリ、本品ハ通常四角板狀ヲナシ、大サ約五六糎平方厚サ二三粍ニ至リ暗紅色ヲ呈ス、本品ハ專ラ支那ヨリ輸入セラレ紅花ノ眞品ナリ。（刈米木村、邦藥植（昭和四年版）

（七）木村（康）曰ク、（成分）花ハサフロール黄（黄色素）及ビカルタミン（紅色素）ヲ含有ス、種子ハ脂肪

油二一－三％ヲ含有ス、主トシテ油酸及リノール酸ノグリセリードヨリ成ル。紅花ハ婦人病殊ニ通經藥ニ供シ、酒ニ冷浸シテ服用ス、又食用紅ヲ製シ婦人ノ化粧用或ハ菓子ノ無害着色料トス。

文獻Malin: Ann.136 (1863) 155. Jones: Chem. Ztg. 24(1900) 272. 龜高德平－化誌二九(明、三九)龜高德平、A. G. Perkin－化誌三一(明、四二)一一七七、黑田ちか子－日本藥學會講演(昭、四、一)、羽根田作夫－植研、四(昭、二)一四二。

(八)衝脈任脈經已ニ前ニ出ヅ。

(九)本草發揮ニ漫ニ作ル。

し。

(七)主治　【産後の血運、口噤(こつきん)、腹內の惡血が盡きずして絞痛するもの、胎兒が腹中で死亡したものには、いづれも酒で煮て服す。また蠱毒(こどく)にも主效がある】(開寶)【多く用ゐれば留血を破り、少しく用ゐれば血を養ふ】(震亨)【血を活し、燥を潤ほし、痛を止め、腫を散じ、經を通ずる】(時珍)

發明　時珍曰く、血は心包に生じて肝に貯藏し、(八)衝任(しようにん)に屬する。紅花汁はこれと類を同うするものだから、能く男子の血脈を行らし、女子の經水を通ずるのであつて、多く用ゐれば血を行り、少く用ゐれば血を養ふものである。按ずるに、養痾(やうか)(九)慢筆(まんぴつ)に『新昌の徐氏の妻は、産運を病んで一旦死亡したが、ただ胸膈が微かに熱するので、名醫陸某が、「これは血悶といふ病だ。紅花數十斤あれば活きる」と言つて、急にそれを買ひ調へさせて大鍋で湯に煮取り、三箇の桶に盛つて窓格子(まどかうし)の下にそれを据ゑ、病婦を舁(か)き出してその上に寢せて熏じ、湯が冷えると再び湯を加へて熏じた。すると少頃して病婦は指を動かすやうになり、半日にして遂に蘇(よみがへ)つた』と記載してある。按ずるに、これはやはり唐の許胤宗が、黃芪湯で柳大后の風病を

熏じた時と同一手段を應用したものだ。

附方　舊五、新三。【六十二種の風】張仲景が六十二種の風を治し、兼ねて腹內の血氣刺痛を治した方。紅花一大兩を四分し、酒一大升で煎じて鍾(一〇)半にして頓服する。止まぬときは再服する。(圖經本草)【一切の腫疾】紅花を搗き熟して汁を取つて服す。三服を過ぎずして瘥える。(外臺祕要)【喉痺壅塞】通ぜぬには、紅藍花を搗いて絞汁一小升を取つて服し、瘥えるを度とする。冬期で生花がないときは、乾いたものを浸し濕して汁を絞り、煎じて服するが極めて效驗がある。(一一)(廣利方)【熱病が因で胎兒の死亡せるもの】紅花を酒で煮た汁二三盞を飮む。(熊氏補遺)【胎衣不下】方は上に同じ。(楊氏產乳)【產後の血運】心悶氣絕するには、紅花一兩を末にして二服に分け、酒二盞で一盞に煎じて續けざまに服す。若し口噤するときは押し開いて灌ぎ込む。或は尿を入れるが尤も妙である。(子母(一二)錄)【水の出る聤耳】紅藍花三錢半、枯礬五錢を末にし、綿杖を以て出水を拭ひ淨めて粉末を吹き込む。花がないときは枝葉を用ゐる。ある方では礬を去る。(聖惠方)【噎膈で食物を拒むもの】端午に第一回と第二回に咲いた紅花を採り、無灰酒で拌ぜて焙じ乾かし、瓜子のやうな

(一〇)鍾大觀ニ强ニ作ル。

(一一)大觀ニ海上方ニ作ル。

(一二)大觀鎮上應字アリ。

形の血竭と等分を末にし、無灰酒一盞で湯を隔て頓に熱し、（酒の燗をするが如きか）徐ろに嚥む。初服には二分、次の日には四分、三日目には五分を服す。（楊起簡便方）

子　【主治】【天行瘡痘には水で數顆を呑む】（開寶）【功力は花と同じ】（蘇頌）

【附方】　舊二、新一。【血氣刺痛】紅藍子一升を搗き碎き、無灰酒一大升を子に拌ぜて暴乾し、重ねて搗き篩ひ、蜜で梧子大の丸にして空心に四十丸を酒で服す。（張仲景方）【瘡疽の出でざるもの】紅花子、紫草茸各半兩、蟬蛻二錢半を水、酒半鍾で煎じて半減し、大小を量り加減して服す。（龐安常傷寒論）【婦人の中風】血熱煩渇するには、紅藍子五合を熬つて搗き、早朝半大匙を取つて水一升で煎じて七合を取り、渣を去つて少しづつ嚥む。（貞元廣利方）

苗　【主治】【生で擣いて遊腫に塗る】（開寶）

（一）番紅花（綱目）

和名　さふらん
學名　Crocus sativus, L.
科名　あやめ科（鳶尾科）

【釋名】　**泊夫藍**（綱目）　**撒法郎**

（一）牧野云フ、さふらんハ和蘭デハSaf-raanトイヒ英語デハSaffronト稱スル、此等ハ原トハあらびあ語カラ出タモノデアル、ソシテ此植物ハ小亞細亞が原產地てアル。木村（康）曰ク、さふらんハ其柱頭ヲ採集シ乾燥シテ用ウルモノナレドモ、高價ナルヲ以テ贋僞品少ナシトセズ、之ヲ鑑識スルニハ下ノ諸點ニ注意スルヲ要ス、さふらんハ暗赤褐色ニシテ長三糎ニ至ル小管ヲナシ、上部ニ向ヒテ漸ク擴大ス、水ニ浸シテ之ヲ開展セシムレバ其上端ニ鈍鋸齒ヲ現シ一側ニ於テ開裂ス、さふらんヲ水、アムモニヤ水、エーテル或ハ酒精ニ

〔番紅花〕

集解　時珍曰く、番紅花は(二)西番(三)回回の地、及び(四)天方國に生ずる。即ち彼の地の紅藍花である。元朝の時代には食膳の調理に入れたといふ。按ずるに、張華の博物志に『張騫が紅藍花の種を西域から齎らした』とある、このものもその一種で、或は産地の地位形勢や、氣候地味の關係から多少の異ひがあるに過ぎない。

(五)氣味　【甘し、平にして毒なし】

主治　【心憂鬱積、氣悶して散ぜぬものに血を活かす。久しく服すれば精神を愉快にする。又、驚悸を治す】(時珍)

附方　新一。【傷寒發狂】驚怖し、恍惚たるには、撒法郎二分を水一盞に一夜浸して服す。天方國の人から傳へた方である。(玉覆醫林集要)

浸セバ此液ヲ帯黄色ニ染ム、又さふらんニ二十萬倍ノ水ヲ加フルモ尚其水ニ黄色ヲ呈セシム、さふらんノ香氣ハ峻烈芳香性ニシテ味ハ苦シ、凡ソさふらんハ淡黄色ノ蕋柱ノ混有愈鮮少ナレバ愈以テ佳品トス、佛國オルレアン市ノ東北ニ於ケルガチネー郡ヨリ出ヅルさふらんハ暗褐色ヲ有シ、殆ンド蕋柱ヲ混有セズ、最佳品ニ屬ス、西班牙ノウアレンチア産さふらんハ其品位佛國産ニ讓ラズ、而シテ西班牙ノアリカント州ヨリ出ヅル者ハ其色澤淡泊ニシテ、多ク黄色ノ蕋柱ヲ夾雜シ劣品トナス、本品ヲ水ニ浸シ軟化セシメ開展スルトキハ異種ノさふらん（むらさきさふらん（Crocus vernus, All.）其他紅花、あるにか花、金盞花、菊花、肉纖維等ノ如キ稍外見ノさふらんニ類似スルモノノ夾雜ハ形狀ニヨッテ輕ク之ヲ發見スルコトヲ得、例之バむらさきさふらんハ其上端膨起スルヲ以テ眞ノさふらんト判別スルコト難カラザルベシ、又本品ニ硫酸バリユム、炭酸カルチウム、石膏等ヲ用ヰテ重量ヲ增加セシメタルモノハ、之ヲ浸積スルニ當リ白色ノ物質ヲ器底ニ沈澱スベシ、其他さふらんノ贋僞ニ夾雜スルモノハグリセリン、明礬、硼砂、糖類、穀粉、紫檀木等ハ顯微鏡下ニ之ヲ區別シ得ベク、多量ノ無機性夾雜物ハ灰分ノ量ヲ增加シ糖類ノ夾雜ハ灰分ノ量ヲ減少ス、故ニ灰分ニシテ三%以下又ハ七%以上ノモノハ多少疑ヲ容ルベキモノトス。

(生藥學一八、六・一五)二七二。)
(二)西番ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。　(三)回回ハ石部青琅玕ノ註ヲ見ヨ。　(四)天方國ハ漢書ニ所出條支國ノ地ニシテ明史ニハ『天方古筠地。一名天堂、又曰默伽。水道自忽魯謨斯四十日始至』トアリ。即チ今ノアラビヤノ地ナリ。默伽、即チ回回教ノ聖地メッカナリ。
(五)木村(康)曰ク、さふらんノ成分、さふらんノ雌蕊ハアルファクロチン、ベタクロチン、ガマクロチント云フ三種ノ色素其他ピクロクロチン(結晶性苦味質)脂肪油(六%)精油(〇・六%)等ヲ含有ス。

燕脂(綱目)　製品のべにである

【釋名】䞓赦　時珍曰く、按ずるに、伏侯の中華古今注に『燕脂の起原は殷の紂王の時代であつて、當時紅藍花の汁を凝らして作つたもので、脂で調へて女子の顏を飾つたのである。(一)燕の地方に産するところから燕脂といふ。或は䞓赦とも書く。(二)匈奴では妻なる稱を閼氏といふが、それは音が燕脂に同じく、妻の顏が燕脂のやうに愛らしいといふ意味だ』とある。俗に臙肢、胭支と書くはいづれも謬だ。

【集解】時珍曰く、燕脂に四種ある。一種は、紅藍花の汁で胡粉を染めて製するもので、蘇鶚の演義に所謂『燕脂は、葉が薊に、花は蒲に似たもので、西方に產する。中國ではこれを紅藍といひ、粉を染めて婦人の化粧料にする』とあるがそれである。一種は、山燕脂花の汁で粉を染めて作るものだ。段公路の北戶錄に所謂

(一)燕トハ今ノ河北省、及ビ遼東ノ地ヲ指ス。
(二)匈奴トハ今ノ蒙古地方ヲ指ス。

(三)端州ハ隋ニ置キ宋ニ廢ス。今ノ廣東省高要縣ノ地ナリ。

(四)含苞ハツボミ。

(五)[illegible]ニ據ル。

『(三)端州の山間のある花は、叢生の草で葉は藍に類し、正月蓼に似た花を開く。その地の住民は、その(四)含苞のものを採つて燕脂粉を作る。また紅藍のやうに染料にもなるものだ』とあるがそれである。一種は、山榴花の汁で作るものだ。鄭虔胡本草中に載錄しある。一種は、紫鉚で綿を染めて作るものだ。これは胡燕脂といふ。李珣の南海藥譜に記載してあつて、現に南方の地では多く紫鉚燕脂を用ゐてゐる。俗に紫梗と呼ぶものがそれだ。概して皆血病の藥に入れるものだ。又、落葵子から取つた汁も粉に和して顏に塗り、やはり胡燕脂と稱されてゐるが、それは菜部に掲げてある。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【小兒の聤耳には浸した汁を滴らす】(開寶)【血を活かし、痘毒を解す】(時珍)

【附方】新五。【乳頭裂破】燕脂、蛤粉を末にして傅ける。(危氏得效方)【小兒の鵞口】白く厚く、紙を貼つたやうになるものには、坏子燕脂を乳汁で調へて塗る。一夜で效があるものだ。男兒の鵞口には、女兒を產んだ婦人の乳を、女兒の鵞口には、男兒を產んだ婦人の乳を用ゐる。(集簡方)【漏瘡腫痛】豬膽七箇、綿燕脂十(五)箇

を水で洗ひ、和して七回搽ればよし（救急方）【目に入らんとする痘の豫防法】臙脂を嚼んで汁を點ける（集簡方）【痘瘡の倒陷】乾臙脂三錢、胡桃を燒いて性を存して一箇を研末し、一錢づつ胡荾を煎じた酒で服し、再服して效を取る（救急方）

（一）大薊小薊　（別錄中品）

大薊　和名　未詳
　　　學名　Cirsium sp.
　　　科名　きく科（菊科）

小薊　和名　のあざみ
　　　學名　Circium Maackii Maxim.
　　　科名　きく科（菊科）

【釋名】　虎薊（弘景）　馬薊（范汪）　貓薊（弘景）　刺薊（日華）　山牛蒡（日華）　雞項草（圖經）　千針草（圖經）　野紅花（綱目）

弘景曰く、大薊は虎薊、小薊は貓薊であつて、葉にはいづれも刺が多い。相似たものだ。田野に甚だ多い。方藥に用ゐることは稀だ。

時珍曰く、薊は髻（ケイ）と同樣な意味であつて、その花が髻のやうな形狀だといふことである。虎といひ、貓といふは、その苗の形狀が恐ろしい獰猛なことの形容である。馬とは大なる物の稱だ。牛蒡とは、その根が牛蒡の根に似てゐるからだ。

（一）牧野云フ、大薊ハあざみノ一種ニハ相違ナイガ其的品ハ何ンデアルカ能ク判ラヌ、何カ我ガやまあざみ（Cirsium spicatum, Matsum.）ニ似タモノナランガ其種名ハ今不明デアル、C. pendulum, Fisch. 即チたかあざみニ大薊ノ名アレド此書ノ大薊デハナイ。小薊ハ我ガのあざみト同ジモノト斷ズル、"C. chinense", Gardn. et Champ. 即チからあざみニ小薊ノ名アレド此品ハ我ガやなぎあざみニ

雞項とは、その莖が雞の項に似てゐるからだ。千針とか、紅花とかいふは、いづれもその花の形容である。鄭樵の通志に『爾雅に「蘻は狗毒なり」とある。その蘻が即ち薊だ』とあるが、果して然りや否や判らない。

〔大薊〕

藏器曰く。(三)薊門なる地名は薊の多いところから名稱となつたもので、北方の產が勝れてゐるわけであらう。

集解　別錄に曰く、大、小薊は五月採收する。

恭曰く、大、小薊は、葉は似てゐるが功力に特異點がある。大薊は山谷に生じ、根は癰腫を療ずる。小薊は平澤に生じ、腫を消する力がない。しかしいづれもよく血を破るものだ。

頌曰く、小薊は處處にあるもので、俗に靑刺薊といふ。三月苗が生え、二三寸の

似タモノデ此書ノ大薊、小薊ニハ關係ハナイ、又植物名實圖考ニ小薊トシテ圖スルモノハひれあざみ(Carduus crispus, L.)デコレハ小薊ノ正品デハナイト斷ズル。

(三)薊門ハ今ノ北京德勝門ノ西北ニ在リ。土城門トモイフ。

時に根と共に採つて菜にして食ふと甚だ美味なものだ。四月には高さ一尺餘になつて刺が多く、その中心から花が出る。その花は頭端が紅藍花のやうで青紫色だ。北國地方ではこれを千針草と呼び、四月に苗を採り、九月に根を採り、いづれも陰乾して用ゐる。大薊は、苗も根もこれと似てゐるが、ただ肥大なだけである。

〔小薊〕

宗奭曰く、大、小薊はいづれも似たもので、花は髻のやうだ。ただ大薊は高さ三四尺で葉が皺み、小薊は高さ一尺ばかりで葉が皺まぬだけの相異である。菜にして食ふ。微芒があるが人體に害はない。

大薊根　葉も同じ。［氣味］【甘し、溫にして毒なし】弘景曰く、毒あり。權曰く、苦し、平なり。大明曰く、葉は涼なり。

［主治］【婦人の(三)赤白沃。胎を安じ、吐血、鼻衄を止め、人體を肥健ならしめ

(三)赤白沃ハ赤白帶下ニ同ジ。

る】(別錄)【根を擣き汁を絞つて半升を服すれば、崩中下血に主效があつて立ろに瘥る】(甄權)【葉は腸癰を治す。腹臟の瘀血、(四)血運、撲損には、酒、又は尿いづれにても任意のもので研つて服す。又、惡瘡、疥癬には、鹽と共に研つて罨ふ】(大明)

小薊根　苗も同じ。

氣味　【甘し、溫にして毒なし】大明曰く、涼なり。

主治　【精を養ひ、血を保つ】(別錄)【宿血を破り、新血を生ずる。暴下血、血崩、金瘡出血、嘔血等には、絞汁を取つて溫服する。煎にし、糖に和して用ゐれば金瘡を合す。また蜘蛛、蛇、蠍の毒にこれを服するも佳し】(藏器)【熱毒風、并に胸膈の煩悶を治し、胃を開き、食物を落付け、熱を退け、虛損を補ふ】○【苗は煩熱を去る。生で研つた汁を服す】(いづれも大明)【菜にして食へば、風熱を除く。夏季に熱煩して止まぬには、擣汁半升を服すれば立ろに瘥える】(孟詵)

發明　大明曰く、小薊は力が微弱だ。ただ熱を退け得るだけのもので、大薊の下氣を健養する力のやうなわけに行かない。

恭曰く、大、小薊はいづれもよく血を破る。ただ大薊は兼ねて癰腫を療ずるが、小薊の主效は血に專らで、腫を消する力はない。

(四) 作運トアレドモ大觀ニ血運ニ作ルニ從フ。

附　方　舊五、新九。【心熱吐血】口の乾くには、刺薊の葉、及び根を搗いて汁を絞り、二小盞づつ頓服する。（聖惠方）【舌硬出血】止まらぬには、刺薊の搗汁を酒に和して服す。乾いたものは末にして冷水で服す。（普濟方）【九竅の出血】方は上に同じ。（簡要濟衆）【突然鮮血を瀉するもの】小薊葉の搗汁一升を溫服する。（梅師方）【崩中下血】大、小薊根一升を酒一斗に五晝夜漬けて任意に飮む。また酒で煎じて服するもよし。或は生の搗汁を溫服する。○またある方では、小薊の莖、葉を洗つて切り、その研汁一盞に生地黃汁一盞、白朮半兩を入れ、半減するまで煎じて溫服する。（千金方）【墮胎下血】小薊の根、葉、益母草各五兩、水三大盌を一盌に煮取り、その汁を再び一盞に煎じ、全部を一日二回に分服する。（聖濟總錄）【金瘡出血】止らぬには、小薊の苗を擣き爛らして塗る。（孟詵食療本草）【小便熱淋】馬薊根の搗汁を服す。（聖惠方）【鼻塞不通】小薊一把、水二升を一升に煮て分服する。（外臺祕要方）【小兒の浸淫瘡】痛み忍び難く、寒熱を發するには、刺薊葉を新水で調へて瘡上に傅け、乾けば換へる。（簡要濟衆方）【癬瘡の痒きもの】刺薊葉の搗汁を服す。（千金方）【婦人の陰痒】小薊を煮た湯で日毎に三回洗ふ。（廣濟方）【諸瘻の合せぬもの】虎薊根、貓薊根、酸

藁根、枳根、杜衡各一把、斑蝥三分を炒つて末にし、蜜で棗大の丸にして日毎に一箇を服し、幷に小さき丸を作つて瘡中に入れる。(肘後方)【丁瘡惡腫】千針草四兩、乳香一兩、明礬五錢を末にし、酒で二錢を服す。汗の出るを度とする。(普濟方)

(一)續　斷　(本經上品)

和名　たうなべな(新稱)
學名　Dipsacus asper, Wall.
科名　まつむしさう科(山蘿蔔科)

【釋名】屬折(本經)　接骨(別錄)　龍豆(別錄)　南草　時珍曰く、續斷、屬折、接骨なる名稱は、いづれもその功力を表示したものだ。

【集解】別錄に曰く、續斷は(二)常山の山谷に生ずる。七月、八月に採つて陰乾する。普曰く、(三)梁州に産する。七月七日に採る。

弘景曰く、按ずるに、桐君藥錄に『續斷は生じて蔓延し、莖は細く、葉は荏の大さのほどで、根は本が黃白色で汁がある。七月、八月に根を採る』とある。今は皆莖、葉を用ゐてゐる。節毎に斷ち、皮に黃皺があり、鷄の脚のやうなものをば、今時の人はまた桑上寄生とも呼ぶ。又、接骨樹なるものがあつて、高さ一丈餘ほど、葉

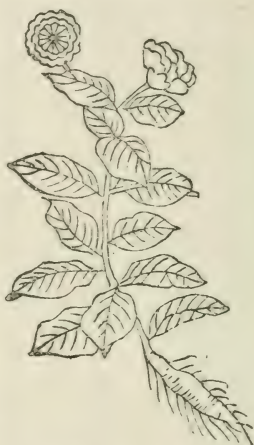
(一)牧野云フ・續斷ニ三種ガアル、一ハなべな(D. japonica, Miq.)デアル、二ハD. chinensis, Batal.デアル、三ハ即チ本條デアル、然シ本條ノモノ或ハ二ノモノカモ知レヌガ、此處ニハ先ヅ下ニ記シタ學名ノモノト定メテ置ク、集解ヲ讀ンデモ續斷ニハ數品アルヤウデアル、我邦ノ學者從來之レヲ脣形科ノおどりこさう(Lamium album, L.)ニ充テシハ穩カデナイ。又おにのげし(Sonchus asper, Vill.)トスルモ中ツテキナイ。

が蒴藋に似たもので、その皮は金瘡に主效がある。廣州にはまた續斷藤、一名〔四〕諸藤といふがあつて、莖を斷つてその切口から滴る汁を器に承けて飲めば、虛損、絕傷を療じ、それで頭髮を洗へば髮を長くする。枝を折つて地に挿めば根が生えるといふ。恐らくいづれも眞物ではない。李當之は『これは虎薊のことだ』といふが、虎薊と續斷とは大いに異ふ。ただ虎薊もやはり血を療ずるものではある。

恭曰く、所在の山谷いづれにもある。今俗間で用ゐるものは、葉は苧に似て莖は四角、根は大薊のやうで黃白色だ。陶氏の說は非ふ。

頌曰く、今は〔五〕陝西、河中、興元、舒、越、晉、絳の諸州にもある。三月以後に苗が生え、幹に四稜があり、苧麻に似て〔六〕葉は兩兩相對して生え、四月に益母の花に似た紅白色の花を開く、根は大薊のやうで赤黃色だ。謹んで按ずるに、范汪の方に『續斷とは馬薊のことだ。小薊葉と似てゐるが、ただ小薊よりも大きいだけで、葉は旁翁〔七〕菜に似て小さく厚く、兩邊に刺があつて人を刺す。花は紫色だ』とある。現に越州から提出した圖に描いてあるものが相類する。藥肆の商品にもやはり數種あり、粗惡品と精良品との判別がなかなか六か敷いので、一般の醫師は節每に斷れ、

（二）常山ハ石部凝水石ノ註ヲ見ヨ。
（三）梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。
（四）大觀ニ諸ヲ諾ニ作ル。
（五）陝西ハ宋ノ陝西路、石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。河中府ハ石部石中黃子ノ註ヲ、興元府ハ石部石膏ノ註ヲ、大觀ニ興元ノ下ニ府字アリ。舒州ハ山草類萎蕤ノ註ヲ、越州ハ石部蛇黃ノ註ヲ、晉州ハ石部礬石ノ註ヲ、絳州ハ石部玄精石ノ註ヲ見ヨ。
（六）大觀ニ葉字下亦相似ノ三字アリ。
（七）菜字本草發揮ニ據ル。

皮に黄皺あるものを眞の續斷としてゐる。
斅曰く、凡そこれを用ゐるに、草茅根を用ゐてはならぬ。眞によく似てゐるが、ために誤つて服すれば身體の筋を軟かにするものだ。
時珍曰く、續斷に關する說は一定しない。桐君は『蔓生で葉が荏に似てゐる』といひ、李當之、范汪は共に『虎薊のことだ』といひ、日華子は『大薊、一名山牛蒡のことだ』といひ、蘇恭、蘇頌はいづれも『葉は苧麻に、根は大薊に似てゐる』といふ。ところが別錄には復た、大、小薊なる獨立の一條を掲げてあるのであつて、いづれも正確な憑據とすることは頗る困難だ。但し漢時代以來、久しい間大薊を續斷と言ひ傳ひて來たのである。けれどもその實物に就いて推究するに、兩蘇氏の言ふ所と桐君の說とは大體合致してゐるやうだ。正しいものと見てよからう。今一般に用ゐられてゐるものは(八)州中から來る

〔續斷〕

(八) 金陵本亦州ニ作ル、然ドモ州ハ川ノ誤ナルコト必セリ。川中トハ今ノ四川省ノ地ヲ指ス。

もので、色赤くして瘦せ、折れば烟塵の發するものを良しとしてある。鄭樵の通志に『范汪の所說のものは南續斷だ』とあるが、何を根據にしたものか判らない。蓋し川續斷に對して區別したものだらう。

根【修治】斅曰く、凡そ採取したならば、根を横に切つて剉み、又、內部に向つてゐる硬筋を取り去り、一伏時の間酒に浸し、焙乾して藥用に入れる。

【氣味】【苦し、微溫にして毒なし】別錄に曰く、辛し。普曰く、神農、雷公、黄帝、李當之は苦し、毒なしといひ、扁鵲は辛し、毒なしといふ。之才曰く、地黄が使となる。雷丸を惡む。

【主治】【傷寒に不足を補ふ。金瘡、癰瘍、折跌に筋骨を續ぐ。婦人の乳難。久しく服すれば氣力を益す】(本經)【婦人の崩中漏血、金瘡血の內漏。痛を止め、膿肉を生ずる。及び(九)踠傷惡血、腰痛、關節の緩急】(別錄)【諸種の溫毒を去り、血脈を通宣する】(甄權)【氣を助け、五勞、七傷を補し、癥結、瘀血を破り、腫毒、腸風、痔瘻、乳癰、瘰癧、婦人產前後の一切の病、胎漏、子宮冷、面黄、虛腫を消し、小便を縮め、泄精、尿血を止める】(大明)

(九) 踠傷ハ捼壓。

（一〇）劍州ハ金部金、鉛ノ註ヲ見ヨ。

（一一）大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

（一二）大觀ニ服ノ下ニ溫服ノ二字アリ。

（一三）大觀ニ二三里トアリ。一里ハ吾ガ六丁ナリ。

【發明】時珍曰く、宋の張叔潛秘書が（一〇）劍州の長官を奉職中、部下に血痢の患者があつて、ある醫師が平胃散一兩に川續斷末二錢半を入れ、二錢づつを水で煎じて服ませると癒えた。その後紹興壬子の歳、會稽地方に痢疾が流行した際、叔潛の子がその方を傳ひてゐて試みたが、往往にして效驗があつたといふ。小兒の下痢にもこれを服するが有效だ。

【附方】舊二、新二。【小便淋瀝】生續斷を搗き汁を絞つて服す。卽ち馬薊根である。（一一）（初虞世古今錄驗）【妊娠胎動】兩三月では墮胎するものだ。豫めこれを服するがよし。川續斷を酒に浸し、杜仲を薑汁で炒つて絲を去り、各二兩を末にし、棗肉を煮爛したものと杵き和して梧子大の丸にし、三十丸づつを米飮で服す。【產後の諸疾】血運、心悶、煩熱し、厭厭として氣息絕せんとし、心頭が硬く、忽ち寒し忽ち熱するには、續斷皮一握、水三升を二升に煎じ、三（一二）服に分けて、人が（一三）一里步行する程の時間を隔てて再服する。この藥は產後垂死の危篤を救ふものだ。（子母祕錄）【打撲傷損】閃肭骨接には、節骨草の草を搗爛らして罨ふ。立ろに效がある。（衞生易簡方）

(一)苦芺　音は襖(アウ)である。(別錄下品)

和名未詳
學名未詳
科名きく科(菊科)

釋名　**鉤芺**(爾雅)　**苦板**　時珍曰く、凡そ物の穉いものを芺といふ。この物は嫩葉のうちに食し得るのでかく名けたのだ。

集解　弘景曰く、苦芺は處處にある。(二)傖人は莖を取つて生で食ふ。

保昇曰く、所在の下濕の地にある。莖は圓くして刺がなく、生で食し得るもので、子は貓薊のやうだ。五月五日に苗を採つて暴乾する。

恭曰く、今一般に、これを漏蘆といふは誤だ。

時珍曰く、爾雅に鉤芺とあるはこの苦芺のことで『芺は、大さ拇指ほどで中が空になり、莖の端に薊に似た薹がある。生えたばかりのものは食し得る』とある。許愼の說文には『江南地方では、これを食つて氣を下す』とある。現に(三)浙東地方では、淸明節にその嫩苗を採つて食ひ、一个年間瘡疥が生ぜぬといつてゐる。また搗汁を(四)米に和して食品とするが、色淸く、久しきに亙つて腐敗しない。造化指南に

(一)牧野云フ、苦芺ヲ以テあざみ屬中ノCirsium chinense. Zardn. et Champ. 卽チからあざみニ充テシ人アレドモ此處ノ苦芺デハナク同名異物ト思フ、又我邦ニテ之レヲひめあざみニ充テヰレド中ラヌ、ソシテ其眞物ハ今能ク判ラヌ。

(二)字彙ニ曰ク、晋陽秋ニ曰ク、吳人中州人ヲ謂テ傖ト爲スト。傖トハ賤稱ナリ。弘景ハ南朝梁ノ人、故ニ長江以北、北朝領域ノ人民ヲ指シテ傖ト稱シタルナリ。

(三)浙東トハ浙江ノ東部ヲイフ。

(四)食物本草ニ米粉ヲ和シテ餠餌トス、其色青翠トアリ。

は『苦板は、大なるものを苦藉(くせき)と名ける。葉は地黄のやうで味が苦い。芽生えた當時は白毛があり、夏に入つて毛のある莖が抽出で、白くして甚だ繁つた花を開き、細い實を結ぶ。花、實のないものは地膽草と名けるもので、汁は膽のやうに苦い。處處の濕地にある。(五)爐火(ろくわ)家が用ゐる材料だ』とある。

〔苦芙〕

苗　氣味　【苦し、微寒にして毒なし】　主治　【顏面、全身の漆瘡(しつさう)には、灰に燒いて傅ける。また生で食ふもよし】(別錄)【燒灰は金瘡を療ずるに(六)極めて效驗がある】(弘景)【丹毒を治す】(大明)【煎じた湯で痔を洗へば甚だ效驗がある】(汪頴)【氣を下し、熱を解す】(時珍)

(一)漏盧　(本經上品)

和名　ひごたい、又、るりひごたい
學名　Echinops dahuricus, Fisch.
科名　きく科(菊科)

(五)爐火家ハ丹石家ノコト、仙術ヲ脩ムル人。
(六)極、大觀ニ甚ニ作ル。
(一)牧野云フ、單州漏盧ヲ正品ト見テ下ノ學名ヲ之レニ加ヘタ、此種ハ北ハ西比

利亞ヨリ支那ヲ經テ南ハ我日本ニマデ分布シ我邦ニテハ九州ニ之レヲ見ル、葉ノ裏面白ク乾ケバ葉面黒クナル。

(二)喬山、弘景ハ上郡ニ在リトイフ。

(三)上郡ハ廿草、淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。

(四)大觀ニ及ヲ今ニ作ル。

(五)胡麻ノ集解ニ弘景曰ク、細麻ハ即胡麻ナリトアリ。

【釋名】 野蘭（本經） 莢蒿（蘇恭） 鬼油麻（日華） 時珍曰く、屋根の西北の黒い處を漏といひ、凡そ物の黒色なるを盧といふ。この草は秋後に黒くなるところが他の多くの草と異つてゐるので、漏盧なる名稱が付せられたのだ。唐韻には蘆と書いてある。莢が麻のやうなところから、俗に鬼油麻と呼ぶ。

【集解】 別錄に曰く、漏盧は(二)喬山の山谷に生ずる。八月根を採つて陰乾する。弘景曰く、喬山とは黃帝を葬つた處を指すものと思ふ。それならば(三)上郡に在る山だ。(四)及び近道からも出る。商人は苗を取つて用ゐ、俗間では根を取つて鹿驪根と名け、苦酒に摩つて瘡疥の治療に用ゐる。

〔單州漏盧〕

恭曰く、この藥は俗に莢蒿と名ける。莖、葉は白蒿に似たもので、花は黃色で(五)細麻の莢に似て太さ箸ほどの長い莢を生ずる四五瓣の花だ。七八月以後には皆黒くなるところが他の多くの草と異る點

(六)山南ハ唐ノ十道ノ一、山南道ヲイフ。今ノ湖北省大江以北漢水以西、陝西省終南山以南、河南省北嶺以南、四州省劍閣以東、大江以南ノ地ニシテ、荊、襄、鄧、唐、隨、郢、復、均、房、峽、歸、夔、萬、忠、梁、洋、金、商、鳳、興、利、閬、開、果、合、渝、涪、渠、蓬、壁、巴、通、集ノ三十三ヲ統ブ。

(七)関山曰、今按今人以下十五字大觀本無之此乃論飛廉之漏蘆者而非此漏盧也引在此者恐非。

(八)江寧府ハ芳草類當歸ノ註ヲ見ヨ。

(九)上黨ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

で、蒿類の草である。通常はその莖、葉、及び子を用ゐる。根を用ゐた事實はまだ見ない。鹿驪と稱するその物は、(六)山南で謂ふ木黎蘆のことだ。有毒のもので、漏盧ではない。(七)今は一般に苦芺に似た馬薊を漏盧といつてゐるが、これも誤りだ。

志曰く、別本に『漏盧は莖の太さ箸ほど、高さ四五尺、子の房は油麻の房に似て小さい』とある。江東地方ではその苗を取つて用ゐるが、功力は根に勝る。(八)江寧、及び(九)上黨のものが佳い。陶氏は『鹿驪だ』といひ、蘇氏は『木藜盧だ』といふが、皆違ふ。漏盧は自ら別種のものだ。

〔沂州漏盧〕

藏器曰く、南方では一般に苗を用ゐ、北方諸地では根を用ゐる。これは茱萸の樹のやうに樹になつて生え、高さ二三尺ある。有毒のもので、蠱を殺す。山間の住民は瘡疥を洗ふに用ゐる。

保昇曰く、葉が角蒿に似たものだ。現に(一〇)曹州、(一一)兗州の下濕の處に最も多い。六月、七月に莖を採つて日光で乾す。他の草に比して黑いものだ。

大明曰く、花も苗も用ゐ得る。形態、竝に氣味は乾牛蒡に似たもので、莖の頭端に白花子を著ける。

頌曰く、今は(一二)汴東の州郡、及び(一三)秦、(一四)海州いづれにもある。舊說に、莖、葉は白蒿に似たもので、(一五)花は黃白で(一六)莢端に生じ、莖の太さは箸ほど、房は油麻に類して小さいとしてあるが、現に諸州から集つた實寫圖を見るに、(一七)單州のものだけがやや類似してゐるが、(一八)沂州のものは花、葉が頗る牡丹に似てゐる。秦州のものは、花が單葉の寒菊に似た紫色で、五六箇が同一幹に生えてゐる。海州のものは、花が紫碧色で單葉の蓮花のやう、花蕚の下、及び根の旁を白茸が裹む。根は蔓靑の

〔秦州漏盧〕

(一〇)曹州ハ春秋ノ曹國ノ地ニシテ後魏ニ西兗州トナシ、北齊ニ曹州ニ改ム。今ノ山東省曹州府ソノ地ナリ。
(一一)兗州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。
(一二)汴東ハ山草類赤箭天麻ノ註ヲ見ヨ。
(一三)秦州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。
(一四)海州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。
(一五)大觀ニ花字上有莢ノ二字アリ。
(一六)白莢端ニ生ズハ大觀ニ從フ。
(一七)單州ハ秦ノ單父縣ノ地ニシテ、後唐ニ單州トナス。今ノ山東省單縣ノ地ナリ。
(一八)沂州ハ石部馬腦ノ註ヲ見ヨ。

（一九）大觀ニハ黒乾ノ間ニ中有黒脈日ノ五字アリ。

やうで細く、また葱に類して本が黒い。淮地方の田舍では老翁花と呼ぶ。この三州の產は、花は別だけれども葉は頗る相類し、秦、海州のものだけは葉が更に鉅齒狀をなしてゐる。一物にしてかやうに甚しい異同があるのだから、醫家は何れを用ゐてよいか適從するところが無いわけだが、やはり舊說に依つて、單州から出るものを比較的安全なりとする外はあるまい。又、本草に『飛廉、一名漏盧。苦芺と相類し、根は生では肉が白く皮が（一九）黒く、乾けば黒くなつて玄參のやうだ。七八月に花を採つて陰乾して用ゐる』とあつて、この所說は、秦州、海州から提出した圖の漏盧と、花、葉、及び根が頗る相近い。けれども彼の地では漏盧といふだけで、一名飛廉とはいはない。

〔海州漏盧〕

○斆曰く、眞に漏盧に似た一種の草があるが、その草は味苦く酸く、誤つて服すれば吐して止まぬ。

時珍曰く、按ずるに、沈存中の筆談に『現に方家で用ゐる漏盧は飛廉のことだ。飛廉は一名漏盧といひ、苗は苦芙に似て根が牛蒡のやう、綿頭のものがそれである。採つて根を用ゐる』とある。現に(二〇)閩中で漏盧といつてゐるものは、莖が油麻のやうで高さ六七尺、秋深く枯れて漆のやうに黑くなる。用ゐるには苗を採る。これが眞の漏盧だ。その他は飛廉の條に記載する。

根　苗　**修治**　斅曰く、凡そ漏盧を採つたならば、細かに剉んで生甘草と相對して拌ぜ、午前十時から午後四時まで蒸し、漏盧だけを揀り出して晒し乾して用ゐる。

氣味　【(二一)鹹し、寒にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。藏器曰く、毒あり。杲曰く、毒なし。足の陽明本經の藥である。(二二)之才曰く、連翹が使となる。

主治　【皮膚の熱(二三)毒。惡瘡、疽痔、濕痺。乳汁を下す。久しく服すれば、身を輕くし、氣を益し、耳目を聰明にし、老衰せず、天年を延べる】(本經)【遺尿を止める。熱氣瘡痒の麻豆の如くなるものには、湯にして浴するがよし】(別錄)【小腸を通ずる。泄精、尿血、腸風、風赤眼、小兒の壯熱。撲損に筋骨を續ぐ。乳癰、瘰

(二〇)閩中ハ今ノ福建省ノ地ナリ。
(二一)大觀ニ苦ニ作ル。
(二二)大觀ニ大明ニ作ル。
(二三)毒字大觀ニナシ

癧。金瘡には血を止め、膿を排し、血を補ひ、肉を長じ、經脈を通ずる】(大明)

【發明】弘景曰く、この藥は、久しく服すれば甚だ人體に益あるものだが、服食方に用ゐられることは稀である。近道に産するものは、ただ瘻疥を療するのみだ。商人は皆苗を取つて商品とする。

時珍曰く、漏盧は、乳汁を下し、熱毒を消し、膿を排し、血を止め、肌を生じ、蟲を殺すものである。故に東垣は、これを手、足の陽明の藥とした。然るに古方では、癰疽發背を治するに漏盧湯を以て首たる藥と稱された。龐安常の傷寒論には、癰疽の治療、及び時行痘疹熱の豫防に漏盧葉を用ゐて『この物がないときは山梔子を以て代用する』といつてあるが、これはやはりその性寒にしてよく熱を解する點を取つたもので、蓋し、漏盧が能く陽明に入るものだと云ふことは解らなかつたのだ。

【附方】舊二、新六。【腹中の蚘蟲】漏盧末方寸匕を餠臛に和して服す。(外臺祕要)

【小兒の(二四)無辜】疳病で肚脹し、或は時に泄痢し、冷熱不調なるには、漏盧一兩を杵いて散にし、一錢づつを豬肝一兩に鹽少量を入れたものと共に(二五)煮熟し、空心に一時に食ふ。(聖惠方)【冷勞泄痢】漏盧一兩、艾葉を炒つて四兩を末にし、米醋三

(二四)無辜ハ疳病。
(二五)大觀ニ煮上ニ以水ノ二字アリ。

升にその藥末の一半を入れて共に熬膏し、それに殘りの末を和して梧子大の丸にし、三十丸づつを溫水で服す。(聖濟總錄)【產後の帶下】方は上に同じ。【乳汁不下】乃ち氣脈の壅塞に因るものだ。又、經絡の凝帶、乳內の脹痛、不純物の蓄積で成つた癰を治するには、左の藥を服すれば自然に內消する。漏盧二兩半、(二六)蛇退十條を炙き焦し、瓜蔞十箇を燒いて性を存し、末にして二錢づつを溫酒で調へて服し、良久して熱羹湯を飲む。通ずるを度とする。(和劑方)【歷節風痛】筋脈の拘攣するには、古聖散——漏盧を麩で炒つて半兩、地龍を土を去つて炒つて半兩を末にし、生薑二兩から取つた汁に蜜三兩を入れて共に煎じ、三五沸して好酒五合に入れ、その汁三盃で先の末藥一錢を調へて溫服する。(聖濟總錄)【一切の癰疽】發背疽の初發二日、ただ熱證だけのものには、漏盧湯を服するがよい。毒を退け、膿を下す。乃ち宣熱拔毒の藥劑だ。熱が退けば服用を止める。白茸のある漏盧、連翹、生黃芪、沈香各一兩、生粉草半兩、大黃を微し炒つて一兩を細末にし、二錢づつを姜棗湯で調へて飲下す。(李迅癰疽集驗方)【白禿頭瘡】五月に採つた漏盧草の燒灰を豬膏に和して塗る。(聖濟總錄)

(二六)蛇退ハ蛇ノヌケガラ。

（一）飛廉（本經上品）

和名　無し
學名　Saussurea sp. (?)
科名　きく科（菊科）

釋名　漏盧（別錄）　木禾（別錄）　飛雉（同上）　飛輕（同）　伏兎（同）　伏豬（同）　天薺（同）　時珍曰く、飛廉とは神禽の名であつて、その鳥の形狀は、身が鹿で豹の文があり、頭が雀、尾が蛇で角があり、よく風氣を左右するものだといふ。この草は、莖に箭羽のやうな皮が浮き立つてゐて、やはり風邪を療ずるものだ。それで飛廉、飛雉、飛輕など諸種の名稱を呼ばれるのだ。

集解　別錄に曰く、飛廉は河内の川澤に生ずる。正月根を採り、七月、八月花を採つて陰乾する。弘景曰く、處處にある。苦芺に似て ただ葉に切れ込みが多く、葉の下方が莖に附著し、輕く皮が浮き上つて箭羽のやうに見え、花は紫色のものだ。一般醫方には殆ど用ゐないが、道家では、枝、莖を服して長生を得るものとし、又、神枕の方に入れる。今は別に漏盧なる植物が既にある以上、これを漏盧と呼ぶは一の別名に過ぎない。

（一）牧野云フ、植物名實圖考ニ圖ガアルガ、ソレハ決シテひれあざみ（Carduus crispus, L.）デハナク、或ル一ノ宿根生ノ薊樣植物デアルガ、私ハ Saussurea 屬ノ一種デハナイカト想像スル。ソシテ我日本ニハ無論此草ハナイ。我邦從來ノ學者ハ飛廉ヲひれあざみニ充テヰルガひれあざみハ一年生ノ草本デ集解ニアル樣ニ正月ニ根ヲ採リ得ルモノデハナイ。故ニ私ハ之レヲ否定スル。ソシテ植物名實圖考卷ノ十一ノ小薊ノ圖ガ即チひれあざみデアルガ、然カシ之レヲ小薊ニ充テテアルノハ正確ヲ缺イテヰル。

恭曰く、この物に兩種ある。一種は平澤中に生ずるもので、陶氏所說のそのものだ。一種は山岡上に生ずるもので、葉は頗る似てゐるが、切れ込みがなくて毛が多く、莖は赤くして羽が無い。根は直下に伸びて更に旁根が生えず、肉は白く皮が黑く、中に黑脈があり、乾けば玄參のやうに黑くなる。莖、葉、及び根を用ゐて疳蝕を療じ、蟲を殺すに有效だ。平澤に生ずるものと同樣の效驗がある。今は一般に、苦芙に似た馬薊を漏盧といつてゐるが、いづれも眞物でない。

保昇曰く、葉は苦芙に、莖は軟羽に似て、花は紫色、子に白い毛がある。所在の平澤に皆あるもので、五月、六月に採つて日光で乾す。

斅曰く、凡そこれを用ゐる場合に赤脂蔓を用ゐてはならぬ。赤脂蔓は飛廉の形狀と似てゐるが、ただ赤脂蔓は酒に遇へば色が血のやうになる。それで明に識別が付く。

頌曰く、現に秦州から提出した圖の漏盧は、花が單葉の寒菊に似て色が紫だ。五七枝が同一幹から出てゐる。海州の圖の漏盧は、花が紫碧色で單葉の蓮花のやうに見え、花蕚の下、及び根の旁を白茸が裹んでゐて、根の色は黑く、蔓菁のやうで細

い。又、葱本に類似してゐる。陶氏、蘇氏所説の飛廉と近いが、しかし彼の産地ではただ漏盧とのみ呼んでゐる。當今の醫家も稀に飛廉を使ふといふことだが、果して正確なものとは思はれない。

時珍曰く、飛廉はやはり蒿類の植物だ。蘇頌の圖經では、海州提出の圖の漏盧が飛廉であらうと疑問の中に入れてある。沈存中の筆談にも、やはり『飛廉の根は牛蒡のやうで綿頭だ』とある。古方の漏盧散の説明には『白茸あるものを用ゐる』とある。して見ると、この白茸あるものが乃ち飛廉なることに疑ない。今有の二物に就て檢討するに、氣味、功用倶に相遠くない。通用して差閊はないものと見える。或は一類に數種あるもので、古と今の稱呼と産地とに依つてそれぞれの異を生じたものではあるまいかと思ふ。

〔飛　廉〕

根及び花　修治　斅曰く、凡そ根を用ゐるには、先づ粗皮を刮り去つて細か

に杵き、一夜苦酒に拌ぜて置いて漉出し、日光で乾かして細かに杵いて用ゐる。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】權曰く、苦く鹹し、毒あり。之才曰く、烏頭と配合するが良し。麻黃を忌む。

【主治】【骨節の熱で脛が重く酸疼するもの。久しく服すれば身體を輕くする】(本經)【頭眩、頂重、皮間の邪風で蜂螫の針で刺されたやうに覺え、魚子が細かに吹き出たやうな熱瘡、癰疽、痔、濕痺。風邪欬嗽を止め、乳汁を下す。久しく服すれば、氣を益し、目を明にし、老衰せぬ。煮てもよし、乾いたものを用ゐてもよし】(別錄)【留血に主效があり、疳蝕を療じ、蟲を殺す】(蘇恭)【小兒の疳痢には、散にして(二)漿水で服すれば大效がある】(蕭炳)【頭風旋運を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、葛洪抱朴子の書に『飛廉を單服すれば、身體を輕くし、天年を延べる』とあり、又『飛廉煎を服すれば、遠距離の道を疾行し得て力が通常の數倍になる』とある。本經や別錄に列記したところもやはり良藥としてあるのだが、後世では何故かこれを用ゐることを知らない。

【附方】舊一。【疳䘌蝕口】及び下部の疳䘌には、飛廉蒿を灰に燒いて搗き篩

(二)漿水、大觀ニヨル。

ひ、二錢ヒを患部へ著ける。痛んでも忍ぶがよし。若し痛まぬものならば痔ではないのだ。馬尾の太さほどの下部の蟲が、相纒はつて無數に出るものである。十日で蝕瘡は瘥え、二十日で平常の健康に復する。（千金翼方）

(一)苧麻（別錄下品）

和名　からむし、又、まを
學名　Boehmeria nivea, Hook. et Arn.
科名　いらくさ科（蕁麻科）

【釋名】　時珍曰く、苧麻は紵とも書く。績紵（うみを）にするものだから紵といふのだ。凡そ麻絲は、細いものを絟といひ、粗きものを紵といふ。

陶弘景曰く、苧とは今の績苧麻のことだ。麻の字は广に從ひ𣏟に從ふ。𣏟は派と發音する。屋下の𣏟麻を形容したものだ。广は掩と發音する。

【集解】　頌曰く、苧麻は、舊本には産出する地方の州郡を記載してないが、今は閩、蜀、江浙地方に多くあつて、皮を剝ぎ、績いで布に織り得るものだ。苗は高さ七八尺、葉は楮葉のやうで叉がなく、表面は青く背面が白くして短毛がある。夏、秋の間に細穗の青花を開く。根は黄白で輕虛だ。二月、八月採收する。按ずるに、

(一)牧野云フ、此苧麻ノ中ニハ多分所謂「ラミー」(Rhea or Ramie) モ一緒ニナツテ居ル事ト思フガ之レハ其一變種デアル、苧麻ハ洋人ハ China-grass ト稱スル。

（二）荊揚トハ湖北、湖南以東長江沿流一帶ヲ指ス。

陸機の草木疏に『苧は一科に數十莖生え、舊根が土中に在つて、春になると自から生える。故に種を蒔いて栽培する必要はない。(二)荊、揚地方では一年に三回刈取り、處處の園圃で栽培するものは一年に二回刈取る。刈つて竹で剝げば、その表面の厚い部分が自から脱去して、內部の筋のやうな部分だけが殘る。それを煮て布に積み績ぐ材料とする』とある。現に江浙、閩中ではやはりその通りにしてゐる。

宗奭曰く、苧は蕁麻のやうなもので、花は白楊のやうで長く穗になり、一朶每に凡そ數十穗あつて青白色だ。

〔苧麻〕

時珍曰く、苧とは家苧のことだ。また山苧といふがある。それは野生の苧のことだ。また紫苧といふは葉の表面の紫なもの、白苧といふは葉の表面が青いもので、いづれも裏面の白いものだ。これは刮り洗つて煮て食へる、凶作の饑饉を救ふ食糧となるもので、味の甘美なものだ。子の色は茶褐色で、九月採收して二月に蒔き付ける。また舊根

（三）漚苧汁ハ苧麻皮ヲ浸漬シタル水。

（四）大觀ニハ子ノ字ナシ。

からも自から生えるものだ。

根　【氣味】【甘し、寒にして毒なし】權曰く、甘し、平なり。大明曰く、甘し、滑冷にして毒なし。

【主治】【胎を安ずる。熱丹毒に貼る】（別錄）【心膈の熱、漏胎下血、産前後の心煩、天行熱疾で大渇し大狂するもの、金石藥を服して心の熱するものを治す。毒箭、蛇蟲の咬傷を罨ふ】（大明）【（三）漚苧汁は消渇を止める】（別錄）

【發明】震亨曰く、苧根は、大いによく陰を補し、滯血を行るに效果があるが、醫方の藥としては、價も安くつまらぬものとして一向に用ゐてゐないやうだ。

藏器曰く、苧の性は血を破るものだ。苧麻を産婦の枕に用ゐると血運が止まる。産後の腹痛には苧を腹の上へ置けば止まる。又、蠶に咬まれて毒が肉に入つた場合には、苧汁を取つて飲む。今世間で、苧の（四）子を蠶種に近ければ蠶が生れぬといふはこの關係からいふのである。

【附方】舊四、新七。【痰哮欬嗽】苧根を煆いて性を存して末にし、生豆腐に三五錢をつけて食へば效がある。なほ痊えぬときは、肥豬肉二三片につけて食ふ。甚だ

妙である（醫學正傳）【小便不通】聖惠方では、麻根、蛤粉半兩を末にし、二錢づつを空心に新汲水で服す〇摘玄方では、苧根を洗つて研り、絹布へのして少腹から陰際まで貼れば須臾にして通ずる。【小便血淋】苧根の煎湯を頻りに服するが大いに妙である。また諸淋を治す。（聖惠方）【（五）五種の淋疾】苧麻根二本を打ち碎き、水一盌半で半盌に煎じて頓服する。直ちに通じて大いに妙である。（斗門方）【妊娠胎動】突然膠のやうな黃汁、或は小豆汁の如きものを下し、腹痛忍び難きには、苧根を黑皮を去り、切つて二升、銀一斤、水九升を四升に煮取り、その水一升づつに酒半升を入れて一升に煎じ、二回に分服する。ある方では銀を用ゐない。（梅師方）【肛門の腫痛】生苧の根を搗き爛らしてそれに坐るがよし。（瀕湖集簡方）【脫肛の收まらぬもの】苧根を搗き爛らし、湯に煎じて熏じ洗ふ。（聖惠方）【癰疽發背】まだ形を成さぬ初期には、苧根を熟搗して上に傅け、晝夜數回易へれば腫が退いて癒える。（圖經本草）【五色丹毒】苧根を煮た濃汁で一日三回づつ浴する。（外臺祕要）【雞、魚の骨哽】談野翁試驗方では、苧麻根の搗汁を匙ですくつて上から灌ぐ。立ろに效がある。〇醫方大成では、野苧麻根を搗き碎いて（六）龍眼大の丸にし、魚骨をたてた時は魚湯で服

（五）五淋ハ氣淋、血淋、石淋、膏淋、勞淋是ナリ。

（六）龍眼樹ノ子實大

し、雞骨をたてた時は雞湯で服す。

葉【氣味】根に同じ。【主治】【金瘡、傷折の出血、瘀血】（時珍）

【發明】時珍曰く、苧麻葉は甚だ血を散ずるものだ。五月五日に採收し、石灰に和して搗いて團にし、晒し乾して貯へ、金瘡、折損の場合に、それを研末して傅ければ卽時に血が止まり、且つ痂を付け易い。按ずるに、李仲南の永類方に『凡そ諸傷瘀血の散ぜぬには、五六月に野苧葉、蘇葉を取つて擂り爛らし、金瘡にはその上に傅け、瘀血が腹内に在るには、順流水で絞つてその汁を服す。直ちに通じて血は皆水に化す。それは生豬血に試みると明かな應驗がある。秋、冬は乾いた葉を用ゐるもよし』とある。

【附方】新三。【驟然たる水瀉】晝夜止まずして死せんとするには、男、女に拘はらず、五月五日に採つて陰乾した麻葉を末にし、二錢づつを冷水で調へて服す。熱い物を食へば悶倒するから食つてはならぬ。ただ冷えた物のみを食はねばならぬ。小兒には半錢を用ゐる。（楊子建護命方）【冷痢白凍】方は上に同じ。【蛇虺の咬傷】青麻の嫩頭の搗汁と酒を等分に和して三盞を服し、その滓を傅ければ毒は竅中から

出る。渣は水中に棄てても散らぬものだ。その渣を取つて傷處を看ると、竅のあるときは雄蛇に咬まれたもの、竅の無いときは雌蛇に咬まれたものである。針で傷處をつき破り、竅をあけて藥を傅ける。(摘玄方)

(一)苘麻　苘、音は頃(ケイ)である。(唐本草)

和名　いちび
學名　Abutilon Avicennae, Gaertn.
科名　あふひ科(錦葵科)

釋名　**白麻**　時珍曰く、苘の字は一に䔛とも書き、また檾とも書く。栽培するには、必ず連(二)頃に種ゑるものだから䔛といふのだ。

集解　恭曰く、苘、卽ち䔛麻であつて、今世間で皮を取つて布や繩にする。實は大麻子に似たものだ。九月、十月に採つて陰乾する。

頌曰く、處處にあるもので、北國地方では、これを栽培して布を績ぎ繩に綯ふ。苗は高さ四五尺から六七尺、葉は苧に似て薄く、花は黃色、實の殼は蜀葵のやうで中の子は黑色だ。

時珍曰く、苘麻とは現今いふ所の白麻のことだ。卑濕の場處に多く生え、一般に

(一)牧野云フ、苘麻ハいちびデアルガ今一種國ニヨリいちびト稱スルモノガアルノデ之レヲ混ゼヌヤウニセネバナラヌ、ソレハつなそト云フモノデ黃麻ノ漢名ガアル、學名ハ Corchorus capsularis, L. デしなのき科(田麻科)ニ屬スル一年草デアル。

(二)頃ハ四百畝ヲ云フ、廣キ畑ニ作ルヲ云フ。

栽培もする。葉は大きく、桐葉に似て團くして尖がある。六七月に黄色の花を開く。實は牛磨の形のやうで齒があり、嫩いうちは青く、老れば黒くなり、中の子は扁たく黒く、形狀は黄葵子のやうだ。

〔莔麻〕

莖は輕虛で潔白である。北國地方では皮を取つて麻にし、莖には硫黄をつけて焠燈(つけぎ)に作る。火を引くこと甚だ速なものだ。子の嫩いうちは小兒がよく食ふ。

實 氣味 【苦し、平にして毒なし】 主治 【赤、白の冷、熱痢には、炒つて研末して蜜湯で一錢を服す。癰腫の頭なきには一箇を呑む】(蘇恭) 【眼翳、瘀肉に主效があり、倒睫、拳毛を起す】(時珍)

根 主治 【やはり痢を治す。古方に用ゐてある】(蘇頌)

附方 新二。【一切の眼疾】莔麻子一升を末にし、批開した豶豬肝につけて炙熟し、幾度もその末が盡くるまでつけて炙き、それを更に末にし、一日三回、一字づつを陳米飮で服す。(聖濟總錄) 【目の翳膜】久しく癒えぬには、柳木で作つた磨り

臼に蘱實を入れて殼を去り、馬尾の篩で焦殼を去つて黄肉を取る。實十兩で四兩を得る。かくせねば殼が取れぬものだ。それを薄く切つた豬肝にまぶして慢火で炙熟し、末にし醋で和して梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。ある方では、蘱實を袋に入れて蒸熟して暴し、末にして蜜で丸にし、溫水で服す。(聖濟總錄)

大青（別錄中品）

和名　まきばくさぎ
學名　Clerodendron cyrtophyllum, Turcz.
科名　くまつづら科（馬鞭草科）

【釋名】時珍曰く、莖も葉も皆深青色だから名けたものだ。

【集解】別錄に曰く、大青は三四月に莖を採つて陰乾する。弘景曰く、今は東方地方、及び(一)邊道に產する。莖は紫で長さ一尺ばかりのものだ。莖、葉いづれも用ゐる。

頌曰く、今は江東の州郡、及び(二)荊南、(三)眉、(四)蜀、(五)濠の諸州いづれにも有る。春生えて莖は青紫色だ。石竹に似た苗、葉である。花は紅紫色で馬蓼に似てゐるが、芫花にも似てゐる。根は黄色だ。三月、四月に莖、葉を採つて陰乾して用ゐる。

(一)大觀ニ邊道ヲ近道ニ作ル。邊道、即チ國境附近ナリ。
(二)荊南トハ今ノ湖北省南部ノ地方ヲ指ス。
(三)眉州ハ山草類狗脊ノ註ヲ見ヨ。
(四)蜀州ハ宋ニ置キ晉源縣等ノ四縣ヲ領ス。今ノ四川省成都府ノ西、崇慶縣ソノ舊治ナリ。
(五)濠州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。大觀ニ濠ノ下ニ淄ノ字アリ。

時珍曰く、處處に有る。高さは二三尺、莖は圓く、葉の長さは三四寸で、表面は青く背面が淡く、節に對ひ合つて生える。八月紅色の簇つた小花を開き、青い椒實の顆ほどの實を結び、九

〔大青〕

月には色が赤くなる。

莖葉【氣味】【苦し、大寒にして毒なし】權曰く、甘し。時珍曰く、甘く微し鹹し、苦くはない。

【主治】【時氣、頭痛、大熱、口瘡】(別錄)【時行熱毒を除くに甚だ良し】(弘景)【溫疫寒熱を治す】(甄權)【熱毒風で心の煩悶するもの、渇疾で口の乾くもの、小兒の身熱疾、風疹、及び金石藥の毒を治す。腫毒に塗罨する】(大明)【熱毒痢、黃疸、喉痺、丹毒に主效がある】(時珍)

【發明】頌曰く、古方に、傷寒の黃汗、黃疸を治する大青湯といふがあり、又、傷寒で頭部、身體が强ばり、腰、脊の痛むを治する葛根湯の中にも大青を用ゐてあ

る。概して時疾に多く用ゐるものだ。

時珍曰く、大青は、氣は寒、味は微苦鹹であつて、能く心、胃の熱毒を解す。特に傷寒を治するだけのものではない。朱肱の活人書に、傷寒で赤斑を發して煩痛するを治する藥に、犀角大青湯、大青四物湯がある。故に、李象先の指掌賦にも『陽毒に罹れば狂斑し煩亂する。大青、升麻を以て困篤を回らすがよし』といつたのだ。

附方　新五。【喉風、喉痺】大青葉の搗汁を灌ぎ、反應があれば止める。(衛生易簡方)【小兒の口瘡】大青十八銖、黃連十二銖、水三升を一升に煮取り、一日二回に服して瘥えるを度とする(千金方)【熱病下痢】衰弱して危篤なるには、大青湯――大青四兩、甘草、赤石脂三兩、膠二兩、豉八合、水一斗を三升に煮取り、三回に分服する。二劑に過ぎずして瘥える。(肘後方)【熱病發斑】斑が赤色を呈して煩痛するには、大青四物湯――大青一兩、阿膠、甘草各二錢半、豉二合を三服に分け、一服を水一盞半で一盞に煎じ、膠を入れて煮溶して服す。○又、犀角大青湯――大青七錢半、犀角二錢半、巵子十箇、豉二撮を二服に分け、一服を水一盞半で八分に煎

じて溫服する（南陽活人書）

【肚皮の青黑】小兒が突然肚皮に青黑色を呈するは、血氣が營養を失つて風寒がそれに乘じた險惡な證候である。大青を末にして口中に納れ、酒で送下する。（保幼大全方）

(一)小青（宋圖經）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

集解 頌曰く、小青は(二)福州に生ずる。三月に花が咲く。彼の地では生えた月の中に葉を採つて用ゐる。

葉

氣味（缺）

主治 【生で擣いて癰腫、瘡癤に傅ければ甚だ效がある】（蘇頌）【血痢腹痛を治す。研つて汁を服すれば蛇毒を解す】（時珍）

附方 新二。

【蛇虺の螫傷】衞生易簡方では、小青一握を細研し、香白芷半兩を入れて酒で調へて服す。手で患部を採んで見て、黃水が出れば效果があつたのだ。

〔〕摘玄方では、小青、大青、牛膝葉を共に

（小青）

(一)牧野云フ、本書ノ小青ハ私ハ其植物ヲ云フ事ガ出來ヌ。植物名實圖考ニ小青ノ名アル植物二ツアッテ、其一ツハやぶかうじ（Ardisia Japonica, Bl.）又其一ハ不明ノ樹デアルガ、此等ハ恐ラク本書ノ小青デハナイト思フ。其外小青ハ種々ノ植物ノ名トナッテ居レドモ、此處ノ小青ハ其レ等ノモノデハナイト考ヘル。

(二)福州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

搗き、その汁を酒に和して服し、滓を患部へ傅ける。［暑に中つた發昏］小青葉を井水に浸して泥を去つて控乾し、沙糖を入れて擂つて汁を急に灌ぎ込む。（壽域方）

胡盧巴（一）（宋嘉祐）

和名　ころは
學名　Trigonella Foenum-graecum, L.
科名　まめ科（荳科）

釋名　苦豆

集解　禹錫曰く、胡盧巴は廣州、幷に（二）黔州に產する。春苗が生え、夏子を結び、子は細い莢になる。秋季に入つて採收する。今一般に嶺南のものを多く用ゐてゐる。或は外國の蘿蔔の子だともいふが、果して然りや否や判然せぬ。

頌曰く。今は廣州から出る。或は、この種は南洋の諸外國から出るものだ。蓋しその國の蘆菔の子であつて、海外貿易商人がその種を持つて來て嶺外地方へ蒔いて見ると、生えることは生えたが、しかし外國から來るものほど精良なわけに行かなかつたといふことだ。現今の醫家は、（三）元臟の虛冷を治するに必要の藥としてあるが、唐時代以前の方には用ゐてない。本草にも記載してなかつたところを見ると、

（一）牧野云フ、南歐幷ニ亞細亞ノ原產ノ一年草デ、濃臭ガアル。藥用トシテ處處ニ栽培セラルル、種名ノ Foenum-graecum ハ希臘乾草ノ意デアル。

（二）黔州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

（三）元臟ハ腎臟。

近代に及んで發見されたものと見える。

【修治】 時珍曰く、凡そ藥に入れるには、淘淨して酒に一夜浸し、晒し乾し、蒸熟し、或は炒つて用ゐる。

(四)【氣味】【苦し、大溫にして毒なし】杲曰く、純陽である。【主治】【元臟の虛冷の氣。附子、硫黃と配合すれば、腎虛の冷腹脹滿、顏色の靑黑なるものを治す。懷香子、桃仁と配合すれば、膀胱の氣を治するに甚だ效がある】(嘉祐)【冷氣疝瘕、寒濕脚氣を治し、右腎を益し、丹田を暖める】(時珍)

〔胡盧巴〕

【發明】 宗奭曰く、(五)膀胱氣に此れを用ゐるには、桃仁を麩で炒つたものの等分と合せて末にし、その半は散にし、その半は酒糊で和して梧子大の丸にし、五七十丸づつを空心に鹽酒で服し、散の方は丸藥と互に時間を隔てて(六)熱米湯で空心に服す。一日に各〻一二回づつ服す。

(四)木村(康)曰ク、(成分)ツリゴネリン及脂肪油等(W. P. 314)

(五)膀胱氣ハ膀胱氣痛ノ略ニシテ、痙攣ヲ指スモノナラン。

(六)大觀ニ熱ヲ熱ニ作ル之ニ從フ。

時珍曰く、胡盧巴は右腎命門の藥であつて、元陽が不足して冷氣が潛伏するために、歸元の作用が不可能になつたものに適するものだ。宋の惠民和劑局方にある胡盧巴丸は、大人、小兒の小腸の奔豚、偏墜、及び小腹に卵のやうなものがあつて、上下に走痛して忍ぶべからざるものを治す。胡盧巴八錢、茴香六錢、巴戟を心を去り、川烏頭を炮いて皮を去り各二錢、楝實を核を去つて四錢、吳茱萸五錢を用ゐ、いづれも炒つて末にし、酒糊で梧子大の丸にし、十五丸づつを服す。小兒は五丸を鹽酒で服す。太醫の薛已は『寒疝で陰囊腫痛の一患者に、五苓諸藥を服ませて效がなかつたが、この藥を與へると平復した』といひ、又、張子和の儒門事親には『眼病で視力を失つた一患者は、苦豆、卽ち胡盧巴を食ひたがり、頻頻と缺かさず食つたが、一箇年未滿にして、目中に蟲が步いて眥に入るやうな微痛を覺え、漸次に視力が明かになつて平癒した』とある。按ずるに、これ等の例もやはり命門を益する功果の現はれであつて、所謂る火の原を益して陰翳を消する關係である。

【附方】　新六。

【小腸の氣痛】胡盧巴を炒つて研末し、每服二錢を茴香酒で服す。（直指方）

【腎臟の虛冷】腹脇脹滿するには、胡盧巴を炒つて二兩、熟附子、硫黃

各七錢五分を末にし、酒で煮た麪糊で梧桐子大の丸にし、鹽湯で三四十丸づつを服す。(聖濟總錄)【冷氣疝瘕】胡盧巴を酒に浸して晒し乾し、蕎麥を炒つて研つた麪と各四兩、小茴香一兩を末にして酒糊で梧子大の丸にし、毎服五十丸を空心に鹽湯、或は鹽酒で服す。これを二箇月間繼續して、大便後に白膿が出れば病は根絶する。(方廣心法附餘)【陰㿉腫痛】偏墜、或は小腸疝氣、下元が虛冷して久しく癒えぬものに主效ある沈香內消丸——沈香、木香各半兩、胡盧巴を酒に浸して炒り、小茴香を炒つて各二兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にして五七十丸づつを鹽酒で服す。【氣攻頭痛】胡盧巴を炒り、三稜を酒に浸し焙じて各半兩、乾薑を炮いて二錢半を末にし、薑湯、或は溫酒で二錢づつを服す。(濟生方)【寒濕脚氣】腿膝疼痛して歩行に力なきには、胡盧巴を酒に一夜浸して焙じ、破故紙を香しく炒つて各四兩を末にし、木瓜の頂端を切つて瓤を取り去つた中へその末藥を充滿し、先に切つた頂端で蓋をし、蓋の落ちぬやうに籤(くし)で止めて蒸し爛らし、搗いて梧子大の丸にし、毎服七十丸を空心に溫酒で服す。(楊氏家藏方)

(一) 蠡實（本經中品）

和名　ねぢあやめ
學名　Iris ensata, thunb. var. chinensis, Maxim.
科名　あやめ科（鳶尾科）

釋名　荔實（別錄） 馬藺子（唐本） 馬楝子（圖經） 馬薤（禮記注） 馬帚（爾雅） 鐵掃帚（救荒） 劇草（本經） 旱蒲（禮記） 豕首（本經） 三堅　弘景曰く、醫方の藥には用ゐない。俗間では識らないものだ。しかし天名精にもやはり豕首なる名稱がある。

○恭曰く、これは馬藺の子のことだ。月令に『(二)仲冬、荔挺出す』とあつて、鄭玄の註に『荔は馬薤なり。』通俗文には、一名馬藺といひ、本草には、荔實といふ』とある。

○頌曰く、馬藺子を、北方では訛つて馬楝子といふ。廣雅には『馬薤は荔なり』とあり、高誘は『荔挺出すとは、荔草が挺出（ぬきでる）することだ』といつてある。禮記の學者がそれを識らずして『荔挺』と讀み、又、馬莧とも書くが、いづれも誤だ。馬莧とはまた豚耳とも名けるもので、馬齒(三)莧のことだ。

(一) 牧野云フ、此種ハ我ガ邦ニハ野生ハ無イガ滿洲方面ニ在ツテハ極メテ普通ノ草デアル、往時支那カラ渡ツタモノ今邦内ノ諸處ニ見ラル、葉ガネヂレテ居ルカラねぢあやめノ名ガアル。

(二) 仲冬ハ陰曆十一月。

(三) 莧大觀ニナシト雖モ脫字ナリ依テ之ヲ加フ。

（四）江字正字通ニ據ル。
（五）河東ハ山草類甘草ノ註ヲ見ヨ。
（六）鼎州ハ山草類石蒜ノ註ヲ見ヨ。澧州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。汴ハ芳草類蘘荷ノ汴部ノ註參照。

時珍曰く、爾雅に『荓は音瓶。馬帚なり』とあつて、これは荔草のことだ。そのものが馬の刷毛を作る材料となるからかく謂つたもので、現に江南や（四）江北地方で鐵掃帚と呼ぶものがそれである。

【集解】別錄に曰く、蠡實は（五）河東の川谷に生ずる。五月實を採つて陰乾する。

頌曰く、今は陝西の諸郡、及び（六）鼎、澧州にもあり、汴の附近に就中多い。葉は薤に似て長く厚く、三月紫碧色の花を開き、五月實を結ぶ。實は麻子ほどの角子となつて、赤色で稜がある。根は細長く、全體に黄色だ。世人はそれを採つて刷毛に作る。三月花を、五月實を採つて陰乾して用ゐる。許愼の說文に『荔は蒲に似て小さく、根は刷毛になる』とあり、高誘は『河北の平澤に率ねこれを生ずる』といつてある。河東では、よく庭園や階砌などに多く種ゑて、旱蒲と呼んでゐるが、實は馬薤なのだ。

〔蠡實——馬藺〕

時珍曰く、蠡草は荒野中に生じ、地に就いて叢生する。一本が二三十葉になり、苗の高さは三四尺、葉の叢中から莖が抽出で花を開き實を結ぶ。

【正誤】宗奭曰く、蠡實に就いて、陶隱居は『醫方の藥には用ゐない。俗間では識らないものだ』といつてある。本草に注した諸家の說は合致しない。若し果してこれが馬藺だとすれば、日華子本草の說は當を得ない。更にまた『蔬菜にして食へる』とあるが、一體馬藺の葉は土中から出た時から硬く、また無味なものだ。牛、馬さへ食はぬ。人間の食へやうわけがあらうか。此には、蠡實を馬藺に當てることは敢てしない。更に博識な人の研究に俟つ。

時珍曰く、別錄には、蠡實を茘實とも名けてあるのから見ると、蠡と書いたのは茘の字の訛なのだ。張揖の廣雅に『茘、また馬藺と名ける』とある。その說は已に明だ。又按ずるに、周憲王の救荒本草に『その嫩苗は味苦い。よく煮熟し、水を換へ浸して苦味を去り、油、鹽で味を付ければ食へる』とある。これで見れば、馬藺もやはり食料となるわけだ。寇氏は、ただ陶氏の說のみに據つて疑を挿んだが、それは研究が徹底しない。藥には陶氏の識らぬものが多いのだ。今その誤を正して

置く。

實【修治】時珍曰く、凡そ藥用には炒つて用ゐる。疝を治するには醋を拌ぜて炒る。

【氣味】〔甘し、平にして毒なし〕保昇曰く、寒なり。頌曰く、山間の住民はこれを服して『大温にして甚だ奇效がある』といふ。

【主治】〔皮膚の寒熱、胃中の熱氣、風寒濕痺。筋骨を堅くし、食慾を進ませ、久しく服すれば身を輕くする〕（本經）〔心の煩滿を止め、大、小便を利し、肌膚を長じ、肥大ならしめる〕（別錄）〔金瘡血の內流、癰腫を療ずるに效がある〕（蘇恭）〔婦人の血氣煩悶、產後の血運、幷に經水不止、崩中帶下。一切の瘡癤を消し、鼻衄、吐血を止め、小腸を通じ、酒毒を消し、黃病を治し、蕈の毒を殺す。蛇蟲の咬傷に傅ける〕（大明）〔小腹の疝痛、腹內の冷積、水痢諸病を治す〕（時珍）

【附方】舊二、新六。〔諸冷極病〕醫療の治し難きものには、馬藺子九升を洗淨し、一日三回、空腹に一合づつを酒で服す。（千金方）〔寒疝諸疾〕寒疝で食事不能のもの、及び腹內一切の諸病に用ゐ、食物を消化し、肌を肥えしめる。馬藺子一升を

用ゐ。毎日一把を取つて麪を拌ぜ、煮て呑む　一升を服し盡せば癒える。（姚僧坦集驗方）【喉痺腫痛】衞生易簡方では、蠡實一合、升麻五分、水一升を三合に煎じて蜜少量を入れ、よく攪きまぜて少しづつ呑み込む。大いに效驗がある。○聖惠方では、馬藺子二升、升麻一兩を末にし、蜜で丸にして水で一錢を服す。○またある方では、馬藺子八錢、牛蒡子六錢を末にし、空心に方寸匕を溫水で服す。【水痢のあらゆる病】張文仲備急方では、馬藺子、六月六日の麪を熬つて各等分を末にし、空心に方寸匕を米飲で服す。もし六月六日の麪がなければ普通の麪でもよし、また牛骨灰でもよし。○又ある方では、馬藺子、乾薑、黃連各等分を散にし、二方寸匕を熟湯で服す。藥が腹に入れば直ちに痢を斷止し、冷、熱いづれも治す。嘗て用ゐて神效を擧げた。輕視してはならない。豬肉、冷水を忌む。【腸風下血】疙瘩瘡があつて破れたものは治せぬ。馬藺子一斤を研り破り、夏は三日、冬は七日間酒に浸して晒し乾かし、何首烏半斤、雄黃、雌黃各四兩を末にし、先に藥を浸した酒で作つた糊で梧子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを溫酒で服すれば效が現はれる。（普濟方）

花　莖　及び根　葉

主治　【白蟲を去る】（本經）　【喉痺を療ず。多く服すれば

溏泄する】(別錄)【癧疽惡瘡に主效がある】(時珍)

【發明】 頌曰く、蠡草は花も實も藥に入れる。列仙傳に『寇先生は宋の人で、好んで荔を栽培し、その葩と實を食つた』とあるがそれである。

時珍曰く、按ずるに、葉水東の日記に『北方の農民は、胸、腹の飽脹を患ふ時は馬楝花を取つて涼水に擂つて服す。數回通じが付いて平癒する』とある。これに據つて見ると、多く服すれば泄するの說は事實であつて、蠡實が馬藺であることも更に疑ひない。

【附方】 舊三、新六。【睡死して寤めぬもの】蠡實根一握を杵き爛らし、水で絞つて汁を少しづつ徐ろに灌ぐ。(外臺祕要)【喉痺口噤】馬藺花二兩、蔓荊子一兩を末にし、溫水で一錢を服す。【喉痺腫痛】喘息して死せんとするには、外臺祕要では、馬藺根、葉二兩、水一升半を一盞に煮取り、少しづつ(七)飲めば立ろに瘥える。○聖惠方では、根の搗汁三合、蜜一合を慢火で熬り、一日五七回、徐徐に點ける。ある方では、單に汁を飲み、口噤するものには灌ぎ下す。生の物がないときは刷毛を煎じてその汁を用ゐる。【沙石熱淋】馬藺花七箇を燒き、故筆頭十四箇を燒き、粟米

(七)大觀ニ飲ヲ嚥ニ作ル。

一合を炒つて末にし、一日二回、三錢づつを酒で服す。これを通神散と名ける。【小便不通】馬藺花を炒り、茴香を炒り、葶藶を炒つて末にし、二錢づつを酒で服す。(十便良方)【一切の癰疽】發背惡瘡。鐵掃帚を松毛、牛膝と共に水で煎じて服す。(乾坤生意)【顏面の瘢黶】鐵掃帚の葉、幷に子の自然に地上に落ちたものを湯に煎じ、數回頻りに洗へば自消する。(壽域神方)【面皰、鼻皶】馬藺子の花を杵いて傅けるが佳し。(肘後方)

【附錄】**必似勒**(拾遺)　藏器曰く、辛し、溫にして毒なし。冷氣(八)胸閉で消せぬもの、心腹脹滿に主效がある。崑崙に生ずるもので、その形狀は馬藺子に似てゐる。

惡實(一)　(別錄中品)

和名　ごばう
學名　Arctium Lappa, L.
科名　きく科(菊科)

【釋名】**鼠粘**(別錄)　**牛蒡**(別錄)　**大力子**(綱目)　**蒡翁菜**(綱目)　**便牽牛**(綱目)　**蝙蝠刺**　時珍曰く、その實の形狀が惡くして、刺鈎が多いものだから呼んだ名

(八)胸、大觀ニ胃ニ作ル。消下ニ食字アリ。

(一)牧野云フ、此ニ惡實ノ下ニ其植物ノ名稱ヲ入レタガ實ハ此惡實ハ其頭狀花ヲ指シタモノデ俗ニ言ヘバごばうのみデアル、本品ニハ又別ニLappa officinalis. All. ノ學名モアル。

稱だ。根も葉も皆食料になり、一般には牛菜と呼び、方術家では、隱語で大力と呼び、賤俗の間では便牽牛といひ、河南地方では夜叉頭と呼ぶ。

○頌曰く、實の殼に刺が多く、鼠がその上を走ると忽ち粘り付いて脫れなくなる。それで鼠粘子と謂ふので、やはり羊負來などと同じ名稱だ。

【集解】○○別錄に曰く、惡實は(二)魯山の平澤に生ずる。

○恭曰く、魯山は鄧州の東北に在る。この草は、葉が大きくて芋の葉ほどあり、子殼は栗の形狀に似たもので、實は細長く、茺蔚のやうだ。

〔惡實——牛蒡〕

○頌曰く、惡實、卽ち牛蒡の子だ。處處にある。葉は芋の葉ほどの大さで長く、實は葡萄の核に似て褐色だ。外殼は栗のいがに似て小さく、指頭ほどのもので刺が多い。根は極めて大なるものがあつて、菜にして食へば健康を益する。秋後に子を採つて藥に入れる。

(二)魯山、次ノ蘇恭說ノ如ク當時ハ鄧州ノ管下ニ屬ス。河南省汝州府ニ今尙ホ魯山縣アリ。

時珍曰く、牛蒡は、古代には、肥えた土地に子を蒔いて栽培し、苗を剪取つて(三)汋淘して蔬にし、根を取つて煮て曝して(四)脯にしたもので、甚だ健康に益あるものだといつてある。今も世間ではやはり稀に食ふ。三月苗が生え、莖が生え立つて高さ三四尺になり、四月淡紫色の叢を成した花を開き、(五)楓梂のやうで小さい實を結ぶ。蕚上に無數の細刺が簇がり付いて、一梂に數十顆の子がある。根は、太いものは臂ほどになり、長きものは一尺に近く、その色は(六)灰黪色だ。七月子を採り、十月根を採る。

子

修治　斅曰く、凡そ用ゐるには、揀り淨めて酒を拌ぜて蒸し、白霜が重出するを待つて布で拭ひ去り、焙乾して粉に擣いて用ゐる。

(七)氣味　【辛し、平にして毒なし】藏器曰く、苦し。元素曰く、辛し、溫なり。陽中の陰であり升である。杲曰く、辛し、平なり　陽であり降である。

主治　【目を明かにし、中を補し、風傷を除く】(別錄)【風毒腫、諸瘻】(藏器)【研末し、酒に浸して毎日二三盞を服すれば、諸風を除き、丹石の毒を去り、腰、脚を利す。又、熟し揉んで食前に三箇を呑めば、諸種の結節、筋骨煩熱の毒を散ず】

(三)汋ハ字書ニ音杓、瀲水ノ聲トアリ、汋淘ハ水ヲ以テ洗滌スルコト。
(四)脯ハ乾シタル食物。
(五)楓梂ハ楓樹ノ果實。
(六)黪、說文ニ淺青黑色也トアリ。
(七)木村(康)曰ク、歐米ニ於テモ民間藥トシテ根ヲ淨血、利尿ノ效アリトシ利尿劑トシテ或ハ梅毒及慢性水銀中毒ニ、又毛髮發生促進ニ、又松子ヲ加ヘ咯血及肺潰瘍ヲ治スルトシテ內用セリ、又根ヲ細挫シテ骨折痛ニ罨包スル時ハ治ス可ク葉ハ陳久創傷ニ貼シテ

（甄權）【一箇を呑めば癰疽に頭が出る】（蘇恭）【炒り（七）研つて煎じて飲めば小便を通利する】（孟詵）【肺を潤ほし、氣を散じ、咽膈を利し、皮膚の風を去り、十二經を通ず】（元素）【斑疹の毒を消す】（時珍）

發明 杲曰く、鼠粘子の應用に四種ある。風濕癮疹、咽喉風熱を治し、諸腫、瘡瘍の毒を散じ、凝滯腰膝の氣を利するがそれである。

附方 舊五、新十一。【（八）風水身腫】裂けるほど腫れたるには、鼠粘子二兩を炒つて研末し、一日三回、溫水で二錢づつを服す。（聖惠方）【風熱浮腫】咽喉が閉塞する。牛蒡子一合を半生半熟にして末にし、熱酒で一寸匕を服す。（經驗方）【痰厥頭痛】牛蒡子を炒り、旋覆花と等分を末にし、一日二回、一錢づつを臘茶淸で服す。（聖惠方）【瞳に連る頭痛】鼠粘子、石膏等分を末にし、茶淸で調へて服す。（醫方摘要）【咽膈不利】風壅涎唾を疏通する。牛蒡子を微し炒り、荊芥穗と各一兩、炙甘草半兩を末にし、食後に湯で二錢を服し、緩やかに效を取る。（寇氏本草衍義）【懸癰喉痛】風熱が上部を犯し搏つものだ。惡實を炒り、甘草を生で等分を水で煎じて含嚥する。これを啓關散と名ける。（普濟方）【喉痺腫痛】牛蒡子六分、馬藺子（九）六分を散にし、一

可ナリト。成分ハイヌリン（四五%）脂肪油等ヲ含有ス。
U. S. D. 1458.
A. J. P. 62(1890) 122; 69(1897)416.

（七）大觀ニ研ヲ末ニ作ル。

（八）風水ハ身體浮腫シ骨節疼痛アルモノ。

（九）大觀ニ八ニ作ル

日二回、空心に方寸匕を溫水で服し、同時に牛蒡子三兩、鹽二兩を研りまぜて炒熱し、包んで喉の外部を熨す。(一〇)(廣濟方)【咽喉痘疹】牛蒡子二錢、桔梗一錢半、粉甘草節七分を水で煎じて服す。(痘疹要訣)【風熱癮疹】牛蒡子を炒り、浮萍と等分を用ゐ、薄荷湯で二錢を服す。一日二回。(一一)(幼虞氏古今錄驗)【風齲牙痛】鼠粘子を炒つて水で煎じ、含嗽してその水を吐く(延年方)【小兒の痘瘡】適に痘が發生せんとするとき氣分惡く、壯熱し、狂躁し、咽膈壅塞し、大便祕澀するもの、小兒の咽喉が腫れて利せぬものに用ゐる。大便の通利するものは服んではならぬ。牛蒡子を炒つて一錢二分、荊芥穗二分、甘草節四分、水一盞を共に七分に煎じて溫服する。已に發出したものも服むがよし。必勝散と名ける。(和劑局方)【婦人の吹乳】鼠粘二錢、麝香少量を溫酒で少しづつ吞み下す(袖珍方)【便癰腫痛】鼠粘子二錢を炒つて研末し、蜜一匙、朴硝一匙を入れて空心に溫酒で服す。(袖珍方)【蛇、蝎、蠱毒】大力子の煮汁を服す。(衞生易簡方)【(一二)水蠱の腹大】惡實を微し炒つて一兩を末にし、麪糊で梧子大の丸にして十丸づつを米飲で服す。(張文仲方)【歷節腫痛】風熱が攻めて手指が赤く腫れ、麻木し、甚しきは肩背、兩膝を攻め、暑熱に遇へば大便が祕塞する。牛

(一〇)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

(一一)幼ハ初ノ誤、氏ハ世ノ誤。

(一二)水蠱ハ水鼓ト通ズ、腹大甕ノ如キヲ云フ。

蒡子三兩、新豆豉を炒り、羌活と各一兩を末にし、毎服二錢を白湯で服す。（本事方）

根莖　〔氣味〕【苦し、寒にして毒なし】權曰く、甘し、平なり。藏器曰く、根は蒸熟し暴乾して用ゐねばならぬ。さなくば吐き氣を催ほすものだ。

〔主治〕【傷寒寒熱で汗の出るもの、中風で顔の腫れるもの、消渴で中が熱し、水を欲するもの。久しく服すれば、身體を輕くし、衰老を防ぐ】（別錄）【根は牙齒の痛み、勞瘧、諸風で脚の緩弱なるもの、風毒、癰疽、欬嗽、傷肺、肺壅、疝瘕、冷氣積血に主效がある】（蘇恭）【根を酒に浸して服すれば、風、及び惡瘡を去る。葉に和し搗き砕いて杖瘡、金瘡に傅ける。永く風を畏れない】（藏器）【顔面の煩悶、四肢の不健に主效があり、十二經脈を通じ、五臟の惡氣を洗ふ。茱にして常に食へば身體を輕くする】（甄權）【根を切り、豆、麪を拌ぜて飯にして食へば、脹壅を消し、莖、葉の煮汁を浴湯にすれば、皮間の習習として蟲が歩くやうに覺ゆるを去る。鹽花を入れ生で搗いて一切の腫毒に搨る】（孟詵）

〔發明〕頌曰く、根は脯にして食ふが甚だ良し。莖、葉は煮汁で酒を釀して服するがよし。冬季に根を採り、蒸し暴して藥に入れる。劉禹錫の傳信方に『暴中風

を療するに、緊つて細い牛蒡根を風に當てぬやうにして採り、竹刀、或は(一三)荊刀で土を刮り去つて生布で拭き淨め、搗いて絞汁一大升を取り、好き蜜四大合を和し、溫めて二回に分服する。汗が出て瘥える。この方は岳鄂の鄭中丞から傳授したもので、鄭氏は曾て熱肉を(一四)一頓食つて暴風に中つたとき、潁陽の(一五)令であつた外甥の盧氏が此の方を知つてゐて、それを服ませると卽時に瘥えた』とある。

附方　舊五、新十六。【時氣の餘熱】退かずして煩燥し、發渴し、四肢に力無く、飮食不能なるには、牛蒡根の搗汁一小盞を服するが有效である。(聖惠方)【天行時疾】生牛蒡根の搗汁五合を空腹に二回に分服し、服し終つてから桑葉一把を取つて黄に炙り、水一升で五合に煮て頓服し、汗を取る。葉がなければ枝を用ゐる。(孫眞人食忌)【熱攻心煩】恍惚たるには、牛蒡根の搗汁一升を食後二回に分服する。(食醫心鏡)【傷寒の搐搦】發汗後完全に覆はなかつたために、腰、背、手、足に搐搦を起したるには、牛蒡根散が主效がある。牛蒡根十條、麻黄、牛膝、天南星各六錢を剉み、盆の中で研細して好酒一升と共に研り、新布で汁を絞り取り、一箇の地坑を掘つて中を炭火半秤で赤く燒き、掃き淨めてその中に藥汁を傾け入れ、再び黑色に燒いて

(一三)荊ハ牡荊。
(一四)一頓ハ一人分。
(一五)大觀ニ令ヲ尉ニ作ル。

（二六）塘火ハ埋ミ火。

取出して乳鉢で細研し、一日三回、一錢づつを温酒で服す。（朱肱活人書）【一切の風疾】十年、二十年の永き病には、牛蒡根一升、生地黄、枸杞子、牛膝各三升を袋に入れて無灰酒三升の中へ浸し、意のままにそれを飲む。（外臺祕要方）【老人の中風】口、目が動かず、煩悶し、不安なるには、牛蒡根を切つて一升を皮を去り、晒し乾して杵いて麪にし、白米四合を淘り淨めた中に和して餺飥にし、豉汁に入れて煮て葱、椒、五味を加へて空心に食ふ。常服すれば極めて效がある。（壽親養老書）【老人の風濕】久痺、筋攣、骨痛にこれを服すれば、腎を壯にし、皮毛を潤ほし、氣力を益す、牛蒡根一升を切り、生地黄一升を切り、大豆二升を炒り、これを絹袋に入れて一斗の酒に五六日間浸し、一日二回、性に任せて空心に二三盞を温服する。（集驗方）【頭部、面部の卒然の腫れ】熱毒風氣の內攻で、或は手、足に連つて赤腫し、少し觸れても痛むものである。牛蒡子の根、一名蝙蝠刺を洗淨して研り爛らし、酒で煎じて膏にし、絹にのして腫處に貼り、一二匙を熱酒で服す。腫が消し、痛が減ずる。（斗門方）【頭風の掣痛】禁へ難きには、磨膏にして用ゐるが主效がある。牛蒡の莖、葉を搗いて濃汁二升を取り、無灰酒一升、鹽花一匙頭を入れて（二六）塘火で膏に煎稠し、痛

處へ摩擦する。風毒は自から散ずる。摩擦する時には、極力熱くなるやうにして效を取る。冬季には莖、葉の代りに根を用ゐる。（篋中方）【頭風（一七）白屑】牛蒡葉の搗汁を熬稠して塗り、一夜明けて皂莢水で洗ひ去る。（聖惠方）【喉中の熱腫】鼠粘根一升、水五升を一升に煎じて三回に分服する。（延年方）【小兒の咽腫】牛蒡根の搗汁を少しづつ嚥む。（普濟方）【熱毒牙痛】熱毒風が頭部、面部を攻め、齒齦が腫痛して忍び難きには、牛蒡根一斤の搗汁に鹽花一錢を入れ、銀器中で熬膏して齒齦下に塗る。重きものも三回以內で瘥える。（聖惠方）【項下の癭疾】鼠粘子根一升、水三升を一升半に煮取り、三回に分服する。或は末を蜜で丸にして常服する。（救急方）【耳の突然の腫痛】牛蒡根を切つて絞つた汁二升を銀鍋で熬膏して塗る。（聖濟總錄）【小便不通】臍腹急痛するには、牛蒡葉汁、生地黃汁各二合をよく和して蜜二合を入れ、一合づつに水半盞を入れて煎じて三五沸し、滑石末一錢を調へて服す。（聖濟總錄）【癤子腫毒】鼠粘子葉を貼る。（千金方）【石瘻の出膿】堅く實して寒熱するには、鼠粘子葉を末にし、雞子白に和して封ずる。（外臺祕要）【諸瘡腫毒】牛蒡根三本を洗つて煮爛し、それを搗いた汁に米を入れ、粥を煮て一椀を食ふが甚だ良し。（普濟方）【積年の惡瘡】反花

（一七）白屑ハ白癬屑ノコト、和名フケ。

瘡漏瘡の瘥えぬには、牛蒡根を臘月の豬脂と搗きまぜて日毎に封ずる（千金方）「月經不通」結して癥塊となり、腹、肋が脹大して死せんとするには、牛蒡根二斤を剉んで三回蒸し、生絹の袋に盛つて酒二斗の中に五日間浸し、毎食前に一盞づつ温服する。（普濟方）

(一)葈　耳（本經中品）

和名　をなもみ
學名　Xanthium Strumarium, L.
科名　きく科（菊科）

【釋名】胡葈（本經）常思（弘景）蒼耳（爾雅）卷耳（詩經）爵耳（詩疏）豬耳（綱目）耳璫（詩疏）地葵（本經）葹　音は施（シ）である。羊負來（弘景）道人頭（圖經）進賢菜（記事珠）喝起草（綱目）野茄（綱目）縑絲草　頌曰く、詩人はこれを卷耳といひ、爾雅にこれを蒼耳といひ、廣雅にこれを葈耳といふ。いづれも實に對する命名だ。陸璣の詩疏に『その實は宛も婦人の耳璫のやうなものだ。現に或は耳璫草とも謂ふ』といひ、鄭康成は『これは白胡（二）葈のことで、幽州地方で爵耳と呼ぶものだ』といひ、博物志には『洛中のある者が羊を驅つて蜀へ往つて來た

(一)牧野云フ、其植物上ノ形態上カラ觀テ葈耳ハ實ニきく科中デ異彩ヲ放ツタモノデアル、其花部ノ狀態ハ普通ノきく科品トハ大ニ趣ヲ異ニシテ居ル。

(二)葈、大觀ニ婁ニ作ル。

とき、刺の多い胡菜子が羊の毛に粘り付いたまま中國まで來たことがある。それで羊負來と名けたのだ』とある。俗に道人頭とも呼ぶ。

弘景曰く、江北の鄙賤の者共は　皆これを常思菜と謂つて食ふ。葉で麥を覆ふて(三)黄衣を作る。醫方に用ゐることは甚だ稀だ。

時珍曰く、その葉の形が菜麻のやうでもあり、茄のやうでもあるところから、葈耳とか野茄とかいふ諸名がある。その味が滑して葵のやうだから、地葵と名けて地膚と同じ名を呼ばれる。詩人の思夫賦に卷耳の章があるので、それに因んで常思菜といふ。張揖の廣雅には常菜とあるが、やはり意味は通じる。

集解　別錄に曰く、葈耳は(四)安陸の川谷、及び(五)大安の田野に生ずる。實を熟した時に採收する。

頌曰く、今は處處にある。陸氏の詩疏に『葉は青白くして胡荽に似てゐる。花は白い。莖は細くして蔓生する。煮て(六)茹にすれば食物にもなるが、滑かで味が少い。四月中にさながら婦人の耳璫のやうな子がなる』とあり。郭璞は『形は鼠耳のやうだ。叢生して盤のやうになる』といひ、今あるものは皆これに類してゐるが、しか

(三)黄衣ハカウヂ。

(四)安陸ハ春秋ノ鄖國ノ地ナリ。漢ニ縣ヲ置ク、今ノ湖北省安陸縣ノ地ニ故城在リ。

(五)大觀ニ大安ヲ六安ニ作ル、從フベシ。六安ハ今ノ安徽省六安縣ノ地ナリ。

(六)茹ハ菜ニ同ジ。

し蔓生にはなつてゐない。

時珍曰く、按ずるに、周憲王の救荒本草に『蒼耳は、葉は青白くして粘糊菜の葉に類し、秋季中に桑椹（さうじん）のやうで短小な刺の多い實を結ぶ。嫩苗を煮熟し水に浸して淘（ゆ）り拌ぜれば食物にもなり、飢を救ふ粮になる。子は、炒つて皮を去り、麪に研つて燒餅（せうへい）にして食へる。また熬油は點燈用にもなる』とある。

〔菜耳〕
——蒼耳——

實　【修治】　大明曰く、藥に入れるには、炒熟し、搗いて刺を去つて用ゐ、或は酒を拌ぜて蒸して用ゐる。

(七)【氣味】　【甘し、溫にして小毒あり】　別錄に曰く、苦し。權曰く、甘し、毒なし。恭曰く、豬肉（ちよにく）、馬肉、米泔を忌む。犯せば人體に害がある。

【主治】　【風頭寒痛、風濕周痺、四肢の拘攣痛、惡肉、死肌、膝痛。久しく服すれば氣を益す】(八)（藏器）　【肝熱を治し、目を明かにする】（甄權）　【一切の風氣を治

(七) 木村(康)曰ク、成分ハ配糖體キサントツルマリン(一・二七%)サツカローゼ(三・三一%)キサントスツルミン(樹脂樣物質)等ヲ含有ス。Zander: Pharm. Z. Russ. 20 (1881) 661. Ber. Chem. Ges. 14 (1881) 2587. W. P. 767. 藥誌六六(昭、二〇)三〕八。

(八) 藏器ハ本經ノ誤但此諸症中膝痛ハ別錄ニ屬ス。

し、髓を塡充し、腰、脚を暖め、瘰癧、(九)疥瘡、及び瘙痒を治す】(大明)【香しく炒り、酒に浸して服すれば風を去り、補益する】(時珍)

附方　舊三、新四。【久瘧の瘥えぬもの】蒼耳の子、或は根、莖でもよし、焙じて研末し、酒糊で梧子大の丸にし、一日二回、酒で三十丸づつを服す。生の搗汁を服するもよし。(朱氏集驗方)【大腹水腫】小便の利せぬには、蒼耳子灰、葶藶末等分を一日二回、二錢づつ水で服す。(千金方)【風濕攣痺】一切の風氣には、蒼耳子三兩を(一〇)炒つて末にし、水一升半で七合に煎じ、滓を去つて呷ふ。(食醫心鏡)【牙齒の痛腫】蒼耳子五升、水一斗を五升に煮取り、熱して含む。冷えれば吐き去つて後にまた含む。一劑を過ごさずして瘥える。莖、葉もよし。或は鹽少量を入れる。(孫眞人千金翼)【鼻淵で涕を流すもの】蒼耳子、卽ち縑絲草子を炒つて研末し、一二錢づつを白湯に點て服す。(證治要訣)【眼の昏暗】葈耳實一升を末にし、白米半升と粥にして日毎に食ふ。(普濟方)【酒を嗜んで已まぬもの】(一一)毡の中の蒼耳子七箇を灰に燒き、酒に入れて飲めば嗜まなくなる。(陳藏器本草)

莖葉　修治　斅曰く、凡そこれを採取したならば、心を去り、黄精を竹刀

(九)大觀ニ疥瘡ヲ疥癬ニ作ル。
(一〇)炒、大觀ニ搗ニ作ル。
(一一)毡、大觀ニ氈ニ作ル。

で細かに切り拌ぜ、午前十時から午後十時まで蒸して黃精を出し去り、陰乾して用ゐる。

【氣味】【苦く辛し、微寒にして小毒あり】恭曰く、豬肉、馬肉、米泔を忌む。硇砂を伏す。

【主治】【溪毒】(別錄)【中風、傷寒の頭痛】(孟詵)【大風、癲癇、頭風、濕痺、毒の骨髓に在るもの、腰、膝の風毒には、夏季に採つて曝し、末にして水で一二匕を服す。冬季には酒で服す。或は丸にし、一日三回、二三十丸づつを服す。滿百日繼續すれば、病は(一二)瘑疥のやうになつて外部へ現はれ、(一三)汁になつて出る。或は斑が入り交つて痂のやうに重り合ひ、皮が浮き上り、その皮が落ちると肌膚が美しく凝脂のやうになる。また睡りを少くし、諸毒螫を除き、蟲疳、濕䘌を殺す。久しく服すれば(一四)氣を益し、耳、目を聰明にし、身を輕くし、志を強くする】(蘇恭)【葉を揉み、舌下へ置いて涎を出せば、目黃で睡を好む病を去る。灰に燒き、臘豬脂に和して丁腫を封ずれば根を出す。(一五)酒で煮て服すれば狂犬の咬毒に主效がある】(藏器)

【發明】時珍曰く、蒼耳の(一六)藥は、久しく服すれば風熱を去るに有效だ。豬肉、

(一二)大觀ニ瘑ヲ癘ニ作ル。
(一三)大觀ニ成汁ヲ或癢汁ノ三字ニ作ル。
(一四)氣字大觀ニ據テ之ヲ加フ。
(一五)大觀ニハ酒字ナシ。
(一六)藥ハ葉ノ誤ナルベシ。

及び風邪を最も忌む。犯せば全身に(二七)赤丹を發生するものだ。按ずるに、蘇恍良方に『葈耳の根、苗、葉、實を、いづれも洗ひ淨めて陰乾し、灰に燒いて湯で濃淋汁を取り、それを二箇續きに泥で作つた竈で煉り、一方の竈で煉りながら、その灰汁が耗つたとき傍の釜の中の熱灰湯を移して益すやうにする。かくて一晝夜火を絶たずに攪き廻し、やがて生ずる霜を取つて乾いた甆瓶の中に取つて貯へ、毎日朝、夕二錢づつを酒で服す。補煖し、風を去り、顏色の衰ひを防ぎ、就中皮膚の風を治し、皮膚を滑かに清淨ならしめる。入浴毎に少量を浴湯に入れるが尤も佳し。宜州の州學呂從諫は、これを十餘年繼續して服したが、七八十歲に及んでも顏色紅潤、身體輕健だつた。皆この藥の力だ』とある。斗門方には『婦人の血風が腦を攻めて頭旋し、悶絶し、忽ち絶息して打ち倒れ、人事不省となるには、喝起草の嫩心を陰乾し、末にして酒で一大錢を服すれば、その功力に偉大な效驗がある。この物は善く頂門から腦に連つて功力を及ぼすものだ』とある。蓋し喝起草とは蒼耳のことだ。

附方　舊十二、新十六。

【萬應膏】一切の癰疽、發背、無頭惡瘡、腫毒、疔癤、一切の風痒、臁瘡、杖瘡、牙疼、喉痺を治す。五月五日に蒼耳の根、葉數擔を採り、

二七　赤丹ハ丹毒ノ如キモノ。

（二八）大觀ニ如麻豆粒ニ作ル。

洗淨し晒らして萎えてから細かに剉み、五箇の大鍋に水を入れて煮爛し、篩で濾過して粗滓を去り、布絹で再び濾してまた淨めた鍋に入れ、始めは武火で煎じたぎらせ、漸次に文火で熬稠して攪き廻しつつ膏にし、新罐へ入れ封じて貯へる。それを患部へ敷貼すれば直ちに癒える。牙疼には牙の上に敷き、喉痺には舌の上に敷いて、或は二三回噙み溶かせば效がある。毎日酒で一匙を服するが極めて有效だ。（集簡方）

【一切の風毒】幷に三蟲を殺し、腸痔を治し、能く食慾を進める。胃が脹滿し、心悶し、發熱する病にはこれを服するがよい。五月五日の正午に地の際から刈取つた葈耳葉を洗ひ暴して搗き篩ひ、晝二回、夜三回、方寸匕づつを酒、或は漿水で服す。吐逆を覺える場合は蜜で丸にして服す。その分量は方寸匕の量を用ゐる。風の輕きものは一日に二回服す。若し身體に粟を生じ、或は（二八）麻豆ほどのものが出るならば、それは風毒が出るのである。針で刺し潰して黃汁を去れば止む。七月七日、九月九日に採つたものを用ゐるもよし。【一切の風氣】蒼耳の嫩葉一石を切り、麥糵五升に和して塊にし、蒿艾の中に二十日間罯ふて麴にし、米一升で飯を炊き、冷暖を加減してその麴三升を入れて釀し、二七日間封じ熟し、それを空心に暖服すれば神驗がある。

此の酒を封ずるには、布を二重にかければよし、密封し過ぎてはならぬ。密にすれば溢れ出るものだ。馬肉、豬肉を忌む。（孟詵食療本草）【諸風の頭運】蒼耳葉を晒し乾して末にし、一日三回、一錢づつを酒で調へて服す。吐くやうならば蜜で梧子大の丸にして二十丸づつ服す。十日で全く快癒する。（楊氏經驗方）【血風腦運】方は發明の項にある。【手、足の毒攻】腫れて斷れるほど痛むには、蒼耳の搗汁に漬け、幷に滓を傅ければ立ろに效がある。春は心を用ゐ、冬は子を用ゐる。（千金翼）【突然水毒に中りたるもの】初期には頭、目が微痛し、惡寒し、骨節が强急し、日中は醒めて夕刻劇くなり、手、足逆冷し、三日を經過すれば蟲が下部を蝕し、六七日經過すれば膿潰して五臟まで蝕ひ入り、遂には死に至るものである。常思草を搗き、汁を絞つて一二升を服し、幷に綿にしめしてその下部を導く。（肘後方）【毒蛇、溪毒】沙虱、射工等の螫傷で、口噤し、眼黑く、手、足が强直し、毒が腹に內攻すれば塊と成る。手當を猶豫すれば治療の方法がない。蒼耳の嫩苗一握の汁を取り、酒に和して溫めて灌ぎ込み、滓を傷處に厚く傅ける。（勝金方）【疫病の豫防】五月五日正午に蒼耳の嫩葉を多く採つて陰乾して貯藏し、時に應じてそれを末にして冷水で二錢を服し、或

は水で煎じて一家擧つて皆服す。能く邪惡を辟ける。(千金方)【風瘙癮疹】身痒止まぬには、蒼耳の莖、葉、子等分を末にし、二(一九)錢づつを豆淋酒で調へて服す。(聖惠方)【顏面の黑斑】蒼耳葉を焙じて末にし、食後に一錢づつを米飮で調へて服す。一箇月で癒える。(摘玄方)【赤、白汗斑】蒼耳の嫩葉尖と青鹽を擂り爛らし、一日五七回塗擦して五六箇月間經てば效がある。(摘玄方)【大風癘疾】袖珍方では、嫩蒼耳、荷葉等分を末にし、一日二回、二錢づつを溫酒で服す。○乾坤生意では、蒼耳の葉を末にし、大楓子油で和して梧子大の丸にし、一日二回、三四十丸づつを茶湯で服す。○又ある方では、五月五日、或は六月六日の五更に露を帶びた蒼耳草を採り、搗汁を熬つて錠子にして半斤を取り、その藥一錠を、鱧魚一尾を剖開して肝腸を去らずにそのまま入れて絲で縫ひ合はせ、酒二盌で煮熟して喫はす。魚を用ゐること三五尾以内で癒える。一百日の間鹽を忌む。【突然に生じた惡瘡】蒼耳、桃皮を屑にして瘡中に納れる(二〇)。【反花惡瘡】肉が飯粒のやうになつて破れて出血し、破れるに隨つて續出するには、蒼耳葉の搗汁三合を服し、幷に一日二回塗る。(聖濟總錄)【一切の丁腫】誌曰く、危困せる者には、蒼耳の、根、葉を搗き、童尿に和して汁

(一九)大觀錢下ヒノ一字アリ。

(二〇)大觀ニ百一方ヲ引ク。

を絞り、一日三回、一升づつを冷服すれば根を抜く。甚だ効驗がある。○養生方では、蒼耳の根、苗の焼灰を醋に和して沈澱させて塗り、乾けば再び換へる。十回以內で根を抜き出す。○邵眞人方では、蒼耳根三兩半、烏梅肉五箇、葱根を鬚のまま三本、酒二鍾を一鍾に煎じ、熱服して汗を取る。【齒風動痛】蒼耳一握を漿水で煮て鹽を入れて含嗽する。(外臺祕要)【(二一)纏喉風病】蒼耳根一把、老薑一塊を汁に研り、酒を入れて服す。(聖濟總錄)【赤目で瘡を生じたるもの】痛むには、道人頭末二兩、乳香一錢を用ゐ、一錢づつを烟に焼いて鼻から嗜ふ。(聖濟總錄)【鼻衄の止まぬもの】蒼耳の莖、葉の搗汁一小盞を服す。(聖惠方)【五痔下血】五月五日に採つた蒼耳の莖葉を末にし、水で方寸匕を服すれば甚だ効がある。(千金翼)【赤、白下痢】蒼耳草を多少に拘はらず洗淨し、水で煮爛して渣を去り、蜜を入れて武火で熬膏し、一二匙づつを白湯で服す。(醫方摘玄)【産後の諸痢】蒼耳葉を搗いて汁を絞り、一日三四回、半中盞づつを溫服する。(聖惠方)【誤つて銅錢を呑んだとき】蒼耳頭一把を水一升に十餘度浸してその水を飲めば癒える。(肘後方)【花蜘蛛の毒】その咬毒は毒蛇と異らない。野緋絲、即ち道人頭の搗汁一盞を服し、同時に渣を傅ける。(摘玄方)

(二一)纏喉風は實布的利亞。

（一）牧野云フ、此草ハ極メテ普通ニ我邦ニモ山野ニ見ラルルモノデアル。

花 主治 【白癩頑癢】（時珍）

天名精（一）（本經上品）

和名 やぶたばこ
學名 Carpesium abrotanoides, L.
科名 きく科（菊科）

校正 時珍曰く、蘇恭、沈括二氏の說に據つて、唐本の鶴虱、開寶の地菘、別錄有名未用の埊松を併せ入る。

釋名 天蔓菁（別錄） 天門精（別錄） 地菘（唐本） 埊松（別錄） 埊は地に同じ。玉門精（別錄） 麥句薑（本經） 蟾蜍蘭（別錄） 蝦蟇藍（本經） 蚵蚾草（綱目） 豕首（本經） 彘顱（別錄） 活鹿草（異苑） 劉𢥧草 𢥧の發音は胡革の反（カク）である。皺面草（綱目） 母豬芥（綱目） 實を鶴虱と名け、根を杜牛膝と名ける。

恭曰く、天名精、卽ち活鹿草であつて、別錄には一名天蔓菁といひ、南方地方では地菘と呼ぶが、それは葉が蔓菁、菘菜に類似してゐるからの名稱だ。その味が甘く辛いところから薑の字を付けた名稱がある。形狀が藍のやうで蝦蟇がその下に好んで住むものだから蝦蟇藍と名け、香氣が蘭に似てゐるところからまた蟾蜍蘭とも

名ける。

○時珍曰く、天名精といふは天蔓菁の訛であつて、その臭氣が(二)豕彘のやうだから豕首、彘顱などの名稱がある。昔は活鹿草といつたものだ。その氣が臊いところから、俗間で狐狸臊と轉訛していふがこのものだ。爾雅には『葑蘋は豕首なり』とあり、郭璞の注に『江東では豨首と呼ぶ』これを和ぜて蠶蛹を煮乾せば(三)食へるものだ』とある。

○藏器曰く、郭璞が、爾雅の蘧麥に註して『卽ち麥句薑だ』といつたは誤りだ。陶隱居は鉤樟の條に註して『狼牙に似て氣の辛く臭い一種の草がある。名稱は地菘といふものだが、世間では劉憹草と呼んでゐる。金瘡に主效がある』といつてある。按ずるに、異苑には『宋の元嘉年間、(四)青州の劉憹が一頭の麞を射止め、五藏を剖いてこの草で塞いで置くと、麞は蹶然として起き上つた。憹が不思議に思つてその草を拔き取ると、麞は再び打ち倒れる。三回試みて三回共同樣だつたので、憹は密にこの草に關することを記錄して栽培し、折傷の治療に實驗して見ると、なかなか效驗があつた。そこで一般に劉憹草と呼ぶやうになつたのだ』とある。活鹿なる名

(二)豕彘ハブタ。

(三)本書食字ナシ。

(四)青州、宋ニハ今ノ山東省ノ益都、臨淄、壽光、臨朐、博興、樂安（宋ノ千乘）ノ六縣ヲ統べ、益都ニ治ス。

稱もあるのだから、正にこの層の挿話と合致する。陶氏、蘇氏の倶に言ふ地菘なるものは必ず別箇の二物ではないと思ふ。

「正　誤」　弘景曰く、天名精、即ち今の豨薟のことだ。また豨首ともいふ。夏季に杵汁を服すれば熱病を除く。味は至つて苦い。甘いともいふがそれは誤りらしい。

〔地菘天名精〕

恭曰く、豨首は苦くして臭い。名精は辛くして香しい。全然似も付かぬものだ。

禹錫曰く、蘇恭は『天名精は南方で地菘と名けるものだ』といひ、陳藏器はその本草で諸說の混亂を解決したが、やはり天名精を地菘としてある。開寶本草に、地菘の一箇條を重複記載したのは當を缺くものだ。編輯體制上削除すべきものである。

時珍曰く、按ずるに、沈括の筆談に『世間では天名精といふものを知らぬ。それ

で妄に地菘を火杴だなどと誤認したのだ。本草には、また鶴虱の一條を揭げてあつて、全體がすべて混亂して了つたが、實は地菘、卽ち天名精で、その葉は菘、又は蔓菁に似てゐるところから右の二名稱があるのであつて、鶴虱とはその草の實であることを知らぬのだ』とある。又、別錄の有名未用の部にある埊松は、卽ちこの地菘のことで、やはり誤つて揭載したものだ。玆にはいづれもその誤を正して一箇條に併載する。

(五)**集解**　別錄に曰く、天名精は(六)平原の川澤に生ずる。五月採收する。

保昇曰く、地菘のことであつて、小品方には天(七)蔓菁とも天(八)蕪精ともいつてある。葉は(九)山南地方の菘菜に似たもので、夏、秋の間に條が抽き出る。頗る薄荷に似たもので、花は紫白色だ。味は辛くして香しい。

志曰く、地菘は所在いづれにもあるものだ。人家や路傍の日陰の土地に生える。高さ二三寸、葉は菘の葉に似て小さい。又曰く、鶴虱は波斯に產するものが勝れてゐる。今は上黨にもあるが、その功力藥勢は波斯のものより薄弱だ。

恭曰く、鶴虱は西戎に生ずる。子は蓬蒿子に似て細かい。莖、葉と合せ用ゐる。

(五)木村(康)曰ク、村山義温—植研四(昭三)一九五ニ說アリ。
(六)平原ハ漢ニ郡ヲ置ク。戰國ノ趙ノ邑ナリ。今ノ山東省舊武定、濟南府ノ西部、北ハ樂陵ヨリ南ハ長淸ノ諸縣ニ至ル。今ノ平原縣ニ治ス。
(七)大觀ニ蔓ヲ蕪ニ作ル。
(八)又、蕪ヲ蔓ニ作ル。
(九)山南ハ瀨盧ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)衡湘ハ今ノ湖南省衡陽縣附近湘水沿流ノ地方ヲ指ス。

(一一)巴ハ漢ノ巴郡ノ地、卽チ今ノ四川省ノ東部、保寧、順慶、酆都、雲陽、夔州、太平、南江等ノ地ヲ包ヌ。

(一二)負蠜ハコキムシ

○頌曰く、天名精は江湖地方には何處にでもある。形狀は韓保昇の說明の通りだ。

○又曰く、鶴虱は江淮、(一〇)衡湘地方いづれにもある。春苗が生え、葉は皺み、紫蘇に似て大きく、尖が長くて光らない。莖は高さ二尺ばかりのものだ。七月に菊に似た黃白の花を開き、八月實を結ぶ。子は極めて尖細で、乾けば黃黑色になる。南方地方ではその葉を火杴と呼んでゐるが、按ずるに、火杴は豨薟のことであつて、花・實はよく似てゐるが別種の植物だ。雜へ用ゐてはならない。

○時珍曰く、天名精は、嫩苗は綠色で皺葉の菘芥に似たものだ。微し狐臭があるが、淘り浸して煮ればやはり食物になる。成長すれば莖が立ち、小さい野菊の花のやうな小さい黃色の花を開いて實を結ぶ。實は同蒿子ほどでやはりよく似てゐる。人の衣服に粘著するものだ。狐臭が尤も甚しいが、炒熟すれば香しくなる。故に諸家いづれも辛くして香しいといつたのだ。これを食ふといふは、やはり(一一)巴地方(一二)で負蠜を食ひ、南方地方で山柰を食ふと同じやうなわけだ。根は白色で短く、牛膝のやうだ。この物は甚だ珍しくないものだが、唐本草には『鶴虱は西戎に產する』とあり、宋の本草には『波斯から出る』とある。如何にも不可解のやうにも見え

るが、蓋し當時は一般にこの物を藥用にする知識がなく、ただ西戎や波斯地方で始めて藥功が發見されてゐた。且つその土地が藥艸としての發育に適してゐたから斯く言はれたものだ。やはり苜宿も『西域から出る』とあるが、何ぞ知らん中國では馬の飼糧に使つてゐるといふやうなわけだ。詳細は豨薟の條を見よ。

葉　根も同じ。**氣味**【甘し、寒にして毒なし】別錄に曰く、埊松は辛し、毒なし。時珍曰く、微し辛く甘し、小毒あり、生の汁は吐かせる。之才曰く、垣衣、地黃が使となる。**主治**【瘀血、血瘕、死せんとするほどの下血。尿血を止める。久しく服すれば身體を輕くし、老衰を防ぐ】(本經)【小蟲を除き、痺を去り、胸中の結熱を除き、煩渴を止め、水を逐ひ、大いに吐き、下す】(別錄)【血を破り、肌を生じ、鼻衄を止め、三蟲を殺し、諸毒腫を除く。丁瘡、瘻痔、金瘡內射、身體の癢きもの、癮瘮の止まぬものは、これを擦りつければ立ろに已む】(唐本)【地菘は金瘡の止血に主效がある。惡蟲、蛇の螫毒を解するには採んで傳ける】(開寶)【痰を吐し、瘧を止め、牙痛、口緊、喉痺を治す】(時珍)【埊松は咳、痺に主效がある】(別錄有名未用)

發明　時珍曰く、天名精とは根と苗とを併せての稱呼だ。地菘、埊松とはい

(一三)豬瘟病ハ顏面羅斯即チ丹毒ノ一種。
(一四)乳蛾ハ喉痺偏桃腺炎。
(一五)喉嚨ハ咽喉ニ同ジ。
(一六)刀鑷人ハ理髪師ヲ指スナラン。

づれも苗、葉をいひ、鶴虱とはその子を言ふ。功力は概して痰を吐し、血を止め、蟲を殺し、毒を解するに在る。故に擂つた汁を服すればよく痰瘧を止め、含漱すれば牙疼を止め、揉んで蛇咬に傅け、また(一三)豬瘟病の治療に用ゐるのである。按ずるに、孫天仁の集效方に『凡そ男、女の(一四)乳蛾、(一五)喉嚨腫痛、及び小兒の慢驚風で牙關緊急し、人事不省なるには、鶴虱草、一名皺面草、一名母豬芥、一名杜牛膝の根を取つて洗淨し、搗き爛して好酒を入れ、その汁を絞つて灌げば良久して甦る、また同時に渣を項下に傅ける。或は醋で調へて搽るも妙だ』とある。朱端章の集驗方には『余が檄に應じて淮西の幕府に出仕したとき、牙疼で大いに困つてゐたが、ある(一六)刀鑷人が、草藥一捻を湯に漬け、少時して手でその湯をつけて痛處に挹いてくれたので、直ちに痛が鎮まつた。それ以來その方を得て人の病を治してやつたが、なかなか效驗があつた。その草藥といふのは皺面の地菘であつて、世間では地葱と訛つてゐるが、沈存中の筆談に、特に地菘を說明して、その子を鶴虱と名けるとある。正にこのものだ』とある。錢季誠の方には『鶴虱一個を取つて齒の中に入れて置く』とある。高監の方には『鶴虱を米醋で煎じて口を漱ぐ。或は防風、鶴虱を水

で煎じて含漱し、またその草を研つて痛處を塞ぐ。いづれも有效だ』とある。

【附方】 舊二、新九。【男女の吐血】皺面草、卽ち地菘を晒して末にし、一日二回、一二錢づつを茅花を泡けた湯で調へて服す。(衞生易簡) 【咽喉腫塞】傷寒蘊要では、痰涎壅滯で喉が腫れ、水も通らぬには、地菘、一名鶴虱草を根、葉を連ねて搗き、その汁を鵝翎で掃き入れる。痰を去るに最も妙だ。○聖濟總錄では、杜牛膝、(一七)鼓搥草を共に搗いてその汁を灌ぐ、通らぬときは鼻から灌ぐ。吐して妙效がある。○又ある方では、土牛膝を、春、夏は莖を、秋、冬は根を一把、青礬半兩を共に研つて患部へ點ける。膿血、痰沫を吐かせて癒える。【(一八)纏喉風腫】蚵蚾草、卽ち皺面草を細研し、生蜜で和して彈子大の丸にし、一二丸づつを噙めば癒える。乾いたものを末にして蜜で丸にしてもよし。これを救生丸と名ける。(經效濟世方)【諸骨哽咽】地菘、馬鞭草各一握を根を去り、白梅肉一箇、白礬一錢と搗いて彈子大の丸にし、綿で裹んで含嚥する。骨は自から軟かになつて下る。(普濟方) 【(一九)風毒瘰癧】赤く腫れる。地菘を搗いて傅け、乾けば傅け換へる。(聖惠方) 【疔瘡腫毒】鶴虱草、浮酒糟を共に搗いて傅ければ立ろに效がある。(孫氏集效方) 【發背の初期】地菘の杵

(一七)鼓搥草ハ牛膝ノ一名。
(一八)纏喉風ハヂフテリヤニ似タルモノ。
(一九)風毒ハ嚢狀膿腫、移轉膿腫ノ類。

汁一升を一日二回服し、瘥えれば止める。(傷寒類要)【惡瘡腫毒】地菘の搗汁を一日三四回服す。(外臺祕要)【惡蛇の咬傷】地菘を搗いて傅ける。(易簡方)

鶴虱(唐本草)［氣味］【苦く(二〇)辛し、小毒あり】大明曰く、涼にして毒なし。［主治］【蚘、蟯蟲には、散にして肥肉の臛汁で方寸匕を服す。また丸、散にも入れて用ゐる】(唐本)【蟲の心痛には、淡醋で半匕を和して服すれば立ろに瘥える】(開寶)【五臟の蟲を殺し、瘧を止める。惡瘡に傅ける】(大明)

［發明］頌曰く、鶴虱は殺蟲方中の最要藥である。初虞世の古今錄驗方に『蚘咬の心痛を療ずるには、鶴虱十兩を搗き篩つて蜜で梧子大の丸にし、蜜湯で空心に四五十丸を吞む。酒、肉を忌む。韋雲は心痛を患つて十年間瘥えなかつたが、これを雜方中から取合はせて服して癒えた』とある。李絳兵部手集方でも、小兒の蚘蟲が心腹を嚙んで痛むを治するに、やはり鶴虱のみを研末して肥豬肉汁で飲下す。五歲の小兒は一回に二分を服す。それで蟲が出て直ちに痛が止まるとしてある。

［附方］舊一。【大腸より蟲の出る病】その蟲が斷れず、斷れてもまた生じ、步行、坐居に困難なるには、鶴虱末を水で調へて半兩を服すれば自から癒える(怪疾奇方)

(二〇)大觀ニ辛チ平ニ作ル。

（一）豨　薟　俗に豨薟（キケン）とある　（唐本）　和名　めなもみ　學名　Siegesbeckia pubescens, Makino.　科名　きく科（菊科）

校正　唐本の豬膏母を併せ入る。

釋名　希仙（綱目）　火杴草（唐本）　豬膏母（唐本）　虎膏（唐本）　狗膏（唐本）　粘糊菜（救荒）　時珍曰く、韻書に、（二）楚の地方では豬を呼んで豨といひ、草の氣味の辛毒なるを薟といふとある。この草は臭氣が豬のやうで味が薟螫するものだから豨薟といふのだ。豬膏、虎膏、狗膏といふも、いづれもその臭氣の似た點、及び虎、狗の咬傷に治效がある點から名けたものだ。火杴とあるは虎薟と書くが正しいので、俗音の訛つたものだ。近來は一般にまた豨薟を訛つて希仙といふ。救荒本草には『嫩苗を煮熟し浸して苦味を去り、油、鹽で味を付けて食ふ。故に俗に粘糊菜といふ』とある。

集解　恭曰く、豨薟は、田野の農民は皆これを（三）食ふ。一名火杴といひ、葉は酸漿に似て狹く長く、花は黄白色だ。三月、四月に苗、葉を採つて暴乾する。又

（一）牧野云フ、めなもみニ三品ガアッテ普通ニめなもみトイフモノハ豨薟ニ當リ其學名ハ下ニ記スル通リデアル。之レニ似テ毛少ナク全草ヤヤ小形ナ品ヲこめなもみト稱スル。めなもみト同ジク普通ニ野外ニ生ズル、學名ヲ S. glabrescens, Makino. ト稱スル。今一種我邦ノ西南邊方ニ産スルモノガアッテ琉球、臺灣ニ分布スル、印度邊ニアルモノモ之レト同シデアル、之レヲつくしめなもみト呼ビ學名ハ S. orientalis, L. デアル。

（二）楚ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。

（三）大觀ニ食ヲ識ニ作ル。

曰く、豬膏母は平澤、下濕の地に生ずる。所在いづれにもあるもので、一名虎膏、一名狗膏といふ。葉は蒼耳に似て莖が圓く毛がある。

○頌曰く、豨薟は處處にある。春苗が生え、葉は芥葉に似て狹く長く、文が粗い。莖は高さ二三尺ある。秋初に（一）菊のやうな花を開き、頗る鶴虱に似た實を結ぶ。夏葉を採つて暴乾して用ゐる。

〔豨　薟〕

○藏器曰く、豬膏草は葉が荏に似て毛がある。

○保昇曰く、豬膏葉は蒼耳に似て兩枝相對し、莖、葉倶に毛があつて黄白色だ。五月、六月に苗を採つて日光で乾かす。

○時珍曰く、按ずるに、蘇恭の唐本草には、豨薟は酸漿に似たもの、豬膏母は蒼耳に似たものとして二種に區別してあるが、成訥の豨薟丸を進むる表には『この藥は本草の記述と異ふ。多く肥沃の地に生ずるもので、高さ三尺ばかり、葉は相對してゐる』とあり、張詠の豨薟丸の表には『この草は金稜、銀線、素莖、紫荄、節に對して生える。蜀では火杴と呼ぶ。莖、葉は頗る蒼耳と同じものだ』とあり、沈括の

（一）大觀ニ菊字下ニ秋末ノ二字アリ。

筆談には『一般人は妄に地菘を誤認して火杴としてゐるが、火杴を單服する法といふがあつて、それを見ると、その用ゐてあるものは地菘である。火杴を用うべきものではない。火杴といふは本草に豬膏母と名けてあるその物だ。後世の人は本草の記述は重複してあるといふことを識らぬのだ』とある。按ずるに、この數說は各異つて居る。今一般に風痺に多く豨薟丸を用ゐてゐるが、果して何れに依據してよいものか問題だ。

時珍が嘗て諸草を蒐集して研究した結果に依れば、豬膏草は莖が青白くして直稜があり、また斑點がある。葉は蒼耳に似て微し長く、地菘に似て稍薄い。葉は節に對して生え、莖、葉いづれも細毛がある。肥沃の地に生えたものは一株から數十の枝が分れてゐる。八九月に深黃色の小さい花を開き、中に同蒿子のやうな長い子があり、外蕚に細刺があつて人に粘るものだ。地菘は莖は靑く、圓くして稜もなく、斑もなく、毛もなく、葉は皺み、菘芥に似てやはり節に對して生えない。これに由つて觀れば、成、張二氏の所說と相合致するもののやうである。現に河南の(五)陳州では豬薟を採つて方物に充してゐるが、そのものの形狀もやはり豬膏草だ。かやう

(五)陳州ハ隋ニ置ク今ノ河南省淮陽縣ソノ舊治ナリ。

（六）木村（康）曰ク、成分ハ苦味質ダウルチン（W. P. 767）

な次第だから、沈氏の所謂る豨莶が豬膏母であることはその説に於て疑ない。蘇恭の所謂る酸漿に似たものといふは、龍葵のことで豨莶ではない。蓋し誤認である。ただ沈氏が『世間で單服する火杴は地菘のことだから、豬膏母を用うべきものでない』といふは、成氏、張氏の説と相反してゐるやうに思はれる。

今按ずるに、豨莶、豬膏母の條には、いづれも風を治するの説がない。ただ本經の地菘の條に『痺を去り、熱を除く。久しく服すれば身體を輕くし、老衰を防ぐ』なる言葉があつて見れば、風を治するには地菘を用うべきもののやうでもあるが、しかし、成、張二氏が天子に上つた方に虛謬を述べる筈はなからうと思ふ。或はこの二草共に治風の功力があるものかとも思はれるが、ところが現に服用する豬膏母といふ豨莶には、やはり往往效驗があつて、その場合地菘といつて服することはないのだから、豨莶の豬膏母であることは十分疑ふ餘地がない。

豨莶（六）［氣味］『苦し、寒にして小毒あり。又曰く、豬膏母は辛く苦し、平にして毒なし』藏器曰く。小毒あり。蘇恭が『豬膏は毒なし』といふは誤だ。

［主治］『豨莶は、熱䘌煩滿で食事不能なるには、生の擣汁三合を服す。多けれ

ば吐かせる。又曰く、豨薟母は、金瘡に主效があり、痛を止め、血を斷ち、肉を生じ、諸惡瘡を除き、浮腫を消す。搗いて患部を封じ、湯にして漬け、散にして傅ける、いづれも良し】（蘇恭）【久瘧痰癊に主效があつて、搗汁を服して吐かす。搗いて虎傷、狗咬、蜘蛛咬、蠶咬、蠼螋溺瘡に傅ける】（藏器）【肝、腎の風氣で四肢が麻痺し、骨痛、膝弱のもの、風濕諸瘡を治す】（時珍）

發明　頌曰く、蜀地方で行はれる豨薟の單服法は、五月五日、六月六日、九月九日に葉を採り、根、莖、花、實を去つて洗淨して暴乾し、甑中に入れて層層に酒と蜜を洒いで蒸してまた暴す。此の如く九回繰り返せば、氣味が極めて香美になる。それを熬り搗き篩つて末にし、蜜で丸にして服するのである。かくすれば、甚だ元氣を益し、肝、腎、風氣の四肢麻痺、骨間の（七）冷、腰、膝無力を治し、またよく大腸の氣を行らすといふことだ。諸州の報告書の說明は、いづれも『性寒にして小毒あり』とあつて唐本と同樣だが、ただ（八）文州、及び高郵州のものだけ『性熱にして毒なし』これを服すれば補益し、五臟を安じ、毛髮を生じ、兼て風濕瘡、肌肉の頑痺、婦人の久冷に主效がある。これを用ゐるには、粗莖を取去つて枝、葉、花、

（七）大觀ニ冷ヲ疼ニ作ル。

（八）文州ハ今ノ甘肅省文縣ソノ地ナリ。高郵ハ今ノ江蘇省高郵縣ソノ舊軍治ナリ。

(九)大觀ニ訢ニ作ル。
(一〇)大觀ニ二十三ニ作ル。
(一一)草、大觀ニ葉ニ作ル。
(一二)大觀ニ足ヲ蒸ニ作ル。

實を蒸し乾して用ゐるがよし』とあつて、兩說同一でない。これは葉のみ單用すれば寒にして毒ありだが、枝、花、實を併用すれば熱にして毒なしといふことになるのではあるまいか。それとも產地の關係で不同が生じたわけであらうか。

時珍曰く、生の搗汁を服すれば吐かせるものだ。故に小毒ありといふのである。九蒸九暴すれば人體を補し、痺を去るものだ。故に毒なしといふのである。生のものは性寒、熟すれば性溫なるものだ。熱といふは誤である。

愼微曰く、按ずるに、江陵府節度使成訥が豨薟丸の方を進むる表の略に云く、

臣、弟ニ(九)訮トイフモノアリ。年(一〇)二十一。風ニ中ツテ枕ニ伏スコト五年。百醫瘥エズ。道人鍾針ナルモノアリ、因テ此ノ患ヲ視テ曰ク、豨薟丸ヲ餌スベシ、必ズ愈エン、其ノ(一一)草多ク沃壤ニ生ズ、高サ三尺許リ、節葉相對ス。當ニ夏五月以來之ヲ收ムベシ。毎ニ地ヲ去ルコト五寸ニシテ剪刈シ、溫水ヲ以テ泥土ヲ洗ヒ去リ、葉、及ビ枝頭ヲ摘ミ、凡ソ九蒸九暴ス。必ズシモ太ダ燥セザレ。但ダ以ツテ(一二)足ルヲ取ツテ度ト爲ス。仍テ熬リ、搗キ、末ト爲シ、煉蜜ニテ丸ニスルコト梧子大ノ如クシ、空心ニ溫酒、或ハ米飮ニテ下スコト二三十丸、服

シテ二千丸ニ至ル、所患愈加ルモ憂慮スルコトヲ得ザレ。是レ藥攻ノ力ナリ。服シテ四千丸ニ至ツテ必ラズ復スルコトヲ得ン。五千丸ニ至ツテ當ニ丁壯ニ復スベシト。臣、法ニ依ツテ修合シ、訝ヲシテ之ヲ服セシム。果シテ其ノ言ノ如シ。服後須ク飯三五匙ヲ喫シテ之ヲ壓スベシ。五月五日ニ采ルモノ佳ナリ。勅ヲ奉ジ、醫院ニ宣付シテ詳錄ス。

又、益州の地方長官張詠が豨薟丸を進むる表の略に曰く、

切ニ以ルニ、石ヲ餐シ水ヲ飲ムハ充腸ノ饌ト作ス可シ。松ヲ餌ヒ栢ヲ（一三）含ムハ亦救病ノ功ヲ成ス。是ノ以ニ、飢ヲ療ズル者ハ羞珍ニ在ラズ。病ヲ愈ス者ハ何ゾ異術ヲ煩サン。倘シ濟時ノ藥ヲ獲バ、輙チ鄙物ノ形ヲ陳ヌ。管窺ヲ恥ヂズ、輙チ天聽ヲ干ス。臣、龍興觀ヲ（一四）換ユルニ因テ一碑ヲ掘得タリ。內ニ氣ヲ修養スルノ術、並ニ藥方二件ヲ說ク。方ニ依リ、人ヲ差シテ訪問シ采覓スルニ、其ノ草頗ル異アリ。金稜、銀線、素莖、紫荄、節ニ對シテ生ズ。蜀ニハ火枕ト號ス。莖葉頗ル蒼耳ニ同ジ。高キニ登リ險ヲ歷ルヲ費サズ、每ニ常ニ求ムルコト少シテ獲ルコト多シ。急ニ采ルモ難キニ非ズ、廣ク收ムルコト甚ダ易シ。倘

（一三）大觀ニ含ヲ食ニ作ル。

（一四）換ヲ食物本草ニハ修建ノ二字ニ作ル。

シ勤メテ久服スレバ、旋テ神功ヲ見ハス。誰カ知ラン、至賤ノ中、乃チ殊常ノ效アラントハ。臣自ラ喫シ、百服ニ至テ眼目（一五）淸明ナリ。卽チ千服ニ至テ（一六）髭鬚烏黑、筋力輕健、效驗多端ナリ。臣ガ本州ニ都押衙羅守一ナルモノアリ、曾テ中風ニ因ツテ馬ヨリ墜チ、音ヲ失シテ語ラズ。臣十服ヲ與フ、共ノ病立ロニ瘥ユ。又、和尚智嚴ナルモノ、年七十ニシテ忽チ偏風ヲ患ヒ、口眼喎斜シ、時時ニ涎ヲ吐ク。臣十服ヲ與フ、亦便チ痊ルコトヲ得タリ。（一七）今一百剤ヲ合ス、職貢史元ヲ（一八）差シテ奏進ス。

附方　新五。【風寒泄瀉】火枕丸——風氣が腸胃に行つて泄瀉するを治す。火枕草を末にして醋糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。（聖濟總錄）【癰疽腫毒】一切の惡瘡には、豨薟草の端午に採つたもの一兩、乳香一兩、白礬を燒いて半兩を末にし、二錢づつを熱酒で調へて服す。毒重きものは續けざまに三服を服す。（乾坤祕韞）【發背丁瘡】豨薟草、五葉草、卽ち五爪龍、野紅花卽ち小薊、大蒜等分を擂爛し、熱酒一盌を入れて汁を絞つて服す。發汗して立ろに效がある（乾坤生意）【丁瘡腫毒】端午に採つて日光で乾した豨薟草を末にし、半兩

（一五）大觀ニ淸ヲ輕ニ作ル。
（一六）大觀ニ鬚髮ニ作ル。
（一七）食物本草今ノ次ニ謹修ノ二字アリ。
（一八）差ハ擇ノ意。

(一九)類鼻
(和名)(學名)(科名)共ニ未詳。

(二〇)羊尿柴
(和名)(學名)(科名)共ニ未詳。

(一)牧野云フ、此ささハ片山直人著ノ日本竹譜ニ篃竹ニ充テテ出テ居ルモノデアル、我ちまきざさヨリハ葉ガ闊大デアル、從來我邦ノ學者ガ爲セシ様ニ之レちまきざさ、くまざさ、ねまがりだけトスルノハ非デアル。

づつを熱酒で調へて服す。發汗して直ちに癒える。極めて效驗あるものだ。(集簡方)

【反胃吐食】火杴草を焙じて末にし、蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを沸湯で服す。(百一選方)

附錄　(一九)**類鼻**(別錄) 有名未用に曰く、味酸し、溫にして毒なし。痿痺に主效がある。耕地の中や高地に生えるもので、葉は天名精のやうで美しい。根を五月に採る。時珍曰く、これは豨薟草に似たものだ。古代と現代とは名稱の異ふ場合もあるのだから、此に附記して置く。

(二〇)**羊尿柴** 時珍曰く、按ずるに、乾坤生意に『一名牛屎柴。山野中に生えるもので、葉は鶴虱に類し、四月白花を開く、その葉は癰疽發背に主效がある。搗いて傅けるのだ。冬季は根を用ゐる。この物は魚を毒殺し得るものだ』とある。

(一)箬　(綱目)

和名　おほちまきざさ(新稱)
學名　Sasa tessellata, Makino et Shibata.
科名　禾本科(禾本科)

釋名　**篛** 箬と同じ。**蘘葉** 時珍曰く、箬は竹の若くして弱いものだから命

けた名稱だ。生えた狀態が(二)疎遼だからまた遼といふ。

集解 時珍曰く、箬は南方の平澤に生ずる。その根と莖とは皆小竹に似てゐるが、節箨と葉とは皆蘆荻に似てゐる。葉の表面は青く、背面は淡く、柔だが靱い。新舊相交つて四季を通じて常に青い。南方では葉を取つて笠に作り、また茶、鹽の包裝や米、糉を包むに用ゐ、婦人は(三)䩫の底などに敷く。

〔箬葉〕

葉 氣味 【甘し、寒にして毒なし】 主治 【男女の吐血、衄血、嘔血、咯血、下血、いづれも燒いて性を存して溫湯で一錢匕を服す。又、小便を通じ、肺氣、喉痺を利し、癰腫を消す】(時珍)

附方 新十二。【一切の眼疾】(四)籠篛を灰に燒いて取つた淋汁で洗ふ。久しく試みれば自から效がある。(經驗方) 【咽喉閉痛】箬葉、燈心草の燒灰等分を吹くが

(二) 疎遼ハマバラニトホイコト。

(三) 䩫ハ草履。

(四) 籠篛ハ竹籠。

甚だ妙である。(集簡方)【突然耳が痛むもの】或は紅腫内脹するには、霜を經た青箬の外に露れて將に朽ちんとするものを取り、燒いて性を存し、末にして耳中に傅け入れれば疼が直ちに止む。(楊起簡便方)【肺壅の鼻衄】箬葉の燒灰、白麪各三錢を研りまぜ、二錢を井華水で服す。(聖濟總錄)【月經不止】箬葉灰、蠶紙灰等分を末にし、二錢づつを米飲で服す。(聖濟總錄)【腸風便血】茶(五)簍の内の箬葉を燒いて性を存し、三匙づつを空心に糯米湯で服す。或は麝香少量を入れる。(王璆百一選方)【男女の血淋】また五淋を治す。多年用ゐた酒瓶頭の箬葉——三五年乃至十年のもの尤も佳し——七箇を燒いて性を存して麝香少量を入れ、一日三回、陳米飲で服す。ある患者は二服で癒えた。福建では夏期の酒を煮るのでこの物が多くある。(百一選)【尿白く注ぐが如きもの】小腹氣痛する。茶籠の内の箬葉を燒いて性を存し、麝香少量を入れて米飲で服す。(經驗方)【小便澁滯】通ぜぬには、乾箬葉一兩の燒灰と滑石半兩とを末にし、米飲で二錢づつを服す。(普濟方)【男女の(六)轉脬】方は上に同じ。【(七)吹奶乳癰】五月五日に糉を包んだ箬の燒灰二錢を酒で服すれば散る。累りに用ゐて效力がある。(濟急仙方)【(八)痘瘡倒靨】箬葉灰一錢、麝香少量を酒で服す。(張德恭痘疹

(五) 簍ハ籠ヲ云フ。

(六) 轉脬ハ小便閉。

(七) 吹奶ハ乳房炎。

(八) 活幼心法ニ、痘瘡初見一二日細小四五日漸大頂平至六七日脚漸濶頂愈平陷其色金白色名曰倒靨。

便覽方)

(一)蘆（別錄下品）

和名　あし、又、よし
學名　Phragmites communis, Trin.
科名　禾本科(禾本科)

校正　拾遺の江中采出蘆を併せ入る。

釋名　**葦**　音は偉(ヰ)である。**葭**　音は加(カ)である。花を蓬蕽と名ける。(唐本)　笋を虇と名ける。虇、音は拳(ケン)　時珍曰く、按ずるに、毛萇の詩疏に『葦の初めて生えたばかりのものを葭といひ、まだ秀でぬものを蘆といひ、長成したものを葦といふ。葦は偉大を意味し、蘆は色の盧黑を意味し、葭は嘉美を意味する』とある。

集解　恭曰く、蘆根は下濕の地に生ずる。莖、葉は竹に似て、花は荻花のやうなものだ。花を蓬蕽と名ける。二月、八月に根を採り、日光で乾して用ゐる。

頌曰く、今は所在にある。下濕の地、川の土堤や澤の中に生えるもので、その狀態はすべて竹に似て、葉が莖を抱いて生え、枝がない。花は白い穗になつて茅花の

(一)牧野云フ、蘆ハ極メテ普通ノ品デ何レニモ多ク之レヲ見ル、之レニ能ク肖タモノデつるよしトモぢしばりトモ云フモノガアルガ、之レハ其地下莖ガ地面上ヲ走リ蘆ノ地中ヲ走ルニ反スルノデ直グニ見分ケラルル、此品ノ學名ハ Phragmites prostratus, Makino. (Ph. japonica, Steud. ?)デアル、又同屬ノせいこのよし一名うどのよしハよしたけ (Arundo Donax, L.) ノヤウニ大クナルモノデ Ph. Karka, Trin. ノ學名ヲ有スルモノデアル。

やうだ。根も竹の根のやうだが節がまばらだ。その根を水底から取るのである。味は甘く辛い。水上に露出したもの、水中に浮んだものはいづれも用ゐるに堪へない。

按ずるに、郭璞注爾雅に據れば、葭、卽ち蘆である。葦、卽ち蘆の成長したもの、菼薍(たんらん)は葦に似て小さく、中が實したもので、江東では烏蓲と呼ぶ。蓲の音は丘(キウ)である。或はこれを適(てき)といふ。卽ち荻である。秋季に入つて堅く成熟したものは卽ち萑といふ。萑は音桓(クワン)である。蒹(けん)は萑に似て細く長く、高さ數尺になる。江東ではこれを薕(れん)といふ。その花は皆(二)芀と名ける。芀の音は調(テウ)である。その(三)萠は皆虇と名け、竹筍(ちくじゅん)のやうに食物となし得るものだといふ。右の說の通りとすれば、蘆、葦は通じて一物であつて、所謂蒹とは現に簾に作るもののこと、菼(たん)とは現に薪にするもののことだが、一般人は蒹と菼、蘆と葦との區別がはつきりしてゐない。又、北方では葦と蘆を二物とし、水邊、下濕の地に生えるものを皆葦といひ、細くして太さ指ほどもないもので、庭園の池畔などに植ゑるものを皆蘆といつて、その幹のやや太くして深碧色(しんぺきしょく)の(四)者はやはり得難いものとしてある。右の通りとすれば、蘆と葦とはいづれでもよいわけになる。

(二) 大觀ニ芀ヲ苕ニ作ル。
(三) 大觀ニ萠ノ下ニ笋ノ字アリ。
(四) 大觀ニハ者ノ次ニ謂之碧蘆ノ四字アリ。

時珍曰く、蘆には數種ある。その長さ一丈ばかり、中が空で皮が薄く色の白いものは葭であり、蘆であり、葦である。葦よりも短く小さく、中が空で皮が厚く色の

〔荻　蘆〕

青蒼なるものは菼であり、薍であり、荻であり、萑である。その最も短小で中の實せるものは蒹であり、簾である。いづれも芽生えから老成までの經過に隨つて名稱を付したもので、身はいづれも竹のやう、葉はいづれも長くして箬葉のやうだ。その根を藥用に入れたのは、古

結果は、性、味いづれも同じである。このもののまだ葉が解け廣がらぬものは、古代には紫籜と謂つたものだ。

斅曰く、蘆根は必ず逆水に生えたものか、黃な泡のある處に生えた肥厚のものを用ゐるやうにするがよい。鬚、節、竝に赤黃色の皮を去つて用ゐる。

根　氣味【甘し、寒にして毒なし】主治【消渴客熱。小便利を止める】(別錄)【反胃、嘔逆で食物の通らぬもの、胃中の熱、傷寒の內熱を療ずるに彌よ良し】(蘇恭)【大熱を解し、胃を開き、噎噦の止まぬを治す】(甄權)【寒熱時疾の煩悶、瀉痢、(五)人渴、孕婦の心熱】(大明)

笋　氣味【小し苦し、冷にして毒なし】甯原曰く、巴豆を忌む。主治【諸肉膈間の客熱に渴を止め、小便を利し、河豚、及び諸魚蟹の毒を解す】(甯原)【の毒を解す】(時珍)

發明　時珍曰く、按ずるに、雷公炮炙論の序に『食を緣し、觴を加ふるには、須らく蘆、朴を煎ずべし』とあり、注に『逆水の蘆根、幷に厚朴の二味等分を湯に煎じて服す』とある。蓋し蘆根の甘は能く胃を緣し、寒は能く火を降すからである。

附方　舊六、新六。【骨蒸肺痿】食事不能なるには、蘇遊の蘆根飮が主效がある。蘆根、麥門冬、地骨皮、生薑各十兩、橘皮、茯苓各五兩、水二斗を八升に煮取り、滓を去つて五回に分服する。發汗して瘥える。(外臺祕要)【勞復、食復】死せんとするには、いづれも蘆根を煮た濃汁を飮む。(肘後方)【嘔噦の止まぬもの】厥逆す

(五)人ハ火ノ誤ナルベシ。

るには、蘆根三斤を切り、水で煮て濃汁を飲む。頻に二升を飲めば必ず效がある。童尿で煮れば三升まで服まぬ内に癒える。(肘後方) 【五噎吐逆】心膈氣滯し、煩悶し、食物の通らぬには、蘆根五兩を剉み、水三大盞で二盞に煮取り、滓を去つて溫服する。(金匱玉函方) 【反胃上氣】蘆根、茅根各二兩、水四升を二升に煮て分服する。(千金方) 【霍亂煩悶】蘆根三錢、麥門冬一錢を水で煎じて服す。(千金方) 【霍亂脹痛】蘆根一升、生薑一升、橘皮五兩、水八升を三升に煎じて分服する。(太平聖惠方) 【狗肉の毒を食つたとき】心下が堅く、或は腹脹し、口乾き、突然發熱して妄語するには、蘆根の煮汁を服す。(梅師方) 【馬肉の中毒】方は上に同じ。(聖惠) 【鯸鮧魚の毒】方は上に同じ。(六)(千金) 【蟹の中毒】方は上に同じ。(千金) 【藥箭の毒に中つたとき】方は上に同じ。(千金)

莖 葉 氣味 【甘し、寒にして毒なし】 主治 【霍亂嘔逆、肺癰煩熱。癰疽には、灰に燒いて淋汁を取り、膏に煎じて用ゐる。惡肉を蝕し、黑子を去る】(時珍) 【攣は金瘡を治し、肉を生じ、瘢を滅する】(徐之才) ○【江中から採り出した蘆は夫婦を和同せしめる。これを用ゐるには法がある】(藏器)

(六) 大觀ニ千金ヲ肘後方ニ作ル。

【發明】時珍曰く、古方では、藥を煎じるに多く勞水、及び陳蘆火を用ゐたが、それは水が强からず、火が盛ならざる點を取るのである。蘆は中が空虛なものだから、能く心肺に入つて上焦の虛熱を治するものだ。

【附方】新六。【霍亂煩渇】腹脹するには、蘆葉一握を水で煎じて服す。○又ある方では、蘆葉五錢、糯米二錢半、竹茹一錢を水で煎じ、薑汁、蜜各半合と合煎して兩沸し、時時に呷ふ（聖惠方）【吐血の止まぬもの】蘆荻の外皮を白くならぬやうに灰に燒いて末にし、蚌粉少量を入れて研りまぜ、一二錢を麥門冬湯で服す。三服で一人を救ひ得る。（聖惠方）【肺癰欬嗽】煩滿し、微熱し、心胸甲錯するには、葦莖湯――葦莖を切つて二升、水二斗を五升の汁に煮取り、桃仁五十箇、薏苡仁、瓜瓣各半升を入れて二升に煮て服す。膿血を吐出して癒えるものだ。（張仲景金匱玉函方）【發背の潰爛】陳蘆葉を末にし、患部を葱椒湯で洗淨してから傅けるが神效がある。（乾坤秘韞）【癰疽の惡肉】白炭灰、白荻灰等分を膏に煎じて塗る。盡く惡肉を蝕して肉を生ずる。膏を貼れば黑子も取れる。この藥はただ十日間だけは保存し得るが、久しく經過すれば效力がなくなる。（葛洪肘後方）【小兒の禿瘡】瘡を鹽湯で洗淨して蒲

葦灰を傅ける。（聖濟總錄）

蓬蕽　［氣味］〔甘し、寒にして毒なし〕［主治］〔霍亂には、水で煮た濃汁を服するが大いに效驗がある〕（蘇恭）〔煮汁を服すれば魚蟹の中毒を解す〕（蘇頌）〔燒灰を鼻に吹けば衄血を止める。また崩中の藥にも入れる〕（時珍）

［附方］　新二。〔乾霍亂病〕心腹脹痛するには、蘆蓬茸一把を水で煮た濃汁二升を頓服する。（小品方）〔諸般の血病〕水蘆花、紅花、槐花、白雞冠花、茅花等分を水二鍾で一鍾に煎じて服す。（萬表積善堂方）

（一）甘蕉（別錄下品）

和名　ばなな
學名　Musa paradisiaca, L. var. sapientum, Kuntze.
科名　ばせう科（芭蕉科）

［釋名］　**芭蕉**（衍義）　**天苴**（史記注）　**芭苴**　時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『蕉は葉が落ちないもので、一葉舒れば一葉焦れるものだ。故に蕉といふ。俗に乾いた物を巴と謂ふ。巴といふはやはり焦の意味だ』とある。稽聖賦には『竹は實を布いて根枯れ、蕉は花を舒べて株槁る』とある。芭苴といふは芭蕉の發音の轉訛

（一）牧野云フ、甘蕉ハタダ一ノ品ヲ指シタノデハナク幾品（多分一種中ノ異品）カノ總稱デアル、ソシテ皆甘味ノ實ガ生ルノデソレ故甘蕉ト云ッタモノデアル、其中ノ主品ハばななな（M. paradisiaca, L. var. sapientum, Kuntze.）デアラウト思

フカラ先ヅ其學名ヲ之ニ配シテオク、又三尺ばなな(M. Cavendishii, Lamb.)ト稱スルモノモ南支那ノ產デアル、我邦ノばせうハ甘蕉ノ異名ノ芭蕉ニ基イテ其名ガ出タモノダガ、然シ我ガばせうハ支那ノ芭蕉ト同品デハナクタダ芭蕉ノ名ヲ冒シタモノデアル、然シ其植物ノ原產地ハ無論支那てアルト思フガ今日支那ノ「ふろら」ノ書ニハ其學名ナル M. Basjoo, Sieb. ガ擧ゲテナイノハドウシタモノ歟或ハ尙ホ探檢ガ不充分デ其支那カラノ標品ガ學者ノ手ニ入ラヌカラカモ知レナイ西洋ノ學者ハばせう(M. Basjoo, Sieb.)ノ產地ヲ我日本ト琉

だ。蜀地方ではこれを天苴といふ。曹叔雅の異物志には『芭蕉の結實は皮が火のやうに赤く、その肉は蜜のやうに甜い。四五箇で十分滿腹するものだ。しかして滋味は常に牙齒の間に在る。故に甘蕉と名けるのだ』とある。

〔集解〕弘景曰く、甘蕉は、もと廣州に產したものだ。今は(二)江東地方いづれにも有つて、根、葉に相異はないが、ただその子は食ふに堪へない。

恭曰く、甘蕉は、嶺南に產するものは子が大きく、味が甘い。北方地方のものは花だけあつて實がない。

頌曰く、現に(三)二廣、閩中、川蜀の者は(四)花があり、閩、廣のものは實が極めて甘美で食し得る。他の地方にも多いが、花の咲くものはやはり少い。近來は(五)中州で盛んに植ゑてゐる。いづれも芭蕉だ。種類はやはり多いもので、子のあるものは甘蕉と(六)名ける。卷いた心の中から幹が抽き出て花が咲き、花が初めて出たばかりには、大きな蕚が倒に(七)菡萏を垂れたやうで十數層になり、層層が皆瓣で、大きくなるに隨つて花は瓣中から外部へ現はれ、極めて繁盛する。火炬のやうに紅なものをば紅蕉といひ、蠟の色のやうに白いものをば水蕉といふ。その花が象牙に類すると

球トニシテ居ルガ琉球ニハ別種ノばせうハアツテモ我内地ニ見ルばせうハ無イ、兎ニ角西洋人ハ我ばせうヲ日本産トノミ思ヒツメテ居リ支那ニアル事ハ分ツテ居ナイガ上述ノ様ニ私ハ此種ハ確カニ支那ガ其原産地デナケレバナラナイ事ダト思フテ居ル、此ばせうハ温帯地ノ産デ暑イ氣候ニハ適シナイノデ丁度我日本ノ中部ヨリ四國九州邊マデガ其生育ノ適地デアル、ソシテ其花ヲ媒助シテ呉レル鳥デモアレバ充分果實ガ成熟スル（私ハ其例ヲ採ツテ居ル）然シばななノ様ナ甘イ實ニハナラズニ黒キ種子ヲ含ンダ果實ガ生ル。

ころから牙蕉(がせう)ともいふ。實にはやはり青、黄の別があつて、やはり品類が多く、様様に分れてゐる。非常に甘美なものだ。曝乾すれば遠方へも送れる。北方地方ではこれが手に入れば頗る珍貴な果物とする。莖は解け散つて絲のやうになるもので、閩地方では灰湯で練上げ、紡績して織つた布を蕉葛(せうかつ)といふ。

〔甘蕉〕

宗奭曰く、芭蕉は三年已上になると花が著く。心の中から一本の莖が抽出て、ただ一箇の花だけが著くものだ。全く蓮花のやうで、瓣もやはり似てゐる。ただ色は微(へ)黄綠で中心に蕊がなく、そのすべてが花葉で、花の上部は常に下垂してゐる。一朶(いちだ)毎に中夏から開いて中秋まで花が續き、その後は花が盡きる。丸い葉が新たに三枚開けば舊い三枚が脱落するものだ。

時珍曰く、按ずるに、萬震の南州異物志に『甘蕉、卽ち芭蕉のことで、草類の植物

だ。眺めたところ樹株のやうで、太いものは一抱へに餘るほどあり、葉は長さ一丈ばかり、廣さ一尺から二尺ほどあり、葉は頗軟で芋のやうだが、皆幾重にもの皮に裹まれてゐる。根も芋の魁のやうで色青く、大なるものは車轂ほどある。花は莖の末端に著いて大いさ酒盃ほどあり、形狀、色彩は蓮のやうだ。子は各々房になり、その實は花に隨つて成長し、花一闔毎に各々六箇の子があつて、前後相次いで生ずるので、子が同時に出るのではなく、花も同時には落ちない。蕉の子には凡そ三種類あつて、いづれもまだ熟せぬうちは苦く澀いが、熟すれば甜くして脆く、葡萄の味のやうだ。食へば飢を凌げる。一種は、子の大さ拇指ほど、長さ六七寸、形は鋭く、羊角に似て兩兩相抱くものだ、これを羊角蕉といふ。皮を剝げば黃白色で、味が最も甘美だ。一種は、子の太さ雞卵ほど、牛乳に類したところのあるものだ。これを牛乳蕉といふ。味は微し劣る。一種は、子の太さ蓮子ほど、長さ四五寸、形が正方なもので、味は最も微弱だ。いづれも蜜で貯へて菓子として用ゐられる』とある。又、顧玠の海槎錄には『海南地方の芭蕉は、毎年花を開いて實を結ぶ。二種類あつて、一種は板蕉といひ、大きくて味が淡い。一種は佛手蕉といひ、小さくて味

(二)大觀ニハ江東ヲ都下東關ノ四字ニ作ル。
(三)二廣ハ廣東、廣西。閩中ハ福建。川蜀ハ四川。
(四)花ノ字大觀ニヨル。
(五)中州トハ河南省ノ地ヲ指ス。
(六)大觀ニ名甘蕉ノ次ニ葉大據與芭蕉相類但其ノ十字アリ。
(七)菡萏ハ蓮花ノツボミ。
(八)大觀ニハ黃絲ノ次ニ從下脫葉花心但向上生常如蓮樣然未嘗見其花心前面觀之亦ノ二十六字アリ、無葉云云ニ接續ス。
(九)轂ハコシキ、車輪ノ中央ニアリテ軸其中ヲ貫キ輻ヲ外ニ集マル所。
(一〇)一闔ハ花ガ一ツ開キ了ルコト。

が甜い。二種を通じて蕉子と呼んでゐる。花があつて實のない江南地方のもののやうではない』とある。又、范成大の虞衡志には『（一）南中の芭蕉に數種ある。その極めて大なるものは、冬を凌いで凋まず、中から長さ數尺の一本の莖が抽出て、節毎に花が著き、花が褪せると葉の根に實がなる。その皮を去つて肉を取ると、軟爛で綠柿のやうな味で、極めて甘く冷い。四季何時でも實がある。その地の人民は「客熱を去るものだ」といひ、小兒に與へて食はせ、蕉子と呼び、又、牛蕉子とも呼ぶ。梅汁に漬けて曝し、扁たく壓して置くと、味が甘く酸くなり、微し霜がかかる。これをば芭蕉乾といふ。一種は雞蕉子といひ、牛蕉よりは小さく、これも四季を通じて實がある。一種は牙蕉子といひ、雞蕉よりもまた小さい。尤も香しく嫩かで甘美なものだ。これだけは秋の初めに子を結ぶ。一種は紅蕉といひ、葉は痩せて蘆か箬のやう、花の色は正紅で榴花のやうなもので、日毎に一兩葉を開き、其端に一點鮮綠なところがあつて、愛すべきものだ。春開き始めて秋になつて盡きるのだが、盡きる頃のものでもやはり芳しい。俗に（二）美人蕉と呼んでゐる。一種は膽瓶蕉といひ、根が土から出た（三）時は飽くまで肥えてゐて、その形狀が（四）膽瓶のやうなものなの

（一）南中ハ南方地方ニ於テノ意、今ノ廣東省以南ヲ指ス。

（二）牧野云フ、美人蕉ハひめばせう即チ Musa Uranoscopus, Lour. (M. coccinea, Andr.) ヲ花ヲ賞スル品デアル、南支那ノ原産デアルガ我ガ九州デハ諸處ニ作ラレテ居ル。

（三）本書ニ時ヲ[illegible]ノ二字ニ作ル。

（四）膽瓶トハ瓶ノ長頸、大腹形[illegible]ノ如キモノ、ふらすこ形ノモノ。

だ』とある。又、費信の星槎勝覧には『南番(一五)阿魯の諸國には米穀がない。ただ芭蕉や椰子を栽培し、その實を取つて食糧に充てる』とある。

(一六) 氣味 【甘し、大寒にして毒なし】 恭曰く、性は冷である。健康に益はない。多く食へば冷氣を動ずる。 主治 【生で食へば、渴を止め、肺を潤ほす。蒸熱し晒し裂き舂いて仁を取つて食へば、血脈を通じ、骨髓を塡てる】(孟詵) 【生で食へば、血を破り、金瘡を合せ、酒毒を解す。乾いたものは、肌熱、煩渴を解す】(吳瑞)小兒の客熱を除き、丹石の毒を壓す】(時珍)

根 氣味 【甘し、大寒にして毒なし】 恭曰く、寒なり。頌曰く、甘蕉と芭蕉とは性が同じだ。 主治 【癰腫、結熱】(別錄) 【擣き爛らして腫に傅ければ熱毒を去る。擣汁を服すれば産後の血脹悶を治す】(蘇恭) 【黃疸に主效がある】(孟詵) 【天行熱狂の煩悶、消渴、癰毒を患ふもの、幷に金石の發動で躁熱し、口の乾くを治す。いづれも汁を絞つて服す。また頭風、遊風を治す】(大明)

附方 舊四、新六。 【發背で死せんとするもの】 芭蕉根を擣き爛らして塗る。(肘後方) 【一切の腫毒】 方は上に同じ。 【赤遊風瘮】 方は上に同じ。 【風熱頭痛】 方

(一五)阿魯ハ南洋群島中ノ一、ニューギニアノ西南八十哩ニアリ。一ニ阿盧ニ作ル。

(一六)木村(康)曰ク、ばなな果實ノ糖分大部分ハ蔗糖、僅少部ハ轉化糖ヨリナリベクトーゼ、有機酸、脂肪、纖維素、蛋白質等ヲ含有ス。又果皮ハ灰分ニ富ミ植物液汁ハ色素、タンニン、沒食子酸等ヲ含ム。芭蕉ハ琥珀酸ヲ含ミ僅ニタンニン質及ビ糖類等ヲ作フ、アスパラギン、ロイチン或ハチロシンノ如キモノハ含マズ、エンチームハオキシダーゼ及ビペルオキシダーゼナリ。(W. P. 107)

は上に同じ。［風蟲牙痛］芭蕉の自然汁一椀を煎じ、熱して含嗽する。（普濟方）［天行熱狂］芭蕉根の擣汁を飲む。（日華子本草）［消渇飲水］骨節の煩熱するには、生芭蕉根の擣汁一二合づつを時に飲む。（聖惠方）［血淋澀痛］芭蕉根、旱蓮草各等分を水で煎じ、一日二回服す。（聖惠方）［產後の血脹］芭蕉根を擣いて汁を絞り、二三合を溫服する。［瘡口の合はぬもの］芭蕉根の汁を取つて抹するがよし。（直指方）

蕉油　竹筒を皮の中へ插入して油を取り、それを瓶に盛つて置く。氣味［甘し、冷にして毒なし］主治［頭風の熱。煩渇を止め、また湯火傷を治す。頭を梳れば、婦人の髮の落ちるを止め、長く黑くする］（大明）［暗風癇病で涎が作り、運悶して倒れんとするには、これを飲んで吐く。極めて奇效がある］（蘇頌）

附方　新一。［小兒の截驚］芭蕉汁、薄荷汁を煎じまぜて頭、頂に塗り、（一七）顖門だけを塗らずに置き、四肢に塗つて手、足の心だけを塗らずに置く。甚だ效がある。（鄧筆峯雜興）

葉　主治［腫毒の初發。研末を生薑汁に和して塗る］（時珍）聖惠方にある。

附方　新一。［（一八）岐毒の初期］芭蕉葉を熨斗の中で燒いて性を存し、輕粉、

（一七）顖門ハ頂門ニ同ジ、頭ノヒヨムケ。

（一八）岐毒ハ股間ノ腫痛スルモノ、便毒ナリ。

麻油を入れて調へて塗る。一日三回試みれば、或は消し、或は破れ、皆痕がなくなる。(仁齋直指方)

花　[主治]　【心痺痛。燒いて性を存して研り、鹽湯に點て二錢を服す】(日華)

(一)蘘荷　(別錄中品)

和名　めうが(?)
學名　Zingiber Mioga, Rosc. (?)
科名　しやうが科(薑科)

[校正]　菜部より移して此に入れ、有名未用の蘘草をこの一條に併記する。

[釋名]　覆葅(別錄)　蘘草(別錄)　猼苴　猼の音は博(フ、ハク)である。　蒚苴(說文)　嘉草

弘景曰く、本草では白いものを蘘荷としてあるが、今は一般に赤いものを蘘荷といひ、白いものを覆苴といつてある。蓋し食ふには赤いものがよく、藥に入れるには白いものを良しとする。葉は同一種のものだ。

時珍曰く、覆苴を、許氏の說文には蒚苴と書き、司馬相如の上林賦には傅苴と書

(一)牧野云フ、蘘荷ヲ從來ノ學者ハめうがニ充テテ居ルガソレハ多分正シイ說ノヤウニモ考ヘル、然シ私ハ支那ニめうがヲ產スルトイフ證ヲ得ナイカラ今斷言ノ出來ヌ事ヲ遺憾トスル、植物名實圖考卷ノ三ニ蘘荷トシテ圖セルモノハうばゆりノ一種デコレハ名實ガ異ツテ居ルト思フ。

(一)淮南ハ淮河以南長江トノ中間ノ地ナリ。
(二)荊襄ハ今ノ湖北省ノ地ナリ。
(三)江湖ハ今ノ江西、湖南兩省ノ地ナリ。

いてあつて、芭蕉と音が相近い。離騷の大招には『醢豚、苦狗、膾苴、蓴』とあり、王逸の注に『苴蓴、音は博（ハク）蘘荷なり。本草に見ゆ』とあるが、今の本草にこの名が無い。脫漏がやはり多いのだ。

集解　別錄に曰く、蘘草は(一)淮南の山谷に生ずる。

頌曰く、蘘荷は(二)荊襄、(三)江湖の地方で多く栽培するが、北地にもある。春初に甘蕉に似た葉が生え、根は薑芽に似て肥えてゐる。その葉は冬枯れる。根は葅にもなるものだ。その性は陰を好むもので、木の下へ生えたものは就中發育がよい。潘岳の閑居賦に『蘘荷は陰に依り、時藿は陽に向ふ』とあるはその意味だ。宗懍の荊楚歲時記には『仲冬に鹽で蘘荷を貯へて冬の食料の備とする。また蠱を防ぐ材料になる』

〔蘘荷〕

とあり、史游の急就篇には『蘘荷は冬日藏める』とあつて、その起源は遠いものだ。

大體右の通りだが、赤、白の二種あつて、白いものは藥に入れ、赤いものは食料にし、また(五)梅果を作るに多く用ゐる。

宗奭曰く、蘘荷は八九月頃に漬けて貯へれば、冬期に蔬、果を作る備になる。治病用には白いものに限る。

時珍曰く、蘇頌の圖經に『江湖地方で多く栽培する』とあるが、現に實地を調べて見たが一向識つてゐるものがなかつた。ただ、楊愼の丹鉛錄に『急就章の註に、蘘荷、卽ち今の甘露だとある。これを本草に就いて考究するに、形も性も相同じい』とある。甘露とは卽ち芭蕉のことだ。崔豹の(六)古今注には『蘘荷は芭蕉に似て色が白い。その子、花は根の中に生える。花がまだ腐らぬうちに食ふがよい。久しくすれば消爛れるものだ。根は薑に似たもので、陰翳の地に適し、日蔭に依つて生える』とある。又、按ずるに、王旻の山居錄には『蘘荷は樹蔭の下がよく、二月に種ゑる。一度種ゑると永く生えるものだから、耘り鋤く必要がなく、ただ糞を加へるだけでよいものだ。八月初にその苗を踏み枯らして置けば根が滋る。九月初にその傍生の根を取つて菹にし、また醬で貯藏するもよし。十月中に糠で根の下を覆ふて置け

(五) 梅果ハ梅酢ノ漬物。

(六) 古今注ニハ『蘘荷。似薔苴而白。薔苴色紫。花生根中』トアリ。又、『葉似薑』トアツテ、時珍ノ引用文ト少異アリ。

(七) 大觀ニ蝨ニ作リ又蛇毒ヲ辟蛇ニ作ル。

(八) 蠱主ハ蠱ヲ使フ者。

ば。冬を過ごしても凍死せぬ』とある。

修治 斅曰く、凡そこれを用ゐる場合に、革牛草を用ゐてはならぬ。眞に相似てゐるが、革牛草は腥く澁い。凡そ使ふには、白蘘荷を用ゐ、銅刀で粗皮一重を刮り去り、細かに切つて砂盆に入れ、膏のやうに研つて自然汁を取り、煉つて煎にし、新器に攤して冷し、乾いた膠のやうな狀態にして刮り取つて用ゐる。

根 **氣味** 【辛し、溫にして小毒あり】 思邈曰く、辛し、微溫にして濇る、毒なし。 **主治** 【中蠱、及び瘧。擣汁を服す】(別錄) 【溪毒、沙(七)蝨、蛇毒】(弘景) 【諸惡瘡。根の心は、目に稻、麥の芒が入つて出でぬに主效があつて、汁を目に注げば出る】(蘇恭) 【赤眼澀痛には擣汁を點ける】(時珍)

蘘草 **氣味** 【苦く甘し、寒にして毒なし】 大明曰く、平なり。 **主治** 【溫瘧、寒熱、酸嘶、邪氣。不祥を避ける】(別錄)

發明 弘景曰く、中蠱の者は、蘘荷の汁を服し、竝にその葉に臥せば(八)蠱主の姓名を呼ぶものだ。多食すれば藥力を損じ、又、脚がきかなくなる。人家では、蛇を辟けるとしてこれを種ゑる。

○頌曰く、按ずるに、干寶の搜神記に『外姉夫の蔣士先が發病して下血したとき、それは中蠱だといふので、家人が密かにその病床の下へ蘘荷を入れて置くと、士先は突然笑ひ出して「自分を蠱したものは張小小だ」といつた。そこで小小を取り抑へやうとすると、小小は逃亡して了つた。これから蠱を解する藥に多く用ゐるが、往往效驗がある』とある。周禮に『庶氏は嘉草を以て蠱毒を除く』とあり、宗懍は『嘉草、卽ち蘘荷のことだ』といふ。陳藏器が『蘘荷、茜根は最も蠱に主效が有る』といふはこれをいつたのだ。

○○時珍曰く、別錄の菜部に蘘荷とあるは根をいつたのだ。草部に蘘草とあるは葉をいつたのだ。主治はやはり頗る相近い。本書には合併して一條とした。

附方　舊八、新一。【突然の蠱毒】雞肝のやうな血を晝夜間斷なく下し、臟腑が腐敗して死を待つばかりのものには、蘘荷の葉を密かに患者の寢臺の下へ置き、本人に知らせぬやうにする。必ず蠱主の姓名を呼ぶものだ。(梅師方)【喉中に物があるやうに覺えるもの】呑吐しても出でず、腹脹し、羸瘦するには、白蘘荷根の擣汁を服す。蠱は立ろに出る。(梅師方)【喉舌の瘡爛】酒で漬けた蘘荷根の汁で半日含漱し、

瘥えれば止める。（外臺祕要方）『吐血、痔血』東に向つて生えた蘘荷根一把を擣き、その汁三升を服す。（肘後方）『婦人の腰痛』方は上に同じ。『月經の澀滯』蘘荷根を細かに切つて水で煎じ、二升を空心に酒を入れて和して服す。（經驗方）『風冷失聲』咽喉の利せぬには、蘘荷根二兩の擣汁を絞り、酒一大盞を入れて和匀し、少しづつ服して瘥を取る。（肘後方）『傷寒時氣』溫病の初期で、頭痛し、壯熱し、脈盛なるには、生蘘荷根、葉を合せ擣いて汁を絞り、三四升を服す。（肘後）『雜物の目に入つたとき』白蘘荷根の心を取つて擣き、汁を絞つて目中に滴らす。立ろに出る。（普濟方）

（一）麻黄（本經中品）

和名　まわう
學名　Ephedra sinica, Stampf.
科名　まわう科（麻黄科）

釋名　**龍沙**（本經）**卑相**（別錄）**卑鹽**（別錄）時珍曰く、これ等諸名の意味は一向に解らぬ。或は、その味が麻し、その色が黄なるを表したのだといふが、果して然りや否やは審でない。張揖の廣雅には『龍沙とは麻黄のこと、狗骨とは麻黄の根のことだ』とあるが、何を根據にかかる區別をしたものか判らない。

（一）牧野云フ、支那デ麻黄ト云フモノハ必ズシモ一種ニ限ラズ幾種カノ品種ヲ呼ンデ居ルノダト思フガ、其邊ノ事ガ徹底的ニ尚吾人ノ間ニ不明デアルカラ此ニハ下ノ學名ノモノヲ以テ姑ク其主品トシテオク、我日本ヘ來テ今日作ラレテ居ルモ

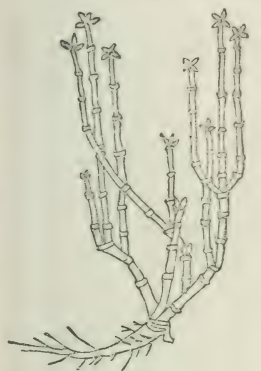
ノハ卽チ此品デアル。ソシテ我邦ニハ野生ハナイ、昔ハいぬどくさ(Equisetum elongatum, Willd.)ヲ麻黄ト誤認シタコトガアツタ。

木村(康)曰ク、まおうニハ従來 E. vulgaris, Rich. var. helvetica Hook. et Thompson ト云フ學名ヲ充テタルモ、元來此學名ハ Hooker, Thompson 兩氏ガ印度ニ於テ採集セル麻黄屬ノ一種ニ附シタル名稱ニシテ、従來此學名ヲ漫然ト支那産麻黄ニモ用ヰタリ。麻黄屬ノ大家 Stampf 氏ニヨレバ支那ヨリ生藥トシテ輸出スル麻黄ハ未ダ曾テ記載サレタル事ナキ新種ニ屬シ、同氏ハ假ニ之ヲ E. sinica, Stampf. ノ學名ヲ以テ呼ブベシトナス、

【集解】別錄に曰く、麻黄は(二)晉地、及び河東に生ずる。立秋に莖を採り、陰乾して青くする。弘景曰く、今は(三)青州、彭城、滎陽、中牟の産が勝れたもので、色が青く、沫が多い。蜀中にもあるが好くない。

恭曰く、(四)鄭州の鹿臺、及び(五)關中の沙苑の河邊、沙洲の上に最も多く、(六)同州の沙苑の地がやはり多い。青、(七)徐州のものは一向に用をなさぬ。

禹錫曰く、按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『麻黄は莖の頭端に花を開く。花は小さく黄色で叢生する。子は覆盆子のやうで食へるものだ』とある。

〔麻　黄〕

頌曰く、今は汴京の附近に多くあるが、滎陽、中牟のものが勝れてゐる。春苗が生え、夏五月になれば長さ一尺ほどになり、梢上に黄花が咲き、實を結ぶ。實は百合瓣のやうで小さく、また皂莢子に似たものだ。味は甜く、微し麻黄の氣があり、外皮が紅く、裏に仁がある。子は黒く、根は紫赤色だ。俗説に、この物には雌、雄

其他 E. equisetina, Bunge. モ亦生薬中ニ混在ス原産地ニ於テハ前者ヲ草本麻黄後者ヲ木本麻黄ト稱シテ區別ス、歐洲ニ自生シ Stork 氏ガプソイドエフエドリンヲ檢出シタル麻黄ハ E. vulgaris, Rich. (=E. helvetica, C.A. Meyer.)ナリ Hooker, Thompson 兩氏ガ嘗テ印度ニ於テ採集セルモノハ後ニ Stampf氏 E. intermedia, Schenk. et C. A. Meyer var. tibetica Stampf.ト改メタリ、文獻— O. Stampf. Kew Bulletin, (1927) 183. O. Farwell=J. Am. Pharm. Assoc. 16 (1927) 135.

(二) 晉地ハ水部井泉水ノ註、金部礬ノ參、晉ノ註參照。河東ハ山草類甘草ノ註ヲ見ヨ。

(三) 青州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。彭城

の二種あつて、雌は三月、四月の内に花を開き、六月子を結ぶ。雄は花がなく、子を結ばないといふ。立秋後になつて莖を採收して陰乾する。

時珍曰く、その根は皮の色が黄赤で、長いものは一尺近くもある。

附録 (八)**雲花子** 時珍曰く、按ずるに、葛洪肘後方に、馬疥を治する雲花草といふがあつて、その說明に『形狀は麻黄のやうで、中が堅く實したものだ』とある。

莖 修治 弘景曰く、これを用ゐるには、節根を折り去り、水で煮て十餘沸するのだが、その時竹片で上に浮ぶ沫を掠め去る。沫は煩を起さしめ、根節は能く汗を止めるものだからだ。

(九)氣味 【苦し、溫にして毒なし】 別錄に曰く、微溫なり。普曰く、神農、雷公は苦し、毒なしといひ、扁鵲は酸しといひ、李當之は平なりといふ。權曰く、甘し、平なり、元素曰く、性は溫、味は苦くして甘く辛い。氣味共に薄く輕く淸く、浮であり陽であり、升である。手の太陰の藥であつて、足の太陽の經に入り、兼て手の少陰、陽明に走る。

時珍曰く、麻黃は微苦にして辛く、性は熱であつて輕揚する。僧繼洪は『中牟の麻黃のある土地は冬季にも雪が積らぬ。それは內から陽を泄らすがためだ。故に過量に用ゐれば眞氣を洩らす』といつてある。これに由つて觀れば、性の熱なることが判る。麻黃を服して自汗の止まぬときは、冷水で頭髮を浸してから(一〇)撲法を用ゐれば直ちに止まる。凡そ麻黃の藥を服したときは、一日間風に當らぬやうにせねばならぬ。さうせぬと病がまた發るものだ。凡そこれを用ゐるには、必ず黃芩を佐とすれば赤眼になる虞がない。

之才曰く、厚朴、白微が使となる。辛夷、石韋を惡む。

(一一)**主治**　【中風、傷寒、頭痛、溫瘧には、表を發し、汗を出す。邪熱の氣を去り、欬逆上氣を止め、寒熱を除き、癥堅、積聚を破る】(本經)【五臟の邪氣、(一二)緩急風の脅痛。(一三)字乳の餘疾。好んで唾するを止め、腠理を通じ、肌を解し、邪惡の氣を洩し、赤、黑斑毒を消す。多く服してはならぬ。人體を虛せしめる】(別錄)【身體外部の毒風瘮痺で皮肉不仁なるを治し、壯熱溫疫、山嵐瘴氣に主效がある】(甄權)【九竅を通じ、血脈を調へ、毛孔、皮膚を開く】(大明)【營中の寒邪を去り、衞中の

ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。滎陽ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。中牟ハ石部附錄諸石紫石華ノ註ヲ見ヨ。

(四)鄭州ハ中牟ノ西今ノ河南省鄭縣ノ地ナリ。鹿臺ハ古殷ノ都朝歌ノ蓄財處ナリシトイフ。今ノ河南省洪縣ノ地ナリ。

(五)關中、一本ニ關中トアリ、或ハ關ヲ正トスベキカ。關中トスレバ、次ニ復タ同州沙苑ト稱シタルハ怪ムベシ。同州亦關中ノ地ナリ。

(六)同州沙苑、同州ハ石部凝水石ノ註ヲ見ヨ。沙苑ハ今ノ陝西省大茘縣南、渭、洛二水ノ間ニ在リ。山草類防風ノ註參照。

(七)徐州ハ芳草類藒車香ノ註ヲ見ヨ。

(八)雲花子
(和名)無し(學名)
(科名)共に未詳。

(九)木村(康)曰ク、生藥麻黃ハ麻黃根ト

稱スル木本部ヲ除キタル地上莖ノ部分ナリ。

（成分）麻黄ハアルカロイド〇・三％ヲ含有シ、主成分ハエフエドリンニシテ傍ラ少量ノプソイドエフエドリン、ノルプソイドエフエドリンヲ含有ス、歐洲產麻黄ハエフエドリンヲ含有セズシテ其立體異性體ナルプソイドエフエドリンノミヲ含有ストナサレタルモ、近年獨逸メルク製藥工場ニ於テ歐洲產麻黄ヨリモエフエドリンヲ製造シ、其際プソイドエフエドリンハ極メテ少量ニ副生スルニ過ギズトイフ。

麻黄ノ水製エキスハ約十六％ノ灰分ヲ含有シ、其内カリウム鹽類最多量ナリ（灰分中カリウム二九・七％カルシウム一〇・〇％）

風熱を洩す』（元素）『赤目腫痛、水腫、風腫、產後の血滯を散ず』（時珍）

【發明】　弘景曰く、麻黄は傷寒を療じ、贜を解する第一の藥である。

頌曰く、張仲景の傷寒を治するものに、麻黄湯、及び葛根湯、大、小靑龍湯があつて、いづれも麻黄を用ゐてある。（一四）肺瘻（はいろう）上氣を治するものに、射干麻黄湯、厚朴麻黄湯があつて、いづれも大方だ。

杲曰く、『輕は實を去るもので、麻黄、葛根の屬をいふ』とあつて、（一五）六淫、有餘の邪が陽分、皮毛の間に客として遊寓すれば、腠理が閉拒して營、衞、氣、血が行（めぐ）らなくなる。故にこれを實といふのであつて、右の二藥は輕、淸の標準的なものだからその實を去り得るのだ。麻黄は微苦にしてその形態は中が空だ。陰中の陽であつて、足の太陽、寒水の經に入る。その經は背に循（めぐ）つて下行するもので、本來寒なところへまた更に外寒を受けたのだから、汗を發して皮毛の氣分の寒邪を去り、それに依つて表の實を泄すべきものなのである。しかし若し過度に發すれば、發汗過多のために亡陽するものだ。故に飮食、勞倦、及び雜病で自汗し、表の虛する病證の場合には、これを用ゐれば元氣を脫する。絕對に禁ぜねばならぬ。

（藥理）鹽酸エフエドリンノ水溶液ハ散瞳作用ヲ有シ、一〇%溶液ヲ點眼スル時ハ四〇—六〇分後ニ散瞳シ五—二〇時間持續ス、此作用ハアトロピント異リ交感神經ノ刺戟ニヨルモノノ如シ、其ノ他一般生理的作用中著シキモノハ血壓ノ上昇發汗等ノ現象ニシテ、生理作用概シテアドレナリンニ類似スルハ兩者ノ化學的構造ノ近似セルニヨルナルベシ、鎭咳藥トシテ特ニ喘息ニ著效ヲ奏スルハ氣管支筋ヲ弛緩セシムルニヨルモノノ如シ。藤井氏ニヨレバ麻黄根ノ越幾斯ヲ動物ニ注射スレバ、其作用エフエドリンニ全ク相反シテ血壓下降シ

好古曰く、麻黄は衞の實を治する藥、桂枝は衞の虛を治する藥である。この二物は太陽の證に對する藥ではあるが、その實は營、衞の藥なのであつて、心は營が血となる働を主るものだから、麻黄は手の太陰、肺の劑、桂枝は手の少陰、心の劑である。傷寒、傷風の欬嗽に麻黄、桂枝を用ゐるは、卽ち湯液の原則だ。

時珍曰く、麻黄は肺の經に對する專藥である。故に肺の病を治すのに多くこれを用ゐ、張仲景は、傷寒の汗無きを治するに麻黄を用ゐ、汗有るを治するに桂枝を用ゐてある。歷代明醫の解釋は、いづれも記述の文字上から傅會するだけで、その對症上の精微な關係に至つては未だ研究されてゐなかつた。時珍は、これに就いて潛心研究の結果、それ等既往の人人の見解と同じからぬ一の徹底的見解に到達し得たやうに思ふのである。

余の見解に據れば、津液は汗であり、汗、卽ち血であつて、營に在つては血といひ、衞に在つては汗といふのである。そもそも寒が營を傷へば、營血は內に濇つて外に衞に通ずることが不能になり、ために衞氣は閉固して津液が順調に行らなくなる。

呼吸頻數增大ス末梢血管ニ對シテハ擴張作用ヲ有ス。
（文獻）長井長義――藥誌一二〇（明二五）一〇九、一二一（同上）一八一、一二七（同上）八二三、一三〇（同上）一一八六、一三九（同上）九一七。
B. E. Read and C. T. Feng: Chinese Jour. Physiol. 1 (1927) 235.
S. Smith: J. Chem. Soc. (1928) 51.
S. Smith: J. Chem. Soc. (1927) 2056.
Merk's Bericht'e 13 (1893)
藥誌五五六（昭、三）六四三、五五〇（昭、二）一〇六六。
長井長義、金尾清造――藥誌五五九（昭、三）八四五。
河野老――藥誌五六

故に汗無く、發熱して寒を憎むのだ。また風が衞を傷へば、衞氣は外に泄れて內に營を護ることが不能になり、ために營氣は虛弱して津液が强固でなくなる。故に汗が有り、發熱して風を惡むのだ。

かやうな次第で、風、寒の邪はいづれも皮毛から入るが、皮毛は肺の（一六）合であつて、肺は衞氣の身體全部を統轄する働を主るものだ。（一七）天の象である。さればその證は太陽に屬するとはいひ、事實は肺が邪氣を受けるのであつて、時に兼ねて顏面に赤色を呈し、怫鬱し、欬嗽し、痰喘があつて胸滿する等の諸證は肺の病に相違ない。蓋し皮毛が外に閉づれば邪熱が內攻する。そこで肺の氣が膹鬱するのだ。故に麻黃、甘草と共に桂枝を用ゐ、營分にある邪を引き出して肌表に達せしめ、杏仁を佐として肺を泄し、氣を利する。また發汗後に大熱なくして喘するものには石膏を加へるのだ。朱肱の活人書に『夏至後には石膏、知母を加へる』とあるも同じ理由で、いづれも肺の火を泄する藥なのだ。かやうなわけで、麻黃湯なるものは太陽、發汗の重劑ではあるが、事實は肺の經の火鬱を發散する藥なのである。

また腠理が密ならぬときは、津液が外に泄れて肺氣が自ら虛する。『虛するときは

その母を補ふ』とある通り、それには桂枝と共に甘草を用ゐて、外には風の邪を散じて表を救ひ、內には肝、木を抑制して脾を保護し、佐としては芍藥を用ゐて、木を泄して脾を强固にする。東を泄するは結果に於て西を補ふことになるのだ。使としては薑、棗を用ゐて、脾の津液を行らして營、衞を調和せしめる。また下して後微喘するには、厚朴、杏仁を加へて肺の氣を利し、發汗後に脈の洪遲なるには、人參を加へて肺の氣を益す。朱肱が、黃芩を加へて陽旦湯といつたのは、肺熱を瀉するが目的であつた。これ等はいづれも脾と肺との藥なのである。かやうなわけで、桂枝なるものは太陽、解肌の輕劑ではあるが、事實は脾を調節し肺を救ふの藥なのである。

以上は千古未發の祕旨として余は茲に公表する。

又、少陰の病で發熱し、脈の沈なるに對しては、麻黃附子細辛湯、麻黃附子甘草湯がある。少陰と太陽とは表裏をなすもので、趙嗣眞の所謂熟附を麻黃に配するは、補中に發するところあらしめるのだ。ある(一八)錦衣は、夏季に徹夜して酒を飲んだために、水泄を發して數日續いて止まず、飮食物は悉く不消化のまま排出した。分利、消導、升揚の諸藥を服すると、反つて劇しくなる。時珍が診ると、脈は浮にして緩で

一(昭、三)一〇九八。
三浦謹之助——Berlin. Klin. Woch. 24 (1887) 707.
Chen and Schmidt: J. Exp. Pharmacol. 24 (1924) 33).
久保田清光——治療及處方四二(大・一二)
藤井美知男——滿醫、四(大・一四)五六。

(一〇)證治準繩ニハ以根節煎湯止之トアリ。

(一一)木村(康)曰ク、麻黃ハ漢藥トシテ重要ナルモノナレドモ其鹽酸エフエドリンノ原料トシテ用ヰラレ、又新藥フストール(大阪黑田藥品商會)ハ麻黃ト桔梗トヲ主原料トシテ他藥ヲ配伍セルモノニシテ祛痰、鎭咳劑ナリ。

(一二)緩風ハ脚氣、緩

急風ハ脚氣ノ急ナルモノカ未詳。
(一三)字乳ハ生育ヲ云フ、餘疾ハ産後ノ病氣ノコトナラン。
(一四)金陵本肺痿ニ作ル。
(一五)六淫ハ風、熱、濕、寒、燥、火ノ過度ナルヲ云フ。
(一六)合ハ外廓ノ意。
(一七)生理上天ニ比スベキモノデアル。
(一八)明時代ニ衛官ヲ錦衣ト稱ス。

あつた。大腸は下弩して痔血さへ出てゐる。これは肉を食ひ、生物、冷物、茶、水などを雑多に過食したために、陽氣が抑遏されて下に在り、木盛土衰の狀態となつたので。素問に所謂『久風飧泄と成る』の狀態だ。原則として升、揚の方法を講ずべきものである。そこで小續命湯を投じたところ、その一服で癒えたのであつた。

昔、仲景が、傷寒で六七日を經過し、大いに下して後、脈が沈遲し、手、足厥逆し、咽喉利せず、唾に膿血を出し、泄利止まざるを治するに、麻黃湯を用ゐてその肝、肺を平調にし、兼ねて外發せしめた方法は、やはり同一理論であつた。神にして之を明むとはかかる類をいふのである。

附方　舊五、新七。【天行熱病】初期一二日には、麻黃一大兩を節を去り、水四升で煮て沫を去り、二升を取つて滓を去り、米一匙、及び豉を入れて稀粥にし、豫め湯浴してその粥を食ひ、寢具を厚く被て汗を取れば癒える。(孟詵必用方)　【傷寒雪煎】麻黃十斤を節を去り、杏仁四升を皮を去つて熬り、大黃一斤十二兩の三藥を用ゐ、先づ雪水五碩四斗に麻黃を漬けて東向きの竈の釜に納れ、三昔夜後に大黃を入れて攪き匀ぜ、桑薪で二碩までに煮て滓を去り、杏仁を入れて共に六七斗までに煮て

（一九）大觀ニ傷寒類要ニ作ル。

滓を絞り去り、銅器に移し、更に雪水三斗を入れて二斗四升までに合煎する。かくて藥に出來上つたものを彈子大の丸にし、病者に施す場合は、沸騰した白湯五合にその一丸を研つて服ませる。立ろに汗が出るものだ。なほ癒えぬときは更に一丸を再服する、藥を貯藏するには氣の洩れぬやうに封ぜねばならぬ（千金方）【傷寒黄疸】表熱するには、麻黄醇酒湯が主效がある。麻黄一把を節を去つて綿に裹み、美き酒五升で半升に煮取り、頓服して少し汗を取る。春季には水で煮る。（一九）（千金方）【裏水黄腫】張仲景は『全身、顏面が黄腫し、脈が沈し、小便利せぬには、甘草麻黄湯が主效がある。麻黄四兩、水五升を煮て沫を去り、甘草二兩を入れて三升に煮取り、一升づつを服して寢具を重ねて汗を出す。發汗せぬときは再服する。風、寒を愼まねばならぬ』といつてある。〇千金方には『氣急を患つて久しく瘥えず、水病に變じて腰以下の腫れるものがある。それには此の藥で汗を發するがよし』とある。【水腫で脈の沈するもの】少陰に屬する。その脈の浮なるは氣虛である。脹るものは皆氣であつて水ではない。麻黄附子湯で汗を出す。麻黄三兩、水七升を煮て沫を去り、甘草二兩、附子を炮いて一枚を入れて二升半に煮取り、一日三回、八分づつを服し

て汗を取る。（張仲景金匱要略）【風痺冷痛】麻黃を根を去つて五兩、桂心二兩を末にし、酒二升で慢火で餳のやうに熬り、一匙づつを熱酒で調へて服す。汗の出るを度とする。風を避ける。（聖惠方）【小兒の慢脾】風である。吐、泄の後に起るものだ。長さ五寸の麻黃十箇を節を去り、指の面ほどの白朮二塊、全蠍二箇を生薄荷葉で包んで煨いて末にし、二歳以下は一字、三歳以上は半錢を薄荷湯で服す。（聖惠方）【（二〇）尸咽痛痺】語聲の出ぬには、麻黃を靑布で裹み、筒の中で烟に燒いて熏ずる。（聖惠方）【産後の腹痛】及び下血の盡きぬには、麻黃を節を去つて末にし、一日二三回、方寸匕づつを服す。血が下り盡きて止まる。（子母祕錄）【心下悸病】半夏麻黃丸——半夏、麻黃等分を末にし、煉蜜で小豆大の丸にし、一日三回、三丸づつを飲で服す。（金匱要略）【痘瘡の倒靨】寇宗奭曰く、鄭州の麻黃を節を去つて半兩に蜜一匙を入れて共に炒り、良久して水半升で煎じ、數沸して沫を去り、再び煎じて三分の一を減じて滓を去り、熱に乘じて一服し、風に當らぬやうにする。その瘡は再び出るものだ。ある法では、無灰酒で煎じるが、その效更に速だ。（二一）仙源縣の筆工李用之の子が斑瘡を病み、風、寒のために倒靨となつて苦しんだが、この藥一服で直ちに出た。神の如

（二〇）尸咽ハ咽喉ニ瘡ヲ生ジテ痛痒スルモノ。

（二一）仙源縣ハ宋ニ置ク、今ノ山東省曲阜縣治ナリ。

きものであつた。【中風諸病】麻黃(二二)一秤を根を去り、王相日、乙卯の日に東流水三石三斗を取つて、清淨な鍋にその水五七斗とその麻黃を入れ、先づ五沸煮て沫を掠め去り、漸次に水を添へ盡して三五斗までに煮て麻黃を漉し去り、よく澄み切つてから滓を濾し去つて清んだものを取り、再び一斗までに熬つて再び澄し再び濾し、その汁を再び一升半までに熬つて密封して貯藏する。それで一二年は保存し得るものだ。それを一二匙づつ熱湯で溶かして服し、汗を取るのである。熬る時には必ず間斷なく攪き廻して底に著かぬやうにせねばならぬ。底に著けば藥が焦げて了ふ恐があるからだ。同時に雞、犬、(二三)陰人に見られることを忌む。これは劉守眞の祕方である。(宣明方)

根節【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【汗を止める。夏季には粉に雜ぜて撲つ】(弘景)

【發明】權曰く、麻黃の根節で汗を止めるには、故竹扇を杵いた末と共に撲つ。又、牡蠣粉、粟粉、幷に麻黃根等分を末にして生絹の袋に盛つて貯へ、盜汗の出るときそれを撲つて手で摩擦する。時珍曰く、麻黃は發汗の氣が速で禦ぎ難いほどの

(二二)一秤ハ十五斤。

(二三)陰人ハ女子及ビ去勢セル男子ヲ云フ。

(二四)柔痓ハ陰性ノソリカヘリ病、卒中腦貧血ノ類。

ものだが、根節は汗を止める效力が影の如く響の如きものだ。かやうに物の理の妙は測り知られぬものである。自汗には、風濕、傷風、風溫、氣虛、血虛、脾虛、陰虛、胃熱、痰飲、中暑、亡陽、(二四)柔痓等種種の病證はあるが、いづれもその證に隨つてこれを加へ用ゐるがよいのである。當歸六黃湯に麻黃根を加へれば、盜汗を治するに尤も速だ。蓋しその性が能く全身の肌表に行るものだから、能く諸藥を導いて外に衞分に達し、腠理を固めるのである。本草では、撲つ方法だけは知つてゐるが、服餌する功力の尤も良好なるをば知らなかつた。

附方 新八。「盜汗、陰汗」麻黃根、牡蠣粉を末にして撲つ。「盜汗の止まぬもの」麻黃根、椒目等分を末にし、一錢づつを無灰酒で服し、外用としては、麻黃根、故蒲扇を末にして撲つ。(奇效良方)「小兒の盜汗」麻黃根三分、故蒲扇灰一分を末にし、一日三回、乳で三分づつを服し、乾薑三分と共に末にして三分を撲つ。(古今錄驗)「諸虛の自汗」夜間就寢中甚しきものは、久しく續けば枯瘦するものだ。黃芪、麻黃根各一兩を、牡蠣を米泔で浸洗して煆いたものと散にし、小麥百粒を水二盞で煎じたもので五錢づつを服す。(和劑局方)「虛汗の度なきもの」麻黃根、黃芪等

分を末にし、(二三)飛麪糊で梧子大の丸にし、浮麥湯で百丸づつを服す。汗止むを度とする。(談埜翁試驗方)【產後の虛汗】黃芪、當歸各一兩、麻黃根二兩を用ゐ、一兩づつを湯に煎じて服す。【陰囊濕痒】腎に勞熱があるためだ。麻黃根、石硫黃各一兩、米粉一合を末にして傅ける。(千金方)【內外障翳】麻黃根一兩、當歸身一錢を共に黑く炒り、麝香少量を入れて末にし、頻りに鼻から嗃ふ。これは南京相國寺東黑孩兒の方である。(普濟)

(一)木賊(宋嘉祐)

和名　とくさ
學名　Equisetum hyemale, L.
科名　とくさ科(木賊科)

【釋名】時珍曰く、この草は節があつて表面が糙澀なものだ。木骨の細工に用ゐ、木を磋き擦れば粗い理が取れて滑になる。それで木の賊といふわけだ。

【集解】禹錫曰く、木賊は(二)秦、隴、華、成諸郡の水に近い土地に出る。苗は長さ一尺ばかり、叢生するものだ。毎根一幹で、花も葉もなく、一寸位づつに節があつて色は青い。冬を凌いで凋まない。四月に採收する。

(二三)飛麪ハドンコ。

(一)牧野云フ、木賊ハ廣ク歐洲、北亞弗利加、北亞細亞、北米ノ諸地ニ分布シテ居ル種デ我邦ニモ北日本ニハ山地ニ野生スル、又能ク庭際ニ栽エラレテ居ル。

(二)秦州、隴州ハ山草類胡黃連ノ秦隴ノ註參照。華州ハ石部花乳石ノ註、成州ハ石部鹵石類光明鹽ノ註ヲ見ヨ。

頌曰く、所在の水に近い土地にある。採収に一定の時期はない。現に甚だ多く用ゐられてゐる。

〔木 賊〕

時珍曰く、叢叢皆直上に伸び、長いものは二三尺ある。形状は鳧茈の苗、及び粽心草に似て中が空だ。節があつて麻黄の莖に似てゐるが、やや粗く、枝も花もない。

莖 (一)氣味 【甘く微し苦し、毒なし】 時珍曰く、温である。 主治 【目疾に用ゐて翳膜を退け、積塊を消し、肝、膽を益し、腸風を療じ、痢を止め、また婦人の月水の断えぬもの、崩中赤白を止める】(嘉祐) 【肌を解し、涙を止め、血を止め、風濕、疝痛、大腸脫肛を去る】(時珍)

發明 禹錫曰く、木賊は、牛角腮、麝香と配合すれば休息久痢を治し、禹餘粮、當歸、芎藭と配合すれば崩中赤白を治し、槐蛾、桑耳と配合すれば腸風下血を治し、槐子、枳實と配合すれば痔疾出血を治す。

(三) 木村(康)曰ク、とくさハ多量ノ無水硅酸ヲ含有ス。邦薬植(昭、四再版)三六〇。又欧洲産とくさハ脂肪油、樹脂、糖類ヲ含ム(U. S. D. 1313, A. T. P. 58 (1886) 117.

震亨曰く、木賊は、節を去つて焼いたものは汗を發する。至つて簡易なものだが、本草では曾て言及してない。

時珍曰く、木賊は、氣は温、味は微し甘く苦し、中が空で輕い。陽中の陰であつて升であり浮である。麻黄と形を同じくし性も同じものだ。故にやはり能く汗を發し、肌を解し、火鬱、風濕を升散し、眼目の諸血疾を治す。

附方　舊三、新九。【目昏多涙】木賊を節を去り、蒼朮を泔に浸し、各一兩を末にして二錢づつ茶で調へて服す。或は蜜で丸にしてもよし。【急喉痺塞】木賊を牛糞の火で焼いて性を存し、一錢づつを冷水で服す。血が出て平安になる。(聖惠方)【舌硬出血】木賊を水で煎じて漱げば止まる。(聖惠方)【血痢の止まぬもの】木賊五錢を水で煎じ、一日一回温服する。(聖惠方)【瀉血の止まぬもの】方は上に同じ。一日二回服す。(廣利方)【腸痔下血】多年止まぬには、木賊、枳殼各二兩、乾薑一兩、大黄(四)二錢半、いづれも銚で黒く炒つて性を存し、末にして二錢づつを粟米飲で服す。甚だ效がある。(蘇頌圖經本草)【大腸脱肛】木賊を焼いて性を存して末にし、それを摻つて揉み込めば止まる。あるひは龍骨を加へる。(三因方)【婦人の血崩】血氣痛

(四) 大觀ニ一分トアリ。

の忍び難きもの、年久しく、或は日淺くして痊えぬには、雷氏の木賊散が主效がある。木賊一兩、香附子一兩、朴消半兩を末にし、三錢づつを、黑色のものを下すには酒一盞で煎じ、紅赤色のものを下すには水一盞で煎じ、一日二回滓と共に服す。臍下の痛むには、乳香、沒藥、當歸各一錢を加へて共に煎じる。生物、冷物、硬物、豬、魚、油膩、酒麪を忌む。（醫壘元戎）【月水不斷】木賊を炒つて三錢、水一盞を七分に煎じ、一日一回溫服する。（聖惠方）【胎動不安】木賊を節を去つて川芎と等分を末にし、三錢づつを水一盞に金銀一錢を入れて煎じたもので服す（聖濟總錄）【小腸疝氣】木賊を細かに剉み、微し炒つて末にし、二錢を沸湯に點て、緩やかに服して效を取る。ある方では、熱酒を用ゐて服す。（寇氏本草衍義）【誤つて銅錢を呑みたるもの】木賊を末にし、雞子白で一錢を調へて服す。（聖惠方）

【附錄】問荊　藏器曰く、味苦し、平にして毒なし。主效は結氣、瘤痛、上氣、氣急。煮汁を服す。（三）伊洛の洲渚の間に生ずる。苗は木賊のやうで、節と節とが相接したものだ。一名接續草といふ。

（二）伊洛ハ今ノ河南省ノ伊水、洛水ノ流域地方ヲイフ。

(一)石龍芻（本經上品）

和名 未詳
學名 Juncus sp. (?)
科名 ゐ科（燈心草科）(?)

【釋名】 龍鬚（本經）龍修（山海經）龍華（別錄）龍珠（本經）懸莞（別錄）草續斷（本經）縉雲草（綱目）方賓（別錄）西王母簪

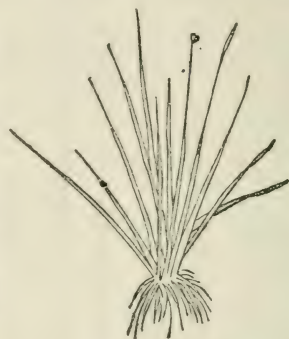
時珍曰く、草を刈つてくるめ束ねたものを芻といふ。この草は水石の間に生ずるもので、刈り束ねて馬の飼糧にするところから龍芻といつたのだ。述異記に『周の穆王は東海の島中で八頭の駿馬を飼養した。そこには龍芻と名ける草がある』とあるはこの草のことだ。故に古語に『一束の龍芻が化して龍駒となつた』などといひ、孟子に、芻豢とある言葉の意味はやはり是から出たものだ。龍鬚、王母簪は形の形容である。(二)縉雲は縣名で、今は(三)處州の管内に屬する。その地の仙都山にこの草が生えるところから名稱となつたのだ。崔豹の古今注に『傳說に、黃帝が龍に乘つて天に上る時、群臣がその龍の鬚に取り著いた。その際鬚が地に墜ちて草になつて生えたのが龍鬚と名ける草だといふ』とある。これはでたらめだ。江東に、席を織る材料で西王母席といふ草が

(一)牧野云フ、釋名、集解ノ文章ヲ按ズルニ何カゐ類ノ一品デアルト思ノ、野生モアレバ栽培モシテ居ル草デアルガ今遽カニソレガ明メ難イ、然シコレハ本草綱目啓蒙ニ充テテアルヤウニ我ガ疊ノ材料ニスルこひげデハ無イト思フ。

(二)縉雲縣ハ唐ニ置ク。今ノ浙江省處州府縉雲縣ノ地ナリ。

(三)處州ハ古ノ縉雲郡ノ地ナリ。土部白瓷器ノ註參照。仙都山、未詳。

あるが、まさか西王母が虎に乘つて墮した鬚といふわけではあるまい。

【集解】 別錄に曰く、石龍芻は(四)梁州の山谷、濕地に生ずる。五月、七月に莖を採つて暴乾する。九節で珠の多いものが良し。

弘景曰く、莖は青く、細くして相連り、實は赤い。今は近道の水石の處に出る。(五)東陽で龍鬚といふ席を作るものに似てゐるが、ただ節が多いだけである。

藏器曰く、今は(六)汾州、(七)沁州、(八)石州に產し、また處處にある。

〔龍鬚草〕

保昇曰く、叢生するもので、莖は(九)綖のやうだ。所在にある。俗に龍鬚草と名けて席に作れるものだ。八月、九月に根を採つて暴乾する。

時珍曰く、龍鬚は叢生するもので、形は粽心草、及び鳧茈の苗のやうで直上に伸びる。夏季に莖端に小さい穗の花を開き、細かい實を結ぶ。いづれも枝葉がない。

(四) 梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。
(五) 東陽ハ今ノ浙江省金華縣ノ地ナリ。
(六) 汾州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(七) 沁州ハ山草類黄耆ノ註ヲ見ヨ。
(八) 石州ハ北周ニ置キ、明ニ永寧州ニ改ム。今ノ山西省離石縣ノ地ナリ。
(九) 綖ハ字彙ニ音延冠上前後垂覆。

現に吳地方では、多く栽培して席を織つてゐる。他の地には自然に生えるものは少い。本經には、明かに『龍芻、一名龍鬚』とある。然るに陶弘景が『龍芻は龍鬚に似てただ(一〇)節が多い』といひ、二種別物のやうにいつたのは誤だ。

莖［氣　味］［苦し、微寒にして毒なし］別錄に曰く、微溫なり。［主　治］［心腹の邪氣、小便不利、淋閉、風濕、鬼疰、惡毒。久しく服すれば虛羸を補し、身を輕くし、耳目を聰明にし、天年を延べる］（本經）［內虛不足、痞滿で身體に潤澤無きを補し、汗を出し、莖中の熱痛を除き、蚘蟲腫、食物の不消化を療ず］（別錄）

敗席［主　治］［淋、及び小便の俄かに不通となりたるには、飽くまで敗れて垢のある一尺四方のものの煮汁を服す］（藏器）

(一)龍常草（別錄有名未用）

和　名　未　詳
學　名　Juncus sp.
科　名　ゐ科（燈心草科）

［釋　名］**粽心草**　時珍曰く、俚俗に、五月採つて角黍の心を繫ぎ、粽心草と呼ぶものがそれである。

(一〇)白井曰ク、藺ノ類類ニひらゐ一名はまゐ一名ねぢゐト云フモノガアルガ、此ハ莖中ニ節ノヤウナモノガ多クテ此ニ當ルヤウニ思ハルル、此ハ甚ダ丈夫ナ物デ草履ノ如キ物ヲ作ルニ適スル。

(一)牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ本品ヲ禾本科ノ一種たつのひげニ充テアレド誤リデアル、コレハゐノ類ノ一品トスル方ガ中ツテ居ルト考ヘルソシテ之レヲJuncus

setchuensis, Buch. var. effusoides, Buch. ニ充テタ人ガアルガ或ハソレガ本當カモ知レナイト想ハレル。

（一）牧野云フ、燈心草ハヤハリ支那デモ我邦ト同ジク一面燈心モ採ルガ一面又ハ席ナ織ルニ用キテ居ル、我邦デハ疊ニ造ルモノハ野生ノ粗イモノハ用キズニ田ニ

【集解】別錄に曰く、河水の近傍に生ずる。形狀は龍芻のやうで、冬も夏も生えてゐる。

（龍常草）

時珍曰く、按ずるに、爾雅に『䕯(こ)は鼠莞(そくわん)なり』とあるを、鄭樵はこれを龍芻と解釋し、郭璞は『纖細な龍鬚に似たもので、席になる。蜀中に出るものが好い』といつてある。恐らくこの龍常草のことらしい。蓋しこれは龍鬚の小さいだけのものである。故にその功用もやはり相近いのだ。

莖 【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】【主治】【身を輕くし、陰氣を益し、痺、寒濕を療ず】（別錄）

（一）燈心草（宋開寶）

和名 ゐ、又、ゐぐさ
學名 Juncus effusus, L. var. decipiens, Buch.
科名 ゐ科（燈心草科）

【釋名】**虎鬚草**（綱目） **碧玉草**（綱目）

【集解】志曰く、燈心草(とうしんそう)は江南の澤地に生ずる。叢生するもので、莖は圓く細

栽培シタ細長ナ品ヲ使用スル。

くして長く直いものだ。一般にこれで席を作る。

宗奭曰く、陝西にもある。蒸熟し乾してから開いて中心の白穰を取り、燈に燃すものを熟草といふ。又、蒸さずに生で乾して剝ぎ取るものを生草といふ。藥に入れるには生草を用ゐるがよい。

時珍曰く、これは龍鬚の類のものだ。ただ龍鬚は緊つて小さく、瓤が實してゐるが、この草はやや粗く、瓤が虛して白い。吳地方では、これを栽培して、瓤を取つて燈心にし、草で席や蓑を織る。他の地には野生のものは少い。外丹家ではこれで硫、砂を伏す。雷公炮炙論の序に『硇は赤鬚に遇へば永く金鼎に留まる』とあり、その註に『赤鬚はまた虎鬚草と呼ぶ。硇を煮るに能く火を住めるものだ』とあるが、果してこの虎鬚をいつたものか否か判らない。

〔燈　心　草〕

莖及び根　〔修　治〕　時珍曰く、燈心は硏り難いものだが、粳米粉漿で浸しつけ、

晒し乾かして研末し、水に入れて澄ませると燈心だけが浮き上る。それを晒し乾して用ゐるのだ。

(二)[氣味]【甘し、寒にして毒なし】元素曰く、辛く甘し、陽である。呉綬曰く、淡し、平である。[主治]【五淋には、生で煮て服す。朽敗した席を煮て服するが更に良し】(開寶)【肺を瀉し、陰竅の濇して利せざるを治し、水を行り、水腫、癃閉を除く】(元素)【急喉痺を治するに、灰に燒いて吹くが甚だ速かな效がある。乳の上へ塗つて小兒に飮ませれば夜啼を止める】(震亨)【心火を降し、血を止め、氣を通じ、腫を散じ、渴を止める。灰に燒き、輕粉、麝香を入れて(三)陰疳を治す】(時珍)

[附方] 舊一、新九。【破傷の出血】燈心草を嚼み爛らして傅ければ立ろに止まる。(勝金方)【衄血の止まぬもの】燈心一兩を末にして丹砂一錢を入れ、二錢づつを米飮で服す。(聖濟總錄)【喉風痺塞】瑞竹堂方では、燈心一握を陰陽瓦で燒いて性を存し、炒鹽一匙を入れ、一捻づつを數回吹き入るれば立ろに癒える。○ある方では、燈心灰二錢、蓬砂末一錢を吹く。○ある方では、燈心、箬葉の燒灰等分を吹く。○惠濟方では、燈心草、紅花の燒灰一錢を酒で服すれば直ちに消す。【痘瘡の煩喘】

(二) 木村(康)曰ク、ゐノ髓(燈心)ハ水分七・一五%脂肪六・五五%粗纖維三三・一六プロテイン一・七三%無窒素抽出物四二%灰分四・三二%及含水炭素キシラン、アラバン及ビメチルペントザン等ヲ含有ス。大島――J. of Sapporo Agric. Colleg. 2 (1906) 84.

(三) 陰具ニ發スル疳瘡梅毒性ノモノ。

小便不利なるには、燈心一把、鼈甲二兩、水一升半を六合に煎じ、二回に分服する。(龐安常傷寒論)

【不眠症】夜間眠り難きには、燈草の煎湯を茶の代りに飲めば睡り得る。(集簡方)

【水道を通利する】白飛霞の自制天一丸——燈心十斤を米粉漿に浸し、つけて晒し乾かし、研末して水に入れ、澄まして米粉を去り、浮いたものを取つて晒し乾して二兩五錢、赤、白茯苓を皮を去つて共に五兩、滑石を水飛して五兩、猪苓二兩、澤瀉三兩を、人參一斤を切片して熬膏したもので和して龍眼大の丸にし、硃砂を衣にかけ、一丸づつを用ゐ病に隨つて換引する。これは大體小兒の生理が上に向ひ、天一が水を生ずるの妙に本づくものである、諸病に水道通利を圖る捷徑の藥である。(韓氏醫通)

【濕熱黃疸】燈草根四兩、酒、水各半を瓶に入れ、半日煮て一夜露らして溫服する。(集玄方)

燈花燼　火部に記載してある。

本草綱目草部第十五巻終

本草綱目草部

第十六卷

本草綱目草部目錄第十六卷

草の五　隰草類下七十三種

地黃 本經 胡面莽を附す。　牛膝 本經　紫菀 本經
女菀 本經　麥門冬 本經　萱草 嘉祐　槌胡根 拾遺
淡竹葉 綱目　鴨跖草 嘉祐 即ち作葉菜。　冬葵 本經
蜀葵 嘉祐　莵葵 唐本　黃蜀葵 嘉祐　龍葵 唐本
龍珠 拾遺　酸漿 本經 即ち燈籠草。　蜀羊泉 本經
鹿蹄草 綱目　敗醬 本經 即ち苦菜。　迎春花 綱目
款冬花 本經　鼠麴草 日華 即ち米麴、佛耳草。　決明 本經
地膚 本經 即ち落帚。　瞿麥 本經　王不留行 別錄
剪春羅 綱目　金盞草 綱目　葶藶 本經　車前 本經
狗舌草 唐本　馬鞭草 別錄 即ち龍牙。　蛇含 本經
女青 別錄　鼠尾草 別錄　狼把草 開寶　狗尾草 綱目

鱧腸 唐本　即ち旱蓮草。　連翹 本經　陸英 本經
蒴藋 別錄　水英 圖經　藍 本經　藍澱 綱目
青黛 開寶　雀翹を附す。　甘藍 拾遺　蓼 本經
水蓼 唐本　馬蓼 綱目　葒草 別錄　毛蓼 拾遺
海根 拾遺　火炭母草 圖經　三白草 唐本　蠶繭草 拾遺
蛇菌草 拾遺　虎杖 別錄　蕕草 拾遺　萹蓄 本經
藎草 本經　蒺藜 本經　穀精草 開寶　海金沙 嘉祐
地楊梅 拾遺　水楊梅 綱目　地蜈蚣 綱目　半邊蓮 綱目
紫花地丁 綱目　鬼針草 拾遺　獨用將軍 唐本　留軍待を附す。
見腫消 圖經　攀倒甑 圖經　水甘草 圖經

右附方　舊一百七十一　新二百九十一

（一）牧野云フ、地黄ハ必ズシモ唯一種ノミニ限定セラレタモノデハナイヤウデアルガ、今往時支那カラ我邦ニ傳ヘタモノヲ本品トシテ此コニ其學名ヲ擧ゲテ置クガ、然シ此品ハ多分Rehmannia glutinosa, Libosch. ノ一變種デハナイカト思ハレル、我邦ニ渡來シ居ル地黄ニ二品アツテ一ハ黄白色ノ花ヲ開クモノ一ハ淡紫色ノ花ノ咲クモノデ、甲ヲ白矢ト呼ビ乙ヲ赤矢ト呼ンデ居リ赤矢ノ方ガ強壯ナ品デ且普通品ニ屬スル、今日デハ白矢品ハ殆ンド我邦ニ盡キタト思ハルルガ、若シソレガ尚存スルナレバ其種ヲ絶ヤサヌヤウニ充分保護スベキデ

草の五　隰草類下七十三種

（一）地黄（本經上品）

和名　ぢわう、さなひぬ（古名）
學名　Rehmannia lutea, Maxim.
　　　並に Var. purpurea, Makino.
科名　ごまのはぐさ科（玄參科）

【釋名】 **苄**　音は戸（コ）である。**芑**　音は起（キ）である。**地髓**（本經）　大明曰く、生のものを水に浸して試驗して、浮くものは天黄と名け、半ば浮き半ば沈むものは人黄と名け、沈むものは地黄と名ける。藥に入れるには沈むものを佳しとし、半ば沈むものはこれに次ぐ。浮くものは用ゐるに堪へない。
時珍曰く、爾雅に『苄は地黄なり』とあつて、郭璞は『江東では苄と呼ぶ』といひ、羅願は『苄は沈下するものが珍品であつて、價も高い。故に文字は下に從ふのだ』といふ。

【集解】 別錄に曰く、地黄は（二）咸陽の川澤に生ずる。土地の黄なる處のものが佳い。二月、八月に根を採つて陰乾にする。弘景曰く、咸陽とは（三）長安のことで、

(四)渭城に生ずるものは子があつて、實は小麥ほどのものだ。今は(五)彭城の乾地黃を最良とし、次は(六)歷陽のものだ。近來は江寧の(七)板橋のものを勝れたものとして用ゐる。乾製するには方法があつて、搗汁を和して蒸すのだが、なかなか技巧を要するものだ。此に別錄に『陰乾す』とあるは、恐らく蒸して作るには方法を過ち勝ちだからであらう。世間には赤牛膝や萎蕤で作るものもあつて、一般人にはその識別が付かない。

○頌曰く、今は處處にあるが、(八)同州のものを上位とする。二月生え、葉は地に布いて出ることは車前に似てゐる。葉の表面に皺文があつて光らない。高いものは一尺餘にもなり、低いものは三四寸である。花は油麻の花に似て紅紫色だ。また黃色の花のものもある。實は房になつて連翹のやうだ。中の子は甚だ細かくして沙褐色である。根は人の手の指ほどで全體が黃色だ。粗、細、長、短一定せぬ。これを栽培するには甚だ簡易なもので、根を土に入れて置けば生えるものだ。一說に、古は、地黃を種ゑるには黃土がよいといつたさうだが、今はさうでない。肥えた輕虛な土地が甚だよく、根も太く汁も多くなる。その種植法は、徑一丈餘を車輪のやうに葦席

アル。
(二)咸陽ハ秦ノ都ニシテ今ノ陝西省咸陽縣ノ東、涇水、渭水ノ合流點ニ近ク古ノ渭城ノ地アリ。卽チ古ノ咸陽ノ地ナリ。秦四十郡ノ一、內史ノ治所ナリ。芳草類積雪草ノ註參照。
(三)長安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。
(四)渭城ハ咸陽ノ註參照。
(五)澎城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(六)歷陽、江寧ハ芳草類當歸ノ註ヲ見ヨ。
(七)板橋、卽チ板橋浦、今ノ江蘇省江寧縣ノ附近ニ在リ、太平寰宇記ニハ當時ノ江寧縣治ノ南四十里ニ在リトアリ。
(八)同州ハ石部凝水石ノ註ヲ見ヨ。

で編み圍ひ、その中へ壤土を實して一壇を作り、その上へ又一尺ほど小さく葦席で圍つて土を實て、漸次に一尺ほどづつ小さくして、佛塔のやうな幾層かの壇を作り、地黄根の節多きものを一寸ほどづつに斷つて壇の層層へ一面に種ゑ、毎日水を灌げば繁茂する。かくて春、秋分の時に至つてその上層から取ると、根はいづれも長大になつて、折れもせず斷れもせぬ。搖る時に斬り付けて傷める處がないからだ。かくて取つた根を暴乾するのである。

同州の產は光潤で甘美だ。

宗奭曰く、地黄の葉は甘露子のやうだ。花は脂麻花のやうだが、ただ細かな斑點がある。北方地方ではこれを牛奶子といふ。花の莖に微細な短い白毛がある。

〔地黄〕

時珍曰く、今一般には(九)懷慶の地黄だけを上等品としてゐる。やはりそれぞれの產地も時代に依つて興廢があり、常に同一様にはないわけなのだ。苗は初生には地

(九)懷慶ハ春秋ノ晉ノ地、漢ノ河內郡ノ地ニシテ後魏ニ懷州ヲ置キ、元ニ懷慶路ニ改メ、明ニ府トナス。今ノ河南省沁陽縣城即チ舊府治ナリ。

にはり付き、葉は山白菜のやうで毛があつてざら付く、葉の面は深青色だ。また小芥葉にも似てゐるが、頗る厚くして丫字型の岐がない。葉の集つた中から面に細毛のある莖が出て、莖の梢に小さい筒形の紅黄色の花を開き、小麥粒ほどの實を結ぶ。根は長さ四五寸、手の指ほどの細いものだ。根皮は赤黄色で、羊蹄の根、及び胡蘿蔔の根のやうだが、曝乾すれば黑くなる。生で食へば土臭い。俗にその苗を婆婆奶と呼ぶ。古代には子を蒔いたさうだが、今ではただ根を種ゑることになつてゐる。王旻の山居錄に『地黄は嫩苗のうちに旁葉を摘み、菜にして食へば甚だ人體に益がある。本草には「二月、八月に根を採る」とあるが、物の性の上から見て、甚だ妥當を得て居らぬ。八月には殘葉がまだ在るもので、葉の中の精氣がまだ完全に根に歸らない。二月には新苗が已に生えるので、根の中の精氣が已に葉の方の滋養に行つてゐる。故に正月、九月に採る方がより多く完全なのだ。又、蒸し曝らすにも都合が宜い。禮記に、羊、苄、豕、薇の文字があるところを見ると、古代から已にこれを食つたものだ』とある。

嘉謨曰く、江浙地方の壤地に種ゑたものは、南方の陽氣を受けるので質は光潤だ

が、力が微弱だ。懷慶の山地に產するものは、北方の純陰を禀けるので皮に疙瘩があり、力が大きい。

乾地黃【修治】藏器曰く、乾地黃に就いて、本經では、生から乾したものと蒸して乾したものとに言及してないが、醫方上に用ゐるものには、二種それぞれ用途に別がある。蒸して乾したものは溫であつて補の作用があり、生で乾したものは平であつて宣するものだ。この法則に依つて使用すべきものである。

時珍曰く、本經に所謂乾地黃とは、生地黃をそのまま乾したものである。その製法は、地黃一百斤の中から肥えたもの六十斤を擇り分け、洗淨し晒して微し皺ませ、揀り殘りの下等品をば、洗淨して木臼で搗いて盡く汁を絞り、更に酒を投じて汁を取り、その汁を先の肥えた地黃に拌ぜて日中に晒し乾かすのだ。或は火で焙乾して用ゐる。

（二）【氣味】【甘し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦し。權曰く、甘し、平なり。好古曰く、甘く苦し、寒である。氣薄く味厚く、沈にして降る。陰であつて、手、足の少陰、厥陰、及び手の太陽の經に入る。酒に浸せば上行し外行する。日光

（一）木村（康）曰ク、本邦ニ於テハあかやぢわうヲ栽培シテ藥用ニ充ツ、漢藥ニ生地黃、乾地黃、熟地黃

等ノ種類アリ。
藤田直市——藥誌、大一三(五〇六)圖版一一。
(成分)根ハマンニツト及糖ヲ含有ス。
大谷文昭——日本藥學會第四十八總會講演(昭三)
(一一)忌ノ字大觀ニ據リ補入ス。
(一二)傷中ハ飲食節ヲ失シ房勞度ヲ過ゴシテ內臟ノ氣傷害セラルルナリ。
(一三)血痺ハ血行ノ障害ヨリ起ルシビレ。
(一四)飽力ハ消化力。

で乾したものは平であり、火で乾したものは溫である。功用は同じものだ。元素曰く、生地黃は大寒である。胃弱のものには斟酌して用ゐる。胃氣を損する虞があるからだ。

之才曰く、淸酒、麥門冬と配合するが良し。貝母を惡み、蕪荑を畏る。權曰く、葱、蒜、蘿蔔、諸血を(一一)忌む。人體の營、衞を澀らせ、鬚髮を白からしめるものだ。斅曰く、銅、鐵器を忌む。腎を消耗せしめ、幷に髮を白くし、男子は營を損じ、婦人は衞を損ずるものだ。時珍曰く、薑汁で浸せば膈に泥せぬ。酒で修治すれば胃に故障を起さぬ。採つたばかりの生のものを用ゐれば寒であり、乾して用ゐれば涼である。

主治　【(一二)傷中。(一三)血痺を逐ひ、骨髓を塡充し、肌肉を長ずる。湯にして用ゐれば、寒熱積聚を除き、痺を除き、折跌絕筋を療ず。久しく服すれば、身體を輕くし、老衰せぬ。生が就中良し】(本經)　【男子の五勞、七傷、婦人の傷中、胞漏下血に主效があり、惡血、溺血を破り、大、小腸を利し、胃中の宿食、(一四)飽力の斷絕を去り、五臟內傷の不足を補し、血脈を通じ、氣力を益し、耳、目を利す】(別錄)　【心

膽の氣を助け、筋骨を强くし、志を長じ、魂を安じ、魄を定め、驚悸、勞劣、心、肺損の吐血、鼻衄、婦人の崩中、血運を治す】(大明)【産後の腹痛、久しく服すれば、髮の白きを黑く變じ、天年を延べる】(甄權)【血を涼し、血を生じ、腎水の眞陰を補し、皮膚の燥を除き、諸濕熱を去る】(元素)【心病で掌中が熱痛するもの、脾氣で痿蹷し、横臥を好み、足下の熱して痛むものに主效がある】(好古)【齒痛、唾血を治す】

生地黃 主治 【大寒なり。婦人の崩中で血の止まぬもの、及び産後の血が上に心に薄つて悶絶するもの、身體を傷めたための胎動で下血し、胎の落ちぬもの、墮墜踠折の瘀血、留血、鼻衄、吐血を治す。いづれも搗いて飲む】(別錄)【諸熱を解し、月水を通じ、水道を利す。搗いて心、腹に貼れば、能く瘀血を消す】(甄權)

發明 好古曰く、生地黃は手の少陰に入る。又、手の太陽の劑である。故に錢仲陽は(一五)丙火を瀉するに木通と共に用ゐた。以て(一六)赤を導いたのである。諸經の血熱には、他の藥と共に用ゐてそれぞれ能く治效を擧げる。溺血、便血にも皆同様だ。

(一五)丙トハ心臟ヲ指ス。
(一六)赤モ心臟ヲ指ス。

○權曰く、患者が虛して熱多き場合に加へて用ゐるがよし。
○戴原禮曰く、陰微にして陽盛なために、相火が熾で強壓的に陰の範圍を壓迫し、日に日に漸次に(一七)煎熬して虛火の證となつたものには、地黃の屬を用ゐて陰を滋盛にし、陽を退くべきものである。
○宗奭曰く、本經には、ただ乾、生の二種のみを擧げて熟せる者には言及してないが、血虛の勞熱、産後の虛熱、老人の中虛燥熱の場合には、生、乾のものを與へては大寒ならしむるの虞れがある。故に後世では、蒸し曝し熟したものを用ゐることに改めた。生と熟とではその功力に甚しい區別があるから明確な注意を要する。
○時珍曰く、本經の所謂る乾地黃は、陰乾、日乾、火乾のものをいふ。故にまた『生なるもの尤も良し』といつてある。別錄にはまた『生地黃とは、新たに掘つた新鮮なものだ』とある。故に性は大寒なりといつたのだ。熟地黃なるものは、後世更に蒸し晒して作つたもののことで、諸家の本草に、いづれも乾地黃を指して熟地黃としてあるが、主治の病證は同一だけれども、功果に於て、血を涼ずると血を補するとに稍異るところがある。故に本書には、熟地黃の一條を別つて次に記載する。

(一七)煎熬ハ濃厚ニナル意。

(一八)去字ハ大觀ニ據ル。

熟地黃　修治　頌曰く、熟地黃を作る方法は、肥えた地黃二三十斤を洗淨し、別に揀り(一八)去つた瘦せて短いもの二三十斤を搗いて絞り取つた汁を石器の中に入れ、肥地黃を甑に入れたままその汁に浸し漉してよく浸み徹らせ、かく三四回浸し漉しては蒸して暴し、更に幾度もまた浸し漉して蒸す毎に暴し、汁全部が盡きるまで繰返す。かくすると肥地黃は漆のやうに黑光がして、味は飴のやうに甘くなる。それをば甕器に取つて貯藏する。それは脂柔でよく潤ひ易いものだからだ。

斅曰く、生地黃を採り、皮を去つて柳木甑に入れ、甕鍋の上で蒸して取り出し、ひろげて蒸氣を無くしてから酒を拌ぜて再び蒸し、又出して乾すのである。銅、鐵器に觸れてはならぬ。腎を消耗し、また髮を白くし、男子は營を損じ、女子は衞を損ずるものだからだ。

時珍曰く、近頃の製法は、水に沈む肥大なものを揀り取り、縮砂仁末を入れた好き酒の中へ入れてかき拌ぜ、柳木甑に盛つて瓦鍋の中へ入れ、蒸して氣を透らせて暴し乾し、再び砂仁酒を拌ぜて蒸し暴らす。かく蒸し暴すこと九回繰返して止めるのである。蓋し地黃の性は泥むものだから、砂仁の香しくして滲み込む性質を配合

するのであつて、五臓の冲和の氣を合和して丹田に納り落付かすことを目的とするのだ。現に商店でただ酒で煮熟して賣つてゐるものは用ゐられない。

【氣味】【甘く微し苦し、微溫にして毒なし】元素曰く、甘く微し苦し、寒である。酒の力を假りて晒し蒸せば、微溫にして大いに補の功がある。味厚く氣薄し、陰中の陽であり、沈であつて、手、足の少陰、厥陰の經に入る。外部を治し、上部を治するには、酒で製したものを用ゐるがよし。蘿蔔、葱、蒜、諸血を忌む。牡丹皮、當歸と配合すれば血を和し、血を生じ、血を涼し、陰を滋くし、髓を補す。

【主治】【骨髓を塡め、肌肉を長じ、精血を生じ、五臓內傷の不足を補し、血脈を通じ、耳、目を利し、鬚髮を黑くする。男子の五勞、七傷、婦人の傷中、胞漏、月經不順、妊娠、出產のあらゆる疾病】（時珍）【血氣を補し、腎水を滋くし、眞陰を益し、臍腹の急痛、病後脛、股の酸痛を去る】（元素）【坐して起たんとするとき目がぐらぐらして物の見えぬもの】（好古）

【發明】元素曰く、地黃は、生は大寒で血を涼ず。血熱の者に用うべきものだ。熟は微溫で腎を補す、血の衰へた者に用うべきものだ。又、臍下痛は腎の經に屬す

る。熟地黄以外では除き得ない。これは通じて腎の藥なのだ。

好古曰く、生地黄は、心の熱、手、足の心の熱を治し、手、足の少陰、厥陰に入り、能く腎水を益し、心血を涼ずる。脈の洪、實なるものに適する。脈が虚する者ならば熟地黄がよい。火力を假りて九回蒸すものだから、能く腎中の元氣を補するのだ。仲景の(一九)六味丸は、これを以て諸藥の首、天一所生の源としてある。湯液の四物湯は、血を藏する臓器を治するもので、これを以て君藥としてある。(二〇)癸と乙とは共に一治に歸するものだ。

時珍曰く、按ずるに、王碩の易簡方に『男子の陰虚の傾向多きには熟地黄を用ゐるがよく、婦人の血熱の傾向多きには生地黄を用うるがよい』とあり。又『生地黄は能く精血を生じ、天門冬はその生ずる作用の存する當體まで導き入れる。熟地黄は能く精血を補し、麥門冬はその補の作用を受くべき當體まで導き入れる』とある。虞摶の醫學正傳には『生地黄は血を生ずるものだが、胃氣の弱い者が服すれば食物の消化を妨げる虞がある。熟地黄は血を補するものだが、痰飲の多い者が服すれば膈に泥むの虞がある』とある。或は、生地黄は酒で炒れば胃を妨げず、熟地黄は薑

(一九)湯液本草ニ八ニ作ル之ヲ正トス、然レドモ其用キル所ハ乾地黄ニシテ熟地黄ニ非ズ。

(二〇)癸ハ水ニシテ腎臓ヲ指シ、乙ハ木ニシテ肝臓ヲ指ス。

汁で炒れば膈に泥まないともいふ。これはいづれも地黄使用法の精微を得たものだ。

頌曰く、崔元亮の海上方に『發病の新、久を問はず、一切の心痛を治するには生地黄一味を用ゐる。患者の食ひ得るだけの量を搗いて汁を絞り取り、麪にまぜて(二一)餺飥を作り、或は(二二)冷淘にして食ふ。良久して必ず頭の形が(二三)壁宮に似た長さ一尺ばかりの蟲を利出して、その後は復びその病に罹らぬものである。昔、ある者がこの病を二年の間患ひ、非常に不治を殘念がつてゐたが、臨終に家人を喚んで「この身が死んだら、解剖してこの病の本源を取去つてくれ」と遺言した。死後遺言に從つて解剖すると、果して蟲が居た。そこでその蟲を取つて竹筒中に入れ、食事毎に膳部のものを與へて飼つてゐたが、地黄の餺飥を作つたとき、やはりそれを與へると、その蟲は忽ちは壞爛して了つた。これから右の方を得たものだ』とある。劉禹錫の傳信方にもこの蟲のことを記載して『貞元十年に、通事舍人崔抗の娘が心痛を患つて瀕死の危篤に陷つた。その際地黄冷淘を作つて食はせると、忽ち蝦蟇のやうな形狀で、足も目も無くて口ばかりはあるやうな、方寸匕ばかりのある物を吐出して遂に癒えた。その冷淘には鹽を著けてはならない』とある。

(二一)餺飥ハスキトン。
(二二)冷淘ハナガシモノ寒天ニテ作ル。
(二三)壁宮ハ守宮ノ一名ニシテヤモリヲ云フ。

（二四）乳石ヲ取リトハ乳石ノ害ヲ去ルノ意歟、乳ハ石鍾乳、石ハ石英其他ノ石藥。

附方　舊十三、新五十一。【服食法】地黄根を洗淨し、搗いて汁を絞り、ねばるまでに煎じて白蜜を入れ、更に丸にし得るまでに煎じて梧子大の丸にし、毎早朝溫酒で三十丸を服し、日毎に三回服す。また青州の棗を和して丸にするもよし。或は別に乾地黄末を膏に入れて丸にして服するもよし。百日服すれば顏が桃花のやうになり、三年服すれば身體が輕くなり、老衰せぬ。抱朴子に『楚文子は、地黄を八年間服して、夜中物の形を明かに見た』とある。

【地黄煎】虛を補し、熱を除き、吐血、唾血を治し、(二四)乳石を取り、癰癤等の疾を去る。生地黄を多少に拘はらず、三回搗き三回壓搾して盡く汁を取り、瓦器に入れて氣の洩れぬやうに密に蓋ひ、それを湯上で半減するまで煮て滓を絞り去り、再び餳のやうに煎じて彈子大の丸にし、一日二回、一丸づつを溫酒で服す。（千金）

【地髓煎】生地黄十斤を洗淨し、搗いて壓搾して汁を取り、鹿角膠一斤半、生薑半斤の絞汁、蜜二升、酒四升を用ゐ、先づ文武火で地黄汁を煮て數沸したところへ、酒で紫蘇子四兩を研つて取つた汁を入れ、一二十沸煎じて膠を入れ、膠が溶けたとき薑汁と蜜を入れて再び煎じ、稠るやうになつたとき瓦器に移して取收め、一匕づ

つを空心に酒に溶かして服す。大いに補益がある。(同上)

【地黄粥】大いに血を利し、精を生ずる效能がある　地黄を切つて二合を米と共に罐に入れ、煮て熟した頃に酥二合、蜜(二五)乙合を共に香しく炒つて入れ、再び煮熟して食ふ。(臞仙神隱)

【地黄酒】穀部、酒の條を見よ。

【瓊玉膏】常に服すれば、心を開き、智を益し、髮の白きを黑に返し、齒の落ちたるを更生し、穀食を辟け、天年を延べ、癰疽、勞瘵、欬嗽、唾血等の病を治す。これは鐵甕城の申先生の方である。生地黄十六斤から汁を取り、人參末一斤半、白茯苓末三斤、白沙蜜十斤を濾し淨めてよく拌ぜ、瓶に入れて箬で封じ、砂鍋の中へ入れて三晝夜間桑柴火で煮てから、再び封を換へて蠟紙で二重に封じ、一夜井底に浸して取り出し、再び一伏時煮る。それを一匙づつ白湯、或は酒に點て服する。丹溪は『房事過度で虛した者の欬嗽、唾血には、これを服すれば甚だ速かな效がある』といつてある。我が明朝の太醫院に於ける皇帝の服食進供の規定では、天門冬、麥門冬、枸杞子末各一斤を加へ、名稱を益壽永眞膏と賜はつた。臞仙の方では、琥珀、

(二五)乙ハ一ニ通ズ乙合ハ一合ヲ云フ。

(二六)恐クハ各ノ字チ脫ス。

(二七)吸小氣ハ呼吸ノ吸氣ガ短イモノ。

沈香(二六)半兩を加へる。【明目、補腎】生苄、熟苄各二兩、川椒紅一兩を末にして蜜で梧桐子大の丸にし、三十丸づつを空心に鹽湯で服す。(普濟方)【齒を固くし、鬚を烏くする】一には齒痛を治し、二には津液を生じ、三には白鬚を變ず。その功極めて妙である。地黃五斤を柳木甑に入れて土で上を蓋ひ、蒸熟して晒し乾かすこと三回、それを擣いて小さき餅にし、一箇づつを噙んで嚥む。(御藥院方)【男女の虛損】或は大病後、或は積勞の後、四體が沈滯し、骨肉が酸痛し、また(二七)吸小氣、或は小腹拘急、腰、背の强痛、咽乾、脣燥、或は飲食に味無く、多くは橫臥して起きる時少き等、永きは積年の久き、輕きも百日、漸次に肉落ちて瘦削するには、生地黃二斤、麪一斤を擣き爛し、炒り乾して末にし、一日三回、方寸匕づつを空心に酒で服し、法則通りの忌み物を守る。(肘後方)【虛勞困乏】地黃一石の汁を取つて酒三斗と攪きまぜて煎じ、貯へて日毎に服す。(必效方)【病後の虛汗】口乾き、心燥するには熟地黃五兩、水三盞を一盞半に煎じ、一日の內に全部を三回に分服する。(聖惠方)【骨蒸勞熱】張文仲の方では、生地黃一升を擣いて三回に絞り盡し、二回に分服する。若し痢するときは量を減じ、涼となるを度とする。(外臺祕要)【婦人の發熱】勞病とな

る傾向があつて、肌痩し、食減じ、月經不順なるには、地髓煎——乾地黄一斤を末にして煉蜜で梧子大の丸にし、酒で五十丸づつを服す。(保慶集)【婦人の勞熱】心忪するには、地黄煎——生乾地黄、熟乾地黄等分を末にし、生薑自然汁を入れた水で和した糊で梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを地黄湯で服す。或は酒、醋、茶湯で服するもよし。臟腑に虛冷を覺えるときは、早朝に八味丸を服す。地黄は性冷である。脾を壞め、陰虛すれば發熱するものだ。地黄を用ゐるは陰血を補するためである。(婦人良方)【欬嗽唾血】勞痩、骨蒸で日暮寒熱するには、生地黄汁三合を用ゐ、白粥を煮て熟したときその地黄汁を入れ、攪きまぜて空心に食ふ。(食醫心鏡)【吐血欬嗽】熟地黄末を、一日三回、一錢づつ酒で服す。(聖惠方)【吐血の止まぬもの】生地黄汁一升二合、白膠香二兩を磁器に盛り、甑に入れて蒸し、膠を溶かして服す。(梅師)【肺損の吐血】或は舌に孔を生じて出血するには、生地黄八兩から汁を取り、童尿五合と共に煎じ熱し、鹿角膠を炒り研つて一兩を入れ、三回に分服する。【心熱吐衄】脈の洪、數なるには、生苄汁半升を一合までに熬つて大黄末一兩を入れ、膏に成るを待つて梧子大の丸にし、五丸乃至十丸を熱水で服す。(いづれも聖惠方)

(二八)微轉一行詳ナラズ、三回中一回ヲ省クモ可ナリノ意カ。

【衄血】乾地黄、地龍、薄荷等分を末にし、冷水で調へて服す。(孫光秘寶方)【吐血、便血】地黄汁六合を銅器で煎沸し、牛皮膠一兩を入れ、溶けるを待つて薑汁半盃を入れ、三回に分服すれば止まる。或は(二八)微轉一行するも妨げぬ。(聖惠方)【腸風下血】生地黄、熟地黄をいづれも酒に浸し、五味子と等分を末にして煉蜜で梧子大の丸にし、七十丸づつを酒で服す。(百一選方)【初生兒の便血】生後七八日の初生兒が大、小便に出血すれば、熱が心、肺に傳はるものだ。涼藥を服ませるわけに行かぬから、ただ生地黄汁五七匙に酒半匙、蜜半匙を和して服す。(全幼心鑑)【小便尿血】吐血、及び耳、鼻の出血には、生地黄汁半升、生薑汁半合、蜜一合を和して服す。(聖惠方)【小便血淋】生地黄汁、車前葉汁各三合を和し、煎じて服す。(聖惠方)【小兒の蠱痢】生苧汁一升二合を三四回に分服すれば立ろに效がある。(子母祕錄)【月水不止】生地黄汁一盞、酒一盞を煎じて一日二回服す。(千金方)【月經不順】不順の狀態が久しきに亙つて妊娠せぬは衝任の伏熱である。熟地黄半斤、當歸二兩、黄連一兩、いづれも一夜酒に浸し焙じて研末し、煉蜜で梧子大の丸にし、七十丸づつを米飮、溫酒のいづれか任意のもので服す。(禹講師方)【妊娠漏胎】下血して止まぬには、

百一方では、生地黃汁一升を酒四合に漬け、煮て三五沸して服す。止まぬときはまた服す。○崔氏方では、生地黃を末にし、晝一囘、夜一囘、酒で方寸匕を服す。○經心錄では、乾薑を加へて末にする。○保命集では、二黃丸——生地黃、熟地黃等分を末にし、一日二囘、半兩づつを白朮、枳殼の煎湯で調へて空心に服す。【妊娠胎痛】妊婦が衝任の脈の虛するには、ただ抑陽助陰內補丸が適する。熟地黃二兩、當歸一兩を微し炒つて末にし、梧子大の丸にして三十丸づつを溫酒で服す。(許學士本事方)【妊娠胎動】生地黃の擣汁を煎沸して雞子白一箇を入れ、攪きまぜて服す。(聖惠方)【產後の血痛】塊があり、幷に經脈が行つて後腹痛し、不調なるには、黑神散——熟地黃一斤、陳生薑半斤を共に炒り乾して末にし、二錢づつを溫酒で調へて服す。(婦人良方)【產後の惡血】止まぬには、乾地黃を擣いて末にし、一錢づつを食前に熱酒で服し、續けざまに三服する。(瑞竹堂方)【產後の中風】寢返りの出來ぬには、交加散——生地黃五兩を研つた汁に生薑を浸し、生薑五兩から取つた汁に生地黃を浸して一夜置き、翌日各〻黃色に炒つて汁に浸し、乾してから焙じて末にし、一方寸匕づつを酒で服す。(濟生方)【產後の煩悶】これは血氣(二九)上冲である。生地

(二九)上冲ハ上衝スルコト。

黄汁、清酒各一升を和し、煎沸して二回に分服する。(集驗方)【産後のあらゆる病】

地黄酒――地黄汁に麴二升、淨[三〇]秫米二斗を漬けて醱酵させ、普通の醸造法のやうに醸熟してから、封じて七日置いて澄んだものを取り、絶えずそれを常服する。生物、冷物、鮓、蒜、雞、猪の肉、一切の毒物を忌む。酒は出産一箇月前に醸造する。夏季は造れない。(千金翼方)【胞衣不出】生地黄汁一升、苦酒三合を和して煖服する。(必效方)【寒疝の絞痛】去來するには、烏雞一羽を普通やうに調理し、生地黄七斤を細かに剉み、共に甑中に入れて蒸し、その落ちる汁を銅器に承け、早朝から夕刻までに服し盡す。その間に諸[三一]寒澼を下すものだから、下し訖つてから白粥を作つて食ふ。久しき疝痛には三劑を用ゐる。(肘後方)【小兒の陰腫】葱椒湯で煖い處で洗ひ、唾で地黄末を調へて傅ける。外腎の熱には雞子淸で調へ、或は牡蠣少量を加へる。(危氏方)【小兒の熱病】壯熱し、煩渴し、頭痛するには、生地黄汁三合、蜜半合をよく和し、折折與へて服ませる。(普濟方)【熱暍昏沈】地黄汁一盞を服す。【熱瘴の昏迷】煩悶し、水を飲んで止まぬものは甚だ危險に陥るものだが、左の藥一服で效が現はれる。生地黄根、生薄荷葉等分を擂り爛らして自然汁を取り、麝香少

(三〇)食物本草ニハ糯米一ノ三字ニ作ル。

(三一)寒澼ハ痢病ノ汚物。

量を入れて井華水で調へて服す。心下が頓に涼を覺える。再服の要なし。（普濟方）

【溫毒發斑】黑膏——溫毒の發斑、嘔逆を治す。生地黃二兩六錢二字半、好き豆豉一兩六錢二字半を、豬膏十兩で合はせて一夜露らし、煎じて三分一減つたとき絞つて滓を去り、雄黃、麝香を豆ほど入れて攪きまぜ、三回に分服する。毒が皮中から出て癒える。蕪荑を忌む。（千金方）【血熱で生じた癬】地黃汁を頻りに服す。（千金方）【疔腫、乳癰】地黃を搗いて敷き、熱すれば取換へる。性は涼であつて、腫を消するに必ず效が現はれる。（梅師方）【癰癤惡肉】地黃三斤、水一斗を三升に煮取り、滓を去つて煎稠し、紙に塗つて貼る。一日に三回換へる。（鬼遺方）【一切の癰疽】及び打撲傷損。まだ破れずして疼痛するには、生地黃を杵いて泥の如くし、それをのした上に木香末を摻り、その上にまた地黃泥一重をのして貼る。三五回に過ぎずして內消する。（王袞博濟方）【打撲損傷】骨碎、及び筋の傷爛には、生地黃の熬膏で裹んで竹筒を添へて挾み、急に縛つて動かぬやうにし、一晝夜に十回換へれば瘥える。

○類說に『許元公は、橋を渡るとき落馬して右臂が脫臼し、從者が急に揉み込んだが、人事不省となつて痛苦の意識がなかつた。そこで急に田錄事を招いで手當を請

ふと、錄事は視て「まだ十分助かる」といひ、藥で腫處を封ずると、夜半に意識が回復し、曉方には痛が止り、痛處は已に白くなつてゐた。その後日毎に貼換へると、瘀腫は肩、背に移動した。そこで藥を用ゐて黑血三升を下すと、それで癒えた』とある。これは上記の方である。記載は肘後方中にある。〇損傷、打撲の瘀血が腹に在るには、生地黃汁三升、酒一升半を二升半に煮て三回に分服する。記載は千金方にある。【物で瞳を突いた負傷】輕きは瞼胞が腫痛し、重きは眼睛が突出する。但だ眼の神經さへまだ切斷されぬならば、眼窩中に納れて急に生地黃を搗いて綿で裹んで傅け、風に當らぬやうにして膏藥でその四邊を保護し圍ふ。（聖濟總錄）【睡から起きて目の赤きもの】腫起し、良久して平常に復するものは血熱である。血は寢れば肝に歸するものだ。故に熱すれば目が赤腫する。良久すれば血が散ずるから平常に復するのだ。生地黃汁で粳米半升を浸し、三回浸し三回晒して乾し、その米で每夜粥を煮て一盞づつ食へば數日で癒える。ある患者にこれを實行して效果を得た。（醫餘）【突然の眼の赤痛】水で洗つた生地黃、黑豆各二兩を搗いて膏にし、就寢時に鹽湯で目を洗ひ、目を閉ぢてこの藥で厚く目の上を罨ひ、夜明て水で潤して取り除

く。（聖濟總錄）【蓐內赤目】生地黄を薄く切り、温水に浸して貼る。（小品方）【牙宣露】膿血を出し、口の臭きには、生地黄一斤、鹽二合を末にし、臼で搗き和して團にし、麪で包んで烟が無くなるまで煨いて麪を去り、麝一分を入れて研勻し、晝夜それを貼る。（聖濟錄）【牙齒の長く伸び出るもの】一分程伸び出たものは、常に生地黄を嚙むが甚だ妙である。（張文仲備急方）【牙が脫けるやうに動くもの】生地黄を綿で裹んで咂ひ、汁で齒根を漬けてから嚥む。一日五六回試みる。（千金方）【蟹を食つて起つた齦腫】肉の弩出するには、生地黄汁一盌を用ゐ、牙皂角數本を火で炙つてその汁全部を蘸け、末にして傅ける。（永類方）【耳中の常鳴】生地黄を截つて耳の中を塞ぎ、一日に數回換へる。或は煨熱して用ゐるが尤も妙である。（肘後方）【鬚髮の黄赤】生地黄一斤、生薑半斤を、各〻洗ひ研つて自然汁と滓とを各別に取り、蛀の付かぬ皂角數本を皮の弦を去つて右の汁を蘸け、汁が盡きるまで幾回も繰返して炙り、先の滓と共に罐に入れて泥固し、煨いて性を存して末にし、その末三錢を鐵器に入れて湯で調へ、そのまま二日置いて就寢時に鬚髮を刷き染めれば黑くなる。（本事方）【竹木で肉を刺したとき】生地黄を嚼み爛らして罨ふ。（救急方）【毒箭が肉を

（三二）飯餅ハソクヒ。

（三三）大觀ニ方寸ヲ錢ニ作ル。

（三四）墜眼ハ裏眼ニ通ズ。

穿つたとき】生地黃の汁を煎じて丸にし、百日間服すれば箭が出る。（千金方）【狂犬の咬傷】地黃の搗汁で（三二）飯餅を作つて塗る。百回で癒える。（百一方）

葉 〔主治〕【癩に似た惡瘡の十年の永きには、先づ鹽湯で洗つてから、葉を搗き爛らして日每に塗る】（千金方）○時珍曰く、按ずるに、抱朴子に、『韓子治が、地黃の苗で五十歲の老馬を飼つたところ、その老馬が三頭の駒を生んだ。又、一百三十歲で死んだ』とある。張鷟の朝野僉載には『雉が鷹に傷けられたときは、地黃葉を啣んで點ける。虎が藥箭で射られたときは、淸泥を食つてその毒を解す。鳥獸すら解毒の方法を心得てゐる。況や人間をや』といつてある。

實 〔主治〕【四月に採つて陰乾し、搗いて末にし、一日三回（三三）方寸匕を水で服す。その功力は地黃と等しい】（蘇頌）○弘景曰く、渭城に出るものには子がある。淮南七精丸に用ゐてある。

花 〔主治〕【末にして服食する。その功力は地黃と同じ】（蘇頌）【腎虛の腰、脊痛には、末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す】（時珍）

〔附方〕 新一。【內障靑盲】風赤で瞖を生じたもの、及び（三四）墜眼久しきに亙つ

て(二五)瞞損し、失明したるには、地黄花を晒し、黑豆花を晒し、槐花を晒して各一兩を末にし、豬肝一頭分と共に水二斗で煮る 上に凝脂の出るまでになつたとき、その脂を盡く掠めて瓶に取收め、少量づつを三四回點ける(聖惠方)

[附録] (二六)胡面莽(拾遺) 藏器曰く、味甘し、溫にして毒なし。痃癖、及び冷氣を去るに主效がある。腹痛を止めるには煮て服す。嶺南に生ずるもので、葉は地黄のやうなものだ。

(一)牛膝(本經上品)

和名 ゐのこづち
學名 Achyranthes bidentata, Blume.
科名 ひゆ科(莧科)

[釋名] 牛莖(廣雅) 百倍(本經) 山莧菜(救荒) 對節菜 弘景曰く、莖に牛の膝に似た節があるところから名けたものだ。時珍曰く、本經にまた百倍とある名は隱語であつて、その滋補の功力が牛のやうに力が多いといふことだ。葉が莧に似て節に對して生ずるところから、俗に山莧、對節などの稱がある。

[集解] 別錄に曰く、牛膝は(二)河内の川谷、及び(三)臨朐に生ずる。二月、八月、

(二五)瞞損ハ満目不明ヲ云フ。
(二六)牧野云フ、先哲ノ説ニ從ヘバ胡面莽ハ和名せんりごまデアルが支那ニハ此地黄屬(Rehmannia)ノモノハ種種アルカラ此レガ果シテ其品デアルカ否カ實ハ能ク判ツテ居ル譯デハナイ。右ノせんりごまハ往時支那カラ渡シタモノデ今日デハ世間ニ絶エテ無クシテ僅ニアル位ノモノデアラウト思フ、地黄ヨリハ壯大ナ品デ花モ大キイ、此品ハ藥用ニハセズタダ花ヲ賞スルバカリデアル地黄屬デ學名ヲRehmannia glutinosa, Libosch. var. Makinoi, Matsuda.トイヒ地黄ト同科ニ屬スル。

十月に根を採つて陰乾する。普曰く、葉は夏藍のやうで莖本が赤い。弘景曰く、今は近道に產するが、(四)蔡州のものが最も長大で柔潤だ。その莖には節があつて、莖が紫で節の大なるものを雄、靑く細いものを雌とし、雄を勝れたものとする。

大明曰く、(五)懷州のものは長く白く、蘇州のものは色が紫だ。

〔牛膝〕

頌曰く、今は(六)江淮、閩粤、關中にもあるが、懷(七)慶の者の純眞なるには及ばない。春苗が生え、莖は高さ二三尺、靑紫色で鶴の膝か牛の膝(八)頭のやうな節があり、葉は尖つて匙のやうに圓く、節の上に兩兩相對して生える。花は穗になり、秋甚だ細い實を結ぶ。根は極めて長く太く、三尺ほどある。柔く潤ふものが佳い。葉も單用し得る。

時珍曰く、牛膝は處處にある。土牛膝といふは服食に堪へない。ただ(九)此土、及び(一〇)川中の人家で栽培するものを良しとする。それは秋季間に子を取つて春蒔く

(一)牧野云フ、最モ普通ナル宿根草デ山野ニ生ズル、其果實ハ宿存萼之レヲ被ヒ先端尖リテ全體反屈シ能ク衣服ニ著ク、一種狹長葉ノモノがアルやなぎゐのこづちト稱スル。
(二)河內ハ菊ノ註ヲ見ヨ。
(三)臨朐ハ石部石類ノ註ヲ見ヨ。
(四)蔡州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(五)木村(康)曰ク、生藥ハゐのこづちノ根ヲ用ウルモノナレドモ、懷州トシテ出ヅル牛膝ハ甚ダシク長大ナルモノアリ、ゐのこづちニヨルモノナルヤ否ヤ決定スルヲ得ズ。
懷州、卽チ懷慶ノ地ナリ。地黃ノ懷慶ノ註參照。蘇州ハ隋ニ

ものであ、苗は莖が四角で節があらはになり、葉は皆對して生え、頗る莧葉に似て長く且つ尖(一一)觧だ。秋季に穗になつた花を開き、小さい(一二)鼠負蟲のやうな形狀の子を結び、(一三)濇毛があつて莖に貼つたやうに倒生する。九月末に根を採る。二晝夜水に浸して皮を挼み去り、裹み括つて暴乾すると、白く眞直で外觀は宜しいが、白汁を挼み去るので、藥に入れるには皮のままのものの功力の大なるに及ばない。嫩苗は菜にして食へる。

根　［修治］　斅曰く、凡そ使用するには、頭蘆を去つて黃精の自然汁に一夜浸し、漉出して剉み、焙じ乾して用ゐる。時珍曰く、今はただ酒に浸して藥に入れる。功力を下行せしめるには生で用ゐ、滋補するには焙じて用ゐ、或は酒を拌ぜて蒸して用ゐる。

(一四)［氣味］【苦く酸し、平にして毒なし】普曰く、神農は甘しといひ、雷公は酸し、毒なしといひ、李當之は溫なりといふ。之才曰く、螢火、鼈甲、陸英を惡み、白前を畏れ、牛肉を忌む。［主治］【寒濕痿痺で四肢が拘攣し、膝痛して屈伸し得ぬもの。血氣を逐ふ。傷熱、火爛、墮胎。久しく服すれば、身體を輕くし、老衰を

置ク。今ノ江蘇省吳縣ナリ。
(六)江淮ハ江蘇、安徽地方。閩粤ハ福建地方。關中ハ陝西地方ヲイフ。
(七)大觀ニ慶ヲ州ニ作ル。
(八)大觀ニ頭ヲ狀ニ作ル。
(九)大觀ニ此ヲ北ニ作ル。
(一〇)川中ハ四川省ノ地ヲイフ。
(一一)觧、集韻ニ音稍、牛角ノ開キタル貌ナリトアリ。
(一二)鼠負、一名鼠婦、和名おめむし、一名わらぢむし。
(一三)濇毛ハ粗毛。
(一四)木村(康)曰ク、ゐのこづちノ根ノ水性越幾斯ハ約八%ノ灰分ヲ有シ、其内カリュム鹽類最モ多量ナリ、又多量ノ粘液

質ヲ含有ス。

(一五)血結ハ子宮血塊ノコトナラン。

防ぐ】(本經)【傷中少氣、男子の陰の消耗、老人の失尿、中を補し、絕を續ぎ、精を益し、陰氣を利し、骨髓を塡て、髮の白きを止め、腦中痛、及び腰、脊痛、婦人の月經不通、(一五)血結を除く】(別錄)【陰痿を治し、腎を補し、十二經脈を助け、惡血を逐ふ】(甄權)【腰、膝の軟怯、冷弱を治し、癥結を破り、膿を排し、痛を止める。產後の心腹痛、幷に血運、死胎を落す】(大明)【筋を强くし、肝臟の風虛を補す】(好古)【蓯蓉と共に酒に浸して服すれば、腎を益す。竹木で刺して肉に入りたるには、嚼み爛して罨へば出る】(宗奭)【久瘧寒熱、五淋の尿血、莖中痛、下痢、喉痺、口瘡、齒痛、癰腫、惡瘡、折傷を治す】(時珍)

【發明】 權曰く、患者の虛羸せるにはこれを加へて用ゐる。

震亨曰く、牛膝は能く諸藥を導いて下行するものだ。筋骨痛で風が下部に在るものに加へて用ゐるがよし。凡そ土牛膝を用ゐるには、春、夏は葉を用ゐ、秋、冬は根を用ゐる。しかし葉の汁の效力が就中速かだ。

時珍曰く、牛膝なるものは足の厥陰、少陰の藥であつて、その主たる效力を有する病の範圍を要約すれば、酒で制して用ゐれば能く肝腎を補し、生で用ゐれば能く

悪血を去るの二途に歸するやうに思はれる。その腰、膝の骨痛、足痿、陰消、失尿、久瘧、傷中少氣の諸病を治するは、それは肝、腎を補する功力に因るものではあるまいか。癥瘕、心腹諸痛、癰腫、悪瘡、金瘡、折傷、喉、齒、淋痛、尿血、月經異狀、妊娠、出産の諸病を治するは、それは悪血を去るの功力に因るものではあるまいか。按ずるに、陳日華の經驗方に「予は方夷吾が編修した集要方を臨汀で出版したが、その後鄂渚に居た頃、九江の知事の王南强からの書翰に「拙老は久しく淋疾に苦しみ、あらゆる藥も效がなかつたが、偶ま臨汀本集要方の記述中に牛膝を用ゐるとあるのを見て、それを服して癒えた」と言つて來た。又、葉朝議の家族の者が血淋を患ひ、排泄した尿を盆の中へ取つて置くと、凝つて蒟蒻のやうになり、久しくしてただ足がないだけの鼠のやうな形に變化した。あらゆる治療も效果がなかつたが、ある田舍醫師が地髓湯と名けるものだといつて、牛膝根の濃煎汁を一日五服づつ飲ませたところ、卽癒とは行かなかつたが、尿血の色が漸次に淡くなり、久しくして舊時の健康に回復した。その後十年でまた發病したが、それを服してまた癒えた。そこで本草を調べて見ると、肘後方に「小便不利、莖中痛で死せんとする

を治するには、牛膝、并に葉を用ゐ、酒で煮て服す」とあつた。今茲に再びこの事實を擧げてこの物の神功を推奬する』とある。又按ずるに、楊士瀛の直指方に『小便淋痛、或は尿血、或は沙石脹痛には、川牛膝一兩、水二盞を一盞に煎じて溫服する。十年の長い間この病を患つたある婦人患者に、これを服ませて效果を擧げた。土牛膝もよし。或は麝香、乳香を入れるが尤もよし』とある。

附方　舊十三、新八。【勞瘧】積年の久しきに亙つて止まぬには、(一六)長牛膝一握を生で切り、水六升で(一七)二升に煮て三回に分け、早朝一服、發作直前に一服、發作時に一服する。(外臺祕要)【消渴の止まぬもの】下元の虛損である。牛膝五兩を末にし、生地黃汁五升に浸し、晝曝し夜浸して汁が盡きるまで繰返し、蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に溫酒で服す。久しく服すれば、筋骨を壯にし、顏色の衰へを防ぎ、髮を黑くし、津液が自ら生ずる。(經驗(一八)方)【突然の劇しき癥疾】腹中に石のやうなものがあつて刺し、晝夜啼き叫ぶには、牛膝二斤を酒一斗に漬けて密封し、灰火中で溫めて味を出さしめ、每服五合乃至一升を、量に隨つて飲む。(肘後方)【下痢腸蠱】凡そ下痢は、先に白を下し後に赤を下す筈のものだ。先に赤を下

(一六)大觀ニ長下ニ生字アリテ握下ニ無シ。
(一七)大觀ニ二ヲ三ニ作ル。
(一八)大觀ニ方上ニ後字アリ。

し後に白を下すは腸蠱である。牛膝(一九)二兩を搗き碎き、酒一升に漬けて一夜經過し、一日三回、一二盃づつを服す。(肘後方)【婦人の血塊】土牛膝根を洗つて切り、焙じ搗いて末にし、酒で煎じて溫服するが極めて有效だ。福州地方では單用する。(圖經本草)【婦人の血病】萬病丸――婦人の月經淋閉、月經不潮、臍の周圍の寒疝痛、及び產後の血氣不調、腹中に結瘕して癥の散ぜぬもの等の諸病を治す。牛膝を酒に一夜浸して焙じ、乾漆を烟のなくなるまで炒り、各一兩を末にして生地黃汁一升と石器に入れ、慢火で丸になるまで熬つて梧子大の丸にし、二丸づつを空心に米飯で服す。(拔萃方)【婦人の陰痛】牛膝五兩、酒三升を一升半に煮取つて滓を去り、三回に分服する。(千金方)【生胎の墮胎】牛膝一握を搗き、無灰酒一盞で七分に煎じて空心に服し、同時に獨根の土牛膝に麝香を塗つて膣內へ挿入する。(婦人良方)【胞衣不出】牛膝八兩、葵子一合、水九升を三升に煎じ、三回に分服する。(二〇)(延年方)【產後の尿血】川牛膝を水で煎じて頻りに服す。(熊氏補遺)【喉痺乳蛾】新鮮なる牛膝根一握、艾葉七斤を搗き、人乳を和して汁を取り、鼻から灌ぎ込む。須臾にして痰涎が口、鼻から出て癒える。艾を入れなくもよし。〇ある方では、牛膝の搗汁に

(一九)大觀ニ二チ三ニ作ル。

(二〇)大觀ニハ梅師方ニ作ル。

（二一）大觀ニ孫眞人食忌ニ作ル。

（二二）大觀ニ孫眞人食忌ニ作ル。

（二三）痞癧ハイボノ大ナルモノ。

（二四）閼ハ閉ト同意。

陳い酢を和して灌ぐ。【口舌の瘡爛】酒に牛膝を浸して含漱する。煎じて飲むもよし。（肘後方）【牙齒の疼痛】牛膝を研末して含漱する。燒灰を用ゐるもよし。（二一）（千金方）【折傷、閃肭】杜牛膝を搗いて罨ふ。（衞生易簡方）【金瘡の痛み】生牛膝を搗いて敷けば立ろに止まる。（梅師方）【卒然生じた惡瘡】久しく何瘡なるや判然せぬには、牛膝根を搗いて傅ける。（二二）（千金方）【癰癤の潰れたもの】牛膝根を略ぼ皮を刮り去つて瘡口中に挿入し、半寸だけ外部へ殘し、嫩橘葉、及び地錦草各一握でその瘡上を搗く。牛膝は能く惡血を去り、橘、地錦の二草は溫、涼で痛を止める。乾く都度取換へる。完全に功を擧げるものだ。（陳日華經驗方）【風瘙癮疹】及び（二三）痞癧。牛膝末を一日三回方寸匕づつ酒で服す。（千金方）【骨疽癩病】方は上に同じ。

莖　葉　氣　味　（缺）　主　治　【寒濕痿痺、老瘧、（二四）淋閼、諸瘡。功力は根と同じ。春、夏はこれを用ゐるがよし】（時珍）

附　方　舊三、新一。【氣濕の痺痛】腰膝痛には、牛膝葉一斤を切り、米三合と豉汁の中へ入れて粥に煮、鹽醬を和して空腹にして食ふ。（聖惠方）【老瘧の斷たぬもの】牛膝の莖、葉一把を切り、酒三升に漬けて服し、微し酒氣を帶びるやうにする。も

し即時に斷たずして更に發作しても三劑に過ぎずして止む。（肘後）【溪毒の寒熱】東方の邊境には溪毒がある。人の中毒することと射工に似たものだが、これは無形の邪氣である。初期には惡寒し、發熱し、煩懊し、骨節強痛し、急に治療せねば蟲を生じて臟を食ひ、遂に死亡するものだ。雄牛膝の紫で節の大なる莖一把に酒、水各一盃を入れ、共に搗いて汁を絞り、一日三回溫服する（肘後方）【眼の珠管】牛膝、幷に葉の搗汁を一日三四回點ける。（聖惠方）

(一)紫菀（本經中品）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】 青菀（別錄） 紫蒨（別錄） 返魂草（綱目） 夜牽牛 時珍曰く、その根が紫色で柔菀だから名けたのだ。許愼の說文には茈菀と書き、斗門方には返魂草といつてある。

【集解】 別錄に曰く、紫菀は(二)漢中、房陵の山谷、及び(三)眞定、(四)邯鄲に生ずる。二月、三月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、近道處處にある。地に布いて生

(一)牧野云フ、紫菀ハ我邦ノ學者從來之レヲきく科(菊科)ノしをんニ充テ來リ居レドモ穩當デハナイ紫菀ハ何カ脣形科ニ屬スル品デ其葉ハ對生デ花ハ脣形デアルヤウダガ今ソレガ何ンデアルカ私ニハ見當ガ附カヌ、多分ソレハ我邦ニハ無イ或ル一種ノ草デアラウト思フ。

え、花は紫色で木に白毛がある。根は甚だ柔かで細い。白菀と名ける白いものもあるが、それは用ゐない。

○○大明曰く、形は(五)重臺に似て根が節を作し、紫色で潤軟なものが佳い。

頌曰く、今は(六)耀、成、泗、壽、台、孟、興國の諸州にいづれもある。三月の内に布いて苗が生え、その葉は二枚、四枚と相連り、五月、六月の内に黄、白、紫の花を開き、黒い子を結ぶ。その他は陶氏の説の通りだ。

恭曰く、白菀、即ち女菀であつて、治病上の功力は紫菀と同様なものだ。

〔紫　菀〕

紫菀のないときはこれも用ゐる。

頌曰く、紫菀は、根、葉を連ねて採つて醋に浸し、少量の鹽を入れて貯ひたものを菜にすると、辛く香しいものだ。これを仙菜と稱する　鹽を多く入れてはならない、多ければ腐るものだ。

(二)大觀ニハ漢中ノ二字ナシ。漢中ハ礜石ノ註、房陵ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

(三)眞定ハ漢ノ眞定國、卽チ今ノ直隷省正定府，故城ハ正定縣南ニ在リ。

(四)艸部ハ十部白薇ノ註ヲ見ヨ。

(五)重臺ハ玄參ノ一名、又蚤休ノ一名。

(六)耀州、孟州ハ石部石膏ノ註、成州ハ石部鹵石類光明鹽ノ註、泗州ハ山草類遠志ノ註、壽州ハ芳草類澤蘭ノ註、台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。興國ハ宋ノ軍、明ニ州トナス。今ノ湖北省武昌府陽新縣ソノ舊治ナリ。

時珍曰く、按ずるに、陳自明は『紫菀は(七)牢山に産する根の北細辛のやうなものが良く、(八)沂、兗以東にはいづれもある。今は一般に車前、旋復の根を赤土で染めて作る僞物が多いが、紫菀は肺病の要藥であつて、肺なるものは本來それ自體が津液を亡くするものだから、それに更に津液を走らする藥を服しては害を爲すことますます甚しい。大いに注意を要することだ』といつてある。

根　【修治】　斆曰く、凡そ使用するには、先づ鬚を去る。白い練絲のやうに見えるのもあるが、それは(九)白羊鬚草と號するものだ。その自然の質が同一でない。頭、及び土を去つて東流水で洗淨し、蜜で一夜浸し、翌早朝火の上にかざして焙じ乾かす。一兩の紫菀に蜜二分を用ゐる。

【氣味】　【苦し、溫にして毒なし】　別錄に曰く、辛し。權曰く、苦し、平なり。之才曰く、欵冬花が使となる。天雄、瞿麥、藁本、雷丸、遠志を惡み、茵蔯を畏る。

【主治】　【欬逆上氣、胸中寒熱、結氣。蠱毒、痿(一〇)蹷を去り、五臟を安ずる】(本經)　【欬唾膿血を療じ、喘悸を止める。五勞の體虛に不足を補す。小兒の驚癇】(別錄)　【尸疰を治し、虛を補し、氣を下す。勞氣虛熱、百邪鬼魅】(甄權)　【中を調へ、

(七)牢山、卽チ勞山。石部附錄諸石黑石華ノ註ヲ見ヨ。
(八)沂州ハ石部馬腦ノ註、兗州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。
(九)大觀ニ白ヲ日ニ作ル。
(一〇)蹷、大觀ニ蹙ニ作ル。

痰を消し、渇を止め、肌膚を潤ほし、骨髓を添へる】(大明)【肺氣を益し、(一一)息賁に主效がある】(好古)

附方 舊三、新四。【肺傷欬嗽】紫菀五錢、水一盞を七分に煎じ、一日三回溫服する。(衞生易簡方)【久嗽の瘥えぬもの】紫菀、欵冬花各一兩、百部半兩を搗き篩つて末にし、三(一二)錢づつを、薑三片、烏梅一箇の煎湯で調へ、一日二回服するが甚だ佳し。(圖經本草)【小兒の欬嗽】聲の出ぬには、紫菀末、杏仁等分に蜜を入れて共に研り、芡子大の丸にして一丸づつを五味子湯で溶かして服す。(全幼心鑑)【吐血欬嗽】吐血後に欬するには、紫菀、五味を炒つて末にし、蜜で芡子大の丸にして一丸づつ含み溶かす。(指南方)【產後の下血】紫菀末五撮を水で服す。(聖惠方)【(一三)纏喉風痺】通ぜずして死せんとするには、返魂草根一本を洗淨して喉中に入れ、惡涎を取り出せば瘥える。神效のあるものだ。更に馬牙硝を唾液で嚥めば根本を斷つ。この草は一名紫菀といひ、南地地方では夜牽牛と呼ぶ。(斗門方)【婦人の突然の排尿不能】紫菀を末にし、井華水で三撮を服す。直ちに通ずる。小便血には、五撮を服すれば立ろに止まる。(千金方)

(一一)息賁ハ少腹ヨリ心下ニ至ル拘攣ヲ云フ。

(一二)大觀ニ錢下匕字アリ。

(一三)纏喉風痺ハ咽喉加多兒、偏頭腺炎ノ類。

(一)女　菀（本經中品）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】 **白菀**（別錄） **織女菀**（別錄） **女復**（廣雅） **茆**　音は柳（リウ）である。

時珍曰く、根が女の身體のやうに柔で婉（たをやか）だから名けたものだ。

【集解】 別錄に曰く、女菀は漢中の(二)山谷、或は(三)山陽に生ずる。正月、二月に採つて陰乾する。弘景曰く、近頃の醫方には一向用ゐない。別に白菀（はくゑん）といふ紫菀（しをん）に似たものがあるが、恐らくこの物ではあるまい。

恭曰く、白菀、卽ち女菀だ。有名未用に一條を重複記載してあるところから、陶氏が疑問を生じたのだ。功力は紫菀と似たものである。

宗奭曰く、女菀、卽ち白菀であつて二物ではない。唐に本草修輯の際、白菀を删去したのは妥當（だたう）の處置だ。

時珍曰く、白菀、卽ち紫菀の白色なるものだ。雷斅が「紫菀の白い練絲のやうに見えるものを羊鬚草と名ける」といつたのは、恐らくは此の物のことだらう。

(一)牧野云フ、從來我邦ノ本草學者ハ之レヲきく科(菊科)ノひめしをんニ充テテ居レドモソレハ誤リデアル、女菀ハ唇形科ノ一種デ其形狀酷ダ能クあきのたむらさう(Salvia chinensis, Benth.)ニ似タモノデ其下部ノ葉ハ基部ニ側生ノ小葉ヲ有セル複葉ヲナシテ居ル、此點ハ同科ノゆきみさう卽チみぞかうじゆ(S. plebeia, R. Br.)ト全ク相異ツテ居ルノデ女菀ハ決シテゆきみさうデハナイ。

(二)山、大觀ニ川ニ作ル。

(三)山陽ハ山ノ陽、卽チ南ヲイフカ。漢ニ山陽縣アリ、河內ニ屬ス。故城ハ今ノ

河南省修武縣ニ在リ。

根 〔氣味〕『辛し、温にして毒なし』之才曰く、鹵鹹を畏る。〔主治〕『風寒で洗洗たるもの、霍亂洩痢、腸鳴の上下位置の一定せぬもの、驚癇、寒熱のあらゆる疾』(本經)『肺傷欬逆で汗の出るもの、久寒が膀胱に在つて支滿するもの、飲酒夜食から發した病』(別錄)

〔發明〕 時珍曰く、按ずるに、葛洪の肘後方に『人の顏色の黑きを白くする方。眞女菀三分、鉛丹一分を末にし、一日三回、醋漿で一刀圭を服す。十日繼續すれば

〔女菀卽ち白菀〕

大便が黑くなり、十八日で顏が漆のやうになり、二十一日で全く白くなる。同時に服藥を止める。度を過せば白くなり過ぎるものだ。三十歲以後は服してはならぬ。五辛を忌む』なる記載があり、孫思邈の千金方に『酒で服すれば、男子は十日、女子は二十日で黑色が皆大便と共に出る』とある。又、名醫錄には『宋の興國年間に任氏といふ美人があつた。進士の王公輔と婚約したが不成立に終り、その後久しく憂鬱の日を送るうちに、漸次に顏色が黑くなつたので、生家では種種醫療に手を盡したが、

ある道人が女眞散といふ藥を用ゐ、一日三回、二錢づつを酒で服ませると、數日で顏色が微に白くなり、一箇月で故の通りに回復した。そこでその藥の處方を懇ろに求めると、その方は、黃丹、女菀の二物等分を用ゐるのであつた』とある。この記述に據れば、葛氏の方は已に有效が實驗されてゐたわけだ。かやうな次第で、紫菀は手の太陰の血分を治し、白菀は手の太陰の氣分の藥であつて、肺が熱すれば顏色が紫黑色となり、肺が淸くなれば顏色が白くなるのである。三十歲以後になれば肺氣が漸減の傾向に在るから、その上に更に泄すべきものではない。故に一服してはならぬ』といふのだ。

(一)麥門冬（本經上品）

和名　やぶらん
學名　Liriope graminifolia, Bak.
科名　ゆり科（百合科）

小葉者
和名　じやのひげ、りゆうのひげ
學名　Ophiopogon japonicus, Gawl.
科名　ゆり科（百合科）

釋名　**虋冬**　音は門（モン）である。(二)秦では**烏韭**と名け、齊では**愛韭**と名け、楚では**馬韭**と名け、越では**羊韭**と名ける。（竝に別錄）**禹韭**（吳普）**禹餘糧**（別錄）

(一)牧野云フ、麥門冬ハやぶらんトじやのひげトノ兩品ヲ指シタ總名デアル、故ニ之レヲ別々ニ唱フルニハ宜シクやぶらんノ方ヲ大葉麥門冬じやのひげノ方ヲ小葉麥門冬ト稱スベキデアル。因ニ云フ此兩品ノ實ハ顆ニナツタ種子デアル、松村任三博士著改訂植物名彙前編ニ植物名實圖考卷ノ二十七ニアル松壽蘭ヲやぶらんニ充ツルハ非デ、コレハきちじやうさう（吉祥草）ノ一種ノ名デアル。

(二)大觀ニハ、秦名羊

忍冬（呉普）　忍凌（呉普）　不死(三)草（呉普）　階前草　弘景曰く、根が(一)穬麥に似たものだから麥門冬といふ。時珍曰く、麥の鬚を虋といふ。この草は根が麥に似て鬚があり、その葉が韮のやうで、冬を凌いで凋まない。故にこれを麥虋冬といひ、また諸種の韮、忍冬などの諸名がある。俗に(五)門冬と書くは字劃を簡單に省いたものだ。この草は、服食すれば穀食を斷ち得るといふところから、また餘糧、不死などの稱がある。呉普本草には、一名僕壘、一名隨脂とある。

(六)**集解**　別錄に曰く、麥門冬は、葉が韮のやうで冬、夏共に長生する。(七)函谷の川谷、及び隄坂、肥土、石間、久しき荒廢地に生ずる。(八)二月、八月、十月に根を採つて陰乾する。普曰く、山谷の肥地に生ずる叢生の草で、葉は韮のやうで(九)青黄色だ。採收に一定の時期はない。

弘景曰く、函谷とは秦時代に關門のあつた土地だ。この草は處處にあつて、冬季に

〔麥門冬〕

韮ノ異名羊蓍一名禹葭トアリ。秦ハ陝西地方、齊ハ山東地方、楚ハ湖北地方、越ハ浙江地方ヲイフ。

(三)大觀ニハ草ヲ藥ニ作ル。

(四)精ハ積ノ誤。

(五)正字通ニ俗虋字今省作門。

(六)木村康一曰ク、今本邦ニテ長麥門冬丸麥門冬等ノ名ヲ以テ販賣スルモノハ全クじやのひげニシテやぶらんハ曾テ用ヰタルコトアルベキモ今之ヲ市店ニ見ズ、而シテ丸麥門冬ハ佳品ニシテ長麥門冬ハ劣等品ナリ、生藥ハイヅレモ中心柱ヲ拔キテ乾燥セシモノナリ（藤田直市—藥誌、大、一二(四九八)）

(七)函谷ハ秦ノ關ノ所在地。今ノ河南省

靑珠のやうな實がなる。四月採つた根の肥大なものを良しとする。

藏器曰く、(一〇)江寧の產は小さくして潤ひ、(一一)新安の產は大きくして白い。苗の大なるは鹿葱ほどあり、小なるは韭葉ほどだ。大、小三四種あるが、功用は相似たものだ。子は圓くして碧い。

頌曰く、所在にある。葉は靑く、莎草に似て長さ一尺餘にもなる。四季を通じて凋まない。根は黃白色で、鬚が根に(一二)在つて連珠のやうな形になつてゐる。四月紅蓼花のやうな淡紅色の花を開き、實は碧で珠のやうに圓い。江南の產は葉が大きい。或は吳地のものが最も勝れてゐるといふ。

時珍曰く、古代には野生のもののみを用ゐたのだが、後世用ゐるものは多くは栽培して作る。その栽培法は、四月初に根を採つて黑壤の肥えた沙地に栽ゑ、每年六月、九月、十一月の三回に糞肥を施し、また芸つて水を灌ぎ、夏至の前一日に根を取つて洗ひ晒して取り收める。子を蒔いてもやはり生えるが、それでは成長が遲いものだ。(一三)浙中から來るものが甚だ良い。葉が韭に似て縱文が多く、且つ堅韌な點が特長だ。

靈寶縣ノ南ニ在リ。卽チ秦ノ東關ナリ。東崤山ヨリ西澠津ニ至ル間ヲ通ジテ函谷ト稱ス。
(八)大觀ニ二月ノ次ニ三月ノ二字アリ。
(九)大觀ニ靑上實ノ字アリ。
(一〇)江寧ハ山草類白鮮ノ註ヲ見ヨ。
(一一)新安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。
(一二)大觀ニハ根上ニ在字ナシ。
(一三)浙中ハ浙江省地方。

根【修治】弘景曰く、凡そこれを用ゐるには、肥大なものを取り、湯で洗ひみがいて心を抽き去る。さうせねば人を煩せしめる。大抵一斤に就て四五兩を減じ去る程度に洗ふのだ。

時珍曰く、凡そ湯液に入れるには、沸湯で潤濕して少頃して心を抽き去る。或は瓦で軟かに焙じて熱い間に心を去る。また丸、散に入れる場合には、瓦で焙じ熱してから風に當てて吹き冷す。かく三四回繰返せば、燥し易く、且つ藥力を損じない。或は湯に浸し膏に搗いて藥に和するもよし。滋補藥とするには酒に浸して擂る。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。普曰く、神農、岐伯は甘し、平なりといひ、黄帝、桐君、雷公は甘し、毒なしといひ、李當之は甘し、小溫なりといふ。杲曰く、甘く微し苦し、微寒である。陽中の微陰であり、降であつて、手の太陰の經の氣分に入る。之才曰く、地黃、車前が使となる。欵冬、苦瓠、苦芺を惡み、苦參、青蘘、木耳を畏れ、石鍾乳を伏す。

【主治】【心腹結氣、傷中、傷飽で胃の絡脈が絶し、羸瘦し、短氣のもの。久しく服すれば、身體を輕くし、老衰せず、饑ゑず】(本經)【身重、目黃、心下支滿、虛

勞の客熱、口乾、燥渇を療じ、嘔吐を止め、痿蹷を癒し、陰を強くし、精を益し、穀物を消化し、中を調へ、神を保ち、肺氣を定め、五臓を安じ、身體を肥健ならしめ、顏色を美くし、子を舉げしめる】(別錄)【心熱を去り、煩熱、寒熱、體勞を止め、痰飲を下す】(藏器)【五勞、七傷を治し、魂を安じ、魄を定め、嗽を止め、肺痿吐膿、時疾熱狂、頭痛を定める】(大明)【熱毒、(一〇)大水で顏面、肢節が浮腫するを治し、水を下す。泄精に主效がある】(甄權)【肺中の伏火を治し、心氣不足を補し、血の妄行するもの、及び經水が枯れたるもの、乳汁不下に主效がある】(元素)【久しく服すれば、身體を輕くし、目を明かにする。車前、地黃と和して丸にして服すれば、濕痺を去り、白髮を黑く變じ、夜間物を明に視得る】(藏器)【斷穀の要藥である】(弘景)

【發明】宗奭曰く、麥門冬は肺熱を治するの功が多いので、その味は苦い。但し泄に專にして收に專でないものだから、寒多き患者の服用は禁物だ。心、肺の虛熱、及び虛勞を治するに、地黃、阿膠、麻仁と共に用ゐれば、經を潤ほし、血を益し、脈を復し、心を通ずるの劑となり、五味子、枸杞子と共に用ゐれば、脈を生ずるの劑となる。

(一〇)大觀ニ大ヲ火ニ作ル。

(一五)天元眞氣ハ人體ノ精力。

(一六)儒醫精要ニハ麥ヲ天ニ作ル、然ラバ則チ時珍ガ麥門冬ノ說ヲ以テ麥門冬ヲ釋スルモノニシテ誤釋ニ屬ス。

元素曰く、麥門冬は、肺中の伏火で脈氣の絶せんとするを治す。五味子、人參を加へた三味をば生脈散といひ、肺中の元氣不足を補す。

杲曰く、六七月頃の濕熱の旺んな時に病むものは、骨乏して力無く、身體重くして氣短く、頭旋して眼黑く、甚しきは痿軟するものだ。故に孫眞人は生脈散を用ゐてその(一五)天元眞氣を補したのである。脈は人間の元氣であつて、生脈散三味中の人參の甘、寒は熱火を瀉し、元氣を益す。麥門冬の苦、寒は燥金を滋くし、水の源を淸くする。五味子の酸、溫は丙の火を瀉し、庚の金を補す。これが互に働いて五臟の氣を益するのだ。

時珍曰く、按ずるに、趙繼宗の儒醫精要に『(一六)麥門冬は、地黃を使として服すれば、頭髮が白くならず、髓を補し、腎氣を通じ、喘促を定め、肌體を滑澤ならしめ、身體上の一切の惡氣、不潔の疾を除く』とある。蓋し君あり使有るものだ。君有つて使なければ、それは獨行であつて功はない。しかし、この方はただ火盛、氣壯の患者だけに適するもので、氣弱、胃寒の患者ならば必ず服御してはならない。

附方 舊三、新九。【麥門冬煎】中を補し、心を益し、顏色を悅澤にし、神を

安じ、氣を益し、人體を肥健にするもので、その力甚だ速かだ。新麥門冬を取り、心を去つて搗き熟し、汁を絞つて白蜜を和し、銀器に入れて重湯で手を停(や)めず攪廻(かきまは)しながら煮る。飴のやうになれば出來上つたのだ。それを溫酒に溶かして日每に服す。(圖經本草)【消渴飮水】(一七)上元(一八)板橋の新鮮にして肥えた麥門冬二大兩を用ゐ、(一九)宣州黃連の九節のもの二大兩――兩頭の尖つた三五節を去り、小刀で調理して皮毛を去り、塵を吹き去り、更に生布で摩拭(ましよく)してから秤(はか)る――を搗いて末にし、麥門冬をば肥大な苦瓠(くこ)の汁に一夜浸し、然る後に心を去り、臼に入れて擣き爛らし、先の黃連末を入れて(二〇)和し、いづれも手で丸めて梧子大の丸にし、一日二回、食後に五十丸を飮で服す。渴は必ず二日で定まるものだ。重い患者ならば、第一日に一百五十丸を服し、二日目に百二十丸を服し、三日目には一百丸を服し、四日目には八十丸を服し、五日目に五十丸を服す。合藥の際の注意要項は、天炁晴明(てんきせいめい)の夜に方(あた)つて藥を浸すこと、清淨の場處を撰ぶこと、婦人、雞、犬の見るを禁ずることである。もし服して效果を自覺したならば、(二一)只二十五丸を服す。服用して見て虛する傾向があるときは、白羊頭一箇を清淨に調理し、水三大斗で煮爛(しよらん)して汁一斗を取り、少

(一七)上元、卽チ江寧府ノ地ナリ。山草類白鮮ノ註參照。
(一八)板橋ハ地黃ノ註ヲ見ヨ。
(一九)宣州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(二〇)大觀ニ和字下ニ擣ノ字アリ。
(二一)大觀ニ時只ノ二字ヲ毎日ニ作ル。

しづつ飲む。肉を食つてはならず、鹽を入れてもならぬ。二劑に過ぎずして平復する。(崔元亮海上集驗方)【勞氣で絶せんとするもの】麥門冬一兩、甘草を炙つて二兩、秔米半合、棗二箇、竹葉十五片、水二升を一升に煎じ、三回に分服する。(南陽活人書)【虚勞客熱】麥門冬の煎湯を頻りに飲む。(本草衍義)【吐血、衄血】諸種の方で效なきには、麥門冬を心を去つて一斤を搗き、自然汁を取つて蜜二合を入れ、二回に分服すれば止まる。(活人心統)【衄血の止まぬもの】麥門冬を心を去り、生地黄と各五錢を水で煎じて服す。立ろに止まる。(保命集)【齒縫の出血】麥門冬の煎湯で嗽ぐ。(蘭室寶鑑)【咽喉に生じた瘡】脾、肺虚熱の上攻である。麥門冬一兩、黄連半兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを麥門冬湯で服す。(普濟方)【乳汁不下】麥門冬を心を去つて焙じて末にし、三錢づつを、酒に犀角を約一錢ほど磨つて溫熱したもので調へて服す。二服を過ぎずして下る。(熊氏補遺)【下痢口渴】引飲して度なきには、麥門冬を心を去つて三兩、烏梅肉二十箇を細かに剉み、水一升で七合に煮取り、少しづつ呷ふ。(必效)【金石藥の發動】麥門冬六兩、人參四兩、甘草を炙いて二兩を末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日二回、五十丸づつを飲で服す。(本草圖經)

【男女の血虛】麥門冬三斤の汁を取つて熬膏し、生地黃三斤の汁を取つて熬膏し、等分を合せて濾過して蜜四分の一を入れ、再び熬つて瓶に取り收め、毎日白湯に點てて服す。鐵器を忌む。（醫方摘要）

（一）萱草（宋嘉祐）

和名　しなくわんざう、ほんくわんざう、ほんわすれぐさ（共ニ新稱）
學名　Hemerocallis fulva, L.
科名　ゆり科（百合科）

釋名

忘憂（說文）　**療愁**（綱目）　**丹棘**（古今注）　**鹿葱**（嘉祐）　**鹿劍**（土宿）　**妓女**（吳普）　**宜男**

時珍曰く、萱の字は本來は諼と書く。諼は忘の意味だ。詩に『焉得諼草。言樹之背』とあつて、その意味は、憂思自から遣るに由なく、この草を樹て玩味して憂を忘れようといふのである。吳地方では療愁といふ。董子に『人の憂を忘れんと欲するには、則ち之に丹棘を贈る』とあるは、一名忘憂といふからだ。その苗を烹て食ふと、氣味が葱のやうだ。鹿が食ふ九種の解毒の草のうち、萱もその一だから鹿葱と名けたのだ。周處の風土記に『懷妊の婦人がその草を身に佩びれば男を生む』とある。故に宜男と名けたのだ。李九華の延壽書には『嫩苗を蔬にし

（一）牧野云フ、萱草ノ本品ハ我日本ニハナイ、從ツテ和名ガナイカラ下ノヤウニ今回新ニ之レヲ命ジタ、此品ハ我がのくわんざう(Hemerocallis disticha, Don)ニ似タモノデハアルガ固ヨリ同種デハナイ、我邦ニやぶくわんざう又單ニくわんざう又ノ名わすれぐさト云ツテ八重咲ノモノガアル、是レハ支那ニモ産シ救荒本草ニハ之レヲ萱草花トシテ圖說シテ居ル此八重咲ノモノハ支那ノ萱草ノ一變種デ

のくわんざうノ變種デハナイ、故ニ其學名ハ萱草ノ通リ H. fulva, L. var. Kwanso, Regel. デ宜シイ、草木圖說ニわすれぐさトアルモノハたうくわんざうデアツテ之レヲわすれぐさト云ツテハヨクナイ。

(二)花跗ハ花ノ子房、此ノ花跗ハ花瓣ヲモ含ム。

(三)蒲トハ菖蒲ヲ指ス。

て食へば、風を衝動し、人をして昏然として醉へるが如くならしめる。それで忘憂と名けたのだ』とある。これも亦一說だ。嵇康の養生論にも『神農經に、中藥は性を養ふとある。故に合歡は忿りを蠲て、萱草は憂を忘れるのだ』とある。これも食ふことの意味を取つたのだ。鄭樵の通志に『萱草、一名合歡』とあるは誤だ。合歡は木部に記載してある。

集解　頌曰く、萱草は處處の田野にある。俗に鹿葱と名けるものだ。五月花を採り、八月根を採る。今世間では、多くその嫩苗、及び(二)花跗を採つて葅にして食ふ。

時珍曰く、萱は下濕の地に適し、冬季に叢生する。葉は(三)蒲、蒜などのやうで柔かく弱く、新舊の葉が生え代つて、四季を通じて青青としてゐる。五月莖が抽き出て花を開く、花は六出で四方に垂れ、朝開いて暮

〔萱草〕

に(四)蔫み、秋深くなつてから花が盡きる。その花には紅、黄、紫の三色があり、實は三の角があつて、その內に大さ梧子ほどの黒光澤のある子を有つ。根は麥門冬とよく似たもので、最も繁殖し易い。南方草木狀に『(五)廣中の一種の水葱は、形狀が鹿葱のやうで、花には紫もあり黄もある』とあるは、やはりこの草の類であらう。或は『鹿葱は花に斑文があり、萱花とは時期も違ふ』といふが、謬りだ。肥土に生えたものは、花が厚く、色が深く、斑文があり、臺が二重になつて開き、花期も數月に亙る。瘠地に生えたものは、花が薄く、色は淡く、花期もやはり久しくないのだ。嵇含の宜男花の序にも、やはり『荊楚の地方ではこれを鹿葱と呼ぶ。葅にして人に薦め得るものだ』といつてあつて、尤も憑據すべきものである。現に東方地方では、その花蘂を採り、乾して商品にし、名稱を黄花菜と呼んでゐる。

苗　花　氣味　【甘し、涼にして毒なし】　主治　【煮て食へば、小便の赤澀、身體の煩熱を治し、酒疸を除く】(大明)　【食物を消化し、濕熱を利す】(時珍)　【葅にして食へば、胸膈を利し、五臟を安じ、人をして好んで歡樂して憂なからしめ、身體を輕くし、目を明かにする】(蘇頌)

(四)字書ニ蔫音煙不鮮也トアリ。

(五)廣中ハ廣東、廣西地方。

根 [主治] 【沙淋。水氣を下す。酒疸で全身が黄色となるには擣汁を服す】（藏器）【大熱、衄血には、研汁一大盞に生薑汁半盞を和して少しづつ呷ふ】（宗奭）【吹乳、乳癰で腫痛するには、酒に擂つて服し、滓で封ずる】（時珍）

[發明] 震亨曰く、萱は水に屬し、性は陰分に下走する。一名宜男といふところに妙味があるではないか。

[附方] 新四。【全身の水腫】鹿葱の根、葉を晒乾して末にし、二錢づつに席下の塵半錢を入れ、食前に米飲で服す。（聖惠方）【小便不通】萱草根を水で煎じて頻りに飲む。（杏林摘要）【大便後血】萱草根と生薑を油で炒り、酒に淬して服す。（聖濟總錄）【丹藥の中毒】萱草根の研汁を服す。（事林廣記）

槌胡根(一)（拾遺）

和名 無し
學名 未詳
科名 未詳

[集解] 藏器曰く、江南の川谷、蔭地に生ずる。苗は萱草のやう、根は天門冬

(一)牧野云フ、記事粗略デ其形狀ヲ考フル事ガ出來ナイ。

に似てゐる。凡そ用ゐるには心を抽き去る。

【氣味】〔甘し、寒にして毒なし〕

【主治】〔五臟を潤ほし、消渇を止め、煩を除き、熱を去り、目を明にする。治功は麥門冬のやうだ〕(藏器)

〔根　胡　槌〕

(一)淡竹葉（綱目）

和名　ささぐさ
學名　Lophatherum elatum, Zoll.
科名　禾本科（禾本科）

【釋名】根を碎骨子と名ける　時珍曰く、竹葉とは形狀の形容だ。碎骨とは、そのものが胎を下すことをいつたのだ。

【集解】時珍曰く、處處の原野にある。春苗が生え、高さ數寸あり、莖細く葉綠で、さながら竹の實が地に落ちて生えた細竹の莖、葉のやうだ。根は一株に數本

(一)牧野云フ、ささぐさハ大和本草ニハとうざさトアル、處ニヨリテハ之レヲしやしト稱スル。熟スル時ハ其小穂能ク衣服ニ著ク、我邦デハ中部カラ以西ノ地ニ普通デアル。木村(康)曰ク、支那ニ一種 L. sinense, Rendle アリ。

の鬚となり、その鬚に結ぶ子が麥門冬と一様だが、ただ堅硬(けんかう)なだけだ。隨時にこれを採る。八九月莖が抽き出て小さい長い穗を結ぶ。地方民はその根、苗を採り、搗汁を米に和して酒麴を作るが、甚だ芳烈なものだ。

〔淡竹葉〕

氣味 【甘し、寒にして毒なし】

主治 【葉は煩熱を去り、小便を利し、心を淸くす。根は能く墮胎し、分娩を催す】(時珍)

(一)鴨跖草

跖の音は隻(セキ)である。(宋嘉祐補)

和名 つゆぐさ、あをばな
學名 Commelina communis, L.
科名 つゆぐさ科(鴨跖草科)

釋名 芋 鷄舌草(拾遺) 碧竹子(同上) 竹雞草(綱目) 竹葉菜(同上) 淡竹葉(同上) 耳環草(同上) 碧蟬花(同上) 藍姑草

集解 藏器曰く、鴨跖(あふせき)は江東、淮南の平地に生ずる。葉は竹のやうで高さ一二尺あり、花は深碧で染色の原料とするに適する。鳥嘴(うし)のやうな角(さや)がある。

(一)牧野云フ、野外普通ノ一年草デほたるぐさ、とんぼぐさナドノ名ガアル、支那デハ此花弁デ青色ヲ染メルヤウダガ我日本デハ今日此變種デアルおほばうしばなヲ染料ニ製スル。

○○時珍曰く、竹葉菜は處處の平地にある。三四月苗が生え、莖が紫で葉は竹のやうだ。嫩いうちは食へる。四五月花を開く。その花は蛾の形のやう、二枚が翅のやうで、碧色で愛すべきものだ。尖り曲つて烏喙のやうなさやを結び、そのさやの中に小豆ほどの實があり、その豆の中に灰黑色で皺んだ蠶屎のやうな細子がある。

〔鴨跖草〕
——竹葉菜——

工匠はその花を採り汁を取つて繪具に作り、羊皮燈などに彩色するが、黛のやうに青碧なものだ。

苗 (三) 氣味 【苦し、大寒にして毒なし】 主治 【寒熱瘴瘧、痰飲丁腫、肉癥澀滯、小兒の丹毒、發熱狂癇、大腹痞滿、身體面部の氣腫、熱痢、蛇・犬の咬傷、癰疽等の毒】(藏器) 【赤小豆に和して煮て食へば、水氣、濕痺を下し、小便を利す】(大明) 【喉痺を消す】(時珍)

(三) 木村(康)曰く、成分澱粉粘液等 A.J.P. 1897(69),230; 1898(70) 321. T.S.D. 1331, W. P. 85.

【附方】 新四。【小便不通】竹雞草一兩、車前草一兩の搗汁に蜜少量を入れ、空心に服す。（集簡方）【下痢赤白】藍姑草、卽ち淡竹葉菜を湯に煎じて日毎に服す。（活幼全書）【喉痺腫痛】鴨跖草の汁を點ける。（袖珍方）【五痔腫痛】耳環草の碧い蟬のやうな花を軟かく揉んで患部に納る。卽效があるものだ。（危亦林得效方）

（一）葵 （本經上品）

和名　ふゆあふひ、あふひ
學名　Malva verticillata, L.
科名　あふひ科（錦葵科）

【校正】 菜部より此に移し入る。

【釋名】 露葵（綱目）　滑菜　時珍曰く、按ずるに、爾雅翼に『葵は揆なり。葵葉は日光の方に傾いて、其根を日に照らさしめぬやうにする。そこでそれを智慧があつて揆るとしたのだ』とある。古代には、葵を採るには必ず露の放れ落ちるのを待つたといふ。故に露葵といつたのだ。今は一般に滑菜と呼ぶ。それは性をいつたものだ。古は葵が五菜の主位であつたさうだが、今は一向食はない。故に此の部に移入した。

（一）牧野曰フ、ふゆあふひハ往時ハ單ニあふひト云ツタモノデアル然シ我邦ノ土産デハナイガ今處ニヨツテハ野生ノ狀態ニナツテ居ル事ガアル、花ガ小サクテ觀ルニ足ラヌカラ觀賞用トシテハ敢テ作ツテ居ナイ、此一種ニなかのりトイフモノガアル葉緣ガ皺曲シテ居ル、之レヲ煮ツテ軟ニシ食用ニスルソレデ岡海苔ノ名ガアル、學名ヲ Malva crispa, L. ト稱スル。

「集解」別錄に曰く、冬葵子は(二)少室山に生ずる。弘景曰く、秋季に葵を種ゑ、かこひをして冬を越せば春になつて子が成る。これを冬葵といふ。藥用としては性が至つて滑利するものだ。春葵子も滑するが藥用には堪へない。故にこれは普通の葵なのだ。術家では、葵子を取つて微し炒り、爆(三)炸——音は畢作（ヒッサク）で ある——して濕地に撒き、その上を萬遍なく踏んで置くと、朝種ゑて暮に生える。しかし(四)還たその夜一夜を越さないものだ。

恭曰く、これは通常食ふ葵のことだ。數種あるが(五)皆藥に入れては用ゐない。

頌曰く、葵は處處にある。苗、葉は菜にして食へばなかなか甘美だ。冬葵子は、古方の藥には入れたものが最も多い。葵には、(六)蜀葵、錦葵、黄葵、終葵、菟葵などあつて、いづれも功用がある。

時珍曰く、葵菜は、古代には栽培して常食としたといふが、現在では栽培することが頗る稀れだ。紫莖、白莖の二種類あつて、白莖のものを勝るとしてある。葉は大きく、花は小さい。その花が紫黄色で、最も小さいものを鴨脚葵と名ける。この草の實は大さ指頭ほどで、皮が薄くして扁く、實の中の子は輕虛で楡莢仁のやうだ。四

木村康一曰ク、ぜにあふひノ花ハ英、米、獨、佛局法ニテFlores Malvaトシテ用キラルルモノナルガ、色素、粘液等ノ外特別ノ有效成分ヲ含有セズト。生、二八三。

(二) 少室山、即チ嵩山ノ一峯。今ノ河南省登封縣ノ北、大室山ノ西ニ在リ。

(三) 大觀ニ炸音咤ニ作ル。

(四) 大觀ニ還ヲ遠ニ作ル。

(五) 大觀ニ皆ヲ多ニ作ル。

(六) 牧野曰フ、蜀葵ハ次ニ本條ガアル、錦葵ハぜにあふひデMalva sylvestris, L. Var. mauritiana, Mill. デアル、黄葵ハ黄蜀葵デ此レモ下ニ本條ガアル、終葵ハ

つるむらさき即チBasella rubra, L.ニ其名ガアルガ、此ノ終葵ハ恐ラク此レデハアルマイト思フ、莵葵モ下ニ本條ガアル。

（七）字書ニ枿ハ伐木而根復生ズルナリトアリ、ひこばえ。

（八）榜ハ挨ノ誤、榜挨ハ船ト船トヲ繋グコト、皮ノ織維ヲ取リ船ヲ引繋グ綱トスルコト。

五月種ゑたものは子が取れる。六七月種ゑたものは秋葵といふ。八九月種ゑたものは冬葵といひ、年を越えてから採收する。正月にまた種ゑたものは春葵といふ。しかし舊根からも春になれば生えるものだ。按ずるに、王禎の農書に『葵は陽草であつて、この菜は生じ易く、場末や原野に甚だ多い。土地の肥、瘠に拘はらずいづれにもあるものだ。これは百菜の主たるもので、四時食膳の備となる。本來が豊なもので、旱天にも耐へ、味は甘くして毒なく、凶作の場合の凌ぎにもなり、葅にも腊にもなる。枯れた（七）枿は榜（八）族にもなる。根と子とはまた能く治病上の效用がある。悉く棄てるところは無い。誠に蔬茹としての重要なもので、人類生存の有益な資料だ』とある。而るに今世間では一向に食はず、栽培するものもない。

〔冬葵子〕

苗 | 氣味 【甘し、寒、滑にして毒なし。百菜の主である。その心は人體を傷める】（別錄）　弘景曰く、葵葉は尤も冷にして利するものだから多く食つてはなら

ぬ。頌曰く、菜にして食へば甚だ甘美だが、性が滑利だから人體に益がない。

詵曰く、その性は冷なものだが、熱して食へば熱悶を起し、風氣を動ずる。四月食へば宿疾を發する。天行病後に食へば失明する。霜葵を生で食へば、五種の留飮を動じて吐水する。凡そあらゆる藥を服するには、その心を食ふことを忌む。心には毒があるものだ。背面が黄で莖の紫なものは食つてはならぬ。鯉魚、黍米、鮓と食合はせてはならぬ。人體を害ふものだ。

時珍曰く、凡そ狂犬に咬まれた者は永くこれを食つてはならぬ。食へば毒が發するものだ。葵を食ふには蒜を共に用ゐるがよい。蒜が無ければ食つてはならぬ。又、硫黄を伏す。

主治　【脾の菜であつて、脾に宜く、胃氣を利し、大腸を滑する】（思邈）【積滯を宣導する。妊婦がこれを食へば、胎を滑して分娩を容易にする】（蘇頌）【煮汁を服すれば、小腸を利し、時行黄病を治す。乾葉を末にし、及び灰に燒いて服すれば金瘡出血を治す】（甄權）【客熱を除き、惡瘡を治し、膿血を散ずる。婦人の帶下、小兒の熱毒、下痢、丹毒には、いづれもこれを食ふがよし】（汪頴）【丹石を服する人は食

ふがよし』(孟詵)『燥を潤ほし、竅を利する功は子と同じ』(同上)

發明　張從正曰く、凡そ久病で大便の澀滯するには、葵菜を食ふがよい。自然に通利するものだ。これは、滑は竅を養ふ關係からだ。

時珍曰く、按ずるに、唐の王燾の外臺祕要に『天行斑瘡で、須臾に全身白漿を戴いたやうに瀰漫するは惡毒の氣だ。高宗の永徽四年に、この瘡が西域から中國全土に蔓延したが、ただ葵菜を煮て蒜、薤と共に喫つたので終息した』とある。又、聖惠方にも『小兒の發斑には、生葵菜葉の絞汁を少しづつ與へて服ませる。惡毒氣を散するものだ』とある。按ずるに、これは今の痘瘡のことだ。現今の治療法では、患者が大小二便頻數なれば、その元氣を洩して痘が發せなくなることを特に虞れる。葵菜は竅を滑して二便を利するものだから、甚だ不適當のやうに思はれるが、往昔の時代には反つて此の方法に賴つてゐた。古と今とでは、運氣にそれだけの異同があるので、それ故に、治療の方法そのものも、やはり時運に隨つて變化したものではあるまいか。

附方　舊四、新三。『天行斑瘡』方は前項を見よ。『肉錐怪疾』ある患者は、突

然手、足が長くなつて、やがて肉刺を生じ、錐で刺すやうに忍び難く痛んだが、葵菜を食つただけで癒えた。(夏子益奇疾方)【諸瘻の合せぬもの】先づ溫めた泔清で患部を洗つて清潔に拭ひ、葵菜を微火で烘り暖めて貼る。二三百枚以內で盡く膿を引き出し、肉が生ずる。諸種の魚肉、蒜、房事を忌む。(必效方)【湯火傷瘡】葵菜を末にして傅ける。(食物本草)【蛇、蠍の螫傷】葵菜の搗汁を服す。(千金方)【誤つて銅錢を呑んだとき】葵菜の搗汁を冷して飮む。(普濟方)【丹石の發動】口乾き、欬嗽するには、毎食後に冬月葵虀の汁一盞を飮み、少時靜臥する。(食療本草)

根　氣味　【甘し、寒にして毒なし】　主治　【惡瘡。淋を療じ、小便を利し、蜀椒の毒を解す】(別錄)【小兒が錢を呑んで出ぬときには、煮汁を飮めば不思議の效がある】(甄權)【疳瘡で黃汁の出るを治す】(孟詵)【竅を利し、胎を滑し、消渴を止め、惡毒氣を散ず】(時珍)

附方　舊五、新七。【二便不通】脹急するには、生冬葵根二斤の搗汁三合、生薑四兩から取つた汁一合をよく和し、二回に分けて連服すれば直ちに通じる。【消渴引飮】小便利せぬには、葵根五兩を水三大盞で煮た汁を早朝に服し、一日三回服

す。（いづれも聖惠方）【消中で尿多きもの】晝夜に七八升排尿するには、冬葵根五斤、水五斗を三斗に煮取り、毎日早朝に二升を服す（外臺祕要）【漏胎下血】血が盡きれば胎兒が死亡する。葵の根、莖を灰に燒き、一日三回、酒で方寸匕を服す。（千金方）【瘭疽惡毒】肉中に忽ち豆か粟ほどの一暗黑點を生じ、或は梅、李ほどになつて、或は赤く、或は黑く、或は白く、或は青く、その黑暗點に核があり、核に深根があつて心に應じ、能く筋骨を爛らすものは、その毒が臟腑に入れば死亡する。但だ葵根汁を飲めばその熱毒を折くものだ。（姚僧坦集驗方）【妬乳乳癰】葵莖、及び子を末にし、一日二回、酒で方寸匕を服す。（咎殷産寶）【身體、面部の疳瘡】黃汁の出るには、葵根を灰に燒き、豬脂に和して塗る（食療本草）【小兒の蓐瘡】葵根を燒いて末にして傅ける（外臺）【小兒の緊唇】葵根の燒灰を酥で調へて塗る。（聖惠方）【口吻に生じた瘡】年を越した葵根を灰に燒いて傅ける。（外臺祕要）【蛇、蠍の螫傷】葵根を搗いて塗る（古今錄驗）【防葵の毒を解す】葵根の搗汁を飲む。（千金方）

冬葵子 別錄に曰く、十二月に採る。機曰く、子は春生ずるものだ。十二月に採取し得る筈はない。

【氣味】【甘し、寒、滑にして毒なし】黃芩が使となる

主治　【五臟、六腑の寒熱。羸痩。五癃に小便を利す　久しく服すれば、骨を堅くし、肌肉を長じ、身體を輕くし、天年を延べる】（本經）【婦人の乳の內閉腫痛を療ず】（別錄）【瘡疽の頭を出す】（甄權）【丹石の毒を下す】（弘景）【大便を通じ、水氣を消し、胎を滑し、痢を治す】（時珍）

發明　時珍曰く、葵は氣、味俱に薄く、淡にして滑する、陽なるものだ。故に能く竅を利し、乳を通じ、腫を消し、胎を滑するのであつて、その根、葉と子と功用は相同じ。按ずるに、陳自明の婦人良方に『乳婦が氣脈壅塞して乳汁が行らず、また經絡が凝滯し、乳首が脹痛し、留蓄して癰毒となりたるには、葵菜子を香しく炒つて縮砂仁と等分を末にし、熱酒で二錢を服す。この藥は氣脈を滋くし、營、衞を通じ、津液を行らすに極めて效驗がある。これは上蔡の張子愚の方だ』とある。

附方　舊八、新十二。　【大便不通】十日乃至一箇月閉不通なるには、肘後方では、冬葵子三升、水四升を一升に煮取つて服し、なほ瘥えぬときは更に作つて服す。○聖惠では、葵子末、人乳汁等分を和して服すれば立ろに通ずる。【關格脹滿】大、小便不通で死せんとするには、肘後方では、葵子二升、水四升を一升に煮取り、豬

(九)大觀ニ二升ニ作ル。

(一〇)轉胞ハ産後ノ小便閉。

(一一)大觀ニ灌上ニ格口ノ二字アリ。

脂を雛子一箇ほど入れて頓服する。千金では、葵子を末にして豬脂で和し、梧子大の丸にして五十丸づつを服し、效あれば止る。【小便血淋】葵子一升、水三升の煮汁を一日三回服す。(千金方)【妊娠中の淋疾】冬葵子一升、水三升を(九)二升に煮て分服する。(千金方)【妊娠下血】方は上に同じ。【産後の淋瀝】通ぜぬには、葵子一合、水二升を八合に煎じ、朴硝八分を入れて服す。(集驗方)【妊娠水腫】身體重く、小便利せず、ぞくぞくと惡寒し、起てば頭眩するには、葵子、茯苓各三兩を糝にし、一日三回、飲で方寸匕を服し、小便が利すれば癒える(一〇)轉胞の場合には、髮灰を加へるが神效がある。(金匱要略)【出産の困悶】冬葵子一合を搗き破り、水二升で半升に煮た汁を頓服すれば、少時して分娩する。昔ある婦人が右の方を服し、厠へ行つて産兒を中へ打ち落したことがある。【逆産口禁】冬葵子を黄に炒つて末にし、酒で二錢匕を服すれば效がある。(咎殷産寶)【乳汁不通】方は發明の項を見よ。【胎兒死亡】葵子を末にして酒で方寸匕を服す。若し口禁して開かぬときは(一一)灌ぎ込む。藥が口を下れば甦る。(千金方)【胞衣不下】冬葵子一合、牛膝一兩。水二升を一升に煎じて服す。(千金方)【血痢、産痢】冬葵子を末にし、一日三回、二錢づつを臘茶一錢を入

れた沸湯で調へて服す。(聖惠方)【痎瘧邪熱】冬葵子を陰乾して末にし、酒で二錢を服す。午の日に花を取つて手で挼んでも瘧を去る。(聖惠方)【頭なき癰腫】孟詵曰く、三日の後、葵子二百粒を取つて水で呑めば、その日の内に口が開く。○經驗(二)方では、只一粒を呑めば直ぐ破れる。二粒呑めば二箇の頭が出來る。【便毒の初期】冬葵子末二錢を酒で服す。(儒門事親)【顏面の皰瘡】冬葵子、柏子仁、茯苓、瓜瓣各一兩を末にし、一日三回、食後に酒で方寸匕を服す。(陶隱居方)【蜀椒の毒を解す】冬葵子の煮汁を飲む。(千金方)【傷寒の勞復】葵子二升、粱米一升を粥に煮て食ひ、汗を取れば立ろに平安になる。(聖惠)

(一)蜀葵(宋嘉祐)

和名　たちあふひ　はなあふひ
學名　Althea rosea, Cav.
科名　あふひ科(錦葵科)

【校正】菜部より此に移し入れ、有名未用、別錄の吳葵華を併せ入る。

【釋名】戎葵(爾雅)　吳葵　藏器曰く、爾雅に『菺——音は堅(ケン)である——

(二)大觀ニ方上ニ後字アリ。

(一)牧野曰フ、我邦ニハ固ヨリ土產ガナク往時支那カラ渡シタモノデ、通常觀賞用トシテ諸州ノ民家ニ能ク栽エラレテ居ル、俗ニ花ガ梢マデ咲キ上リテ了ルト梅雨ガアケルト謂ツテ居ル、本種ハ小亞細亞ノ原產デアル。

―は戎葵なり』とあり、郭璞の註に『今の蜀葵である。葉は葵に似て花は木槿花のやうだ。戎といひ蜀といふは、そこから來たので名としたものだ』とある。

〔蜀　　葵〕

時珍曰く、羅願の爾雅翼には、呉葵を胡葵と書き『胡とは戎の意味だ』といつてある。夏小正には『四月小滿後五日に呉葵が花咲く』とある。別錄の呉葵、卽ちこの物だ。然るに、唐代の人はそれを知らずして、退けて有名未用の部に入れ、嘉祐本草では、重複して菜部に蜀葵の一條を揭げてある。蓋し爾雅註、及び千金方の『呉葵、一名蜀葵』とある記述を見なかつたものであらう。今は此に倂記した。

集解　頌曰く、蜀葵は葵に似て花は木槿花のやうだ。花の色に五種類あつて、小花のものを錦葵と名け、功用が更に强い。

時珍曰く、蜀葵は處處の人家で栽培し、春初に子を蒔く。冬季の舊根からも自か

ら苗が出るもので、嫩いうちはやはり食へる。葉は葵葉に似て大きく、また絲瓜の葉のやうでもあつて岐叉があり、小滿後に成長して莖の高さ五六尺になる。花は木槿に似て大きく、深紅、淺紅、紫、黑、白色、單葉、千葉などの異つたものがある。昔の人は、疎莖、密葉、翠蕚、艶花、金粉、檀心などといつた。誠に巧みに形容し得てゐる。しかし藥に入れるは紅、白の二色だけだ。その實の大さは指頭ほどで、皮が薄くて扁たい。その中に馬兜鈴仁か蕪荑仁のやうな仁があり、輕虛なので種植し易い。その(二)稭を剝つた皮は布を織り、繩に綯ひ得る。一種の小さいものは錦葵と名ける。卽ち荊葵のことだ。爾雅にはこれを荍——音は喬(ケウ)である——といつてある。その花の大さは五銖錢ほどのもので、粉は紅色で紫の縷文がある。掌禹錫の補注本草に、これを戎葵といつたのは誤だ。けれども功用はやはり似てゐる。

苗 (三) 氣味 【甘し、微寒にして滑す、毒なし】 思邈曰く、久しく食つてはならぬ。人の志、性を鈍らすものだ。狗に嚙まれたときこれを食へば永く癒えない。李廷飛曰く、猪肉と食ひ合はせると、顏の色澤がなくなる。

(二)稭ハ枯レ莖ヲ云フ。

(三)木村(康)曰ク、たちあふひハ一般生藥ニ蜀葵根トシテ其根ヲ用キラレ、うすべにたちあふひ(A.

officinalis, L.) ハ、アルテア根、アルテア葉トシテ知ラレ、粘滑藥、或ハ丸劑、錠劑等ノ賦形藥トス。主要ノ成分ハ粘液ナリ。生、一五五、一六〇、二二二。

【主治】【客熱を除き、腸胃を利す】(思邈)【煮て食へば、丹石の發熱、大人、小兒の熱毒下痢を治す】(藏器)【蔬にして食へば、竅を滑し、淋を治し、燥を潤ほし、分娩を容易にする】(時珍)【搗き爛らして火瘡に塗り、燒き研つて金瘡に傅ける】(大明)

根莖【主治】【客熱。小便を利し、膿血、惡汁を散ず】(藏器)

【發明】宗奭曰く、蜀葵の四時紅色で單葉のものの根を陰乾し、帶下を治するに用ゐれば、膿血、惡物を排して極めて效驗がある。

【附方】新七。【小便淋痛】葵花根を洗ひ、剉んで水で煎じ、五七沸して服すれば神效がある。(衛生寶鑑)【小便血淋】葵花根二錢、車前子一錢を水で煮て日毎に服す。(簡易單方)【小便尿血】葵莖方寸匕を無灰酒で一日三回服す。(千金)【腸胃の癰】懷忠丹——內癰で敗血、腥穢があり、殊に甚しくして臍腹冷痛するには、これを用ゐて膿を排し、血を下す。單葉の紅蜀葵根、白芷各一兩、白枯礬、白芍藥各五錢を末にし、黃蠟を溶かして和して梧子大の丸にし、空心に二十丸づつを米飲で服す。膿血が出盡きるを待つて十宣散を服して補ふ。(坦仙皆效方)【諸瘡腫痛】忍び難きには、葵花根を黑皮を去つて搗き爛らし、井華水を入れて調和して貼る。(普濟方)【小兒の

吻瘡】年を經て腐らんとするには、葵根を燒き研つて傅ける。（聖惠方）【小兒の口瘡】赤葵莖を炙き乾して末にし、蜜を和して含む。（聖惠方）

吳葵華（別錄）［氣味］【鹹し、寒にして毒なし】禹錫曰く、蜀葵華は、甘し、冷にして毒なし。［主治］【心氣不足を理す】（別錄）【小兒の風瘮、痎瘧】（嘉祐）【帶下、目中の（四）溜火を治し、血を和し、燥を潤ほし、竅を通じ、大、小腸を利す】（時珍）

［發明］張元素曰く、蜀葵華は陰中の陽であつて、赤いものは赤帶を治し、白いものは白帶を治し、赤いものは血燥を治し、白いものは氣燥を治す。いづれもその寒、滑、潤、利の功力を應用するのだ。又、紫葵花は髭髮を染める方中に入れて用ゐる。

［附方］舊二、新五。【二便關格】脹悶して死せんとするは、二三日手當をせねば死亡する。蜀葵花一兩を搗き爛らし、麝香半錢、水一大盞で煎じて服す。根を用ゐるもよし。【痎瘧邪熱】蜀葵花の白いものを陰乾し、末にして服す。午の日に花を取つて手で揉んでもよく瘧を去る。（蘇頌圖經本草）【婦人の帶下】臍腹が冷痛し、顏

（四）溜火ハ熱アルヲ云フ。

色が痿黄し、逐日漸次に虚して衰弱するには、葵花一兩を陰乾して末にし、二錢匕づつを空心に溫酒で服す。赤帶には赤葵を用ゐ、白帶には白葵を用ゐる（聖惠方）【橫產、逆產】葵花を末にして酒で方寸匕を服す。（千金方）【酒皶赤鼻】蜀葵花を研末して臘豬脂によく和し、夜傅けて朝洗ふ。（仁存方）【誤つて鍼、錢を吞んだとき】葵花の煮汁を服す。（普濟方）【蜂蠍の螫毒】五月五日正午に採つた蜀葵花、石榴花、艾心等分を陰乾して末にし、水で調へて塗る。（肘後方）

子 【氣味】【甘し、冷にして毒なし】【主治】【淋澀するもの。小腸を通じ、分娩を催ほし、胎を落し、水腫を療じ、一切の瘡疥、并に瘢疵、赤靨を治す】（大明）

【發明】時珍曰く、按ずるに、楊士瀛の直指方に『蜀葵子は、炒つて(五)宣毒藥中に入れるが最も效驗がある。又、催生の方に、子二錢、滑石三錢を末にし、順流水で五錢を服すれば下る』とある。

【附方】舊一、新二。【大小便閉】通ぜぬには、白花胡葵子を末にし、煮て濃汁を服す（千金方）【石淋破血】五月五日に採つた葵子を炒つて研り、食前に一錢を溫酒で服す。石を下出するものだ。（聖惠方）【頭なき癰腫】蜀葵子を末にして水で調へて

(五) 宣毒ノ宣ハ散スルノ意。

傳ける。(經驗後方)

(一)菟葵(唐本草)

和名　うさぎあふひ(新稱)
學名　Malva parviflora, L.
科名　あふひ科(錦葵科)

【釋名】天葵(圖經)　莃　音は希(キ)である。雷丸草(外丹本草)

【集解】恭曰く、菟葵は、苗が石龍芮のやうで葉に光澤があり、花は白くして梅に似てゐる。その莖は紫(二)黑だ。煮て食へば極めて滑かなものである。所在の(三)下澤、田間にいづれもあつて、一般に識られて居るものだ。六月、七月に莖、葉を採り、曝乾して藥に入れる。

禹錫曰く、郭璞注爾雅に『菟葵は葵に似て小さく、葉の形は藜のやうで毛がある。その毛を灼けば食へるもので、滑なものだ』とある。

宗奭曰く、菟葵は、葉は綠で黃蜀葵のやう、花は拒霜に似て甚だみやびたものだ。形は至つて小さく、初めて開いた單葉の蜀葵のやうで、黑紫色の心があり、色に姚黃と號する牡丹に似てゐるが、その葉は蜀葵である　唐の劉夢得が『菟葵、燕麥、春

(一)牧野曰ク、從來我邦本草學者ハ菟葵ヲ或ハせつぶんさう或ハてうろさう(ぎんせんくわ)或ハいちやくさうニ充テ居レドモ皆ナヨイ加減ナ充テカタデ何レモ中ツテ居ナイ、即チ下ノ學名ノモノガ其品デアルガ是レハ我邦ニハ產セザル草デアッテ、廣ク舊世界ノ北溫帶地ニ見ルモノデアルガ今日デハ其他ノ地方ニモ野生ノ姿トナッテ擴ガッテ居ル。

(二)大觀ニ色ニ作ル。

(三)大觀ニ平ニ作ル。

風に動搖す』といつたのはこの物だ。
時珍曰く、按ずるに、鄭樵の通志に『菟葵は天葵であつて、形は葵菜のやう、葉は大さ錢ほどで厚く、表面は青く裏面は微し紫だ。崖石に生ずる。凡そ丹石の類はこの物を得て始めて神祕な力を生ずるものだ』とある。これは雷公炮炙論に『如し形堅からんことを要せば豈紫背を忘れんや』とあるそのことで、この物が能く鉛を堅くすることをいつたのだ。また『この說は天台のある僧から傳聞した』といつてある。又按ずるに、南宮從の岣嶁神書には『紫背天葵は蜀中に產する靈草で、水際に生えるものだ。自然汁を取つて汞を煮れば堅くなる。また能く八石に入れて煮れば火を拒むものだ』とある。又按ずるに、初虞世の

〔菟葵〕

古今錄驗には『五月五日の前日に齋戒して桑樹の下で菟葵を見つけ、翌五日正午にその桑の下へ往つて「繫蒙乎俱當蘇婆訶」と咒文を唱へ、畢つて手で一回桑陰を摩でながら、口に菟葵、及び五葉草を嚼んで嚼み熟し、唾のままそれを手に塗り、幾度となく手全體に偏まで揩み付け、そのまま手を洗はずに再び七日間齋戒し、然る後

に蛇、蟲、蠍、蠆などの咬傷をその手で摩ると直ちに癒える」といふことが書いてある。時珍竊かに思ふに、古代には(四)咒由といふ醫の一科があつた。これもその類のものであらう けれども必ずしも莵葵を用ゐたのは何の意味か判らない。若しその物の相制する力を利用するものだとしても、毒蟲を治する草は他にも數多くあるではないか。

苗 〔氣味〕【甘し、寒にして毒なし】〔主治〕【諸種の石淋、五淋を下し、虎、蛇の毒を止める。諸瘡には擣汁を飲む 瘡に塗れば能く毒を解し、痛を止める】(唐本)

(一)黄蜀葵（宋嘉祐）

和名　とろろあふひ
學名　Abelmoschus Manihot, Medic.
(=Hibiscus Manihot, L.)
科名　あふひ科(錦葵科)

〔校正〕菜部より此に移し入る。

〔釋名〕時珍曰く、黄蜀葵は、別の一種のものであつて、當然草部に編入すべきものである。然るに、嘉祐本草では敢て菜部に編入したが、それは名が蜀葵と同

(四)按ズルニ周禮醫學十三科ノ中咒由按摩ノ二科アリ、太醫院其傳ヲ失フ、然レドモ往往民間之ヲ傳フルモノアリ此處ニ記スルモノノ如キ其一例ナリ。

(一)牧野曰フ、我邦テハ實用ノ方面ト觀賞用ノ方面ト二樣ニ栽培セラルルガ、然シ我邦ノ原産デハナイ、實用ノ方面デハ其根皮デ製紙用ノ糊ヲ製スル、粘ル故ニとろろあふひノ名ヲ得タモノデアル。

じく、氣味、主治もやはり同一で紛はしかつたためだらう。本書では此に移した。

【集解】禹錫曰く、黄蜀葵花は近道處處にある。春苗葉が生え、頗る蜀葵に似て葉の尖が狹く、切れ込みが多い。夏の末に淺黄色の花を開く。六七月に採つて陰乾する。

宗奭曰く、黄蜀葵と蜀葵とは別種である。この物は蜀葵中の黄なる一種ではない。(二)蘂心下にある紫檀色の部分を摘み取つて剔ね散じ、日光で乾かす。さうせねば濡爛するものだ。

〔黄　蜀　葵〕

時珍曰く、黄葵は二月種を下し、或は土中に在る舊子から自然に生え、夏までに成長する。葉は大さ蓖麻葉ほどの深緑色のもので、丫字型の岐が開いて五尖になり、人の爪のやうな形で旁に小尖があり、六月花を開く。その花は鵞黄色で大さ椀ほどあり、心が紫で六瓣が側ち、朝開

(二) 蘂心ハ花瓣ノ中心ヲ云フ。

き正午につぼんで日暮に落ちる。世間では側金盞花とも呼んでゐる。花が落ちるに隨つて角を結ぶ。その角は長さ二寸ばかり、太さ拇指ほど、本が太く末が尖り、六稜で毛があり、老熟すると黒色になつて稜が自から綻びる。その中には芝麻房のやうな六箇の房があつて、房内に累累として子があり、その子の形は苘麻子のやうで色が黒い。この草の莖は長さは六七尺あつて、皮を剝いで繩に綯へる。

花（二）〔氣味〕【甘し、寒、滑にして毒なし】〔主治〕【小便淋、及び分娩を催ほし、諸惡瘡を治す。膿水の久しく瘥えぬには、末にして傅ければ癒える。瘡患者に對する重要の藥である】（嘉祐）【癰腫を消す。油に浸して湯火傷に塗る】（時珍）

〔附方〕新八。

【沙石淋痛】黄蜀葵花一兩を炒つて末にし、米飲で一錢づつを服す。これを獨聖散と名ける。（普濟方）

【難産に分娩を催す】如聖散——胎藏の乾澀で劇しき難産には、三服同時に進めるがよし。藥が腹に入れば氣が寛になり、胎が滑して直ちに下る。黄葵花を焙じて研末し、熟湯で二錢を調へて服す。花がないときは子半合を研末し、酒で淘つて滓を去つて服す。（産寶鑑）

【胎兒死亡】下らぬには、上記の方を紅花酒で服す。

【癰疽腫毒】黄蜀葵花に鹽を摻り、甆器に入れ密封して

（二）木村（康）曰ク、とろろあふひノ根ハ黄蜀葵根（局方）トシテ歐洲産アルテア根ニ代用セラル、即其煎劑又ハ黄蜀葵舍利別（局方）ヲ粘滑藥トシテ胃腸加答兒等ニ用ヰ、又鎭咳藥トシ或ハ丸劑錠劑ノ賦形藥トス、而シ工業上ニハ製紙用糊料トシテ多量ニ用ヰラル。（成分）根ニハ約一六%ノ粘質物ヲ含ム其大部分ハアラバン・ガラクタン・ラムノ

ザン等ナリ。小澤武一工化、大、一一(二五)三八九、生、一五八、石津利作一藥誌、明、三二(二〇九)六三一。

置けば、年を經ても壊れぬものだ。それを傅ければ自から平になり、自から潰れる。花のないときは根、葉を用ゐるもよし。(直指方)【小兒の口瘡】黄葵花を燒いて末にして傅ける。(肘後方)【小兒の木舌】黄蜀葵花を末にして一錢、黄丹五分を傅ける。(直指方)【湯火傷】瓶に麻油を盛り、咲いてゐる黄葵花を箸で摘み取つてその瓶に入れ、密封して置く。直接手を觸れてはならぬ。負傷者があつたとき、その油を塗るが甚だ妙である。(經驗方)【小兒の禿瘡】黄蜀葵花、大黄、黄芩等分を末にして香油で調へ、患部を米泔で洗淨して後に搽る。(普濟方)

子 及び**根** [氣味]【甘し、寒、滑にして毒なし】[主治]【癰腫。小便を利す。五淋、水腫、難産。乳汁を通ずる】(時珍)

[發明] 頌曰く、冬葵、黄葵、蜀葵は、形狀はそれぞれ同一でないが、性はいづれも寒にして滑するものだ、故に主たる治療の對症も甚だ遠くはない。

時珍曰く、黄葵子は、古方には用ゐたものが稀だが、今は分娩を催し、小便を利する重要な藥となつてゐる。或は單用し、或は湯、散に入れていづれもよし。蓋しその性の滑することが冬葵子と同功だからだ。花、子と根との性と功も同樣だから

互用してよし　花がなければ子を用ゐ、子がなければ根を用ゐる。

【附方】舊二、新二。【臨産催生】宗奭曰く、臨産時に、四十九粒を研り爛らして温水で服すれば良久して分娩する。〇經驗(四)方では、子を焙じ研つて三錢を井華水で服す。子が無ければ根を煎じて汁を服す。【(五)便癰の初期】淮地方では、黄蜀葵子十七粒、皂角半挺を末にし、石灰と醋とで調へて塗る。(永類鈐方)【癰腫の破れぬもの】黄葵子を酒に研つて服す　一粒で一箇の頭が付く。神の如き效がある。(衞生易簡方)【打撲傷損】黄葵子を酒に研つて二錢を服す。(海上方)

(一)龍葵(唐本草)

和名　いぬほほづき
學名　Solanum nigrum, L.
科名　なす科(茄科)

【校正】圖經の老鴉眼睛草を併せ入る。

【釋名】**苦葵**(圖經)　**苦菜**(唐本)　**天茄子**(圖經)　**水茄**(綱目)　**天泡草**(綱目)　**老鴉酸漿草**(綱目)　**老鴉眼睛草**(圖經)　時珍曰く、龍葵とはその性が滑して葵のやうだといふ意味だ。苦とはその菜の味に冠したもの、茄とはその葉の形の形容であ

(四)大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。
(五)便癰ハ便毒卽横痃和名ヨコネ。
(一)牧野曰フ、廣ク世界ノ諸地ニ生ズル雑草ノ一デ又有毒植物ト稱セラルル。

(二)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)關河ハ當時ノ關內、河東兩道ヲイフ。卽チ今ノ陝西省ノ渭水以北、及ビ山西省ノ地ヲ指ス。

(四)排風ハ白英ノ一名、和名ひよどりじやうご。

る。天泡、老鴉眼睛などいふは、いづれも子の形の形容だ。酸漿の形に類するものだから、酸漿に老鴉を冠して區別したのだ。五爪龍にも老鴉眼睛草なる名があり、敗醬、苦苣のいづれにも苦菜と名があるが、これは同名異物である。

〔集解〕弘景曰く、(二)益州に苦菜といふがある。これは苦蘵のことだ。

恭曰く、苦蘵、卽ち龍葵であつて、俗に苦菜とも名けるが、茶のことではない。龍葵は所在にあるもので、(三)關、河の地方ではこれを苦菜といふ。葉は圓く、花は白い。子は牛李子のやうで、生では青く熟すれば黑い。煮れば食へるが生では食へない。

〔龍葵〕——天茄——

頌曰く、龍葵は近い地方にはやはり稀で、北方地方にだけある。その地方ではこれを苦葵といふ。葉は圓く、(四)排風に似て毛がない。花は白色だ。子もやはり排風子に似たもので、生では青く熟すれば黑い。その赤いものをば赤珠と名ける。これも藥に入れ得るものだ。又曰く、老鴉眼睛草は江、湖地方に生ずる。葉が茄子の葉

のやうだから天茄子と名ける。或はこれは漆姑草だともいふが、漆姑、卽ち蜀羊泉のことであつて、已に本經の草部に記載がある。一般にはやはり明確な識別がつかない。

時珍曰く、龍葵、龍珠は一類の二種であつて、いづれも處處にある。四月苗が生え、嫩いうちは食物にもなり、柔かで滑かなものだ。漸漸に高くなつて二三尺に達し、莖は太さ箸ほどで、(五)燈籠草に似て毛がない。葉は茄の葉に似て小さく、五月以後に小さい白花を開く。花は五出で蕊が黃色だ。その結子は正圓形で大さ五味子ほど、上に小蒂があつて數顆が共に綴り付いてゐる。味は酸い。その中に細子があつて、やはり茄子の子のやうだが、但し生は靑く熟すれば黑いものを龍葵といひ、生は靑く熟すれば赤いものを龍珠といふ。功用も共に彷彿たるもので、甚だ懸隔はないものだ。蘇頌の圖經には、菜部に一旦說明した龍葵を、また外類に於て老鴉眼睛草として重複記載してある。蓋し同一物たることを知らなかつたのだ。又、老鴉眼睛草を蜀羊泉といふ說も誤つてゐる。蜀羊泉は、葉が菊に似て紫の花を開き、子は枸杞に類するものだ。詳細は草部のその本條に記述してある。楊愼の丹鉛錄に『龍

(五)燈籠草、和名ほほづき。

（六）木村康一曰ク、全草中ニ極少量ノアルカロイド（散瞳作用ヲ有ス）ヲ含有ス、又果實ハソラニン及サポニンヲ含有ス。F. Schmidt und Schütte: Arch. Pharm. 1891 (229) 527. Destosses: Jour. de Pharm. (1820) (6) 374. Waage: Pharm. Centrall. 1892, 712 U. S. D. 1619. P. J. 1909 (65) 422; W. P. 678; A. E. P. P. 1895 (36) 361.

（七）火丹ハ丹毒ノコト。

葵、卽ち吳葵だ』といひ、反つて本草を誤として、素問、千金に「四月吳葵が花咲く」とあるを引證してあるが、それは千金方に『吳葵、卽ち蜀葵なり』とあつて、已に明白な問題なることに氣が付かぬのだ。今いづれも誤を正して置く。

苗 （六）［氣味］【苦く微し甘し、滑、寒にして毒なし】［主治］【これを食へば、勞を解し、睡を少くし、虛熱腫を去る】（唐本）【風を治し、男子の元氣、婦人の敗血を補益する】（蘇頌）【熱を消し、血を散ずる。丹石の毒を壓するにこれを食ふがよし】（時珍）

［附方］ 舊一。【熱を去り、睡を少くす】龍葵菜を米と共に羹、粥に煮て食ふ】（食醫心鏡）

莖　葉　根 ［氣味］ 苗に同じ。［主治］【擣き爛して土に和し、丁腫、（七）火丹瘡に傅けるが良し】（孟詵）【癰疽腫毒、跌撲傷損を療じ、腫を消し、血を散ず】（時珍）【根を木通、胡荽と共に湯に煎じて服すれば小便を通利す】（蘇頌）

［附方］ 舊四、新八。【小便を通利す】方は前項にある。【高處より墜下したるもの】死せんとするには、老鴉眼睛草を取り、莖、葉を搗いて汁を服し、渣を患部に

傅ける。(唐瑤經驗方)　【火焔丹腫】老鴉眼睛草の葉に醋を入れ、細研して傅ける。能く赤腫を消す。(蘇頌圖經本草)　【頭無き癰腫】龍葵の莖、葉を搗いて傅ける。(經驗方)【發背癰疽】瘡となつたものには、蘇頌の圖經には、『龍葵一兩を末にし、麝香一分と研りまぜて塗るが甚だ善し』とある。○袖珍方には『一切の發背癰疽、惡瘡には、蝦蟇一匹と老鴉眼睛草の莖、葉とを共に搗き爛して傅ける。直ちに散ずる神效がある』とある。【諸瘡惡腫】老鴉眼睛草を酒に擂つて服し、滓を傅ける。(普濟方)【丁腫毒瘡】黑色で焮腫するは丹石を服した毒、赤色のものは肉麪の毒である。龍葵根一握を洗つて切り、乳香末、黃連三兩、杏仁六十箇と搗き和して、錢三枚ほど厚さの餅にし、瘡の大、小に隨つて傅ける。痒きを覺えたときは直ちに取換へる。また痒くして忍び難きときも絕對に搔き動かしてはならぬ。かくて久しい間焮れて瘡中が石榴子のやうになるを待ち、手早くシュッと藥を剝ぎ去り、時時甘草湯を溫めて洗ひ、洗つて後蠟を貼る。終身羊血を食つてはならぬ。もし龍葵が無いときは蔓菁根を代用する。(聖濟總錄)【(八)天泡濕瘡】龍葵の苗、葉を搗いて傅ける。【吐血して止まぬもの】天茄子の苗半兩、人參二錢半を末にし、二錢づつを新汲水で服す。(聖濟總錄)

(八)天泡ハ楊梅瘡。

【蚤虱の驅除】天茄葉を席下に鋪く。翌日は盡く死ぬ。【多年の惡瘡】天茄葉を貼る。或は末にして貼る。(救急良方)【産後の腸出】收まらぬには、老鴉酸漿草一把を水で煎じ、先づ熏じて後に洗ふ。收まれば止める。(救急方)

子 七月採收する。[主治]【丁腫】(唐本)【目を明にし、身體を輕くするに甚だ良し】(甄權)【風を治し、男子の元氣、婦人の敗血を益す】(蘇頌)

(一)龍珠(拾遺)

和名 あかみのいぬほほづき
學名 Solanum nigrum, L. var. miniatum, Hook. f.
科名 なす科(茄科)

[釋名] **赤珠** 頌曰く、龍葵子の赤いものを赤珠と名けたもので、形容である。

[集解] 甄權曰く、龍葵の珠の赤いものを龍珠と名ける。汁を揉み去れば食へる。能く白髮を變じて黑くするものだ。藏器曰く、龍珠は路傍などに生える。子は圓くして龍葵に似てゐるが、ただ熟すると正赤色になるものだ。時珍曰く、龍珠、龍葵は子の黑、赤で區別するのだが、その實は一物の二色を强ひて二種に區別したものだ。

(一)牧野曰フ、我邦ノ本草學者ハ之レヲはだかほほづき(Tubocapsicum, anomalum, Makino.=Capsicum anomalum, Fr. et Sav.)トナセド穩當デナイ、是レハいぬほほづきノ赤キ實ヲ結ブ一變種デアルが我日本ニハ産シナイ品デアル。

苗【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【能く白髮を變じ、睡れなくする。諸熱毒、石氣の發動に主效があり、中を調へ、煩を解す】(藏器)

【發明】權曰く、龍珠を服すれば、白髮を變じて黑くし、老衰を防ぐ。若し生で食つて、苦味を能く味ひ得て他の菜を食はぬならば、十日の後には神祕的な現象がある。葱䓗(そうそ)と共に食つてはならぬ。根も藥用に入れる。

子【氣味】菜に同じ【主治】【丁腫】(藏器)

(一)酸漿（本經中品）

和名　ほほづき
學名　Physalis Alkekengi, L.
科名　なす科(茄科)

【校正】菜部の苦耽、草部の酸漿、燈籠草を共に一條に併記する。

【釋名】**醋漿**(本經)　**苦蕆**　音は針(シン)である。**苦耽**(嘉祐)　**燈籠草**(唐本)　**皮弁草**(食療)　**天泡草**(綱目)　**王母珠**(嘉祐)　**洛神珠**(同上)　小なるものを苦識と名ける。藏器曰く、爾雅に『(二)苦蕆(くしん)は寒漿なり』とあり、郭璞の注に『即ち今の酸(さん)

(一)牧野曰フ、我邦産ノほほづきハ歐洲産ノ Physalis Alkekengi, L. トハ同物デハナイラシイガ然シ兩者ハ能ク肖タモノデアル、我邦ノモノハ P. Franchetii, Mast. var. デアルガ支那デハ其品種ガドウイフ具合ニナツテ居ルカ分ラヌ故今姑ラク廣イ意味デふらんしえー、へむずれ

ーナドノ諸氏ノ説ニ従ヒ下ノ學名ヲ用ヰテ置ク。釋名ノ中ノ苦蘵ハ小ナル者トノミアツテ其形狀ノ特徴ガ記シテナイカラ果シテ先輩ガ爲シタヤウニ之レヲせんなりほほづき(Physalis angulata, L.)ニ充テテヨイカ確トハ分ラナイガ植物名實圖考ニ酸漿トシテせんなりほほづきノ圖ガ掲ゲテアル事カラ思ヒ廻ラシテ、ソレハ多分中ツテ居ルデアラウト思フ。

(二)苦ハ衍字本書ニナシ。

(三)皮弁ハ武官ノ冠。

(四)燕京、即北京、今ノ北平。

漿である。江東地方では苦葴と呼び、小なるものを苦蘵といひ、また小苦耽とも呼ぶ』とある。崔豹の古今注には『蘵、一名蘵子。實の形は(三)皮弁のやうで、その子は珠のやうに圓い』とある。

時珍曰く、酸漿は子の味に因つて名けたもの、苦葴、苦耽は苗の味に因つて名けたもの、燈籠、皮弁はさやの形を形容した名稱、王母、洛神の珠といふは子を形容した名稱だ。按ずるに、楊愼の卮言に『本草の燈籠草、苦耽、酸漿は皆同一物だ。本草の記述、編輯は、一時代、一人で行はれたものでない。それで重複したのだ。(四)燕京の野果に紅姑孃といふがある。外に絳い嚢を垂れ、中に珠のやうな赤い子を含み、酸く甘くして食し得る。房房とした豊なもので、他の翠草と共に庭先などへ植ゑ遶らすも面白い風情のものだ。蓋し姑孃とは瓜嚢の訛りであつて、古代には瓜、姑は同音だ。孃、嚢もやはり發音が似寄つたものだ』といつてある。これは當を得た説だ。故に本書には、本經の酸漿、唐本草の燈籠草、

〔酸　漿〕
——燈籠草——

(五)荊、楚ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。
(六)蒩、大觀ニ蒩ニ作ル、野菜ノコト。
(七)關中ハ山草類淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。

宋嘉祐本草の苦耽を、共に一括同條に記載したわけである。

【集解】別錄に曰く、酸漿は(五)荊、楚の川澤、及び人家、田園の中に生ずる。五月採つて陰乾する。弘景曰く、酸漿は處處に多くある。苗は水茄に似て小さく、葉はやはり食へる。子は房になり、房の中に梅、李ほどの子があつて、全部が黃赤色だ。小兒はこれを食ふ。

保昇曰く、酸漿、卽ち苦葴である。根は(六)蒩芹のやう、色は白く極めて苦い。

禹錫曰く、苦耽は古い廢墟の垣や塹の間に生える。高さ二三尺、子は口をすべた袋のやうなさやになり、その中の子は珠のやうで、熟すれば赤色になる。(七)關中地方では、これを洛神珠、一名王母珠、一名皮弁草といふ。一種の小さいものは苦蘵と名ける。爾雅にいふ黃蒢だ。

恭曰く、燈籠草は所在にある。枝幹の高さは三四尺、燈籠のやうな形の紅花があつて、中に可愛い紅子がある。根、莖、花、實、いづれも藥用に入れる。

宗奭曰く、酸漿、卽ち苦耽である。嘉祐には、苦耽の一條が重複してある。天下到る處にあるもので、苗は天茄子のやうだ。小さい白花を開いて青い殼を結び、熟

すれば深紅になる。殼の中の子は櫻ほどの大さで、やはり色は紅い。その櫻のやうな中にまた細い(八)落蘇子のやうな子がある。食つて見ると青草の臭氣があるものだ。

時珍曰く、龍葵、酸漿は一類の二種、酸漿、苦蘵は一種の二物であつて、ただ大なるものが酸漿、小なるものが苦蘵と區別すればよい。敗醬にも苦蘵なる名稱はあるが、これとは同じくない。龍葵と酸漿とは苗、葉が一樣だが、龍葵は、莖が光つて毛が無く、五月から秋に入るまで小さい白花を開く。その花は五出で蕊は黄色だ。殼のない子を結び、數顆が纍纍として一枝に著き、子には蒂蓋があり、生は青く熟すれば紫黑になる。酸漿は、同時期に小花を開くが、色は黄白、心が紫で蕊は白い。花の形は盃のやうで瓣がなく、ただ五箇の尖があつて一箇の鈴のやうな殼を結ぶ。殼はすべて五稜で、一枝に一顆が下へ懸り、燈籠のやうな形狀だ。殼中には龍葵子のやうな一箇の子があつて、生は青く熟すれば赤い。かやうに相異點を擧げて區別すれば自から明白なものだ。按ずるに、庚辛玉冊に『燈籠草は全國各地いづれにもあるが、ただ(九)川、陝のものが最も大きい。葉は龍葵に似たもので、嫩苗のうちは食へる。四五月花を開いて實を結ぶ。實は四葉に盛られて燈籠のやうだ。河北では

(八)落蘇ハ茄ノ一名。

(九)川、陝ハ四川省、陝西省ノ地ヲ指ス。

酸漿と呼ぶ』とある。この說と楊愼の說とに據れば、燈籠と酸漿の同一物なることは尤も證だ。唐愼微は、三葉の酸草を酸漿の章の後に附錄したが、蓋し同名異物なるに氣が付かなかつたのだ。その草は草部の八、酢漿の條下に記載してある。

苗葉莖根　(一〇)**氣味**　【苦し、寒にして毒なし】禹錫曰く、小毒あり。恭曰く、苦し、大寒にして毒なし。時珍曰く、方士は、汁を取つて丹砂を煮、白礬を伏し、三黃を煮、硝、硫を煉る。(一一)

主治　【酸漿は、熱の煩滿を治し、志を定め、氣を益し、(一二)小道を利す】(本經)【搗汁を服すれば、黃病を治するに效驗が多い】(弘景)【燈籠草は、上氣欬嗽、風熱を治し、目を明にする。根、莖、花、實いづれも宜し】(唐本)【苦耽の苗、子は、傳尸、(一三)伏連、鬼氣、疰忤、邪氣、腹內の熱結で目黃となり、食物が通らず、大小便の澀るもの、骨熱欬嗽、多睡勞乏、嘔逆痰壅、痃癖痞滿、小兒の無辜癧子、寒熱大腹を治し、蟲を殺し、胎を落し、蠱毒を去る。いづれも煮汁を飮み、また生で搗いて汁を服す。膏に研つて小兒の閃(一四)癖に傅ける】(嘉祐)

發明　震亨曰く、燈籠草は苦くして能く濕熱を除き、輕にして能く上焦を治

(一〇)木村(康)曰ク、全草中フイザリントイフ無晶形ノ苦味質ヲ含有ス、又果實中枸櫞酸及微量ノアルカロイドアリ(一)溝口氏(二)ハ根ヨリ子宮緊縮作用アル結晶性物質ヲ得、之ヲヒストンナル名稱ヲ附セルモ、單一ノ物質ナリヤ否ヤ未ダ化學的性狀詳ナラズ。
(一) D. signes et Chautard: J. Thurm. 1852 (21) 24.
(二)溝口龍三―衛生試驗所彙報、大、一三、(二四)一二一。
(一一)木村(康)曰ク、ヒストンヲ動物ニ就

するものだ。故に熱欬咽痛に主效がある。この草は熱痰欬嗽を治し、(一五)佛耳草は寒痰欬嗽を治するもので、片芩清金丸と共に用ゐれば更に效がある。

時珍曰く、酸漿は濕を利し、熱を除くもので、熱を除くから肺を清くして咳を治し、濕を利するから能く痰を化して疸を治するのである。ある患者は虛乏咳嗽で痰があつたが、予は湯中にこれを加へ用ゐて奏效した。

附方　新三。【熱欬咽痛】燈籠草を末にして白湯で服す。これを清心丸と名ける。同時に醋で調へて喉の外部へ傅ける。(丹溪纂要)【喉瘡痛】燈籠草を炒り焦して研末し、酒で調へて呷ふ。(醫學正傳)【灸瘡の發せぬもの】酸漿の葉を貼る。

子

氣味【酸し、平にして毒なし】別錄に曰く、寒なり。

主治【熱(一六)煩。志を定め、氣を益し、水道を利す。難產には、(一七)之を呑めば立ろに產する】(一八)(別錄)【これを食へば熱を除き、黃病を治す。就中小兒に益がある】(蘇頌)【骨蒸勞熱、尸疰、疳瘦、痰癖熱結を治す。苗、莖と同功である】(嘉祐)

附方　新二。【酸漿實丸】三焦、腸、胃の伏熱、婦人の胎熱、難產を治す。酸漿實五兩、莧實三兩、馬藺子を炒り、大鹽、榆白皮を炒つて各二兩、柴胡、黃芩、

テ試ミタル所ニヨレバ最初大腦ヲ痲痺セシメ、次ニ大量ニアリテハ呼吸中樞ノ痲痺ニヨリ死ニ至ル、特ニ著シキハ子宮ニ對スル作用ニシテ、諸動物ヨリ剔出セル子宮ハ少量ノヒストンニヨリ蠕動運動旺盛トナリ、且ツ緊縮ヲ營ムヲ見ルトイフ。

(一二)本經、大觀共小ヲ水ニ作ル、金陵本小ニ作ル水ノ誤ナリ。

(一三)伏連ハ勞極骨蒸ヲ云フ。

(一四)癖ハ腹中ノ痞塊閃ハ急症ヲ云フ。

(一五)佛耳草ハ和名ははこぐさ。

(一六)大觀ニ煩下滿字アリ。

(一七)之、大觀ニ其實ニ作ル。

(一八)別錄、當ニ本經

栝樓根、蘭茹各一兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを木香湯で服す。(聖濟總錄)【天泡濕瘡】天泡草の中の珠を生で搗いて敷く。また末にして油で調へて敷くもよし。(鄧才雜興方)

(一)蜀羊泉(本經中品)

和名　きくばほろし(新稱)　ふるかはなすび
學名　Solanum septemlobum, Bunge.
科名　なす科(茄科)

【釋名】羊泉(別錄)　羊飴(別錄)　漆姑草　時珍曰く、諸名稱の意味は判然しないが、能く漆瘡を治するので漆姑といふ。

【集解】別錄に曰く、蜀羊泉は蜀郡の(二)山谷に生ずる。弘景曰く、(三)方には一向用ゐない。世間でも識らぬ。

恭曰く、この草は俗に漆姑と名けるものだ。葉は菊に似て花は紫色、子は枸杞子に類する。根は遠志のやうで、心がなくて糝がある。所在の平澤にあるもので、陰濕の地に生ずる。三月、四月に苗、葉を採つて陰乾する。

藏器曰く、陶氏の杉材の注に「漆姑は葉が細く、多く石の邊に生える。能く漆瘡

ニ作ルベシ。

(一)牧野曰フ、從來我邦ノ本草家ハ蜀羊泉ヲひよどりじやうごニ充ツレドモソレハ中ツテ居ナイ、蜀羊泉ハ救荒本草ニハ青杞ト出テ居ルガ今其圖ヲ見テモ其レガひよどりじやうごデナイ事ガ能ク分ル、本品ハ直立シタ草デ其葉ハ菊葉樣ニ分裂シテ居ル、ひよどりじやうごハ蔓本デ支那ノ名ハ白英デアツテ蜀羊泉トハ全ク別ノ種類デアル。

(二)大觀ニ川ニ作ル。

(三)大觀ニ方下ニ藥字アリ。

を療ずるものだ』といひ、蘇氏は『漆姑は羊泉のことだ』いふ。按ずるに、羊泉といふは大きな草だ。漆姑草は鼠の足跡ほどのもので、堦段や石疊の間などの陰處に生える。氣は辛烈なもので、揉んで漆瘡に付け、また溪毒にも主效がある。そこで名が同じいのだ。

○頌曰く、或は老鴉眼睛草、即ち漆姑草だといふが、漆姑ならば蜀羊泉のことだ。一般人にはよく正確に判らない。

蜀羊泉
——漆姑草——

○時珍曰く、漆姑に三種ある。蘇恭のいふものは羊泉のことだ。陶氏、陳氏のいふものは小草のことだ。蘇頌がいふ老鴉眼睛草は龍葵のことだ。又、黄蜂が窠を作るに、漆姑草の汁を啣んで蔕にするとは、即ちこの草だ。

【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】【主治】【(四)禿瘡、惡瘡、熱氣疥瘙、痂癬の蟲】(本經)【齲齒、婦人の陰中內傷、皮間の實積を療ず】(別錄)【小兒の驚に主效があり、毛髮を生ずる。搗いて漆瘡に塗る】(蘇恭)【蚯蚓の氣に呵せられたるもの

(四)禿瘡、本經ニ頭禿ニ作ル。

には、搗き爛らして黄丹を入れて(五)會(あは)ふ】時珍) 記載は摘玄方にある。

附方 新一。【黄疸疾】漆草一把の搗汁を酒に和して服す。三五回に過ぎずして愈える。(摘玄方)

(一)鹿蹄草(綱目)

和名無し
學名未詳
科名未詳

釋名 小秦王草(綱目) 秦王試劍草 時珍曰く、鹿蹄(ろくてい)とは葉の形の形容だ。よく金瘡を合はせるものだから試劍草と名けたのだ。又、山慈姑(さんじこ)にも鹿蹄なる名稱はあるが、これとは異ふ。

集解 時珍曰く、按ずるに、軒轅述寶藏論に『鹿蹄は(二)江廣(かうくわう)地方の平陸、及び寺院の荒地に多く生ずる。(三)淮北(わいほく)地方には絶えて少い。川(せん)、陜(せん)にもある。苗は菫菜(きんさい)に似て葉が頗る大きく、背面は紫だ。春紫の

〔鹿蹄草〕

(五) 盒ノ誤。

(一) 牧野曰フ、從來ノ學者ガ爲セシヤウニ之レヲいちやくさう(Pirola japonica, Sieb.)ニ充ツルハ非デアル、いちやくさうハ支那デハ鹿銜草ト稱スル。

(二) 江廣ハ江西、廣東兩省ヲ指ス。

(三) 淮北ハ淮河以北ノ安徽、江蘇ノ地ヲ指ス。

花を開き、天茄子のやうな青い實を結ぶ。雌黄、丹砂を制し得るものだ』とある。

【氣味】（缺）【主治】【金瘡出血には、擣いて塗れば止まる。又、一切の蛇、蟲、犬の咬毒に塗る】（時珍）

(一)敗醬（本經中品）

和名　なとこへし、なとこゝめし
學名　Patrinia villosa, Juss.
科名　をみなへし科（敗醬科）

【釋名】苦菜（綱目）苦蘵（綱目）澤敗（別錄）鹿腸（本經）鹿首（別錄）馬草（別錄）弘景曰く、根に古く腐敗した豆醬の臭氣があるのでかく名けたものである。

〔敗醬　――苦菜――〕

時珍曰く、南方地方では、嫩いうちに採つて暴し、蒸して菜に作つて食ふ。味が微苦で、古い醬の臭氣があるところから名けたものだ。又、苦菜といつて苦蕒、龍葵と同名を呼び、また苦蘵と呼んで酸

(一)牧野曰フ、李時珍ノ說ク所ハ蓋シをとこめしヲ指スナラント思ヒ姑ラク敗醬ヲ其レト定メ置ク、松村任三博士ノ改訂植物名彙前編ニ植物名實圖考卷ノ十四ニアル攀倒甑ヲをとこめしトスルハ非デアツテ是レハ其品デハナイ、をみなへし（をみなめし）P. scabiosaefolia, Link. ハ植物名實圖考卷ノ十五ニアル黃花龍芽デアルト思フ。

醬と同名だが、苗の形狀を見るに同じでない。

【集解】 別錄に曰く、敗醬は(一)江夏の川谷に生ずる。八月根を採つて暴乾する。

弘景曰く、近道に產する。葉は稀薟に似て根の形は柴胡のやうだ。

恭曰く、この藥は近道には產しない。多くは岡や嶺の地に生ずるもので、葉は(二)水莨や薇蘅に似て叢生する。花は黃、根は紫で、陳い醬のやうな色だ。その葉は一向稀薟には似てゐない。

頌曰く、江東にもある。形狀は蘇恭の所說の通りだ。

時珍曰く、處處の原野にある。俗に苦菜と名け、野人はこれを食ふ、江東地方では每にこれを採つて蓄へて置く。春初に苗が生え、深冬に始めて凋む。初めは葉が地に布いて生え、菘菜の葉に似て狹く長く、鋸齒があり、綠色で表面は色が深く背面は淺い。夏、秋に莖の高さ二三尺になつて柔弱なものだ。數寸のところに一節があり、節の間から葉が生え、四散して繖のやうになる。その莖の頂端に芹花か蛇牀子花のやうな形の花が簇つて開き、小さい簇つた實を結ぶ。根は白、紫で頗る柴胡に似てゐる。吳普は『その根は桔梗に似てゐる』といひ、陳自明は『その根は蛇莓

(一)江夏ハ漢ノ郡名、今ノ湖北省雲夢縣東南ニ治ス。隋ニ江夏縣ヲ置ク。卽チ湖北省治武昌府ノ地ナリ。

(二)水莨、卽毛莨。

根に似てゐる」といふが、いづれも違ふ。

根　苗も同じ。［修治］斅曰く、凡そ採取したならば、粗く杵き、甘草葉を入れて一一相對するやうに拌ぜ、午前十時から午後二時まで蒸して甘草葉を去り、焙乾して用ゐる。

(四)［氣味］【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、鹹し、微寒なり。權曰く、辛く苦し、微寒なり。大明曰く、酸し。時珍曰く、微し苦くして甘を帶びてゐる。

［主治］【暴熱火瘡、赤氣疥瘙、疽痔、馬鞍熱氣】(本經)【癰腫、浮腫、結熱風痺、不足、産後の(五)痛を除く】(別錄)【毒風𤸷痺を治し、多年の凝血を破り、能く膿を化して水にする。産後の諸病。腹痛、餘疹、煩渇を止める】(甄權)【血氣心腹痛を治し、癥結を破り、分娩を催ほし、胞を落す。血運、(六)鼻衄、吐血、赤、白帶下、赤眼、障膜、(七)胬肉、聤耳、瘡節、疥癬、丹毒。膿を排し、瘻を補ふ】(大明)

［發明］時珍曰く、敗醤なるものは、手、足の陽明、厥陰の藥であつて、善く膿を排し、血を破る。故に仲景の治癰、及び古方の婦人科で皆これを用ゐたのだ。この物は得易いものだが、後世では用ゐることを知らない。蓋しこの物に關する智識

(四)木村(康)曰ク、をみなめしノ根ニハ精油八%ヲ含ム。W. P. 747.

(五)大觀ニ痛ト疾字アリ。

(六)大觀ニ鼻衄ヲ鼻洪ニ作ル。

(七)大觀ニ努ニ作ル。

が缺けてゐるのだ。

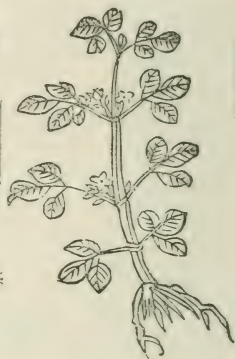
［附方］舊二、新三。【膿のある腹癰】薏苡仁附子敗醬湯——薏苡仁十分、附子二分、敗醬五分を搗いて末にし、方寸匕づつを水二升で一升に煎じて頓服する。小便が通じて癒えるものだ。（張仲景金匱玉函）【產後の惡露】七八日繼續して止まぬには、敗醬、當歸各六分、續斷、芍藥各八分、芎藭、竹茹各四分、生地黃を炒つて十二分、水二升を八合に煮取つて空心に服す。（外臺祕要）【產後の腰痛】乃ち血氣が流入して腰腿が痛み、寢返もならぬものだ。敗醬、當歸各八分、芎藭、芍藥、桂心各六分、水二升を八合に煮て二回に分服する。葱を忌む。（廣濟方）【產後の腹痛】錐で刺すやうに痛むには、敗醬草五兩、水四升を二升に煮取り、一日三回、二合づつを服するが良し。（衞生易簡方）【蠼螋尿瘡】腰を遶るものには、敗醬の煎汁を塗るが良し。（楊氏產乳）

迎春花（綱目）(一)

和名　わうばい
學名　Jasminum nudiflorum, Lindl.
科名　ひひらぎ科（木犀科）

(一)牧野曰フ、落葉小灌木デ通常觀賞用トシテ栽植セラレテ居ル、支那ノ原產デ我邦ヘハ往時同國カラ渡シタモノデアル。

【集解】時珍曰く、處處の人家で挿木として栽ゑる。叢生するもので、高いものは二三尺になり、莖は四角で葉が厚い。葉は初生の小椒葉(せうせうえふ)のやうだが齒がなく、表が青く裏が淡く。節に對して小枝が生え、一枝に三葉がある。正月の初に瑞香花(ずゐかうくわ)のやうな黄色の小花を開き、實は結ばない。

〔迎　春　花〕

葉（二）【氣味】【苦く澁(しぶ)し、平にして毒なし】【主治】【腫毒、惡瘡には、陰乾して研末し、二三錢を酒で服す。汗が出て瘥える】（衞生易簡方）

（一）款冬花（本經中品）

和名　くわんとう、ふきたんぽぽ（新稱）
學名　Tussilago Farfara, L.
科名　きく科（菊科）

【釋名】**欵凍**（郭璞）**顆凍**（本經）**氐冬**（別錄）**鑽凍**（衍義）**菟奚**（本經）**橐吾**（本經）**虎鬚**（本經）時珍曰く、按ずるに、述征記に『（二）洛水(らくすゐ)が歳末の甚しい寒氣で氷り詰めた時、款冬(くわんとう)が凍つた草原の中に生えた』とある。そこで顆冬(くわとう)なる名稱

（二）木村（康）曰ク、わうばいハジリンギングリコシドヲ含ム W. P. 602, J. P. C. 1907 (24) 520; 1909 (2) 336.

（一）牧野曰フ、從來款冬ヲ我邦ノふき(Petasites japonicus, Miq.)ニ充テ來レドモ是レハ全ク誤リデアル、款冬ノ葉ハ廣ク心臓形ヲナシ葉緣角ハリ或ハ淺裂シ裏面ハ白毛ヲ密布

は此から來たのだが、後世になつて欵冬と訛つたのだ。卽ち欵凍だ。欵の意味は至であつて、冬の至れる時期に花が咲く草といふ意味である。

宗奭曰く、あらゆる草のうちで、この草だけは氷雪を顧みずして最も春に先んずる。故に世にこれを鑽凍といふ。たとひ氷雪の下にあつても時が來れば芽が生えるものだ。春季になると世人はこれを採つて蔬菜に代へて食ふ。藥に入れるには、微し花が現はれたばかりのものを用ゐるが良い。已に咲き切つては全く氣力がなくなる。今は一般に、多くは箸の先ほどのものを用ゐてゐるが、果してまだ花が咲かなかつたものか否かが氣遣はれる。

〔潞州欵冬花〕

【集解】　別錄に曰く、欵冬は(三)常山の山谷、及び(四)上黨の川の邊りに生ずる。十二月花を採つて陰乾する。弘景曰く、第一位のものは河北に產する。その形が舊い蓴のまだ舒びないもののやうなものが佳い。その內部には絲があるものだ。次位

シテ居リ花ノ後ニ出デル、花ハ花梗上ニ一輪ヅツ咲キ頭狀花ヲナシ鮮黃色ヲ呈スル、歐洲、亞細亞、北亞非利加ニ分布シ隣國ノ支那ニハ產スレドモ我日本ニハ生ジテ居ナイ、植物名實圖考卷ノ十一ニアル欵冬ノ圖ハつはぶきヲ畫イタモノデ眞物デハナイ。

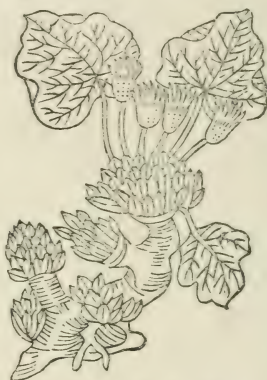
(二)洛水ニ二アリ。一ハ陝西省定邊縣ノ東南、白於山ニ源ヲ發シ、南流シテ鄜邑ノ南ニテ渭水ニ合ス。一ハ陝西省雒南縣ノ西北、冢嶺山ニ源ヲ發シ、東流シテ河南省ニ入リ、洛口ニ至ツテ黃河ニ入ル。此ニイフ洛水ハ陝西ノ洛水ヲイフナルベシ。

(三)常山ハ石部鹵石

のものは(五)高麗、百濟に產する。その花は大菊花に似たものだ。それに次ぐものは蜀の北部、(六)宕昌にも產する。いづれも冬季氷の下に在るものに如くはないので、十二月、正月の早朝に取る。

○恭曰く、今は(七)雍州南山の溪水、及び華州の山谷の谷間に出る。葉は葵に似て大きく、叢生するもので、花は根の下に出る。

〔秦州款冬花〕

○頌曰く、今は(八)關中にもある。根は紫色、葉は萆薢に似てゐる。十二月黃花を開き、蕚は靑紫色で、土から一二寸出たばかりには菊花の蕚のやうだ。通直で肥え實する。子は無い。陶氏の所謂『高麗、百濟に產する』といふものはこの類に近い。又、紅花のものもあつて、葉は荷のやうで、(九)斗直の大なるは一升を容れ、小なるも數合を容れ得るものだ。俗に蜂斗葉、又は水斗葉と呼ぶ。蘇氏の所謂『大なるは葵のやうで叢生する』とい

類、凝水石ノ註ヲ見ヨ。

(四)上黨ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

(五)高麗ハ金部金ノ註、百濟ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

(六)宕昌ハ石部雄黃ノ註ヲ見ヨ。

(七)雍州ハ石部金牙石ノ註、南山、卽チ終南山、山草類王孫ノ註、華州ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。

(八)關中ハ山草類淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。

(九)斗直トハ容量ノ意ナランカ。

ふはこの物だ。傅咸の款冬賦の序に『予曾て禽を逐ふて北山に登る。時に仲冬の月、氷凌谷に盈ち、積雪崖を被ふ。顧見すれば款冬煒然として始めて華艶を敷く』とあるはこの物だ。

【修治】斅曰く、凡そこれを採取したならば、裏に向つて花蘂を裹む殼、幷に裏にある實の栗零殼のやうなもの、幷に枝、葉を棄去らねばならぬ。かくて甘草水に一夜浸してから、また款冬の葉を取つて裹み纏ひ、一夜置いて晒し乾かし、葉を去つて用ゐる。

(一〇)【氣味】【辛し、溫にして毒なし】別錄に曰く、甘し。好古曰く、純陽である。手の太陰の經に入る。之才曰く、杏仁が使となる。紫菀と配合するが良し。皂莢、消石、玄參を惡み、貝母、辛夷、麻黄、黄芪、黄芩、連翹、靑葙を畏る。

【主治】【欬逆上氣で善く喘するもの、喉痺、諸驚癇、寒熱邪氣】(本經)【消渴で呼吸に喘息するもの】(別錄)【肺氣心促の急熱、(一一)勞欬の絶えず續けざまに出て涕唾の粘るもの、肺痿、肺癰で膿血を吐くものを療ず】(甄權)【心、肺を潤ほし、五臟を益し、煩を除き、痰を消し、肝を洗ひ、目を明にする。また中風等の疾】(大明)

(一〇)木村(康)曰ク、款冬ハ葉ニ配糖體二・六三%花ニ二種ノフイトステリンヲ檢出ス。W. P. 785; B. P. C. 1128. A. J. P. 1887 (59) 340; U. S. D. 1331.

(一一)大觀ニ勞上ニ兒字アリ。

（一三）大觀ニ方上ニ今字アリ。

【發明】 頌曰く、本經には欬逆に主たるものとあり、古（一三）方には肺を温め嗽を治するに最要藥としてあつて、崔知梯の久欬を療ずる熏法では『毎朝雞子ほどの欵冬花を取り、少量の蜜を拌ぜて花を潤し、一升入りの鐵鍋に入れ、又一箇の瓦盌に孔を一箇鑽り明けて一本の小筆管を挿し、それを鍋に蓋せて氣の漏れぬやうに麪泥で縫ひ堅め、鍋の下へ火を入れ、少時して筒から出る烟を口に含んで吸ひ嚥む。若し胸中が少し悶えるときは、頭を擧げ、筒口をば手にて押へて烟を漏らさぬやうにする。烟が盡れば止める。此の如く五日間一定してこれを試み、六日目に羊肉の餺飥一頓を飽食すれば永く瘥える』とある。

宗奭曰く、長い間嗽を病んだある人が、ある者から、欵冬花三兩を燃し、風の無い處で筆管でその烟を滿口に吸つて嚥むがよいと教へられ、それを試みて、數日にして果して效果があつた。

【附方】 新二。『血を帶ぶる痰嗽』欵冬花、百合を蒸し焙じて等分を末にし、蜜で龍眼大の丸にし、就寢時に一丸づつを嚼んで薑湯で服す。（濟生方） 『口中の疳瘡』欵冬花、黄連等分を細末にし、唾で調へて餅にし、先づ蛇牀子の煎湯で口を漱いでか

ら、餅を傅けて少頃の間しかと押へ付けて置く。その瘡は立ろに消する。（楊誠經驗方）

(一)鼠麴草（日華）

和名　ほうこぐさ、ははこぐさ
學名　Gnaphalium multiceps, Wall.
科名　きく科（菊科）

校正　有名未用の鼠耳、及び東垣藥類法象の佛耳草を併せ入る。

釋名　**米麴**（綱目）　**鼠耳**（別錄）　**佛耳草**（法象）　**無心草**（別錄）　**香茅**（拾遺）　**黃蒿**（會編）　**茸母**　時珍曰く、麴とはその花が麴の色のやうに黃なるをいひ、又、米粉に和ぜて食ひ得るからの名稱だ。鼠耳とはその葉の形が鼠の耳のやうだからで、又、白毛があつて蒙茸がこれに似てゐるところから、北方地方では茸母と呼ぶ。佛耳といふは鼠耳の訛だ。今淮地方で毛耳朶と呼ぶところから見ると、香茅なる茅の字も毛と書くべきものかも知れぬ。按ずるに、段成式の雜俎に『蚍蜉酒草とは鼠耳のことで、一名無心草といふ。これは(二)蚍蜉がこれを食ふからかく名けたのかも知れぬ』とある。

(一)牧野曰ク、鼠麴草ハ我邦春ノ七草ノ一デ此場合ニハおぎやう（ごぎやうハ訛リ）ト稱スル、今一般ニははこぐさ（母子草）ト呼ベドモ本名ハほうこぐさデアル、ははこぐさハ文德實錄ノ著者がほうこぐさニ基ヅイテ作ツタ名デアツテ我邦ノ古イ和名デハナイ却テほうこぐさが古イ名デアル。

(二)蚍蜉、卽馬蟻、大ナル蟻ヲ云フ。

(三)山南ハ漏盧ノ註ヲ見ヨ。

(四)徽州ハ宋ニ置ク。今ノ安徽省歙縣ソノ舊治ナリ。

(五)粑菓ハ草餅團子ノ類ナラン。

【集解】別錄に曰く、鼠耳、一名無心は田畑の低地に生ずるもので、葉は厚く莖は肥えてゐる。

藏器曰く、鼠麴草は平な岡の熟地に生ずる。高さは一尺餘、葉に白毛があり、花は黄色だ。荊楚歲時記に『三月三日に鼠麴の汁を取り、蜜を和し粉にしたものを龍舌䊦といふ。時氣の疾を壓すものだ』とある。䊦の音は板(ハン)であつて、米餅のことだ。(三)山南地方では香茅と呼び、花を取つて欅の皮を雜へて褐を染めるが、破れるまで色が鮮かなものだ。江西地方では鼠耳草と呼ぶ。

〔鼠麴〕——佛耳草——

汪機曰く、佛耳草は、(四)徽州地方では黄蒿といふ。二三月に苗が伸びて長さ一尺ばかりになる。葉は馬齒莧に似て細く、微かな白毛があり、花は黄色だ。地方民は莖、葉を採つて米粉に和し、搗いて(五)粑果にして食ふ。

時珍曰く、日華本草に『鼠麴、卽ち別錄の鼠耳なり』とある。唐、宋の諸家はそれを知らずして、鼠耳を退けて有名未用中に編入した。李杲の藥類法象にも、佛耳草

を用ゐることは書いてあるが、やはりそれが鼠耳なることは知らなかつたのだ。原野の間に甚だ多いもので、二月苗が生え、莖、葉は柔軟だ。葉は長さ一寸ばかりで、鼠の耳の毛のやうな白茸がある。小さい黄色の花を開き、穗になつて細子を結ぶ。楚地方では米麴と呼び、北方地方では茸母と呼ぶ。故に邵桂子の甕天語に『北方では寒食に茸母草を採つて粉に和して食ふ』といひ、宋の徽宗の詩に『茸母初めて生じ、煙を禁ずるを認む』とあるはこの草のことだ。

【氣味】『甘し、平にして毒なし』 別錄に曰く、鼠耳は酸し、毒なし。杲曰く、佛耳草は酸し、性は熱である。欵冬花が使となる。少し食ふがよい、量を過せば目を損ずる。【主治】『鼠耳は、痺寒寒熱に主效があり、欬を止める』(別錄)『鼠麴は、中を調へ、氣を益し、洩を止め、痰を除き、時氣を壓し、熱嗽を去る。米粉に雜へて(六)糗にして食へば甘美なものだ』(日華)『佛耳は、寒嗽、及び痰を治し、肺中の寒を除き、大いに肺氣を升す』(李杲)

【發明】震亨曰く、寒痰嗽を治するには佛耳草を用ゐるがよく、熱痰嗽には燈籠草を用ゐるがよい。

(六) 糗ハ乾糧（ホシイヒ）

時珍曰く、別錄に『寒熱を治し、欬を止める』とあり、東垣は『寒嗽を治す』といふ。これは病の標に對する觀察だ。日華は『熱嗽を治す』といふ。これは病の本に對する觀察だ。概して寒嗽なるものは、多くは火が內に鬱し、寒が外を覆ふものなのである。按ずるに、陳氏の經驗方に『三奇散は、一切の欬嗽、發病の久しきと近きとを問はず、晝夜一定時なく發るを治す。佛耳草五十(七)文、欵冬花二百文、熟地黃二兩を焙じて硏り、二錢づつを爐中で燒き、その烟を筒で吸つて嚥み下し、涎のあるを吐き去る。予が家の(八)獲が久しくこの病を患つて醫療の效果がなかつたが、たまたま(九)沅州にゐた時、一人の下婢からこの法を聞いて用ゐ、二服で癒えた』とある。

(一)決明（本經上品）

和名　えびすぐさ
學名　Cassia Tora, L.
科名　まめ科(荳科)

【釋明】時珍曰く、これは馬蹄決明のことで、目を明かにする功力を表示した名稱だ。又、草決明、石決明などいふがあつて、いづれも同功である。草決明とは靑葙子のことで、陶氏の所謂る萋蒿はその物だ。

(七)文ハ錢ノ意。
(八)獲ハ既婚ノ婢女ヲ云フ。
(九)沅州ハ唐ニ置ク今ノ湖南省芷江縣ソノ舊ナリ。
(一)牧野曰フ、決明ニハ幾種カアルヤウデアルがえびすぐさヲソレノ正品ト定メヲキツ、コレハ處ニヨリ六角さうト呼バレルがソレハ民間デ藥用トシテ用ヰラレル其種子ノ形狀カラ來タ名デアル、丈高キ一年草デ小葉ノ對

【集解】別錄に曰く、決明子は(二)龍門の川澤に生ずる。十月十日に採つて百日間陰乾する。弘景曰く、龍門は長安の(三)北にある土地だ。今は處處にある。葉は茳芒のやう、子は形が馬蹄に似たもので、馬蹄決明と呼ぶ。搗碎いて用ゐるものだ。又、別に草決明といふがあるが、それは萋蒿(四)草のことだ。下品の部に在る。頌曰く、現に處處の民家で畑に蒔いて栽培してゐる。初夏に苗が生え、高さ三四尺、根は紫色を帶び、葉は苜蓿に似て大きい。七月黃花を開いて角を結ぶ。子は靑綠豆のやうで銳い。十月採取する。按ずるに、爾雅に『薢茩は(五)決光なり』とあり、郭璞の釋に『藥草の決明のことで、葉は黃色で銳く、花は赤く、實は山茱萸のやうだ』とある。或は『これは蔆といふもので、關西ではこれを薢茩―音は皆荷(カイコウ)である―といふ』ともいふが、その說はこの草の種類と一向類似してゐない。又、一種の馬蹄決明といふがあつて、葉は豇豆のやう、子の形が馬蹄に似てゐる。宗奭曰く、決明は苗の高さ四五尺のもので、春季にはこれも蔬にする。秋深く角を結び、角の中に羊腎のやうな子を生ずる。現に湖南、湖北地方の民家では栽培するものが甚だ多く、(六)或は村落の野原などに段を作つて種ゑてある。蜀本圖經に『葉

少ナク葉頭圓ク莢ハ狹長デ數寸ノ長サガアル、今日此種子ヲ妄リニ萋蒿ト呼ンデ坊間デ賣ツテ居ルガ實ハ萋蒿ハ此書ニアル如ク草決明ノ一名デひゆ科（莧科）ノのげいとう（Celosia argentea, L.）即チ靑葙ノコトデアル、又茳芒決明即チ山扁豆ハ Cassia 屬ノ別ノ一種デ C. nictitans, L. ノ學名ノモノト思フ、即チ救荒本草ノ山扁豆ノ圖ガ此レト一致シテ居ル。植物名實圖考卷ノ十一ニ出テ居ル決明ノ圖ハ何カ同屬ノ別ノ種デアル、從來右ノ山扁豆ヲ茳芒トハ別ノモノトナシかはらけつめいニ充テ居レドモ其レハ非デアツテ、かはらけつめい

は苜蓿に似て濶大だ』とあるは甚だ妥當を得てゐる。

時珍曰く、決明には二種ある。一種は馬蹄決明であつて、莖の高さ三四尺、葉は苜蓿より大きくして本が小さく末が濶く、その葉は晝開いて夜は合し、兩兩互に合はさる。秋淡黃色で五出の花を開き、初生の細豇豆のやうな長さ五六寸の角を結び、その角の中に數十粒の子が參差として相連り、馬蹄のやうな形を成してゐる。色は靑綠だ。眼目の藥に入れて最も良し。一種は茳芒決明であつて、救荒本草の所謂山扁豆がそれだ。苗、莖は馬蹄決明に似て、ただ葉の本が小さく末が尖り、さながら槐葉に似たものだ。夜になつても合さらない。秋深黃色で五出の花を開き、太さ小指ほど長さ二寸ばかりの角を結び、その角の中の子は數列になり、黃葵子のやうな形で扁たく、褐色のものだ。味は甘くして滑する。右の二種は、苗、葉、いづれも酒麴に作れるもので、俗に獨占缸と呼ぶ。但し茳芒は嫩苗、及び花、角子いづれも瀹て食ひ、また茶に點て食へるもの

〔馬蹄決明〕

ノ漢名ハ今ノ處マダ見付カラナイガ滿洲デハ黃瓜香ノ名ガアルトノ事デアル。Cassia ノ一種ニはぶさう(C. torosa, Cavan.)ガアル、救荒本草卷ノ八ノ望江南ハ之レニ近ケレドモ此レハほそばはぶさう(C. Sophera, L.)デアル、はぶさうハ臺灣ニテ羊角豆ト云フトノ事デアル。

(二)龍門ハ土部甘土ノ註ヲ見ヨ。

(三)此ヲ金陵本ニ北ニ作ル。今ソレニ據ル。

(四)大觀ニ草ヲ子ニ作ル。

(五)大觀ニ決光ヲ茳芒ニ作ル。

(六)或種ノ二字大觀本草ニヨル。

だが、馬蹄決明の苗、角はいづれも靭く苦く、食ふわけに行かぬものだ。蘇頌は『薢茩、卽ち決明だ』といつたが、一向類似せぬものだ。恐らくは別種の一植物だらう。

子 (七)【氣味】【鹹し、平にして毒なし】別錄に曰く、苦く甘し、微寒なり。之才曰く、蓍實が使となる。大麻子を惡む。【主治】【靑盲、目淫、膚赤、白膜、眼赤く涙の出るもの。久しく服すれば、(八)精光を益し、身を輕くする】(本經)【脣口の靑きを療ずる】(別錄)【肝氣を助け、精を益す。水で末を調へて腫毒に塗る。太陽穴を(九)熁けば頭痛を治す。又(一〇)胸心に貼れば鼻洪を止め、枕に作れば頭風を治す。目を明かにすることは黑豆よりも(一一)甚しい】(日華)【肝熱の風眼、赤涙を治するには、毎朝一匙を淨く挼んで空心に呑む。百日後には夜間明かに物を見得る】(甄權)【腎を益し、蛇毒を解す】(震亨)【葉を菜にして食へば、五臟を利し、目を明にするに甚だ良し】(甄權)

【發明】時珍曰く、相感志に『畑に決明を種ゑれば蛇が敢て入らぬ』とある。丹溪朱氏が『決明は蛇毒を解す』といつたのはこれに起因するものだ。王旻の山居錄には『春季に決明を種ゑて、生えた葉を採つて食ふ。その花を陰乾にしてもやはり

(七)木村(康)曰ク、ゑびすぐさノ種子中エモヂン及ビ葡萄糖ヲ生ズル配糖體ヲ含有ス。
(八)精光ハ眼光ノ意。
(九)熁ハ迫デアル炙キ壓スル意カ。
(一〇)大觀ニ胸ヲ腦ニ作ル。
(一一)大觀ニ甚ヲ勝ニ作ル。

食へる。泡茶を絶對に忌む。多く食へば必ず風を患ふものだ』とある。按ずるに、馬蹄決明は苗、角いづれも靭くして苦く、食料とはならないものだ。また假令食つたにしても、五臟を利し、目を明かにする功力のあるものが、何として風を患ふ筈があらうか。又、劉積の霏雪錄には『人家に決明を種ゑてはならない。生れる子が多く跛になるものだ』とあるが、これは迂儒誤聽の說だ。信ずべきでない。

附方 舊一、新七。【積年の失明】決明子二升を末にし、每食後に粥飲で方寸匕を服す。(外臺祕要) 【青盲、雀目】決明一升、地膚子五兩を末にして米飲で梧子大の丸にし、二三十丸づつを米飲で服す。(普濟方) 【補肝、明目】決明子一升、蔓菁子二升を酒五升で煮て暴乾して末にし、一日二回、二錢づつを溫水で服す。(聖惠方) 【目赤腫痛】決明子を炒つて研り、茶で調へて兩太陽穴に傅け、乾けば取換へる。一夜にして癒える。(醫方摘玄) 【頭風熱痛】方は上に同じ。【鼻衄の止まぬもの】方は主治の項にある。【癬瘡の蔓延】決明子一兩を末にし、水銀、輕粉少量を入れて星の見えぬまで研り、瘡を擦り破つて藥を傅ける。立ろに瘥える。東坡の家藏方だ。(奇效良方) 【發背の初期】草決明一升を搗き、生甘草一兩と水三升で一升に煮取り、二回

に分服する。概して血が滯れば瘀が生じ、肝は血を藏することを主(つかさど)るものであつて、決明は肝氣を和して元氣を損せぬものだ。（許學士本事方）

附錄　（一二）**茳芒**（拾遺）　藏器曰く、陶氏は『決明の葉は茳芒のやうだ』といつたが、按ずるに、茳芒は道傍に生え、（一三）葉は決明よりも小さい。性は平にして毒なし。

〔茳芒決明〕

火で炙(や)いて飲に作れば極めて香しく、痰を除き、渇を止め、睡らざらしめ、中を調へるものだ。隋の稠禪師が採つて五色飲を作り、煬帝(やうてい)に獻じたといふはこの草だ。又、（一四）茳芏——芏の字は土に从ふ、音は吐（ト）である——一名江蘺子といふがあるが、この草は莞(くわん)に似たもので、海邊に生じ、席に作り得るものだ。決明とは葉が類(に)て居らぬ。時珍曰く、茳芒もやはり決明の一種だ。故に俗にやはり獨占缸などといふ。說明は前項の集解にある。

（一五）**合明草**（拾遺）　藏器曰く、味甘し、寒にして毒なし。暴熱淋で小便の赤澁(せきしよく)する

（一二）牧野曰フ、茳芒ハCassia屬ノ一種デ上ニ記シテ置イタ。

（一三）大觀ニハ葉小ニシテ決明ノ如シトアリ。

（一四）牧野曰フ、茳芏ハ先輩かやつりぐさ科ノしちたうニ充テ居ルガ、果シテ穩當ナ見カ否カ今遽カニ其是非ガ判ラナイ。

（一五）牧野曰フ、合明

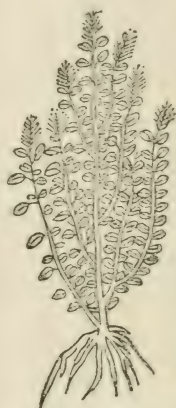
草ハ何ント云フ草カ不明デアル、文章ニ據レバ水ノ引キ去ツタ泥地ニ生ゼシてんじさうノヤウニモ想像セラレヌデモナイ。

(一)牧野曰フ、往時他國ノ種チ傳ヘテ今一般ニ畑ニ作ラレ箒ノ原料ニスル、其嫩葉ハ食用トナル。

もの、小兒の瘈病に主效があり、日を明かにし、水を下し、血痢を止める。搗いて絞つた汁を服す。下濕の地に生ずるものだ。葉は四出の花のやうで、夜になるとその葉が合はさる。

(一)地膚（本經上品）

和名　ははきぎ（はうきぎ）
學名　Kochia scoparia, Schrad.
科名　あかざ科（藜科）

釋名　**地葵**（本經）　**地麥**（別錄）　**落帚**（日華）　**獨帚**（圖經）　**王蔧**（爾雅）　**王帚**（郭璞）　**掃帚**（弘景）　**益明**（藥性）　**涎衣草**（唐本）　**白地草**（綱目）　**鴨舌草**（圖經）　**千心妓女**（土宿本草）　時珍曰く、地膚、地麥はその子の形の似たるに因み、地葵はその苗の味の似たるに因み、鴨舌はその形の似たるに因み、妓女はその枝が繁つて頭の多い點に因み、益明はその子の功力が能く目を明かにするに因んだものだ。子が

〔地膚　落帚〕

落ちてからその老莖を帚に使ふころから、帚、䔰などの諸名がある。

【集解】別錄に曰く、地膚子は(二)荊州の平澤、及び田野に生ずる。八月、十月に實を採つて陰乾する。弘景曰く、今は田野の間にやはり多く、いづれも莖、苗を取つて箒にする。その子は微細なもので、補藥の丸、散に入れて用ゐる。仙經には甚だ用ゐない。

恭曰く、田野の農民は地麥草と呼び、北方では涎衣草といふ。葉は細く、莖が赤く、熟田の中に出るもので、苗は極めて弱く、持つて擧ぐるにさへ勝へぬものだ。ここに『箒になる』といつてあるが、恐らくその實物を知らぬのだらう。

大明曰く、地膚、卽ち落帚子である。子の色は青く、一眠を起きた(三)蠶沙の形に似てゐる。

頌曰く、今は蜀、川、關中、近い地方にいづれもある。生え初めは地に薄いた五六寸のもので、根の形は蒿のやう、莖は赤く、葉は青く、甚だ荊芥に似たもので、三月黃白色の花を開き、青白色の子を結ぶ。八月、九月に實を採る。神仙七精散の說明に『地膚子は星の精だ』とある。或は、その苗は卽ち獨(四)帚で、一名鴨舌草と

(二)荊州ハ古ノ九州ノ一ナリ。今ノ湖北、湖南兩省、及ビ四川省舊遵義、重慶ノ二府、貴州省舊思南、銅仁、思州、石仟等ノ諸府、及ビ廣西省ノ全縣、廣東省ノ連縣等ノ地ヲ包ヌ。後漢ニハ荊州刺史ヲ置キ漢壽、卽チ今ノ湖南省武陵縣ノ東北ノ地ニ治ス。

(三)蠶沙ハ蠶糞。

(四)帚、大觀ニ掃ニ作ル。

いふ。陶弘景の所謂る『苗を箒にする』といふ說と、蘇恭の『その苗は弱いもので持つて擧げるにも勝へぬものだ』といふ說と、二說合致しないが、現に醫家は皆これを獨帚といつてゐる。(五)密州から提出した圖の說明に依れば『根は叢をなして生え、每窠に二三十莖あつて、莖には赤いものも靑いものもある。七月黃色の花を開く。その實は地膚であつて、八月に至つて(六)䕲幹が成つてから採るものだ』とある。これは正に獨(七)帚と(八)合致する。恐らく西北地方の產は短く弱いので、それ故に蘇恭はかくいつたものであらう。

時珍曰く、地膚の嫩苗は蔬茹にして食へる。一株に數十本の枝が簇集し、團になつて直上に伸び、性の最も柔弱なものだ。故にその幹枝が老い固らんとする時に採れば、十分箒としても用ゐられる。蘇恭が、箒の用にならぬといつたのは、ただその嫩苗を指していつたのである。子が最も繁多なものだ。爾雅には『蒴は王蔧なり』とあり、郭璞の注に『王帚である。藜に似たもので、箒になる。江東では落帚と呼ぶ』とある。この說が當を得てゐる。

子

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】時珍曰く、甘し、寒なり。

【主治】

(五)宋ノ密州ハ今ノ山東省諸城縣ノ地ナリ。

(六)字書ニ䕲ハ音皆、禾藁去皮穎也トアリクキナリ。

(七)大觀ニ帚ヲ掃ニ作ル。

(八)大觀ニ合ヲ類ニ作ル。

【膀胱の熱。小便を利し、中を補し、精氣を益す。久しく服すれば、耳目を聰明にし、身體を輕くし、老衰を防ぐ】(本經)【皮膚中の熱氣を去り、人體を潤澤にし、惡瘡、疝瘕を散じ、陰を強くする】(別錄)【陰卵癩疾を治す。熱風を去るには、湯にして沐浴するがよし。陽起石と共に服すれば、男子の陰痿不起に主效があり、氣を補し、力を益す】(甄權)【客熱丹腫を治す】(日華)

發明　藏器曰く、多くの病は虛から起るものだ。虛して熱多きには地膚子、甘草を加へる。

附方　舊三、新七。【風熱赤目】地膚子を焙じて一升を、生地黃半斤から取つた汁に和して餅にし、晒し乾して研末し、三錢づつを空心に酒で服す。(聖惠方)【目痛、眯目】凡そ目痛、及び眯目で中を傷め、熱瞑あるには、地膚子の白汁を取つて頻りに目中に注ぐ。(王燾外臺祕要)【(九)雷頭風腫】人事不省なるには、落帚子、生薑を共に研り爛らし、熱して酒に投じて服し、汗を取れば癒える。(聖濟總錄)【脅下の疼痛】地膚子を末にして酒で方寸匕を服す。(壽域神方)【疝氣の危急なるもの】地膚子、即ち落帚子を香しく炒つて研末し、一錢づつを酒で服す。(簡便方)【(一〇)狐疝、陰癩】

(九)雷頭ハ頭部ノ瘡腫。

(一〇)狐疝ハ鼠蹊ノ脫腸。

（一一）久疹ノ疹ハ病ニ同ジ、持病ノコト。

物を飛び越え、重い物を擧げて俄かに陰癩となつたもの、及び小兒の狐疝、傷損で癩を生じたもの、いづれも地膚子五錢、白朮二錢半、桂心五分を末にし、飲、或は酒で三錢を服す。生葱、桃、李を忌む。（必效方）【（一一）久疹の腰痛】積年の宿痾でたまたま發作するには、六月、七月に取つた地膚子を乾して末にし、一日五六回、酒で方寸匕を服す。（肘後）【血痢の止まぬもの】地膚子五兩、地楡、黄芩各一兩を末にし、方寸匕づつを溫水で調へて服す。（聖惠方）【妊娠中の淋】熱痛酸楚し、手、足煩疼するには、地膚子十二兩、水四升を二升半に煎じて分服する。（子母祕錄）【肢體の疣目】地膚子、白礬等分を煎じた湯で頻りに洗ふ。（壽域神方）

苗葉 氣味 【苦し、寒にして毒なし】 時珍曰く、甘く苦し。燒灰を煎じた霜は、砒石、粉霜、水銀、硫黄、雄黄、硇砂を制す。 主治 【搗汁を服すれば、赤、白痢に主效がある。燒灰も善し。水で煎じて目を洗へば、熱暗、雀盲、澁痛を去る】（別錄）【大腸泄瀉に主效があり、氣を和し、腸、胃を澁し、惡瘡の毒を解す】（蘇頌）【水で煎じて日毎に服すれば、手足の煩疼を治し、小便諸淋を利す】（時珍）

發明 時珍曰く、按ずるに、虞摶の醫學正傳に『摶の兒が七十の年、秋季に

淋を患つて二十餘日に及び、あらゆる方も效がなかつたが、後にある方を得、地膚草を取つて搗き、その自然汁を服すると遂に通じた。至つて賤しい植物だが、此の如き回生の功がある』とある。時珍按ずるに、聖惠方に『小便不通を治するには、地麥草一大把を水で煎じて服す』とあり、古方にも常にこれを用ゐてある。それはこのものが能く陰氣を益し、小腸を通ずるものであつて、陰が無ければ陽がその働を發揮し得ぬものだから、その場合にこれを用ゐるのである。東垣が小便不通を治するに黃蘗、知母を用ゐて腎を滋くしたと同一目的だ。

【附方】新一。【傷けて睛の陷つたもの】胬肉の突出せるには、地膚を土を洗ひ去つて二兩を搗き、汁を絞つて少量づつ點ける。冬季は乾いたものを煮て膿汁を用ゐる。（聖惠方）

瞿麥（一）

瞿の音は劬（ク）である。（本經中品）

和名　からなでしこ
學名　Dianthus chinensis, L.
科名　なでしこ科（石竹科）

【釋名】蘧麥（爾雅）　巨句麥（本經）　天菊（爾雅）　大蘭（別錄）　石竹（日華）

（一）牧野曰フ、我邦ノ學者ハ從來瞿麥ト石竹トヲ兩分シかはらなでしこ(Dianthus superbus, L.)ヲ瞿麥トシ、からなで

しこチ石竹トシテ居レドモ其レハ非デ瞿麥モ石竹モ同一種ノモノデ卽チ瞿麥ノ一名が石竹デアル事此書ニ記スル通リデアル、かはらなでしこニモ何カ漢名ガアルベキト思フガ私ニハ信ズベキ其名ガ判ツテ居ナイ、からなでしこハ我邦ニハ野生ハナイガ普通ニハ觀賞用トシテ培養セラレテ居リ種種ノ變種ガアル、卽ちいせなでしこナドモ其變種ノ一デアル、瞿麥がからなでしこデアル事ハ此書ノ文章デモ分ルガ尚植物名實圖考ニハ其圖モ出テ居ル。

（二）大觀ニ採下ニ實字アリ。

南天竺草（綱目）弘景曰く、子が頗る麥に似たものだから瞿麥と名けたのだ。時珍曰く、按ずるに、陸佃は韓詩外傳の解に『兩旁に生ずるを瞿といふ。この麥は穗が旁生するから名けたのだ』とある。爾雅には蘧と書いてあるが、この字には渠（キヨ）と衢（ク）の二音がある。日華本草に『一名燕麥、一名杜姥草』といふは誤だ。燕麥、卽ち雀麥であつて、雀と瞿の二字は形が近いところから、傳寫に訛を生じたのだ。

〔瞿　麥〕

集解　別錄に曰く、瞿麥は太山の山谷に生ずる。立秋に（二）採つて陰乾する。弘景曰く、今は近道に出る。一莖に細葉を生じ、花は紅、紫、赤色で風情あるものだ。子と葉とを合はせて刈り取る。子は頗る麥の子に似たものだ。この草には二種あつて、一種は微し大きく、花は邊に叉椏がある。何れが正しいものか判然せぬが、現に商人は皆小さいものを賣つてゐる。また一種は、葉、莖は似たものもだが毛があり、花は晩くして甚だ赤い。按ずるに、經には『實を採る』とある。その中の子

は細いもので、燥熱すれば盡く脱け落ちる。

○頌曰く、今は處處にある。苗は高さ一尺ほど、葉は尖小で色が青い。根は色が紫黑で、形は細い蔓菁のやうだ。花は紅、紫、赤色で、また映山紅にも似てゐる。二月から五月まで開いて七月實を結ぶ。實は穗になり、子は頗る麥に似たものだ。(三)河陽、(四)河中府に産するものは苗を用ゐるがよい。(五)淮甸に産するものは根が細く、村落の人民はそれを取つて刷子や箒を作る。爾雅に天菊といひ、廣雅に茈萎といふはこの物だ。

○○時珍曰く、石竹は、葉が地膚葉に似て尖小だ。また初生の小竹葉に似て細く窄い。莖は纖細で節があり、高さは一尺餘、梢の間に花を開く、田野に生えるものは花の大さが錢ほどで紅紫色だ。人家に栽培するものは花がやや小さくしてたをやかだ。(六)細白、粉紅、紫、赤、まだらの數色があつて、俗に洛陽花と呼んでゐる。結實は燕麥のやうで、中に小さい黑子がある。その嫩苗は、煮熟して水で淘れば食へる。

穗　修治　○斅曰く、凡そこれを用ゐるには、ただ蕊殼を用ゐる。莖、葉を用ゐてはならぬ。若しそれ等を同時に用ゐれば、空心に氣噎し、小便にしまりが無くな

(三)河陽、河南省孟縣ニ春秋ノ河陽ノ故城アリ。

(四)河中府ハ石部石中黄子ノ註ヲ見ヨ。

(五)淮甸ハ淮地方トイフガ如シ。淮河ヲ中心トシタル一帶ノ地域ヲイフ。

(六)金陵本亦細ニ作ル、然レドモ細白ハ紅白ノ誤ナルコト必セリ。

る。用ゐる時には、篁竹瀝に一伏時浸して漉し晒して用ゐる。

【氣味】【(七)苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦し。權曰く、甘し。之才曰く、蘘草、牡丹が使となる。螵蛸を惡み、丹砂を伏す。

【主治】【關格、諸癃結、小便不通。刺を出し、癰腫を決し、目を明かにし、翳を去り、胎を破り、子を落し、閉血を下す】(本經)【腎氣を養ひ、膀胱の邪逆を逐ひ、霍亂を止め、毛髮を長くする】(別錄)【五淋、月經不通に主效があり、血塊を破り、膿を排す】(大明)

葉【主治】【痔瘻、並に瀉血には、湯粥にして食ふ。又、小兒の蛔蟲、及び丹石藥の發動、并に眼目の腫痛、及び腫毒を治す。搗いて傅ければ、浸淫瘡、并に婦人の陰瘡を治す】(大明)

【發明】杲曰く、瞿麥は小便を利するに君主の用を爲すものだ。

頌曰く、古今の方に、心の經を通じ、小腸を利する最要のものとなつてゐる。

宗奭曰く、八(八)正散に瞿麥を用ゐてあつて、既に一般に至要の藥となつてゐるが、若し心の經に熱が有るにしても、小腸の虛するものがこれを服すれば、心熱がまた

(七)大觀ニ辛トアリ。

(八)大觀ニ正ナ政ニ作ル。

(九)大觀ニ腸下ニ藥ノ字アリ。

(一〇)大觀ニ二錢半ヲ一分ニ作リ、金匱ニハ一兩ニ作ル。

(一一)大觀ニ雞ヲ附ニ作リ、金匱ニ箇ヲ枚ニ作ル。

退かぬうちに小腸に別の病が起るものだ。蓋し小腸と心とは傳送を爲すものだから、これを用ゐれば小(九)腸に入るのである。本草には、いづれも心熱を治すとはない。若し心に大熱がなければその心を治するに止むべきものであつて、或は制し盡くさぬやうの場合には、その屬を求めてそれでこれを衰へしむればよいのである。

時珍曰く、近古の方家には、産難を治する藥に石竹花湯があり、九孔出血を治する藥に南天竺飮がある。いづれもこの草の、血を破り、竅を利する點を應用したものだ。

附方　舊六　新五。

【小便石淋】血を破るがよいのである。瞿麥子を搗いて末にし、一日三回、酒で方寸匕を服す。三日で石が下るものだ。(外臺祕要)【小便不利】水氣あるには、栝樓瞿麥丸を主とする。瞿麥(一〇)二錢半、栝樓根二兩、大(一一)雞子一箇、茯苓、山芋各三兩を末にし、蜜で和して梧子大の丸にし、一日三回、三丸づつを服す。なほ反應なきときは七八丸まで增加する。小便が利し、腹中が溫まれば反應が現れたのだ。(張仲景金匱方)【下焦結熱】小便が淋閟して、或は出血があり、或は大、小便に出血するには、瞿麥穗一兩、甘草を炙いて七錢五分、山梔子仁を炒つて半兩を

(一二)魚臍疔ハ瘡頭黑キコト深ク形魚臍ノ如シ、之ヲ破レバ黃水出テ四畔浮漿スルモノ。

末にし、七錢づつを、鬚付きの葱頭七箇、燈心五十莖、生薑五片、水二盞を七分に煎じた湯で時時に溫服する。これを立效散と名ける。(千金方)【胎兒死亡】或は臨產數日を經て分娩せぬには、瞿麥を煮た濃汁を服す。(千金方)【九竅の出血】服藥しても止まぬには、南天竺草、卽ち瞿麥の拇指大の一把、山梔子仁三十箇、生薑一塊、甘草を炙いて半兩、燈心草一小把、大棗五箇を水で煎じて服す。(聖濟總錄)【目赤腫痛】浸淫する等の瘡には、瞿麥を黃に炒つて末にし、鵞涎で調へて眥頭に塗れば直ちに開く。或は搗汁を塗る。(普濟方)【眯目で生じた翳】その物の出でざるもの、膚翳を生ずるものには、瞿麥、乾薑を炮いて末にし、一日二回、井華水で二錢を調へて服す。(聖惠方)【(一二)魚臍疔瘡】瞿麥を灰に燒き、油で和して傅けるが甚だ佳し。(崔氏方)【咽喉骨哽】瞿麥を末にし、一日二回、水で一寸匕を服す。(外臺祕要)【竹木の肉に入りたるとき】瞿麥を末にして水で方寸匕を服す。或は一日三回、煮汁を飲む。(梅師方)【箭、刀の肉に在るもの】及び咽喉、胸膈、その他隱處にあつて出ぬものには、瞿麥末方寸匕を一日三回酒で服す。(千金方)

(一)王不留行（別錄上品）

和名　こふしぐろ(新稱)
學名　Melandryum apricum, Rohb.
　　　(=Silene aprica Turcz.)
科名　なでしこ科(石竹科)

【釋名】禁宮花(日華)　剪金花(日華)　金盞銀臺　時珍曰く、この物は性が走つて住まらぬもので、たとひ王の命でもそれが留まらぬといふところから名けたものだ。吳普本草に、一名不流行としたのは蓋し誤である。

【集解】別錄に曰く、王不留行は太山の山谷に生ずる。二月、八月に採取する。

弘景曰く、今は處處にある。葉は酸漿に似て、子は菘子に似たものだ。世間で、これは蓼の子だといふが、さうではない。多く癰、瘻の方に入れて用ゐる。

保昇曰く、所在にある。葉は菘、藍に似て、花は紅白色だ。子の殼は酸漿に似て、中の實は圓く黑く、菘子に似て大さ黍、粟ほどのものだ。三月苗を採り、五月子を採る。根、苗、花、子、いづれも通じて用ゐる。

頌曰く、今は(二)江浙、及び河の近き處にいづれもある。苗、莖共に青く、高さは七八寸、根は黃色で薺根のやう。葉は尖つて小さい匙の頭のやうだ。また槐葉に似たもの

(一)牧野曰フ、從來ノ學者此王不留行ヲ歐洲原産ノVaccaria vulgaris, Host. 即チ和名だうくわんさうニ充ツレドモ之レハ固ヨリ誤リデアル、王不留行ハ我ガふしぐろニ似タ草デソレヨリ稍小ナ形ヲ具ヘタモノデアツテ我ガ日本ニハ野生ハナイ。又、王不留行ヲせんなりほほづき(Physalis angulata, L.)トスル場合モアルコト植物名實圖考卷ノ十一所載ノ圖ヲ見テ知ラルル。

白井曰ク、醫學彙函ニ命名ニ關スル一説アリ、此花本名剪金花蜀王素好此花後因降宋遷汴人言此花王不留行。本草彙言又一説アリ、盧不遠先生曰命名之義亦奇古

もあつて、四月黄、紫色の花を開く。(三)葉は莖に随つて生え、菘子のやうな形狀だ。又、猪藍花にも似てゐる。五月に苗、莖を採つて晒し乾して用ゐる。俗にこれを剪金草といふ。河北に生ずるものは、葉が圓く、花は紅色で、この物と少し異ふ。

〔王不留行〕

時珍曰く、麥地の中に多く生えるもので、苗は高さ一二尺、三四月に鐸鈴のやうな形の紅白色の小花を開く。結實は燈籠草のやうで、子殼に五稜があり、殼の中に豆ほどの大さの一箇の實を包む。實の中の細子は菘子ほどの大さで、生は白く熟すれば黒く、細珠のやうに正圓で愛すべきものだ。陶氏は『葉が酸漿に似てゐる』といひ、蘇氏は『花が菘子の形に似たものだ』といふが、いづれも詳審を缺いたもので、子を以て花、葉の形狀に擬してゐる。燈籠草は卽ち酸漿だ。この草は苗、子皆藥に入れる。

苗子 修治 斅曰く、凡そ採收したならば、拌ぜ(四)濕してから、午前十時

身有王所以主吾身之氣血及主氣血之流行者氣血之留王不留則留者行矣氣血之行王不行則行者留矣顧血出不止與難產無乳者兩可用此其義自見。

(二)江浙トハ江蘇、浙江。河トハ黄河ヲ指スナルベシ。

(三)大觀ニ葉ヲ色ニ作ル。

(四)大觀ニ濕ヲ混ニ作ル。

から午後二時までの間蒸し、漿水に一夜浸して焙じ乾して用ゐる。

氣味　【(五)苦し、平にして毒なし】普曰く、神農は苦し、平なりといひ、岐伯、雷公は甘しといふ。元素曰く、甘く苦し、平なり。陽中の陰である。

主治　【金瘡に血を止め、痛を逐ふ。刺を出す。風痺、內塞を除き、心煩、鼻衄を止める。癰疽、惡瘡、瘻乳、婦人の難產。久しく服すれば、身體を輕くし、老衰を防ぎ、壽命を增す】(別錄)【風毒を治し、血脈を通ずる】(甄權)【遊風、風疹、婦人の(六)血經不均、發背】(日華)【乳汁を下す】(元素)【小便を利し、竹木の刺を出す】(時珍)

發明　元素曰く、王不留行を乳を下し導く爲めに用ゐるは、このものの血脈を利する功力を利用するのだ。

時珍曰く、王不留行は能く血分に走るもので、陽明、衝任の藥である。俗に『穿山甲、王不留が有れば、婦人が服んで乳が長へに流れる』といふ言葉にも見える通り、その性は行つて住まらないものだ。按ずるに、王執中の資生經に『ある婦人が淋を患つて久しく病臥し、諸藥も效がなかつたので、ある夜その夫が予にその事を訴へた。予は既效方を調べて見ると「諸淋を治するには、剪金花十餘葉の煎湯を用

(五)大觀ニ苦字下ニ甘字アリ。

(六)血經ハ月經ヲ指ス。

ゐる」とあつたので、遂にそれを服ませると、翌早朝また來て、病の八分を減じたと報告した。病は再服で癒えたのである。剪金花とは、一名禁宮花、一名金盞銀臺、一名王不留行といふものだ』とある。

◎頌曰く、張仲景の金瘡を治する藥に王不留行散があり、貞元廣利方に諸風痺を治する藥に王不留行湯がある。いづれも最も有效なものだ。

附方　舊一、新八。【鼻衄の止まぬもの】剪金花を莖と葉の付いたまま陰乾し、濃く煎じた汁を溫服する。立ろに效がある。（指南方）【大便後の下血】王不留行末一錢を水で服す。（聖濟總錄）【金瘡亡血】王不留行散――兇器で傷を受けて亡血したものを治す。王不留行十分（八月八日に採る）蒴藋の細葉十分（七月七日に採る）桑の東南の根の白皮十分（八月三日に採る）川椒三分、甘草十分、黃芩、乾薑、芍藥、厚朴各二分を用ゐ、前の三味を燒いて性を存し、後の六味を散にして合はせ、大瘡には方寸匕を飮で服し、小瘡にはただまぶす。産後にも服するがよし。（張仲景金匱要略）【婦人の乳少きもの】氣鬱に因するものだ。涌泉散――王不留行、穿山甲を炮き、龍骨、瞿麥穗、麥門冬等分を末にし、一錢づつを熱酒で調へて服し、後に豬蹄

羹を食ひ、一日三回、木梳で乳を梳る。（衛生寶鑑方）【頭風白屑】王不留行、香白芷等分を末にし、乾して摻り、一夜にして篦ぎ去る。（聖惠）【癧痕諸瘡】王不留行湯——癧痕、妬乳、月蝕白禿、及び顏面の久瘡を治し、蟲を去り、痛を止める。王不留行、東南の桃枝、東に伸びた茱萸根皮各五兩、蛇牀子、牡荊子、苦竹葉、蒺藜子各三升、大麻子一升、水二斗半を一斗に煮取つて頻りに洗ふ。（千金方）【誤つて鐵石を呑んだとき】骨に刺入つて下らず、危急なるには、王不留行、黃蘗等分を末にし、湯に浸した蒸餅で彈子大の丸にし、青黛を衣にかけ、絲で穿つて風の吹く處へ掛けて置き、一丸づつを冷水に溶かして灌ぐ。（百一選方）【竹、木、鍼で刺したとき】肉中に在つて出でず、疼痛するには、王不留行を末にし、熱水で方寸匕を調へ、根を以て傅ければ直ちに出る。（梅師方）【疔腫の初期】王不留行子を末にして蟾酥で黍米大の丸にし、一丸づつを酒で服す。汗が出て癒える。（集簡方）

剪春羅[一]（綱目）

和名　がんぴ
學名　Lychnis coronata, Thunb.
科名　なでしこ科（石竹科）

（一）牧野曰フ、剪春羅ハがんぴデ夏丹赤色ノ花ヲ開クモノデアル、往往庭園ニ栽エ花ヲ賞スル。元ト支那カラ渡シタモノ

釋名

剪紅羅

集解

時珍曰く、剪春羅は二月苗が生え、高さは一尺餘、柔莖、綠葉で、葉は莖を抱いて對生し、夏に入つて深紅色の花を開く。その花は大さ錢ほどの、すべて周圍を剪つたやうな六出で、愛すべきものだ。結實は豆ほどの大さで中に細子がある。人家で多くこれを種ゑて賞玩する。又、剪紅紗花といふがある。莖の高さ三尺、葉は(一)旋覆し、夏、秋に花を開く。花の形は石竹花のやうで稍大きく、四圍は剪つたやうで鮮紅色の愛すべきものだ。その結ぶ穗も石竹の穗のやうで中に細子がある。方書に使用されたのを見ないが、その功力を推測するに、これも小便を利し、癰腫に主效があるものであらうと思はれる。

〔剪春羅〕

〔剪紅紗〕

デ我ガ日本ニハ野生ハナイ、邦產ノふしぐろせんのう一名おほさかさうハ稍本種ニ似テ居レドモ全ク別種デアル、集解ノ文中ニアル剪紅紗花ハまつもと(L. Hau-gonum, Tem.)ヲ指シタルモノカせんのう(L. Senno, Sieb. et Zucc.)ヲ指シタモノカ能ク判然セヌガ、葉ノ高サノ點カラ見レバ前者ノヤウダシ花瓣ノ剪レ具合カラ見レバ後者ノヤウデモアル、或ハ又何カ別ノ品カ其邊今遽カニ明ラメ難イ。

(二)今枝榮齋ノ說ニ此ニ旋覆トアルハ葉狀ガ卷圍スルヲ形容セルモノニテ、石竹中ニ阿蘭陀石竹ト云フ者アリ是ヲ指シタルナラントアリ。

【氣味】〔甘し、寒にして毒なし〕【主治】【(一)火帶瘡の腰を遶るものには、生の花を採り、或は葉を搗き爛らして蜜で調へて塗る。末にするもよし】(時珍) 證治要訣に記載がある。

(二)金盞草（救荒）

和名　きんせんくわ
學名　(Calendula arvensis, L.)
科名　きく科(菊科)

【校正】宋圖經の杏葉草を併せ入る。

【釋名】杏葉草(圖經)　長春草　時珍曰く、金盞とはその花の形容だ。長春とは久しきに耐へるの意味を寓したものだ。

【集解】頌曰く、杏葉草、一名金盞草は(三)常州に生ずる。籬邊に蔓生するもので、葉と葉と相對し、秋後に雞頭の實のやうな子があつて、その中が變じて一小蟲となり、脱出して能く歩行するものだ。中夏に花を採る。

周憲王曰く、金盞兒花は、苗は高さ四五寸、葉は初生の萵苣葉に似て厚く狹く、莖を抱いて生える。莖は柔かで脆く、莖の端に花を開く。その花は大さ指頭ほど、

(一)火帶瘡ハ帶狀匐行疹、和名ツヅラコ。

(二)牧野曰フ、金盞草ハ歐洲ノ原産デ支那ヘモ多分昔西方カラ入リ來ツタモノト考ヘラレル、我ガ日本ヘハ支那カラ來タモノデアラウト思フ。今ハ人家ニ作ラレテ居ル、今日世間ニ多ク見ルモノハたうきんせんくわデ C. officinalis, L.ノ學名チ有スルモノデアル。是レ亦歐洲ノ原産デアル。

白井曰ク、大觀本草有名無用ノ部ニ杏葉草ノ圖アリ、蔓草ニシテ救荒本草ノ金盞草ト全ク別種ノモノナリ、時珍之チ一物

金黄色で盞子のやうな形をなし、四季共に絶えぬ。その葉は味が酸い。煮熟して水に浸し、油鹽を拌ぜて食ふ。

時珍曰く、夏季に蕚の内部へ實を結ぶ。それがさながら數箇の尺蠖蟲(せきくわくちゅう)が蟠屈(はんくつ)してゐるやうな形に見えるので、蘇氏は『蟲に變化する』といつたのだが、實は蟲ではない。

〔金盞草〕

(三)【氣味】【酸し、寒にして毒なし】【主治】【腸痔下血の久しく止まぬもの】(蘇頌)

(一)葶藶(本經下品)

和名 いぬがらし
學名 Nasturtium indicum, DC.
科名 十字科(十字科)

【釋名】丁歷(別錄) 蕇蒿 蕇の音は典(テン)である。大室(本經) 大適(本

トスルハ妥當ヲ缺ケリ。

(二)常州ハ今ノ江蘇省武進縣ノ地ナリ。

(三)木村(康一)曰ク、たうきんせんハ全草中サリチル酸ヲ含ム(一瓩ノ新鮮ナル植物ヨリ〇・四三瓩ヲ得)根ニハイヌリンヲ、葉及ビ花ニハカレンヂユリン林檎酸、苦味質ゴム質揮發油ヲ含ム。

W. P. 786; U. S. D. 1300; B. P. C. 251; N. S. D. 1820.

(一)牧野曰フ、我邦ノ學者ハ從來葶藶ヲいぬなづな(Draba nemorosa, var. hebecarpa, Ledeb.)トシテ居ツタガ、今、植

物名實圖考卷ノ十一所載ノ圖ニ基イテいぬがらしヲ其品ト定メタ、然シ同ジヤウナ種子ヲ生ズルモノハ他ノ近緣ノ草ヲモ時ニ葶藶ト稱シタコトガアリハシナイカト思フ、種子ニ甜イモノト苦イモノトガアルカラ其母植物ハ必ズシモ一ツデハナイト謂ヘル。木村(康)曰ク、朝鮮ニ於テハたねつけばなノ種子ヲ葶藶トシテ用ヰルガ如シ。石戸谷勉――朝藥・大・一四、(三)一四七。

(二) 藁城ハ漢ノ眞定國中ノ一縣、今ノ直隷省正定府ノ南ニ在リ。

(三) 彭城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。

(四) 曹州ハ漏盧ノ註ヲ見ヨ。

經）狗薺（別錄） 時珍曰く、名稱の意義は强ひて解すべくもない。

集解 別錄に曰く、葶藶は(二)藁城の平澤、及び田野に生ずる。立夏の後に實を採つて陰乾する。弘景曰く、(三)彭城に產するものが最も勝れてゐる。今は近道にもある。その母は公薺である。子は細かい黄色のもので、至つて苦い。用ゐるには熬るべきものだ。

頌曰く、今は汴東、陝西、河北の州郡に皆あるが、(四)曹州のものが就中佳い。初春に苗、葉が生え、高さ六七寸、薺に似て根が白く、枝、莖共に青い。三月微黄色の花を開いて角を結ぶ。子は扁たく小さく、黍粒のやうで微し長く、色は黄だ。月令に『孟夏の月、靡草死す』とあり、許愼、鄭玄の注は、いづれも『靡草とは薺、葶藶のたぐひのことだ』といつてある。一說に、葶藶は單莖で上に向ひ、(五)葉の端に粗く且つ短い角が出るものだといふ。又、(六)狗芥草なる一種があつて、葉が根下に近く奇數に生え、角は細く長い。葶藶を採收するには、必ずこの二種の區別に注意せねばならぬ。

斅曰く、凡そこれを用ゐるに、赤鬚子を用ゐてはならぬ。眞によく似たものだが、

（五）大觀亦葉端出角トアレドモ葉ハ莖ノ誤ナルコト必セリ。（六）狗、大觀ニ苟ニ作ル。

ただこの草は味が微し甘く苦いものだ。

葶藶子の苦は頂に入る。

時珍曰く、按ずるに、爾雅に『蕈は葶藶なり』とあり、郭璞の注に『實、葉はいづれも芥に似たもので、一名狗薺といふ』とある。然らば狗芥、卽ち葶藶となるわけだが、蓋し葶藶には甜と苦の二種あるので、狗芥は味が微し甘い、卽ち甜葶藶だ。或は甜葶藶とは菥蓂子のことだといふものもあるが、その功用から推して見るに、やはりさうではないやうだ。

〔葶藶〕

子　【修治】斅曰く、凡そ葶藶を用ゐるには、糯米と合はせて竈の上に置いて微し焙じ、米の熟するを待つて米を去り、搗いて用ゐる。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦し、大寒なり。酒と配合するが良し。權曰く、酸し、小毒あり。藥には炒つて用ゐる。杲曰く、沈であつて陰中の陽である。張仲景曰く、葶藶を頭瘡に傅ければ、藥氣が腦に入つて死亡する。之

才曰く、楡皮が使となる。酒と配合するが良し。白殭蠶、石龍芮を惡む。時珍曰く、大棗と適合する。

主治　【癥瘕、積聚、結氣、飲食寒熱。堅を破り、邪を逐ひ、水道を通利す】(本經)【膀胱の水、伏留熱氣、皮間の邪水が上り、顏面に出でて浮腫するもの、身體が暴かに風熱に中つたために痱癢するものを下し、小腹を利す。久しく服すれば人をして虛せしめる】(別錄)【肺壅、上氣欬嗽を療じ、喘促を止め、胸中の痰飲を除く】(七)(甄權)【月經を通ず】(時珍)

發明　杲曰く、葶藶は大いに氣を降す、辛味、酸味と共に用ゐれば腫氣を導くものだ。本草の十劑の章に『洩は閉を去るもので、葶藶、大黃のたぐひだ』とあり、この二味は皆大いに苦、寒であつて、一は血閉を洩し、一は氣閉を洩すものだ。蓋し葶藶の苦、寒の氣、味は俱に大黃に劣らない。又、性が諸藥よりも過激なもので、陽分、肺中の閉を洩し、また能く大便を洩す。その體たるや輕にして陽に象るものだからだ。

宗奭曰く、葶藶に甜、苦の二種あるが、その形は同一だ。本經に旣に『味辛く苦し』

(七)甄權、當ニ弘景ニ作ルベシ。

とあるのだから、甜いものはやはり藥に入れないのだ。概して治功は皆水を行り、泄を走らす點を應用するのだから『久しく服すれば人をして虛せしめる』といつたのだ。蓋し苦は泄するの意味に據つたのである。藥性論に『味酸し』とあるは當らない。

震亨曰く、葶藶は火に屬し、性が急激にして善く水を逐ふ。故に患者の虛する傾向のものには遠けるがよい。ともすれば人を殺すこと甚だ捷かなものである。必ずしも久しく服して後に虛するといふやうなものではない。

好古曰く、苦、甜の二味は主たる治療の對症が同一でない。仲景の瀉肺湯には苦きものを用ゐてあるが、他の方には或は甜きものを用ゐるとあるもあり、或は甜、苦いづれをも指定してないものもある。しかし、概して苦は下泄し、甜は少し緩かなものなのだから、患者の虛、實を量つて用ゐべきであつて、大いに愼重を要することだ。たとひ本草に治功を同一といつてあるにしても、味に甜と苦との別ある以上、異りなしといかで言ひ得やうか。

時珍曰く、甘、苦の二種は、あだかも牽牛に黑、白の二色あるやうなもので、急、

緩の不同がある。又、葶藶に甘、苦の二味あるやうなもので、良、毒にも異りがある。概して甜は下泄の性が緩であつて、肺をば泄しても胃をば傷めない。苦は下泄の性が急激であつて、肺を泄するは勿論、更に胃をも傷め易いものである。故に大棗を以てこれを輔けるのだ。けれども、肺中の水氣膹滿の急なるものは、この藥以外では除き得ないのだ。ただ水が去れば服藥を止める、劑を過ごさぬといふことに深く注意する外はないのである。久しく服しさへせねば、必ずしも人を殺すまでに至るわけはない。淮南子に『大戟は水を去り、葶藶は脹を癒すものだが、使用上に節度を守らねば反つて病となる』とある。やはり使用上の節度が肝要なのだ。

附方　舊十四、新六。

【陽水暴腫】顏面赤く、煩渴し、喘急し、小便の澀るものに神の如き效がある。葶藶(八)一兩半を炒つて研末し、漢防已末二兩、綠頭鴨の血、及び頭と合はせ、一萬杵搗いて梧子大の丸にし、病甚しきには空腹に十丸を白湯で服す。輕きには五丸を服す。一日三四服、五日で止る。小便の利するが反應の現はれだ。ある方では豬苓末二兩を加へる。(九)(外臺祕要)【全身腫滿】苦葶藶を炒つて四兩を末にし、棗肉で和して梧子大の丸にし、一日三回、十五丸づつを桑白皮湯で

(八)大觀ニ一兩半ヲ三兩ニ作ル。又二兩ヲ四兩ニ作ル。

(九)大觀ニ經驗方トアリ。

(一〇)大觀ニ三チ二ニ作ル。

(一一)治ノ字大觀ニヨリテ添加ス。

服す。この方は世間では甚だ信ぜぬが、實驗上有效が證されてある。【水腫で尿の澀るもの】梅師方では、甜葶藶二兩を炒つて末にし、大棗二十箇、水一大升を一升に煎じて棗を去り、その末を入れて丸にし得る程度に煎じ、梧子大の丸にして飲で六十丸づつを服し、漸次に增加して微し利するを度とする。○崔氏方では、葶藶(一〇)三兩を絹に包んで飯の上で蒸熟し、一萬杵搗き熟して梧子大の丸にする。蜜を和する必要はない。それを毎服五丸から漸次に七丸まで增加する。微し利する程度で佳し。患者の體力が堪へぬものだから多く服してはならぬ。若し氣發するときはこれを服し、利して氣が下れば止める。水氣を(一一)治するに無比の藥であつて、蕭駙馬もこの藥を服して水腫が瘥えた。○外科精義では、男、女、大人、小兒の頭部、面部、手、足の腫を治す。苦葶藶を炒つて研り、棗肉で和して小豆大の丸にし、十丸づつを麻子の煎湯で服す。一日三回、五七日繼續して小便が多くなれば腫れが引く。鹹味、酸味、生物、冷物を忌む。【大腹水腫】肘後方では、苦葶藶二升を炒つて末にし、雌、雄雞を割いた血、及び頭と合はせ、搗いて梧子大の丸にし、一日三回、十丸づつを小豆湯で服す。○又ある方では、葶藶二升を春酒五升に一夜漬け、少しづつ一

合を服す。小便が利する。○又ある方では、葶藶一兩、杏仁二十箇をいづれも黄色に熬つて搗き、十回に分服する。小便を排出して瘥えるものだ。【腹脹積聚】葶藶子一升を熬り、酒五升に七日間浸して一日三合づつ服す。（千金方）【肺濕痰喘】甜葶藶を炒つて末にし、棗肉で丸にして服す。（摘玄方）【痰飲欬嗽】含奇丸——曹州の葶藶子一兩を紙の上で炒つて黒くし、知母一兩、貝母一兩と末にし、棗肉半兩、沙糖一兩半と和して彈子大の丸にし、一丸づつを新しい綿に裹み、含んで津を嚥む。甚しきものも三丸を過すことはない。（篋中方）【欬嗽上氣】横臥し得ず、全身氣腫し、單に顔面が腫鼓し、足が腫れる等にいづれも主效がある。葶藶子三升を微火で熬つて研り、絹袋に盛つて清酒五升の中に浸し、冬は七日、夏は三日置き、初服には桃ほどの量を晝三回夜一回服す。冬季は晝二回夜二回服し、その氣力を量つて用ゐ、微し利を取る。利するを度とする。若し危急の患者には、一定の日に滿つるを待つまでもなく絞つて服するもよし。（崔知悌方）【肺壅喘急】横臥し得ぬには、葶藶大棗瀉肺湯が主效がある。（二二）葶藶を黄に炒つて末に搗き、蜜で彈子大の丸にし、大棗（二三）二十箇、水三升を二升に煎じてその葶藶丸一丸を入れ、更に一升に煎じて頓服する。

（二二）大觀葶藶下三兩ノ二字アリ。
（二三）大觀ニ二ヲ三ニ作ル。

また支飲で呼吸し得ぬものにも主效がある。(一四)(仲景金匱玉函方)【月經不通】葶藶一升を末にして蜜で彈子大の丸にし、綿で裹んで膣内二寸深さに入れ、一夜で易へる。(一五)汁が出れば止める。(千金方)【突發した顚狂】葶藶一升を三千杵搗き、白犬の血で和して麻子大の丸にし、酒で一丸を服す。三服で瘥える。(肘後)【頭風疼痛】葶藶子を末にして湯で淋汁を取り、頭を三四囘沐すれば癒える。(一六)(肘後方)【疳蟲の蝕齒】葶藶、雄黃等分を末にして臘月の豬脂に和し、槐枝の端を綿で裹んでその藥を蘸けて點ける。(金匱要略)【白禿頭瘡】葶藶末を塗る。(聖惠方)【已に潰れたる瘰癧】葶藶二合、豉一升を搗いて大さ錢ほど厚さ二分の餅にし、それを瘡孔の上に置き、その上へ艾を炷けて灸して溫熱ならしめる。肉を破つてはならぬ。數〻易へて灸する。但し、初起の瘡に灸してはならぬ。恐らく葶藶の氣が腦に入つて人命を傷ふものだ。(永類方)【馬汗の毒氣】腹に入りたるには、葶藶子一兩を炒つて研り、水一升に浸してその湯を服す。惡血を取り下す。(續十全方)

(一四)大觀ニ梅師方ニ作ル。
(一五)本草發揮ニ汁ヲ汗ニ作ル。
(一六)大觀ニ千金翼ニ作ル。

(一)車前（本經上品）

和名　おほばこ
學名　Plantago major, L. var. asiatica, Decne.
科名　おほばこ科（車前科）

釋名　**當道**（本經）　**芣苡**　音は浮以（フイ）である。**馬舄**　舄の音は昔（セキ）である。**牛遺**（いづれも別錄）　**牛舌**（詩疏）　**車輪菜**（救荒）　**地衣**（綱目）　**蝦蟇衣**（別錄）

時珍曰く、按ずるに、爾雅に『芣苡は馬舄、牛遺、車前なり』とあり、陸機の詩疏には『この草はよく道邊、及び牛、馬の足跡中に生えるところから、車前、當道、馬舄、(二)牛遺などの名稱がある。舄は履き物だ。(三)幽州地方ではこれを牛舌といふ。蝦蟇がよくこの草の下に隱れてゐるところから、江東では蝦蟇衣と呼んでゐる』とある。また韓詩外傳には『(四)直きを車前といひ、瞿ぶを芣苡といふ』とあるが、恐らくこれは牽强の說だ。瞿とは兩旁に生えるものをいふ。

集解　別錄に曰く、車前は(五)眞定の平澤、丘陵、阪道中に生ずる。五月五日に採つて陰乾する。弘景曰く、人家、及び路邊に甚だ多い。韓詩に『芣苡とは李に似た木のことで、その實を食へば子孫繁榮のためになる』といつてあるが、それは

(一) 牧野曰フ、野外并ニ人家ノ近傍ナドニ生ズル普通ノ宿根草デ往往其嫩葉ヲ食用トスル、國ニヨリげーろつぱト稱スル蛙(かへる)葉ノ意デアル、土地ノ子供等蛙ヲ此葉ヲ伏セ苦メ置イテ其蘇ヘルヲ見テ興ズル、海ニ近キ處ニ生ズルモノヲたうおほばこト云ヒP. japonica, Fr. et Sav. ノ學名ヲ有スル。

(二) 牛遺、爾雅ニハ馮舄トアリ。

(三) 幽州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

(四) 直キトハ直線ニ並列シテ生ズルヲ云フ、如此生育ノ有樣ニ因リ名ヲ異ニスルハ非ナリトイフ意ナラン。

(五) 眞定ハ紫菀ノ註

ヲ見ヨ。
(六)開州ハ唐ニ置ク、今ノ四川省夔州府開縣ソノ舊治ナリ。
(七)江湖ハ江西、湖南兩省。
(八)淮甸ハ瞿麥ノ註ヲ見ヨ。
(九)近汴ハ汴京ノ附近、芳草類香薷ノ汴洛ノ註參照。

謬說だ。
○恭曰く、今は(六)開州に出るものが勝れてゐる。
○頌曰く、今は(七)江湖、(八)淮甸、(九)近汴、北地の處處にある。春初に苗が生え、葉は匙のやうな形で地に布き、幾年かの宿いものは長さ一尺餘にもなり、中央から數本の莖が抽き出て鼠尾のやうな長い穗になる。花は甚だ細密で青色に微赤を帶び、實は葶藶のやうで赤黒い。今は一般に五月苗を採り、七月、八月實を採る。人家の庭や畑に或は種ゑるもあつて、蜀地方では尤も珍重してゐる。北方では根を採つて日光で乾し、紫菀として賣つてゐるが、甚だ誤つた用ゐ方だ。陸機は『嫩苗を茹へば大いに滑かなものだ』といつたが、今では一向に食ふものはない。

〔車　前〕

○時珍曰く、王旻の山居錄に、車前を種ゑ、その苗を摘み取つて食ふ方法が書いてあるほどで、昔は蔬にして常食としたものだ。今でも邊鄙の地の者はやはり採つて

食ふ。

子　[修治]　時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、水で淘り洗ひ、泥沙を去つて晒し乾す。湯液に入れるには炒つて用ゐ、丸散に入れるには酒に一夜浸し、蒸熟して研り爛したものを餅にし、それを晒し乾し焙じ研つて用ゐる。

[一〇][氣味]　【甘し、寒にして毒なし】　別錄に曰く、鹹し。權曰く、甘し、平なり。大明曰く、常山が使となる。[主治]　【氣癃に痛を止め、水道、小便を利し、濕痺を除く。久しく服すれば、身體を輕くし、老衰を防ぐ】（本經）【男子の傷中、婦人の淋瀝で食欲不進のもの。肺を養ひ、陰を強くし、精を益し、子を儲けしめ、目を明かにし、[一一]赤痛を療ず】（別錄）【[一二]風毒、肝中の風熱毒、風が眼を衝いたために起る赤痛、障翳、腦痛、涙出を去り、丹石の毒を壓し、心胸の煩熱を去る】（甄權）【肝を養ふ】（蕭炳）【婦人の難産を安全に分娩せしめる】（陸機）【小腸の熱を導き、暑濕瀉痢を止める】（時珍）

[發明]　弘景曰く、車前子は性冷にして利するものだ。仙經でも、人の身體を輕くして岸谷を跳び越え。老衰せず、長生するものとしてこれを服餌する。

(一〇)木村(康)曰ク、おほばこハ全草中ニアウクビン(配糖體)ヲ含有ス(一)。又プランタギントイフ配糖體ヲ分離セリトイフ報アリ(二)。種子ハ油脂(一〇%)、(三)多量ノ粘液ノ他プランテノール酸、琥珀酸、アデニン、ショリン等ヲ含有ス(四)。

(一一)宿谷舜英――富業誌大・一三、業誌、大・一一(四九〇)一一六。

(一二)高橋統閭――岡醫大・一一(三八五)五九。

頌曰く、車前子は最も多く藥に入れるものだ。駐景丸と稱し、車前、兎絲二物を蜜で丸にして飲み込む方は、古今の奇方となつてゐる。

好古曰く、車前子は、能く小便を利するが氣を走しない。功力は茯苓と同様だ。

時珍曰く、按ずるに、神仙服食經に『車前、一名地衣は雷の精であつて、これを服すれば形化する、八月採收するものだ』とあるが、現に車前は五月には子が已に老いるものだ。然るに七八月に採るとあるは、土地、氣候の異ふためであらう。しかし唐の張籍の詩に『開州(一)午月車前子。作ㇾ藥人皆道ㇾ有ㇾ神。慚愧文君憐ㇾ病眼一。三千里外寄閑人二』とある。これで觀れば、やはり五月開州で採つたものが良いといふことになり、又、この草が眼病を治する功力のあるものだといふことも窺ひ得る。概してこれを藥に入れて服食するには、他の藥を佐とすることになつてゐるので、六味地黄丸に澤瀉を用ゐるやうにするがよいのである。單用しては甚だ過度に滑するものだから、恐らく久しく服すべきものではない。ところが歐陽公が嘗て暴しく下痢病に罹つたとき、國手大家も治療し得なかつたが、夫人が商人から買つて進めた一帖の藥で癒えた。特にその方を調べて見ると、それは『車前一味を末に

(三) W. P. 711; U. S. D. 155; A. J. P. 1886 (58) 418; 1898 (70) 189.

(四) 緒方章、西大路隆憲——藥誌・大・一三、(五一四) 一〇四〇。

【藥理】高橋氏ノ實驗ニヨレバ、プランタギンハ呼吸中樞ニ作用シ、呼吸運動ヲ深大且ツ緩漫ナラシメ、且ツ著シキ鎮咳作用ヲ有シ、又分泌旺盛ヲ亢奮セシメ、氣管及ビ氣管支ノ粘液消化液ノ分泌ヲ増加ストイノ、血液ノ溶解作用ハ無シ。

(一) 赤痛ハ目ノ疾患シテ痛ムモノヲ云フナラン。

(二) 風塗ハ囊状腹腫[illegible]

(三) [illegible]本草ニハ午ヲ五ニ作ル。

（一四）穀藏下恐クハ脱字アラン。

し、米飲で二錢匕を服す』といふのであつた。この藥は水道を利するが氣を動ぜぬ。水道が利すれば淸、濁が分れて（一四）穀藏が自から止むのである。

附方　舊七、新五。【小便血淋】痛むには、車前子を晒し乾して末にし、二錢づつを車前葉の煎湯で服す。（普濟方）【石淋の痛むもの】車前子二升を絹袋に盛り、水八升で三升に煮取つて服す。須臾にして石が下る。（肘後方）【老人の淋病】身體熱甚だしきには、車前子五合を綿に裹んで煮た汁に、靑粱米四合を入れて粥に煮て食ふ。常服すれば目を明かにする。（壽親養老書）【妊婦の熱淋】車前子五兩、葵根を切つて一升、水五升を一升半に煎じ、三回に分服して利するを度とする。（梅師方）【胎を滑し、分娩を容易にする】車前子を末にして方寸匕を酒で服す。酒を飮めぬものは水で調へて服す。詩に『芣苢芣苢』とあつて、能く婦人をして子有るを樂ましめるといふことで、陸機の注に『婦人の產難を治す』とあるその意味だ。（婦人良方）【橫產で分身せぬもの】車前子末二錢を酒で服す。（子母祕錄）【陰冷悶疼】漸次に冷疼が囊の內部に入つて腫滿するものは死に至る。車前子末方寸匕を飮で服す。一日二回。（千金方）【癮疹の腹に入るもの】身體腫れ、舌强ばるには、車前子末をまぶすがよ

し。(千金方)【陰下の痒痛】車前子の煮汁で頻りに洗ふ。(外臺秘要)【内障の久患】車前子、乾地黄、麥門冬等分を末にし、蜜で梧子大の丸にして服す。屢々實驗上有效であつた。(聖惠方)【虚を補し目を明かにする】駐景丸——肝、腎倶に虚し、眼昏して黒花を見、或は障翳を生じ、風に當つて涙の出るものを治す。久しく服すれば、肝、腎を補し、目の力を增す。車前子、熟地黄を酒で蒸し焙じて各三兩、兎絲子を酒に浸して五兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを溫酒で服す。(和劑局方)【風熱目暗】濇痛するには、車前子、宣州黄連各一兩を末にし、一日二回、食後に一錢を溫酒で服す。(聖惠方)

草 及び根 [修治] 斆曰く、凡そこれを用ゐるには、一株に葉が九枚あつて中に蕊があり、莖の長さ一尺二寸ほどのものがよく、蕊、葉、根全部で土を去つて重量(一五)一鎰あるものならば藥力が完全だ。藥を使ふときは、蕊、莖を使つてはならぬ。細かに剉み、新しい瓦の上に攤げて乾して用ゐる。

[氣味]【甘し、寒にして毒なし】土宿眞君曰く、硫黄を伏し、草砂を結し、五礬、粉霜を伏し得る。[主治]【金瘡に血を止め、衄血、瘀血、血瘕、下血、小

(一五) 一鎰は二十四兩

便赤を止め、煩を止め氣を下し、小蟲を除く』(別錄)『陰𤸇に主效がある』(之方)『葉は泄精の病に主效があり、尿血を治し、よく五臟を補し、目を明かにし、小便を利し、五淋を通ず』(甄權)

［發　明］　弘景曰く、葉の搗汁を服すれば泄精を療ずるに甚だ效驗がある。宗奭曰く、陶氏の説は大なる誤だ。この藥は甘くして滑する。小便を利し、精氣を泄らすものだ。ある者が菜にして頻りに食つたために、小便がしまらなくなり、殆ど危い狀態に陷らんとした實例がある。

［附　方］　舊四、新七。『小便不通』車前草一斤、水三升を一升半に煎じ、三回に分服する。ある方では冬瓜汁を入れ、ある方では桑葉汁を入れる。(百一方)『初生兒の尿澀』通ぜぬには、車前の搗汁に蜜少量を入れて灌ぐ。(全幼心鑑)『小便尿血』車前の搗汁五合を空心に服す。(外臺秘要)『鼻衄の止まぬもの』生車前葉の搗汁を飮むが甚だ善し。(圖經本草)『金瘡出血』車前葉を搗いて傅ける。(千金方)『熱痢の止まぬもの』車前葉の搗(一六)汁に蜜一合を入れ、煎じて溫服する。(聖惠方)『産後の血滲』血が大、小腸に滲入するには、車前草汁一升に蜜一合を入れて和し煎じ、一沸して二

(一六)大觀ニ汁下ニ一盞ノ二字アリ。

回に分服する。（崔氏方）【濕氣腰痛】豎墓草を根共七株、葱白を鬚共七株、棗七箇を酒一瓶で煮て常服する。終身發らない。（簡便方）【喉痺乳蛾】豎墓衣、鳳尾草を擂り爛らし、酒で煮た霜梅肉各少量を入れて再び研り、汁を絞つて鵞翎で患部に刷く。手に隨つて痰を吐し、直ちに引くものだ。（趙溍養痾漫筆）【目赤で痛むもの】車前草の自然汁で朴硝末を調へ、就寢時に眼胞上に塗つて翌朝洗ひ去る。○小兒の目痛には車前草汁に竹瀝を和して點ける。（聖濟總錄）【目中の微翳】車前葉、枸杞葉等分を手で揉んで汁を出し、桑の葉で二重に裹んで一夜陰暗の場所に懸け、その桑葉を破つて汁を取つて點ける。三五回を過ぎずして效がある。（十便良方）

(一)狗舌草（唐本草）

和名 さはをぐるま
學名 Senecio campestris, L. var. subdentatus, Maxim.
科名 きく科（菊科）

［狗舌草］

【集解】○恭曰く、狗舌は溝、瀆などの濕地に生える叢生の草で、葉は車前に似てゐるが文理はない。莖が抽き出て黄白色の花を開く。四月、五月に莖を採つて暴乾

（一）牧野曰フ、集解ノ恭ノ説ハ能クさはをぐるまト吻合ス一種乾地ニ生ズルモノハ即チSenecio campestris, L.デ和名ヲをかをぐるまト稱スル、植物名實圖考卷ノ十四ノ狗舌草ノ圖ハ粗圖デハアルガ、此モをかをぐるまヲ描イタモノデアルト思フ。

する。

(三)氣味　【苦し、寒にして小毒あり】　主治　【蠱疥、瘙瘡の小蟲を殺す。末にし和して塗れば直ちに癒える】(蘇恭)

(一)馬鞭草　(別錄下品)

和名　くまつづら
學名　Verbena officinalis, L.
科名　くまつづら

校正　圖經の龍牙草を併せ入る。

釋名　龍牙草(圖經)　鳳頸草　恭曰く、穗が鞭の鞘に似てゐるから馬鞭と名けたのだ。藏器曰く、この說明は事實に近くない。これは節に紫の花が咲いて馬鞭のやうだといふ意味だ。

時珍曰く、龍牙、鳳頸はいづれも穗に因んで名けたものだ。蘇頌の圖經には、外類の部に龍牙を重出してあるが、今はこの一條中に併記する。又、現に方士が諸種の草に妄りに樣樣の名稱をつけるので、龍牙なる名稱も甚だ混亂されてゐるが、それは信憑するに足らない。

(三)木村(康)曰ク、さはたぐるまニ就テノ報文ハナイガ Senecio 屬ニハイヌリンセネシオ酸、セネシン酸或ハアルカロイド類等ノ成分報告セラル。W. P. 783—4; U.S.D. 1602.

(一)牧野曰フ、諸州野外ニ見ル雜草デ殊ニ海ニ近キ地ニ多イ。

龍牙草ハ此處ニハ馬鞭草ニ合セテアレドモ、是レハ別ノ草デきんみづひきト云フモノデアル。植物名實圖考卷ノ十二ニ其圖ガアルノデ能ク判カル、又、救荒本草卷ノ七ニハ龍芽草トシテ又其圖ガアル、即チ山野ニ多キ宿根草デいばら科(薔薇

集解　弘景曰く、村落に甚だ多い。莖は細辛に似て、花は紫(二)色、微に蓬蒿に似てゐる。

恭曰く、(三)葉は狼牙、及び茺蔚に似たもので、三四本の穗が抽き出る。花は紫だ。車前の穗に似て鞭鞘のやうなものだ。全然蓬蒿には似てゐない。

保昇曰く、花は白色だ。七月、八月に苗、葉を採り、日光で乾して用ゐる。

〔馬鞭草〕
—龍牙—

頌曰く、今は(四)衡山、(五)廬山、(六)江淮の州郡にいづれもある。苗は益母に類して莖が圓く、高さ二三尺のものだ。又曰く、龍牙草は(七)施州に生ずる。高さ二尺ばかり、春、夏に苗、葉があり、秋、冬になると枯れる。根を採つて洗淨して用ゐるものだ。

時珍曰く、馬鞭は低地に甚だ多い。春季中に苗が生え、莖は四角、葉は益母に似て對生する。夏、秋に穗になつた細かい紫の花を開き、車前の穗のやうだ。その子

科）ニ屬シ Agrimonia Eupatoria, L. ノ學名ヲ有スル。
(二) 大觀ニ色ノ下ニ葉字アリ。
(三) 大觀ニ葉ヲ苗ニ作ル。
(四) 衡山ハ石部砒石ノ註ヲ見ヨ。
(五) 廬山ハ石部菩薩石ノ註ヲ見ヨ。
(六) 江淮ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。
(七) 施州ハ山草類都管草ノ註ヲ見ヨ。

は蓬蒿子のやうで細かく、根は白くして小さい。陶弘景が『（八）花は蓬蒿に似てゐる』といひ、韓保昇が『花は白色だ』といひ、蘇恭が『莖は圓い』といつてゐるが、いづれも誤だ。

苗葉（九）【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】（保昇）大明曰く、辛し、涼にして毒なし。權曰く、苦し、毒あり。丹砂、硫黄を伏す。【主治】【下部の䘌瘡】（別錄）【癥瘕、血瘕、久瘧】（權）【血を破り、蟲を殺すには、擣き爛らして汁を煎じ取り、飴のやうに熬つて一匕づつを空心に酒で服す】（藏器）【婦人の血氣、肚脹、月經不順を治し、月經を通ずる】（大明）【金瘡を治し、血を行らし、血を活かす】（震亨）【擣いて癰腫、及び蠼螋尿瘡、男子の陰腫に塗る】（時珍）

【附方】舊六、新十。【瘧痰寒熱】馬鞭草の搗汁五合、酒二合を二回に分服する。（千金方）【鼓脹煩渇】身體乾き、黑瘦するには、馬鞭草を細かに剉み、火氣に當てぬやうにして曝乾し、酒、或は水と共に味の出るまで煮て、滓を去つて溫服する。六月中旬の雷鳴時に採つたものが有效だ。（衞生易簡方）【大腹水腫】馬鞭草、鼠尾草各十斤、水一石を五斗に煮取つて滓を去り、再び煎じて粘ばるやうにし、（一〇）粉を和し

（八）弘景ハ葉蓬蒿ニ似ルト云ツテ居リ、花トハ云ツテ居ラヌ。

（九）木村（康）曰ク、全草中ニベルベナリン（結晶性配糖體）ヲ含有ス。L. Bourdier : Chem Ztg. 19. 8, April. 11. W. P 648. 藥誌、四一（三一六）五九三。

（一〇）粉ハ米粉ノコトナラン。

て大豆大の丸にし、二三丸乃至四五丸づつを服すれば神效がある。（肘後方）【男子の陰腫】大さ一升ほども實てたやうに腫れて痛み、手當の方法なきには、馬鞭草を搗いて塗る。（集驗方）【婦人の疝痛】小腸氣と名ける。馬鞭草一兩を酒で煎沸して服し、湯にして身體を浴し、汗を取るが甚だ妙である。（纂要奇方）【月經閉止】瘕塊を結成し、肋が脹大して死せんとするには、馬鞭草の根、苗五斤を細かに剉み、水五斗で一斗に煎じて滓を去り、熬つて膏にし、一日二回、半匕づつを熱酒に溶かして服す。（聖惠方）【酒積下血】馬鞭草灰四錢、白芷灰一錢を蒸餅で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。（摘玄方）【魚肉癥瘕】凡そ魚膾、及び生肉を食ひ、それが胸膈に在つて消化せず、ために作つた癥瘕には、馬鞭草の搗汁一升を飮めば消する。（千金方）【馬喉痺風】頰まで躁腫し、數ば吐（一）血するには、馬鞭草一握を風に當てぬやうにして兩端を截り去り、その搗汁を飮むがよし。（千金方）【乳癰腫痛】馬鞭草一握、酒一椀、生薑一塊を擂つてその汁を服し、渣を傅ける。（衛生易簡方）【白癩風瘡】馬鞭草を末にし、一日三回、一錢づつを食前に荊芥薄荷湯で服す。鐵器を忌む。（太平聖惠方）【（二）人疥、馬疥】馬鞭草を鐵器に觸れずに搗いた自然汁半盞を飮む。繼續

（一）大觀ニ血ヲ氣ニ作ル。

（二）人疥馬疥ハ人ヤ馬ニ發スル疥癬ノコトナラン。

して服すれば、十日間以内で癒え、神效がある（重炳集驗方）【赤、白下痢】龍牙草五錢、陳茶一撮を水で煎じて服す。神效がある。（醫方摘要）【發背癰毒】痛み忍び難きには、龍牙草を搗いて汁を飲み、滓を患部に傅ける。（集簡方）【楊梅惡瘡】馬鞭草の煎湯で先づ薰じ後に洗ふ。氣が滲み透れば快く感じ、痛腫が隨つて減ずる。（陳嘉謨本草蒙筌）

根　氣味　【辛く澁し、溫にして毒なし】　主治　【赤、白下痢の初期には、焙じ搗き篩つて末にし、一錢匕づつを米飲で服す。忌むものなし】（蘇頌）

蛇含（一）（本經下品）

和名　なへびいちご
學名　Potentilla Kleiniana, Wight et Arn.
科名　いばら科（薔薇科）

校正　圖經の紫背龍牙を併せ入る。

釋名　**蛇銜**（本經）　**威蛇**（大明）　**小龍牙**（綱目）　**紫背龍牙**　○恭曰く、陶氏の本草に蛇合と書いてあるが、合の字は含の字の誤だ。含と銜とは同意義であつて、古本草にはさうも書いてある。

（一）牧野曰フ、姑ク先輩ノ見ニ従フテ蛇含ヲなへびいちごトシテ置ク、植物名實圖考巻ノ十一ノ圖略ホ其形狀ヲ示シテ居ル。

(二)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)興州ハ今ノ甘肅省寧夏府ノ地ナリ。

時珍曰く、按ずるに、劉敬叔の異苑に『ある農夫が、一匹の蛇が負傷すると、他の一匹の蛇がある草を銜んで來て瘡上に著けたが、數日の後、負傷したその蛇が何處へか往つて了つたのを見て、その草を蛇瘡に傅けて見ると、果して效驗があつたので、それから蛇銜草と呼ぶやうになつたのだ』とある。その葉は龍牙に似て小さく、背面が紫色だ。故に俗に小龍牙、又は紫背龍牙と呼ぶ。蘇頌の圖經には紫背龍牙を重出してあるが、

〔蛇　　含〕

本書は一條に併記した。

集解　別錄に曰く、蛇含は(二)益州の山谷に出る。八月に採つて陰乾する。弘景曰く、蛇銜は處處にある。兩種あつて、いづれも石上に生え、また黃土の上にも生える。藥には細葉で黃花のものを用ふべきものだ。

頌曰く、(三)興州に產するとなつてゐるが、今は近い處にもあつて、土石の上、或は下濕の地に生える。蜀地方の民家では、やはりこれを栽培して蛇を辟ける。一莖に

五葉、或は七葉の兩種がある。八月に根を採つて陰乾する。日華子は『莖、葉倶に用ゐ、五月採收する』といつてある。又曰く、紫背龍牙は蜀地方に生ずるもので、春夏葉が生える。採收に一定の時期はない。

時珍曰く、此に二種とあるは、細葉のものを蛇銜と名け、大葉のものは龍銜と名けるのであるが、龍銜もやはり瘡の膏に入れて用ゐる。

斅曰く、蛇銜は葉のみを用ゐる、晒乾する。火氣に觸れてはならぬ。根、莖は用ゐない。誤つてある葉の尖葉を用ゐてはならぬ。それは覔命草と呼び、味の酸く澀いものだ。誤つて服すれば吐血して止まぬ。その場合には速かに(四)知時子を服すれば解す。

氣味　【苦し、微寒にして毒なし】權曰く、毒あり。頌曰く、紫背龍牙は辛し、寒にして毒なし。

主治　【驚癇の寒熱邪氣に熱を除く。金瘡、疽痔、鼠瘻瘡、頭瘍】(本經)【心腹の邪氣、腹痛、濕痺を療じ、胎を養ひ、小兒を利す】(別錄)【小兒の寒熱丹毒を治す】(甄權)【血を止め、風毒、癰腫、赤眼を傷す。汁を蛇、虺、蜂の毒に傅ける】(大明)【紫背龍牙は一切の蛇毒を解す。咽喉中痛を治するには、含

(四)知時子ハ蘘知子ノ一名ナリト云フ。

み嚥めば效がある』(蘇頌)

【發明】藏器曰く、蛇含は蛇咬を治するもので、現に蛇の口中へこの草を納れると、たとひ人を傷けても害毒を及ぼさぬ。これを栽ゑればやはり蛇がゐなくなる。

頌曰く、古今の丹毒、瘡腫を治する方に通じ用ゐられ、古今錄驗には『赤瘮を治するには、蛇銜草を十分に搗爛して傅ければ瘥える』とある。赤瘮は冷濕が肌中を搏つに由つて起るもので、それが甚しければ熱となり、ために赤瘮となつて現はれるものだ。天候が熱すれば劇しく、冷ゆれば減ずるはそのためだ。

時珍曰く、按ずるに、葛洪の抱朴子に『蛇銜膏は、已に切斷された指を續ぐ』とあるが、現に葛洪の肘後方を調べて見るに、蛇銜膏の說明に『癰腫の瘀血、產後の積血、耳目の諸病、牛の領や馬の鞍下の瘡を治するに、蛇銜、大黃、附子、芍藥、大戟、細辛、獨活、黃芩、當歸、莽草、蜀椒各一兩、薤白十四箇を末にして苦酒に一夜漬け、豬膏二斤を入れて(五)七星火上で煎沸し、膏にして取り收め、一彈丸づつを溫酒で服し、日每に再服する。病の外部に在るには摩つて傅け、耳の中に在るには綿で裹んで塞ぎ、目に在るには點ける。また龍銜藤一兩を入れたものをば龍銜膏と

(五)按ズルニ七星下數字ヲ脫スルナラン。

名ける』とある。所謂、斷れた指を繼ぐといふはこの膏のことかも知れない。

附方　舊三、新一。【產後の瀉痢】小龍牙根一握を濃く煎じて服す。甚だ效がある。卽ち蛇含のことだ。(斗門方)【金瘡出血】蛇含草を搗いて傅ける。(肘後方)【身體面部の惡癬】紫背草に生礬を入れ、研つて二三回傅ければ根を斷つ。(直指方)【蜈蚣、蠍の螫傷】蛇銜を挼んで傅ける。(古今錄驗)

(一)女青 (本經下品)

和名　ひめいよかづら(蘿摩に似たるといふもの)
學名　Cynanchum sibiricum, R. Br.
科名　ががいも科(蘿摩科)

釋名　**雀瓢**(本經)

集解　別錄に曰く、女青は蛇銜の根である。(二)朱厓に生ずる。八月に採つて陰乾する。弘景曰く、これが蛇銜の根とすれば、朱厓のみに生ずると限るべき筈はない。世間一般に用ゐるものは草の葉だから、別の一植物で、蛇含ではないと思ふが、正確には斷定し兼ねる。が、方術に『この物の(三)屑一兩を帶びれば疫癘がその身を犯さぬ。それには眞物を撰ばねばならぬ』とある。又、今の藥種商の用ゐる一

(一)牧野曰フ、女青ニ二ツアツテ其一ハ上ノ蛇含ノ根だト謂ハレテ居ル、今一ハ下ノ植物ト思フ、救荒本草卷ノ七ニハ地梢瓜ノ名デ出テ居ル然シ是レハ藤本デハナイが能ク伸長シタモノハ莖がヒヨロヒヨロシテ稍ヤ蔓ノヤウニナツテ居ル、サレバ我が日本ニハ無イ草デ我がいよかづらト同屬ノモノデア

ル、本草綱目啓蒙デハ女青ノ藤本ノ方ヲあかね科（茜草科）ノへくそかづらニ充テテアルガ穩當デハナイ。

（二）朱匪ハ石部扁青ノ註ヲ見ヨ。

（三）大觀ニ屑字アルニ據ル。

種は、根の形狀が續斷のやうで、莖、葉は至つて苦い。これが荊州產の女青根だといふことだ。

○恭曰く、この草は卽ち雀瓢である。平澤に生ずるもので、葉は蘿摩に似て兩兩相對し、子は瓢の形に似て大さ棗ほどのものだ。故に雀瓢と名ける。根は白微に似て、莖、葉は共に臭い。蛇銜そのものとは全然類しない。又、別錄に『葉は嫩い時は蘿摩に似て正しく圓く、莖は太く、實は黑く、莖、葉の汁は黃白色だ』とあるも、やはり右の說明のものに相似てゐる。これが蛇銜の根だとすれば、苗は益州に生じ、根は朱匪に在り、根と苗と相去ること萬里餘といふ滑稽な話になる。蘿摩の葉も女青に似てるので、やはり雀瓢と呼ばれてゐる。

○○藏器曰く、蘿摩は白環藤のこと、雀瓢は女青のことで、この二物は區別が付かぬほど相似てゐるが、事實は同一植物でない。

○機曰く、蘿摩とは子に對する稱呼、女青とは根に對する稱呼、蛇銜とは苗に對する稱呼だが、この三者は氣味、功用に於いて大いに異るところがある。諸家の註說は、それ等のものが齊しく雀瓢と呼ばれるところから、同一の植物だらうと疑ひ、

又、産地がそれぞれ州郡を異にするところから、また二種の植物だらうと疑つてゐるのだが、本草に明かに『女青は蛇銜の根なり』と斷言してある以上、根と苗の産地が異つたところが、それは疑問とすべき理由にはなるまい。蘼蕪と芎藭の如き、産地が異ふからといつて二種の植物といはれようか。赤箭と徐長卿の如き、共に鬼督郵なる名稱を呼ばれてゐるが、それ故に合して同一植物だとは云はれまい。

時珍曰く、女青には二種あつて、一は(四)藤生のものだ。蘇恭のいふ蘿摩に似たものがそれである。一は草生のもの、卽ち蛇銜の根であつて、蛇銜にも大、小の二種あり、葉の細いものは蛇銜で、苗、莖を用ゐる。葉の大なるものは龍銜で、根を用ゐる。それ故に、王燾の外臺祕要の龍銜膏は龍銜根を煎膏したもので、癰腫、金瘡を治するとある。卽ちこの女青のことだ。陳藏器が『女青と蘿摩は區別し兼ねる』といひ、張揖の廣雅に『女青は葛類だ』とあるはいづれも藤生の女青を指したのだ。此にいふ女青を指したのではない。別錄に、明かに『女青は蛇銜の根なり』と斷じた一言が根據とすべきものである。既往の諸家が、朱厓に生ずるとあるただ一句に抗泥して疑惑を抱いたが、それは甚だ感心しない。地方の言傳ひにはそれぞれ同じ

(四)藤生ハ藤蔓莖ヲ有スルモノ。

からぬ點のあるものだ。況やそれ等の疑惑の論者は、女青に兩種あることをさへ承知してゐなかつたのだ。又、(五)羅浮山記には『この山に男青といふがある、女青に似たものだ』とあるが、これは草生のものか、或は藤生のものか判然しない。

根 [氣味] 【辛し、平にして毒あり】 權曰く、苦し、毒なし。蛇銜が使となる。[主治] 【蠱毒。邪惡の氣を逐ひ、鬼、溫瘧を殺し、不祥を辟ける】(本經)

[附方] 舊二、新一。【頓死】女青を屑に搗いて一錢を咽中に入れ、水、或は酒で送下すれば立ろに活きる。(南岳魏夫人內傳) 【吐下急死】及び大人、小兒の突然腹皮が青、黑、赤色となり、呼吸不能となりたるには、急に女青末を口中に入れて酒で送下する。(子母祕錄) 【瘟疫の辟禳】正月上寅の日に女青を搗いて末にし、三角の紅絹袋に入れて帳中に懸ける。大いに吉し。(肘後方)

(一)鼠尾草 (別錄下品)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

[釋名] 葝 音は勍(ケイ)である。山陵翹(呉普) 烏草(拾遺) 水青(拾遺)

(五)羅浮山ハ廣東省増城縣ニ在リ。

(一)牧野曰フ、鼠尾草ハ救荒本草ニハ鼠菊ト出テ居ル、其草狀頗ル能クくまつづら即チ馬鞭草ニ似テ居ルトイフヨリモ同

物デアルト言ヒタイ程同ジ形狀チ呈シテ居ル、我ガ邦ノ先雅ハ此鼠尾草チあきのたむらさう（Salvia chinensis Benth.）ナドニ充テ居レドモソレハ中ツテ居ナイ。

（二）大觀ニ赤白ノ下ニ二ノ字アルニ據ル。

時珍曰く、鼠尾とは穗の形を形容した名稱で、爾雅に『葝は鼠尾なり』とある。黑色に物を染め得るところから烏草と名ける。また水靑といふ。蘇頌の圖經に所謂、鼠尾、一名陵時とあるは陵翹の誤だ。

【集解】別錄に曰く、鼠尾は平澤中に生ずる。四月葉を採り、七月花を採つて陰乾する。弘景曰く、田野に甚だ多い。世間ではこれを採つて液にし、黑染の染料にする。

〔鼠尾草〕

保昇曰く、所在の下濕の地にあるものだが、ただ黔中地方では採つて藥にする。葉は蒿のやうで、莖端に夏車前のやうな穗が四五本生え、花に（二）赤、白の二種がある。

藏器曰く、花は紫のもので、莖、葉倶に黑染の染料になる。

花　葉　【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】藏器曰く、平なり。【主治】【鼠瘻寒熱、下痢膿血の止まぬもの。白花のものは白下に主效があり、赤花のもの

は赤下に主效がある】(別錄)【瘧疾、水蠱に主效がある】(時珍)

【發明】弘景曰く、古今に、痢を治療するに多くこれを用ゐ、丸にし得るほど濃く煮て服し、或は飴のやうに煎じて服した。今も一般に用ゐて飲にする。或は末にして服してもよし。一日に三服する。

【附方】舊一、新三。【大腹水蠱】方は馬鞭草の條を見よ。【久しきに亙る休息痢】或は止み、或は發するには、鼠尾草の花を搗いて末にし、飲で一錢を服す。(聖惠方)【連年の下血】鼠尾草、地楡二兩、水二升を一升に煮て頓服する。二十年の久しき者も再服に過ぎずして效がある。末にし飲で服するもよし。(千金方)【反花惡瘡】內側に飯粒のやうな惡肉を生じ、破ればまた生じて反つて外側へ出るものには、鼠尾草根を切つて豬脂と共に搗いて傅ける。(聖濟總錄)

(一)狼把草(拾遺)

和名　たうこぎ(?)
學名　Bidens tripartita, L. (?)
科名　きく科(菊科)

【校正】拾遺の郎耶草を併せ入る。

(一)牧野曰フ、我邦ノ先輩此狼把草ヲたうこぎニ充テテ居レドモ信ヲ措キ難イ、即チ集解ノ文ヲ熟讀シテモ果シテ其レガ

たうこぎニ當ルカ否カ充分ニ呑ミ込メヌノデアル。

(二)鴈齒ハ鋸齒ノコト。

【釋名】郎耶草 時珍曰く、この草は即ち陳藏器本草の郎耶草であつて、閩地方では爺(オヤヂ)を郎罷といふから、狼把は郎罷と書くが正しいのだといふが、それで意味は通じる。又、方士の言に『此の草は即ち鼠尾草だ』といひ、功用もやはり近いのだが、的確な據があるわけではない。

【集解】藏器曰く、狼把草は山道の傍に生ずるもので、秋穗子といづれも物を黑色に染め得る。又曰く、郎耶草は山澤の間に生ずる。高さ三四尺、葉に(二)鴈齒があつて鬼針の苗のやうだ。鬼針とは鬼釵のことで、その葉は椏があつて釵脚のやうな形狀だ。

〔狼把草〕

禹錫曰く、狼把草は近道に出る。古方には用ゐられなかつた。ただ陳藏器だけが功用に就いて言つてゐるが、それも詳かではない。文宗皇帝の御書に『この草は、主として血痢を療ずるに甚だ至精なものだ』と記されてあるから、謹んでそれに據つて本草圖經外類の篇首に掲載する。

（三）木村（康）曰ク、文獻、上野金太郎―藥誌明、三七（二六五）一八三。高橋増次郎―藥誌、明、三七（二七三）九〇二。
U. S. D. 488.

（一）牧野曰フ、狗尾草ハえのころぐさトきんえのころトノ兩者ヲ指シタ名デアル。

（三）［氣味］【苦し、平にして毒なし】［主治］【頭髮を黑くし、老衰せしめぬ。又曰く、郎耶草は、赤、白久痢、小兒の大腹痞滿、丹毒寒熱に主效がある。根、莖を取つて煮汁を服す】（藏器）【狼把草は、男子の血痢に主效があつて、婦人の血痢には效がない。根は積年の疳痢を治す。草二斤を搗いて汁一小升を絞り取り、白麪を雛子半箇ほど入れてむらなく和し、空腹に頓服する。極めて重病のものも三服を過ぎずして效がある。或は苗を取り收め、陰乾して末に擣き、蜜水半盞で一方寸匕を服す】（圖經）【鬚髮を染めるによし。積年の癬で曇天の際に痒く、搔けば黃水を出すものを治するには、擣いて末にして摻る】（時珍）

（一）狗尾草（綱目）

和名　えのころぐさ、并、きんえのころ
學名　Setaria viridis, Beauv. et S. glauca, Beauv
科名　禾本科（禾本科）

［釋名］莠　音は酉（イウ）である。光明草（綱目）　阿羅漢草　時珍曰く、莠とは、草が秀でて實らぬをいふ。故にその文字は秀に從ふのだ。穗の形が狗の尾のやうな形狀だから、俗に形容して狗尾と名けたのだ。その莖は目痛を治するところか

ら、方士は光明草、阿羅漢草といふ。

【集解】時珍曰く、原野や土堺などに多く生える。苗、葉は粟に似て小さく、穗も粟に似て黄白色のものだが、實がない。莖を採つて筒に貯ひ、目痛を治するに用ゐる『莠が苗を亂るを惡む』といふはこの草のことだ。

莖【主治】【疣目には、髮毛でその疣目を貫いた後へ、これを挿し入れて置けば乾いて無くなる。凡そ赤眼、拳毛倒睫には、目瞼を剝ぎ反してこの莖一二本で水を蘸ける。惡血を戛去して甚だよし】（時珍）

〔狗尾草〕

(二)鱧腸（唐本草）

和名　たかさぶらう
學名　Eclipta alba, Hassk.
科名　きく科（菊科）

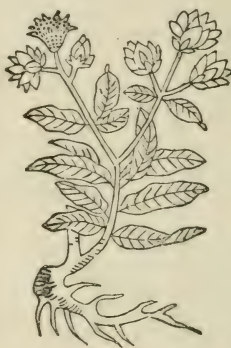
【釋名】蓮子草（唐本）　旱蓮草（圖經）　金陵草（圖經）　墨煙草（綱目）　墨頭草（綱目）　墨菜（綱目）　猢孫頭（必用）　豬牙草　時珍曰く、鱧とは烏魚のことで、そ

(一)牧野曰フ、普通ノ雜草デ諸處ニ生ズル、莖ノ立ツモノト臥スモノトガアルガ其レハタダ生エル場處ノ狀況ニヨツテ異ナルノミデ、敢テ別種ノモノデハナイ。

の腸も黒い魚だ。この草は莖が柔かく、斷てば墨のやうな汁が出るところからかく名けたのだ。俗に墨菜と呼ぶがこの草だ。實が細くして頗る蓮房の形狀に似たところから、その名稱に蓮を付けて呼ばれるのだ。

集解 ○恭曰く、鱧腸は下濕の地に生ずるもので、所在の溝、濠などに多い。苗は旋覆に似たものだ。二月、八月に採つて陰乾する。

○頌曰く、處處にあるが、南方に就中多い。この草には二種あつて、一種は、葉が柳に似て光澤があり、莖は馬齒莧に似て高さ一二尺、花は細くして白く、實は

〔鱧腸〕
―旱蓮―

小さい蓮房のやうだ。蘇恭のいふ『旋覆に似たもの』とはこのものだ。また一種は、苗梗が枯瘦し、頗る蓮花に似て黄色だ。實もやはり房になつて圓い。南方地方でいふ連翹だ。二種共に、その苗を折れば汁が出て、須臾にして黑くなる。俗に旱蓮子といひ、また金陵草ともいふ。

時珍曰く、旱蓮に二種ある。一種は苗が旋覆に似て花は白く細い。それが鱧腸だ。一種は、花が黄紫色で蓮房のやうな房を結ぶ。これは(二)小連翹だ。爐火家でも用ゐる。連翹の條參照。

〔小連翹旱蓮〕

草

氣味　【甘く酸し、平にして毒なし】

主治　【血痢、鍼灸瘡が發洪して血の止まぬものに傅ければ立ろに止まる。汁を眉髮に塗れば發生も速く、且つ毛が多くなる】(唐本)【髭髮を黑くし、腎陰を益す】(時珍)【血を止め、膿を排し、小腸を通ずる。一切の瘡、幷に(三)蠶瘍に傅ける】(大明)【膏にして鼻中に點ければ腦の力を益す】(蕭炳)

附方　舊一、新九。

【金陵煎】髭髮を益し、白きを變じて黑くする。金陵草一秤——六月以後に採收して青嫩の泥土の著かぬものを揀り取る——を洗はずに黃葉を摘み去り、搗き爛らして新しい布で汁を絞り取り、紗絹で濾過して(四)通油器に入れ、鉢に盛つて五日間日中に煎じ、又、生薑一斤の絞汁と白蜜一斤を合和して日中に煎

(二)牧野曰フ、小連翹ハ本草綱目啓蒙ニ云ヘルヤウニおとぎりさう(Hypericum erectum, Thunb.)デアラウ。

(三)蠶瘍ハ蝎瘡ノ類ナルベシ、一種膿窠瘡ナリ。

(四)通油器詳ナラズ、油鍋ノ類ナラン。

（五）大觀ニ據リテ旦字ヲ補入ス。

（六）麻姑餅ハ胡麻ノ條ニ出ヅ。

じ、柳木篦で手を休めず攪きまぜながら煎じ、稀餳のやうになつて完成する。それを毎（五）旦及び午後に各一匙づつを溫酒一盞に溶かして服す。若し丸にして用ゐるならば、日中再び煎じて丸になるまで煎じ、梧子大の丸にして三十丸づつを服す。用ゐんとする時に多く合せるが佳いのである。その效甚だ速だ。（孫眞人千金月令方）【鬚を黑くし、齒を固める】攝生妙用方では、七月に旱蓮草を取り、根のまま一斤を無灰酒で洗淨し、青鹽四兩に三晝夜漬け、その汁と共に油鍋中に入れ、炒つて性を存し、研末して日每に牙に擦り、津と共に嚥む。○又ある法では、旱蓮の汁を取り、鹽と共に煉り乾かして研末し、牙に擦る。○奉親養老書では、旱蓮散——髭を黑くし、牙を固める。溫尉の言に『納合相公は、此の方を用ゐて年七十にして鬚髮が白くならなかつた。そこで大いに手を盡して始めて方を得、後に張經に遇つて始めて分量の詳細を傳授したものである。旱蓮草一兩半、（六）麻姑餅三兩、升麻、青鹽各三兩半、訶子を核のまま二十箇、皂角三挺、晩蠶沙二兩を末にし、薄醋麪糊で彈子大の丸にして晒し乾し、泥瓶中に入れて火で煨さ、烟を出し盡して性を存して取り出し、研末して日每に牙に揩る』とある。【偏、正頭痛】鱧腸草の汁を鼻中に滴

らす。(聖濟總錄)【一切の眼疾】瞖膜遮障、腦を涼し、頭痛を治し、よく髮を生ずる。五月五日の朝この藥を合はせる。蓮子草一握、藍葉一握を油一斤と共に浸して四十九日間密封し、就寢時に鐵匙でその藥を點け、頂上を四十九回摩する。久しく繼續するが甚だ佳し。(聖濟總錄)【臂に繫けて瘧を截る】旱蓮草を搥き爛らし、男は左、女は右の(七)寸口の上へ置き、その上を古文錢で押へて帛で縛り付けて置く。良久して小泡が起つものだ。これは天灸と稱する方法で、瘧は直ちに止まる。甚だ有效なものだ。(王執中資生經)【小便尿血】金陵草、一名墨頭草、車前草各等分を杵いて自然汁を取り、空心に三盃づつを服し、癒えれば止める。(醫學正傳)【腸風臟毒】下血して止まぬには、旱蓮子草を瓦の上で焙じて研末し、二錢づつを米飲で服す。(家藏經驗方)【痔漏瘡發】旱蓮草一把を根鬚のまま洗淨し、石臼で泥のやうに擂り、極熱した酒一盞を注ぎ込み、その汁を取つて飲み、滓を患部に傅ける。重きものも三服に過ぎずして平安になる。大僕少卿王鳴鳳は、この病を患つて杖に縋つて漸く歩むほどだつたが、この藥を服して平癒した。屢〻治療上の實驗がある。(劉松石保壽堂方)【疔瘡惡腫】五月五日に旱蓮草を採收し、陰乾して一夜露らして取收め、病ある毎に、一葉

(七) 手首ノ脈ノ搏ツ處。

を嚙んで腫上に貼り、その上を消毒膏で押へる。二三日で疔が脫するものだ。（聖濟總錄）【風牙疼痛】猢猻頭草に鹽少量を入れ、掌の心で揉み擦れば直ちに止まる。（集玄方）

㈠連翹（本經下品）

和名 ともゑさう
學名 Hypericum Ascyron, L.
科名 おとぎりさう科（金絲桃科）

【校正】有名未用、本經の翹根を併せ入る。

【釋名】連（爾雅） 異翹（爾雅） 旱蓮子（藥性） 蘭華（吳普） 三廉（別錄） 根を連軺と名ける、（仲景） 竹根（別錄） 恭曰く、その實が蓮に似て房になり、多くの草の中で㈡翹出するものだからかく名けたのだ。宗奭曰く、連翹も多くの草の中で特に翹出するわけではない。太山の山谷に甚だ多く、果實を拆けば、その子が一枚一枚相竝んで㈢翹のやうだから、それで翹なる名稱が生じたものだらう。

時珍曰く、按ずるに、爾雅に『連は異翹なり』とあるところから見ると、この草本來の名稱は連であるが、また異翹なる別名もあるので、それを合せて世人が連翹

（一）牧野曰フ、連翹ノ根木ノ品ハ蓋シ下ニ記入セルともゑさうナル草本デアラネバナラヌト私ハ考定スル、此品ハ植物名實圖考卷ノ十一ニハ湖南連翹ノ名デ出デ居ル、是ニ由テ觀テモ連翹ガHypericum屬ノモノデアラネバナラヌ事ガ首肯セラルル今日デハひいらぎ科ニ屬スル木本ノ和名れんげう（普通ニ觀賞用トシテ庭園ニ植エラレテアルモノデ）Forsythia suspensa, Vahl. ノ學名ヲ有スルモノヲ此處ノ連翹ニ充テ居レドモ、ソレハ固ヨリ謬リデ是レハ原ト支那デ誤ツタモノデアル、即チ集解ノ文中ニアル椿ノ實ノマダ開カヌモノニ似タトアルモ

と呼んだのだ。連軺(れんせう)は連苕(れんせう)とも書く、これは本經下品の翹根のことだ。唐の蘇恭が本草を纂修するに方(あた)つて、退けて有名未用の部に編入したが、本書では一條中に併記した。旱蓮といふは小翹のことで、一般にこれを鱧腸(れいちやう)といふところから、同じく旱蓮と呼ぶ。

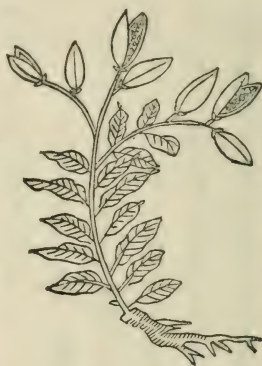
【集解】　別錄に曰く、連翹は太山の山谷に生ずる。八月に採つて陰乾する。弘景曰く、處處にあるもので、今は莖と花、實と共に用ゐる。

恭曰く、この草には、大翹、小翹の兩種あつて、大翹は下濕の地に生え、葉は狹く長く、水蘇のやうだ。花は黃色で風情(ふぜい)がある。子は椿の實のまだ開かぬもののやうで房になる。多くの草に翹出するものだ。小翹は岡、原の上に生え、葉、花、實いづれも大翹に似てゐるが、小さく細かだ。(四)山南(さんなん)地方ではいづれも用ゐるが、現に長安では、ただ大翹の子のみを用ゐて莖、花をば用ゐない。

頌曰く、今は(五)汴京(べんきやう)の附近、及び河中、江寧、潤、淄(し)、澤、兗(えん)、鼎、(六)岳、利の諸州、南康軍、いづれにもある。大、小二種あつて、大翹は下濕の地、或は山岡上に生え、葉は青く狹く長く、楡葉(ゆえふ)、水蘇などに似てゐる。莖は色赤くして高さ三四

ノデ畢竟一ノ僞物デアル、植物名實圖考卷ノ十一ニアル連翹ノ圖ハ想像デ描イタモノト斷ズル、右ノともゑさうガ即チ集解ニアル大翹デ其小翹トアルノハおとぎりさう Hypericum erectum, Thunb. カ或ハ之レニ似タしなおとぎり (H. attenuatum, Choisy.) カデアラウト思フ。木村(康)曰ク、從來漢藥連翹ニれんげうヲ充テ、本邦和漢藥商ハれんげうノ果實ヲ以テ、商品トナセドモ實ハ誤ニシテ、元來ともゑさう或ハ其近緣ノモノナルベク、現ニ其成熟セル蒴果ヲ著ケタル全草ノ商品ヲ支那市場ニ於テ見ル。白井曰ク、牧野、木

村雨君共ニ連翹ニれんげうヲ充ツルハ誤デアルト斷言セラレテ居ルハ、陶弘景ノ説ニ莖ト花實ト共ニ用ヰルトアルニ據ラレタルモノナレドモ唐ノ蘇恭ノ説ニ大翹小翹ノ二種ヲ擧ゲ、宋ノ蘇頌モ大小ノ二種アル事ヲ云ヒ、大翹ノ方ガ效能ガ多イ事ヲ説イテ居リ、救荒本草ニモ木本ノ圖ガ連翹トシテ出デテ居レバ、强チ誤リト云フベキデハ無イト思フ、現在我邦漢方醫ノ處方ニ用ヰテ數果ヲ收ムルモノハ木本ノモノ、即れんげうノ種子デ決シテおとぎりさうデハ無イ藥材ハ效能ヲ本トスベキモノデ、人命ニ關スルモノデアルカラ、大家ノ説ニ反對

尺、獨莖で梢の間に黃色の花を開く。秋蓮に似て內が房瓣になつた實を結ぶ。根は黃色で蒿根(かうこん)のやうだ。八月房を採る。小翹は岡、原の上に生え、花、葉、實いづれも大翹に似て細かい。南方の地に生ずるものは、葉は狹くして小さく、莖は短くして高さ纔(わづか)に一二尺、花はやはり黃色だ。實の房は黃黑色で、內側に粟粒のやうな黑子を含む。また旱蓮とも呼び、南方では花、葉を用ゐる。現に南方の醫家の説に依ると、連翹には兩種あつて、一種は、まだ開かぬ椿實(ちんじつ)に似て殼が小さく堅い。

〔連翹〕

外部は全く(七)跗蕚(ふがく)がなく、剖(さ)けば中が裂開して甚だ芳馥だ。その實は纔に乾いたときに振れば皆落ちて(八)莖に著いてゐない。一種は(九)菡萏(かんたん)のやうで殼が柔かく、外部に跗蕚があつて抱いてゐるが、裂開線がなく、また香氣もない。久しく乾いても莖に著いてゐて落ちない。この點が甚だ異つてゐるといふ。現にこの種のものは江南(かうなん)の下澤の間に極めて多い。椿實のやうなものは蜀中から來るのだが、藥用としては

江南のものより勝れてゐる。本草に據れば、やはり蜀中の者勝れりとしてあるが、しかしその莖、葉はまだ實見しない。

(二〇)**氣味**　【苦し、平にして毒なし】元素曰く、性は涼、味は苦、氣味倶に薄い。輕、淸であつて、浮、升であり陽である。手で磨り揉んで用ゐる。好古曰く、陰中の陽であつて、手、足の少陽、手の陽明の經に入り、また手の少陰の經に入る。時珍曰く、微し苦く辛し。

主治　【寒熱鼠瘻、瘰癧、癰腫、惡瘡、癭瘤、結熱、蠱毒】(本經)【白蟲を去る】(別錄)【五淋、小便不通を通利し、心の病の客熱を除く】(甄權)【小腸を通じ、膿を排し、瘡癤を治し、痛を止め、月經を通ずる】(大明)【諸經の血結、氣聚を散じ、腫を消す】(李杲)【心の火を瀉し、脾、胃の濕熱を除く。中部の血證を治するにこれを使とする】(震亨)【耳聾してコンコンジユンジユンたるを治す】(好古)

莖葉　**主治**　【心、肺の積熱】(時珍)

發明　元素曰く、連翹の效用に三種あつて、心の經の客熱を瀉するが一、上焦の諸熱を去るが二、瘡患者の聖藥として用ゐらるるが三である。

スル樣ナレドモ敢テ一言ヲ挾ム次第デアル、紹興校定證類本草書卷ニ五種ノ連翹ヲ採錄セラレテアル中澤州連翹ト記名アルモノ、今日ノ木本連翹ニ近クおとぎりさう、ともゑさうニ似タルモノ見エザルハ不審ナリ。

(二)翹出ノ翹ハ秀デ揚ルノ意ナリ。

(三)相竝プ翹ノ翹ハ婦人ノ一種ノ髮飾ヲイフ。

(四)山南ハ漏盧ノ註ヲ見ヨ。

(一)汴京ハ芳草類薑黃汴都ノ註參照、河中府ハ石部石中黃子ノ註、江寧ハ芳草類當歸ノ註、潤州ハ山草類薺苨ノ註、淄州ハ石部代赭石ノ註、澤州ハ石部不灰木ノ註、兗ハ石部雲母ノ

杲曰く、十二經の瘡藥中には無くてならぬものだ。それは結するものを散ずるが目的である。

好古曰く、手、足の少陽の藥である。瘡瘍、瘤癭、結核を治するに神效があつて、柴胡の功力と同樣だが、ただ氣に對すると血に對するとの相異點で區別する。(一一)鼠粘子と共に用ゐて瘡瘍を治するに特殊な神效がある。

時珍曰く、連翹は、形狀が人の心臟に似て兩片合成し、その中に仁があつて甚だ香しい。乃ち少陰、心の經、厥陰、包絡の氣分の主藥であつて、諸痛癢、瘡瘍はいづれも心の火に屬する。故にこの藥は十二經の瘡の患者の聖藥なると同時に、手、足の少陽、手の陽明の三經の氣分の熱を治す。

附方　舊一、新二。

【瘰癧、結核】連翹、(一二)脂麻等分を末にして時時に食ふ。(簡便方)

【頭上の馬刀瘡】少陽の經に屬する。連翹二斤、瞿麥一斤、大黃三兩、甘草半兩を用ゐ、一兩づつを水一盌半で七分に煎じて食後に熱服し、十餘日後に(一三)臨泣穴に二七壯灸する。六十日で必ず效がある。(張潔古活法機要)

【痔瘡腫痛】連翹の煎湯で熏じ洗ひ、後に綠礬を刀上で飛過して麝香を入れて貼る。(集驗方)

註、鼎州ハ山草類石蒜ノ註、利州ハ金部鉛ノ註、南康軍ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。

(六) 岳州ハ隋ニ置ク今ノ湖南省岳陽縣ハソノ舊治ナリ。

(七) 跗萼ハ果實ノ根本ニアル附屬器。

(八) 莖ハ果實ノ中軸ナラン。

(九) 菡萏ハ蓮花。

(一〇) 木村(康)曰ク、れんげうノ葉ハフイリン若クハ此ニ類似ノ配糖體ヲ含有ス。Eijkman: Rec. 1886(5) 127; W. P. 559.

(一一) 鼠粘子ハ牛蒡ノ種子。

(一二) 脂麻ハ胡麻ノ一名。

(一三) 臨泣ハ頭ノ髪際ヨリ少シ上ニテ、目ヨリ直上ニ中ル位置。

翹根　氣味　【甘し、寒、平にして小毒あり】普曰く、神農、雷公は甘し、毒ありといひ、李當之は苦しといふ。好古曰く、苦し、寒なり。

主治　【熱氣を下し、陰精を益し、顏色を好くし、目を明かにする。久しく服すれば、身體を輕くし、老衰を防ぐ】(本經)【これを蒸して酒病の人に飲ます】(別錄)【傷寒の瘀熱で黄を發せんとするものを治す】(時珍)

發明　本經に曰く、翹根は(一)嵩高の平澤に生ずる。二月、八月に採收する。弘景曰く、醫方の藥には用ゐない。世間でも識らぬものだ。好古曰く、これは連翹の根であつて、能く熱氣を下すものだ。故に、張仲景は、傷寒の瘀熱の裏に在るものを治する麻黄連軺赤小豆湯にこれを用ゐ、その說明に『連翹の根だ』といつてある。

附方　新一。【瘰疬腫毒】連翹の草、及び根各一升を、水一斗六升で煮汁三升を取つて服し、汗を取る。(外臺祕要)

(一)嵩高ハ石部五色石脂ノ註ヲ見ヨ。

(一)牧野曰ク、次條ノ蒴藋ト同一物デアルコト集解ニ說イテアル。

(二)熊耳ハ山名、今ノ河南省盧氏縣ノ南ト同宜陽縣ノ西、陝西省商縣ノ西ニ在リ。

(三)寃句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

(四)大觀ニハ樹字接骨ノ下ニアリ。

(一)陸英（本經下品）

和名 そくづ
學名 Sambucus chinensis, Lindl.
科名 すひかづら科（忍冬科）

釋名 解說は次項を見よ。

集解 別錄に曰く、陸英は(二)熊耳の川谷、及び(三)寃句に生ずる。立秋に採收する。

恭曰く、これは蒴藋のことだ。古方には蒴藋とはなく、ただ陸英といつてある。後世一般人は、それを識らずして漫然と更に蒴藋なる一條を設けたのだ。この草の葉は芹、及び接骨花に似たもので、その三植物はやはり同一類のものだ。故に芹をば水英と呼び、この草をば陸英と呼び、接骨をば木英(四)樹と呼ぶのであつて、この三種の英なる植物は、花、葉いづれも相似てゐる。

〔陸英蒴藋〕

○志曰く、蘇恭は、陸英、蒴藋を一物だといつてゐるが、今詳細に研究して見るに、陸英は、味が苦く、寒にして毒がない。蒴藋は、味が酸く、溫にして毒がある。かやうに同一ならぬ點がある以上、同一種とはいひ難いが、蓋しその類のものには相違ない。

○宗奭曰く、蒴藋と陸英とは、性も味も產地もすべて同一でない。治療上の效力も異ふ。全然異なる二植物なることに斷じて疑ひ無い。

○頌曰く、本草には、陸英の條に『熊耳の川谷、及び寃句に生ずる』とあり、蒴藋の條には生產する地方を記載してない。(五)今は田野に生じ、所在にあつて、春苗が抽出で、莖に節があり、節の間から枝が生え、葉は水芹によく似たものだ。春、夏葉を採り、秋、冬根、莖を採る。陶氏、蘇氏は、いづれも同一物といひ、馬志は、性、味の不同を理由として同一種であるまいと疑つてゐるが、やはり精細なる辨別は付いてゐない。但し、爾雅に『木はこれを華と謂ひ、草はこれを榮と謂ふ。榮せずして實るを秀と謂ひ、榮して實らざるを英と謂ふ』とある。この物には英なる名稱がある以上、當然花を指すものでなければならない。故に本經にも『立秋に採る』

(五) 今字大觀ニ據リ補入ス。

(六)金陵本搾ニ作ル。

(一)牧野曰フ、往往野外ニ見ル宿根ノ大草本デアル、其地下莖ヲ採テ民間藥ニ供スルコトガアル、そくづノ名ハ蒴藋(サクタク)ノ字音カラ來タモノデアルガ又くさたづ或ハ

とあつて、正にこの物の開花期を指してゐる。

時珍曰く、陶氏、蘇氏の本草、甄權の藥性論は、いづれも『陸英、卽ち蒴藋』といつてある。これには必ず根據があるものと思はれる。馬志、寇宗奭はその說を論破したものの、的確な根據があるわけでない。やはりこれは同一物とすべきであらう。根、莖、花、葉を區別して用ゐることは蘇頌のいつた通りである。

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】權曰く、陸英、一名蒴藋。味苦く辛し、小毒あり。

【主治】【骨間の諸痺、四肢の拘攣、疼酸、膝の寒痛、陰痿、短氣、不足、脚腫】(本經)【よく風毒を(六)將す。脚氣上衝の心煩、悶絕、水氣虛腫、風瘙、皮肌の惡痒には、湯に煎じ、少量の酒を入れて浴するが妙である】(甄權)

(一)蒴藋

音は(二)朔弔(サクテウ)である。(別錄下品)

和名 そくづ
學名 Sambucus chinensis, Lindl.
科名 すひかづら科(忍冬科)

【釋名】 堇草(別錄) 芨(別錄) 接骨草

【集解】 別錄に曰く、蒴藋は田野に生ずる。春、夏葉を採り、秋、冬莖、根を

採る。弘景曰く、田野、村落に甚だ多い。

恭曰く、この草は陸英のことであつて、この一條は餘分なものだ。爾雅に『芨は堇草なり』とあり、郭璞の注に『烏頭の苗だ』とある。三種の堇の別名を調べて見てもこの草はない。別錄にこの草を一名堇草としてあるが、出處が判らない。

宗奭曰く、蒴藋は、花は白く、子は初は青くして綠豆の顆のやうだ。毎朶の大さは盞の面ほどある。また大抵は一二百粒の子を有つもので、十月になれば熟して紅くなる。

時珍曰く、枝毎に五枚の葉がある。解說は陸英の條を參照せよ。

氣味　【酸し、溫にして毒あり】　大明曰く、苦し、涼にして毒なし。

主治　【風瘙癮疹、身痒濕痺。湯にして浴するがよし】(別錄)　【(三)瘰癧、風痺を浴す】(大明)

附方　舊十二、新七。　【手、足の偏風】蒴藋の葉を火で燎いて牀の上へ厚く鋪き、熱い處へ横臥して眠り、冷えればまた換へる。冬期には根を取つて舂き碎き、熬り熱して用ゐる。(外臺祕要)　【風濕冷痺】方は上に同じ。　【寒濕腰痛】方は上に同じ。　【脚氣脛腫】骨の疼くには、蒴藋根を研り碎き、酒、醋共に三分を和し、根(四)

くさにはとこノ名ガアル、昔ハつちひとがたト稱シタ。

(二)音朔弔トアル弔ハ卓デハナキカ、藋ニハテウノ音モアルガ、タクノ音モアル。康熙字典ニハ「又直角切音濯蒴藋藥草」トアル。音テウノ時ハ別ノ意味ノヤウナリ。又、本草綱目只原本ニハ「音朔卓」トアリ、弔ニハナツテ居ナイ。又和名鈔ニハ「蘇敬注云蒴藋。朔濁二音此間音曽久止久」トアリ。此處ニハタクトスル方宜シキヤウニ思ハル。(牧野)

譯者曰ク、段注說文ニハ「藋堇艸也从艸翟聲。徒弔切」トアリ。支那ノ近代音ニテモ、辭源藋ノ註ニ「第料切音調嘯韻」ト

一分を下して蒸熟し、腫れた部分を封裹すれば一兩日で消す。また不仁をも治癒する。（千金方）【全身の水腫】坐臥し得ぬには、蒴藋根を取り、皮を去つて搗き、汁一合に酒一合を和して煖服する。微し吐き下すものだ。（梅師方）【頭風の痛み】蒴藋根二升を酒二升で煮て服す。汗が出て止まる。（千金方）【頭風旋運】時嫌はず起ち眩みするには、蒴藋、獨活、白石膏各一兩、枳實を炒つて七錢半を用ゐ、三錢づつを酒一盞で六分に煎じて服す。（聖惠方）【産後の血運】心悶、煩熱するには、接骨草、卽ち蒴藋を（五）算子ほどに打ち碎き、一握を水一升で半升に煎じて二回に分服する。或は小便出血する者もこれを服すれば瘥える。（衞生易簡方）【産後の惡露】下り盡きぬには、續骨木二十兩を剉み、水一斗で三升に煮て三回に分服すれば直ちに下る。（千金方）【瘧疾の止まぬもの】蒴藋一大握を（六）赤色になるまで炙つて水で濃く煎じ、發作せんとする直前に一盞を服す。（斗門方）【突然の暴しき癥塊】石のやうに堅く、死せんとする痛みには、蒴藋根一小束を洗淨して細かに擘き、酒二升に三晝夜漬け、一日三回、五合乃至一升を溫服する。若し（七）引き續いて服用するには、熱灰中で溫めて藥味を出して服す。この方は毒がない。已に十六人に用ゐて治效を舉げ、神驗を得た。

アレバ、テウト發音シツツアルモノノ如シ。康熙字典ニ博雅ヲ引イテ「音濯藥草」トアリ、濯モ支那ノ近代音ニテハヤヤ濁ツテテウト發音ス。又、豆字、頭字ノ如キモ、吾邦ニテハトウ、テウ、ツト轉ジツツアレバ、此草ノ和名そくづモ或ハテウノ發音ノ轉ゼルモノニハ非ズヤトモ想像セラル。

（三）蒿ハ農業[illegible]・本草ニ據ル。

（四）一分ノ文字大觀ニ據ル。

（五）算子ハ算木、長サ一寸五分位。

（六）大觀ニ黃ニ作ル。

（七）大觀ニ連用ヲ速用ニ作ル。

藥を服し盡したときは再び作つて用ゐる。(古今錄驗)【堅硬なる癥瘕】盆のやうに腫起して臥寢し得ぬには、萹蓄根白皮一握の搗汁を水に和して服す(千金方)【下部の閉塞】萹蓄根一把の搗汁に水を和し、絞つて滓を去り、壯年者は一升づつを服す。(外臺祕要)【一切の風瘮】萹蓄を煮た湯に少量の酒を入れて塗る。瘥えぬものなし。(梅師方)【小兒の(八)赤遊】上部、下部に遊動し、心臟に至れば死亡する。萹蓄の煎汁で洗ふ。(子母祕錄)【五色丹毒】萹蓄葉を搗いて傅ける。(千金方)【癰腫惡肉】消せぬには、萹蓄灰、石灰の各淋汁を取り、膏のやうに合煎して傅ける。能く惡肉を蝕し、また痣、疵も取れる。この藥は十日以上用ゐる必要がない。(千金方)【手足の疣目】萹蓄の(九)赤子を揉み爛らして疣目の上に塗る。(一〇)(聖惠方)【熊羆の傷】萹蓄一大把を水一升に漬け、少時して汁を取つて飲み、滓で傷を封ずる。(張文仲備急方)

(一)水英(宋圖經)

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】魚津草　頌曰く、唐の天寶單方圖に『この草は、もと(二)永陽の池澤、

(八)赤遊ハ遊走丹毒。

(九)赤字大觀ニヨリテ補入。

(一〇)大觀ニ張文仲ニ作ル。

(一)牧野曰フ、水英ハ何ノ草カ分ラヌ、然シ繖形科ノせり(Oenanthe stolonifera DC.)デハナイ、或ハ唇形科ノみづれこのた(Dysophyll

verticillata, Benth.)デモナカラウカトタダ空想スルバカリデ、少シモ形狀ガ書イテナイカラ見當ガ付カヌ。
(二)永陽ハ唐ニハ今ノ安徽省滁州府來安縣ニ治ス。
(三)臨汝ハ唐ノ郡、汝州ニ屬ス。今ノ河南省臨汝縣ソノ舊治ナリ。
(四)信都ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。
(五)河內ハ菊ノ註ヲ見ヨ。
(六)內黃ハ漢ノ縣、今ノ河南省內黃縣ソノ地ナリ。
(七)劍南ハ芳草類牡丹ノ註ヲ見ヨ。
(八)遂寧ハ漢ノ縣、晉ノ郡、宋ノ府、今ノ四川省潼川府遂寧縣ノ南ニ故城アリ。

及び河、海の邊に生えてゐたものだ』とある。(三)臨汝地方では牛葒草と呼び、河北、(四)信都地方では水節と名け、(五)河内から(六)内黃附近までの地方では水棘と呼び、(七)劍南、(八)遂寧等の郡では龍移草と名け、淮南の諸郡では海茌と名ける。嶺南にもあつて、土地が就中適して居ると見えて莖、葉が大きく肥える。この地方では海精木とも、また魚津草とも名ける。

〔水英〕

時珍曰く、この草に就ては、形狀、氣味の記載がないので、考證すべきものがない。芹菜もやはり水英と呼ぶが、果してこの草のことなりや否や判然せぬ。

氣味 (缺)

主治 【骨風】(蘇頌)

發明 頌曰く、蜀地方では、その花を採つておしろいに合せる。凡そ男子、婦人が故なくして兩脚腫滿し、膝、脛の中に連つて痛み、屈伸につり强ばるは骨風と名けるものだ。その疾は、針灸、及び服藥は宜しくない。ただ毎日この草五斤を

取り、水一石で三斗に煮取つて熱して浸し、并に膝上に淋ぐ。一晝夜三四回試れば五日を過ぎずして瘥える。數〻實驗して神效があつた。この藥は、春は苗を取り、夏は葉、及び花を採り、冬は根を用ゐる。腫の甚しきには、生椒目三升、水二斗を加へ、用ゐ畢つたとき(九)粉を擦り付けて風に當らぬやうにする。油膩、生菜、豬、魚等の物を忌む。

(一)藍　（本經上品）

和名　あゐ
學名　Polygonum tinctorium, Lour.
科名　たで科(蓼科)

釋名　時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『月令に「仲夏は、民をして藍を刈つて以て染むることなからしむ」とあり、鄭玄は「恐らく長養の氣を傷ふからだ」といつてある。これで見ると、藍を刈ることに就いて、上古の統治者は禁制を設けてあつたものだ。文字を監に從ふて書くはその故だ』とある。

集解　別錄に曰く、藍實は河内の平澤に生ずる。その莖、葉は物を青色に染め得る。弘景曰く、この草は現に絲を紺、碧色に染める染料にしてゐるもので、尖

(九)粉ハ米粉ナラン。

(一)牧野曰フ、あゐハ即チ蓼藍デ我邦ニハ野生ハナク往昔支那カラ渡シタモノデアル、世人ノ知ルヤウニ其葉カラあゐヲ採ル爲メニ栽培セラルル、葉ニ長ガ形ノモノト圓ル形ノモノトガアル。

葉のものが勝れてゐる。

恭曰く、藍に三種あつて、一種は、葉が圓く、徑二寸ほど、厚さ三四分、染料となる。嶺南に産し、太常では(二)木藍子と呼んで取扱ふ。陶氏所説のものは菘藍のことで、その汁を沈澱し、錠にしたものは甚だ青いものだ。

〔蓼　藍〕

本經の所用するところのものは蓼藍の實のことで、苗は蓼に似て味は辛くなく、澱を取るに(三)堪へない。ただ碧色に染まるだけだ。

頌曰く、藍は處處にある。民家では蔬圃に畦を作つて種ゑるが、三月、四月になると苗が生える。高さ二三尺ばかり、葉は水蓼に似て花は紅白色、實はやはり蓼の子のやうだが、色が非常に黒い。五月、六月に實を採る。但しこれは碧色を染め得るだけで、澱錠には

〔大　葉　馬　藍〕

(二)牧野曰フ、下ノ恭ノ云フ木藍ハ其葉ノ徑ガ二寸ホドデ厚サガ三四分アルトイフ、時珍ハ此レハ馬藍デアツテ木藍デハナイト云ツテ居ル、此時珍ノ云フ木藍ハ即チまめ科(荳科)ノIndigofera tinctoria, L. で、一ニ槐葉藍ト云ヒ和名ヲきあゐ又ハまめあゐト稱スル、我邦ニ多キこまつなぎ(I. pseudo-tinctoria, Matsum.)ハ之レニ似テ全ク別種ニ屬シ此モノヨリハあゐガ取レヌ。

(三)不堪ノ二字大觀ニヨル。

ならない。これが蓼藍といふもので、卽ち醫方に用ゐるものだ。この外に木藍といふ嶺南に產するものがあるが、藥には入れない。また菘藍といふ澱錠にし得るものがあつて、これは馬藍ともいふ。爾雅に所謂『葴は馬藍なり』とあるがこの草だ。また(四)揚州の一種の馬藍は、四季を通じて葉があり、苦蕒菜に類するものだ。土地の人民は、敗血を治するにこの草を根のまま採つて服する。江寧の一種の吳藍なる草は、二月の內に生えて蒿のやうなものだ。葉は靑く花が白い。やはり熱毒を解す。この二種は、類似點はないが倶に藍なる名稱がある。且つ、古方に多く吳藍を用ゐるとあるは、或はこの草を指すのではあるまいかと思ふ。故に幷に附記して置く。

〔蒿葉吳藍〕

〔槐葉木藍〕

○○宗奭曰く、藍實とは大藍の實のことだ。これを蓼藍だといふは事實と違ふ。乃ち爾雅に所謂『馬藍』なるもので、諸藥毒を解するに缺く可からざるものだ。實、葉、

(四)大觀ニ箴ニ作ル。

兩ながら用ゐる。註に、實の説明だけあつて葉の説明のないのは不十分だ。

時珍曰く、藍に凡そ五種あつて、各〻主治に特長があるが、ただ藍實といへば特に蓼藍に限るのだ。蓼藍は、葉が蓼のやうで、五六月に穗になつた細かい淺紅色の花を開く、子も蓼のやうだ。一年に三回刈り取れる。故に上古の統治者はそれに制限を設けたのだ。(五)菘藍は、葉が白菘のやうだ。馬藍は、葉が苦蕒のやうだ。卽ち郭璞の所謂、大葉の冬藍であつて、俗に所謂、板藍と呼ぶものだ。この菘藍、馬藍の二者は、花も子も共に蓼藍のやうである。吳藍は、莖長く、蒿のやうで、花は白い。吳の地方で栽培する。木藍は、莖長く、決明のやうで、高いものは三四尺になり、枝が分れて葉が廣がり、その葉は槐葉のやうだ。七月淡紅色の花を開いて角を結ぶ。その角は長さ一寸ばかり、纍纍として小豆の角のやうだ。子はやはり馬蹄決明子のやうだが微し小さい。前記四種の藍とは形狀に於いて遙かに異るが、澱錠になる點は同一だ。この外、甘藍といふ食し得る草があるが、それは別に一條を掲げてある。蘇恭は、馬藍を木藍といひ、蘇頌は、菘藍を馬藍といひ、宗奭は、藍實を大葉藍の實だといつてあるが、いづれも誤だ。左にそれぞれ列記する。

(五)牧野曰フ、菘藍ハたいせい(原ト江南大青ト稱シテ支那カラ渡シタ名ニ基イタモノト思フ)卽チ十字科ノ Isatis oblongata, DC.(或ハ I. indigotica, Fortune. カ)デアル、時珍ガ菘藍、馬藍ヲ二物トセルヲ小野蘭山ハ其レハ非デ、之レハ蘇頌ノ說ニ從ヒ一物ト爲スベシト唱ヘテ居ルガ、救荒本草ニモサウ出テ居ル、吳藍ハ果シテきつれのまご科(爵牀科)ノりうきうあゐ(Strobilanthes flaccidifolius, Nees.)カ判然トセヌ、此りうきうあゐノ花ハ紫色デアルカラ集解ノ文ノ

藍實　［氣　味］【苦し、寒にして毒なし】權曰く、甘し。［主　治］【諸毒を解し、蠱、(六)蚑、疰鬼、螫毒を殺す。久しく服すれば、頭髮が白くならず、身體を輕くする】(本經)　蚑は其(キ)と發音する。小兒の鬼である。【骨髓を塡充し、耳、目を明かにし、五臟を利し、六腑を調へ、關節を通じ、經絡中の結氣を治し、人體を壯健にし、睡眠を少くし、心力を益す】(甄權)【毒腫を療ず】(蘇恭)

藍葉汁　これは蓼藍である。(七)［氣　味］【苦く甘し、寒にして毒なし】［主　治］【あらゆる藥の毒を殺し、狼毒、射罔の毒を解す】(別錄)　弘景曰く、解毒として、生藍の汁がない場合には、青染の絲や布を漬けた汁を用ゐても善し。【汁を五心に塗れば、煩悶を止め、蜂の螫毒を療ず】(弘景)【斑蝥、芫靑、樗雞の毒、朱砂、砒石の毒】(時珍)

馬藍　［主　治］【婦人の敗血には、根付きのまま焙じ擣いて下篩し、酒で一錢匕を服す】(蘇恭)

吳藍　［氣　味］【苦く甘し、冷にして毒なし】［主　治］【寒熱頭痛、赤眼、天行熱狂、丁瘡、遊風、熱毒、腫毒、風瘮。煩を除き、渴を止め、疳を殺し、毒藥、

白色トハ合ハヌ、植物名實圖考巻ノ十一ノ藍ノ處ニりうきうあゐノ圖ガ出テ居ルガ單ニ藍ノ二トアルノミデ特名ガ著シテナイ、松村任三博士ノ改訂植物名彙、前編ニりうきうあゐヲ馬藍トシテアルノハ穩當デナイ。

(六)蚑ハ蟲豸ノ通稱ナレドモ下註ニ據レバ小兒ノ鬼ヲ云フモノナリ。

(七)木村(康)曰ク、全草中インヂカンヲ含有ス、インヂカンハ加水分解ニヨリテ葡萄糖トインドキシルヲ生ズ、インドキシルハ空氣ニヨリ酸化サレテインヂゴヲ生ズ。N. S. D. 838; W. P. 176; Ber. Ch. Ges. 1879(12): 231. T.C.

1880 (1) 144; Agr. Tokyo, 1900(4)260.

(八) 蟲豸ハ昆蟲。

毒箭、金瘡、血悶、毒刺、蟲蛇の咬傷、鼻衄、吐血を解し、膿を排す。産後の血運、小兒の壯熱。金石藥の毒、狼毒、射罔の毒を解す』(大明)

【發明】震亨曰く、藍は水に屬し、能く敗血をして經絡に分歸せしめる。

時珍曰く、諸種の藍は、形狀に相異はあるが、性、味は遠からぬものだ。故にいづれも能く毒を解し、熱を除く。ただ木藍葉だけは力が少し劣るやうだ。藍子といふときは專ら蓼藍を用ゐる。澱錠や青布を用ゐることだが、これは藍を刈取つて水に浸し、石灰を入れて澄まして成つたものだから、性、味に多少の相異あるを免れぬので、藍汁と一樣に論ずるわけには行かぬのである。ある者が嘔吐を病んで、玉壺等諸種の丸藥を服して效がなかつたとき、藍汁を用ゐて口に入ると直ちに定つたことがある。これはやはり、この草の蟲を殺し、火を降す力の應用だ。かやうな事柄も心得て置くべきことである。

頌曰く、蟲汁は(八)蟲豸の傷を治す。劉禹錫の傳信方に、その法を記述して『大藍汁一盌を取り、雄黃、麝香の二物少量を入れ、咬傷の患部へ點け、同時にその汁を少しづつ服す。その效驗神異の極である。張薦員外が劍南に在つて、張延賞の部下

に判官を勤めてゐた頃、突然斑蜘蛛に頭上を咬まれ、一夜にして咬まれた處へ細い箸ほどの赤筋が二筋現はれ、(九)頂部を繞つて胸前から心の經まで波及し、二日經つと頭部、面部が腫れ疼き、數升入れる盌のやうに腫大して漸次に肚まで腫れ、殆ど絶望の狀態に陷つた。その時張延賞は錢五百千を出し、薦の家からも錢數百千を提供して、治療を能くするものを懸賞で募集すると、必ず治療するといふものが一人應募した。しかし張(一〇)相は甚だ信賴しかねたので、その方を試問しようとすると、その人物は『方は諳記してゐない。ただ人間の生命を救療するだけだ』といつて、やがて大藍汁一盌を取つて蜘蛛をそれに投げ込むと、汁につかると直ちに死んだ。又、藍汁に麝香、雄黃を加へて一匹の蜘蛛をそれに投げ込むと、汁に浸る部分から次第に溶けて水になつた。これを目の當り見た張相は大いに驚嘆して、それを咬傷の患部に點けさせると、二日にして悉く平安になり、小さい瘡になつて全癒した』とある。

附方　舊十一、新六。【小兒の赤痢】青藍の搗汁二升を四回に分服する。(子母祕錄)【小兒の中蠱】下血して死せんとするには、青藍の搗汁を頻りに服す。(聖惠方)

(九)大觀ニ項ニ作ル。
(一〇)相字大觀ニ據ル卽チ延賞ヲ指ス。

【陰陽易病】傷寒の癒えた直後に房事を行ふと、必ず陰陽の病となり、手、足、拳が拘急し、小腹が急熱し、頭が擧らなくなる。これは陰陽易と名ける。手當としては發汗せしむべきものだ。發病後滿四日經過すれば治療の方法がない。藍一把、雄鼠屎二十一箇を水で煎じて服し、汗を取る。(聖惠方)【驚癇の發熱】乾藍、凝水石等分を末にし、水で調へて頭上に傅ける。(聖惠方)【上氣欬嗽】呼吸毎に喉中に音があり、唾液の粘るには、藍葉を水に浸して搗いた汁一升を空腹に頻りに服し、少頃して杏仁の研汁で煮た粥を食ふ。かくて一兩日經過を見て、更に前記の方法で再服する。痰を吐き盡せば瘥える。(梅師方)【(一一)飛血赤目】熱痛するには、乾藍葉を切つて二升、車前草半兩、淡竹葉を切つて三握、水四升を二升に煎じて滓を去り、溫めて洗ふ。冷えれば再び煖めて洗ひ、瘥えるを度とする。(聖濟總錄)【腹中の鼈癥】藍葉一(一二)升を搗き、水三升を入れて絞り、その汁一升を一日二回に服す。(千金方)【應聲蟲病】腹中に物があつて、人が物言ふ毎にそれに隨つて聲を出す。これを應聲蟲病と名ける。板藍汁一盞を五回に分服すれば效がある。(夏子益奇疾方)【突然の水の中毒】藍を搗いた青汁を頭部、身體の全面に傅ける。(肘後方)【過量の服藥】煩悶する

(一一)赤脈白睛ノ上ニ生ズ、之ヲ飛血ト云フ。

(一二)大觀ニ升ヲ斤ニ作ル。

もの、及び中毒で煩悶し、死せんとするには、藍の搗汁數升を服す。(肘後方)【縊死自縊者】藍汁を灌ぎ込む。(千金方)【毒箭の負傷】藍青を搗いて飲み、并に傅ける。藍のないときは青布を漬けた汁を飲む。(肘後方)【(一三)唇邊の瘡】連年瘥えぬには、八月の藍葉一斤の搗汁で洗ふ。三回以内で瘥える。(千金方)【齒䘌腫痛】一日五回、紫藍の燒灰を傅ける。(聖惠方)【白頭禿瘡】(一四)糞藍の煎汁で頻りに洗ふ。(聖濟錄)【(一五)天泡熱瘡】藍葉を搗いて傅けるが良し。(集簡方)【瘡疹で不快なるもの】板藍根一兩、甘草一分を末にし、毎服半錢、或は一錢を雄雞冠血二三滴入れた溫酒少量で調へて服す。(錢氏小兒方)

藍澱（綱目）

和名　あゐのおり
英名　Indigo.

【釋名】時珍曰く、澱とは殿の義であつて、藍の滓を澄ませて下に沈澱したものだ。淀とも書き、俗に靛とも書く。南方地方では、地に坑を掘つて藍を入れ、一夜水に浸して石灰を入れ、千回攪き廻してそれを澄し、水を去つて作る。かくすれば青黑色に沈澱するのであつて、やはり乾し取收めて青碧色を染める染料になる。

(一三)大觀ニ唇邊ヲ背上ニ作ル。
(一四)糞藍ハ藍葉ヲ搗キタル滓ノコトナラン。
(一五)天泡瘡ハ俗ニとびひト云フモノ。

その攪き廻す際に起つ浮沫を掠め出し、それを陰乾したものを靛苔といふ。即ち青黛である。下に說明する。

(一)［氣味］【辛く苦し、寒にして毒なし】［主治］【諸毒を解す。熱瘡、小兒の禿瘡、熱腫に傅ける】(藏器)【血を止め、蟲を殺し、噎膈を治す】(時珍)

［發明］時珍曰く、澱は藍と石灰とで作成するもので、氣味は藍と稍同じからぬ點があつて、血を止め、毒を拔き、蟲を殺す功力は藍に勝る。按ずるに、廣五行記に『唐の永徽年間、絳州のある僧侶が噎を病み、食物が喉を通らず、數年にして死亡した。その臨終に、徒弟を喚んで「死んだ後でこの喉、胸を切開し、何物がかやうに此の身を苦しめたかを確めてくれ」と遺言したので、死後、徒弟は遺言に遵つてその胸中を切開して見た。すると果して一箇の物を發見した。その物は形が魚のやうで、頭が二箇あり、全體悉く肉鱗のやうに見え、鉢に入れて置くと絕えず跳ね躍る。戲れに樣樣の食物を投げ與へると、果してその物を食ふとも見えぬが、しかし皆溶けて水になつた。また種種の毒物を投げ入れても、やはり同樣に銷化して了ふ。ところがある時、僧侶達が藍澱の作製を始め、あり合す澱を少しばかりそ

(一) 木村(康)ロク、インヂコ。St. 218. 藥誌、明、一八(三九)二〇三 N. S. D. 838.

の鉢の內へ投げ込むと、蟲は忽ち怖れ惑ふて逃げ廻り、須臾にして溶けて水になつた。世間に、澱水は噎疾を治すと言ひ傳へてあるが、蓋し此に起因するのだ』とある。現に方士達が、染料甕の水を飲ませて噎膈を治するといふも、やはり殺蟲の功力を取るのである。

〔附方〕新四。【時行熱毒】心神煩躁するには、藍澱一匙を新汲水一盞で服す。（聖惠方）【小兒の熱丹】藍澱を傅ける。（二）（秘錄方）【口、鼻の急疳】數日續いて死せんとするには、日中十回、夜間四回、藍澱を全面に傅ける。（千金翼）【誤つて水蛭を呑みたるとき】青澱を水で調へて飲めば瀉出する。（普濟方）

青黛（宋開寶）

和名 あゐらふ（藍蠟）
英名 blue cosmetic for painting the eyebrows.

〔釋名〕靛花（綱目）青蛤粉 時珍曰く、黛とは眉の色のことだ。劉熙の釋名に『眉毛を剃り去つてこの物で代へる。故に之を黛といふ』とある。

〔集解〕志曰く、青黛は波斯國から輸入する。今は（一）太原、并に（二）廬陵、南康等の地方の藍甕の沫の紫碧色なるものを用ゐるが、青黛と功力は同一だ。

（二）大觀ニ秘錄ノ上ニ子母ノ二字アリ。

（一）太原ハ今ノ山西省太原ノ地ナリ。
（二）廬陵ハ漢ノ縣、三國ノ郡、舊治ハ今ノ江西省吉水縣東ニ在リ。南康ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。

時珍曰く、波斯の靑黛といふも、やはり外國の藍靛花のことで、この物が手に入らぬときは中國の靛花を用ゐてもよい。或は已むを得ぬ場合は靑布を浸した汁を代用する。商品には乾澱を靑黛としてあるが、しかしそれには石灰が入つてゐるから、服餌の藥中に入れるには、詳細の吟味を要する。

氣味 【鹹し、寒にして毒なし】 權曰く、甘し、平なり。

主治 【諸藥の毒を解す。小兒の諸熱、驚癇發熱、天行の頭痛寒熱には、いづれも研つて服す。また磨つて熱瘡、惡腫、金瘡、下血、蛇、犬等の毒にも傅ける】(開寶) 【小兒の疳熱を解し、蟲を殺す】(甄權) 【小兒の丹熱には、水に和して服す。雞子白、大黃末と共に瘡癰、蛇、虺の螫毒に傅ける】(藏器) 【肝を瀉し、五臟の鬱火を散じ、熱を解し、食物の停滯を消化する】(震亨) 【熱煩、吐血、喀血、斑瘡、陰瘡を去り、惡蟲を殺す】(時珍)

發明 宗奭曰く、靑黛なるものは藍で作るものだ。ある一婦人患者は、臍下から腹の上が(三)熱し、下の方陰部から肛門まで一面に(四)馬瓜瘡のやうな形狀の濕瘡が生じ、他の部分はすべて痒くはないが痛み、大、小便が澀つて黃汁を出し、食慾

(三) 熱字大觀ニヨリテ補フ。
(四) 馬瓜瘡詳カデナイ。

が減退して身體、面部が微し腫れた、醫師はこれを惡瘡として治療し、鰻鱺魚、松脂、黄丹などの藥を塗つたが、熱痛は更に甚しくなつた。そこで患者に平生の嗜好を訊ねると、酒も飲み、好んで魚、蟹、(五)發風等の物を食つたといふ。そこで急にそれ迄用ゐてゐた膏藥を洗ひ落させ、馬齒莧四兩を杵き爛らした中へ青黛一兩を入れ、再び研勻して塗つて見ると、熱は卽時に減じ、痛痒は悉く去つた。そこで八正散を一日三回服ませて客熱を分散せしめ、藥が乾けばまた塗り換へさせて二日間繼續すると、病は三分の一を減じ、五日にして三分の二を減じ、二十日にて平癒した。これは蓋し中、下焦に風熱の毒氣を蓄へたものであつて、若しこれを外に排出せねば、當然腸癰、內痔となるものだ。そこで患者には酒色、發風の物を禁ずるやうに注意したが、しかしその禁を守れなかつたので、後に果して內痔を患つた。

附方 舊六、新七。

【(六)心口の熱痛】 薑汁で青黛一錢を調へて服す。(醫學正傳)

【內熱吐血】 青黛二錢を新汲水で服す。(聖惠方)

【肺熱喀血】 青餅子——青黛一兩、杏仁を牡蠣粉を用ゐて炒つて一兩を研りまぜ、黄蠟に溶和して三十箇の餅にし、一日三回、この餅一箇を、乾柿半箇に挾んで濕紙に厚く裹み、香しく煨いて嚼み、粥飲

(五)發風ノ食物トハ風毒腫物ヲ生ゼシメル食物。

(六)心口ハ胃ノ口邊ノ事カ。

で服す。（華佗中藏經）　【小兒の驚癇】年齡、體格の大小に應じ、青黛を水で研つて服す。（生生編）　【小兒の夜啼】方は上に同じ。　【小兒の疳痢】宮氣方の歌に『孩兒の雜病變じて疳と成るは、強、羸と女、男とを問はず、煩熱して毛焦れ鼻口燥き、皮膚枯槁して四肢（七）癱し、腹中時時に更に下痢し、青、黄、赤、白一般般にして、眼澀り而黄に鼻孔赤く、穀道は開張して看る（八）可からず、此の方は便ち是れ青黛散、孩兒の百病は之を服すれば安し』とある。　【汁の出る耳疳】青黛と黄蘗の末を乾かして摻る。（談埜翁方）　【爛弦風眼】青黛、黄連を湯に漬けて日毎に洗ふ。（明目方）　【產後の發狂】四物湯に青黛を加へ、水で煎じて服す。（摘玄）　【傷寒赤斑】青黛二錢を水で研つて服す。（活人書）　【（九）豌豆瘡毒】まだ化膿せぬには、波斯青黛（一〇）一東ばかりを水で研つて服す。（梅師方）　【瘰癧のまだ孔の明かぬもの】靛花、馬齒莧を共に搗き、日毎に塗傳して效を取る。（簡便方）　【諸毒蟲の螫傷】青黛、雄黄等分を研末し、新汲水で二錢を服す。（古今錄驗）

【附錄】　（一一）雀翹（別錄）　有名未用に曰く、味鹹し。氣を益し、目を明にする。藍の中に生ずるもので、葉は細くして黄色、莖は赤くして刺がある。四月黄色で鋭

（七）癱ハ不隨ノコト。
（八）大觀ニ可ヲ欲ニ作ル。
（九）大觀ニ豌豆瘡ノ上ニ傷寒發斑ノ三字アリ、青字ナシ。
（一〇）大觀ニ一東ヲ大握ニ作ル。
（一一）牧野曰フ、我邦ノ本草家雀翹ヲ以テたで科（蓼科）ノうなぎづる即チうなぎつかみ（Polygonum sibiricum, Meisn.）ニ充ツレドモ、私ハ今之レニ同意スルニ

く中の黒い實を結ぶ。五月に採つて陰乾する。一名去母、一名更生といふ。

(一)甘藍(拾遺)

和名　はぼたん
學名　Brassica oleracea, L.
科名　十字科(十字科)

【校正】菜部より此に移し入る。

【釋名】藍菜(千金)

【集解】藏器曰く、この草は西方の國の藍である。葉が闊いもので、食料になる。

時珍曰く、この草もやはり大葉冬藍の類のものだ。按ずるに、胡洽居士は『(二)河東、隴西、羌、胡の地方では、多く栽培してこれを食ふ。(三)漢地には稀だ。その葉は長大で厚く、煮て食へば甘美なものだ。冬を經ても枯れず、春また新たな苗も生える。花

〔甘藍〕

躊躇スル。

(一)牧野曰フ、此ノ甘藍ハ其種ノ中ノ一變種ナル Var. acephala, DC. ヲ指シタモノデアラウ、即チ今日普通ニ見ル結球ノモノ(var. capitata, L. たまな)デハナイ、植物名實圖考巻ノ四ニ甘藍トシテ圖スルモノハ別ノ植物デ、恐ラク本書ニアル甘藍ヨリ後ニ世ニ明ニナツタモノデアラウト思フ、其狀蕪ダかぶらはぼたん即チ var. caulo-Rapa, DC. ニ似テ居ル、今日支那でかぶ樣ノ肉質ノ根ヲたうがらし粉ヲ加ヘテ鹽藏シ食料ニ供スル一品ハ或ハ此圖ノ品デハナイカト思ハレル。

は黄色で角になる子を結ぶ。功力は藍の功力に近い』といつてある。

〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【久しきに亙つてこれを食へば、大いに腎を益し、髓腦を塡て、五臟、六腑を利し、關節を利し、經絡中の結氣、心下に結伏せる氣を通じ、耳目を明にし、身體を壯健にし、睡眠を少くし、心力を益し、筋骨を壯にする。葅にして一夜置き、色の黃になつたものに鹽を和して食へば、黃毒を治す】（藏器）

子 〔主治〕【多眠症】（思邈）

蓼（一）（本經中品）

和名 たて
學名 Polygonum Hydropiper, L. et var.
科名 たで科（蓼科）

〔校正〕 菜部より此に移し入る。

〔釋名〕 時珍曰く、蓼類の草は皆高く揚るものだ。故に文字は翏に從ふ。音は料（レウ）である。高く飛ぶ有樣の形容だ。

〔集解〕 別錄に曰く、蓼實は（二）雷澤の川澤に生ずる。弘景曰く、この草は類が

（二）河東ハ山草類甘草ノ註、隴西、羌ハ石部鹵石類消石ノ註、胡ハ同戎鹽ノ胡ノ鹽山ノ註參照。

（三）漢トハ當時ノ中央部ヲ指スモノノ如シ。

（一）牧野曰フ、此ニ蓼ハやなぎたで（Polygonum Hydropiper, L.）ノ一群ヲ指シタモノデ皆葉ニ辛味ヲ有スルモノデアル、辛味アルモノハ此一種ニ限リ他種ノモノハ辛クナイ、其野生シテ通常食用ニ供セヌモノヲやなぎたでト稱シ、其變種ニシテ食用ニ供スルモノヲ總稱シテまたてトモほんたてト

多く、人の食ふものだ。三種あつて、一種は青蓼といひ、人家で常用する。その葉は圓いものも尖つたものもあるが、圓いものが勝れてゐる。藥用とするはこのものだ。一種は紫蓼といひ、相似たものだが色が紫だ。一種は香蓼といひ、相似てゐるが香しい。いづれも甚だ辛くはなく食料として好適だ。

保昇曰く、蓼は類が甚だ多く、青蓼、香蓼、水蓼、馬蓼、紫蓼、赤蓼、木蓼の七種あつて、紫、赤の二蓼は、葉が小さく狹くして厚い。青、香の二蓼は、葉はやはり似てゐるが俱に薄い。馬、水の二蓼は、葉が俱に濶く大きく、表面に黑點がある。木蓼は、一名天蓼といひ、蔓生のもので、葉は柘葉に似てゐる。前の六蓼は、花はいづれも紅白色、子はいづれも大さ胡麻ほどの赤黑色で尖扁だが、木蓼だけは、葉は黃白色、子は皮が青くして滑かだ。これ等諸蓼はいづれも冬は枯死するが、香蓼だけは宿根から再び生え、生菜として食料になる。

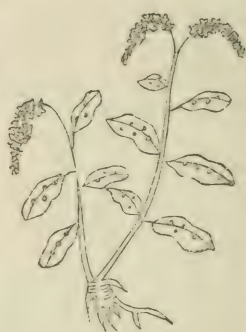
頌曰く、木蓼にも大、小の二種あつて、いづれも蔓生である。陶氏は、青蓼を藥に入れるものとし、他は用ゐないといふ。三茅君の傳に、白蓼醬を作る方といふがあるが、藥譜の中には、白蓼なるものがないから、これは青蓼を指したものではない

モ稱スル、之レニ數品ガアル、あゐたで、あおあゐたでハ葉濶ク、むらさきたでハ葉色青赤紫あきぶたでハ柳葉ノ如ク、ほそばたでハ葉極メテ狹長デアル集解中ノ青蓼ハあゐたでモ其一で紫蓼ハむらさきたでデアラウ。小野蘭山ニ從ヘバ香蓼ハかんたで一名ふゆたでデ赤蓼ハとうたで一名あかたでデ木蓼ハまたたびダト云ツテ居ル、植物名實圖考卷ノ十一ノ蓼ノ圖ハおほいぬたでデ蓼ノ正品デハナイ。

（二）雷澤ハ今ノ山東省濮縣ノ東南ニ在リ濮澤縣ノ界ニ接ス。水經注ニ「雷澤在成陽故城西北、昔華胥履大跡處也。其陂東西二十餘里。南北十五里。卽舜所漁也」トアリ。

(二)五辛盤ハ楚人ガ元日ニ作リ備ヘルモノデ、其五辛ハ葱、蒜、韭、蓼、蒿芥ノ類ナリ。

かと思ふ。

宗奭曰く、蓼實とは、草部下品にある水蓼の子のことだ。下品の部で水蓼とあるは莖を用ゐる意味に據り、この中品の部で蓼實といふは子を用ゐる意味に據つて取扱つたのだ。春初に瓢箪に水を入れてこの實を浸濕し、火の上の高い處に懸けて晝夜暖氣を與へると、やがて紅い芽が生える。その芽を取つて蔬にし、(二)五辛盤に使ふ。

〔青蓼　赤蓼〕

時珍曰く、韓保昇の所說は甚だ明瞭だ。古代には蓼を栽培して蔬にし、子を取り收めて藥に入れたものだ。故に禮記に、雞、豚、魚、鼈を烹るには、いづれも蓼をそのものの腹中に詰めて煮て、羹、臛などを調理するとあつて、やはり蓼は必要な調理材料だつたのだ。後世では飲食の料としては用ゐず、世間でも一向栽培せぬが、ただ酒の麴を製るにだけはこの汁を用ゐてゐる。現在では、平澤に生ずる香蓼、青蓼、紫蓼を藥用に良しとしてある。

(四)目字大觀ニ據リテ補入ス。

實　氣味　〔辛し、溫にして毒なし〕　權曰く、多く食へば、水を吐し、氣を壅し、陽を損ずる。

主治　〔目を明かにし、中を溫め、風寒に耐へ、水氣を下す。面(四)目の浮腫、癰、瘍〕(本經)　〔鼻に歸するもので、腎氣を除き、癧瘍を去り、霍亂を止め、小兒の頭瘡を治す〕(甄權)

附方　舊一、新三。　〔傷寒勞復〕　房事が原因で後に睾丸が腫れ、或は腹に縮み入つて痛むには、蓼子一把を水で揉み、その汁一升を飮む。(肘後方)　〔霍亂煩渴〕　蓼子一兩　香薷二兩を用ゐ、二錢づつを水で煎じて服す。(聖惠)　〔小兒の頭瘡〕　蓼子を末にし、蜜を和して雞子白と共に塗る。蟲が出て痕が殘らない。(藥性論)　〔蝸牛の咬毒〕　毒が全身に行つたものには、蓼子を煎じた水で浸せば立ちに癒える。陰部に近づけてはならぬものだ。近づければ力を弱くする。(陳藏器本草)

苗葉　氣味　〔辛し、溫にして毒なし〕　思邈曰く、黃帝は『蓼を多く過食すれば、中毒して心痛を發する。生魚に和して食へば、脫氣し、陰核が痛み、死を願ふやうになる。二月蓼を食へば、胃を傷める』といつてある。扁鵲は『久しく食

へば、寒熱を起し、髓を損じ、氣を減じ、精を少くする。婦人が月經來潮時に蓼、蒜を食へば、よく淋を起し易い。大麥麪と適合するものだ』といつてある。

主治 【舌に歸するものであつて、大小腸の邪氣を除き、中を利し、志を益す】(別錄)【乾して酒に釀したものは、風冷の主藥として大いに良し】(弘景)【生菜にして食へば、能く腰、脚に入る。煮た湯で脚を(五)捻り揉めば霍亂轉筋を治す。煮汁を日毎に飲めば、痃癖を治す。擣き爛らして狐(六)尿瘡に傅ける】(藏器)【脚の俄かに軟するには、赤蓼を灰に燒き、淋汁を取つて浸し、桑葉で蒸罨する。立ろに癒える】(大明)【蟲を殺し、砒を伏す】(時珍)

附方 舊四、新三。【蓼汁酒】胃脘の冷で飲食不能となり、耳、目が明かならず、四肢に氣があり、冬季就寢中足の冷えるを治す。八月三日に蓼を取つて日光で乾かし、五升ほどに束ねたもの六十把、水六石を一石に煮取つて滓を去り、米飯に拌ぜて普通の酒を釀す法の如くして熟するを待ち、日毎に飲む。十日後には、目が明かになり、氣が壯になる。(千金方)【肝虛の轉筋】吐瀉するには、赤蓼の莖、葉を切つて三合を、水一盞、酒三合で四合までに煎じ、二回に分服する。(聖惠方)【霍亂

(五)食物本草ニ捻チ拵ニ作ル。
(六)大觀ニ、刺ニ作ル、狐ノ尿ノ爲メニ發スル瘡。

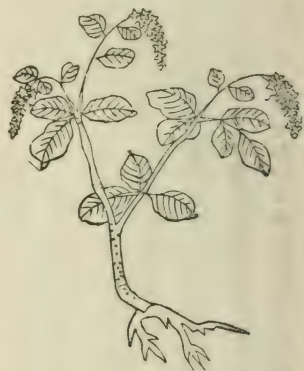
轉筋】蓼葉一(七)升、水三升を二升に煮た汁に香豉一升を入れ、更に一升半に煮取つて三回に分服する。(藥性論)【夏季の暍死】蓼の濃煮汁(八)一盞を服す。(外臺)【小兒の冷痢】蓼葉の擣汁を服す。(千金)【血氣の攻心】痛み忍び難きには、蓼根を洗つて剉み、酒に浸して飲む。(斗門)【惡犬の咬傷】蓼葉を泥に擣いて傅ける。(肘後)

(一)水蓼（唐本草）

和名　かはたで　みづたで
學名　Polygonum Hydropiper, L. forma aquaticum, Makino.
科名　たで科(蓼科)

【釋名】虞蓼(爾雅)　澤蓼　志曰く、水の淺い澤中に生ずるから水蓼と名けるのだ。時珍曰く、按ずるに、爾雅に「薔は虞蓼なり」とある。山が水を挾んだ地形を虞といふのだ。

【集解】恭曰く、水蓼は下濕の水傍に生ずるもので、葉は馬蓼に似て(二)家蓼よりも大きく、莖は赤い。水で挼んで食へば蓼子に勝る。
宗奭曰く、水蓼は大體水葒と似たもので、ただ枝が低いだけだ。現に酒を造る時に、その葉を取つて水に浸し、その汁を麪に和して麴にする。これもやはりその辛

(七)大觀ニ把ニ作ル。
(八)大觀ニ一盞服チ三升灌之ノ四字ニ作ル。
(一)牧野曰フ、やなぎたでノ水中ニ生エシモノデ水ニ靡キテ流レ、其莖ガ水面ニ出ヅレバ花穗チ出シテ花チ開ク、此ノ樣ニ水中ニ沈在スルモノハ冬モ生キテ居ツテ年チ越シ、多年生ノモノトナツテ居ルノハ面白キ現象デアル、之ニ反シテ陸上ニ生ズルモノ(やなぎたで)ハ全ク一年生本チナシ秋ニナレバ枯レ果テル。
(二)家蓼ハ家園ニ栽培スル普通ノ蓼。

味を利用するのだ。

時珍曰く、この草は水際に生える蓼のことで、葉は長さ五六寸、水葒の葉に比較すれば稍狹く、家蓼の葉に比較すれば稍大きく、功力も彷彿たるものだ。寇氏が『蓼實は水蓼の子のことだ』と謂ふはこれを根據としたものだ。

〔水蓼　馬蓼〕

莖葉 |氣味|【辛し、毒なし】大明曰く、冷なり。|主治|【蛇傷にこれを搗いて傅ける。絞汁を服すれば、蛇毒が腹に入つて心悶するを止める。又、脚氣で腫痛し、瘡と成つたものには、水で煮た汁に漬けて捻り揉む】(唐本)

(二)馬蓼（綱目）

和名　はるたで
學名　Polygonum Persicaria, L.
科名　たで科（蓼科）

|釋名| 大蓼（綱目）墨記草　時珍曰く、凡そ物の大なるものは皆馬を冠して

(一)牧野曰フ、馬蓼ハはるたでガ主品デアル、尚他ノ一二品ノ別種ヲモ同ジク馬蓼ト呼ブコトガ集解ニ出テ居レドモ何たでカ分ラヌ、本草綱目啓蒙ニ之レヲいぬたでトシテアルガ、此名ハ今日吾人ノ使用シツツアルいぬたで卽チ草木圖說卷ノ

七ニアルいぬたて(Polygonum Blumei, Meisn.) デハナク、何ンデモ辛クナイたでノ總名デアル。

(一)牧野曰フ、我邦ニ野生ナシ、大形品デタダ觀賞用ニ人家ニ栽培セラレテ居ルノミデアル。

呼ばれる。俗に大蓼と呼ぶはこの草だ。高さ四五尺のもので、大小二種ある。葉毎に中間に墨で點を記したやうな黑い跡があるところから、方士は墨記草と呼ぶ。

【集解】弘景曰く、馬蓼は下濕の地に生ずるもので、莖に斑があり、葉は大きく、黑點がある。やはり兩三種あつて、その最も大なるものを蘢鼓と名ける。卽ち水葒だ。

莖葉　【氣味】【辛し、溫にして毒なし】時珍曰く、丹砂、雌黃を伏す。

【主治】【腹中の蛭蟲を去り、身を輕くする】(本經)

(一)紅草 (別錄中品)

和名　おほけたで
學名　Polygonum orientale, L. var. pilosum, Meisn.
科名　たで科(蓼科)

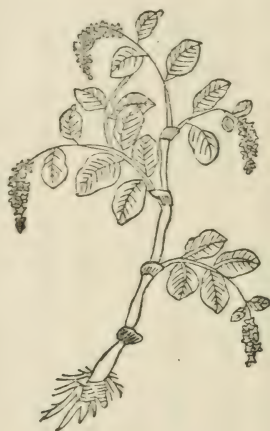
【校正】有名未用、別錄の天蓼を併せ入る。

【釋名】**鴻䕲**　䕲の音は纈(ケツ)である。**蘢古**　あるひは鼓と書く。**遊龍**(詩經) **石龍**(別錄) **天蓼**(別錄) **大蓼**　時珍曰く、この蓼は甚だ大きく、花はやはり紅くして多數だから、葒といひ、鴻といふ。鴻はやはり大いなるの意味だ。別錄には、有

名未用草部の中に天蓼なる一條を掲げて『一名石龍。水中に生ずる』とあり、陳藏器の解に『天蓼、卽ち水葒、一名遊龍、一名大蓼』とある。これに據れば、この二條は、一はその實を指し、一は莖、葉を指したものである。ここには一條に併記した。

集解 別錄に曰く、葒は水旁に生ずる。馬蓼のやうで大きい。五月實を採る。

弘景曰く、現に下濕の地に甚だ多く生えてゐる。極めて馬蓼に似て甚だ長大だ。詩に『隰に遊龍あり』とあり、郭璞には『蘢古のことだ』といつてある。

頌曰く。葒、卽ち水葒である。蓼に似て葉が大きく、赤白色で高さ一丈餘のものだ。爾雅に『葒は蘢古なり、その大なるは蘬なり。音は詭(キ)』とある。陸機は『遊龍、一名馬蓼』といつてあるが、馬蓼は自から別の一種だ。

〔葒草〕

時珍曰く、莖は粗く、拇指ほどのもので毛があり、葉は大さ

商陸の葉のほどで色は淺紅だ。穗が出て秋深くして子が實り、その子は扁たく、酸棗仁のやうで小さく、色は赤黑くして肉が白い。甚だ辛くはない。煮れば食へる。

實　【氣味】【鹹し、微寒にして毒なし】【主治】【消渴に熱を去り、目を明にし、氣を益す】(別錄)

【附方】　舊一、新一。【瘰癧】水葒子を多少に拘はらず、一半は微し炒り、一半は生で用ゐて共に研末し、食後に二錢を好き酒で調へて服す。日毎に三服すれば破れたものも治癒する。久しく續用すれば效がある。效が現れたときは服藥を止める。(寇宗奭本草衍義)【(二)癖痞腹脹】及び盃や盌ほど堅硬になつたものには、水葒花の子一升を別に研り、獨顆蒜三十箇を皮を去り、新狗腦一箇、皮硝四兩と石臼で搗き爛らして患部に攤し、上に油紙を當てて繃帶し、午後六時に貼つて翌朝六時に取る。なほ效なきときは再び貼り、二三回試みる。膿潰することがあつても氣遣ふに及ばぬ。そこで患者の虛實を看て、逐日錢氏の白餅子、紫霜丸、塌氣丸、消積丸を間服して通じを付け、病を消磨する。これは半月間服するのであるが、甚しきものも一箇月繼續すれば必ず痊える。虛實を看るの注意として、喘滿するは實、喘せぬは虛

(二)癖ハ腹ニ積聚アツテ塊ヲナスモノ、痞塊トイフモノ是ナリ。

(三)本草原始ニ氣ニ作ル。

である。(衞氏驗方)

花 [主治] 【(三)血を散じ、積を消し、痛を止める】(時珍)

[附方] 新三。【胃脘の血氣】痛むには、水葒花一大撮、水二鍾を一鍾に煎じて服す。百戸毛菊庄が屢々實驗した方である。(董炳避水集驗方)【心氣疞痛】水葒花を末にして熱酒で二錢を服す。またある法では、男は酒、水各半で煎じて服し、女は醋、水各半で煎じて服す。年齢三十歳のある婦人が、この病に罹つて一服で立ろに效があつた。(摘玄方)【腹中の痞積】水葒の花、或は子一盌、水三盌を桑柴の文武火で煎膏し、痞の大、小を量つて攤して貼り、同時に酒で膏を調へて服す。腥、葷、油膩の物を忌む。(劉松石保壽堂方)

天蓼(別錄) 時珍曰く、これは莖、葉を指す。[氣味]【辛し、毒あり】[主治]【惡瘡。痺氣を去る】(別錄)【根、莖は、惡瘡腫、水氣、脚氣を除く。煮た濃汁に漬ける】(蘇頌)

[附方] 新一。【肌肉を生ずる】水葒花の根を湯に煎じて淋ぎ洗ひ、同時にその葉を曬し乾して研末し、毎日一回瘡上に撒る。(談埜翁試驗方)

毛蓼(一)（拾　遺）

和名　みづひき
學名　Polygonum filiforme, Thunb.
科名　たで科（蓼科）

〔毛　蓼〕

集解　藏器曰く、毛蓼は(二)山足に生える。馬蓼に似て葉上に毛があり、冬も根が枯れぬ。時珍曰く、この草は、卽ち蓼の山麓に生ずるもののことだ。澤や濕地の蓼とは異ふ。

葉莖　氣味　【辛し、溫にして毒あり】　主治　【癰腫、疽瘻、瘰癧には、杵き碎いて瘡中に入れて、膿血を引き、肌を生ずる。また湯にしても洗ふ。足を濯へば脚氣を治す】（藏器）

海根(一)（拾　遺）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

(一)牧野曰フ、毛蓼ハ植物名實圖考卷ノ十四ニ據レバみづひきテ、此品ナレバ山足ニ生エテ冬モ根ガ殘リ春萌發シ葉ニ毛ガアル、本草綱目啓蒙ニ原野ニ生ズル一年生本ノけたで（此けたてニ二三アリテ一ハさなへたてノ變種一ハおほいぬたてノ變種、一ハはるたてノ變種デアル）ニ充ツレドモ中ラヌ。
(二)山足ハ山ノ麓トイフガ如シ。

(一)牧野曰フ、ドンナ草カ分ラヌ。

(二)會稽ハ石部禹餘糧ノ註ヲ見ヨ。
(三)大觀ニ胡ヲ海ニ作ル。
(四)食物本草ニ用ヲ食ニ作ル。

(一)牧野曰フ、是レハ正ニつるそばデアル、其莖赤ク柔カク其葉末尖ツテ葉ノ底部ガ方形ヲナシ、白花、黑實ノ狀文簡ナレドモ能ク其實狀ヲ補捉シテ居ル。
(二)大觀恩上南字アリ。恩州ハ今ノ山東省恩縣ノ地ナリ。然レドモ此ニハ南恩州ヲ正シトス。南恩州ハ石部石蛇ノ註ヲ見ヨ。
(三)大觀ニ菽ニ作ル。

【集解】藏器曰く、(二)會稽の海岸の山谷に生ずる。莖は赤く、葉は馬蓼に似たもので、根は菝葜に似て小さい。(三)胡人は蒸して(四)用ゐる。

根【氣味】【苦し、小温にして毒なし】【主治】【霍亂中惡、心腹痛、鬼氣、疰忤、飛尸、喉痺、蠱毒、癧瘍、惡腫、赤、白遊瘮、蛇咬、犬毒。酒、及び水に磨つて服し、竝に傅ける】(藏器)

(一)火炭母草（宋圖經）

和名 つるそば
學名 Polygonum chinense, L.
科名 たで科(蓼科)

【集解】頌曰く、(二)恩州の原野中に生ずる。莖は赤くして柔かく、細蓼に似て葉の端が尖り、葉柄に近い所は四角である。夏白い花が咲き、秋實る。その實は(三)椒のやうで色は青黑色だ。味甘し、食ひ得るものだ。

〔火炭母草〕
――南恩州――

葉【氣味】【酸し、平にして毒あり】

【主治】【皮膚の風熱が骨節に流注するを去

る。毒腫疼痛には、時期に拘はらず采つて坩器中で搗き爛らし、鹽、酒で炒つて、腫痛の箇所に傅け、一夜經つて一回易へる】（蘇頌）

〔一〕三白草（唐本草）

和名　はんげしやう、かたしろぐさ
學名　Saururus Loureiri, Decne.
科名　はんげしやう科（三白草科）

【釋名】弘景曰く、葉上に三箇の白點があるので、俗にそれに因んで名けたものだ。又、下文を見よ。

【集解】恭曰く、三白草は池澤の畔りに生ずる。高さ一尺ばかり、葉は水葒のやうでもあり、また蕺のやうでもあり、又菝葜にも似たもので、葉上に三箇の黑點がある。白點ではない。古代の人は、これを祕するために黑いといふ事實を隱して白といつたのだ。根は芹の根のやうで黃白色だが、粗く大きい。

藏器曰く、この草は初生には白い部分はないが、夏に入ると葉の端の半がおしろいを傅けたやうに白くなる。農家ではその時を測つて田に種を蒔き、三葉白くなつた時に蒔けば雜草がはびこるとしてある。故にこれを三白といふのであつて、三黑

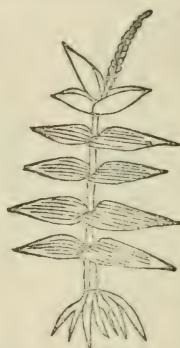
〔一〕牧野曰フ、我邦ニモ野生シ諸州ノ水邊又ハ濕地ニ生ジ、夏秋ノ候梢葉ノ面白色ヲ呈スルノ殊性ガアル、花ハ穗ヲナシ小形デ裸花ヲナシ、花瓣ガナクタダ雌雄蕊ガアルノミデアル。

(一)襄州ハ石部礬石ノ註ヲ見ヨ。
(二)本草彙言ニ八ヲ三ニ作ル。

點などといふは、蘇恭がその事實を識らないのだ。その草は薯蕷のやうなもので、一向水葒には似てゐない。

保昇曰く、今は(一)襄州に出る。二月、八月に根を採つて用ゐる。

時珍曰く、三白草は田や澤の畔りに生えるもので、(二)八月苗が生え、高さは二三尺、莖は蓼のやう、葉は章陸、及び青葙のやうだ。四月にその頂部の三葉の表面が三回に變色して白くなるが、他の葉は相變らず青色だ。俗に、一葉白くなつた時は小麥が食へ、二葉白くなつた時は梅、杏が食へ、

〔三白草〕

三葉白くなつた時は黍子が食へるといふ。五月穗になつた花を開く。形狀は蓼花のやうで、色は白く、微し香しい。細かい實を結ぶ。根は長く白く、虛軟で節鬚があり、形狀は泥菖蒲の根のやうだ。造花指南に『五月花を採つて雄黃を制すべし』とある。蘇恭の、水葒に似て三黑點があるといふそのものは、馬蓼のことで三白ではない。藏器の說が正しいが、しかし葉だけはやはり薯蕷には似てゐない。

【氣　味】【甘く辛し、寒にして小毒あり】【主　治】【水腫、脚氣、大、小便を利し、痰を消し、癖を破り、積聚を除き、丁腫を消す】(唐本)【搗いて汁を絞つて服すれば、吐逆させ、癨、及び胸膈の熱痰、小兒の痞滿を除く】(藏器)【根は脚氣風毒の脛腫を療ずる。酒で擣いて服するも甚だ效驗がある。又、湯に煎じて癬瘡を洗ふ】(時珍)

(一)鼇繭草（拾　遺）

和名　しろばなさくらたて
學名　Polygonum Japonicum, Meisn.
科學　たで科(蓼科)

【集　解】藏器曰く、濕地に生ずる。蓼ほどの大さで、莖は赤く、花は白い。東方の土地にもある。

【氣　味】【辛し、平にして毒なし】【主　治】【諸蟲。蠶類に咬まれて毒が腹に入る虞あるには、これを煮て服す。また擣いて諸瘡に傅ける】(藏器)

(二)蛇繭草（拾　遺）

和名　いぬいたどり
學名　Polygonum Reynoutria, Makino.
科名　たで科(蓼科)

(一)繭ヲ大觀本草ニ茼ニ作ル。牧野曰フ、是レ我邦先禮ノ充テタルさくらたで予、集解ノ文餘リ簡單デ能ク考ヘ難イガ今姑ク盲目的ニ之レニ從ヒ置ク、然シサウトスレバ其品中ノしろばなさくらたでガ之レニ近イヤウデアル。

(二)大觀ニ繭ヲ茼ニ作ル。牧野曰フ、姑ク小野

集解 藏器曰く、平地に生ずる。葉は苦杖に似て小さく、節が赤い。高さ一二尺のものだ。これを種ゑれば蛇を辟ける。また一種、莖が圓くて芋に似た草があるが、これも蛇毒に傅ける。

愼微曰く、按ずるに、百一方に『(二)關東に、形狀が芋に似て、莖が四角で節の赤い草がある。これを採んで蛇毒に傅ければ、毒を摘み取つて棄てるやうに顯著なものだ。これは蛇(三)蔄草と名ける草だ』とある。また鼠(四)蔄草といふ草がある。卽ち後章に掲げる莽草のことだ。

氣味 (缺)　主治 【蛇、虺、毒蟲に螫されたときは、根、葉を取つて搗き、咬まれた箇所へ傅ける。黃水を下すものだ】(藏器)

(一)虎杖 (別錄中品)

和名 いたどり
學名 Polygonum Reynoutria, Makino.
(= Polygonum cuspidatum, Sieb. et Zucc.)
科名 たで科(蓼科)

校正 木部より此に移し入る。

釋名 苦杖(拾遺) 大蟲杖(藥性) 斑杖(日華) 酸杖 時珍曰く、杖とはそ

蘭山ニ從ヒ謬クガ之レガ果シテ正シイ說カ分ラヌ、此ノ如ク痩セタモノヲ土佐デハ葉いたづりト呼ブ、是レハ固ヨリいたどりト別種デハナイ。

(二)關東ハ函谷關以東ノ古稱、今ノ河南地方ヲ指ス。

(三)大觀ニ蔄ニ作ル。

(四)大觀ニ蔄ニ作ル。此書十七卷莽草ノ釋名ニ鼠莽、弘景曰ク、莽木作蔄字俗訛呼爾ノミトアリ。

(一)牧野曰フ、虎杖ヲいたどりトスルハ正シイ事デアル、集解ニ弘景、保昇、頌共ニ叢ヲ成ス莖ニ斑紋ヲ說イテ居ル、宗奭ノ言フ所ノモノハ何物カ分ラヌ、いたどりハ

我邦民間デモ其莖下葉ヲ解熱劑トシテ使用シテ居ル處ガアル。

(二)大觀ニ八ニ作ル。

(三)汾州ハ石部石膏ノ註、越州ハ石部蛇黄ノ註、滁州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

の莖を形容したもの、虎とはその斑を形容したものだ。或は一名杜牛膝といふが、誤だ。それは一種の斑杖で蒻頭に似たものだ。同名異物である。

【集解】弘景曰く、田野に甚だ多い。形狀は大馬蓼のやうで、莖に斑があり、葉が圓い。

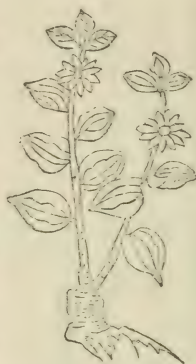
保昇曰く、所在にある。下濕の地に生え、樹になつて高さ一丈餘になる。その莖は赤く、根は黄色だ。二月、(二)三月に根を採つて日光で乾す。

頌曰く、現に(三)汾州、越州、滁州に產し、處處にある。三月苗が生え、莖は竹筍のやうな形狀で、表面に赤い斑點がある。初生から枝が分れ、葉は小杏葉に似たものだ。七月花を開き、九月實を結ぶ。南方諸地の產には花がなく、根は皮が黒く、破り開けば黄色で柳根に似たものだ。また高さ一丈餘のものもある。爾雅に『蒤は虎杖なり』とあり、郭璞の注に『葒草に似て粗く大きく、細刺があり、物を赤く染め得る』とあるがこの物だ。

宗奭曰く、これは草藥である。蜀本草に『木になり、高さ一丈餘になる』とあるは誤だ。大體皆寒菊に似たものだが、花、葉、莖、蕊のやや大なる點が異ふ。そし

て蔓、葉には淡黒斑がある。六七月に次第に花を開き、九月になると花が咲かなくなる。花瓣は四出で色は桃花のやう、やや大きくて外面の色が微し深い。陝西地方の山麓や水の邊に甚だ多い。

○斅曰く、凡そこれを用ゐるには、誤つて天藍、及び斑袖根を用ゐてはならぬ。この二味はいづれもよく似たものだ。

〔虎杖〕

○機曰く、諸家の註は、或は葒に似たといひ、杏に似たといひ、寒菊に似たといひ、各々相合致しない。産地の相異に依つてかやうな不同があるのかもしれぬ。

○○時珍曰く、この草は、莖は葒、蓼に似てゐる。葉は圓くして杏に似てゐる。(四)根は黃で柳に似てゐる。花の形状は菊に似て、色は桃花に似てゐるものだ。これを綜合して觀れば、決して同じからぬといふことはない。

根 【修治】 ○斅曰く、これを採取したならば、細かに剉んで葉に包み、一夜置いて(五)出し、晒し乾して用ゐる。

(四)金陵本ニ根ヲ之ニ作ル。誤ナルコト必セリ。

(五)出、大觀ニ據テ補入ス。

(六)〔氣味〕【微溫なり】 權○曰く、甘し、平にして毒なし。宗奭○○曰く、味は微し苦い。今一般に、暑季に多く根の煎汁を飲にするが、甘草を配合すればこそであつて、さなくば飲むに堪へないものだ。別錄の本文には味の説明がない。藥性論に『甘し』とあるが、それは甘草の味で、虎杖の味ではない。〔主治〕【月水を通利し、留血、癥結(ちようけつ)を破る】(別錄)【酒に漬けて服すれば暴癥に主效がある】(弘景)【風が骨節の間にあるもの、及び血瘀(けつお)には、煮て酒に作つて服す】(藏器)【大熱煩躁を治し、渴を止め、小便を利し、一切の熱毒を壓す】(甄權)【産後の血運、惡血下らずして心腹脹滿するを治し、膿を排し、瘡癤(さうせつ)、撲損瘀血を治し、風毒、結氣を破る】(大明)【灰に燒いて諸惡瘡に貼る。焙じ研り、煉蜜で丸にして陳米飲で服すれば、腸痔下血を治す】(蘇頌)【研末して酒で服すれば、産後の瘀血、血痛、及び墜落撲損の昏悶(こんもん)を治するに有效である】(時珍)

〔發明〕 權○曰く、暑季に、根と甘草とを共に煎じて飲にすれば、琥珀(こはく)のやうな愛すべき色になり、味も甚だ甘美だ。瓶に入れて井戸に入れ、冷え澈らせて水のやうにしたものを、當世一般に冷飲子と呼び、茗よりも貴重な飲料として用ゐてゐる。

(六) 木村(康)曰ク、いたどりハクスピダチン、ポリゴニンノ他一種ノ配糖體ヲ含有シ、此物ハ加水分解ニヨリエモヂン、メチルエモヂン等ヲ生成ス。藥誌、明、四一(三一四)三四九。W. P. 175. P. J. 1896(56) 84. J. chm Soc. 1895.(67)1084; Bull. Sci Pharw. 1907 (14) 698.

(七)食物本草ニ米下ニ粉字アリ。

(八)糜餻ハ乾菓子ノコトカ。

(九)鄞縣ハ漢ニ置ク、故城ハ今ノ浙江省奉化縣ノ東ニ在リ。五代ノ梁ニ今ノ浙江省鄞縣ノ地ニ移ス。

極めて暑毒を解すものだ。(七)米をその汁で浸して(八)糜餻にすれば更に美味だ。搗いて末にし、酒に浸して常に服すれば、婦人の經脈不通を破る。妊婦は服してはならない。

時珍曰く、孫眞人千金方に、婦人の月經不通で腹內積聚し、虛脹して雷鳴し、四肢沈重するを治し、また男子の積聚をも治する虎杖煎といふがあつて、それは、高地の虎杖根を取り、剉んで二斛、水二石五斗を一斗半に煮取つて滓を去り、醇酒五升を入れて餳のやうに煎じ、一合づつを服して反應あるを程度とする。又、許學士の本事方には『男子、婦人の諸般の淋疾を治するに、苦杖根を洗淨し剉んで一合、水五合を一盞に煎じて滓を去り、乳香、麝香少量を入れて服す。(九)鄞縣の尉耿夢得の內室が、沙石淋を患つて已に十三年を經過し、排尿する毎に忍ぶべからざる楚痛を感じ、便器に小便が落ちると共に沙石の音がサラサラと聞える程で、あらゆる方も效驗がなかつたが、この方を得て服してから一夕にして癒えた。これは予が目擊した事實だ』とある。

附方 舊三、新三。

【小便五淋】苦杖を末にし、二錢づつを飯飲で服す。(集驗方)

【月水不利】虎杖三兩、凌霄花、沒藥一兩を末にし、一錢づつを熱酒で服す。○又ある方では、月經不通で腹が甕のやうに大きくなり、呼吸が短く、死せんとするを治す。虎杖一斤を頭を去つて暴乾して切り、土瓜根汁、牛膝汁二斗を用ゐ、虎杖を水一斛に一夜間浸して二斗に煎じ、前記の二汁を入れて共に煎じて餳のやうにし、晝二回、夜一回、一合づつを酒で服す。宿血が下るものだ。（聖惠方）【時疫流毒】毒が手、足を攻めて腫痛し、斷れんとするほど痛むには、虎杖根を剉んで煮出した汁に漬ける。（肘後方）【腹中の暴癥】石のやうに硬くして痛刺するは、治療を加へねば百日以內に死亡する。これには、虎杖根を水の上に影を映さぬやうにして一石餘を採り、洗ひ乾かして末に搗き、（一〇）秫米五升を炊いた飯に入れて攪きまぜ、好き酒五斗に漬けて封じ、藥が溶けて飯が上に浮ぶを待ち、一升半を飲む。鮭魚、及び鹽を食つてはならぬ。ただ虎杖を乾したもの一斗を取つて薄酒に浸し、始めは少量づつ日每に三回服するもよし。癥はそれで下る。癥を治するには、この方が非常に他の諸藥に勝るものだ。（外臺秘要）【氣奔怪病】全身の皮膚の裡に、突然混混として波浪の如き感覺を生じ、耐へ難く痒く、抓けば出血して治效の加へやうなき病を氣奔と

（一〇）秫ハ稻ノ別名。

いふ。苦杖、人參、青鹽、細辛各一兩を一服とし、水で煎じて少量づつ飲み盡せば癒える。(夏子益奇疾方)【消渴引飮】虎杖、燒いた海浮石、烏賊魚骨、丹砂等分を末にし、一日三回、渴した時に麥門冬湯で二錢を服す。酒色、魚、麪、鮓、醬、生物、冷物を忌む。(衞生家寶方)

(一)蕕 (拾遺)

和名 無し
學名 未詳
科名 禾本科(禾本科)

【校正】 有名未用、別錄の馬唐を併せ入る。

【釋名】 馬唐(別錄) (二)馬飯(別錄) 羊麻(別錄) 羊粟(別錄) 蔓于(爾雅) 軒于

藏器曰く、馬が餹のやうに飯のやうにこれを食ふ。それで馬唐、馬飯と名けたのだ。

時珍曰く、羊もこれを食ふところから、羊麻、羊粟といふ。その臭氣に庮臭があるところから蕕といふのであつて、蕕とは庮の意味だ。朽木の臭氣のことである。

この草は、葉が頗る薫に似て臭い。故に左傳に『一薫一蕕、十年尚ほやはり臭があ

(一) 大觀ニハ蕕下ニ草字アリ。牧野曰フ、蕕ハ何カ禾木科ノモノデアルガ能ク明ラメ難イ、先哲蕕ヲくまつづら科(馬鞭草科)ノかりがねさう(Caryopteris divaricata Maxim.)ニ充ツルハ非デアル、是レハ只ダ臭イトイフノミデヨイ加減ニ極メタモノデアル。

(二) 馬飯ノ名別錄ニ見エズ、大觀本草ニ爾雅ヲ引テ馬唐馬飯ナリトアレドモ、爾雅釋草ニ此文ナクシテ廣雅ニ此文アリ。

る』といふのはこの草のことだ。孫升の談圃に、これを香薷としてあるのは誤だ。これは別錄の馬唐のことである。茲には一條に併記した。

【集解】別錄に曰く、馬唐は下濕の地に生じ、莖に節があつてそれに根が生える。五月に採收する。

藏器曰く、南方諸地の荒廢した田畑に生える。節毎に根が生えて土に著くさまは結縷草のやうだ。馬の飼糧になる。又曰く、蕕は水田中に生え、形狀は結縷草のやうで葉が長い。馬が食ふ。

〔蕕　草〕

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】藏器曰く、大寒なり。

【主治】【馬唐は、中を調へ、耳、目を明にする】(別錄)【煎じて取つた汁は、目を明にし、肺を潤ほす。又曰く、蕕は、水氣を消す。濕痺、脚氣、頑痺、虛腫、小腹急、小便赤澀には、いづれも赤小豆と合せて煮て食ふ。鹽を入れてはならぬ。絞汁を服すれば消渇を止める。葉を搗いて毒腫に傅ける】(藏器)

(一)萹蓄　音は褊畜（ヘンチク）である。　（本經下品）

和名　にはやなぎ　みちやなぎ
學名　Polygonum aviculare, L.
科名　たで科（蓼科）

【釋名】　扁竹（弘景）　扁辨（呉普）　扁蔓（呉普）　粉節草（綱目）　道生草　時珍曰く、許愼の說文には、扁筑と書いて、筑は竹と同音としてある。節間に粉があり、道旁に多く生える。故に方士は粉節草、道生草などと呼ぶ。

【集解】　別錄に曰く、萹蓄は(二)東萊の山谷に生ずる。五月に採つて陰乾する。弘景曰く、處處にあるもので、地に布いて花を生じ、節間が白く、葉が細くして綠色だ。一般に扁竹と呼んでゐる。

〔萹　蓄〕

頌曰く、春季中に道旁に地に布いて生える。苗は瞿麥に似たもので、葉は細く綠で竹のやう、莖は赤く、釵股のやうで節間に花が出る。花は甚だ細微で青黄色、根は蒿根のやうなものだ。四五月に苗を採つて陰乾する。蜀圖經には『二月に日光

(一)牧野曰フ、普通ニ路傍ナドニ多キ一年生本デアル。

(二)東萊ハ漢ノ郡名。今ノ山東省登州、萊州ノ地ナリ。掖縣ニ治ス。

で乾す』とあり、郭璞注爾雅には『小藜に似て莖節が赤く、よく道旁に生える。食つて蟲を殺し得るものだ』とあるがこの草である。(三)或は爾雅にある王芻がこの草だともいふ。

○時珍曰く、この草は、葉は落帚葉に似て尖らず、莖は弱くして蔓を引き、節間が迫つてゐる。三月蓼藍花のやうな細かな紅花を開き、細かな子を結ぶ。爐火家では、燒灰、煉霜に一種の水扁筑を用ゐ、それを藩と呼んでゐる。藩の音は督(トク)である。說文に出てゐる。

(四)**氣味**　【苦し、平にして毒なし】　權曰く、甘く澁し。

主治　【浸淫疥瘙、疽痔。三蟲を殺す】(本經)　【婦人の陰蝕を療す】(別錄)　【煮汁を小兒に飲ますれば、蚘蟲を療ずるに有效だ】(甄權)　【霍亂、黃疸を治し、小便を利し、小兒の(五)魃病を治す】(時珍)

附方　舊六、新三。　【熱淋澁痛】扁竹の煎湯を頻りに飲む。(生生編)　【熱黃疸】扁竹の搗汁一升を頓服する。多年に亙るものは一日に再服する。(藥性論)　【霍亂吐利】扁竹を豉汁の中に入れ、五味を投じて羹に煮て食ふ。(食醫心鏡)　【丹石の反動が眼に

(三)或ヨリ以下ノ文大觀ニハ衞詩綠竹猗猗說者曰綠王芻也竹扁竹也卽釋此萹蓄也云云ニ作ル、時珍ノ引用ハ文意ヲ誤解セリ。

(四)木村(康)曰ク、にはやなぎハ全草中糖二―三%及少量ノ單寧、蠟等ヲ含有ス。Med Woclo 1903 (4) 381.

(五)魃病トハ和名ヲトミスハリ、小兒未ダ乳ヲ離レザル中母復孕ミ兒病ヲ致スモノ。

現はれたもの〕丹石を服した毒が眼に發して腫痛するには、扁竹根一握を洗ひ搗いて汁を服す。(食療本草)　〔蚘咬心痛〕食療に『小兒が蚘咬で心痛し、顏色青く、口中に沫を出し、瀕死なるには、扁竹十斤を取つて剉み、水一石で一斗に煎じ、滓を去つて餳のやうに煎じ、食事を取らずに一夜隔てて空心に一升を服すれば蟲が下る。かくて常に煮汁で飯を炊いて食ふ』とある。○海上歌には『心頭急痛して當る能はざるには、我に仙人海上方あり。萹蓄を醋煎して通口に嚥む。されば一時間位にして便ち安康なり』とある。〔蟲が下部を食ふ病〕蝸牛のやうな形狀の蟲が下部を食つて痒きには、扁竹一把を水二升で煮熟し、五歲の小兒ならば三五合を空腹に服す。(楊氏產乳)〔痔の腫痛〕扁竹の搗汁一升を一二服する。なほ瘥えぬときは再服する。また汁を取つて麪に和し、餺飥にして一日三回煮て食ふ。(藥性論)〔惡瘡の痂痒〕痛むには、扁竹を搗いて封ずる。痂が落ちて瘥える。(肘後方)

(一)藎草

藎の音は燼(ジン)である。

(本經下品)

和名　てうせんがりやす
學名　Diplacne serotina, Link.
科名　禾本科(禾本科)

(一)牧野日ク、藎草ハてうせんがりやすデアルコト植物名實圖考卷ノ十一ニ著ハ

シテアル如クデアル集解中ノ文ノ竹ニ似テ居ルト記シテアル事ハ能ク此草狀ヲ彷彿セシメタモノデアル、我邦ノ學者從來之レヲこぶなぐさ(Arthraxon ciliaris, Beauv.)ニ充テ居レドモ誤リデアル。

(二) 瑯琊ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。本書ニハ瑯琊平昌縣ニ出ヅトアリ。當時ノ平昌縣ハ今ノ山東省青州府安丘縣ノ南六十支里、大沽河ノ上流ニ在リ。卽チ漢ノ瑯琊郡ニ屬ス。

【釋名】 黃草(吳普) 菉竹(唐本) 菉蓐(唐本) 莨草(綱目) 盭草 盭の音は戾(ルキ)である。王芻(爾雅) 鴟脚莎 時珍曰く、この草は綠色の草で、物を黃に染め得るものだから、黃といひ、綠といふ。莨、盭といふのは、北方地方で綠の字を讀む發音の轉訛だ。古代には、官の物を染める染料としてこの草を朝廷に貢納し、これを王芻と稱して進獻したものだ。藎は進むの意味と忠の意味とがあつて、忠に進む者を藎臣といふ。詩に『終朝綠を採る、一掬に盈たず』といひ、許愼の說文に『莨草は以て黃を染むべし』といひ、漢書に『諸侯は盭綬』とあり、同書晉灼の注に『盭草は(二)瑯琊に出る。艾に似たもので、物を染め得る。それでその色を綬の名稱として盭綬と呼んだのだ』とある。いづれもこの草をいふのだ。

〔藎草〕

禹錫曰く、爾雅に『菉は王芻なり』とあり、孫炎の注に『これは菉蓐草のことで、今は鴟脚莎と呼ぶ』とある。詩に『菉竹猗猗たり』とあるはこの草のことだ。

【集解】別錄に曰く、藎草は(三)青衣の川谷に生ずる。九月、十月に採る。物を金色に染める。普曰く、太山の山谷に生ずる。恭曰く、青衣は縣の名で、益州の西に在る。この草は今は處處の平澤、溪澗の邊りに皆ある。葉は竹に似て細く薄く、莖もやはり圓く小さい。(四)荊襄地方ではこれを煮て物を黄色に染めるが、その色は極めて鮮かに染め上る。俗に菉蓐草と名けるものだ。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】權曰く、神農、雷公は苦しといふ。之才曰く、鼠負を畏る。【主治】【久欬の上氣喘逆、久寒の驚悸。痂疥、白禿、瘍氣。皮膚の小蟲を殺す】(本經)【身熱の邪氣、小兒の身熱を治す】(吳普)【一切の惡瘡を洗ふに有效である】(甄權)

(一)蒺藜 (本經上品)

和名 はまびし
學名 Tribulus terrestris, L.
科名 はまびし科(蒺藜科)

【釋名】茨(爾雅) 旁通(本經) 屈人(本經) 止行(本經) 休羽(本經) 升推

(二)弘景曰く、道路や墻上に多く生え。葉は地に布き、子に小さい菱のやうな刺がある。

(三)青衣、蘇恭ハ益州ニ在リトイフ。即チ今ノ四川省雅安縣ノ北ニ故城アリ。漢ニ縣ヲ置ク。當時ノ羌國ナリ。

(四)荊襄ハ山草類貫衆ノ註ヲ見ヨ。

(一)牧野曰フ、我邦ニモ產シ海邊ニアツテ長ク莖ヲ砂場面ニ曳テ居ル一年生草本デアル、濱ニ在ツテ其實ひし(菱)ノ實ノヤウニ刺ガアルカラはまびしト謂ツタモ

ノデアル。

(二)馮翊ハ石部孔公孼ノ註ヲ見ヨ。

長安に最も多く、通行人の木履に多く著く。現に軍隊では鐵でこの果實の形を鑄造して敵の通路に布き、それを鐵蒺藜と呼んでゐる。易に『蒺藜に據る』とあるは、その凶鋭にして物を傷けるの意味をいつたのだ。詩に『墻に茨あり』とあるは、掃ひ清めることが出來ぬといふことで、頑迷で鄙しく穢れたことを諷刺したものだ。方に用ゐることは甚だ稀だ。

蒺藜

時珍曰く、蒺は疾(トシ、ハヤシ)である。藜は利(スルドシ)である。茨は刺(トゲ)である。この草は人を刺し傷けることが甚だ疾く利いといふことだ。屈人、止行は、いづれもこの草が人を傷めることを表はした名稱だ。

【集解】別錄に曰く、蒺藜子は(二)馮翊の平澤、或は道旁に生ずる。七月、八月實を採つて暴乾する。

頌曰く、冬季にも採る。黄白色のものだ。郭璞の爾雅注に『地に布いて蔓生し、細葉で子に三角があり、人を刺す』とあるがこのものだ。又、白蒺藜なる一種があ

(三)同州沙苑ハ麻黄ノ註ヲ見ヨ。

(四)馬藨子ハ山扁豆ノ一名。

つて、現に(三)同州沙苑の牧場に最も多く生えてゐるが、近道にもある。葉は緑色で蔓が細く、沙上一面に布いて生え、七月に豌豆の花のやうで黄紫色の小さい花を開き、九月に莢の實を結ぶ。その實を採るのである。味は甘くして微し腥く、褐緑色

〔沙苑蒺藜〕

で、蠶種子に似てやや大きく、また(四)馬藨子に甚だ似てゐるが馬藨子の方が微し大きい。これは藥には入れられぬものだから、精細な識別を要する。

宗奭曰く、蒺藜には二種あつて、一種は杜蒺藜といふ。即ち今の道旁に地に布いて生え、小さい黄花を開き、芒刺を結ぶものだ。一種は白蒺藜といふ。同州沙苑の牧場に生える。子は羊内腎のやうで、黍粒ほどのものだ。補腎の藥として今一般に多く用ゐる。風患者にはただ刺蒺藜のみを用ゐる。

時珍曰く、蒺藜の葉は、初生の皂莢の葉のやうに正しく整つて愛すべきものだ。刺蒺藜は、形状が赤根菜の子のやうで、また細菱の三角に四箇の刺があり、實に仁がある。白蒺藜といふは、長さ一寸ほどの莢を結び、その中の子は大さ脂麻ほど、

形狀は羊腎のやうで綠色を帶びてゐる。今は一般にこれを沙苑蒺藜と呼んで他のものと區別してゐる。

子 【修治】 斅曰く、凡そこれを使ふには、揀り淨めて正午から午後六時まで蒸して日光で乾し、木臼で搗いて刺を全部落し、酒を拌ぜて再び正午から午後六時まで蒸し、日光で乾して用ゐる。大明曰く、藥に入れるには、丸と散とに拘はらず、いづれも炒つて刺を去つて用ゐる。

（五）【氣味】 【苦し、溫にして毒なし】 別錄に曰く、辛し、微溫なり。權曰く、甘し、小毒あり、志曰く、その性は宣通するもので、久しく服しても冷えずして壅熱のないところを見れば、これは性溫なりといふが正しい。之才曰く、烏頭が使となる。

【主治】 【惡血。（六）結瘕積聚を破る。喉痺、乳難。久しく服すれば、肌肉を長じ、目を明にし、身を輕くする】（本經）【身體の風癢、頭痛、欬逆、傷肺、肺痿。欬を止め、氣を下す。小兒の頭瘡、癰腫、陰㿉には、粉ぶし摩るがよし】（別錄）【諸風、癧瘍を治し、吐膿を療じ、燥熱を去る】（甄權）【奔豚腎氣、肺氣の胸膈滿を治し、分娩を催ほし、胎を墮し、精を益し、水臟が冷えて小便の多きものを療じ、尿の遺

（五）木村（康）曰ク、はまびしの成分ハタンニンヲ含有ス。V. S. D. 1211; I. M. P. 229.

（六）結字大觀ニヨリテ補フ。

（七）發乳ハ婦人ノ乳ニ癰疽ヲ發スルヲ云フ。
（八）風祕ハ祕結ノ一種ナラン。

瘻、泄精、尿血腫痛を止める】（大明）【痔漏、陰汗、婦人の（七）發乳、帶下】（蘇頌）【（八）風祕、及び蚘蟲の心腹痛を治す】（時珍）

白蒺藜 〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【腎を補し、腰痛、泄精、虚損、勞乏を治す】（時珍）

〔發明〕 頌曰く、古方には、いづれも刺あるものを用ゐ、風を治し、目を明にするに最も良しとしてあり、神仙方にも、蒺藜を單服する法があつて『黑、白を問はず、ただ堅く實するものを取り、舂いて刺を去つて用ゐる』といつてある。

時珍曰く、古方では、補腎、治風に皆刺蒺藜を用ゐたが、後世では、補腎には多く沙苑蒺藜を用ゐ、或は熬膏して藥に和す。恐らくその功力も甚だ相遠からぬものと見える。刺蒺藜は黃に炒つて刺を去り、麪に磨つて餅にし、或は蒸して食へば、饑饉の際の代用食になる。

〔附方〕 舊九、新八。 【服食法】蒺藜子一碩を、七八月のよく熟した時に採收して日光で乾し、舂いて刺を去つて末に杵き、二錢づつを、一日三回、新汲水で調へて服す。中絕せずに繼續すれば、穀食を斷つて長生する。これを服すること一年の

後には、冬も寒からず夏も熱からぬやうになり、二年にして老いたるは少くなり、白髮は黑に復し、落ちた齒が生え更り、三年繼續すれば、身體が輕くなつて長生する。(神仙祕旨)【腰脊の引痛】蒺藜子を搗いて末にし、蜜で和して胡豆大の丸にし、一日三回、酒で二丸づつを服す。(外臺祕要)【全身の浮腫】杜蒺藜を湯に煎じて毎日洗ふ。(聖惠方)【突然五尸に感染したもの】蒺藜子を搗いて末にし、蜜で胡豆大の丸にし、一日三回、二丸づつを服す。(肘後方)【大便風祕】蒺藜子を炒つて二兩、豬牙皂莢を皮を去り酥で炙いて五錢を末にし、一錢づつを鹽茶湯で服す。(普濟方)【月經不通】杜蒺藜、當歸等分を末にし、三錢づつを米飮で服す。(儒門事親)【分娩を催し、胞衣を下す】難產で胎兒が腹中に在るもの、幷に胞衣の下らぬもの、及び胎兒の死亡せるものには、蒺藜子、貝母各四兩を末にし、米湯で(九)三錢を服す。少頃して下らぬときは再服する。(梅師方)【蚘蟲の心痛】淸き水を吐くには、七月七日に蒺藜子を採つて陰乾し、方寸匕づつを一日三回服す。(外臺祕要)【萬病積聚】七八月に蒺藜子を採收し、水で煮熟して曝乾し、蜜で梧子大の丸にし、七丸づつを酒で服し、反應のあるを度とする。その汁をば飴のやうに煎じて服す。【三十年の失明】補肝散

(九)大觀ニ三錢ヲ一匙ニ作ル。

——蒺蔾子を七月七日に採つて陰乾し、搗いて散にし、一日二回、方寸匕を食後に水で服す。(外臺祕要)　【牙齒の動搖】疼痛するもの、及び動くものには、杜蒺蔾を角を去り、生で研つて五錢を淡漿水半盌に煎(ひた)し、鹽を入れ溫めて漱(くちそそ)げば甚だ效がある。また根を灰に燒いて牙に貼れば固くなる。(御藥院方)　【牙齒の出血】出血止まずして動搖するには、白蒺蔾末を每早朝擦る。(道藏經)　【牙が動いて疼(うづ)くもの】蒺蔾の子、或は根を末にして日每に揩(す)る。(瑞竹堂方)　【鼻塞で水を出すもの】多年嗅覺を失へるには、蒺蔾二握を道路に置いて車に碾(ひ)かせ、水一大盞で半盞に煮取り、仰臥して先づ口一ぱいに飯を含み、その汁一合を鼻から灌ぐ。二回灌いだだけで嚔(くさめ)を出し、共に赤蛹蟲に似た息肉一兩箇を噴出して癒える。(聖惠方)　【顏の瘢痕】蒺蔾子、山梔子各一合を末にして醋に和し、夜塗つて朝洗ふ。(救急方)　【白癜風(はくでんぷう)】白蒺蔾子六兩を生で搗いて末にし、一日二回、二錢づつ湯で服す。一箇月で根を絕ち、半箇月で白い處に紅點が現はれる。神效あるものだ。(孫眞人食忌)　【一切の丁腫】蒺蔾子一升を(一〇)熬つて搗き、醋で和して腫の頭を封ずれば根が拔ける。(外臺祕要)

花　【主　治】【陰乾して末にし、溫酒で二三錢づつを服すれば白癜風を治す】(宗奭)

(一〇)大觀ニ熬搗ヲ作灰ニ作ル。

苗 【主治】 〔煮た湯で疥癬、風瘡の痒ごものを洗ふ〕（時珍）

【附方】 舊二、新一。 〔鼻から淸涕を流すもの〕 蒺藜苗二握、黃連二兩、水二升を一升に煎じ、少しづつ鼻から灌いで嚔を出す。再服を過ぎずして效がある。（聖惠方）

【諸瘡腫毒】 蒺藜の蔓を洗つて三寸に截ち、水五升で二升に煮取つて滓を去り、銅器に入れてまた一升に煮取り、小さい器で煮て飴のやうにし、腫れた處へ塗る。（千金方）

【蠼螋尿瘡】 瘡が全身に瀰漫すれば死亡する。蒺藜葉を搗いて傅ける。葉が無ければ子を用ゐる。（二）（備急方）

（一）穀精草（宋開寶）

和名　ほしくさ、みづたまさう
學名　Eriocaulon Sieboldianum, Steud.
科名　ほしくさ科（穀精草科）

【釋名】 戴星草（開寶） 文星草（綱目） 流星草　時珍曰く、田に生ずる穀物の餘氣から生えるといふので穀精といふ。志曰く、白い花が星に似てゐるところから戴星などの諸名がある。

【集解】 頌曰く、處處にある。春穀物を作る田に生え、葉、莖倶に靑く、根、

（二）大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

（一）牧野曰フ、此ニ學ゲタ穀精草ハ今日吾人ノ品種ヲ定ムルヤウナ徵ヲ穿ツ的ノモノデナク、凡ソ同樣ナ姿ヲシテ居ルモノヲ一樣ニ見做シテノ名デアラウ。其レ故コレハ必ズシモ一種ニ限ラレタ名デハナイト思フノガ穩カナ見デアル、今植物

名實圖考卷ノ十四ノ圖ヲ參考トシテ、先ヅ我邦ニモ又支那ニモ產スルほしくさ即チ下ニ記スル學名ノモノト定メテ置ク E. australe, R. Br. ハ支那南方所產ノ種ユヱ今之レヲ避ケテ置ク。

(二) 秦州、隴州ハ山草類胡黃連奏隴ノ註參照。

(三) 江湖ハ山草類茈胡ノ註ヲ見ヨ。

(四) 稻草ノ初生ヲ云フ。

花はいづれも白色だ。二月、三月に花を採る。花は白く、小さく圓くして星に似たものを用ゐる。この草で馬を飼へば肥え、虫顙毛焦の病に主效がある。又、莖梗が長く、節があり、根の微し赤い一種があつて、(二)秦州、隴州地方に出る。

〔穀精草〕

時珍曰く、この草は穀物を刈取つた後の荒田に生えるもので、(三)江湖の南北に多い。一種叢生のものがあつて、葉は(四)嫩穀秧に似て細い莖が抽き出で、高さ四五寸になり、莖の端に點點として星の亂れたやうな小さい白花がある。九月花を採つて陰乾するものだ。二三月に採るといふは誤である。

花 【氣味】「辛し、溫にして毒なし」 藏器曰く、甘し、平なり。大明曰く、水銀を砂子に結晶せしめ得るものだ。【主治】「喉痺、齒風痛、諸瘡疥」(開寶) 「頭風痛、目盲翳膜、痘後の生翳。血を止める」(時珍)

【發明】 時珍曰く、穀精は、體輕く、性浮であつて、能く陽明の分野に上行する 凡そ目中の諸疾を治するに加へて用ゐるが甚だ良し。目を明かにし、翳を退け

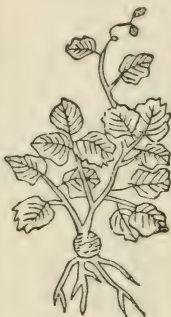
る功力は、菊花以上のものであるらしい。

附方　舊一、新七。【腦痛、眉痛】穀精草二錢、地龍三錢、乳香一錢を末にし、半錢づつを煙に燒き、その痛の左右に隨つて筒で鼻を薫ずる。（聖濟錄）【偏正頭痛】集驗方では、穀精草一兩を末にして白麪糊で調へ、切つて紙に攤して痛む箇所へ貼り、乾けば換へる。○聖濟方では、穀精草末、銅綠各一錢、硝石半分を、痛の左右に隨つてその方の鼻から嗜ふ。【鼻衄】止まぬには、穀精草を末にし、熟麪湯で二錢を服す。（聖惠方）【目中の翳膜】穀精草、防風等分を末にして米飮で服す。甚だ效驗がある。（明目方）【痘後の目翳】隱澀して涙を出し、久しく退かぬには、穀精草を末にし、柿、或は豬肝片につけて食ふ。ある方では、蛤粉等分を加へ、共に豬肝中に入れて煮熟し、日毎に食ふ。またある方は夜明沙の條に載せてある。（邵眞人濟急方）【小兒の雀盲】日暮になると忽ち物が見えなくなるものである。羯羊肺一頭分を水で洗はずに竹刀で剖開し、穀精草一撮を入れて瓦罐で煮熟し、日毎に食ふ。屢〻效驗を擧げた。鐵器を忌む。もしそれが食へぬものは、炙熟して搗き、綠豆大の丸にして三十丸づつを茶で服す。（衞生家寶方）【小兒の暑氣中り】吐し、泄し、煩渴する

には、穀精草を燒いて性を存し、器を覆せて置いて冷し、末にして冷米飲で半錢づつを服す。（保幼大全）

(一)海金沙（宋嘉祐）

和名　つるしのぶ、かにくさ
學名　Lygodium japonicum, Sw.
科名　ふさしだ科（海金沙科）

釋名　竹園荽　時珍曰く、その色が黃で細沙のやうなものだ。その名稱に海なる文字を冠したのは、神聖視した意味である。俗に竹園荽と名けるのは葉の形の形容だ。

集解　禹錫曰く、(二)黔中郡に產し、湖南にもある。(三)初生は小さい株になり、高さは一二尺のものだ。七月その草の全科を日中に暴し、少し乾いた時、紙の上に置いて杖で叩けば細沙が紙に落ちる。落ち盡きるまで幾度も暴して叩く。

（海金沙）

時珍曰く、江浙、湖湘、川陝にいづれもあ

(一)牧野曰フ、我邦ニモ多キ蔓生羊齒デアル、藥用ニハ其胞子ヲ用ウル。
(二)黔中ハ山草類白及ノ漢黔ノ註參照。
(三)初生、大觀ニ據テ補フ。

る。山の林下に生えるもので、莖は線のやうに細く、竹や木の上に引き掛り、高さ一尺ばかり、葉は細く、園荽の葉のやうで甚だ薄い。表裏共に青く、表面に皺文が多く、その皺に蒲黄粉のやうな黄赤色の沙子がある。花は開かない。根は細くして堅く强い。その沙、及び草は皆藥用になる。方士はその草を採つて汁を取り、(四)砂を煮、賀を縮する。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【小腸を通利する。梔子、馬牙硝、蓬沙を配合すれば、傷寒熱狂を療ず。或は丸にし、或は散にして用ゐる】(嘉祐)【濕熱腫滿、小便熱淋、膏淋、血淋、石淋、莖痛を治し、熱毒氣を解す】(時珍)

【發明】時珍曰く、海金沙は、小腸、膀胱の血分の藥であつて、熱が二經の血分にあるものに適する。

【附方】舊一、新五。【熱淋急痛】海金沙草を陰乾して末にし、生甘草の煎湯で二錢を調へて服す。これは陳總領の方である。あるひは滑石を加へる。(夷堅志)【小便不通】臍下の滿悶するには、海金沙一兩、臘(五)南茶半兩を搗き碎き、一日二回、三錢づつを生薑、甘草の煎湯で服す。末にして服するもよし。(圖經本草)【油のやうな

(四)砂トハ丹砂ヲイフカ。賀トハ錫ヲイフ。

(五)南、大觀ニ面ニ作ル。

膏淋】海金沙、滑石各一兩、甘草梢二錢半を末にし、一日二回、二錢づつを麥門冬の煎湯で服す。（仁存方）【痛み澀る血淋】ただ水道を利すれば清濁自から分れて出る。海金沙末一錢を新汲水、或は砂餹水で服す。（普濟方）【脾濕腫滿】腹が鼓のやうに脹り、喘して横臥し得ざるには、海金沙散――海金沙三錢、白朮四兩、甘草半兩、黑牽牛の頭末一兩半を末にし、一錢づつを倒流水で煎調して服す。利を得ること妙である。（東垣蘭室祕藏）【黑く變じた痘瘡】腎に歸したものだ。竹園荽草を酒で煎じ、その身體に傅ければ直ちに發起する。（直指方）

(一)地楊梅（拾遺）

和名　すずめのやり、すずめのひえ（同名がある）
學名　Luzula campestris, DC. var. capitata, Miq.
科名　ゐ　科（燈心草科）

〔地楊梅〕

【集解】藏器曰く、江東の濕地に生ずる。苗は(二)莎草のやうなものだ。四五月に楊梅に似た子がなる。

【氣味】【辛し、平にして毒なし】【主治】【赤、白痢には、莖、子を取つて湯に煎じて服す】（藏器）

(一)牧野曰フ、集解ノ文甚ダ簡略デアル故ニ能クハ分ラナイガ茲ニ先哲ノ充テシモノニ從ッテ置ク、植物名實圖考卷ノ十四ニアル地楊梅ノ圖ハ別ノモノデアル。
(二)大觀ニ衰ニ作ル。

(一)牧野曰フ、水楊梅ヲ先輩ハいばら科(薔薇科)ノだいこんさう(Geum japonicum Thunb.)ニ充テ居レドモ中ラズ、今集解ノ文ヲ玩味シテ見ルトうまのあしがた科(毛莨科)ノきつねのぼたん (Ranunculus japonicus Langsd.) ニ彷彿スル所モアレド亦其レトモ定メ難イ。

(二)汞字類纂ニヨリ補入ス。

(三)木村(康)曰ク、だいこんさうノ根ハ加水分解ニヨリテオイゲノールヲ生ズル配糖體ヲ含有ス、此配糖體ハ西洋だいこんさうニ含有セラルルゲイント同一物ナラン。

(一)牧野曰フ、地蜈蚣ハ其品判然セス、

(一)水楊梅（綱目）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】地椒

【集解】時珍曰く、水邊に生ずるもので、枝、葉が甚だ多く、楊梅のやうな形狀の子がなる。庚辛玉册に『地椒、一名水楊梅。多く近道の陰濕の場所に生え、荒田、野中にもある。叢生で、苗、葉は菊に似てゐる。莖の端に黄色の花を開き、實は椒のやうだが、赤くない。實は(二)汞を結し、三黄、白礬を結し伏し、丹砂、粉霜を制し得る』とある。

〔水楊梅〕

(三)【氣味】【辛し、溫にして毒なし】

【主治】【疔瘡腫毒】(時珍)

(一)地蜈蚣草（綱目）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

【集解】時珍曰く、村落の(二)塍地(じょうち)や野に生え、左の蔓は右に延び、右の蔓は左に延び、葉は密生して對生し、蜈蚣(ごこう)の形のやうで、その穗も長いものだ。俗にこれを過路蜈蚣と呼び、樹に延び上るものを飛天蜈蚣と呼ぶ。根、苗いづれも用ゐる。

〔地　蜈　蚣〕

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】

【主治】【諸毒を解し、また大便不通を治す。搗汁は癰腫を療ず。搗いて塗り、幷に末にして服すれば、よく毒を消し、膿を排す。蜈蚣傷には、鹽少量を入れて搗いて塗り、或は末にして傅ける】(時珍)

【附方】新一。【一切の癰疽(ようそ)】及び腸癰、乳癰の赤腫してまだ破れぬもの、或は已に破れても膿血が散ぜず、發熱し、疼痛して能く蝕するもの、いづれも膿を排するがよし。托裏散——地蜈蚣、赤芍藥、當歸、甘草等分を末にし、二錢づつを溫酒

つるまさき(Euonymus radicans, Sieb.)ノ灌木小葉ノモノノヤウニモ想像シ得ラルルガ之レハ草本デナイカラ無論ソレデハナカラウ。

(二)塍ハ堘ニ同ジ字ニシテ水埒ナリトアリ、堤ヲ云フ。

で服す。(和劑局方)

(一)半邊蓮(綱目)

和名　みぞかくし、あぜむしろ
學名　Lobelia radicans, Thunb.
科名　ききやう科(桔梗科)

【集解】時珍曰く、半邊蓮は小草であつて、陰濕の塍塹の邊に地に就いて生える。細い梗が蔓を引き、節節から細葉が生え、秋小さい淡紅紫色の花を開く。それが蓮花の半片のやうな形だからかく名けたものだ。また急解索とも呼ぶ。

〔半邊蓮〕

【氣味】【辛し、平にして毒なし】

【主治】【蛇虺傷には、搗いてその汁を飲み、滓で傷處を塗り圍む。又、寒齁氣喘、及び瘧疾寒熱を治するには、雄黄と各二錢を搗き、盌の內側に泥つてその盌を覆せ、色の青くなるを待つて飯で梧子大の丸にし、九丸づつを空心に鹽湯で服す】(時珍)

(一)牧野曰フ、普通ニ野外田間デ見ラルル小草デ、其花冠一方ニ偏シ半邊蓮ノ名下シ得テ頗ル妙ナルヲ思ハシムル、此屬中ニハろべりあさう(L. inflata, L.)ノ毒草ガアル、之レハ北米ノ原産デアルガ屬中ニ此ノ如キモノガアルヲ見レバ、或ハ此半邊蓮ニモ有毒成分ガアルカモ知レヌト思フ。

壽域方にある。

(一)紫花地丁（綱目）

和名　いぬげんげ、たちげんげ
學名　Gueldenstaedtia multiflora, Bunge.
科名　まめ科（荳科）

【釋名】箭頭草（綱目）獨行虎（綱目）羊角子（秘韞）米布袋

【集解】時珍曰く、處處にある。葉は柳に似て微し細く、夏紫色の花を開いて角(さや)を結ぶ。平地に生えるものは莖が起ち、溝渠の邊に生えるものは蔓が出る。普濟方に『田舍の村落に生えるもので、夏、秋に小さく白い鈴のやうな倒に垂れた花を開き、葉は微し木香花の葉に似たものだ』とあるが、しかし、これは紫花とある名稱と齟齬する。恐らくは別の一種であらう。

〔紫花地丁〕

【氣味】【苦く辛し、寒にして毒なし】【主治】【一切の癰疽、發背、疔腫(ちやうしゆ)、

(一)牧野曰フ、從來我邦デ紫花地丁ヲすみれ(Viola Patrini, DC. var. chinensis, Maxim.)トシテ居レドモ中ラズ、此いぬげんげハ支那ニテハ普通品デアルケレド我邦ニハ産セヌ、救荒本草卷ノ七ニ米布袋ノ名デ其圖ガアル植物名實圖考卷ノ十二ノ圖ハ右ノ救荒本草ノ圖ヲソノママ移シタモノデアル。

瘰癧、無名腫毒、惡瘡】（時珍）

【附　方】　新八。【黄疸內熱】地丁末三錢を酒で服す。（乾坤秘韞）【稻芒の咽に粘つたもの】出ぬときは、箭頭草を嚼んで嚥み下す。（同上方）【癰疽惡瘡】紫花地丁を根のまゝと蒼耳葉等分を搗き爛らし、酒一鍾を攪ぜてその汁を服す。（楊誠經驗方）【癰疽發背】及び無名諸腫に貼る。神の如きものだ。紫花地丁草を三伏の時に採り、白麪で和して鹽醋に一夜浸して貼る。昔ある尼が發背に罹り、夢にこの方を得て數日にして痊えた。（孫天仁集效方）【一切の惡瘡】紫花地丁根を日光で乾し、罐に入れて烟に燒き、瘡に向けて薰する。黄水を出し盡して癒える。（衛生易簡方）【瘰癧、丁瘡】發背諸腫。紫花地丁根を粗皮を去つて白蒺藜と共に末にし、油で和して塗る。神效がある。（乾坤秘韞）【丁瘡腫毒】千金方では、紫花地丁草の搗汁を服す。極めて重きものと雖も效がある。○楊氏方では、紫花地丁草、葱頭、生蜜を共に搗いて貼る。瘤瘡ならば、新しい黑牛屎を加へる。【喉痺腫痛】箭頭草葉に醬少量を入れて膏に研り、點入して吐く。（普濟方）

(一)鬼針草（拾遺）

和名　こせんだんぐさ
學名　Bidens pilosa, L.
科名　きく科（菊科）

〔集解〕 藏器曰く、池畔に生えるもので、莖が四角で葉に釵脚（さきやく）のやうな椏子（あし）があり、針のやうに人の衣服に著く。北方ではこれを鬼針といひ、南方では鬼釵といふ。

〔氣味〕 【苦し、平にして毒なし】 〔主治〕 【蜘蛛、蛇の咬傷には、杵いて汁を服し、幷に傅ける】（藏器） 【蠍蠆（かつたい）の傷に塗る】（時珍）

〔附方〕 新一。 【爪を割いて肉を傷（いた）めたもの】 癒えぬには、鬼針草の苗、鼠粘子の根を搗き、その汁を臘豬脂に和して塗る。（千金）

(二)獨用將軍（唐本草）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

〔集解〕 恭曰く、林野中に生えるもので、節節から葉の心を穿つて苗が生える。

(一)牧野曰フ、鬼針草ハ下ニ記入セルヤウニこせんだんぐさデアル、せんだんぐさ(B. bipinnata, L.)ト姉妹ノ種デ共ニ原頭ニ生ジテ居ル、支那ニハ此兩品トモ産シ且兩者甚ダ能ク似テ居ルカラ、せんだんぐさノ方モ同ジク見テ鬼針草ト謂ツテ居ルデアラウト思フ從來ノ本草家ハ此鬼針草ヲせんだんぐさトシテ居ルガ、此せんだんぐさノ中ニハ吾人ガ今日稱スルこせんだんぐさモ一緒ニナツテ居ルデアラウト想ハレル。

(二)牧野曰フ、先輩此獨用將軍ヲすひかづら科(忍冬科)ノつきぬきさう(Triosteum sinuatum, Maxim.)ニ充テテ居ル

葉は楠に似たものだ。時期に拘はらず、根、葉を採つて用ゐる。

【氣味】【辛し、毒なし】【主治】【毒腫、乳癰。毒を解し、惡血を破る】(恭)

【附方】新一。【下痢禁口】獨將軍草の豆のやうな珠のある根の珠を取り、搗汁三匙を白酒半盃に和して服す。(簡便方)

【附錄】(二)留軍待　恭曰く、(三)劍州の山谷に生ずる。葉は楠に似て細く長い。採收に一定の時期はない。味辛し、溫にして毒なし。肢節の風痛、打傷の瘀血、(四)五緩攣痛に主效がある。

(一)見腫消(宋圖經)

和名無し
學名未詳
科名未詳

【集解】頌曰く、(三)筠州に生ずる。春苗が生え、葉、莖は紫色で高さ一二尺、葉は桑に似て表面が靑紫赤色に光る。採收に一定の時期はない。

【氣味】【酸く澀し、微毒あり】【主治】【癰腫、及び狗咬には、葉を擣いて貼る】(蘇頌)

ガ中ッテ居ナイ、其レハ其草狀ハ彷彿トシテ凡ソ其レラシクモ見ラルルガ其根ニ豆ノヤウナ珠ガナイカラ違フ、要スルニ今ノ處何ンノ草ダカ能ク判ラヌ。

(二)牧野曰フ、留軍待ハ何ンナ草カ全ク判ラヌ。

(三)劍州ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。

(四)五緩ハ五軟ノコトカ、頭項軟、手軟、脚軟、身軟、口軟是ナリ。

(一)牧野曰フ、植物名實圖考卷ノ九ニアル見腫消ノ圖ハぶだう科(葡萄科)ノのぶだうデハナイカト思フ、又同書卷ノ十五ニアル同名ノ圖ハ唇形科ノみづかうじゆ一名ゆきみさうノ根生葉トモ見ラルルガ

多分何カ別ノ植物デアラウ、又ヘンリー氏ハいぶきすみれ(Viola mirabilis, L.)ヲ見腫消ト記シテ居ルガ本書ノ品デハナイ、本書ニ説ク所ノモノハ上ノ三品トハ別ノ何物カデアラウト思ヘド、集解ノ行文頗ル簡略デ委シク其草状ヲ摸索スル事ガ出来ヌ其レ故何ノ草ダカ判ラヌ。

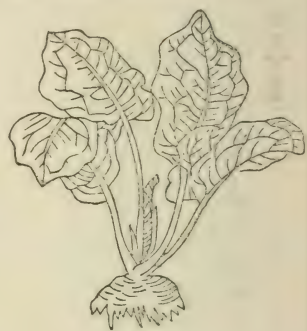
(二)筠州ハ山草類仙茅ノ註ヲ見ヨ。

(三)一握、本經逢原ニ據ル。

(四)本經逢原ニ苧根トアリ。

(五)本經逢原ニハ錢下ニ白蜜少許ノ四字アリ。

(一)牧野曰フ、攀倒甑ハをとこえし(Patrinia villosa, Juss.)ニ酷似セルモノデア

〔見腫消〕
—筠州—

附方　新一。【一切の腫毒】及び傷寒の殘毒が耳の前後、及び項下に發した硬腫には、見腫消草(三)一握、生白及、生白歛、土大黃、生大薊根、野(四)苧麻根を搗いて餅にし、芒消一(五)錢を入れ、腫頭を殘して貼り、乾けば易へる。金線重樓、及び山慈姑を加へるが就中妙である。(傷寒蘊要)

(一)攀倒甑（圖經）

和名　無し
學名　Patrinia sp.
科名　おみなへし科(敗醬科)

〔攀倒甑〕
—宜州—

集解　頌曰く、(二)宜州の野原に生ずる。莖、葉は薄荷のやうだ。一名斑(三)杖、一名接(四)骨といふ。時珍曰く、この杖のつく名は虎杖と同じく、接骨

ツカ、其花ハ小サク黄白色ノ粟米ノ如シトアルカラ無論なとこぶしデハナイ。

(二)宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ枝下ニ莖ノ字アリ。

(四)大觀ニ骨下ニ草ノ字アリ。

(一)牧野曰フ、水甘草ハ集解ノ文略ニ過ギ何ノ草カ分ラス、植物名實圖考卷ノ十四ニ圖アレド要領ヲ得ス。

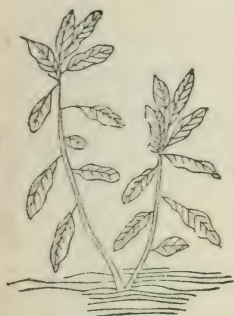
といふ名は、薊蓋と同じであるが、これは一類の物なりや否や判然せぬ。

氣味　【苦し、寒にして毒なし】

主治　【風熱の煩渇、狂躁を解利するには、擣いてその汁を服するが甚だ效がある】(頌)

(一)水甘草（圖經）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

〔水甘草〕
——武當——

集解　頌曰く、筠州（きんしう）に生ずる。多くは水邊にあるもので、春苗が生え、莖は青く葉は柳のやう、花はない。その土地では十月、八月に採る。單用するもので、他の多くの藥には入れない。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】

【主治】【小兒の風熱、丹毒には、甘草と共に煎じて飲む】(蘇頌)

本草綱目草部第十六卷 終

本草綱目草部

第十七卷　上

本草綱目草部目錄第十七　卷上

草の六　毒草類四十七種

大黄 本經　商陸 本經　狼毒 本經　防葵 本經

狼牙 本經　藺茹 本經　大戟 本經　澤漆 本經

甘遂 本經　續隨子 開寶　莨菪 本經 即ち天仙子。

雲實 本經　蓖麻 唐本 博落廻を附す。　常山蜀漆 本經　杜莖山、土紅山を附す。

黎蘆 本經 山慈石、參果根、馬腸根を附す。　木黎蘆 拾遺

附子 本經　天雄 本經　側子 別錄　漏籃子 綱目

烏頭 本經　白附子 別錄　虎掌 本經　天南星 開寶

由跋 別錄　蒟蒻 開寶 菩薩草を附す。　半夏 本經

蚤休 本經　鬼臼 本經　射干 本經　鳶尾 本經

玉簪 綱目　鳳仙 綱目　坐拏草 圖經 押不蘆を附す。

曼陀羅花 綱目　羊躑躅 本經 山躑躅、羊不喫草を附す。　芫花 本經

蕘花 本經　醉魚草 綱目　莽草 本經　茵芋 本經

石龍芮 本經 卽ち胡椒菜。　毛茛 拾遺 海薑、陰命を附す。

牛扁 本經 虱建草を附す。　蕁麻 圖經　格注草 唐本

海芋 綱目 透山根を附す。　鉤吻 本經

右附方　舊一百三十四　新四百九十五

草の六　毒草類四十七種

(一)大　黄（本經下品）

和名　だいわう
學名　Rheum tanguticum, (Maxim.)
科名　たで科(蓼科)

釋名　**黄良**（本經）　**將軍**（當之）　**火參**（吳普）　**膚如**（吳普）　弘景曰く、大黄とはその色である。將軍なる號は、その駿烈、快速なるを表示したものだ。杲曰く、陳きを推し新きを致す功力が、禍亂を戡定して太平を致すやうなものだ。それが將軍の號ある所以である。

集解　別錄に曰く、大黄は(三)河西の山谷、及び隴西に生ずる。二月、八月に根を採つて火乾する。普曰く、(四)蜀郡の北部、或は隴西に生ずる。二月苗が卷いて生える。黄赤色だ。葉は四枚づつ對生し、莖は高さ三尺ばかりになる。三月黄色の花を開き、五月黑い實を結ぶ。八月根を採る。根には黄汁がある。切片して陰乾する。

(一)牧野云フ、此大黄ノ原植物ハ蓋シ單ニ一種ノミデハナク其中ニRheum tanguticum カラノモノモ亦 Rh. officinale, Bail. カラノモノモアラウ、或ハ又 Rh. palmatum, L. カラノモノモアリハセヌカト思フ、從來カラ云フからだいわう即チ Rh. undulatum, L.（西部シベリア原産）ハ我國ノ本草家ガ大黄ト誤認シタモノデ、是レハ大黄屬ノモノデハアルガ眞ノ藥用ノ大黄デハナイ。

(二)木村（康）曰ク、大黄ハ支那ニ於テハ既ニ太古ヨリ重要ナル藥品ノ一タリ、而シテ歐洲ヘモ古ヨリ渡來シ、殊ニ一七世紀ノ末葉ヨリ一八世

紀ノ始メニ當リテ露國政府之ヲ專賣品トシ、バイカル湖南方ノ恰古圖市ニ稅關ヲ設ケ、查定ヲ經タル大黃ハ之ヲイルクーツクヲ經テモスカウニ輸送シ以テ全歐洲ニ供給セリ、後支那ノ海港開放サルルニ及ビ大黃ハ專ラ海路歐洲ニ向ヒ、シベリヤヲ通過スル大黃ハ全ク其跡ヲ絕テリ。現今歐洲各國藥局方ノ採用スル純良支那產大黃ノ原植物ハ蓼科ニ屬スル Rheum palmatum, L. ニシテ、支那ノ西部青海山岳地方ヲ中心トシ甘肅、四川、陝西、西藏ニ跨リテ產出ス、青海地方ニ於テ採集シタル所謂北方大黃ハ先ヅ甘肅省ノ西寧府ニ運バレ、此處ニ

○弘景曰く、現に(五)益州北部の汶山、及び(六)西山で採るものは、河西、隴西の好きもののやうではないが、それでもやはり(七)紫地に錦色があり、味は甚だ苦く澁く、色は至つて濃黑であつて、西川の陰乾したものは北部の日光で乾かしたものに勝る。また火乾したものもあつて、それは皮が少し焦げてゐて體裁はよくないが、蛀が付かず、久しく保存に堪へる。この藥は至つて勁く、利いものであつて、粗なるものは服用に適しない。

○恭曰く、葉、子、莖、いづれも羊蹄に似てゐるが、ただ莖の高さ六七尺あつて脆い。味は酸く、生で食へる。葉は粗く長くして厚く、根は(八)紅いものはやはり宿い羊蹄に似てゐるが、大なるものは太さ盌ほど、長さ二尺ほどのものもある。性は濕潤で蛀に壞られ易いが、火で乾かせば確なものだ。作るには、一寸位に橫に截つて燒き熱した石の上へ載せて一日間焫き、微し燥いたとき孔を明け繩を通して乾すのである。今では(九)宕州、涼州、西羌、蜀地に產するものが皆佳く、幽州、幷州以北のものになるほど漸次に細く、氣力が蜀中のものに及ばない。陶氏が『蜀地のものは隴西のものに及ばぬ』といふは誤だ。

テ更ニ剝皮乾燥ヲ行ヒ陝西省西安ヲ經テ漢口ニ出ヅ、又西藏及四川省ノ西部ヨリ出ヅル南方大黄ハ先ヅ四川省ノ松潘ニ出テ、泯江ヲ下リ成都嘉定ヲ經テ重慶ニ達ス、漢口重慶ヨリハ更ニ揚子江ヲ下リテ上海ニ至リ此處ヨリ世界各地ニ輸送ス。(生藥學)

木村(康)曰ク、漢藥ニ唐大黄ト稱スルモノアリ、其原植物ヲ Rheum undulatum, L. ニ充ツルモ確實ナラズ、支那ヨリ輸入シ專ラ漢法醫流ノ賞用スル所ナリシモ第四改正日本藥局方ニ於テ之ヲ收載セラレタリ、支那産大黄中濃分(例セバ湖北省産)ハ Rh. officinale, Baill. ヨリ取レ

藏器曰く、凡そ使用するには、用途を明に區別せねばならぬ。和厚にして深沈に病を攻めんとするには、蜀中産の牛舌片に似て緊つて硬いものを用ゐるがよく、瀉洩して駿烈快速に陳きを推し熱を去らんとするには、河西産の錦(一〇)文のものを取るべきものである。

〔大黄〕

頌曰く、今は蜀川、河東、陝西の州郡にいづれもあるが、蜀川の錦文のものを佳しとする。それに次ぐものは(一一)土秦、隴から來るものだ、これは番大黄といふ。その草は正月の內に生え、葉は青く蓖麻に似て、大なるものは扇ほどある。根は芋のやうで大なるものは盌ほどあり、長さは一二尺ある。その細根は牛蒡の小なるもののやうでもあり、また芋のやうでもある。四月黄色の花を開き、また青、紅色で蕎麥の花に似たものもある。莖は青紫色で、形狀は竹のやうだ。二月、八月に根を採り、黑皮を去り、横片に切つて火で乾す。蜀の大黄は竪の片で牛舌のやうな形だから牛舌大黄といふ。

土番大黄も牛舌大黄も功用は相等しい。江淮に產するものをば土大黄といふ。二月花を開いて細かい實を結ぶ。

○○時珍曰く、宋祁の益州方物圖に『(一二)蜀の太山中に多くあつて、莖赤く、葉大きく、根は巨大にして盌ほどあり、藥種店ではその大なるもので枕を作る。紫地錦文だ。今は一般に(一三)莊浪の產を最上等としてゐる』とある。莊浪とは古の涇原であつて、隴西の地だ、別錄の說と合致する。

【正誤】○頌曰く、(一四)鼎州に(一五)羊蹄大黄なる一種を產する。疥瘙を治するに甚だ有效なものだ。初生の苗、葉は(一六)羊蹄のやうで累年長大となり、その葉は商陸に似て狹く尖り、四月中に條が抽出で、穗が出て五七莖相合し、花と葉は同色で、結實は蕎麥のやうで輕く小さい。五月熟すると黄色になるので、金蕎麥などと呼んでゐる。三月苗を採り、五月實を採つて陰乾し、九月根を採る。この根を破つて見るとやはり錦文がある。これも土大黄と呼ぶものだ。

○○時珍曰く、蘇頌のいふその物は老羊蹄根だ。大黄に似てゐるので羊蹄大黄とはいふものの、事實は一類の植物でない。また一種の酸模は山大黄であつて、形狀は羊

ルモノアランモ、其性狀ハ歐洲各國ノ藥局法ニ採用セル支那產純良種ニ一致セズ。(生藥學)木村(康)曰ク、和大黄ハ古來津輕大黄有名ナリ、現今奈良地方ニ栽培セリ、其原植物ハ蓼科ノからだいわうニシテ市販品ハ徑一デ、メ、ヲ超エザル橫斷片ヲナス。歐洲ニ於テ培養スル大黄ニハ英國產、墺國產、佛國產等ノ諸種アリ、此等ノ大黄ハ粗惡品ニ屬シ醫藥ニ供スルヲ許サズ。

(三)河西ハ山草類甘草ノ註、隴西ハ山草類徐長卿ノ註ヲ見ヨ。

(四)蜀郡ハ石部空青ノ蜀ノ註參照。

(五)徐州ハ金部金ノ註、汶山ハ石部花乳

石ノ註ヲ見ヨ。
(一六)一書ニ西山ヲ四川ニ作ル。倶ニ西川ノ訛ナラン。西川ハ山草類ノ淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。
(一七)爾雅ニ云、錦繡之質ヲ地ト曰フ。
(一八)大觀ニ細ニ作ル。
(一九)宕州、涼州ハ石部雄黃ノ註、幽州ハ山草類人參ノ註、井州ハ石部石髓ノ註ヲ見ヨ。
(二〇)文、大觀ニ紋ニ作ル。
(二一)牧野曰フ、土番大黃ハ其文ヲ按ズルニ大黃屬 (Rheum) ノ一種デアツテ或ハRh. palmatum, L.乎、蘭山ハ是レヲ土大黃トナシテぎしぎし屬 (Rumex) ノからすのあぶらトスルハ非デアル。
(二二)蜀太山、或ハ蜀

蹄に似て山上に生える。所謂る土大黃とは或はこれを指したのであらうが、羊蹄そのものではない。いづれもその本條に記載してある。

根【修治】雷曰く、凡そこれを使用するには、細切して水の渦巻いたやうな文のある緊つて重いものを片に剉み、午前十時から午後二時まで蒸して晒し乾かし、また臘水を洒いで午後二時から午後十二時まで蒸す。これを凡そ七回繰返して晒し乾してから、更に淡蜜水を洒いで再び一伏時の間蒸す。かくしてその大黃が黑い膏のやうになつてから晒し乾して用ゐる。藏器曰く、凡そこれを用ゐるには、蒸す場合と、生の場合と、熟する場合とある。一定の方法に依るとは限らない。承曰く、大黃は、採收した時に皆燒石で熯き乾すので、商品に生の物は全然ない。隨つてこれを使用するにも更に多くの炮、炙、蒸、煮を必要とせぬ。

(二七)【氣味】【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。普曰く、神農、雷公は苦し、毒ありといひ、扁鵲は苦し、毒なしといひ、李當之は大寒なりといふ。元素曰く、味は苦し、氣は寒である。氣、味俱に厚く、沈にして降る。陰である。これを用ゐるに、酒で浸して煨熟したものを用ゐるは寒因熱用であつて、酒で浸せ

ば太陽の經に入り、酒で洗へば陽明の經に入るものだ。その他の經に對しては酒を用ゐない。

○杲曰く、大黃の苦は峻烈に下走するものだから、下の部分に對して用ゐるには必ず生で用ゐるのであるが、邪氣が上部に在る場合には、酒を用ゐなければ目的を達し得ない。必ず酒で浸して用ゐれば、最高の部分にまで藥力を導き上げて熱を驅り下す。最高頂上に在るものを射落して取るやうなものである。この場合、生で用ゐては最高部分に在る邪熱を取り殘し、ために癒えて後に、或は目赤、或は喉痺、或は頭腫、或は膈上の熱疾が生ずるものだ。

○時珍曰く、凡そ病の氣分に在るもの、及び胃寒、血虛、竝に妊娠、產後には、いづれも輕輕しく用ゐてはならない。この物は性が苦寒であつて、往往にして元氣を傷め、陰血を消耗するものだからである。

○之才曰く、黃芩が使となる。畏れる物はない。○權曰く、冷水を忌み、乾漆を惡む。

【主治】【瘀血、血閉の寒熱を下し、癥瘕、積聚、留飮、宿食を破り、腸、胃を蕩滌し、陳きを推し新しきを致し、水、穀を通利し、中を調へ、食物を消化し、五

山、卽岷山ヲイフカ、未詳。
（二三）莊浪ハ今ノ甘肅省涼州府ノ莊浪縣。民國涇原道ニ屬ス。
（二四）鼎州ハ石部太一餘粮、石蒜ノ註ヲ見ヨ。
（二五）牧野曰フ、羊蹄大黃ハRumex(ぎしぎし屬)ノ一種デアルガ其種名ハ今能ク分ラヌ。
（二六）如羊蹄ノ三字大觀ニヨリテ補入ス。
（二七）木村(康)曰ク、成分ハクリソファン酸エモヂン、イソエモヂン、レイン、レチクリシン、其他アポレチン、エリトロレチンナル樹脂樣體、大黃鞣酸、蓚酸カルチユム、澱粉等ヲ含有ス、而シテ上記ノアントラヒノン誘導體及鞣酸ハ配糖體ノ

臟を安定調和する】（本經）【胃を平にし、氣を下す。痰實、腸間の結熱で心腹脹滿するもの、婦人の寒血閉脹で小腹の痛むもの、諸老血の留結を除く】（別錄）【婦人の月經を通じ、水腫を利し、大、小腸を利す。熱腫毒に貼る。小兒の寒熱時疾の煩熱。膿を蝕す】（甄權）【一切の氣を宣通し、血脈を調へ、關節を利し、壅滯水氣を泄す。溫瘴、熱瘧】（大明）【諸種の實熱不通を瀉し、下焦の濕熱を除き、宿食を消化し、心下痞滿を瀉す】（元素）【下痢赤白、裏急腹痛、小便淋瀝、實熱燥結、潮熱譫語、黃疸、諸火瘡】（時珍）

【發明】之才曰く、芍藥、黃芩、牡蠣、細辛、茯苓と配合すれば、驚、怒に因る心下の悸氣を療じ、消石、紫石英、桃仁と配合すれば、婦人の血閉を療ず。

宗奭曰く、張仲景の心氣不足の吐血、衄血を治する瀉心湯に、大黃、黃芩、黃連を用ゐてあるに就いて、或る者は、心氣が既に不足して居る。而るに補心湯を用ゐずして反對に瀉心を用ゐるは何故かとの疑問を懷くのであるが、これに對しては斯く答ひ得る。若しその症狀が、單に心氣不足のみに止まるならば、吐血、衄血するわけはないのである。この場合は、邪熱が不足に因つてそれに客するから吐血、衄

狀ニ於テ存ス、大黃ハ脂肪ヲ含有セズ、大黃固有ノ香氣ハ恐クハ揮發油ヨリ來ルナラン、灰分ハ四―二〇%ヲ有シ極端ナル數ハ四八%ヲ記載セルモ何カノ誤ナルベシ。（生藥學一一四）

P. J. 1895 (55)325; Arch. Ph. 1907(245)150, 680; 1918, 256)91; W. P. 169; C. A. 1924(18, 1365; A. I. P. T. 1918 (256) 913. Schw. Ap. Z'g. 1921(59)169, 183; Schw. Woch. Ch. Ph. 1903(44):61; 藥誌、四、二七(一四九)六四八、三五、二四八、九九四、三七(二六四)一一九、四一(三一四)一二五〇、四四

血せしめるのだ。苦を以てその熱を泄し、苦を以てその心を補ふは、つまり一擧兩得の方法だ。この病證の患者にこの方を用ゐれば必ず奏效するのである。ただ要はその患者の虚、實を量ることにあるわけだ。

○○震亨曰く、大黄の苦、寒はよく泄するものだ。仲景が瀉心湯を用ゐた場合は、正に少陰の經の不足なるに因つてであつて、(一八)本經の陽が甚だしく亢ぶり、孤立して相輔くる力を缺く結果、陰血が飛躍的な妄動を起したのである。故に大黄を用ゐて甚しく亢ぶるその火を瀉し去り、そして平衡調和を得せしめれば、血は經に安定して自から平安を得るのである。そもそも心の陰氣不足は單純なものでない。これは肺と肝とが俱にそれぞれ火を受けて病が構成されるのだ。故に黄芩では肺を救ひ、黄連では肝を救ふのである。肺は陰の主、肝は心の母、血の(一九)合であつて、肝、肺の火が退けば陰血はその舊態に復するのだ。寇氏は、この理論を明確にせずして『邪熱が客するからだ』といつてゐるが、それでは、いかで後人が仲景の理論的根據を明確に理會し得ようか。

○○時珍曰く、大黄なるものは(二〇)足の太陰、手、足の陽明、手、足の厥陰の五經の血分

(三五三)四七九、六、二(三七二)八七、六、四(三九五)二一。

(一八)本經ハ心ヲ指スモノナラン。

(一九)合ハ陰血ノ集マル處ノ意カ。

(二〇)足ノ太陰ハ脾、手ノ陽明ハ大腸、足ノ陽明ハ胃、手ノ厥陰ハ心、足ノ厥陰ハ肝。

の薬である。凡そ病が右の五經の血分に在る場合に用うべきものであつて、氣分に在る場合にこれを用ゐるは、何等罪過なきものに刑罰を加へると同一である。瀉心湯で治する心氣不足の吐血、衄血そのものは、眞心の氣の不足であり、手の厥陰——心、包絡、足の厥陰——肝、足の太陰——脾、足の陽明——胃の邪火の有餘であつて、瀉心とはいふものの、實は右の四經の血中の伏火を瀉するのである。又、仲景は、心下痞滿の患者で、按診して見て軟かなものを治するに、大黄、黄連瀉心湯を主として用ゐた。これもやはり脾、胃の濕熱を瀉したので、心を瀉したものではない。病が陰に發したものを反つて下す結果痞滿となるので、これは寒が營血を傷め、邪氣がその虚に乘じて上焦に結するのである。胃の上脘は心に在るから、心を瀉すといふが、實は脾を瀉するのだ。素問に『太陰の所致は痞滿と爲る』といひ、又『濁氣が上に在れば䐜脹を生ずる』といふはこの間の消息をいふのである。病が陽に發したものに對し、反つて下せば結胸となる。乃ち熱邪が血分に陷入する。これもやはり病は上脘の分野に在るのだ。仲景の大陷胸湯、並に丸にいづれも大黄を用ゐてあるのは、やはり脾、胃の血分の邪を瀉してその濁氣を降すのであつて、結胸

が氣分に在る場合ならば、ただ小陷胸湯を用ゐる。痞滿が氣分に在る場合ならば、半夏瀉心湯を用ゐるのである。成無已の傷寒論の註釋も、やはりこの理論をば明確に了解してはゐなかつた。

成無已曰く、熱淫の勝つ所には、苦を以てこれを泄す。大黃の苦は以て瘀熱を蕩滌し、燥結を下して胃(二一)强を泄す。

頌曰く、本草に、大黃は陳きを推し新しきを致すもので、その效最も神なるものと推稱してあるところから、古方には積滯を下すに多くこれを用ゐ、張仲景が傷寒を治するに用ゐた處方に就中多いのであるが、古人が毒藥を用ゐて病を攻むるには、必ずその患者の虛實、寒熱に隨つて適當な處置を施したもので、一切(二二)輕率には用ゐたものでない。梁の武帝は發熱したとき大黃を服まうとしたので、姚僧坦が『大黃なるものは甚だ鋭い藥である。陛下は御高年でもあり、輕輕しくはお用ゐにならぬがよい』といつた。しかし帝は聽かなかつたので、非常に衰弱困憊し、危殆の狀態に陷つた。梁の元帝は、嘗て心、(二三)腹の疾が持病で、醫師達はみな『平藥を用ゐて漸次に宣通すべきものであらう』と主張したが、僧坦は『脈は洪にして實してゐ

(二一)本草洞玄ニ强ヲ邪ニ作ル。

(二二)大觀ニ輕ヲ而ニ作ル。

(二三)大觀ニ腹ヲ痛ニ作ル。

る、これは宿い妨があるのだから、大黄を用ゐる以外では瘥ゆべき道理がない』といつた。帝はその言に從つて遂に癒えた。これ等の實例に照して言ふことだが、今の醫師は一の毒藥を用ゐて多くの病に試み、偶然に的中すると、たちまちこの方は神聖不可思議なものだなどと己惚れて、そのまぐれ中りまでに犯した幾多の誤から起る用藥の過失には、口を拭つて一言もいはないが、警戒すべきことである。

【附方】 舊十四、新三十七。 【吐血、衄血】心氣不足の吐血、衄血を治するに主たる瀉心湯——大黄二兩、黄連、黄芩各一兩、水三升を一升に煮取つて熱服し、通じを付ける。（張仲景金匱玉函） 【吐血刺痛】川大黄一兩を散にし、毎服一錢を、生地黄汁一合、水半盞を煎じて三五沸し、時に拘はらず服す。（簡要濟衆方） 【傷寒痞滿】病が陰に發したものを反つて下し、ために心下が滿して痛まず、按診して見て濡するものは痞である。大黄黄連瀉心湯を主とする。大黄二兩、黄連一兩を、麻沸湯二升に漬けて須臾にして汁を絞り、二回に溫服する。（仲景傷寒論） 【熱病譫狂】川大黄五兩を剉み、微し赤く炒つて散にし、臘雪水五升で膏のやうに煎じ、半匙づつを冷水で服す。（聖惠方） 【傷寒發黄】方は上に同じ。○氣壯なるものには、大黄（二四）一兩を水（二五）

（二四）大觀ニ一ニ作ル。
（二五）大觀ニ三升半ニ作ル。

(二六)片、大觀ニ兩ニ作ル。
(二七)大觀ニハ方上ニ後字アリ。
(二八)大觀ニ十五ニ作ル。

二升に一夜漬け、翌早朝、その汁を一升に煎じ、芒硝一兩を入れて緩かに服す。須臾にして利下するものだ。(傷寒類要)【腰、脚の風氣】痛むには、大黄二兩を碁石ほどに切つて少量の酥を和し、焦げぬやうに炒り乾かして搗き篩ひ、三錢づつを、水三大合に薑(二六)三片を入れて十餘沸煎じた湯で調へて空心に服す。冷膿、惡物を下して痛が止まる。(崔元亮海上方)【一切の壅滯】經驗(二七)方では、風熱積壅を治し、痰涎を化し、痞悶を治し、食物を消化し、氣を化し、血を導く。大黄四兩、牽牛子半炒半生で四兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、十丸づつを白湯で服す。いづれも身體を害はない。もし微し通じをつけんとならば(二八)一二十丸を増加する。○衞生寶鑑では、皂莢の熬膏で和して丸にする。これを墜痰丸、又は全眞丸と名ける。金の宣宗は、これを服して效驗があつたので保安丸なる名稱を賜はつた。【痰が原因を爲したあらゆる病】滾痰丸――痰が原因を爲したあらゆる病を治す。ただ水瀉のもの、産前、産後には服してはならぬ。大黄を酒で浸して蒸熟し、切り晒して八兩、生黄芩八兩、沈香半兩、靑礞石二兩を、焰硝二兩と共に砂罐に入れて固濟し、紅く煆つてから研末して二兩、以上を各末にし、水で和して梧子大の丸にし、一二十丸

を常服する。小病には五六十丸を、緩病には七八十丸を、急病には一百二十丸を溫水で呑下し、直ちに横臥して動搖せぬやうにし、藥效が發生して上焦の痰滯を驅逐するを俟つ。翌日は先づ糟粕を下し、次の日は痰涎を下すものだ。なほ下らぬときは再服する。王隱君は、每歲この藥四十餘斤を調合して數萬人の病を癒した。(養生主論)

【男女の諸病】無極丸——婦人の月經不通、赤白帶下、崩漏の止まぬもの、腸風下血、五淋、產後積血の癥瘕腹痛、男子の五勞、七傷、小兒の骨蒸潮熱等の證を治し、その效甚だ速である。この藥は六癸の日に合すがよし。錦紋大黃一斤を四分し、一分は童尿一盌、食鹽二錢に一日間浸して切り晒し、一分は醇酒一盌に一日間浸して切り晒してから、再び巴豆仁三十五粒と共に炒り、豆の黃になつたとき豆を取り去つて豆は用ゐない。一分は紅花四兩を漬けた水一盌に一日間浸して切り晒し、一分は當歸四兩と共に淡醋一盌に一日間浸して當歸をば取り去り、切り晒して末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に溫酒で服す。惡物を取り下す效驗がある。まだ下らぬときは再服する。これは武當の高士孫碧雲の方である。(醫林集要)【心腹の諸疾】三物備急丸——心、腹の諸疾で突然猛烈に發るあらゆる病を治す。大黃、

巴豆、乾薑各一兩を搗き篩ひ、蜜を和して一千杵搗いて小豆大の丸にし、三丸づつを服す。凡そ(二九)卒中客忤で心、腹が脹滿し、錐刀で刺すやうに痛み、氣急し、口噤し、(三〇)停尸し、卒死するものには、暖水、或は酒で服し、或は灌ぎ込む。なほ反應なきときは更に三丸を服す。腹中が鳴轉して吐き下し、それで癒える。若し已に口噤して開かぬものには、齒を折つて灌ぎ込む。喉さへ通れば瘥える。この方は仲景の方であるが、司空裴秀が、丸にするに及ばず、散にして用ゐるやうに改めたものだ。(圖經本草)【腹中の痞塊】大黃十兩を散にして醋三升、蜜兩匙を和し、煎じて梧子大の丸にし、三十丸づつを生薑湯で服す。吐利するを度とする。(外臺祕要)【腹、脇の積塊】風化石灰末半斤を瓦器で炒つて極熱し、稍冷して大黃末一兩を入れて炒り熱し、桂心末半兩を入れて略ぼ炒り、米醋を入れて攪きまぜて膏にし、布にのして貼る。○またある方では、大黃二兩、朴硝一兩を末にし、大蒜と共に搗き和して膏にして貼る。或は阿魏一兩を加へるが尤も妙である。(丹溪心法)【積聚の久患】二便が通ぜずして上に心、腹を壓迫し、脹滿して食を害ふには、大黃、白芍各二兩を末にし、水で梧子大の丸にし、一日三回、四十丸づつを湯で服す。反應のあるまで服

(二九)大觀ニ卒中ヲ中惡ニ作ル。客忤ハ人客又ハ異物ニアフトキ驚キ忤ヘテ病ムナリ。

(三〇)停尸ハ氣絕ノコトナラン。

す。(千金方)【脾癖疳積】大人、小兒に拘はらず、錦紋大黃三兩を末にし、醋一盞で沙鍋に入れて文武火で熬膏し、瓦上に傾け移して三晝夜日光に晒し夜氣に露して再び研り、日本から輸入する琥珀のやうな形の硫黃一兩、官粉一兩と共に研りまぜ、十歲以下の小兒には半錢、大人には一錢半を米飮で服す。一切の生物、冷物、魚肉を忌む。半箇月間はただ白粥のみを食ふ。もし一服で癒えぬときは半箇月後に再服する。食物の禁忌を守り得ぬならば服せぬ方が勝しである。(聖濟總錄)【小兒の(三一)無辜】(三二)閃癖瘰癧、或は頭乾高聳し、或は乍ち痢し乍ち瘥える等、さまざまの症狀を現はすには、大黃煎を主とする。錦紋の新しき實せる大黃九兩——微し朽ちたものは使用に堪へぬ——を皮を削り去り、擣き篩つて散にし、(三三)好き米醋(三四)三升に和して(三五)瓦盌に入れ、大鍋の中で湯の上へ浮べて炭火で緩やかに煮て、丸にし得るほどの膏になつたとき器に取つて貯へ、三歲の小兒には梧子大の丸七丸を一服として一日再服し、青赤色の膿の下出するを度とする。若し下らず、或は下る量の少い場合には、少し丸數を增加する。若し又下り過ぎれば數を減らす。重病のものも七八劑で根絕する。大人が用ゐてもよし。この藥はただ宿膿を下して小兒をして下痢さ

(三一)無辜ハ小兒ノ頭項ノ邊ニ生ズル結核ニシテ、痛ナク轉動スルモノヲ云フ。
(三二)閃癖トハ閃肭ノコトカ、然リトスレバ脂肪過多ノ病ヲ云フ。
(三三)大觀ニ好ノ上ニ上字アリ。
(三四)三、大觀ニ二ニ作ル。
(三五)大觀ニ瓦ヲ鋼ニ作ル。

せない。毒物を食ふことは禁ぜねばならぬ。同時に乳母も食禁を守らねばならぬ。ある方では木香一兩半を加へる。(崔知悌方)【小兒の諸熱】大黃を煨熟し、黃芩と各一兩を末にし、煉蜜で麻子大の丸にし、五丸乃至十丸づつを蜜湯で服す。黃連を加へて三黃丸と名けるものだ。(錢氏小兒方)【骨蒸積熱】漸漸皮膚が黃になつて瘦せるには、大黃四分を童尿五六合で四合に煎じ取り、滓を去つて空腹に二回に分服し、人間が三十丁步行する程の時間を隔て再服する。(廣利方)【赤、白濁淋】好き大黃を末にし、六分づつを雞子一箇の頂に孔を明けた中に入れて攪きまぜ、それを蒸熟して空心に食ふ。三服以內で癒える。(簡便方)【相火祕結】大黃末一兩、牽牛頭末半兩を用ゐ、三錢づつを、厥冷あるには酒で服し、厥冷無くして五心の煩するには蜜湯で服す。(劉河間保命集)【諸痢の初期】大黃を煨熟し、當歸と各二三錢、强壯者は各一兩を水で煎じて服し、通じをつける。或は檳榔を加へる。(集簡方)【熱痢裏急】大黃一兩を半日酒に浸して煎じ服し、利を取る。(集簡方)【突然喘いで悶絕するもの】言語不能となり、涎を流し、吐逆し、牙齒を動搖し、出る呼吸が大きくなり、絕息してはまた蘇るものを傷寒併熱霍亂と名ける。大黃、人參各半兩、水二盞を一盞に煎じ、

（二六）一、大觀ニ三ニ作ル。

熱服して安靜にする。（危氏得效方）【食後直ちに吐くもの】胸中に火あるためである。大黄一兩甘草二錢半、水一升を半升に煮て溫服する。（仲景金匱玉函方）【婦人の血癖】痛むには、大黄（二六）一兩を酒二升で煮て十沸し、頓服して通じを付ける。（千金翼）【產後の血塊】大黄末一兩、頭醋半升を熬膏して梧子大の丸にし、五丸づつを溫めた醋に溶かして服するが良し、久しくして下るのだ。（千金方）【乾血氣痛】錦紋の大黄を酒に浸し晒し乾して四兩を末にし、好き醋一升で熬膏して芡子大の丸にし、就寢時に一丸を酒に溶かして服す。大便が一二行通じて紅漏が自から下る。調經の仙藥である。或は香附を加へる。（董氏集驗方）【婦人の嫁痛】陰部の腫痛である。大黄一兩を酒一升で煮て一沸して頓服する。（千金方）【男子の偏墜】痛むには、大黄末を醋に和して塗り、乾けば易へる。（梅師方）【濕熱眩運】熱當るべからざるには、酒で炒つた大黄を末にし、二錢を茶清で服す。急するにはその標に對して治療を加へる。（丹溪纂要）【小兒の腦熱】常に目を閉ぢたがるには、大黄一分を水三合に一夜浸し、一歲の小兒は半合を服し、その殘餘をば頂上に塗り、乾けば再び塗る。（姚和衆至寶方）【暴赤目痛】四物湯に大黄を加へ、酒で煎じて服す。（傳信適用方）【胃火の牙痛】口

に氷水一口を含み、紙撚に大黄末を蘸けて、痛む方の左右に隨つて鼻から嗜へば立ろに止む（備用本草）〔風熱牙痛〕紫金散――風熱、積壅、一切の牙痛を治し、口氣を去るに大いに奇效がある。好き大黄を瓶の中で燒いて性を存して末にし、朝、夕牙に揩つて漱ぎ去る。都下のある家でこの藥を專賣してゐるが、兩宮から常に錢數千で買上げられ、門前市を作すといふ有樣だ。（千金家藏方）〔風蟲牙痛〕齗齦から常に出血して漸次に崩落し、口の臭きものに極めて效がある。大黄を米泔に浸して軟にし、生地黄と各ゝ輪切りにし、一片づつ合はせて痛處の上に貼れば一夜で癒える。なほ癒えぬときは再貼する。風を引き入れる虞があるから談話するを忌む。（本事方）〔糜爛する口瘡〕大黄、枯礬等分を末にして擦り、涎を吐く（聖惠方）〔鼻中の瘡〕生大黄、杏仁を搗きまぜ、豬脂で和して塗る。○又ある方では、生大黄、黄連各一錢、麝香少量を末にし、生油で調へて搽る。（聖惠方）〔仙茅の中毒〕口からはみ出すほど舌が脹れる。方は仙茅の條下にある。〔傷損瘀血〕三因方では、雞鳴散――高處よりの墜落、木石の壓傷、及び一切の損傷の瘀凝、積痛の忍び難きには、いづれも此の藥を用ゐる。陳を推し新を致すものだ。大黄を酒で蒸して一兩、杏仁を皮

を去つて二十一粒を細研し、酒一盌で六分に煎じ、雞鳴の時刻に服す。曉方に至れば瘀血を取り下して癒える　○和劑方では、跌撲、壓傷の瘀血が內部に在つて脹滿するを治するには、大黃、當歸等分を炒つて研り、四錢づつを溫酒で服す。惡物を取り下して癒える。「打撲傷痕」瘀血が滾注して、或は潮熱を起すには、大黃末を薑汁で調へて塗る　一夜にして黑いものは紫になり、二夜にして紫のものが白くなる。（瀕湖集簡方）「杖瘡腫痛」大黃末を醋で調へて塗る　童尿でも調へる。（醫方摘玄）「金瘡煩痛」大便の通ぜぬには、大黃、黃芩等分を末にして蜜で丸にし、一日三回、先づ食事を攝つてから水で十丸を服す（千金方）「破れ爛れた凍瘡」大黃末を水で調へて塗る。（衛生寶鑑）「湯火傷」莊浪の大黃を生で研り、蜜で調へて塗る、痛みを止めるのみならず、瘢をなくする。これは金山寺の神人から傳授した方である。（洪邁夷堅志）「飛蝶瘡」艾で灸して火痂が取れてから、瘡內の鮮肉が蝶のやうな形の片になつて飛び去り、痛み忍び難きものは火毒である。大黃、朴硝各半兩を末にして水で服し、通じを付ければ癒える。（張杲醫說）「蠼螋の咬瘡」大黃末を塗る。（醫說）「火丹赤腫」全身に遍きものには、大黃を水に磨つて頻りに刷く。（急救方）「腫毒の

初期】大黄、五倍子、黄蘗(わうばく)等分を末にし、一日四五回、新汲水で調へて塗る。(簡便方)【癰腫の焮熱(きんねつ)】痛むものだ。大黄末を酢で調へて塗り、燥けば易へる。數回易へる内に退く。甚だ效驗顯著なる神方である。(肘後方)【乳癰腫毒】金黄散――川大黄、粉草各一兩を末にし、好き酒で熬膏して取り收め、絹にのし瘡上に貼つて仰臥(ぎやうぐわ)する。先に溫酒で一大匙を服す。翌日は惡物を取り下す。(婦人經驗方)【大風癩瘡】大黄を煨いて一兩、皂角刺(さうかくし)一兩を末にし、方寸匕づつを空心に溫酒で服す。魚腦のやうな惡毒物を取出すものだ。なほ取下さねば再服する。直ちに亂髮のやうな蟲を取下す。かくして惡毒物を取り盡したならば、雄黄(うわう)、花蛇(くわじや)の藥を服する。これを通天再造散と名ける。(十便良方)

葉　氣味　【酸し、寒にして毒なし】　主治　【寢具の上敷の下に置けば蝨(しつ)蟲(ちう)を辟ける】(相感志)

商陸(一)　(本經下品)

和名　やまごばう
學名　Phytolacca esculenta, Houtt.
科名　やまごばう科(商陸科)

(一)牧野云フ、商陸ハ普通ニハ人家ニ植エラレテ居ル、偶ニ山地ニ野生ノモノナ

見ルガ是レガ果シテ原カラノ野生カ疑ナキ能ハヌ、私ハ商陸ハ元ト支那カラ渡シタモノデハナイカト思ツテ居ル。

(二) 咸陽ハ濕草類地黄ノ註チ見ヨ。

(三) 牧野云フ、此ニ赤花ト云フモノ是レ我邦ニ野生セルまるみやまごぼう(Phytolacca japonica, Makino.)ノ類似品デハナイカト想像スル ソシテ普通ノ商陸トハ全然別種ノモノナラント思フ、我ガまるみのやまごぼうハ花紅色デ實ノ熟セシ時ハ果穗軸モ花梗モ萼片モ特別ニ赤クナ

〔商陸〕

釋名 **蓫薚** 音は逐湯(チクタウ)である。**當陸**(開寶) **章柳**(圖經) **白昌**(開寶) **馬尾**(廣雅) **夜呼**(本經) 時珍曰く、この物はよく水氣を逐蕩するものだ。故に蓫薚といふ。それを訛つて商陸といひ、また訛つて當陸といひ、北方の發音で訛つて章柳といふ。或は枝と枝とが相値ひ、葉と葉とが相當るものだから當陸といふともいひ、或は多く陸路に當つて生ずるからだともいふ。

集解 別錄に曰く、商陸は(二)咸陽の川谷に生ずる。人の形のやうなものには不思議な功力がある。

恭曰く、この草には(三)赤、白の二種あつて、白いものを藥に入れる。赤いものは鬼神を見るもので甚だ有毒だ。

保昇曰く、所在にある。葉は大いさ牛舌ほどで厚く脆い。赤花のものは根も赤く、白花のものは根も白い。

二月、八月に根を採つて日光で乾す。

○頌曰く、俗に章柳根と名けるもので、人家の園圃に多く生える。春苗が生え、高さ三四尺、葉は青く、牛舌のやうで長い。莖は青赤で至つて柔脆だ。夏、秋に紅紫色の花が朶をなして開く。根は蘿蔔のやうで長い。八九月に採る。爾雅にはこれを蓫薚といひ、廣雅にはこれを馬尾といひ、易經にはこれを莧陸といつてある。

○斅曰く、赤(四)昌なる一種は、苗葉は甚だよく似たものだが服してはならぬ。これは筋骨を傷め、腎を消耗する有毒のものだ。しかし、花の白い多年を經たものをば仙人が採收し、脯にして酒の肴にする。

○時珍曰く、商陸は、昔は一般にこれも栽培して、(五)蔬にして食つたものである。根の白いもの、及び紫色のものを取つて擘破し、畦を作つて種ゑるのであるが、子を蒔いてもよし。根、苗、莖、いづれも洗ひ蒸して食へる。或は灰汁で煮てもよし。丹砂、乳石を服した人が食へば就中利あるものだ。根の色の赤と黄とのものは有毒だから食つてはならぬ。按ずるに、周憲王の救荒本草には『章柳は、幹はやや雞冠花の幹に似て微し(六)線楞があり、色は微紫赤だ。極めて栽培種植し易い』とある。

ル、此品ハ偶ニ山地ノ人家ニモ栽エラレテ居ル。

(四) 大觀ニ殤ニ作ル。

(五) 牧野云フ、我邦今日デモ其葉ヲ蔬ニシテ食スル、普通味噌汁ノ中ニ入レル。

(六) 線楞ハ縦翼。

根 修治　斅曰く、花の白いものの根を取り、銅刀で皮を刮り去つて薄く切り、東流水で二晝夜浸して漉出し、黑豆葉を一重に商陸一重を重ねて甑に架せ、正午から午後十二時まで蒸して取り出し、黑豆葉をば取り去り、曝乾して剉んで用ゐる。豆の葉のないときは豆を代用する。

(七)氣味　【辛し、平にして毒あり】別錄に曰く、酸し。權曰く、甘し、大毒あり。犬肉を忌む。大明曰く、白いものは苦し、冷である。大蒜と配合するがよし。赤いものは有毒だ。能く硇砂、砒石、雌黃を伏し、錫を拔く。恭曰く、赤いものはただ腫に貼るだけのもので、服すれば人體に害があり、痢血已まずして人を殺し、人をして鬼神を見せしめる。張仲景曰く、商陸は水で服すれば人を殺す。杲曰く、商陸は有毒で、陽中の陰である。その味は酸く辛く、その形は人體に類し、その功用は水を療ずるに神の如き效がある。

主治　【水腫、疝瘕、痺(八)熨。癰腫を除き、鬼精の物を殺す】(本經)【胸中の邪氣、水腫、痿痺、腹滿して洪、直なるを療じ、五臟を疏し、水氣を散ず】(別錄)

【(九)十種の水病を瀉す。喉痺で通ぜぬには、薄く切つて醋で炒り、喉の外部に塗る

(七)木村(康)曰ク、商陸ノ成分ハ未ダ明カナラズ、一種ノ樹脂ト比較的多量ノ硝石トヲ含有ス、彼ノフイトラツカトキシント命名セラレタル物質ハ商陸ニ含有サレズシテ、商陸ト錯誤シ易キ牛皮消（イケマ）根ノ成分ナルガ如シ。(生藥學) T. M. 1891(5)1256; 1892,6)354; C. M. J. 1918 (32)471. 藥誌、明、二〇(五九九)三一、二一(八二)五八。二三(九八)二一四、三四、二二九、二六二。

が良し】（甄權）【大、小腸を通じ、蠱毒を瀉し、胎を墮し、腫毒を爍き、惡瘡に傅ける】（大明）

【發明】弘景曰く、方家では甚だ（一〇）用ゐない。ただ水腫の治療に、生の根を切つて（一一）鯉魚に雜へ、湯に煮て服す。道家では散にして用ゐ、また煎にし醸して服するが、いづれも能く尸蟲で鬼神を見る病を去る。その實、子も神藥に入れる。花は葛花と名け、就中良いものだ。

頌曰く、古の方術家は多くこれを用ゐ、やはり單服された。五月五日に根を採り、竹（一二）筐に盛つて屋根の東北の角に懸け、百日の間陰乾して搗き篩ひ、井華水で調へて服す。これを『神仙祕密の法』といつてある。

時珍曰く、商陸は苦、寒であつて、沈であり、降であり、陰である。その性は下行するもので、水を行ることを特長とし、大戟、甘遂と性は異なるが功果は同一だ。胃氣虛弱のものには用ゐられない。方家では、腫滿で小便不利のものの治療に、赤根のものを搗き爛らして麝香三分を入れ、臍心に貼つて帛で繃帶する。それで小便が利し腫が退くものだ。又、濕水の患者で、肉上を指で押し畫いて見て、指を放せ

（八）賧ハ蹬ノ誤。

（九）十水病ハ肺ニ熱水、冷水ノ二病、脾ニ黃水病、膽ニ鬼水病、皮膚ニ食水病、腹ニ飲水、心水ノ二病、胃ニ肝水病、腎ニ勞水病、心ニ清水病アルヲ云フ。（直指附遺方）

（一〇）大觀ニ用上ニ乾字アリ。

（一一）大觀ニ鯉上ニ生字アリ。

（一二）筐ハ廣韻ニ籠ノ屬トアリ。

ばすぐ散つて跡に文の現はれぬものを治するに、白商陸、白附子を炒り乾かし、火毒を出して酒に一夜浸し、日光で乾して末にし、二錢づつを米飲で服す。或は大蒜を商陸と共に煮て汁を服するもよし。その莖、葉を蔬にして食つても腫疾を治す。

嘉謨曰く、古の讃に『其の味酸辛、其の形人に類す。水を療じ腫に貼り、其の效神の如し』とある。すべてはこの言に盡きてゐる。

附方 舊九、新六。【濕氣脚軟】樟柳根を小豆大に切つて煮熟し、更に綠豆と共に飯に炊いて毎日食ひ、瘥るを度とする。最も效がある。（斗門方）【水氣腫滿】外臺祕要では、白商陸根を皮を去つて豆の大きさに切り、一大盞を水（一三）二升で一升に煮取り、更に（一四）粒米一大盞と共に煮て粥にし、毎日空心に服して微し通じを付ける。他のものを雜食してはならぬ。〇千金髓では、白商陸六兩で取つた汁半合に酒半升を和し、患者の（一五）大小を看て與へ服ます。水を利下して效果を擧げるものだ。〇梅師方では、白商陸一升、羊肉六兩、水一斗を六升に煮取つて滓を去り、葱、豉を和して臛にして食ふ。【腹中の暴癥】石のやうに覺える物があつて、啼き叫ぶほど刺痛するは、治療を加へねば旬日で死亡する。商陸根を多量に取り、搗汁を取り、或は蒸

（一三）大觀ニ二チ三ニ作ル。
（一四）大觀ニ粒チ粟ニ作ル。
（一五）大小、大觀ニヨル。

し、腹上に布を敷いてその上へその藥を置き、覆はずに置いて冷えれば易へる。晝夜休めずに試みる。(孫眞人千金方)【石のやうな痃癖】脇下に在つて堅硬なるには、生商陸根汁一升に杏仁一兩を浸し、皮を去つて泥のやうに搗き、その杏仁泥に商陸汁を入れて絞り、それを火で煎じて餳のやうにし、毎服棗ほどの量を空腹に熱酒で服す。惡物を利下するを度とする。(聖惠方)【産後の腹大】堅滿し、喘し、横臥し得ぬには、白聖散——樟柳根三兩、大戟一兩半、甘遂を炒つて一兩を末にし、二三錢づつを熱湯で調へて服し、大便の宣利するを度とする。この藥は水に主たる聖藥である。(潔古保命集)【(二六)五尸の注痛】腹痛し、脹急し、息を喘ぎ得ず、上部に心胸を冒し、旁ら兩脅を冒して痛み、或は磥塊が涌起するには、商陸根を熬つて囊に入れ、更互に熨して效を取る。(肘後方)【小兒の痘毒】小兒が痘を生ぜんとして發熱し、(二七)失表し、忽ち腹痛を起すもの、及び膨脹努氣する乾霍亂は、毒氣が胃氣と相搏つて出でんとして出づるを得ぬために起るのである。商陸根と葱白を搗いて臍上に傅ける。斑が止まり痘が出て危險を免れる。(摘玄方)【突然の耳の熱腫】生商陸の尖を削つて中に入れ、一日二回易へる。(聖濟錄)【突然の喉の攻痛】商陸を根を切り、炙熱して布を隔てて

(二六)五尸ハ飛尸、遁尸、風尸、沈尸、尸注ナリ。尸病ハ尸蟲トイフ想像的原因ニヨリ發スル病。

(二七)失表ハ病毒內攻ノ意。

熨し、冷えれば易へる。立ろに癒える。(圖經本草)【瘰癧喉痺】攻痛するには、生商陸根を搗いて餅にし、癧上に置いて上から艾炷で三四壯灸するがよし。(外臺祕要)【一切の毒腫】章陸根に鹽少量を和して搗いて傅け、一日に二回づつ易へる。(孫眞人(一八)千金方)【石のやうな石癰】堅硬で化膿せぬには、生章陸根を搗いて擦る。燥けば易へて軟かくなるを度とする。また濕瘑、諸瘑をも治す。(張文仲方)【瘡傷水毒】章陸根を(一九)搗いて炙り、布に裹んで熨し、冷えれば易へる。(二〇)(千金方)

葛花 主治 【心が(二一)昏塞して多く物を忘れ、(二二)臥すことを好むには、花を取つて百日間陰乾し、末に搗いて夕刻に方寸匕を水で服し、そのまま横臥する。考へてゐた事、思ひ出さうとする事が睡眠中に明かに醒悟する】(蘇頌)

(一)狼毒 (本經下品)

和名 無し (和名類聚鈔に『やまくさ』とあれど實物は何か別のものである)
學名 未詳
科名 未詳

釋明 時珍曰く、名稱を觀ただけで毒なることが明瞭だ。

集解 別錄に曰く、狼毒は(二)秦亭の山谷、及び(三)奉高に生ずる。二月、八月

(一八)大觀ニ食忌ニ作ル。
(一九)大觀ニ搗ノ上ニ切字アリ。
(二〇)大觀ニ孫眞人食忌ニ作ル。
(二一)大觀ニ惛ニ作ル。
(二二)大觀ニ誤ニ作ル。
(一)牧野云フ、滿洲デハたかとうだい科(大戟科)ノEuphorbia Pallasii, Turcz.ヲ狼毒ト稱スルガ此書ノ狼毒トハ別ノモノデアラウト思フ、證類本草ノ石州狼毒ハ或ハ右ノ滿洲品ト同種カモ知レナイガ

本書ニ引テアル志ノ曰フ葉ガ商陸及ビ大黄ニ似ルトイフモノハ此品デハナイ。木村(康)曰ク、れいじんさう或ハのうるしノ説アリ、然レドモ現市場品ハイヅレモ當ラザルガ如シ、未ダ原植物ヲ決シ得ズ。

(七)秦亭ハ蘇恭説ニ依レバ秦、成二州界ニ在リトイフ。史記秦本紀ニ孝王ガ造父ノ後非子ナルモノニ馬ヲ汧渭ノ間ニ飼ハセタル地ヲ附庸ノ邑トストアリ。徐廣ハ今ノ天水隴西縣ノ秦亭是ナリトイフ。楊氏地理圖ニ據レバ、甘肅省秦州府大隴山ノ東南、牛頭河ノ支流後川河ノ東岸ニソノ地ヲ示ス。今ノ清水縣ノ北方約三十支

に根を採つて陰乾する。陳くして水に沈むものが良し。弘景曰く、(四)宕昌にも出るが、それは、生えるのは僅かに數畝の土地に止つて、それも蝮蛇がその根を食ふところから得難いものとなつてゐるといふ。やはり太山のものも用ゐるが、今用ゐるは(五)漢中、及び建平の產で、これは防葵と根を同うし、ただ水中に入れて見て沈むものが狼毒、浮ぶものが防葵だといふ。俗方では、また稀に腹內を療ずる要藥とするだけだ。

恭曰く、今は(六)秦州、成州に產する。秦亭はもと右の二州の界に在る土地だ。(七)秦隴地方は寒い土地だから、蝮蛇は元來居らぬ。この物と防葵とは全然類を異にし、產地もまた違ふ。太山にも漢中にも亦有るといふことは聞かない。陶氏の說は謬だ。

志曰く、狼毒は、葉は商陸、及び大黄に似て、莖、葉の表面に毛があり、根は皮が黃で肉が白い。實して重いものが良く、輕いものは力が劣る。秦亭なる土地は隴西に在り、奉高なる土地は太山山麓の縣である。陶氏は『沈むものは狼毒、浮ぶものは防葵だ』といつてあるが、信憑するに足らない。たとひ防葵でも、秋、冬に採

つたものは堅く實し、水に入れば皆沈む。狼毒でも、春、夏に採つたものは輕く虛して、水に入れば皆浮ぶものだ。且つこの二物は全然別物で、同類に見做し得べきものでない。この物と麻黄、橘皮、半夏、枳實、吳茱萸とを六陳といふ。

〔狼　毒〕

保昇曰く、根は玄參に似てゐる。ただ虛浮なるものは劣品だ。

頌曰く、現に陝西の州郡、及び(八)遼、石州にもあつて、形狀は馬志のいふ通りだ。

時珍曰く、狼毒は(九)秦、晉の地に產する。今一般に草䕡茹をこれとしてゐるが、誤だ。䕡茹の條參照。

根　〔氣味〕【辛し、平にして大毒あり】大明曰く、苦く辛し、毒あり。之才曰く、大豆が使となる。醋で炒るがよし。麥句薑を惡み、占斯、蜜陀僧を畏る。

〔主治〕【欬逆上氣。積聚飮食、寒熱水氣を破る。惡瘡、鼠瘻、疽蝕、鬼精、蠱毒。飛鳥、走獸を殺す】(本經)【胸下の積僻を除く】(別錄)【痰飮、癥瘕を治す。また鼠を

里ノ地點ナリ。

(三)奉高ハ漢ノ縣名泰山郡治タリ。宋ニ奉符ニ改メ、今ハ泰安トイフ、即チ今ノ泰安府治ナリ。

(四)宕昌ハ石部雄黄ノ註ヲ見ヨ。

(五)漢中ハ石部礜石ノ註、建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(六)秦州ハ石部石膽ノ註、成州ハ石部鹵石類光明鹽ノ註ヲ見ヨ。

(七)秦隴ハ山草類胡黄連ノ註ヲ見ヨ。

(八)遼州ハ山草類人參ノ註、石州ハ隰草類石龍芻ノ註ヲ見ヨ。

(九)秦ハ秦州地方、石部石膽ノ秦州ノ註參照。晉ハ晉州地方、石部礬石ノ晉州ノ註參照。

殺す】(大明)【野葛と合せて耳中に入れば聾を治す】(抱朴子)

附方　舊四、新六。【心腹連痛】脹るには、狼毒二兩、附子半兩を搗き篩ひ、蜜で梧子大の丸にし、發病後一日には一丸を服し、二日には二丸を服し、三日には三丸を服して止め、又、一丸から三丸まで漸增して止め、瘥えるを度とする。(肘後方)【九種の心痛】一には蟲、二には疰、三には風、四には悸、五には食、六には飲、七には冷、八には熱、九には氣である。また連年の積冷で心胸に流注するもの、及び車馬から墜落して起した瘀血中惡等の證を治す。九痛丸——狼毒を香しく炙き、吳茱萸を湯に泡け、巴豆を心を去り炒つてその霜を取り、乾薑を炮き、人參と各一兩、附子を湯に泡け皮を去つて三兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、一丸づつを空腹の時毎に溫酒で服す。(和劑局方)【腹中の冷痛】水穀が陰結し、心下に停痰して兩脇が痞滿し、按すれば音をたてて移動し、逆して飲食の攝取を障碍するには、狼毒三兩、附子一兩、旋覆花三兩を搗いて末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、三丸づつを食前に白湯で服す。(肘後方)【陰疝で死せんとするもの】睾丸が縮んで腹に入り、急痛して死せんとするには、狼毒四兩、防風二兩、附子三兩を燒き、蜜で梧

子大の丸にし、晝夜三回、三丸づつを白湯で服す。(肘後方)【兩脇の氣結】方は腹中冷痛の方に同じ。【一切の蟲病】川狼毒を杵いて末にし、一錢づつを、餳を皂子一箇ほどの量、砂糖少量を入れた水に溶かし、就寢時に空腹にして服す。翌朝蟲が下る。(集效方)【乾、濕の蟲疥】狼毒を多少に拘はらず搗き爛らして猪油、馬油で調へ、患部に搽つて睡る。藥氣で顏を傷める虞があるから、夜具を頭に被つてはならぬ。これは維揚の潘氏が所傳の方である。(藺氏經驗方)【積年の疥癩】狼毒一兩を、一半は生で研り、一半は炒つて研り、輕粉三合、水銀三錢を茶末少量と器に入れて津液で擦化して末にし、共に淸油を藥より一寸高さに入れて浸し、三日經て藥が沈み油が淸んだ時、夜間燈火を見ずにその油を蘸けて瘡上に搽擦し、同時に口、鼻を藥盞の上に近づけて、その氣を吸つて效を取る。(永類方)【積年の乾癬】痂を生じて搔けば黃水が出し、曇天雨天の日には必ず痒きには、狼毒末を塗る。(聖惠方)【惡疾風瘡】狼毒、秦艽等分を末にし、一日一二回、方寸匕づつを溫酒で服す。(千金方)

(一)防葵（本經上品）

和名無し
學名未詳
科名繖形科

［釋名］房苑（別錄）　梨蓋（本經）　利茹（呉普）　又、爵離、方蓋、農果と名ける。恭曰く、根、葉が葵花に、子、根の香味が防風に似てゐるところから防葵と名けたのだ。

［集解］別錄に曰く、防葵は(二)臨淄の川谷、及び嵩高、太山、少室に生ずる。三月三日に根を採つて曝乾する。普曰く、莖、葉は葵のやうで表面が黒赤だ。二月根が生え、その根の大きさは桔梗ほどで中が紅白だ。六月白い花を開き、七月、八月に白い實を結ぶ。三月根を採る。

恭曰く、この物もやはり稀有なもので、(三)襄陽の(四)望楚山の東、及び(五)興州の西方にある。興州のものが南方の産に勝るのは、蜀地に隣接してゐるためだ。

頌曰く、今はただ襄陽の地に出るだけで、その他の郡のことは聞かない。その葉は葵に似て莖毎に三葉あり、一株から十數莖が生え、中から幹が一本出てその端に

(一)牧野云フ、我邦ノ本草家從來之レヲぼたんぼうふう一名ぼたんにんじん一名御赦免にんじん一名御免にんじんニ充ツレドモ中ツテ居ナイ、何カ繖形科品デハアルヤウデアルガ右トハ全ク別ノモノデアル、然シ其品ハ判然シナイ、右ノ我邦産ぼたんぼうふうハ海邊ニ限ラレテ生ズルモノデ海カラ離レタ山地ナドニハ絶エテ見ル品デハナイ。

(二)臨淄ハ芳草類蛇牀、積雪草ノ註ヲ見ヨ。

(三)襄陽ハ石部握雪礜石ノ註ヲ見ヨ。

(四)望楚山ハ襄陽縣治ノ南三支里ニ在リ。一名馬鞍山、一名災山トイフ。

(五)興州ハ隰草類蛇

花を開き、葱花か景天などのやうで白色だ。六月花を開いて實を結ぶ。根は防風に似たもので、香味も似てゐる。適當の時期に採收したものは水に沈む。當今枯れ朽ちた狼毒をこの物に當ててゐるが。甚しい謬だ。

時珍曰く、唐の時代には隴西の成州から貢納したものだ。蘇頌の説は甚だ明確で信據し得る。

〔防葵〕
――襄州――

正誤 弘景曰く、防葵は、今は建平のものを用ゐる。本來狼毒と同根であつて、恰も(六)三建のやうなものだ。その形もやはり相似てゐて、ただ水中に入れて沈まないだけだが、しかし狼毒も久しく經た陳いものはやはり沈まない。

斅曰く、凡そ防葵を使ふ場合には、誤つて狼毒を用ゐてはならぬ。眞によく似てゐるから誤るのだが、試驗して見ると、效果に異るところがあるのだから、又、功力も(七)同じではない。患者を過つことがあるから、よほど愼重にせねばならぬ。こ

舍ノ註ヲ見ヨ。

(六)弘景曰、天雄烏頭附子末出建平故謂之三建。

(七)同字大觀ニヨル。

(八)金陵本ニ蔡ニ作ル、從フベシ。蔡州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(九)前後ノ文ニヨリ之ヲ補フ。

の防葵なる植物は、(八)葵州の沙土中に生ずる。採收すると二十日位で蛀が生ずるものだ。これを用ゐるには、輕いものさへ用ゐれば妙である。

恭曰く、狼毒と防葵とは全然類を異にし、產地もやはり別だ。

藏器曰く、この二物は、一は(防葵)上品(九)一は(狼毒)下品の藥であつて、善、惡の性を異にし、形質も別である。陶氏が、浮ぶと沈むとで區別したために、後世一般にそれを標準にして使用し、防葵を以て堅積を破る下品の藥物と思ひ、狼毒と同一功力と考へ、古から今に至るまでそれが慣習となつて、遂にこの二物の明確な區別がなくなつたのは、甚だしい謬誤であつた。

根 [修治] 斅曰く、凡そこれを使用するには、蚰末を揀り去つて甘草湯に一夜浸し、漉出して曝乾し、黃精の自然汁一二升を拌ぜて、土器でその自然汁が盡きるまで炒つて用ゐる。

[氣味] 【辛し、寒にして毒なし】 別錄に曰く、甘く苦し。普曰く、神農は辛し、寒なりといひ、桐君、扁鵲は毒なしといひ、岐伯、雷公、黃帝は辛く苦し、毒なしといふ。權曰く、小毒あり。

(一〇)濕瘖、本經。
(一一)臚ハ腹前ヲ云フ。
(一二)本經逢原ニ中火ノ間ニ有字アリ。

【主治】【疝瘕、腸洩、膀胱の結熱で尿の通ぜぬもの、欬逆、(一〇)濕瘖、癲癇、驚邪で狂走するもの。久しく服すれば、骨髓を堅くし、氣を益し、身體を輕くする】(本經)【五臟の虛氣で小腹支滿し、(一一)臚脹し、口乾くものを療じ、腎の邪を除き、志を强くする。(一二)中火の患者は服してはならぬ、恍惚として鬼を見るものである】(別錄)【久しく服すれば、邪氣驚狂に主效がある】(蘇恭)【痃癖氣塊、膀胱の宿水、盌のやうに大きくなる血氣瘤に主效があつて、悉くよく消散し、鬼疰の百邪、鬼魅精怪を治し、氣を通ずる】(甄權)

【發明】時珍曰く、防葵に就ては、神農は上品の藥とし、黃帝、岐伯、桐君、雷公、扁鵲、吳普はいづれも無毒といひ、獨り別錄だけが『中火の患者が服すれば恍惚として鬼を見る』といひ、陳延之の小品方には『防葵は、多く服すれば惑亂、昏迷し、恍惚として狂のやうになる』といつてあるが、按ずるに、難經に『重陽の者は狂し、脫陽の者は鬼を見る』とある。上品の藥、性を養ふ藥であるならば、いかでかかる結果を見る道理があらう。寒にして毒なしといかでいひ得ようか。果してさやうなわけがないとすれば、本經、及び蘇恭の列記したものこそ防葵そのもの

の效用だ。別錄に列記したものは、防葵に似た狼毒の效用であつて、防葵そのものの功用ではない。狼毒が防葵と混亂して區別を失つた來歷は誠に遠いものだ。識別上の注意を要する。古方の、蛇瘕、鼈瘕を治する大方の中に多く用ゐてある防葵も皆狼毒だ。

【附方】　舊一、新二。【腫滿して脈の洪、大なるもの】防葵を硏末し、一刀圭を溫酒で服す。二三服したとき、身體に(一三)瞤を覺え、また少し不仁になるが效驗である。(效後方)【癲狂邪疾】方は上に同じ。【傷寒動氣】傷寒で、發汗下通の後、臍の左に動氣あるには、防葵散――防葵一兩、木香、黃芩、柴胡各半兩を用ゐ、半兩づつを水一盞半で八分に煎じて溫服する。(雲岐子保命集)

(一)狼　牙　(本經下品)

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】　牙子(本經)　狼齒(別錄)　狼子(別錄)　犬牙(吳普)　抱牙(吳普)　支蘭(李當之)　弘景曰く、その牙が獸類の齒牙に似てゐるところからかかる諸名稱を

(一三)瞤、大觀ニ潤ニ作ル。

(一)牧野云フ、小野蘭山ハ狼牙チいばら科(薔薇科)ノみつもとさう Potentilla Cryptotaenae, Maxim. ニ充テ居レドモ、是レハヨイ加減ナ充テ方デ全ク中ツテ居ナイ。

呼ばれたのだ。

【集解】別錄に曰く、狼牙は淮南の川谷、及び(二)宛句に生ずる。八月根を採つて暴乾する。濕に中つて腐爛し、衣を生じたものは人を殺す。普曰く、葉は青く、根は黃赤で、六七月に花を開き、八月黒い實を結ぶ。正月、八月に根を採る。

〔狼牙〕

保昇曰く、所在にある。苗は蛇苺に似て厚く大きく、深綠色だ。(三)根は黒くして獸類の牙のやうだ。(四)三月、八月根を採つて日光で乾かす。

頌曰く、今は江東、汴東の州郡に多くある。

時珍曰く、范子計然に『(五)建康、及び(六)三輔に出る。色の白いものが善し』とある。

根 【氣味】【苦し、寒にして毒あり】別錄に曰く、酸し。普曰く、神農、黃帝は苦し、毒ありといひ、桐君は辛しといひ、岐伯、雷公、扁鵲は苦し、毒なしと

(二)宛句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ根萌牙若獸之牙トアリ。

(四)大觀ニ三ヲ二ニ八ヲ三ニ作ル。

(五)建康ハ今ノ江蘇省江寧縣ノ地ナリ。

(六)三輔トハ漢ニ京兆、馮翊、扶風ヲ稱ス。今ノ陝西省關中道ノ地ナリ。山草類知母ノ註參照。

いふ。之才曰く、蕪荑が使となる。地楡、棗(七)肌を悪む。

主治　【邪氣、熱氣、疥瘙、悪瘍、瘡痔。白蟲を去る】(本經)【浮風瘙痒を治す。煎じた汁で悪瘡を洗ふ】(甄權)【腹臓一切の蟲を殺し、赤、白痢を止めるに煎じて服す】(大明)

附方　舊六、新四。【金瘡出血】狼牙草の莖、葉を搗き熱して貼る。(八)(肘後方)

【尿血】金粟狼牙草を焙じ乾して蚌粉を入れて炒り、槐花、百薬煎と等分を末にし、三銭づつを空心に米泔で調へて服す。また酒病もこれで治癒する。(衞生易簡方)【寸白諸蟲】狼牙五兩を搗いて末にし、蜜で麻子大の丸にし、一夜絶食して翌朝漿水で服す。一合を服し盡せば瘥える。(外臺祕要)【蟲瘡の瘙癢】六月以前には狼牙の葉を採り、以後には根を用ゐ、生で㕮咀して木の葉で裹み、煻火で炮(九)熟して瘡上を熨し、冷えれば止める。(楊炎南行方)【小兒の陰瘡】狼牙草の濃煮汁で洗ふ。(千金方)【婦人の陰癢】狼牙二兩、蛇牀子三兩を水で煎じ、熱して洗ふ。(外臺祕要)【婦人の陰蝕】瘡の爛れたるには、狼牙湯——狼牙三兩、水四升を半升に煮取り、一日四五回、箸に綿を纏へて浸して瀝ぎ洗ふ。(一〇)(張仲景金匱玉函)【汁の出る聤耳】狼牙を研末し、綿で

(七)肌恐クハ棘ノ誤。

(八)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

(九)大觀ニ熱ニ作ル。

(一〇)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

嚢んで日毎に塞ぐ。（聖惠方）【毒蛇の螫傷】獨莖の狼牙根、或は葉を搗き爛らし、臘豬脂に和して塗る。立ろに瘥える。（崔氏方）【射工の毒】瘡あるには、狼牙を、冬は根を、夏は葉を取つて搗汁四五合を飮み、幷に傅ける。（千金方）

䕡茹（一）（本經下品）

和名　無し
學名　Euphorbia sp.
科名　たかとうだい科（大戟科）

【釋名】　離婁（別錄）掘据　音は結居（ケツキヨ）である。白きものを草䕡茹と名ける。時珍曰く、䕡茹は本來は藘蕠と書く、その根の牽引する狀態の形容だ。掘据は拮据と書くべきで、詩に『予指拮据』とあり、これは手、口共に動作する狀態をいつたのだ。

【集解】　別錄に曰く、䕡茹は（二）代郡の川谷に生ずる。五月根を採つて陰乾する。頭の黑いものが良し。

普曰く、草の高さ四五尺、葉は圓く黃色で、二枚づつ相對して生え、四月花を開き、五月黑い實を結ぶ。根は黃色でやはり黃色の汁がある。三月葉を採り、四月、

（一）牧野云フ、たかとうだい屬（Euphorbia）ノ一種ナレドモ今其種名ヲ遽カニ鈎出シ得ナイ、植物名實圖考卷ノ二十四ニ其圖ガ出テ居ルガ狹葉ノ品デアル、此根ヲ誤テ狼毒ト謂フトノ事デアル、然シ此䕡茹ハEuphorbia Pallasii, Turcz. デハナイ。
（二）代郡ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。

五月根を採る。

弘景曰く、今は第一位のものは高麗に產する。色は黃だが、當初根を斷ち取る時、出た汁が凝つて漆のやうに黑くなつてゐる。故に(三)漆頭といふ。次位のものは近道に出る。これは(四)草䕡茹と名け、色は白いものだ。いづれも燒いた鐵で爍き付け、頭を黑くして漆頭としてあるが、これは擬物であつて、眞物ではない。

頌曰く、今は(五)河陽、淄、齊州にもある。二月苗が生え、葉は大戟に似て花は黃色、根は蘿蔔のやうで、皮は赤黃色、肉は白色だ。初め斷ち取つた時、出た汁が凝つて漆のやうに黑くなる。三月淺紅色の花を開き、また淡黃色のものもあつて、子は著かない。陶隱居のいふ高麗の產なるものがこれに近い。又、草䕡茹といふ白色の一種があつて、古方には兩種共に用ゐたものだ。故に姚僧坦の癰疽惡肉を生じたるを治する白䕡茹散といふがあり『これを傅けて、肉が盡きたならば使用を停める。但し諸膏藥を傅けても肉が生ぜぬ場合、又は、黃芪散を傅けても惡肉が盡きぬ場合に用ゐるので、漆頭赤皮の䕡茹を散にし、半錢(六)匕に白䕡茹散三錢匕を(七)和して傅ける』としてある。これで觀れば、赤、白いづれも用ゐられるのだ。

(三)牧野云フ、漆頭ノ䕡茹ヲ我邦ノ先輩今日云フべにたいげきニ充ツレドモ、ヨイ加減ノ充テ方デ信用出來ヌ。

(四)牧野云フ、草䕡茹ヲのうるしニ充ツル說ハ穩當ト思ハヌ是レハ如何ナル品カ能ク分ラヌ。

(五)河陽ハ隰草類翟麥ノ註、淄州ハ石部雌黃ノ註、齊州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。

(六)匕字ハ大觀ニ據ル。

(七)大觀ニ和ヲ合ニ作ル。

（八）武都ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

時珍曰く、范子計然に『藘茹は（八）武都に出る。黄色のものが善し。草藺茹は建康に出る。白色だ』とある。今はやはり處處に有つて、山原中に生じ、春初に苗が生え、高さ二三尺になる。根は長く大きく、蘿蔔や蔓菁のやうな狀態で、岐があつて分れ出るものだ。皮は黄赤で肉は白く、破れば黄色の漿汁が出る。莖、葉は大戟のやうで、葉は長くして微し闊く、甚だしくは尖らず、折れば白汁があり、莖を抱く短葉が相對して團になつて生え、尖葉の中から莖が出て、莖の中程で二三本の小枝が分れる。二三月に細かい紫色の花を開いて、大いさ豆ほどの實を結び、一顆に三粒相合し、生では青く、熟すれば黒く、中に續隨子のやうな形の白仁がある。今一般には往往その根を狼毒と呼んでゐるが、それは誤だ。狼毒は、葉が商陸、大黄などに似たもので、根に漿汁がない。

〔藺　茹〕

根 ［氣味］ 【辛し、寒にして小毒あり】 別錄に曰く、酸し。普曰く、神農は辛しといひ、岐伯は酸く鹹し、毒ありといひ、李當之は大寒なりといふ。之才曰く、

甘草が使となる。門冬を惡む。

【主治】【惡肉、敗瘡、死肌を蝕治し、疥蟲を殺し、膿、惡血を排し、大風熱氣、よく物を忘れ、(九)睡眠せぬを除く】(本經)【熱痺を去り、癥瘕を破り、息肉を除く】(別錄)

【發明】宗奭曰く、馬疥を治するに尤も善し。服食の方に用ゐることは至て稀だ。

時珍曰く、素問に、婦人の血枯痛を治するに、烏鰂骨、蘆茹の二物を丸にして服すとあつて——方は烏鰂魚の條にある——王冰は「蘆茹を用ゐるは、その惡血を散する力を取る』といつてある。又、齊書に『郡王の子隆は、年齡二十歲で身體が(一〇)過充したが、徐嗣伯が蘆茹丸を合せて服せると自から消した』とある。して見ると蘆茹もやはり服食し得るわけで、ただ斟酌を要するだけだ。孟詵の必效方には、甲疽が脚趾の邊に生じて腫爛するを治するに、藺茹三兩、黃芪二兩を苦酒に一夜浸し、豬脂五合で合煎して三合の膏にし、一日三回塗れば消す』とあり、又、聖惠方には、頭風旋眩を治する鴟頭丸中にやはり用ゐてある。

(九)本經ニハ不樂ニ作ル。

(一〇)過充ハ脂肪過多ナラン。

附方 舊二、新三。【緩疽腫痛】蔄茹一兩を散にし、溫水で二錢匕を服す。（聖惠方）【傷寒咽痛】毒攻で腫れたるには、蔄茹を爪甲ほど口に納れて嚼み、その汁を嚥む。微し刺戟を感ずれば佳いのである。（二）（張文仲備急方）【中焦の熱痞】よく物を忘れて困るには、蔄茹二分、甘草を炙いて二兩、消石を末にし、一錢づつを雞鳴時刻に溫酒で服す。反應（はんのう）あるを度とする。（聖惠方）【疥瘡の瘙癢】蔄茹末に輕粉、香油を入れて調へて傅ける。（多能鄙事）

（一）大戟（本經下品）

和名　未詳
學名　Euphorbia spp.
科名　たかとうだい科（大戟科）

釋名 邛鉅（二）（爾雅）　下馬仙（綱目）　時珍曰く、その根が辛く苦く、人の咽喉を鋭く刺戟するから名けたものだ。今の賤俗間では下馬仙（げばせん）と呼ぶ。その意味は、人を下痢さすことが甚だ速だといふのである。郭璞注爾雅には『蕎（けう）は邛鉅（こうきよ）なり、卽ち大戟のことだ』とある。

集解 別錄に曰く、大戟は（三）常山（じやうざん）に生ずる。十二月根を採つて陰乾する。

（二）大觀ニ傷寒類要ニ作ル。

（一）牧野云フ、大戟ノ眞物今能ク分ラヌ集解ノ文ヲ見ルニ人ニヨツテ其說ク植物ヲ異ニシテ居ル、頌ノ說ク品ハ我がなつとうだいニ似テ居リ時珍ノ說クモノハ決シテ其レデハナク、其レハ或ハしなたかとうだい（Euphorbia pekinensis, Rupr.）デハナイカトモ思フガ能クハ分ラ

ヌ。植物名實圖考卷ノ二十四ノ大戟ノ圖ハなつとうだいニ似テ居ル、松村任三博士ノ改訂植物名彙ニ此名實圖考ノ品ヲEuphorbia Esula. L.ニ充テアルノハ正シクナイ。
(二)當ニ本經ニ作ルベシ。
(三)常山ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。
(四)大觀ニ黃ノ下ニ黑字アリ。
(五)大觀ニ花ニ作ル。

○○保昇曰く、苗は甘遂に似て高く大きく、葉に白汁があり、花は黃色だ。根は細苦參に似て皮が(四)黃、肉は黃白だ。五月苗を採り、二月、八月根を採つて用ゐる。

〔北大戟〕

○頌曰く、近道に多くある。春紅芽が生え、漸次に成長して叢をなし、高さ一尺ほどになる。葉は初生の楊柳に似て小さく團い。三月、四月に團圓で杏花に似た、また蕪荑に似た黃紫の花を開く。根は細苦參に似たものだ。秋、冬にその根を採つて陰乾する。淮甸に產するものは、莖が圓く、高さ三四尺、(五)葉は黃色で、心まで著いて百合の苗のやうでもある。江南に生ずるものは、葉が芍藥に似てゐる。

〔南大戟——信州——〕

○○時珍曰く、大戟は平澤に甚だ多く生える。直莖で高さ二三尺、中が空で折れば白漿が出る。葉は長く狹く、柳葉のやうで團くはない。その梢には葉が密に攢まつ

（六）附生トハ正根ニ非ザル傍株ノ根ヲ云フ。

（七）氣ヲ洩ラスハ下利スルヲ云フ。

（八）木村（康）曰ク、大戟ハ有毒植物ニシテオイフォルボン、ゴム質、樹脂、蓚酸石灰、澱粉及一種ノアルカロイドヲ含有スベシト。（有馬純三―化誌、昭、三、二五二）

て上に著く。杭州の紫大戟を上級品とし、江南の土大戟がこれに次ぐ。北方の綿大戟は色白く、その根は皮が柔靱で綿のやうだ。甚だ峻烈に下痢するもので、よく人體を傷ふ。弱い患者が服すれば吐血することがあるから注意を要する。

根　［修治］　斅曰く、凡そこれを用ゐるには、（六）附生のものを用ゐてはならぬ。（七）氣を洩らして停止するところなきものだ。その場合は薺苨湯を煎じて服すれば解す。大戟を採收したならば、槐砧上で細かに剉んで海芋葉と拌ぜ、午前十時から午後四時まで蒸して芋葉を取り去り、晒し乾して用ゐる。時珍曰く、凡そこれを採つたならば、漿水で軟かに煮て骨を去り、晒乾して用ゐる。海芋葉は麻痺する有毒物だから、恐らく用ゐられない。

（八）［氣味］　【苦し、寒にして小毒あり】　別錄に曰く、甘し、大寒なり。權曰く、苦く辛し、大毒あり。元素曰く、苦く甘く辛し、陰中の微陽である。肺を瀉し、眞氣を損ずる。時珍曰く、棗と配合すれば脾を損じない。之才曰く、甘草と反する。菖蒲を用ゐれば解す。恭曰く、菖蒲、蘆、葦、鼠屎を畏る。大明曰く、赤小豆が使となる。薯蕷を惡む。

【主　治】【蠱毒、十二の水腫、腹滿急痛、積聚、中風の皮膚疼痛、吐逆】(本經)【頸、腋の癰腫、頭痛。汗を發し、大、小便を利す】(別錄)【毒藥を瀉し、天行の黃病、溫瘧を泄し、瘕結を破る】(大明)【惡血、癖塊、腹中雷鳴を下し、月經を通じ、胎孕を墮す】(甄權)【隱疹風、及び風毒脚腫を治す。いづれも水で煮て(九)日日熱し淋ぎ治效を取る】(蘇頌)

【發　明】成無已曰く、大戟、甘遂の苦は水を泄らす。水は腎が司配するものである。

好古曰く、大戟と甘遂とは、共に泄水の藥であつて、濕の勝てるものは、苦燥でこれを除く。

時珍曰く、痰涎なるものの性質は、氣に隨つて升、降し、處として到らざるなきものであつて、心に入つた場合には、竅に迷つて癲癇となり、妄りに怪しきことを言ひ、妄りに怪しきものを見る。肺に入つた場合には、竅に塞つて欬唾が稠粘し、喘急し、背冷となる。肝に入つた場合には、留伏し、蓄聚して脇痛、乾嘔、寒熱往來となる。經絡に入つた場合には、麻痺し、疼痛し、筋骨に入つた場合には、頸項、

(九)大觀ニ日再三ニ作ル。

（一〇）經隧ハ月經ノ通路。

胸背、腰脇、手足が牽引し、隱痛するものだ。陳無擇の三因方では、いづれも控涎丹を主として用ゐて殊に奇效があるが、それは痰の本を治するのである。痰の本は水であり、濕であつて、それに氣と火とが加はれば凝滯して痰となり、飲となり、涎となり、涕となり、癖となる。大戟は能く臟、腑の水、濕を泄し、甘遂は能く（一〇）經隧の水、濕を行り、白芥子は能く皮裏、膜外の痰氣を散ずるものであつて、控涎丹は善く適當にそれを用ゐてあるので奇功を收め得るわけなのだ。

又、錢仲陽は『腎は眞水だ。補すべき道理はあるが、瀉すべき道理はない』といひ、また『痘瘡が變黑して腎に歸した一病證は、百祥膏を用ゐてこれを下す。これは腎を瀉すやうなものだが腎を瀉するのではない。その腑を瀉するので、それで臟が自から實せぬことになるのだ』と主張した。余が按ずるに、百祥は、なるほど大戟一味を用ゐてある。大戟は能く水を行るものだ。それで『その腑を瀉すから臟が自から實せぬことになるのだ』といつたのである。腑とは膀胱を指す。しかし、竊かに謂ふに、百祥は獨り腑を瀉するだけのものではない。これは、實するときはその子を瀉すのそれであつて、腎の邪が實するに對してその肝を瀉するのだ。大戟は

味が苦濇で、水に浸せば色が青綠となる。肝、膽の藥なのだ。故に百祥膏は、また嗽を治して口から青綠の水を吐くのである。一體青、綠なる色は少陽の風木の色なのだ。仲景も『心下痞滿して脇下に引いて痛み、乾嘔し、氣短きものには十棗湯を主とする』といひ、その中にはやはり大戟を入れてある。そもそも乾嘔、脇病は、肝、膽の病ではないか。然らば百祥は肝、膽を瀉するは明なことである。肝は方位では東方である。瀉すべくして補すべきものでない。況や青を瀉し、黄を瀉すはいづれもその子を瀉するのだ。同一の瀉である。何ぞ獨り腎のみただ腑を瀉すといふわけがあらうか。潔古老人は、變黑して腎に歸した證を治するに、宣風散を百祥膏の代用とした。やはりこれも子を瀉すが目的である。蓋し毒が勝ちて火が熾なれば水は益〻涸れ、風に火勢を挾めば土に陷隙が生ずる。故に津、血が内に枯竭し、膿を化する作用が不能になり、青黑、乾陷の證を現はすのである。これに對して風、火の毒を瀉するは、腎を救ひ脾を扶ける所以であつて、ある者は『脾虛、腎旺だから腎を瀉して脾を扶けるのだ』といふが、それは非である。腎の眞水たるや、瀉すべきものではない。瀉するはその陷伏の邪毒に對してだけのことだ。

附方 新十一。【百祥膏】嗽を治して青緑の水を吐く。又、痘瘡が腎に歸して紫黑に乾陷し、寒を發せぬものはこれで下すがよい。黑くならぬものをば決して下してはならぬ。紅芽の大戟を多少に拘らず陰乾し、漿水で極めて軟かに煮て骨を去つて日光で乾かし、更にその煮汁を入れて汁の全部盡きるまで焙じて末にし、水で粟米大の丸にし、一二十丸づつを赤脂麻湯に研つて服す。○潔古活法機要の棗變百祥丸——斑瘡が變黑し、大便の閉結するを治す。大戟一兩、棗三箇を水一盌で共に煮て暴乾し、大戟を取り去り、棗肉を焙じて丸にして服す。少量より多量に進み、利するを度とする。【控涎丹】痰涎が胸膈の上下に留在し、變じて諸病となり、或は頸項、胸背、腰脇、手足、胯髀が忍び難く隱痛し、筋骨が牽引し、釣痛し、走易するもの、及び皮膚が麻痺して癱瘓に似たるものを治す。右の諸症狀は、誤つて風氣、風毒、及び瘡疽としての治療を施してはならない。又、頭痛で擧らず、或は睡眠中に涎を流し、或は欬唾、喘息し、或は痰が心竅に迷ふものを治す。いづれもこの藥を數服するがよし。痰涎は自から消失し、諸疾は隨つて癒える。紫大戟、白甘遂、白芥子を微し炒つて各一兩を末にし、薑汁で作つた麪糊で梧子大の丸にし、七

丸、或は二十丸づつを津液で嚥下す。利を取るには五六十丸を服す。（三因方）【水腫喘急】小便の濇るもの、及び水蠱には、大戟を炒つて二兩、乾薑を炮いて半兩を散にし、三錢づつを薑湯で服し、大、小便の利するを度とする。（聖濟總錄）【水病腫滿】年月の淺深を問はず、大戟、當歸、橘皮各一兩を切り、水二升で七合に煮取つて頓服する。水二三升を利下するが、驚き慌てるに及ばぬ。甚しい重態のものも再服に過ぎずして瘥える。一年間毒食を禁ずれば永く再發せぬ。この方は張尙客から出たものだ。（李絳兵部手集）【水氣腫脹】大戟一兩、廣木香半兩を末にし、五更に酒で一錢半を服し、碧色の水を取り下してから、粥を食つて補ふ。鹹物を忌む。〇簡便方では、大戟を燒いて性を存して研末し、一錢匕づつを空心に酒で服す。【水腫腹大】鼓のやうになり、或は全身が浮腫するには、棗一斗を鍋に入れて水で浸し、大戟の根、苗でそれを蓋ひ、瓦盆でよく合せて煮熟し、その棗を時に拘はらず食ふ。食ひ盡せば必ず癒える。〇又、大戟散――大戟、白牽牛、木香等分を末にし、猪腰子一對を切り開いてその中へ末一錢を摻り、濕紙で裹んで煨熟し、空心に食ひ、左が腫れたるには左を塌し、右が腫れたるには右を塌する。（張潔古活法機要）【牙齒の搖痛】大戟

を痛む部分で咬むが良し。（生生編）【中風發熱】大戟、苦參四兩を白酢漿一斗で煮熟して洗ふ。寒すれば止る。（千金方）

（一）澤漆（本經下品）

和名　とうだいぐさ
學名　Euphorbia helioscopia, L.
科名　たかとうだい科（大戟科）

【釋名】　**漆莖**（本經）　**猫兒眼睛草**（綱目）　**綠葉綠花草**（綱目）　**五鳳草**　弘景曰く、これは大戟の苗で、（二）初生時に葉を摘むと白汁が出るから澤漆と名けたのだ。また人（三）肉を嚙む。○その他下文を見よ。

【集解】　別錄に曰く、澤漆は大戟の苗である。太山の川澤に生ずる。三月三日、七月七日に莖、葉を採つて陰乾する。

大明曰く、これは大戟の花である。川澤中にあるもので、莖梗は小さく、花は黃色、葉は嫩菜に似てゐる。（四）五月に採收する。

頌曰く、今は（五）冀州、鼎州、明州、及び近道いづれにもある。

時珍曰く、別錄と陶氏といづれも『澤漆は大戟の苗』といひ、日華子はまた『こ

（一）牧野云フ、普通野外ニ見ル一草デ西歐洲ヨリ印度並ニ我日本ニ亙リテ生ズル、支那デモ普通ニ見ル。

（二）初字大觀ニヨリテ補入ス。

（三）肉字大觀ニヨリテ補入ス。

（四）大觀ニ五上ニ四字アリ。

（五）冀州ハ水部非泉水ノ註、鼎州ハ石部太一餘粮ノ註、明州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

（六）手字彙言ニヨリテ補フ。

れは大戟の花で、その苗は食へる』といふ。しかし、大戟の苗は人をして洩せしめるから、菜としては食へない。今、土宿本草、及び寶藏論の諸書に就いて攷究するに、いづれも『澤漆は貓兒眼睛草、一名緑葉緑花草、一名五鳳草である。江湖地方の原澤、平陸に多くあつて、春苗が生え、一株に枝が分れて叢となる。莖は柔で馬齒莧の如く、葉は緑で苜蓿の葉の如く、その葉は圓くして色は黄緑、頗る貓の瞳に似てゐるところから貓兒眼と名け、莖頭が凡て五葉で中が分れ、中から小さい莖が五枝に分れて抽き出で、枝毎に青緑色の細花を開き、更に小さい葉がそれを承け、一樣に整然としてゐるところから、また五鳳草、緑葉緑花草と名ける。莖を摘めば白汁が出て人の（六）手に粘り、その根は白色で硬骨がある。或はこの點から大戟の苗だといふものもあるが、それは誤だ。五月汁を取つて雄黄を煮、鍾乳を伏し、草砂を結する』とある。この說に據れば、澤漆は貓兒眼睛草であつて大戟の苗ではない。現に方家で水蠱脚氣を治するに用ゐ

〔澤　漆〕
——貓兒眼——

て有效だ。尤も神農本經の記述と、合致する。漢時代に別錄を編纂した頃から誤つて大戟の苗と記したために、歷代の諸家がその說を襲用して來たものだ。實際使用上にはその點を審にせねばならぬ。

莖葉　〔氣味〕【苦し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、辛し。大明曰く、冷にして小毒あり。之才曰く、小豆が使となる。薯蕷を惡む。〔主治〕【皮膚の熱、大腹水氣で四肢、顏面の浮腫するもの、男子の陰氣不足】(本經)【大、小腸を利し、目を明にし、身體を輕くする】(別錄)【蠱毒に主效がある】(蘇恭)【瘧疾を止め、痰を消し、熱を退ける】(大明)

〔發明〕　時珍曰く、澤漆は水を利する功力が大戟に類するところから、世人はその莖にも白汁があるので遂に誤つて大戟と思つたのだ。けれども、大戟は、根にも苗にも皆毒があつて人を泄せしめるが、澤漆は、根は硬くて用ゐられず、苗は無毒で菜にして食へるものだ。しかし男子の陰氣を利することは大戟と(七)甚だ異ふ點である。

〔附方〕　舊二、新六。【肺欬上氣】脈の沈なるには、澤漆湯を主とする。澤漆三斤

(七) 甚ノ字金陵本ニ據ル。

を東流水五斗で一斗五升に煮取つて滓を去り、半夏半升、紫參、白前、生薑各五兩、甘草、黃芩、人參、桂心各三兩を入れて五升に煎じ、一日三回、五合づつを服す。（張仲景金匱要略方）【心下の伏瘕】大いさ盃ほどになり、食事不能なるには、澤漆四兩、大黃、葶藶を熬つて三兩を搗き篩ひ、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、二丸づつを服す。（葛洪肘後方）【十種の水氣】夏季に採つた澤漆の嫩莖葉十斤に水一斗を入れて研り、その汁約二斗を銀鍋に入れて慢火で熬り、稀餳のやうにして瓶に取り收め、毎日空心に一匙を溫酒で調へて服す。癒えるを度とする。（聖惠方）【水氣蠱病】生の新鮮な貓眼睛草を晒し乾して末にし、棗肉で彈子大の丸にし、一日二回、二丸づつを白湯に溶かして服す。腹中が暖まり、小便の利するを度とする。（乾坤祕韞）【脚氣赤腫】步行に脚の痛むには、貓兒眼睛草、鷺鷥藤、蜂窠等分を用ゐ、毎服一兩を水五碗で三碗に煎じて薰じ洗ふ。（衞生易簡方）【牙齒の疼痛】貓兒眼睛草一搦を研り爛らし、湯に泡けて汁を取り、含漱して涎を吐く。（衞生易簡方）【男女の瘰癧】五月五日に貓兒眼睛草一二（八）綑を取つて鍋に入れ、井水二桶で正午から煮て一桶に煮取り、滓を去つて澄清し、再び一碗に熬つて瓶に取り收め、毎に椒、葱、槐枝の煎湯で瘡

（八）綑ハ捆ト同ジ、束ノコト。

を洗ひ淨めてからこの膏を搽る。數回で癒える。（便民圖纂方）【癬瘡の蟲のあるもの】貓兒眼睛草を晒し乾して末にし、香油で調へて搽る。（衛生易簡方）

(一)甘遂（本經下品）

和名 かんずゐ
學名 Wikstroemia chamaedaphne, Meisn.
科名 ぢんちやうげ科（瑞香科）

釋名 甘藁（別錄）陵藁（吳普）陵澤（別錄）甘澤（吳普）重澤（別錄）苦澤（吳普）白澤（吳普）主田(二)（別錄）鬼醜（吳普）時珍曰く、諸名稱の意義は多く詳でない。

集解 別錄に曰く、甘遂は(三)中山の川谷に生ずる。二月根を採つて陰乾する。

普曰く、八月採收する。

弘景曰く、中山は代郡に在る土地だ。第一位のものはもと太山、江東に產する。近頃用ゐる(四)京口のものは甚だ似も付かない。赤皮のものは白皮のもの

〔甘 遂〕

(一)牧野云フ、我邦ノ先輩甘遂ナたかとうだい科(大戟科)ノなつとうだい(Euphorbia Sieboldiana, Morr. et Decne.)ニ充ツレドモ中ラズ。
(二)當ニ本經ニ作ルベシ。
(三)中山ハ石部石灰ノ註ヲ見ヨ。
(四)京口ハ今ノ江蘇省丹徒縣治ナリ。

に勝る。都下にはまた草甘遂と名けるものがあるが、まことに惡い。やはり贋造物だ。

恭曰く、甘遂は、苗は澤漆に似たものだ。根は皮が赤く肉が白く、連珠になり、實して重いものが良し。草甘遂といふは蚤休のことだ。その治療の對症も全然異ふ。苗もやはり同じくない。これは俗に重臺と名けるもので、葉は鬼臼、蓖麻に似て、根は皮が白色だ。

大明曰く、(五)西京のものが上級品だ。(六)汴、(七)滄、呉のものは之に次ぐ。形狀は皮付きの甘草に似て節(八)切する。

頌曰く、今は陝西、江東にもある。苗は澤漆に似て莖が短かく小さく、葉に汁があり、根は皮が赤く肉が白く、指頭ほどの大いさの連珠になつてゐる。

根　【修治】　斅曰く、凡そこれを採取したならば、莖を去つて槐砧の上で細かに剉み、生甘草湯、薺苨の自然汁の二味に攪ぜて三日間浸し、その水が(九)黒汁のやうになつたとき漉出し、東流水で水が淸くなるまで六七回淘つて漉出し、土器中に入れて脆くなるまで熬つて用ゐる。時珍曰く、今は一般に多く麪で煨熟し、それで

(五)西京トハ長安ヲ指ス。
(六)汴ハ石部石膏ノ汴京ノ註參照。
(七)滄ハ滄州、今ノ直隷省滄縣ソノ舊治ナリ。呉ハ土部甘鍋ノ註ヲ見ヨ。
(八)切、大觀ニヨリ補フ。
(九)黒、大觀ニ墨ニ作ル。

(一〇)水穀道ハ胃腸。
(一一)五水十二種水ノ名證詳ナラズ。

その毒を去ることにしてゐる。

【氣味】【苦し、寒にして毒あり】別錄に曰く、甘し、大寒なり。普曰く、神農、桐君は苦し、毒ありといひ、岐伯、雷公は甘し、毒ありといふ。元素曰く、純陽である。之才曰く、瓜蒂が使となる。遠志を惡み、甘草と反する。【主治】【大腹疝瘕、腹滿、顏面の浮腫、留飮宿食。癥堅、積聚を破り、(一〇)水穀道を利す】(本經)【五水を下し、膀胱の留熱、皮中の痞熱、氣腫滿を散ず】(別錄)【能く(一一)十二種の水疾を瀉し、痰水を去る】(甄權)【腎の經、及び隧道を瀉す。水濕脚氣、陰囊腫墜、痰迷癲癇、噎膈痞塞】(時珍)

【發明】宗奭曰く、この藥は專ら水を行ることが特長であつて、直接に水を刺戟して決し通ずることが主たる作用である。

元素曰く、味は苦、氣は寒であつて、苦の性は泄し、寒は熱に勝つものだから、直ちに水氣の結した處に達する。乃ち泄水の聖藥である。水が胸中に結するはこの藥以外では除き得ない。故に仲景は大陷胸湯にこれを用ゐてある。但し毒があるから輕輕しくは用ゐられぬ。

時珍曰く、腎は水を主るものであつて、水が凝れば痰飮となり、溢るるときは腫脹となる。甘遂は能く腎の經の濕氣を泄して痰の根本を治するものだ。しかし過服してはならぬ。ただ病に的中したならば服藥を止めるがよし。張仲景が、心下の留飮を治するに甘草と共にこれを用ゐたのは、その物の相反する性を利用して效果を擧げたのだ。劉河間の保命集には『凡そ水腫で服藥してなほ全く消かぬには、甘遂末を臍のまはり一面に塗り、甘草水を內服すれば直ちに消き去る』とあり。

又、王璆の百一選方に『脚氣上攻で腫核を結成したもの、及び一切の腫毒には、甘遂末を水で調へて腫れた部分に傅け、濃煎甘草汁を服すればその腫は直ちに散ずる。二物は相反するものであるが、斯の如き感應があるものだ。淸流韓詠が脚氣を病んだときは、この藥一服で病の七八分を去り、再服で全癒した』とある。

附方　舊三、新十九。【水腫腹滿】甘遂を炒つて二錢二分、黑牽牛一兩半を末にし、水で煎じて時時に呷ふ。（普濟方）【膜外の水氣】甘遂末、大麥麪各半兩を水で和して餅にし、燒き熟して食ひ、通じを付ける。（聖濟總錄）【身體、面部の洪腫】甘遂（一二）二錢を生で研つて末にし、豶豬腎一箇を七切に分け、各〻切開いて中に末を入れ、

（一二）大觀ニ一分ニ作ル。

濕紙で包んで煨熟して食ふ。一日一回、四五服すれば、腹が鳴つて小便が利するものだ。それが效驗である。(肘後方)【腎水の(一三)流注】腿、膝が攣急し、四肢が腫痛するには、上記の方に木香四錢を加へ、二錢づつを煨熟して嚼み、溫酒で呑下す。黃水を利するが效驗である。(御藥院方傳)【正水脹急】大、小便が利せずして死せんとするには、甘草五錢を半生半炒にし、胭脂坏子十文を研りまぜ、一錢づつを白麪四兩と水で和して碁子ほどの大いさにし、水で煮て淡く浮かせて食ふ。大、小便が通じて後は、平胃散に熟附子を加へて二錢を煎じて服す。(普濟方)【小兒の疳水】珠になつた甘遂を炒り、青橘皮と等分を末にし、三歲には一錢を麥芽湯で服し、利するを度とする。三五日間は酸、鹹のものを忌む。これを水寶散と名ける。(總微論)【水蠱の喘脹】甘遂、大戟各一兩を慢火で炙つて研り、一字づつを水半盞で煎じ、三五沸して服す。十服を過してはならぬ。(聖濟錄)【水腫喘急】大、小便の通ぜぬには、十棗丸——甘遂、大戟、芫花等分を末にし、棗肉で和して梧子大の丸にし、四十丸づつを早朝に熱湯で服す。黃水を利し去るを度とする。なほ祕するときは翌日正午に再服する。(三因方)【妊娠腫滿】氣急し、小腹(一四)滿し、大、小便利せず、豬苓散を服

(一三)流注ハ蓄積。

(一四)大觀ニ小ニ作レドモ、滿ノ誤ナルベシ。

(一五)大觀ニ大豆ニ作ル。

しても瘥えぬには、太山の赤皮甘遂二兩を搗き篩つて白蜜を和し、(一五)梧子大の丸にして五十丸づつを服し、微し下つたならば豬苓散を服する。下らぬときは再服する。豬苓散は豬苓の條に記載してある。(小品方)【心下の留飲】堅滿して脈が伏し、その患者自身に、通じが付けば快くならうと感ずるには、甘遂半夏湯——甘遂の大なるもの三箇、半夏十二個、水一升を半升に煮取つて滓を去り、芍藥五箇、甘草一節、水二升を入れて半升に煮取つて滓を去り、蜜半升と共に八合に煎じて頓服し、通じをつける。(張仲景金匱玉函)【脚氣腫痛】腎臟の風氣攻注で下部に瘡痒あるには、甘遂半兩、木鼈子仁四個を末にし、豬腰子一個を皮膜を去つて切片し、その內側にその藥四錢を摻り、濕紙で包んで煨熟し、空心に食つて米飮で呑下す。服して後兩足を伸べる。大便が通じたならば、その後二三日は白粥を食ふが妙である。(本事方)【二便不通】甘草末を生麪糊で調へて臍中、及び丹田に傅け、艾で三壯灸し、甘草湯を飮む。通じのつくを度とする。又、太山の赤皮甘遂末一兩を煉蜜でよく和して四服に分け、一日一回服して通じをつける。(聖惠方)【小便轉脬】甘遂末一錢を豬苓湯で調へて服す。立ろに通ずる。(筆峯雜興方)【疝氣の偏腫】甘遂、茴香等分を末に

し、酒で二錢を服す。(儒門事親)【婦人の血結】婦人の少腹滿で鼓のやうな狀態となり、小便に微し困難を感じて渴せぬは、水と血とが共に結して(一六)血室に在るものだ。大黃二兩、甘遂、阿膠各一兩、水一升半を半升に煮取つて頓服する。その血はそれで下るものだ。(張仲景方)【膈氣哽噎】甘遂を麪で煨いて五錢、南木香一錢を末にし、壯者は一錢、弱者は五分を水、酒で調へて服す。(怪病奇方)【痞證の發熱】盜汗し、胸背疼痛するには、甘遂を麪で包み、漿水で煮て十沸して麪を去り、細かい糠を焚いた火で黃色に炒つて末にし、大人は三錢、小兒は一錢を、冷蜜水で就寢時に服す。油膩、魚肉を忌む。(普濟方)【消渴引飮】甘遂を麩で炒つて半兩、黃連一兩を末にして蒸餠で綠豆大の丸にし、二丸づつを薄荷湯で服す。甘草を忌む。(楊氏家藏方)【癲癇心風】遂心丹——風痰が心に迷ふもの、癲癇、及び婦人の心風、血邪を治す。甘遂二錢を末にし、豬心から取つた三管血で和し、その藥を豬心中に入れて括り付け、紙で裹んで煨熟し、中の末を取つて辰砂末一錢を入れ、それを分けて四丸にし、一丸づつを豬心の煎湯で調へて服す。大便に惡物を下して奏效する。下らぬときは再服する。(濟生方)【馬脾風病】小兒の風熱喘促、悶亂不安のものを馬脾風

(一六)血室ハ子宮。

（一七）本草彙言ニ一角ヲ五分ニ作ル。

（一）牧野云フ、續隨子ハ歐洲ノ原産デアル。

（二）大觀ニ莖ニ作ル。

といふ。甘遂を麪で包んで煮て一錢半、辰砂を水飛して二錢半、輕粉(一七)一角を末にし、一字づつを、漿水少量に油を一小點滴らした上へ抄ひ入れ、藥が沈下してから漿を去つて灌ぐ。これを無價散と名ける。（全幼心鑑）【麻木疼痛】萬靈膏——甘遂二兩、蓖麻子仁四兩、樟腦一兩を搗いて餅にして貼り、甘草湯を內服する。（摘玄方）

【突然の耳の聾閉】甘遂半寸を綿で裹んで兩耳中に插入し、口中に少量の甘草を嚼む。耳の卒に聾したものが自然に通ずる。（永類方）

（一）續隨子（宋開寶）

和名　ほるとさう
學名　Euphorbia Lathyris, L.
科名　たかとうだい科（大戟科）

［釋名］ **千金子**（開寶） **千兩金**（日華） **菩薩豆**（日華） **拒冬**（開寶） **聯步**　頌曰く、葉の中から葉を出し、幾(二)枚か相續いて生えるものだから名けたものだ。冬季に始めて成長するところから、また拒冬と名ける。

［集解］ 志曰く、續隨子は蜀郡に生じ、處處にやはりある。苗は大戟のやうだ。頌曰く、今は南方地方に多くあつて、北方の地に産するは稀れだ。苗は大戟のやう

(三)大觀ニ出敷莖相續ニ作ル。

(四)木村(康)曰ク、成分ハエスクレチン
文獻
田原純——化誌、卅、二二(一〇)一二九。
藥誌、卅、二二(九三)七八一。
W. P. 411.
Arch. Ph. 1878(212)

で、初めに一本の莖が生え、莖の端に葉が生え、葉の中からまた(三)葉が出る。花もやはり大戟に類したもので、葉の中から幹が抽き出て實がなる。實は青くして殼がある。人家の

〔續隨子〕
——千金子——

庭園の飾りに多く植ゑるものだ。秋種ゑれば冬成長し、春秀でて秋實る。

時珍曰く、莖の中にはやはり白汁がある。水銀を結し得るものだ。

修治 時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、殼を去つて色の白いものを取り、紙に包んで壓搾して油を去り、霜を取つて用ゐる。

(四)**氣味** 【辛し、溫にして毒あり】 **主治** 【婦人の血結、月經閉止。瘀血、癥瘕、痃癖。蠱毒、鬼疰、心腹痛、冷氣脹滿を除き、大、小腸を利し、惡滯物を下す】(開寶) 【積聚、痰飮で食物の落付かぬもの、嘔逆、及び腹內の諸疾。研り碎いて酒で服すれば、三顆に過ぎずして惡物を下す】(蜀本) 【一切の宿滯を宣通し、肺氣、水氣を治す。日毎に十粒を服す。多く瀉し過ぎるときは、酸漿水、或は薄醋粥を食

へば直ちに止まる。また疥癬瘡に塗る】（大明）

【發明】　頌曰く、續隨は水を下すこと最も速かだ。けれども毒があつて人體を損ずるから過多に服してはならぬ。

時珍曰く、續隨は、大戟、澤漆、甘遂と莖、葉がよく似たものだ。主たる治療の對症もやはり似たもので、その功力はいづれも水を利するに特長がある。ただ用法が的正であれば、やはりいづれも重要な藥である。

【附方】　舊二、新四。【小便不通】臍腹脹痛して忍び難く、諸藥の效なきものも再服に過ぎずして效がある。續隨子を皮を去つて一兩、鉛丹半兩を少量の蜜と共に搗いて團にし、瓶に入れて陰闇の場所に埋め、十二月から春の末まで置いて取り出し、研つて蜜で梧子大の丸にし、二三十丸づつを木通湯で服す。溶化して服するのが就中妙である。急病には適宜俄作りに合せてもよし。（聖濟錄）【水氣腫脹】聯步一兩を殼を去つて研り、壓搾して油を去り、再び研つて七服に分け、一人の患者毎に一服を用ゐ、男子は生餅子酒で服し、婦人は荊芥湯で五更時刻に服す。下利するが曉までには自から止まる。その後は厚朴湯で補ひ、頻りに湯を飲むが益ゝ善し。一

211. Ber. Ch. Ges. 1890 (23) 3347; C. N. J. 1923(37)483.

百日間鹽、醋を忌めば再發しない。聯歩とは續隨子のことだ。(斗門方)【陽水腫脹】續隨子を炒つて油を去つて二兩、大黄一兩を末にし、水を洒いで綠豆大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。それで(五)陳莖を去る。(摘玄方)【涎積癥塊】續隨子三十箇、膩粉二錢、青黛を炒つて一錢を研りまぜ、糯米飯で芡子大の丸にし、一丸づつを打ち破り、大棗一箇を燒き熟して皮、核を去つて共に嚼み、冷茶で飲み下す。夜半後に積聚惡物を取り下して奏效する。(聖濟錄)【蛇咬の腫悶】死せんとするには、重臺六分、續隨子仁七粒を搗き篩つて散にし、酒で方寸匕を服す。同時に少量を唾液で和して咬傷の患部に塗れば立ろに效がある。(崔元亮海上方)【黑子、疣贅】續隨子の熟したる時に取つて塗れば自から落ちる。(普濟方)

葉 及び **莖中の白汁** [主治]【顏面の皮膚を剝落し、野䵟を去る】(開寶)【白癜、(六)癧瘍に傅ける】(大明)【葉を搗いて蠍螫に傅ければ立ろに止む】(時珍)

(一)莨　若

音は浪蕩(ラウタウ)である。 (本經下品)

和名　らうたう
學名　Hyoscyamus niger, L. var. chinensis, Makino.
科名　なす科(茄科)

(五)莖ハ斫藥トアリ、陳莖ノ義詳ナラズ。

(六)癧瘍ハ汗斑。

(一)牧野云フ、我邦ノ先輩莨若ヲはしりどころ(Scopolia ja-

poni'a, Maxim.）ニ充タガ之レハ固ヨリ中ツテ居ナカツタ、莨菪ノ眞物ハひよすデアツタ事ニハ先輩誰モ氣ガ附カナカツタ、是レハ其實物ガ我邦ニハ生ゼヌカラデアル、支那ノ産品ハ歐洲ノ者ト同種デハアルガ多少其苞葉ノ状ガ違フ其レデ私ハ先キニ之レヲひよすノ一變種トシタ。木村（康）曰ク、本邦ニ於テハ嘗テ誤ツテ莨菪ニはしりどころヲ充テタルヨリ、莨菪トイヘバはしりどころヲ充テ用ヰテ今日ニ至リ、莨菪根莨菪葉ト稱スルモノハイヅレモはしりどころノ根莖及葉ナレドモ、漢藥ニイフ莨菪ハヒヨスノ類ナルコトハ、莨菪子ト稱シ

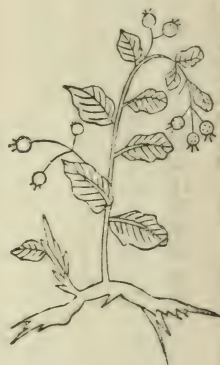
【釋名】 **天仙子**（圖經） **横唐**（本經） **行唐**　時珍曰く、莨菪、一に蒗蕩と書く。その子は、服すれば人をして狂狼放宕せしむるといふところから名けたものだ。

【集解】 別錄に曰く、莨菪子は（二）海濱の川谷、及び（三）雍州に生ずる。五月子を採る。弘景曰く、今は處處にあるが、子の形は頗る五味の核に似てゐるが、極めて小さい。

保昇曰く、所在いづれにもある。葉は菘藍に似て、莖、葉みな細毛があり、花の色は白く、子は殼が罌の形をしてゐる。結實は扁たくて細かく、粟米ほどの大いさで青黄色だ。六月、七月に子を採つて日光で乾かす。

頌曰く、處處にある。苗、莖の高さは（四）一二尺、葉は地黄、王不留行、紅藍等に似たもので、闊さが（五）三指ほどある。四月に紫色の花を開き、莖、莢に白毛がある。五月に罌子のやうな形狀の殼のある實を結び、小石榴のやうで房中の子は至つて細かく、青白色で粟米粒ほどのものだ。

斅曰く、凡そこれを用ゐる場合に、蒼蓂子を用ゐてはならぬ。その形は似てゐるが、ただこれは微し赤く、服しても效はない。一般に有るものには多くこれを雜へ

テ上海ヨリ來レルモノハはしりどころノ種子ニ非ズシテ、ヒヨス類ノ種子ナルコトヨリシテ知ラル。
(二)海濱、未詳。遼ニ中京道海濱縣、金ニ北京路海濱縣アリ。並ニ今ノ直隷省永平府ニ屬ス。然レドモ別錄ノ海濱ノ地ナリヤ否ヤ明ナラズ。或ハ今ノ山東省登州ヨリ武定府ニ亙ル海陽、濱州ノ地方ナ古ニ海濱ト稱シタルニハ非ズヤトモ思ハル。
(三)雍州ハ隰草類菊ノ註ヲ見ヨ。
(四)金陵本ニ二三尺ニ作ル。
(五)三指濶ト大觀ニアリ。
(六)木村(康)曰ク、成分、乾燥ヒヨスハヒヨスチアミンヲ主成分トスルアルカロイ

てある。

時珍曰く、張仲景の金匱要略に『菜の中に水莨菪（すゐらうたう）といふがある。葉は圓くして光り、毒がある。誤つて食へば、狂亂して中風のやうな症狀になり、或は血を吐くものだ。甘草汁を用ゐれば

〔莨　菪　子〕
——天　仙　子——

解す』(二)とある。

子

[修　治]　斅曰く、莨菪子を修治するには、十兩を頭醋一盞（とうさくいつさん）で乾くまで煮てから、黃牛の乳汁に一夜浸す。翌日になつて乳汁が黑くなるものならば眞物だ。晒し乾し搗き篩つて用ゐる。

(六)[氣　味]　『苦し、寒にして毒(七)なし』　別錄に曰く、甘し。權曰く、苦く辛し、微熱にして大毒あり。藏器曰く、性は溫である。寒ではない。大明曰く、溫にして毒あり。これを服すれば熱發するが、綠豆汁、甘草、升麻、犀角を用うれば解す。斅曰く、大毒がある。これを誤服すれば、人の心を衝（つ）いて大いに煩悶し、眼に(八)遲（せん）

ドヲ約〇・〇七%含有ス、種子ハ總アルカロイド約〇・二%ニシテヒヨスチアミンノ他アトロピン、及スコポラミンヲ含有ス、又主トシテオレイン及パルミチンヨリ成ル脂肪油ヲ含有ス。はしりどころノ根莖ニ存スルアルカロイドハ、ヒヨスチアミン、アトロピン、ノルヒヨスチアミン、ノルアトロピン、スコポラミン、スコポリン等ナリ。A. J. P. 1908 (80) 459; Pr. A. Ph. A. 1899, 285; W. P. 676; I. M. P. 918; U. S. D. 576; J. O. M. 1923 (1) 19; F. H. (2) 177; F. E. A. T. M. 1925 (6) 989; 藥誌、明、三一(八一)五三八(八二)

火を生ずる。

○頌曰く、本經に『性寒なり』とある。後世では多く大熱だといふが、史記の淳于意傳に『淄川王の美人が懷妊して難産だつたとき、浪薬一撮を酒で飲ませるとやがて出産した』とある。且つ子が産れぬのは熱藥では治する筈がないわけだ。又、古方に、突然の顚狂に主たるものに多く莨菪を單用してある。果して性を寒なりと斷言するわけにも行くまい。

主治　【齒痛で蟲の出るもの、(九)肉痺拘急。久しく服すれば、身體を輕くし、奔馬に走り及ぶほどの健脚になり、志を強くし、力を益し、神に通じ、鬼を見せしめる。多く食すれば狂走せしめる】(本經)【癲狂、風癇の顚倒、拘攣を療ず】(別錄)【心を安じ、志を定め、耳、目を聰明にし、邪を除き、風を逐ひ、白髮を黑く變ずる。主として痃癖を治するには、子を取つて洗ひ晒し、隔日に空腹にして指で一捻りほどを水で服す。(一〇)また小便に浸し、泣が盡きてから暴乾し、上記の如くして服するもよし。服するとき子を破つてはならぬ。破つて服すれば發狂させる】(藏器)【炒り焦して研つた末は、下部の脫肛を治し、冷痢を止める。蛀牙痛を治するには、

五五六、明、二二(八八)五九三、六六一、七二九、明、四一(三二一)一一三九、明、四二、(三二五)二一三、大、八(四五〇)六七七、大、一三(五〇八)四二五。

Arch. Pharm. 1888 (226) 185; 203; 1896(236) 47; J. Ch. Soc. 1912, 946; Rec. trav. Chim. Pays-Bas. 1883 (3) 169; Arch. Pharm. 1890 (528) 440.

(七)大觀ニ有トアリ。(八)大觀ニ還チ濕ニ作ル。(九)大觀ニ内ニ作ル、然レドモ大觀ニハ肉ニ作ル。(一〇)此處ノ文大觀ニハ。小便冷之令泣小便[illegible]通セズ。(一一)大觀ニハ茅ニ作

これを咬めば蟲が出る】(圖經)【燒いて蟲牙を熏じ、また陰汗を洗ふ】(大明)

發明 弘景曰く、癲狂を療ずる方に入れて用ゐるが、劑を過してはならぬ。久しく服すれば自から危險がなくなり、神に通じ、歩行を健にし、十分大益のあるものだ。しかし仙經には用ゐられてない。

權曰く、石灰淸で一伏時煮て搊ひ出し、(一一)芽を去つて暴乾し、附子、乾薑、陳橘皮、桂心、厚朴と丸にして服すれば、一切の冷氣、積年の氣痢を去り、甚だ溫暖である。生で服してはならない。人體を(一二)傷め、鬼を見、拾鍼し、狂亂するものだ。

時珍曰く、莨菪の功は前揭諸說ほどの事實はまだ實見せぬが、しかし毒はより以上に甚だしいものだ。一旦煮ても一二日經てば芽が生えるのだから、如何に怖るべきものかが想像し得る。莨菪、雲實、防葵、赤商陸は、いづれもよく人の精神を狂はせて、鬼怪なものを見らせるものだ。既往にはまだその理論的關係が研究を遂げられてなかつたが、蓋しこの類の物はいづれも有毒であつて、痰を心竅に迷はしめるから、意識の働きを壅蔽し、その結果視聽等の感覺が惑亂されるのであつた。唐の安祿山は、奚契丹を誘ひ出して莨菪酒を飮ませ、醉はしてから穽坑に陷れたと傳へら

ル。
ニ二傳、大觀ニ湯ニ
作ル。

れる。又、嘉靖四十三年の二月、陝西の遊行僧武如香なる者が妖術を使つて遊行してゐたが、昌黎縣へ來たとき、たまたま縣民張柱なる者の家でその妻の美人なるを瞥見し、饗應に事寄せて張柱の一家を招ぎ、同一卓に就かせて紅い散藥を入れた飯を一同に食はせた。すると張の一家族は少頃して悉く昏迷して了ひ、思ふがままに凌辱された。その上に更に魔法を使つてその散を張柱の耳へ吹き入れたので、柱は忽ち發狂して、一家の者がいづれを見ても惡鬼の姿に見え、悉くそれを殺して了つた。その數凡て十六人に及んだが、どの屍體にも血痕は少しも殘つてゐなかつた。官憲は張柱を逮捕して、十餘日拘禁してから、柱が二椀ほどの痰を吐いて後、始めて事實の訊問を進めた結果、殺害された者はみな柱の父、母、兄、嫂、妻、子、姉、姪等の一家族であつたことが判明し、張柱と如香とは共に死刑に行はれた。この兇惡の顚末は、世宗肅皇帝が勅命を以て全國に告示されたのであつた。これを観るに、その痰迷に陷つたときは、人さへ視れば悉く鬼に見えたといふのだから、その妖藥なるものはやはり莨菪のたぐひであつたらしい。この毒を解する方法は心得置かねばならぬことだ。

附方　舊二、新二十。【突然の發狂】莨菪三升を末にし、酒一升に數日間漬けて滓を絞り去り、丸にし得るまでに煎じて小豆三粒ほどの丸にし、日毎に三服する。それで(一三)顏面が急し、頭の中を蟲が行くやうに覺え、額、及び手、足に赤(一四)豆のやうな處の現はれるものである。いづれも病の瘥える徴候だ。なほ反應なきときは再服する。病を取り盡すこと神の如き良藥である。(陳延之小品方)【風痺厥痛】天仙子三錢を炒り、大草烏頭、甘草半兩、五靈脂一兩を末にし、糊で梧子大の丸にして螺青を衣にかけ、十丸づつを、男子は菖蒲酒で服し、婦人は芫花湯で服す。(聖濟錄)【久嗽の止まぬもの】濃血あるには、莨菪子五錢を浮ぶものを淘り去り、煮て芽を出させて炒つて研り、眞酥を雞子一箇ほど、大棗七箇と共に煎じ、酥が煎じ盡きたときその棗を取つて三箇づつを日毎に食ふ。○またある方では、莨菪子三撮づつを日に五六回呑む。光祿李丞はこれを服して神驗を得た。(孟詵必效方)【年久しき呷嗽】三十年に及ぶものには、莨菪子、木香、熏黃等分を末にし、羊脂を青紙に塗つた上に撒つて筒に卷き、烟に燒いて熏じ吸ふ。(崔行功纂要方)【水腫蠱脹】方は獸部靈羊の條を見よ。【積冷痃癖】食思なく、羸瘦し、困憊するには、莨菪子三分を水で淘つて

(一三)大觀ニハ顏上ニ口字アリ。
(一四)大觀ニハ豆ヲ色ニ作ル。

(一五)投字大觀ニヨル此書ニ搜トアリ。

浮ぶものを棄去り、大棗四十九個と水三升で煮乾かし、ただその棗のみを取り、皮、核を去つて一個づつを空心に食ひ、米飲で呑下す。熱を覺えれば止る。(聖濟錄)【日久しき水瀉】青州の乾棗十個を核を去つて莨菪子を塡め、札定して燒いて性を存し、二錢づつを粟米飲で服す。(聖惠方)【冷疳下痢】莨菪子を末にして臘豬脂で和し、丸にして綿で裹み棗ほどを用ゐて下部を導く。痢のために排出したときは更に新たなるものを納れる。三回に過ぎずして瘥える。(孟詵必效方)【赤白下痢】腹痛して腸が滑し、後重するには、大黃を煨いて半兩、莨菪子を黑く炒つて一撮を末にし、一錢づつを米飲で服す。(普濟方)【久痢の止まぬもの】種種の痢に變じ、兼ねて脫肛するには、莨菪丸——莨菪子一升を淘つて浮ぶものを取り去り、煮て芽を出させて晒し乾して黃黑色に炒り、青州の棗一升を皮と核を去り、共に釅醋二升で煮て搗いて膏にし、梧子大の丸にして二十丸づつを食前に米飲で服す。(聖惠方)【腸風下血】莨菪煎——莨菪實一升を暴乾して搗き篩ひ、生薑半斤から取つた汁と銀鍋に入れ、更に無灰酒二升を(一五)投じ、火にかけて稠餳のやうに煎じ、やがて酒を少しづつ五升まで投入して止め、慢火で丸にし得るまでに煎じて梧子大の丸にし、毎朝酒と共に三丸

（一六）宣露ハ牙疳壞血病ノ一種。

を飲み、五七丸まで漸増して止める。丸にする場合手に粘るときは、兎絲粉を手につけて直接つかぬやうにする。煎じるときの火加減は緊くするを忌む。薬が焦げれば效力を失ふものだ。初服には微し熱するが憂慮するに及ばない。疾甚だしきものも、服して三日を過ぐれば下痢し、疾が去れば痢も止まるものである。非常に效驗がある。（篋中方）【脱肛の收まらぬもの】莨菪を炒り研つて傅ける。（聖惠方）【風牙、蟲牙】瑞竹堂方では、天仙子一撮を小口の瓶に入れて烟に燒き、その烟を竹筒で蟲孔中に引き入れて熏ずる。蟲は死んで永く再發せぬ。○普濟方では、莨菪子を瓶に入れて熱湯を淋下し、口に瓶の口を含んでその氣で熏ずる。冷えれば更に作り、三合の湯を用ゐ盡せば止める。涎津が出れば吐き去る。甚だ有效だ。○備急方では、莨菪子を數〻孔中に納れて蠟で封ずるも效がある。【牙齒の（一六）宣露】風痛するには、莨菪子末を綿で裹んで咬む。汁が出ても嚥んではならぬ。（必效方）【風毒の咽腫】水を嚥んで通らぬもの、及び瘰癧で咽の腫れたるには、水で莨菪子末二錢匕を服す。神效がある。（外臺祕要）【堅硬なる乳癰】新しき莨菪子半匙を淸水一盞で服す。嚼み破つてはならぬ。（外臺祕要）【堅硬なる石癰】化膿せぬもの。莨菪子を末にし、醋で

和して瘡の頭に傅ける。根が拔出る。(千金方)【癬に似た惡瘡】十年癒えぬには、莨菪子を燒き研つて傅ける。(千金方)【打撲傷】羊脂で莨菪末を調へて傅ける。(千金方)【惡犬の咬傷】一日三回、莨菪子七箇づつを呑む。(千金方)

根　[氣味]【苦く辛し、毒あり】　[主治]【邪瘧、疥癬、殺蟲】(時珍)

[附方]　新六。【瘧疾の止まぬもの】莨菪根を灰に燒き、水で一合を服す。患者の强弱を量つて用ゐる。(千金方)【蟲ある惡癬】莨菪根を搗き爛らし、蜜で和して傅ける。(千金翼)【趾間の肉刺】莨菪根の搗汁を塗る。○雷公炮炙論の序に『脚に肉刺を生じたるには、褌に莨根を繫ける』とある。褌帶に結んで置くの意味だ。【狂犬の咬傷】莨菪根と鹽を搗いて傅ける。一日三回。(外臺祕要)【惡刺傷】莨菪根を水で煮た汁に浸し、冷えれば易へる。神方である。(千金方)【箭頭の出ぬもの】萬聖神應丹——端午の前一日に、無言で莨菪の幹、根本、枝、葉、花、實の完全なものを見付け『先生、あなたはここに御座つたか』と口に唱ひ、唱ひ了つてから、その草の周圍に柴灰を東南から始まつて盛り圍らし、(一七)木椑子で根の周圍の土を掘り廻し、次の日の日出前に、やはり無言で鋤で掘り取つて洗淨する。雞、犬、婦人に見られ

(一七)椑ハヘラナリ。

てはならぬ。かくて清淨な室內で石臼で泥のやうに搗き、彈子大の丸にして黄丹(わうたん)を衣にかけ、紙袋に封じ高處に懸けて陰乾する。箭頭の出でぬものがあつたとき、先づ象牙末を瘡口に貼つて後、この藥を緋の帛の袋に盛つて臍中に置き、綿で肚を覆ふてその上を縛つて置く。それで箭頭は出るものだ。（張子和儒門事親方）

(一)雲實（本經上品）

和名　しなじゃけついばら（新稱）
學名　Caesalpinia sepiaria, Roxb.
科名　まめ科（莢科）

釋名

員實（別錄）　**雲英**（別錄）　**天豆**（呉普）　**馬豆**（圖經）　**羊石子**（圖經）　苗を　**草雲母**　と名ける。（唐本）　**臭草**（圖經）　**粘刺**（綱目）　時珍曰く、員の字も雲（ウン）と發音する。意義は詳かでない。豆といふは子の形の形容だ。羊石とあるは羊矢と書くべきで、その子の形が羊の糞に似てるからだ。

集解

別錄に曰く、雲實は(二)河間(かかん)の川谷に生ずる。十月に採つて暴乾する。普曰く、葉は高さ四五尺、莖は太く中が空だ。葉は麻のやうで兩兩相對し、六月花を開き、八月、九月に實を結ぶ。十月に採收する。弘景曰く、處處にある。子は細

(一)牧野云フ、從來之レヲじゃけついばらトシテアレド精シク言ヘバしなじゃけついばら（新稱）デ、我邦ノじゃけついばらハ C. japonica, Sieb. et Zucc. トシテ分ツベキモノデアル。

(二)河間ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。

く、葶藶子のやうで小さく黑い。その實はやはり蒺藜に類したもので、燒けば鬼怪のものが見えるといふが、その方法を實行したものはまだ見ない。

恭曰く、雲實は大いさ黍や大麻子ほどで黃黑色だ。豆に似てゐるところから天豆と名ける。澤の邊りに叢生するもので、高さ五六尺、葉は細槐のやうでもあり苜蓿のやうでもあり、枝間に微かな刺がある。俗に苗を草雲母と呼ぶ。陶氏が『葶藶に似てゐる』といふは非ふ。

保昇曰く、所在の平澤にある。葉は細槐に似たもので、花は黃白色だ。その莢は豆のやう、實は靑黃色で大いさ麻子ほどのものだ。五月、六月に實を採る。

〔雲實〕——粘刺——

頌曰く、葉は槐のやうで狹く長く、枝上に刺がある、苗を臭草と名け、また羊石子草と名け、實を馬豆と名ける。三月、四月に苗を採り、十月に實を採る。時期を經過すれば枯れ落ちる。

時珍曰く、この草は山原に甚だ多く、俗に粘刺と呼ぶ。莖は赤く中が空で刺があ

(三)精、大觀ニ物ニ作ル。

り、高い部分は蔓のやうで、葉は槐のやうだ。三月黄色の花を開き、纍纍として枝一面になる。莢は長さ三寸ばかり、形狀は肥皂のやうだ。莢中に五六粒の子があつて、宛も鵲豆のやうで兩端が微し尖り、黄黑の斑紋がある、殼は厚く、仁は白く、咬めば極めて堅重にして腥い臭氣がある。

實 修治 斅曰く、凡そ採取したならば、粗く搗き、顆の完全な橡の實と相對して拌ぜ、一日間蒸して揀り出して暴乾する。

氣味 【辛し、溫にして毒なし】別錄に曰く、苦し。普曰く、神農は辛し、小溫なりといひ、黄帝は鹹しといひ、雷公は苦しといふ。主治 【泄痢腸澼。蟲、蠱の毒を殺し、邪惡の結氣を去り、痛を止め、寒熱を除く】(本經)【消渴】(別錄)【瘧を治するに多く用ゐる】(蘇頌)【䘌膿血を下すに主效がある】(時珍)

附方 新一。【䘌で下して止まぬもの】雲實、女萎各一兩、桂半兩、川烏頭二兩を末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、水で五丸づつを服す。(肘後方)

花 主治 【鬼(三)精を見る。多く食すれば人をして狂走せしめる。久しく服すれば身體を輕くし、神明に通ずる】(本經)【精物を殺し、水を下す。これを燒けば

鬼怪のものが現はれる】(別錄)

【發　明】　時珍曰く、雲實の花は、よく人をして鬼怪のものを見せしめ、發狂せしめるといふ以上、久しく服して身體が輕くなるといふことは矛盾した話である。これは古書の誤りだ。

根　【主　治】【骨哽、及び咽喉痛には、研つてその汁を嚥む】(時珍)

(一)蓖　麻　(蓖、音は卑(ヒ)である。)　(唐本草)

和名　たうごま
學名　Ricinus communis, L.
科名　たかとうだい科(大戟科)

【釋　名】　頌曰く、葉は大麻に似て、子の形は宛ら牛蜱(ダニ)のやうだから名けたものだ。時珍曰く、蓖の字は螕とも書く、螕とは牛虱のことで、その子に(二)麻點があるところから蓖麻と名けたのだ。

【集　解】　恭曰く、これは世間で栽培しつつあるもので、葉は大麻の葉に似て甚だ大きく、結子は牛蜱のやうだ。現に(三)胡中から來るものは、莖が赤く、高さ一丈餘あり、子は大いさ皂莢の核ほどある。これを用ゐるも良し。

(一)牧野云フ、本品ハ原ト熱帶アフリカノ産デアラウト言ハレテ居ルガ、今ハ世界中ニ廣ク擴ガツテ居ル。

(二)麻點ハ胡麻ノ如キ點ヲ云フ。

(三)胡中トハ西北邊ノ沙漠地ヲ根據トスル北狄、匈奴族ノ地方ヲ指ス。

保昇曰く、今は處によるとある。夏苗が生え、葉は葎草に似て大きく厚く、莖は赤くして節があり、甘蔗のやうで高さ一丈餘ある。秋細かい花を著け、順次に實を結ぶ。實は殼の表面に刺があり、形狀は巴豆に類し、靑黃色で褐色の斑紋がある。夏莖、葉を採り、秋實を採り、冬根を採つて日光で乾して用ゐる。

〔蓖　麻〕

時珍曰く、その莖には赤いものも白いものもあつて、中が空だ。葉は大いさ瓠の葉ほどで、葉每にすべて五尖である。夏、秋の期間に椏の內側から黃色で纍纍たる花穗が抽き出で、枝每に數十顆の實を結ぶ。顆の表面には刺があつて簇り攢り、蝟毛のやうで軟かだ。凡そ三四粒の子が合して顆となるもので、枯れた時劈け開ける狀態は巴豆のやうだ。殼中に大いさ豆ほどの子があり、殼には斑點があつて牛蜱のやうな狀態だ。再びその斑殼を去ると中に仁があつて、白白として續隨子仁のやうである。仁には油があつて、印肉の材料にもなり、油紙にもなる。子に刺の無いものが良し。刺のあるものは毒

がある。

子　【修治】　斅曰く、凡そこれを使用するに、(四)黒天赤利子を用ゐてはならぬ。これは(五)地蔞の上に著いてあるもので、顆の兩端が尖つて毒のあるものだ。蓖麻子ならば、節節に黄黑の斑がある。凡そ使用するには、鹽湯で半日煮て皮を去り、子を取つて研つて用ゐる。時珍曰く、蓖麻油を取る方法は、蓖麻仁五升を用ゐ、搗き爛らして水一斗で煮る。沫が吹き起るから、その沫を悉く出盡さして止め、水を去つてその沫を煎じ、燈に點けても(六)泎ねない程度、水に滴らしても散らない程度を適度とする。

(七)【氣味】　【甘く辛し、平にして小毒あり】　時珍曰く、凡そ蓖麻を服したならば、一生炒豆を食ふことはならぬ。これを犯せば必ず脹死する。その油は能く丹砂、粉霜を伏するものだ。

(八)【主治】　【(九)水癥には、水で二十箇を研つて服すれば惡沫を吐く。三十箇まで漸增して三日間に一回服し、瘥えれば止める。又、風虛の寒熱、身體の瘡痒、浮腫、尸疰、惡氣に主效がある。油を搾取して塗る】(唐本)　【研つて瘡痍、疥癩に傅ける。

(四)黒天赤利子詳ナラズ。

(五)地蔞ハ栝樓ノ一名。

(六)泎ハ炸ノ誤。

(七)木村(康)曰ク、成分、種子ハ三〇—五〇%ノ脂肪油(蓖麻子油)ノ他グロブリン、ヌクレオアルブミン、グリコプロテイン、リチン(毒性)リパーゼ(脂肪分解酵素)等ノ蛋白質類及リチニントイフ有毒ナルアルカロイドチ含有ス、蓖麻子油ハ主トシテリチノー

ル徴ノグーセリドヨリ成ル。工化、大・一四(二九)一三五三。W. P. 428; Am. Ch. J. 1882 (14) 662; I. M. P. 1170; U. S. D. 782; 薬誌、明・二三、(九六)一三七。三七(二七〇)六六五。同二、(三二九、七五九・六・九(同六三)七九八。七(四四一)九一三。

(八) 木村(康)曰ク、蓖麻子油(日本薬局方)ハ下剤トシテ用キラル、一回用量大人二〇—三〇瓦ナリ。蓖麻子油ノ難ノ可キ臭味ナ去リ、或ハ芳香ナ加ヘテ服用シ易カラシメタル製品ニ[illegible]、富士リチネイル(效用ナ損[illegible]臭味ナ除去セルモノ)[illegible](粉末狀[illegible]

手、足の心に塗れば分娩を催ほす】(大明)【癱瘓を治するには、子を取つて炒熟して皮を去り、就寝時毎に二三箇を嚼んで服し、漸次に十數箇まで增加すれば有效だ】(宗奭)【偏風不遂の口、眼喎斜、失音、口噤、頭風の耳聾、舌脹、喉痺、齁喘、脚氣、毒腫、(一〇)丹瘤、湯火傷、鍼、刺の肉に入りたるもの、婦人の胎衣不下、子腸挺出に主效があり、關竅、經絡を開通し、能く諸痛を止め、膿を消し、膿を追ひ、毒を拔く】(時珍)

(一一)【發明】 震亨曰く、蓖麻は陰に屬し、その性は善く收するもので、能く濃を追ひ、毒を取る。やはり外科の要藥である。能く有形の滯物を出すものだから、胎産、胞衣、(一二)剩骨、膠血を取り下すにこれを用ゐる。

時珍曰く、蓖麻仁は、甘く辛し、毒あり。熱であつて、氣味は頗る巴豆に近く、やはり能く人を利するものだ。故に水氣を下す。その性は善く走り、能く諸竅、經絡を開通する。故に能く偏風の失音、口噤、口、目の喎斜、頭風、七竅の諸病を治す。ただ有形の物を出すだけに止まらない。蓋し鵜鶘油は能く藥氣を導いて內部に入れ、蓖麻油は能く病の氣を拔いて外部に出すものだ。故に諸種の膏藥に多くこれ

品)リチイ(芳香ヲ附セシモノ)カスタロール(芳香ヲ附セルモノ)ドナン(半個形品蓖麻子油含量七〇%)

(九)水癥ハ水癖ノコトナラン。水漿消セザルニヨリ腹中ニ積聚シテ病ヲナシ、疼痛ヲ起スモノ。

(一〇)丹瘤ハ丹毒ノ一種赤瘤ヲ云フナルベシ。

(一一)木村(康)曰ク、工業用ニハ飛行器減摩油、印刷インキ、化粧用ポマード並ニロート油(染色用)蓖麻子油壓搾粕ハリパーゼヲ含有スルヲ以テグリセリン製造工業ニ利用スルヲ得。

(一二)剩骨ハ瘡腫内ノ腐骨。

を用ゐる。ある偏風で手、足の運動の自由を失つた患者に對し、余はこの油を用ゐ、羊脂、麝香、鯪鯉甲等の藥と共に煎じて揉擦用の膏藥を作り、一日數回揉擦させると、一箇月餘にして漸次快方に向ひ、また同時に搜風、化痰、養血の劑を服ませると、三箇月にして痊えた。ある手臂が一塊に腫れて病む患者に對し、やはり蓖麻を膏に搗いて貼らせると、一夜にして癒えた。また氣鬱の偏頭痛の患者にこれを用ゐ、乳香、食鹽と共に搗いて太陽穴を焫くと、一夜にして痛が止まつた。ある婦人の産後子腸が收まらぬに對し、その仁を搗いて丹田に貼ると、一夜にして上に收まつた。この藥は、かく外用として屢ゝ奇效を奏するのであるが、ただ内服には輕卒に用ゐられない。或は、膏に搗いて、箸で鵞、馬、六畜の舌根下へ點けると、その畜類は物を食へなくなるとも言ひ、或は、肛門の内部へ點ければ下血して死亡するともいふ。その毒なることが察知される。

附方　舊九、新二十九。【半身不遂】失音して言語不能なるには、蓖麻子油一升、酒一斗を用ゐ、油を銅鍋に盛り酒の上に置いて、一日間煮熟し、少しづつ服す。(外臺秘要)【口、目の喎斜】蓖麻子仁を搗いて膏にし、左の喎斜には右に貼り、右の

喎斜には左に貼れば正しくなる。○婦人良方では、蓖麻子仁二十一粒を研つて餅にし、右が喎するには左手の心に置き、左の喎するには右手の心に置き、銅盃に熱水を盛つてその藥の上に載せ、五六回冷えれば換へる。それで正しくなる。○ある方では、蓖麻子油二十一粒、巴豆十九粒、麝香五分を餅にし、前記のやうにして用ゐる。【風氣頭痛】忍び難きには、乳香、蓖麻仁等分を搗いて餅にし、痛の左、右に隨つて太陽穴に貼り、髮を解いて氣を出す。甚だ效驗がある。○德生堂方では、蓖麻油紙を花形に剪つて太陽に貼れば效がある。○またある方では、蓖麻仁半兩、棗肉十五箇を搗いて紙上に塗り、筒に捲いて鼻中に挿入し、淸い涕を下せば止まる。【(一三)八種の頭風】蓖麻子、(一四)剛子各四十九粒を殼を去り、雀腦芎一大塊を搗いて泥のやうにし、糊で彈子大の丸にし、絲を穿つて風の吹く處に懸けて陰乾し、使用せんとする時、先づ好き末茶を膏に調へて盞の內側に塗り、前の藥を炭火で燒いて烟を起たせてその盞を覆せ、烟の盡くるを待ち、百沸した葱湯をその盞內に注ぎ點てて服し、後に頭から夜具を被つて臥し、汗を出す。風に當らぬやうにする。(袖珍方)
【鼻の塞つて通ぜぬもの】蓖麻子仁三百粒、大棗を皮を去つて一箇を搗きまぜ、綿

(一三)八種頭風ハ耳、目、鼻、口、腦、項頸、眉稜、頭皮。
(一四)剛子ハ巴豆ノ別名。

で裹んで鼻を塞ぎ、一日一回易へる。三十日で香臭を聞き得る。（聖濟錄）【（一五）天柱骨倒】小兒の疳疾、及び諸病後の天柱骨倒は、身體が虛する結果である。生筋散を貼るがよし。木鼈子六箇を殼を去り、蓖麻子六十粒を殼を去つて研りまぜ、先づ頭部を包んで項上を摩擦し、熱くなつたところへ津液でこの藥を調へて貼る。（鄭氏小兒方）【（一六）五種の風癇】年月の遠近を問はず、蓖麻子仁二兩、黃連一兩、石膏水一盌を文武火で煮て、乾けば水を添加し、三晝二夜煮て黃連を取り出し、ただ蓖麻のみを用ゐ、日光に當らぬやうに風で乾かし、各箇を竹刀で四片に切り、一日二回、食後に二十片づつを荊芥湯で服す。終身豆を食ふことを忌む。犯せば必ず腹脹して死亡する。（衛生寶鑑）【舌上の出血】蓖麻子油紙を撚つて烟に燒き、鼻中を熏ずれば自から止まる。（摘玄方）【舌が脹れて口を塞ぐもの】蓖麻仁四十粒を殼を去つて研り、その油を紙上に塗つて撚にし、烟に燒いて熏ずる。なほ退かぬときは再び熏じ、癒えるまで試みる。ある人が舌が腫れて口の外まで出たとき、一人の田舍者がこの法を用ゐて癒えた。（經驗良方）【急喉痺塞】牙關が緊急して通ぜぬには、この方を用ゐれば破れる。蓖麻子仁を研り爛らし、紙に卷いて筒にし、烟に燒いて熏じ吸ふ。直

（一五）天柱ハ瘂門ヲ去ルコト橫ニ一寸三分俗ニチリケノ穴。骨倒ハ無力ヲ云フ。

（一六）五種ノ風癇ハ五臟ノ病ニ配當スル癇病。

ちに通ずる。或はただ油を取つて撚にするが就中妙である。これを聖烟筒と名ける。【咽中の瘡腫】杜任方では、蓖麻子仁一箇、朴硝一錢を共に研つて新汲水で服す。續けざまに二三服すれば效がある。○三因方では、蓖麻仁、荊芥穗等分を末にして蜜で丸にし、綿で包んで噙み嚥む。(千金)【水氣脹滿】蓖麻子仁を水に研り解いて三合を取り、早朝に頓服し盡す。日中には青黄の水を下すものだ。或は、壯健なものはただ五粒を服すればよいともいふ。(外臺祕要)【脚氣の痛むもの】蓖麻子七粒を殼を去つて研り爛し、蘇合香丸と共に足の心に貼る。痛は直ちに止まる。(外臺祕要)【小便不通】蓖麻仁三粒を研細し、紙に撚り込んで陰莖中に挿入する。直ちに通ずる。(摘玄方)【齁喘咳嗽】蓖麻子を殼を去つて炒熟し、甜いものを揀つて食ふ。多く食ふほど效がある。終身炒豆を食つてはならぬ。(衛生易簡方)【分娩を催ほし、胞を下す】崔元亮海上集驗方では、蓖麻子七粒を取つて殼を去り、膏に研つて脚の心に塗る。胎、及び胞衣が下つたならば速かに洗ひ去る。洗ひ去らねば子腸が出る。しかし、直ちにこの膏を頭の頂部に塗れば腸は自から入る。○肘後方には『難産には、蓖麻子十四箇を取り、片手に七箇づつ握れば須臾にして立ろに分娩する』とあ

（一七）癘風ハ癩病、鼻塌ハ鼻ガ低下スルコト。

る。【子宮脫下】蓖麻子仁、枯礬等分を末にし、紙上に載せて押し入れ、そこで蓖麻子仁十四箇を膏に研つて頂心に塗れば入る。（摘玄）【盤腸生產】頂に塗る。方は上に同じ。【分娩を催ほし、胎を下す】生胎、死胎に拘はらず、蓖麻二箇、巴豆一箇、麝香一分を研つて臍中、並に足心に貼る。○また生胎を下すには、一月に一粒を溫酒で吞下す。（集簡方）【一切の毒腫】痛み忍び難きには、蓖麻子仁を搗いて傅ければ止まる。（肘後方）【（一七）癘風鼻塌】手指が攣曲し、節間が忍び難く痛み、漸次に斷ち落つるに至るものには、蓖麻子一兩を皮を去り、黃連一兩を豆ほどの大いさに剉み、小瓶に水一升を入れて共に浸し、春、夏は二日間、秋、冬は五日間浸して後、蓖麻子一箇を取出して劈き破り、東方に面して前の藥を浸した水で吞む。漸次に四五箇まで增加する。微し利するが差支ない。瓶中の水を飲み盡したならば更に添加する。二箇月の後、大蒜、猪肉を喫つて試み、もし病が發せぬときは完全に效果があつたのだ。發動するときは再服し、發せなくなつてから止る。（杜壬方）【小兒の丹瘤】蓖麻子五箇を皮を去つて研り、麪一匙を入れて水で調へて塗る。甚だ效がある。（修眞祕旨）【瘰癧結核】蓖麻子を炒つて皮を去り、就寢時毎に二三箇を服して效を取る。一生

炒豆を喫つてはならぬ。（阮氏經驗方）【瘰癧惡瘡】及び軟癤には、（一八）白膠香一兩を瓦器で溶化して滓を去り、蓖麻子六十四箇を殼を去つて膏に研つた中に投じ、攪きまぜて油半匙頭を入れ、水中に點じてもそのままになつてゐるまでにし、軟、硬の度を試みて膠、油を加減し、適度に出來上つてから、緋帛を瘡の大、小に應じて切つた上に攤して貼る。一回作つた膏で三五の癤を治し得るものだ（儒門事親）【肺風の面瘡】白屑が生じ、或は微し赤瘡のあるには、蓖麻子仁四十九粒、白果、（一九）膠棗各三粒、瓦松三錢、肥皂一箇を搗いて丸にし、洗面にこれを用ゐるがよし。（吳旻扶壽方）【顏面の雀斑】蓖麻子仁、蜜陀僧、硫黃各一錢を末にし、羊髓と和勻して毎夜傅ける。（摘玄方）【髮の黃色で黑からぬもの】蓖麻子仁を香油で煎じ焦して滓を去り、三日後にそれを頻りに髮に刷く。（摘玄方）【突然の耳の聾閉】蓖麻子一百箇を殼を去り、大棗十五箇を搗き爛らし、小兒に飮ませる乳汁で和して丸にし、鋌にして一箇づつを綿に裹んで耳を塞ぐ。耳中に熱を覺えるを度とし、一日一回易へれば二十日で瘥える。（千金方）【湯火灼傷】蓖麻子仁、蛤粉等分を研つて膏にし、湯傷には油で調へ、火傷には水で調へて塗る。（古今錄驗）【鍼、刺の肉に入りたるもの】蓖麻子を殼を去

（一八）白膠香ハ楓脂香ノ別名。

（一九）膠棗ハ蒸熱セル棗ナ云フ。

つて一兩を、先づ帛で傷處を隔てて傅け、頻りにその經過を看て、若し刺が出たならば直ちに拔き去る。そのまま置けば藥力が緊いために健全な肉まで弩出する虞がある。或は白梅肉を加へ、共に研つて用ゐるが尤も好し。(衛生易簡方)【竹木骨哽】蓖麻子仁一兩、凝水石二兩を研りまぜ、一捻りづつを舌根に置いて噙み嚥む。その物は自然に無くなる。○またある方では、蓖麻油、紅麴等分を研細し、沙糖で皂子大の丸にし、綿で裹んで含み嚥む。痰が出て大いに良し。【雞、魚の骨哽】蓖麻子仁を研り爛らし、百藥煎を入れて研つて彈子大の丸にし、半丸を井華水で溶かして服すれば直ちに下る。【惡犬の咬傷】蓖麻子五十粒を殼を去り、井華水で研つて膏にし、先づ鹽水で痛處を洗ひ吹いてからこの膏を貼る。(袖珍方)

葉　[氣味]【毒あり】[主治]【脚氣、風腫で不仁なるには、蒸し搗いて(二〇)裹み、一日二三回易へれば消く。又、油を塗り、(二一)炙き熱して顖上を熨すれば、鼻衄を止めるに大效がある】(蘇恭)【痰喘欬嗽を治す】(時珍)

[附方]　新一。　【齁喘痰嗽】儒門事親方では、九尖の蓖麻葉三錢に飛過した白礬二錢を入れ、猪肉四兩を薄く批いた內にその藥を摻り、荷葉で裹んで文武火で煨

(二〇)裹、大觀ニ傅ニ作ル。
(二一)大觀ニ炙上ニ葉字アリ。

(二二)御米ハ罌子粟ノ一名。

(二三)大觀ニ櫻ヲ瓔ニ作ル。

(二四)百丈青ハ蔓草附錄ニアリ。

熟し、細かに嚼んで白湯で送下する。これを九仙散と名ける。○普濟方では、欬嗽、涎喘を治するには、年月の多少を問はず、霜に遭つた莨麻葉、霜に遭つた桑葉、(二二)御米殼を蜜で炒り、各一兩を末にして蜜で彈子大の丸にし、一日一服、一丸づつを白湯に溶して服す。無憂丸と名ける。

附錄　**博落廻**（拾遺）　藏器曰く、大毒あり。惡瘡、(二三)櫻根、瘤贅、瘜肉、白癜風、蠱毒、精魅、溪毒、瘡瘻に主效がある。(二四)百丈青、雞桑灰等分を和して末にして傅ける。蠱毒、精魅には別に用法があるわけだ。江南の山谷に生ずる。莖、葉は莨麻のやう、莖の中は空で、吹けば博落廻といふやうな聲をなし、折れば黄汁が出る。これを人に服ませれば立ろに死亡する。輕輕しく口に入れてはならない。

〔博落廻〕
—莨麻に似て子に刺あり—

(一)常山（本經下品）
和名　じやうざんあぢさゐ（新稱）
學名　Dichroa febrifuga, Lour.
科名　ゆきのした科（虎耳草科）

蜀漆（同上）
同上の苗である。

［釋名］恆山（吳普）互草（本經）雞尿草（日華）鴨尿草（日華）時珍曰く、恆はやはり常（つね）である。恆山といふは(二)北岳の名稱で、今の定州にある。(三)常山といふは郡名で、やはり今の眞定の土地だ。これはこの藥が始めて此等の土地に產したのでこの名稱が生じたといふわけでもあらうか。蜀漆といふは常山の苗のことで、功用は同一だ。此には一條に併記する。

［集解］別錄に曰く、常山は(四)益州の川谷、及び漢中に生ずる。二月、八月に根を採つて陰乾する。又曰く、蜀漆は(五)江林山の川谷、及び蜀、漢中に生ずる。常山の苗であつて、五月に葉を採つて陰乾する。

弘景曰く、常山は、(六)宜都、建平產の細かにして實して黃なるものを雞骨常山と呼び、これを用ゐるが最も勝れてゐる。蜀漆は常山の苗であつて、產地はまた異ふ

(一)牧野云フ、先輩此常山ヲヘンルーダ科(芸香科)ノこくさぎ Orixa japonica, Thunb. ニ充テタケレド其レハ非デアツタ、本物ハ我邦ニハ無イガ支那カラ印度へ亙ツテ產スル、花後ニ圓實ヲ結ビ青色ニ熟スル。

木村(康)曰ク、從來我ガ本草家ハ常山ニ芸香科ノこくさぎヲ充テ來レルモ、こくさぎハ綱目ニ於ケル常山ノ記載ニ充ツ可キモノトシテモ充分ナル理由ヲ見出サズ却テ市場ニ存スルモノハエイクマンノベルベリンヲ檢出シタルめぎ科ノめぎ、なんてんノ莖ニ類スルモノト、ブレツトシユナイデル及ザエルス(白常山草)ノアク

といふが、江林山とは益州の江陽山の別名だからこれは同一土地だ。彼の地では採收して纒め固めて丸に作る。適當の時期に採收、修治した燥いたものが佳し。

○恭曰く、常山は山谷の間に生ずる。莖は圓くして節があり、高いものも三四尺に過ぎぬ。葉は茗に似て狭く長く、兩兩相當つて生える。(七)二月に青萼の白花を開き、五月實を結ぶ。實は青く圓く、三子が房になる。この草は暴燥して色の青白になつたものが用ゐるに堪へるので、陰乾しては黒爛し鬱壞するものだ。

〔常山・蜀漆〕

○保昇曰く、今は(八)金州、房州、梁州の(九)中江縣に產する。樹は高さ三四尺、根は荊根に似て、黄色で(一〇)破れてゐる。五六月に採つた葉を蜀漆と名ける。

○李含光曰く、蜀漆は常山の莖である。八月、九月に採る。

○頌曰く、今は汴西、淮浙、湖南の州郡にもある。いづれも上記所說のやうなものだが、(一一)海州に產するものは、葉は楸葉に似て八月紅白色の花があり、子は碧色で山楝子に似て小さい。現に(一二)天台山に出る一種の(一三)土常山と名くる草は、苗、葉が

ルホ植物(Dichroa febrifuga, Lour.)ニヨルモノト認ム可キモノ二品種別チ見タリ。木村康一、島田玄彌——藥誌、昭、三、(五五九)八八三。

(二)北岳ハ五岳ノ一、石部鹵石類凝水石ノ常山ノ註參照。定州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。

(三)漢ノ常山郡ハ今ノ直隷省正定以北、恆山ニ至ル正定府管下北半ノ地ナリ。眞定ハ隰草類紫菀ノ註ヲ見ヨ。

(四)益州ハ金部金ノ註、漢中ハ石部礜石ノ註、特生礜石ノ梁州ノ註參照。

(五)江林山、即江陽山。江陽ハ今ノ四川省瀘州府治ノ舊稱ナリ、山ノ所在未詳。

(六)宕部ハ山草類巴

極めて甘いもので、その地ではこれを用ゐて飲に作る。それが蜜のやうな甘味だ。また蜜香草とも名ける。性は涼であつて、健康に益する。此にいふ常山ではない。

修治　斅曰く、採收の際には根と苗と付いたままを取り、莖、葉を用ゐるには、その場合に根を去り、甘草を細かに剉んで水と共に拌ぜ濕ほして蒸し、患者に與へる際に甘草を去つて蜀漆を細かに剉み、また甘草水と拌ぜて再び蒸し、日光で乾して用ゐる。常山を用ゐるには、すべて酒に一夜浸し、漉出して日光で乾したものを熬り搗いて用ゐる。時珍曰く、近頃では酒に浸して蒸熟する。或は瓦で炒熟したものもあるが、やはり人を甚しく吐かせることはない。又、醋制のものがあつて、これは人を吐かせる。

常山（一四）氣味【苦し、寒にして毒あり】別錄に曰く、辛し、微寒なり。普曰く、神農、岐伯は苦しといひ、桐君は辛し、毒ありといひ、李當之は大寒なりといふ。權曰く、苦し、小毒あり。炳曰く、甘草を配合すれば瘧を吐かす。之才曰く、玉札を畏る。大明曰く、葱菜、及び菘菜を忌む。砒石を伏す。

主治【傷寒寒熱の熱發、溫瘧、鬼毒、胸中の痰結、吐逆】（本經）【鬼蠱、往

戟天ノ註ヲ、建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
（七）二、大觀ニ三ニ作ル。
（八）金州ハ山草類朮ノ註、房州ハ石部石鍾乳ノ註、梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。
（九）中江縣ハ今ハ四川省潼川府ニ屬ス。
（一〇）破、大觀ニ殺ニ作ル。
（一一）牧野云フ、海州ニ產シテ葉ハ楸葉ニ似タト云フモノ其實物ハ果シテくまつづら科（馬鞭草科）くさぎ（Clerodendron trichotomum, Thunb.）デアルカ能クハ分ラヌ、先癨ノ之レニ充テシ說モ私ニハ信用出來ヌ。
海州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。
（一三）天台ハ芳草類芎藭ノ註參照。

來水脹のぞくぞくたる惡寒、鼠瘻を療ず】(別錄)【諸瘧を治し、痰涎を吐し、項下の瘤癭を治す】(甄權)

蜀漆 氣味 【辛し、平にして毒あり】 別錄に曰く、微溫なり。權曰く、苦し、小毒あり。元素曰く、辛し、純陽である。炳曰く、桔梗が使となる。之才曰く、栝樓が使となる。貫衆を惡む。

主治 【瘧、及び欬逆寒熱、腹中の癥堅、(一五)痞、積聚邪氣、蠱毒、鬼疰】(本經)【胸中の邪、結氣を療じて吐き去る】(別錄)【鬼瘧の永きに亙るもの、溫瘧寒熱を治し、肥氣を下す】(甄權)【血を破る。腥氣を洗ひ去つて苦、酸のものと共に用ゐれば、膽の邪を導く】(元素)

發明 斅曰く、蜀漆は、春、夏は莖、葉を用ゐ、秋、冬は根を用ゐる。老人と久病の患者とは絕對に服することを忌む。

頌曰く、常山、蜀漆は瘧を治する最重要のものだが、多く服ませてはならぬ。吐逆せしめるものだ。

震亨曰く、常山は、性が猛烈に銳くして驅逐力が强く、能く眞氣を傷める。患者

(一三)牧野云フ、土常山ハあぢさゐ屬ノHydrangea aspera, D. Don. デアル、葉ノ甘イ事があまちや(H. Thunbergii, Sieb.)ニ似テ居ルガ固ヨリ別種デアル、先輩之レヲあまちやニ充テシモ其品デハナイ、然シ此屬ノモノニハ其葉味ニ共通ノ點ガアルト見エル。

(一四)木村(康)曰ク、成分ハヂクロイントイフ配糖體ヲ記載スル書アルモ確カナラズ。C. Hartwich. Neue Arzneidrogen, 127.

(一五)大觀ニ痞ノ下ニ結字アリ。

がやや虚して怯する傾向のあるときは用ゐてはならない。外臺に、三兩を用ゐて一服としたのは甚だ無理解だ。雷公が、老人と久病の患者とは絶對に忌むといつた通り愼むべきである。

○○時珍曰く、常山、蜀漆の有する痰を劫かし瘧を截る功力は、必ず表の邪を發散し、又は陽の分を提出し、然る後に用ゐるが適當を得た處置であつて、かくてこそ神效が立ろに見はれる。使用上に正しい法則を失すれば、眞氣が必ず傷むものだ。そもそも瘧には、六經の瘧、五臟の瘧、痰濕、食積、瘴疫、鬼邪の諸瘧があつて、必ず陰、陽、虚、實を明確にすべきものである。一概に論ずべきものではない。常山、蜀漆は、生で用ゐれば上行して必ず吐かせるが、酒で蒸して炒熟して用ゐれば藥氣がやや緩やかになつて、用ゐても一向吐かせない。甘草を配合すれば吐し、大黄と配合すれば利し、烏梅、鯪鯉甲と配合すれば肝に入り、小麥、竹葉と配合すれば心に入り、秫米、麻黄と配合すれば肺に入り、龍骨、附子と配合すれば腎に入り、草果、檳榔と配合すれば脾に入る。蓋し痰が無ければ瘧は作らないもので、この二物の功たるや、やはり痰水を驅逐するに在るのだ。楊士瀛の直指方に『常山で瘧を治する

ことは、一般にはこれを薄しむが、瘧の患者は痰涎、黄水を多く蓄へて、或は心下に停瀦し、或は脇間に結澼するので寒熱を生ずるのだ。原則として、當然痰を吐かせ水を逐ふべきものである。常山を用ゐぬといふ理由があらうか。水が上焦に在るときは、常山は能くこれを吐かせ、水が脇下に在るときは、常山は能くその澼を破つてその水を下すものだ。但し、血を行らす藥品を佐としてこれを助けることが必須條件であつて、それに依つて必ず十全の功果を收めるのである。純熱發瘧、或は蘊熱內實の病證ある場合には常山を投じ、大便が點滴して下り、泄するやうで泄せぬときは北大黃を佐とし用ゐる。數回泄利して、然る後に全癒の效果を獲るものだ』といつてある。又、待制李燾は『嶺南の地方病なる瘴氣は寒熱の所感であつて、邪氣は多く營、衞、皮、肉の間に在るものだ。皮膚、毛孔中の瘴氣の根本を去らんとするには、常山以外では不可能である。但しその性は人を吐かせるものだが、しかし七寶散を用ゐて冷服すれば吐かずして效驗がある』といつてある。

【附方】 舊三、新二十三。【瘧を截る諸湯】外臺祕要では、常山三兩を漿三升で一夜浸して一升に煎じ取り、發作前に頓服して吐かす。○肘後方では、常山一兩、秫

米一百粒、水六升を三升に煮て三服に分け、發作の前夜、發作の直前、發作の時に服し盡す。○養生主論では、王隱者の驅瘧湯——その說明に『予はこの藥を用うること四十年、その間に奏した奇效は枚擧に遑ない。これは絕對に加減してはならぬ。萬一にも吐くことのないものだ。常山を酒で煮て晒し乾し、知母、貝母、草果と各一錢半、水一錢半を半分に煎じ熟し、五更に熱服する。渣は酒に浸して發作の前に服す』とある。【瘧を截る諸酒】肘後方では、常山一兩を酒一升に二三日漬けて三服に分け、早朝に一服し、少頃して再服し、發作するに臨んで又服す。或は甘草を加へて煮て服す。○宋俠經心錄では、醇醨湯——隔日の瘧を治す。支太醫は『これは桂廣州の方であつて、甚だ效驗あるものだ』といつてある。恆山一錢二分、大黃二錢半、炙甘草一錢二分、水一盞半を半に煎じ減らし、これを醇といふ。發作の日の五更に溫服する。再び水一盞で半に煎じ減らし、これを醨といふ。また發作前に溫服する。○虞摶の醫學正傳では、久瘧の止まざるを治するに、常山一錢半、檳榔一錢、丁香五分、烏梅一箇を酒一盞に一夜浸して五更に飲む。一服で止り、永く再發せぬ。神の如きものだ。【瘧を截る諸丸】千金方では、恆山丸——數年瘥え

ざるものも兩劑で治癒し、發病一箇月のものは一劑で瘥える。恆山三兩を研末し、雞子白で和して梧子大の丸にし、瓦器で煮熟して腥氣を殺し、それを取出して晒し乾して取り收め、五更に一服、曉方に一服、發作の前に一服、二十丸づつを竹葉湯で服す。吐くこともあり、吐かぬこともあり、それで止まる。○肘後方の丹砂丸――恆山を末に搗いて三兩、眞丹一兩を研つて、白蜜を和し、百杵搗いて梧子大の丸にし、發作の時刻に先つて三丸を服し、少頃して三丸を再服し、發作の直前に三丸を服す。いづれも酒で服す。これで斷たぬものなし。○曾世榮活幼心書の黃丹丸――大人、小兒の久瘧を治す。恆山二兩、黃丹半兩、烏梅を核共に瓦で焙じて一兩を末にし、糯米粉糊で梧子大の丸にし、四五十丸づつを涼酒で服す。一夜隔て一服し、早朝一服し、午後に食事を攝る。○葛洪肘後方では、恆山三兩、知母一兩、甘草半兩を搗いて末にし、蜜で梧子大の丸にし、發作に先つて十丸を服し、次に七丸を服し、後に五六丸を服す。瘥えるを度とする。○和劑局方の瞻仰丸――一切の瘧を治す。常山四兩を炒つて性を存し、草果二兩を炒つて性を存し、俱に末にして薄糊で梧子大の丸にし、就寢時毎に冷酒で五十丸を服し、五更に再服する。鵞、羊、

熱物を忌む。○又、勝金丸——一切の瘧、胸膈の停痰が發して癒えぬものを治す。常山八兩を酒で浸して蒸し焙じ、檳榔を生で二兩と共に研末して糊で梧子大の丸にし、前記の方法のやうにして服す。○集簡方では、二聖丸——發病の遠近と大小とに拘はらず、諸種の瘧を治す。雞骨恆山、雞心檳榔各一兩を生で研り、鯪鯉甲を煨き焦して一兩半と共に末にし、糯粉糊で菉豆大の丸にして黄丹を衣にかけ、三五十丸づつを前記の方法のやうにして服す。【厥陰の肝瘧】寒多くして熱少く、喘息して死せるが如き狀態となり、或は小腹が滿し、小便が膿の如くなるには、發病後久しきと近きとを問はず、吐かせず瀉下させずして神の如く治す。恆山一兩を醋に一夜浸して瓦器で煮乾し、二錢づつを水一盞で半盞に煎じ、五更に冷服する。（趙眞人濟急方）【太陰の肺瘧】痰が胸中に聚まり、發作に近づくと心に寒を覺え、寒が甚しくなれば熱し、熱する際にはよく驚怖し、何物かが見えるやうに感ずるものである。恆山三錢、甘草半錢、秫米三十五粒、水二鍾を一鍾に煎じ、發作の日の早朝、三回に分服する。（千金方）【少陰の腎瘧】ぞくぞくとして寒く、手、足が寒し、腰、脊が痛み、大便難となり、目がぐらぐらする。恆山二錢半、豉半兩、烏梅一錢、竹葉一錢半、葱白三

根、水一升半を一升に煎じ、發作前に三回に服す。（千金方）【牝瘧獨寒】熱せぬもの。蜀漆散――蜀漆、雲母を二晝夜煆き、龍骨と各二錢を末にし、半錢づつを、發作せんとする日の朝一服、發作直前に一服、醋漿水で調へて服す。溫瘧には、また蜀漆一錢を加へる。（張仲景金匱要略）【牡瘧獨熱】冷えぬもの。蜀漆一錢半、甘草一錢、麻黃二錢、牡蠣粉二錢、水二鍾を、先づ麻黃、蜀漆を煎じて沫を去り、他の藥を入れて再び一鍾までに煎じ、まだ發作せぬ前に溫服する。それで吐けば止む。（王燾外臺祕要）【溫瘧の熱多きもの】恆山一錢、小麥三錢、淡竹葉二錢を水で煎じて五更に服するが甚だ良し。（藥性論）【三十年の瘧】肘後方では、三十年の老瘧、及び積年の久瘧を治す。常山、黃連各一兩を酒三升に一夜漬け、瓦釜で一升半に煮取り、發作の日の早朝に五合を服し、發作時に再服する。熱するものは吐き、冷えるものは利するもので、瘥えぬもの無し。○張文仲の備急方では、恆山一兩半、龍骨五錢、附子を炮いて二錢半、大黃一兩を末にし、雞子黃で和して梧子大の丸にし、まだ發せぬ前に五丸、發せんとする時五丸を白湯で服す。支太醫は『これは神驗の方だ。斷ぜぬものなし』といつてある。【瘴瘧寒熱】劉長春の經驗方では、常山一寸、草果一

筒を熱酒一盌に一夜浸し、五更に東方を見ながら服して夜具を被て寢る。酒が醒めると共に癒える。○談埜翁の試驗方では、常山、檳榔、甘草各二錢、黑豆一百粒を水で煎じて服す。これは彭司寇の所傳である。○葛稚川の肘後方では、常山、黃連、香豉各一兩、附子を炮いて七錢を搗いて末にし、蜜で梧子大の丸にし、空腹に飲で四丸を服し、發せんとする時三丸を服し、午後に食事を攝る。【妊娠瘧疾】常山を酒で蒸し、石膏を煅き各一錢、烏梅を炒つて五分、甘草四分を水一盞、酒一盞に一夜浸し、早朝に溫服する。（姚僧坦集驗方）【生後百日の小兒の瘧】水鑑仙人の歌に『瘧は是れ邪風寒熱の攻るなり、直ちに術治して空と成るを免るべし。常山を刻んで人形の狀を作り、孩兒の生氣の宮に釘在す』とある。金生の人は、金生じて巳に在から、卽ち巳の上に釘する。かく木生の人は亥の上に釘し、火生の人は寅の上に釘し、水土生の人は申の上に釘するのだ。【小兒の驚忤】暴驚、卒死、中惡には、蜀漆を炒つて二錢、左向きの牡蠣一錢二分を漿水で煎じて服す。痰を吐いて癒えるものだ。これを千金湯と名ける。（阮氏）【胸中の痰飲】恆山、甘草各一兩、水五升を一升に煮取つて滓を去り、蜜二合を入れて七合を溫服し、吐を取る。吐せぬときは更に服す

る。（千金方）

【附錄】

（一六）**杜莖山**（圖經）　頌曰く、葉――味苦し、寒なり。溫瘴寒熱で、或は發作し、或は止んで一定せず、煩渴し、頭痛し、心躁するものに主效がある。杵爛して新酒に浸し、汁を絞つて服す。惡涎を吐出して甚だ效がある。生を（一七）用ゐるが宜し。莖は高さ四五尺、葉は苦蕒菜に似てゐる。（一八）秋黃色の花を開き、大いさ枸杞子ほどの白い實を結ぶ。

（一九）**土紅山**　頌曰く、葉――甘し、微寒にして毒なし。骨節疼痛、勞熱、瘴瘧に主效がある。（二〇）南恩州の山野中に生ずる。大なるものは高さ七八尺あり、葉は枇杷に似て小さく、毛がない。秋季に粟粒ほどの白い花があつて實は結ばない。（二一）福州に生ずるものは細い藤になり、芙蓉の葉に似て表は青く下が白い。根は葛頭のやうなものだ。その地では根を取つて米泔に一夜浸し、淸水に再び一夜浸し、黃色に炒つて末にし、一錢づつを水一盞、生薑一片を煎じた湯で服す。やはり勞瘴を治するに甚だ效がある。時珍曰く、杜莖山、卽ち土恆山。土紅山、また杜莖山の類である。故にいづれも此に附記する。

（一六）牧野云フ、先輩此杜莖山ヲやぶかうじ科（紫金牛科）ノいづせんりやう屬ノうばがれもち（Maesa Doniana, Bl.）ニ充テ居レドモ中ツテ居ナイト思フ。

（一七）大觀ニ用ヲ州ニ作ル。卽チ宜州ニ生ズト讀ム可キナリ。宜州ハ石[illegible]丹砂ノ註ヲ見ヨ。

（一八）大觀ニ秋有花紫色ニ作ル。

（一九）牧野云フ、土紅山ハ此品能ク分ラヌ。

（二〇）南恩州ハ石[illegible]石蛇ノ註ヲ見ヨ。

（二一）福州ハ石[illegible]青石壁石[illegible]ノ註ヲ見ヨ。

(一)藜蘆（本經下品）

和名　しゆろさう
學名　Veratrum nigrum L.
科名　ゆり科（百合科）

釋名

山葱（別錄）　**葱苒**（本經）　**葱菼**　菼の音は毯（エン）である。**葱葵**（普）　**豐蘆**（普）　**憨葱**（綱目）　**鹿葱**　時珍曰く、黑色を黎といふ。蘆を黑皮が褁んでゐるから名けたものだ。根の際が葱に似たもので、俗に葱管藜蘆といふはこの草だ。北方ではこれを憨葱といひ、南方ではこれを鹿葱といふ。

集解

別錄に曰く、藜蘆は(二)太山の山谷に生ずる。三月根を採つて陰乾する。

普曰く、葉は大きく、小さい根が相連つてゐるものだ。弘景曰く、(三)近道の處處にある。根のもとが極めて葱に似て毛の多いものだ。用ゐるには根だけを剔り取つて微し炙る。

保昇曰く、所在の山谷いづれにもある。葉は鬱金、秦艽、蘘荷などに似て、根は龍膽のやうだ。莖の下に毛が多い。夏生えて冬凋む。八月に根を採る。

頌曰く、今は陜西、(四)山南の東、西の州郡にいづれもあるが、(五)遼州、均州、解

(一)牧野氏ハ、支那ノ藜蘆ヲ今一種ト綜ベテ和名ヲしゆろさうトシテオク、日本産ノモノハ其ノ變種ナレドモ之レハ又支那ニモ産スル。

(二)太山ハ山東省泰安縣ノ北ニ在リ、亦岱宗トモ云フ。

(三)弘景ノ所謂近道トハ揚子江ニ沿ヘル北岸ノ一部、及ビ南岸一帶ノ州郡ヲ指スナラン。

(四)宋朝ノ山南東道西道ハ今ノ山西省ノ南部、湖北省ノ北部、河南省ノ一部ヲ包轄ス。

州のものが就中佳し。三月苗が生え、葉は出たばかりの椶心、または車前に似てゐる。莖は葱白に似て青紫色、高さは五六寸、表面に黒皮があつて椶皮のやうに莖を裹み、肉紅色の花がある。根は馬腸根に似て、長さ四五寸ばかり、黄白色だ。二月、三月に根を採つて陰乾する。この草には二種類あつて、一種は水藜蘆といふ。莖、葉は大體同じだが、ただこの草は水の流れる溪間の石上に生え、根鬚が百餘本ある。藥用にはならない。現に用ゐられるものは葱白藜蘆といふもので、根鬚は甚だ少く、ただ二三十本だ。高山に生ずるものが佳し。均州地方の俗間ではこれを鹿葱とも呼ぶ。(六)范子計然には『(七)河東に産する黄白色のものが善し』とある。

〔藜　蘆〕

根　【修　治】　雷曰く、凡そこれを採取したならば、頭を去り、糯米泔で午前十時から午後二時まで煮て晒し乾して用ゐる。

(八)【氣　味】　【辛し、寒にして毒あり】○別錄に曰く、苦し、微寒なり。○普曰く、神農、雷公は辛し毒ありといひ、岐伯は鹹し、毒ありといひ、李當之は大寒にして

(五) 遼州ハ今ノ山西省冀寧道。均州ハ今ノ湖北省襄陽。解州ハ今ノ山西省河東道ナリ。

(六) 范子計然、書名。

(七) 河東ハ今ノ山西省ノ地ナリ。

(八) 木村(康)曰ク、「成分 邦産ばいけいそうニ就テハ未ダ研

大毒ありといひ、扁鵲は苦し、毒ありといふ。之才曰く、黄連が使となる。細辛、芍藥、人參、沙參、紫參、丹參、苦參と反し、大黄を惡む。時珍曰く、葱白を畏れる。服して吐いて止まぬときは葱湯を飮めば直に止まる。

【主治】【(九)蠱毒、欬逆、洩痢、(一〇)腸澼、頭瘍、疥瘙、惡瘡。諸蟲毒を殺し、死肌を去る】(本經)【(一一)噦逆、(一二)喉痺不通、鼻中の息肉、(一三)馬刀爛瘡を療ず。湯に入れては用ゐない】(別錄)【上氣に主效があり、積年の膿血泄痢を去る】(一三)(權)【上膈の風涎(一四)暗風癇病、小兒の(一五)齁鮐痰疾を吐かす】(頌)【末にして用ゐれば(一六)馬疥癬を治す】(宗奭)

【發明】頌曰く、藜蘆は、一錢匕、(一七)一字位を服してさへ劇しく吐かせるものだ。又、之を用ゐれば頂に通じて嚏をさせる。而るに別錄に『(一八)噦逆を治す』とあるが、(一九)その效は未だ詳でない。

時珍曰く、噦逆には吐藥を用ゐ、また(二〇)反胃にも吐法を用ゐる。是は痰積を去るが目的である。吐藥は單に一定したものではなく、常山は瘧痰を吐かせ、(二一)瓜丁は熱痰を吐かせ、烏附尖は濕痰を吐かせ、萊菔子は氣痰を吐かせる。藜蘆そのものは風

完ナケレドモ、歐洲産ノV. album, L. 中ニ證明セラレタルアルカロイドハエルビン、ルビエルビン、プソイドエルビン、プロトベラトリン等ナリ、プロトベラトリンハ毒性最モ強クエルビン之ニ次グ他ハ著ルシキ生理作用ナシ、しゆろさうハアルカロイドエルビンヲ含有スルト稱セラルルモ確ナラズ。農用殺蟲劑トシテ用ヰラル。

藥誌、明、二二、(九〇)六一、九、大、三(三八三)五九。G. Salzberger: Arch. Pharm. 1890 (228) 466.

(九)蠱毒ハ毒蟲ヲ以テ作リタル毒物、倘ホ蠱ノ解ハ原南陽双桂偶記ニ詳ナリ。

痰を吐かせるものだ。按ずるに、張子和の儒門事親に『(一三)風癇を病む一婦人があつて、六、七歳ころから驚風に罹り、その後は一二年毎に一回位發作し、五六年後には一年に五七回發作し、三十歳から四十歳頃は毎日のやうに發作して、甚しいときは一日に十餘回も發作し、遂に精神朦朧として癡呆の如く、甚しく健忘になり、寧ろ死を求めるといふ狀態に陷つた。ところが、たまたま大凶作の慘澹たる饑饉に遭ひ、野山に出てあらゆる草を採つて飢を凌いでゐるうちに、ふと葱のやうな形の草を見付け、それを採つて來て、蒸熟して飽くまで食つた。すると五更頃に忽ち胸が苦しくなつて膠のやうな涎を吐き、連日止まずして凡そ一二斗ほどを吐き、同時に洗ふやうに汗を出して極端に衰弱したが、三日後には遂に輕快になり、病は無くなつて食慾が進み、あらゆる脈理が完全に調和した。そこでその食つた葱のやうな草が果して何草であつたかを世人に訊いて見ると、それは憨葱の苗だつたといふ。卽ち本草の藜蘆である。圖經に「能く風病を吐かす」とあるが、この婦人はやはり偶然その吐法に合致したものを食つたのだ』といつてある。我が明朝の荆和王妃劉氏が年七十にして中風を病んだ時は、人事不省となつて牙關が緊閉し、多くの醫師は

(一〇)腸癰ハ腸病。
(一一)喉痺ハ偏桃腺炎。
(一二)馬刀擶瘡ハ脇肋腋下ニ生ズル瘰癧ノ一種。
(一三)權ハ甄權。藥性本草四卷ヲ著ス。隋ニ仕フ。唐ノ貞觀中歸百歲餘ニテ歿ス。是李時珍ノ諸家本草ノ註ニ據ル。然レドモ藥性本草ハ其實ハ權ノ弟甄立言ノ著ナルコト醫說、醫學入門、玉海等ニ載スル所ナリ。然レバ綱目ニ權ト記スルモノハ皆立言ノ誤ナリ。唐ノ武德中大常丞ニ進ム。
(一四)暗風ハ眩運。癇病ハ大觀本草ニハ癇疾トアリ。
(一五)齁齁ハ鼻息ノ鳴ル病患。
(一六)馬痔瘻ハ馬皮瘻トモ云フ。ヌムシノ

遂に匙を投げた。その時余が先考、太醫吏目の（三三）月池翁が診察したが、正午から午後十二時までかかつてもやはり藥が通らなかつたので、已むを得ず一本の齒を打折つて、そこから濃く煎じた藜蘆湯を灌ぎ込んだ。すると少頃して一聲の噫氣を出し、同時に痰を吐して遂に甦つた。そこで始めて手當を加へて平安を得たのであつた。（三四）瞑眩せぬ藥ではその病が癒えないといふが、誠にその通りだ。

附方　舊六、新十二。

【諸風の吐飮】藜蘆十分、鬱金一分を末にし、一字づつを溫漿水一盞で和して服し、探り吐かす。（經驗方）【中風の人事不省】牙關緊急するには、藜蘆一兩を（三五）苗頭を去つて濃く煎じた防風湯を浴せ、焙じ乾して切り、微し褐色に炒つて末にし、半錢づつ——小兒には半減する——を溫水で調へて灌ぐ。風涎を吐すれば效があつたのだ。吐かぬときは再服する。（簡要濟衆）【中風の言語不能】喉中が（三六）鋸を曳くやうで口から涎沫を出すには、藜蘆一分、天南星一箇を浮皮を去り、（三七）臍上に一坑を剜りあけて陳醋（三八）二橡斗を入れ、四面から火力を當てて黃色にし、末に研つて生麪で小豆大の丸にし、三丸づつを溫酒で服す。（三九）（經驗方）【諸風の頭痛】和州の藜蘆一莖を日光で乾して研末し、麝香少量を入れて鼻へ吹く。○又ある

一種ニシテ微シ痒ク白點ノ相連ナルモノヲ云フ。
（二七）一字ハ一撮ヲ云フ、十分ノ六銖ニアタル。
（二八）大觀本草ニハ職ヲ幅ニ作ル。
（二九）其ノ字ハ大觀本草ニ從フ。
（三〇）反胃ハ朝ニ食シ暮ニ吐キ、暮ニ食シ朝ニ吐シ、或ハ食シヤンデ直ニ吐スル病ヲ云フ。
（三一）瓜丁ハ瓜蔕ノコト、瓜ノヘタナリ。
（三二）風癇ハ神經衰弱ノ甚シキモノニシテ心氣正確ナラザルモノ。
（三三）月池翁、諱ハ言聞、時珍ノ父ナリ。
ばいけいさうノ根莖ヲ白藜蘆根トシ、しゆろさうノ根莖ヲ黑藜蘆根トス。

方では、通頂散——藜蘆半兩、黄連三分を鼻から嗜ふ。(聖惠)【痰多き久瘧】物も食へず、吐かんとして吐かぬには、藜蘆末半錢を温虀水で調へて服し、探り吐かす。(保命集)【痰瘧、積瘧】藜蘆、皂莢を炙いて各一兩、巴豆二十五箇を黄色に熬り、研末して蜜で小豆大の丸にし、毎に空心に一丸を服し、發作せぬ前に一丸を、發作したときまた一丸を服す。飲食物を攝らぬがよし。(肘後方)【黄疸腫疾】藜蘆を灰中で炮して末にし、水で半錢匕を服して少し吐かす。數服に過ぎずして效がある。(三〇)【胸中の結聚】驚怖に襲はれたやうで、その狀態の去らぬには、巴豆半兩を皮と心を去り、炒つて泥のやうに擣き、藜蘆を炙き研つて一兩と蜜で和し、擣いて麻子大の丸にし、一二丸づつを呑む。(肘後)【身體、面部の黑痣】藜蘆灰五兩と水一大碗で淋汁を取り、銅器で(三一)重湯で煮て黑膏にし、痣を針で微し(三二)刺し破つて點ける。三回に過ぎずして效がある。(聖惠)【鼻中の息肉】藜蘆三分、雄黃一分を末にし、蜜で和して點ける。日毎に三回試みれば自ら消える。兩畔に點けてはならぬ。(聖濟方)【牙齒の蟲痛】藜蘆末を孔中に納れる。汁を呑んではならぬ。神效がある。(千金翼)【白禿蟲瘡】藜蘆末を猪脂で調へて塗る。(肘後方)【頭の蟣虱】藜蘆末を摻る (直指)

(二四)瞑眩トハ藥ノ反應ノ爲ニ患者ガ一時人事不省ニ陷ル狀態ヲ云フ。
(二五)苗ハ大觀ニハ蘆ニ作ル。從フベシ。
(二六)大觀ニハ鋸字下ニ聲ノ字アリ、左レバ曳鋸聲ノ如シト讀ムヲ正トス。
(二七)腨トハ天南星ノ塊莖ノ上端ヲ云フ。
(二八)二橡斗、橡斗トハクヌギノ實ノ木ニアル椀狀ノ總苞、俗ニドングリノサラノコト。
(二九)大觀ニハ驗ノ下ニ後字アリ。
(三〇)大觀ニハ此處ニ百一方ノ三字アリ。
(三一)重湯ハ湯煎デ煎ズルコト。
(三二)刺、大觀ニ撥ニ作ル。息肉ハハナタケヲイフ。
(三三)反花瘡トハ瘡

【頭風白屑】甚しく痒きには、頭を沐して黎蘆末を摻り、二晝夜風に當たらぬやうに頭髮を包んで置けば效がある。(本事方)【(三三)反花惡瘡】米のやうな惡肉が反出するには、黎蘆末を猪脂に和して一日三五囘傅ける。(聖濟錄)【疥癬蟲瘡】黎蘆末を生油で和して塗る。(三四)【(三五)羊疽瘡痒】黎蘆二分、附子八分を末にして傅ける。蟲は自から出る。(陶隱居方)【誤つて水蛭を呑みたるとき】黎蘆を炒つて末にし、水で一錢を服す。必ず吐出する。(德生堂方)

附錄

(三六)**山慈石**(別錄)　有名未用に曰く、苦し、平にして毒なし。婦人の帶下に主效がある。山の陽に生ずる。正月黎蘆のやうな葉が生え、莖に衣がある。一名を爰茈といふ。

(三七)**參果根**。又曰く、苦し、毒あり。鼠瘻に主效がある。百餘根生え、根に衣があつて莖を褁む。三月三日に根を採る。一名百連、一名烏蓼、一名鼠莖、一名鹿蒲。

(三八)**馬腸根**(宋圖經)　頌曰く、苦く辛し、寒にして毒あり。蠱に主效があり風を除き、葉は瘡疥を療ず。秦州に生ず。葉は桑のやうだ。三月葉を採り、五月、六月根を採る。

面瘡ニテ瘡腫狀ノ瘡瘰ナルモノ。
(三四)大觀ニハ此處ニ斗門方ト註ス。
(三五)羊疽ハ痲疹、痘瘡ニ似テ大ナルモノナリ。
(三六)山慈石、詳ナラズ。
(三七)參果根、詳ナラズ。
(三八)馬腹根、詳ナラズ。

(一)木黎蘆（拾遺）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】 黄黎蘆（綱目） 鹿驪

【集解】 藏器曰く、陶弘景が漏蘆に注して『一名鹿驪といひ、山南地方では苗を用ゐ、北方では根を用ゐる』といつてあるが、按ずるに、鹿驪とは木黎蘆のことで、漏蘆ではない。これは樹生し、茱萸のやうで高さは二尺ばかりのものだ。毒がある。時珍曰く、鹿驪は、一般俚俗に黄黎蘆と呼ぶ。小さい樹で、葉は櫻桃の葉のやうで狹く長く、皺文が多い。四月細かい黄花を開き、五月小豆大ほどの小さく長い子を結ぶ。

(二)【氣味】 【苦く辛し、溫にして毒あり】 【主治】 【疥癬に用ゐて蟲を殺す】（藏器）

(一)牧野云フ、先羅之レヲしやくなげ科(石南科)ノはなひりのき(Leucothoe Grayana. Maxim.)ニ充テ居レド、コレハ正確デハナイト信ズル、ソシテ其本物ハ今詳カデナイ。

(二)木村(康)曰ク、はなひりのきノ葉ハグラヤノトキシントイフ小結晶性成分ヲ含有。グラヤノトキシンハ其生理作用アンドロメドトキシンニ類似ス、靜脈内注射ニヨル家兎ノ最少致死量ハ體重ニ一瓩ニ對シ〇・四三瓩ナルモ内服ニヨル場合ハ、ソノ四〇倍ニテモ中毒症狀ヲ認ムルノミデ死セザル場合アリ、本物質ハ呼吸毒ニシテ、家兎ニ於ケル死因ハ呼吸中樞ノ興奮性減少ニヨル呼吸靜止ナリ、局所作用中最モ著シキハ激烈ナル噴嚏ヲ惹起セシムルニアリ。久保倖――東醫、明、四〇(二一)五六九、四一、(二二)六二三。土居利三郎――日進醫學、太、九(一一)

葉ノ煎汁ハ家畜ノ皮膚ヲ洗ヒ寄生蟲ヲ除去スルニ效アリ、又葉ヲ便所ニ入ルレバ蛆ヲ殺ス、佐々木氏ノ實驗ニヨレバ、内容三斗ノ糞便壺中ニ葉ノ粉末二〇匁ヲ投入セルニ蛆ハ三日以内ニ完全ニ死滅シ、其後二三日間新タニ蛆ノ發生スルコトナカリシト云フ、佐々木秀夫――日本公衆保健協會誌、大、一五、(二)一三。

(一)附子（本經下品）

和名　ぶし
學名　Aconitum sp.
科名　うまのあしがた科（毛茛科）

【釋名】その母を名けて烏頭といふ。時珍曰く、最初に成育するものを烏頭といふ。烏の頭に似てゐるといふ形容だ。烏頭に附いて生ずるものを附子といふ。子が母に附いてゐるやうなもので、烏頭は親芋、附子は子芋のやうなものだ。蓋し一物である。別に草烏頭、白附子なるものがあるところから、俗にこれを黑附子、川烏頭と呼んで區別する。既往の諸家は烏頭に川と草との兩種あることを區別せずして、いづれも混淆・雜亂の註解を下してゐるが、今は悉く正して置く。

【集解】別錄に曰く、附子は(二)犍爲の山谷、及び(三)廣漢に生ずる。冬に採るものが附子である。春に採るものが烏頭である。

弘景曰く、烏頭と附子とは同根のもので、附子は八月に採る八角のものが良し。烏頭は四月に採る。春季に莖が初めて生え、烏類の烏の頭のやうな腦頭がある。それでこれを烏頭といふのだ。兩岐があつて、その岐の分れる蒂の牛角のやうな形狀

(一)牧野云フ、附子ハ烏頭ノ新根デアルガ、其烏頭ノ原植物ハとりかぶと屬(Aconitum)中ノ何ノ種ニ當ルカ、其種名ハ今玆ニ輕卒ニ斷言ハ出來ヌガ、或ハA. Fischeri, Reichb. ヲ指スカモ知レヌ、若シ果シテ然リトスレバ附子ノ母ハ此種デアルト言フ事ガ出來ル譯デアル。支那ニハとりかぶと屬ノ種種ノ種類ヲ産スルノデ中ニハ甲ノ種カラノモノヲ附子ト云ヒ、又乙ノ種カラノモノモ同ジク附子ト云フ類ノ事ガ往往アラウト思フ、是レ等ノ問題ヲ決スルニハ實際ニ支那ノ各地ヲ踏査シテ研究セネバ到底判ラヌ事柄デアル。

木村(康)曰ク、附子ノ原植物ハひろはのからふとぶし一名おほぶし (Aconitum Fischeri, Reichb.) 其他數種アリ、野生ノ各種ノ Aconitum 屬ノモノヲ用ヰテ、原植物ノ多樣ナル草烏頭ヲ除キテハ附子烏頭ノ如キイヅレモ略ボ原植物ハひろはのからふとぶしニヨレルモノト看做ス可キ歟、現在ノ上海市場品ニ就キ見ルニ、川烏ト稱スルモノハ發芽期ニ採集セリト認メラルル塊根ニシテ、內容充實シテ堅硬皺紋少ナク、我和漢藥商ニ於テ支那產大附子ト稱スルモノ之ニ似テ少シク大形ナルヲ認ム、同ジク上海市場ノ草烏ハ成長後ノ母根ニシテ殘

のものを烏喙(うかい)といふ。その汁を取つて煎じたものが射罔(しやまう)である。天雄は附子に似て細く長く、三四寸ほどになるものだ。側子は卽ち附子の邊角の大なるものだ。これ等はいづれも同根のものだが、本經に、附子は犍爲に產し、天雄は少室(せうしつ)に產し、烏頭は(四)朗陵(らうりよう)に產すと生地を三箇處に分けたのは、それぞれその特長の代表的なものの產地を擧げたものと見える。今ではそれ等の別がない。

〔烏頭附子〕

○恭曰く、天雄、附子、烏頭は、いづれも蜀道の(五)綿州(めんしう)、龍州(りようしう)のものを佳しとする。倶に八月を期して採收し修治する。その他の地方で修治したものもあるが、藥としての力が微弱で、全然比較にならぬ。江南から來るものに至つては全く用ゐるに堪へない。

○大明曰く、天雄は太くして長く、角刺が少くして質は虛してゐる。附子は太くして短く、角があり、形が平かに穩(おだや)かで實してゐる。烏喙は天雄に似たものだ。烏頭は附子に次ぎ、側子は烏頭よりも小さい。連(つらな)り聚(あつま)つて生ずるものをば虎掌と名け

る。いづれも天雄の一家族母子關係の類だが、氣力にはそれぞれ等差がある。それは宿い根と嫩いものとの相違だ。

○斅曰く、烏頭は、少し莖、苗があり、身が長くして烏のやうに黒く、少し旁尖がある。烏喙は、皮の表面が蒼色で尖頭があり、大なるものは八九箇を孕み、尖頭の周圍が底陷して烏鐵のやうに黒い。天雄は、身は全體が矮えて尖がなく、周圍四面を匝つて十一箇の附子を孕む。附子は皮が蒼色だ。側子といふは、ただ附子の傍にある小顆のことで、棗核のやうなものだ。木鼈子といふは喙、附、烏、雄、側中の(六)毗患なるもので、藥には入れない。

○保昇曰く、形の整正なるものが烏頭である。兩岐になつたものが烏喙である。細長くして三四寸ほどのものが天雄である。根の旁に芋のやうに散つて生ずるものが附子である。旁に連つて生ずるものが側子である。この五物は同根に出て名稱を異にするものだ。苗は高さ二尺ばかり、葉は石龍芮、及び艾に似てゐる。

○宗奭曰く、五者は皆一物だ。ただ大小、長短に依つて形容した名稱といふに過ぎない。

莖ヲ著ケ、又次年ノ小娘根ヲ伴フ事アリ川烏ノ原産物ハひろはのからふとぶしヲ充ツルヲ正條トスレドモ、未ダ組織構造ノ顯微鏡的研究ヲ經ザルヲ以テ遽ニ斷定スルヲ得ズ、尙和産ノ烏頭草烏頭ト稱スルモノハとりかぶと(Aconitum japonicum)(A. chinensis)等ニヨルモノニシテ別物ナリ、又アコニツト根トシテ英、米、獨、佛藥局法ト共ニ我藥局法ニ採用スルモノハA. Napellus, L. ナリ

(二)犍爲ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。

(三)廣漢ハ漢ノ郡名。今ノ四川省梓潼縣ニ治シ、涪江ノ沿流、今ノ四川省遂寧縣以北、龍安、及ビ甘肅省

ノ文州、階州、陝西省ノ寧羌等ノ地ヲ包ヌ。後漢ニハ今ノ四川省新津縣ニ治ヲ徙シ、晉ニ今ノ遂寧ノ北ニ徙シ、尋デマタ後漢ノ舊治ニ復ス。

(四)朗陵ハ漢ノ縣名。今ノ河南省確山縣ノ南、吳猪河ノ北ニ故城在リ。漢ニハ汝南郡ニ屬ス。

(五)綿州ハ隋、唐ニ置ク。今ノ四川省綿陽縣ソノ地ナリ。龍州ハ西魏、唐ニ置ク。今ノ四川省平武縣ノ東南ニ故境アリ。倶ニ漢ノ廣漢郡ノ地ナリ。

(六)大觀ニ穗ニ作ル、毗穗ハ惡質。

(七)彰明縣ハ今ノ四川省彰明縣ソノ地ナリ。今ノ綿州ノ北、郡里五六里ノ地點ナリ。赤水ハ彰明縣管

頌曰く、五者は、今はいづれも蜀の地に出る。すべて一種の草から産するものだ。その栽培状態は、龍州で作るものは、冬至前に先づ畑を五七回耕して豬糞を肥料として加へ、然る後に種を蒔いて逐月に耕耘し、翌年の八月後になつて始めて完全に成熟する。その苗は高さ三四尺、莖は四稜になり、葉は艾のやうだ。花は紫碧色で穗になり、その實は細く小さく、桑椹のやうな形狀で黑色だ。本來はただ附子一種のみを種ゑるのだが、成熟後になると他の四種の物が生ずるので、長さ二三寸になつたものを天雄といひ、附子の旁にある尖角を分け取つて側子といひ、附子の極めて小なるものをもやはり側子といふ。當初に種ゑた附子はその場合には烏頭であつて、それ等以外の大、小のものすべてを附子といふのである。八角のものが上級品となつてゐる。綿州の(七)彰明縣で多くこれを栽培するが、就中赤水一鄉のもののみが最も佳し。しかし、その採收の時、月は本草と合致しない。謹んで按ずるに、本草では、冬季に採るものを附子、春季に採るものを烏頭とし、博物志には『附子、烏頭、天雄は一物であつて、春、秋、冬、夏にこれを採る』とあつて、各〻異つてゐるが、廣雅には『奚毒は附子であつて、一歲のものを側子といひ、二年生のもの

下ノ一小村ナリ。

を烏喙といひ、三年生のものを附子といひ、四年生のものを烏頭といひ、五年生のものを天雄といふ』とある。現在では、この草を一年栽培して右の五物が生ずるのだが、これは現代の栽培法が進歩して能率的になつてゐるところから、かやうに增殖と同時收穫とに成功してゐるわけであらうか。

時珍曰く、烏頭には二種類ある。

彰明に產するものは卽ち附子の母である。今一般に川烏頭と稱するものがそれであつて、春の末期に子を生ずるものだから「春に採るものが烏頭』といひ、冬になればその生じた子が已に一箇の物に成熟するから「冬に採るものが附子』といつたのである。天雄、烏喙、側子などいふは、いづれもその生ずる子の多くのものに對し、それぞれその形狀に因つて形容した名稱だ。生ずる子の少ないものもあれば、また單に種ゑたもののみが成熟するに過ぎぬものもある。それ等は無論右のやうな數種のものがない。

江左、山南等の諸地に產するものは本經に列記された烏頭である。今一般に草烏頭と稱するものがそれであつて『汁を煎じて射罔を作る』とあるがそれを證明して

ゐる。陶弘景は烏頭に二種あることを知らずして、附子の烏頭の説明を直ちに移して射罔の烏頭に註釋したのであつた。そのために後來の諸家は甚だ辨別に疑惑を生じたのであつて、雷斅の説に至つては就中事實と隔つてゐる。宋時代の人、楊天惠が著した附子記の記述が甚だ正確詳細を極めてゐるから、玆にその概要を撮錄する。一讀の下、論辯を俟たずして明瞭であらう。

綿州は故の廣漢の地で、その管下には八縣あるが、彰明縣だけに附子を産し、彰明縣の管下二十鄕の内でも、附子を産するは（八）赤水、廉水、昌明、會昌の四鄕であつて、赤水に最も多い。毎年良き畑を熟耕して、うねを作り、（九）龍安、龍州、齊歸、木閑、青堆など諸處の小坪から種を取つて蒔くのであるが、春季に苗が生え、莖は野艾に類して澤があり、葉は（一〇）地膩に類して厚く、その花は紫瓣黄蕤で、苞は長くして（一一）圓い。七月に採つたものをば早水拳と稱する。縮んで小さい。蓋しまだ完全に成育せぬものだ。九月に採れば立派なものである。かくて收穫するものは凡そ七種であつて、本を同くして末を異にするものだ。當初に種ゑて多くのものを生じたその元種を烏（一二）頭といひ、その烏頭に附いて

（八）赤水以下ハ彰明縣ノ管下、清水沿岸ノ小村落ナリ。

（九）龍安ハ今ノ四川省龍安縣ノ地ナリ。龍州ハ前ニ出ヅ。齊歸、木門、青堆等ノ小村落所在未詳。小坪、一本小平ニ作ル。坪ヲ正トス。四川北部ノ俗、小村落ヲ坪ト稱ス。

（一〇）一本ニ地ヲ豬ニ作ル。豬膩ハ茺蔚ノ別名ナリ。

（一一）本草藥言ニハ、

旁に(一三)生ずるものを附子といひ、またその左右に對偶して生ずるものを鬲(一四)子といひ、附して(一五)長いものを天雄といひ、附して尖つたものを錐子といひ、附して上方に出るものを側子といひ、附して不規則に散生するものを漏藍子といふ。いづれも脈絡、連貫して子が母に附いたやうなものだが、附子が最も貴重な性質を有するところから、『附』なる名稱を獨占したといふわけだ。概して元種一箇に對して六七箇以上の子を生じたものは皆形が小さいが、元種一箇に子二三箇のものは稍大きく、元種一箇に對し只一箇だけ生ずるものは特に大きい。附子の良否を形狀の上からいへば、正しく蹲坐して節が正しく、角の少いものが上級品で、鼠乳の多い節のあるものはこれに次ぎ、形が歪んで傷缺があり(一六)皮皺のあるものは下等品だ。本草に『附子は八角なるものが良し』とあるその角を側子だといふ說は甚だ謬つてゐる。色澤の上からいへば、花の白いものの根が上級品で、鐵色のものがこれに次ぎ、靑綠のものは下等品だ。天雄、烏頭、天錐は、いづれも豐實にして一握りに盈つるほどのものが勝れたものだ。漏藍、側子などいふは、園主が勞役人夫に(一七)乞へるほどのものだから、數ふるに

圓下ニ實類桑椹子細而且黑ノ九字アリ。

(一三)本草彙言ニ、頭下ニ少有旁尖身長而黑ノ八字アリ。

(一三)本草彙言ニ、生字下ニ叢相須貫不相連ノ七字アリ。

(一四)彙言ニ、子下ニ獨生無ノ三字アリ。

(一五)彙言、長下ニ三四寸ノ三字アリ。

(一六)皮字、正字通ニヨル。

(一七)乞ハ與フルト讀ム。

足らない。

謹んで按ずるに、この記載にある漏藍は、雷斅の所謂木鼈子、大明の所謂虎掌のことであつて、鬲子は烏喙のこと、天錐は天雄の類のものだ。醫方には一向それ等の名稱がないが、功用もやはり似寄つたものらしい。

〔修治〕保昇曰く、附子、烏頭、天雄、側子、烏喙は、採取したならば生熟湯で氣を減せぬやうにして半日浸して取り出し、白灰に數〻裛み易へて乾かしめる。又、ある法では、米粥、及び糟、麴などに漬けるが、いづれも前記の方法に及ばない。

頌曰く、この五物は採收と同時に釀し作るものだ。その方法は、六个月前から大、小麥、麴を準備し、採取する半月前に大麥で煮た粥にその麴を入れて醋を作り、熟した時糟を去つて用ゐる。その醋は甚だ酸味が過ぎてはならぬもので、酸が過ぎるときは水を入れて稀釋する。その醋を新しい甕に入れた中へ附子を根鬚を去つて納れ、七日間漬けて一日一回づつ攪き廻し、かくて撈ひ出して粗い篩に攤し、白い衣の生ぜぬやうに、慢い風に吹かせて日中に百十日間晒し、内部まで乾き透る

を適度とする。强烈な日光に晒しては皺になつて皮が肉に附かないものだ。

時珍曰く、按ずるに、附子記には『この物は常に滿足な結果を得ることはなかなか六ヶ敷いもので、完全な立派なものを種ゑても苗が思ふやうに茂らなかつたり、苗はよく秀でても根が十分に發育しなかつたり、完全なものを得てもそれを釀して見ると腐つて了つたり、釀すことが思ふやうに行つても曝す場合には攣んで了つたり、あだかも神異の物があつて陰に支配するのではないかとさへ思はれる。そのために、耕作に從事するものは常に成功を神に禱り、その神を『藥妖』と呼んでゐる。これを釀す方法は、漉さぬ醋を用ゐ、密室中で一箇月ほど漬け覆ふてから取り出して曝乾するのだが、釀すために醋に入れるときは拳ほどの大いさのものも、完全に曝乾し仕上げて見ると一握に足らぬほどになる。それ故に一箇で一兩に達するものは極めて得難いのであつて、その土地の者の話では「半兩以上のものでさへあれば皆良い。蜀地方には服餌するものが稀だが、ただ秦、陝、閩、浙の地方でこれを需要する。しかし秦地方で纔かに商つてゐるものは下級品だ。閩、浙で纔かにその中位のものが手に入る。上級品となればいづれも宮廷、貴人に獨占される」とい

（二八）本草原始ニハ、午ヲ平ニ作ル、即チ地上ヲ平ニシト讀マスルナリ。

ふ』とある。

○弘景曰く、凡そ附子、烏頭、天雄を用ゐるには、いづれも微し炮いて折いて用ゐる。焦し過ぎてはならない。ただ薑附湯だけには生で用ゐる。一般醫方で附子を用ゐる場合には、必ず甘草、人參、生薑と相配合することになつてゐる。それ等のものは毒を制するものだからだ。

斅曰く、凡そ烏頭を使用するには、文武火中で炮いて皴ませ、それを擘いて用ゐるがよし。附子を用ゐる場合には、底が平で九の角があり、鐵のやうな色で一箇の重量一兩のものを用ゐるがよし。それならば藥氣が完全だ。熱を加へるには、雜木の火を用ゐてはならぬ、ただ柳木灰火の中で炮き皴ませ、刀で表面の孕子を削り去り、竝に底尖を去つて擘き破り、屋根下の（二八）午の方位に土坑を掘つて一夜それに納れ、取出して焙じ乾して用ゐる。陰制にする場合には、生で皮の尖底を去つて薄く切り、東流水に黑豆と共に五晝夜浸して漉出し、日中に曝して用ゐる。

震亨曰く、凡そ烏、附、天雄は、童尿を浸透して煮て用うべきもので、それで毒を殺し、同時に下行の力を助ける。鹽少量を入れるが就中好し。或は尿に十四日間

浸して壞れたものを揀り去り、竹刀で一箇を四片づつに切つてまた水で淘り淨め、逐日水を換へて再び七日間浸し、それを晒し乾して用ゐる。

時珍曰く、附子は、生で用ゐれば發散し、熟したものを用ゐれば峻烈な補の作用がある。生で用ゐるには、陰制の方法の如くして皮、臍を去つて藥に入れる。熟したものを用ゐるには、水に浸してから炮いて發折させ、皮、臍を去つて熱い內に切片し、再び炒つて內外倶に黃色にし、火毒を去つて藥に入れる。又、ある法では、一箇每に甘草二錢、鹽水、薑汁、童尿各半盞と共に煮熟し、一夜の間火毒を出して用ゐる。それで毒はなくなるものだ。

(一九)氣味　【辛し、溫にして大毒あり】　別錄に曰く、甘し、大熱なり。普曰く、神農は辛しといひ、岐伯、雷公は甘し、毒ありといひ、李當之は苦し、大溫にして大毒ありといふ。

元素曰く、大辛、大熱にして、氣厚く味薄く、升るべく降るべく、陽中の陰であり、浮中の沈であつて、如何なる部分にも到達する。諸經に對して功用を導き入れる藥である。

(一九)木村(康)曰ク、アコニツト根中ニハアコニチン。プソイドアコニチン、ヒクラアコニチン等ノアルカロイドヲ約一%前後含有スル、又ヤパコニチン邦産生藥中ニ検出セラレタリ。B. P. C. 62; U. S.

好古曰く、手の少陰、三焦、命門に入るの劑であつて、その性は走つて止まらぬものだ。止つて行らぬ乾薑のやうなものとは違ふ。

趙嗣眞曰く、熟附は、麻黄と配合すれば發散の中に補する作用がある。仲景の麻黄附子細辛湯、麻黄附子甘草湯がその例だ。生附は、乾薑と配合すれば補の作用の中に發散の作用がある。仲景の乾薑附子湯、通脈四逆湯がその例だ。

戴原禮曰く、附子は乾薑が無ければ熱せぬ。甘草と配合すれば性が緩となる。桂と配合すれば命門を補す。

李燾曰く、附子は、生薑と配合すれば能く發散し、熱を以て熱を攻める。また虚熱を導いて下行し、その作用に依つて冷病を除くものだ。

之才曰く、地膽が使となる。蜈蚣を惡み、防風、黑豆、甘草、人參、黄耆を畏る。

時珍曰く、綠豆、烏韮、童尿、犀角を畏れ、豉汁を忌む。蜀椒、食鹽と配合すれば、下つて命門に達する。

【主治】 【風寒欬逆、邪氣寒濕で、踒躄し、拘攣し、膝痛し、歩行不能のもの。癥堅積聚を破る。血瘕、金瘡】(本經) 【腰脊の風寒、脚(二〇)氣で(二一)冷冷として弱きも

P. 85; U. W. (2) 18; W. P. 200; J. Ch. Soc. 1909(77) 45; P. H. 221; F. H. (1)2); N. S. D. 101; Watson. 297; St. 7; BN. 535, 814; A. J. P. 1913 (35) 391; T. M. 1890(4) 719; Kyoto. 1921 (18) 142; Arch. Ph. 1924 (262) 55; Wil. (2) 40; C. A. 1922(16) 2387, 2962; 1925(19) 290; 藥誌、明、三三（一）六）八〇九、一三(二)六(七)二二〇、三五(二四五)六五五、大、二(三七二)一二三、漢藥寫眞集成(一)六七〇。

(二〇) 大觀ニハ疼ニ作ル。

(二一) 大觀ニハ冷字ナシ。

の、心腹の冷痛、霍亂轉筋、下痢赤白。中を溫め、陰を强くし、肌、骨を堅くする。又、墮胎には百藥の長である】(別錄)【脾、胃を溫暖にし、脾濕、腎寒を除き、下焦の陽虛を補す】(元素)【臟、腑の沈寒、三陽厥逆、濕淫腹痛、胃寒蚘動を除き、月經閉止を治し、虛を補し、壅を散ず】(李杲)【督脈の病となり、脊が强して厥するもの】(好古)【三陰傷寒、陰毒寒疝、中寒、中風の痰厥、氣厥、柔痓、癲癇、小兒の慢驚、風濕麻痺、腫滿脚氣、頭風、腎厥頭痛、暴瀉脫陽、久痢脾泄、寒瘧瘴氣、久病の嘔噦、反胃噎膈、癰疽の斂らぬもの、久漏冷瘡を治す。葱涕に合せて耳を塞げば聾を治す】(時珍)

(三二)**烏頭**　卽ち附子の母である。

主治　【諸風の風痺、血痺の半身不遂。寒冷を除き、臟、腑を溫養し、心下の堅痞、感寒腹痛を去る】(元素)【寒濕を除き、經を行らし、風邪を散じ、諸種の積冷の毒を破る】(李杲)【命門の不足、肝の風虛を補す】(好古)【陽を助け陰を退ける功力は附子と同一だが、やや緩である】(時珍)

發明　宗奭曰く、虛寒を補するには附子を用ふべきもので、風患者には多く天雄を用ゐる。大體かやうなもので、烏頭、烏喙、附子を用ゐるにはその物と病と

(三二)牧野云フ、烏頭ノ原植物ハ、或ハAconitum Fischeri, Reichb. 乎。

の對照を量つて用ゐるものだ。
時珍曰く、按ずるに、王氏の究原方に『附子は性が重滯で脾を溫め寒を逐ひ、川烏頭は性が輕疎で脾を溫め風を去るもので、寒疾の場合には附子を用ゐ、風疾の場合には川烏頭を用ゐる。あるひは、凡そ風に中つた患者には、第一著に風藥、及び烏、附を用ゐてはならぬ。先づ氣藥を用ゐて後に烏、附を用うるならば適當な方法だといふ。又、凡そ烏、附の藥を用ゐるには、いづれも冷服すべきものである。それは熱因寒用の法則であつて、蓋し陰寒が下の部分に在る虛陽上浮は、治するに寒を以てすれば、陰氣がますます甚しくして病勢が增進し、これを治するに熱を以てすれば、拒格して藥が納まらない。そこで熱藥を冷飮すれば、藥が食道を通過して後に冷の體が旣に消し、熱性が發して來るので病の氣が隨つて應える。その情に逆らはずして大なる效果を擧げる所以であつて、これは反治の妙である。昔、張仲景は、寒疝の內結を治するに蜜で煎じた烏頭を用ゐた。近效方では、喉痺を治するに蜜で炙つた附子を用ゐ、含んで汁を嚥ませる。朱丹溪は、疝氣を治するに烏頭、巵子を用ゐた。いづれも熱因寒用である。李東垣は、馮翰林の姪が陰盛にして陽に格する

傷寒で、顔面赤く、目も赤く、煩渴し、引飲し、脈が七八至ばかりとなり、ただ按診すると散ずる容體であつたのを治療して、薑附湯に人參を加へ、半斤を投じて服ませると、發汗して癒えたのであつた。此の如きはまことに神聖の妙である』とある。

吳綬曰く、附子は陰證に對する要藥である。凡そ傷寒が三陰に傳變したもの、及び中寒に陰の證を挾み、身に大熱があつても脈の沈なるものには、必ずこれを用ゐる。或は、厥冷し、腹痛し、脈が沈細となり、甚しきは唇青く、陰囊の縮むものには、必ずこれを用ゐねばならぬ。これは陰を退け陽を回らすの力があり、起死回生の功がある。近世では、陰證傷寒に對し、往往遲疑して敢て附子を用ゐようとせず、そのまま陰極まり陽竭きてから、やうやくこれを用ゐるが、それでは已に遲い。苟も陰の傾向を有つ傷寒は、內外共に陰陽の氣が頓に衰へるものだ。必ず急に人參を用ゐて脈を健全にし、その源に力を付け、附子を佐として用ゐて經を溫め、寒を散ずべきものである。この方法を捨てて、何を以てこの病を救ひ得やうか。

劉完素曰く、俗方に、麻痛を治するに多く烏、附を用ゐるが、この物は氣が暴し

くして能く道路を衝開するので愈ゝ麻する。沒藥は氣が甚だしくして正しく、正氣が行るので麻痛が癒える。

張元素曰く、附子に白朮を佐とすれば寒濕を除くの聖藥となる。濕藥には少しこれを加へて經に引くがよし。又、火の源を益して陰翳を消し、そこで大、小便の適度を保たすものは烏、附である。

虞摶曰く、附子は雄壯の質を稟け、斬關奪將の氣を有するもので、能く補氣の藥を導き、十二經に行らして散失した元陽を回復し、補血の藥を導き、血分に入つて不足した眞陰を滋養し、發散の藥を導き、腠理を開いて表に在る風寒を驅逐し、溫煖の藥を導き、下焦に到達せしめて裏に在る冷濕を除去する。

震亨曰く、氣虛で熱の甚しい患者には、少し附子を用ゐて人參、黃耆の藥力を行らしめるがよく、肥滿して濕の多い患者にも、少し烏、附を加へて經に行らしめるがよし。仲景の八味丸は、これを用ゐて少陰の嚮導としてあるので、後世それに因つて附子を補藥と心得てゐるが、誤だ。附子は走つて守らざるものだ。その健悍にして走下する性を利用し、地黃の滯を遠き部分にまで行らす點を取るまでのことで

ある。烏頭、天雄は、いづれも氣壯に、形の偉なるものだ。下部の藥の佐となすべきものである。それが人體を害ふ禍に關して唱道する人がないところから、相率ゐて因襲的に治風の藥、及び補藥と心得て、ために人を殺してゐる場合が多い。

王履曰く、仲景の八味丸は、陰火を兼ぬる不足のもののためにする方劑であり、錢仲陽の六味地黃丸は、陰虛のもののためにする方劑であつて見れば、附子は補陽の藥であつて滯を行るためのものではない。

好古曰く、烏、附は、身涼し、四肢厥するもの以外には借に用ゐてはならない。附子を服して火を補すれば、必ず水を妨げ涸らすものだ。

○時珍曰く、烏、附は毒藥であつて、危篤の病以外には用ゐられないが、補藥の中に少量を加へて引導すれば、その功力を甚だ捷にする。ある者は纔に一錢匕を服すると、直ちに發燥して堪へ難き狀態に陷つたといふが、しかし、昔は一般に補劑に用ゐて常服したものだ。古代と現代とでは、運氣に不同があるのかも知れない。荆府の都昌王は、身體が瘦せて冷え、他に病氣とてはなかつたが、日日附子の煎湯を飮み、兼ねて硫黃を嚼み、數年の間繼續された。蘄州の衞張百戶は、平生鹿茸、

附子の藥を服し、八十餘歳に及んで通常人に倍する健康であつた。宋の張杲の醫説には『趙知府は常に酒色に耽つた人で、毎日乾薑熟附湯を煎じて硫黄金液丹百粒を呑んだ。それで能く健啖だが、用ゐなければ氣力が弱り、倦怠を覺え、身體が支へ得なかつた。壽命は九十までながらへた。他の人間では一粒を服しても害をなすのだが――』と記載してある。これ等の數人は、いづれもその臟腑の天禀が他と異る偏質だつたので、これを服しても益あつて害なしといふわけだつたのだ。常理を以て一概に論ずるわけに行かない。又、瑣碎錄には『（二三）滑臺は風土が極めて寒い。住民は附子を芋か栗のやうに啖ふ』とある。これはその地の環境から受くる影響の然らしむるところと見える。

附方　舊二十六、新八十七。【少陰傷寒】發病二三日で脈が微細となり、ただ寢てゐたがり、小便の色白きには、麻黄附子甘草湯で微し發汗せしめる。麻黄を節を去つて二兩、甘草を炙いて二兩、附子を炮いて皮を去つて一箇を用ゐ、水七升で先づ麻黄を煮て沫を去り、他の二味を納れて三升に煮取り、三回に分服して微し汗を取る。（張仲景傷寒論）【少陰發熱】少陰の病は、發病の當初には反つて發熱し、脈の沈す

（二三）今ノ河南省滑縣治ヲ古ニ滑臺ト稱ス。マタ白馬城トイフ、元和郡縣志ニ『滑州治白馬城。即古滑臺』トアリ。然レドモ此ニイフ滑臺トスルハ頗ル疑フベシ。恐ク通典ニイフ滑國ノ地ノ邑城ヲ指スニハアラザルカト思ハル。滑國ハ西域中ノ一古國、後魏以後ニ及ビ、波斯、渇槃、罽賓、龜茲、疏勒、姑墨、于闐等ソノ傍國ヲ征シ大イニ威ヲ振フトイフ。ソノ稟ラ據リタル地ハ于闐、康居等ノ間ナリシガ如シ。滑國ノ記載ハ太平御覽ニ詳ナリ。瑣碎錄、未ダ見ズ。

るものだ。麻黄附子細辛湯で發汗する。麻黄を節を去つて二兩、附子を炮いて皮を去つて一箇、細辛二兩を用ゐ、水一斗で先づ麻黄を煮て沫を去り、他の二味を納れて三升に煮取り、三回に分服する。(同上)【少陰下痢】少陰の病は、清水、穀物を下利し、裏寒し外熱し、手、足が厥逆し、脈微にして絶せんとし、身が反つて惡寒せぬものだ。その患者が、顔色が赤く、或は腹痛し、或は乾嘔し、或は咽痛し、或は利が止み、脈の出ぬには、通脈四逆湯——大附子一箇を皮を去つて生で八片に破り、甘草を炙いて二兩、乾薑三兩、水三升を一升に煮取り、溫めて二回に分服する。それで脈が出て癒えるものだ。顔色の赤きには、葱莖九本を加へ、腹痛するには、芍藥二兩を加へ、嘔するには、生薑二兩を加へ、咽痛するには、桔梗一兩を加へ、利が止み、脈の出ぬには、人參二兩を加へる。(同上)【陰病惡寒】傷寒で、已に發汗しても解せず、反つて惡寒するは虛したものである。芍藥甘草附子湯で補す。芍藥三兩、甘草を炙いて三兩、附子を炮いて皮を去つて一箇、水五升を一升五合に煮取つて分服する。(同上)【傷寒發躁】傷寒で、下して後に又その汗を發し、晝間は煩燥し、眠れず、夜間安靜ならず、嘔せず、渴せず、表證なくして脈が沈、微となり、身に

大熱なきものは、乾薑附子湯で溫める。乾薑一兩、生附子一箇を皮を去つて八片に破り、水三升で一升に煮取つて頓服する。（傷寒論）【陰盛にして陽に格するもの】傷寒の陰盛格陽。その患者が必ず躁熱して水を飲まず、脈が沈し、手、足が厥逆するはこの證である。霹靂散——大附子一箇を焼いて性を存して末にし、蜜水で調へて服す。寒氣を逼散し、然る後に熱氣が上行し、汗が出て癒える。（孫兆口訣）【熱病の吐、下】及び下利し、身冷し、脈微にして發躁して止まぬものには、附子を炮いて一箇を皮、臍を去つて八片に破り、鹽一錢を入れた水一升で半升に煎じて溫服する。立ろに效がある（經驗良方）【陰毒傷寒】孫兆の口訣に『房事後に寒を受けたために少腹が疼痛し、頭が疼き、腰重く、手、足が厥逆し、脈息が沈、細となり、或は呃逆を作すには、いづれも退陰散がよし。川烏頭、乾薑等分を切つて炒り、そのまま冷まして散にし、一錢づつを水一盞、鹽一撮で半盞に煎じて溫服し、發汗して解す。○本事方では、玉女散——陰毒の心腹痛、厥逆の惡症候を治す。川烏頭を皮、臍を去り、冷水に七日浸して切り晒し、紙に裹んで取り收め、患者があつた場合にそれを末にし、一錢を、鹽八分を入れた水一盞で八分に煎じて服す。さながら猪血のや

うな陰毒を壓下する。一回再服する。○濟生では、回陽散——陰毒傷寒で、顏色青く、四肢が厥逆し、腹痛し、身冷する等、一切の冷氣を治す。大附子三箇を炮き、皮、臍を裂き去つて末にし、三錢づつを薑汁半盞、冷酒半盞で調へて服す。良久して臍下が火のやうに煖かになるを度とする。○續傳信方では、陰毒傷寒で、煩躁し、迷悶し、急するものを治す。重さ半兩の附子一箇を生で四片に破り、生薑一大塊を三片にし、糯米一撮と水一升で六合に煎じて溫服し、暖にして臥す。汗の出ることもあり、出ぬこともあるが、心の定まるを俟ち、水解散の類で解す。冷水を與へてはならぬ。もし渴するならば、更に滓を煎じて服す。屢〻實驗上效果が多かつた。

【中風痰厥】精神朦朧として意識判然せず、口眼喎斜するもの、幷に體虛せる者が痱疾に罹つて寒多きには、五生飮——生川烏頭、生附子を、いづれも皮、臍を去つて各半兩、生南星一兩、生木香二錢五分を用ゐ、五錢づつを生薑十片、水二盞で一盞に煎じた湯で溫服する。(和劑局方)　【中風氣厥】痰壅で、精神朦朧として意識明瞭ならず、六脈が沈、伏するには、生附子を皮を去り、生南星を皮を去り、生木香半兩、以上を四錢づつ、薑九片、水二盞を七分に煎じた湯で溫服する。(濟生方)　【中風

(二四)大觀ニハ外臺祕要トアリ。
(二五)殫ハ癱ノ誤ナラン、癱ハ風疾ノ義。

偏發】羌活湯——生附子一箇を皮、臍を去り、羌活、烏藥と各一兩を用ゐ、四錢づつを生薑三片、水一盞を七分に煎じた湯で服す。(王氏簡易方)【半身不遂】遂に癱瘓を作すには、附子一兩を無灰酒一升に七日間浸し、隔日に一合を飲む。(二四)(延年祕錄)【風病癱緩】手、足(二五)殫曳し、口眼喎斜し、言語蹇澁し、歩行が正しからぬには、主として神驗烏龍丹を用ゐるがよし。川烏頭を皮、臍を去り、五靈脂と各五兩を末にし、龍腦、麝香五分を入れ、水を滴らして彈子大の丸にし、一丸づつを、先づ生薑汁で研り溶かして暖酒で調へて服す。一日二服し、漸次増加して五七丸に達すれば、手が擡がり、歩が運べ、十丸に達すれば、頭髮を自から梳れるやうになる。(梅師方)【風寒濕痺】麻木して不仁なるもの、或は手、足の不遂なるには、生川烏頭末四錢づつを、好き白米で煮た粥一盌に入れ、慢かに熬つて適當になつた時、薑汁一匙、蜜三大匙を投じ、空腹にして啜る。或は薏苡末二錢を入れる。左傳に『風淫で末病む』とは四末のことで、脾は四肢を主るものだ。風淫が肝に客すれば脾を侵して四肢が病むことである。この湯は極めて效力のあるもので、予は毎にこれを患者に與へて好結果を擧げてゐる。(許學士本事方)【體虛して風あるもの】外部に寒濕

を受けたために、身體が空中に在るやうに覺ゆるには、生附子、生天南星各二錢、生薑十片、水一盞半を慢火で煎じて服す。予が曾てこの病に罹つたとき、醫博士の張子發からこの方を授かり、二服で癒えた。(本事方)【口、眼喎斜】生烏頭、青礬各等分を末にし、一字づつを鼻中に嗜ひ入れる。涕を出し、涎を吐き、立ろに效あること無比の藥である。これを通關散と名ける。(箧中祕寶方)【俄かに口の噤痱するもの】卒忤、停尸。いづれも附子末を喉中に吹入れば癒える。(千金翼)【產後の中風】身體を角弓のやうに反張し、口噤して發語し得ぬには、川烏頭五兩を塊に剉み、黑大豆半升と共に炒つて半ば黑くし、酒三升をその鍋の中に傾け入れて急に攪きまぜ、絹で濾してその酒を取り、一小盞を微溫にして服し、汗を取る。もし口を開かぬ場合にはこじ開けて灌ぎ込む。なほ效の現はれぬときは烏雞糞一合を加へ、炒つてその酒中に入れて服す。癒えるを度とする。(小品)【諸風、血風】烏荊丸——諸風で縱緩し、言語蹇澁し、全身麻痛するもの、及び婦人の血風で頭痛、目眩するもの、(三六)腸風、臟毒で下血して止まぬものを治す。これを服するが尤も有效だ。痛風で攣搐し、頤頷の收まらぬは六七服で癒える。川烏頭を炮いて皮、臍を去つて一兩、荊

(三六)腸風臟毒ハ共ニ便血ノコト。

(二七)天柱ハ腦後髮際脊脈ヲ首左ニ去ルコト一寸三分。
(二八)顖ハヒヨムケ。

芥穗二兩を末にし、醋麪糊で梧子大の丸にし、溫酒、或は熱水で二十丸づつを服す。(和劑方)【婦人の血風】虛冷し、月經が均調ならず、或は手、脚の心が煩熱し、或は頭部、面部が浮腫し、頑麻するには、川烏頭二斤、淸油四兩、鹽四兩を共に鍋で熬り、裂けて桑椹の色のやうになるを度として皮、臍を去り、五靈脂四兩を末にして搗きまぜ、蒸餅で梧子大の丸にし、空心に溫酒、鹽湯で二十丸を服す。男子の風疾をも治す。(梅師方)【諸風癎疾】生川烏頭を皮を去つて二錢半、五靈脂半兩を末にし、猪心血で梧子大の丸にし、一丸づつを薑湯に溶して服す。【小兒の慢驚】搐搦し、涎壅し、厥逆するには、川烏頭を生で皮、臍を去つて一兩、全蠍十箇を尾を去り、これを三服に分け、水一盞、薑七片の煎湯で服す。(湯氏嬰孩寶鑑)【小兒の項軟】これは肝、腎の虛に風の邪が襲ひ入つたものである。附子を皮、臍を去り、天南星と各二錢を末にして薑汁で調へ、攤して(二七)天柱骨に貼り、瀉靑丸を內服する。(全幼心鑑)【小兒の(二八)顖陷】綿烏頭、附子を、いづれも生で皮、臍を去つて二錢、雄黃八分を末にし、葱根と搗きまぜて餅にし、陷つた部分に貼る。(全幼心鑑)【麻痺疼痛】仙桃丸――手、足麻痺し、或は癱瘓し、疼痛し、腰、膝の痺痛するもの、或は打撲傷、

(二九)閃肭ハ脂紡過多。

(三〇)大觀ニ千金翼ニ作ル。

(二九)閃肭(せんとつ)で忍び難く痛むを治す。生川烏を皮を去らず、五靈脂と各四兩、威靈仙五兩を洗ひ焙じて末にし、酒糊で梧子大の丸にし、七丸乃至十丸づつを鹽湯で服す。茶を忌む。この藥は、常服すればその效神の如きものだ。(普濟方)【風痺の肢痛】營、衛が行らぬものである。川烏頭を炮いて皮を去り、大豆と共に汗の出るまで炒つて豆を去つて焙じ乾し、全蠍半錢を焙じて末にし、釅醋(げんさく)で熬稠して綠豆大の丸にし、一日一回、七丸を溫酒で服す。(聖惠方)【腰、脚の冷痺】疼痛するは風があるためだ。川烏頭三箇を生で皮、臍を去つて散にし、醋で調へて帛に塗つて貼る。須臾にして痛が止まる。(三〇)(聖惠方)【大風諸痺】痰澼(たんへき)し、脹滿するには、重さ半兩の大附子一箇を炮いて割き、春、冬は五日間、夏、秋は三日間酒に漬け、一合づつを服し、瘥えるを度とする。(聖惠方)【脚氣の腿腫(たいしゆ)】久しく瘥えぬには、黑附子一箇を生で皮、臍を去つて散にし、生薑汁で膏のやうに調へて塗り、藥が乾けば再び塗る。腫の引くを度とする。(簡要濟衆)【十指の疼痛】麻木して不仁なるには、生附子を皮、臍を去り、木香と各等分、生薑五片を水で煎じて溫服する。(王氏簡易方)【風を捜り、氣を順にする】烏附丸——川烏頭二十箇、香附子半斤を薑汁に一夜漬け、炒り焙じて末

にし、酒糊で梧子大の丸にし、十丸づつを溫酒で服す。肌體(きたい)が肥壯にして風疾あるものは、これを常服するがよし。（澹寮方）【頭風の頭痛】外臺秘要では、（三一）臘月の烏頭一升を黃になるまで炒つて末にし、絹袋に納れて酒三斗の中に浸し、逐日溫服する。○孫兆口訣(そんてうくけつ)では、附子を炮き、石膏を煆いて等分を末にし、腦、麝少量を入れ、半錢づつを茶、酒の任意のもので服す。○修眞祕旨では、附子一箇を生で皮、臍を去り、綠豆一合と共に銚子に入れ、豆の熟するまで煮てから、附子を去つて綠豆を食ふ。立ろに癒える。附子一箇每に五回まで煮てよし。その後は末にして服す。【風毒の頭痛】聖惠方では、風毒の攻注で、頭、目が忍び難く痛むを治す。大附子一箇を湯に泡(つ)けて皮を去つて末にし、生薑一兩、大黑豆一合を炒熟し、酒一盞で七分に煎じ、その附子末一錢を調へて溫服する。○又、ある方では、二三十年癒えざる頭風を治す。大川烏頭を生で皮を去つて四兩、天南星を炮いて一兩を末にし、每服二錢を、細茶三錢、薄荷七葉、鹽梅一箇、水一盞を七分に煎じた湯で就寢時に溫服する。○朱氏集驗方では、頭痛して瞳(ひとみ)まで痛むを治す。生烏頭一錢、白芷四錢を末にし、茶で一字を服してから、末を鼻から嚊(す)ふ。ある患者にこれを用ゐて奏效した。

（三一）臘月烏頭、外臺秘要ヲ按ズルニ、臘月烏雞屎ナリ、恐クハ時珍誤認シテ引用セルナリ。

【風寒の頭痛】十便良方では、風寒が頭の內部に客して清涕を出し、項筋が急硬するもの、胸中の寒痰で淸水を嘔吐するものを治す。大附子、或は大川烏頭二箇を皮を去つて蒸し、川芎藭、生薑各一兩を焙じ硏り、茶湯で一錢を調へて服す。或は片に剉んで五錢づつを水で煎じ、三四日を隔てて一回服す。或は防風一兩を加へる。○三因方では、必效散——風寒流注の偏正頭痛で、年久しく癒えぬを治す。最も神效がある。大附子一箇を生で四片に切り、薑汁一盞に浸して炙り、再び浸して再び炙り、汁が盡きるまで繰返して止め、高良薑と等分を末にし、一錢づつを臘茶淸で調へて服す。少時熱物を忌む。【頭風を摩散する法】頭を沐して風に中り、汗多く、風に當るを不快に感ずるものは、風を先に治すべきものだ。一日經過すれば痛み甚しくなる。大附子一箇を炮いて食鹽と等分を末にし、方寸匕を顖上に摩擦して藥力を行らしめる。或は油で調稀して用ゐるもよし。一日三回試みる。(張仲景方)【年久しき頭痛】川烏頭、天南星等分を末にし、葱汁で調へて太陽穴に塗る。(經驗)【頭痛斧劈】斧で割られるやうに痛んで忍び難きには、川烏頭末を烟に燒いて碗の內側を熏じ、それに溫茶を注ぎ泡けて服す。(集簡方)【痰厥頭痛】破れるやうに痛み、厥氣

上衝し、痰が胸膈を塞ぐには、炮いた附子三分、釜墨四錢を冷水で調へて方寸匕づつを服す。吐いて癒るものだ。猪肉、冷水を忌む。【腎厥頭痛】指南方では、大附子一箇を炮熟して皮を去り、生薑半兩、水一升半で煎じて三回に分服する。○經驗良方では、韮根丸——元陽が虚して破るやうに頭痛し、眼睛が錐で刺すやうに痛むを治す。大川烏頭を皮を去つて微し炮き、全蠍を糯米で炒つて米を去り、等分を末にして韮根汁で綠豆大の丸にし、一日一回、十五丸づつを薄荷茶で服す。【氣虚頭痛】氣虚上壅の偏正頭痛で忍び難きには、大附子一箇を皮、臍を去つて研末し、葱汁、麪糊で綠豆大の丸にし、十丸づつを茶清で服す。○僧繼洪の澹寮方では、蠍附丸——氣虚頭痛には、ただこの方が最も造化の妙に合致する。附子は、陽を助け、虚を扶け、鍾乳は、陽を補し、鎭墜し、全蠍は、その鑽透する働を取り、葱涎は、その氣を通ずる働を取り、湯に使として用ゐるものの椒は下に達し、鹽は功用を引き、虚氣をして下部に歸せしめる。對證を正確にして用ゐれば奏效せぬものなしといふ。大附子一箇を心を剜り、毒を去つた全蠍二箇を入れ、剜り出した附末と鍾乳粉二錢半、白麪少量を水で和して劑としたもので包んで煨熟し、皮を去つて研末

し、葱涎で和して梧子大の丸にし、五十丸づつを椒鹽湯で服す。【腎氣の上攻】頭、項の轉移不能なるには、椒附丸――大熟附子一箇を末にし、椒二十粒の椒口に白麪を塡滿し、水一盞半、薑七片と七分に煎じ、椒を去つて鹽を入れ、その湯に附末を點てて空心に服す。椒の氣は下部に達し、逆氣を引いて經に歸す。(本事方)【鼻淵腦泄】生附子末を葱涎で和し、泥のやうにして(三二)涌泉穴を盦ふ。(普濟)【耳鳴の止まぬもの】晝夜間斷なきものには、烏頭を燒いて灰にし、菖蒲と等分を末にし、綿で裹んで塞ぐ。一日二回試みて效を取る。(楊氏產乳)【突然の耳の聾閉】附子を醋に浸し、尖を削つて挿む。或は更にその上に二七壯灸する。(本草拾遺)【聤耳の膿血】生附子を末にし、葱湯で和して耳中に灌ぐ。(肘後)【喉痺腫塞】附子を皮を去つて炮いて拆かせ、蜜を塗つて炙つて蜜を浸み入らせ、それを含む。汁を嚥んではならぬ。已に十分腫れたものならば膿を出し、まだ十分ならぬものならば消く。(本草拾遺)【口瘡の久患】生附子を末にして醋、麪で調へ、一日二回、男は左、女は右の足心に貼る。(三三)(經驗)【風蟲牙痛】普濟方では、附子一兩を灰に燒き、枯礬一分と末にして揩る。○又、ある方では、川烏頭、川附子を生で研り、麪糊で小豆大の丸にし、

(三二)涌泉ノ穴ハ足心ニアリ。

(三三)大觀ニ驗ノ下ニ後方ノ二字アリ。

一丸づつを綿に包んで咬む。○删繁方では、炮いた附子末を孔中に納るれば止む。【眼の劇しき赤腫】烈しく痛んで開き得ず、涙が出て止まぬには、附子の赤皮を削つて末にし、蠶の糞ほどを背中に著ける。痛の鎮まるを度とする。(張文仲備急方)【一切の冷氣】風痰を去り、全身の疼痛を鎮め、元氣を益し、力を强くし、精を固め、髓を益し、人をして疾病を少からしめる。川烏頭一斤を五升入の甕鉢で七日間童尿に浸し、逐日童尿を添加して溢れ出させ、壞れたものは揀出して用ゐず、その他のものを竹刀で四片に切り、新汲水で七回淘つてから水に浸して日毎にその水を換へ、一定の日數に達したとき、取り出して焙じて末にし、酒で煮た麪糊で綠豆大の丸にし、十丸づつを空心に鹽湯で服し、少し粥飯を食つて壓する。(經驗方)【諸氣を升、降する】暖かなれば宣流するものだ。熟附子の大なるもの一箇を二服に分け、水二盞で一盞に煎じ、沈香汁を入れて溫服する。(和劑局方)【中寒昏困】薑附湯——體虛して寒に中り、精神朦朧として意識不明瞭のもの、及び臍腹冷痛、霍亂轉筋、一切の虛寒の病を治す。生附子一兩を皮、臍を去り、乾薑を炮いて一兩を用ゐ、三錢づつを水二鍾で一鍾に煎じて溫服する。(和劑局方)【心腹の冷痛】冷、熱して氣の不

調和なるには、山巵子、川烏頭等分を生で研末し、酒糊で梧子大の丸にし、十五丸づつを生薑湯で服す。小腸の氣痛には、炒つた茴香、葱、酒を加へて二十丸を服す。(王氏博濟方)【心痛疝氣】濕熱であつて、寒鬱が因となつて發るものだ。濕熱を降す巵子と寒鬱を破る烏頭を用ゐる。烏頭は巵子に導かれ、その性急速にして胃中に留らぬのである。川烏頭、山巵子各一錢を末にし、順流水に薑汁一匙を入れて調へて服す。(丹溪纂要)【寒厥心痛】及び小腸、膀胱痛の止めやうなきには、神砂一粒丹——熟附子を皮を去り、鬱金、橘紅と各一兩を末にし、醋麪糊で酸棗大の丸にして朱砂を衣にかけ、一丸づつを、男子は酒、婦人は醋湯で服す。(宣明方)【寒疝腹痛】臍を遶つて痛み、手、足が厥冷し、自汗を出し、脈が弦して緊なるに主として用ゐる大烏頭煎——大烏頭五箇を臍を去り、水三升で一升に煮取つて滓を去り、蜜二升を納れて煎じて水氣を盡さしめ、體質の强きものは七合を服し、弱きものは五合を服す。なほ癒えぬときは翌日更に服す。(張仲景金匱玉函方)【寒疝身痛】腹痛し、手足逆冷し、不仁となり、或は身痛して睡眠不能となるに主として用ゐる。烏頭桂枝湯——烏頭一味を蜜二斤で半減するまで煎じ、桂枝湯五合を入れて一升に溶解し、二合

を初服して反應なきときは再服し、なほ反應なきときは五合まで增加する。反應があれば、醉へる如き狀態となつて吐く。それが病に的中したのである。（金匱玉函）【腸に引く寒疝】脇、心、腹が皆痛み、諸藥の奏效せぬには、大烏頭五箇を角を去つて四片に破り、白蜜一斤で煎じ透らせて取り、焙じて末にし、別の熟蜜で和して梧子大の丸にし、二十丸づつを冷鹽湯で服す。永く病を除く。（崔氏方）【寒疝の滑泄】腹痛、腸鳴、自汗、厥逆するには、熟附子を皮、臍を去り、玄胡索を炒つて各一兩、生木香半兩を用ゐ、四錢づつを、水二盞、薑七片で七分に煎じて溫服する。（濟生方）【小腸諸疝】倉卒散——寒疝腹痛、小腸氣、膀胱氣、脾、腎諸痛で、攣急忍び難く、汗を出し、厥逆するを治す。大附子を炒つて皮、臍を去つて一箇、山梔子を炒焦して四兩を用ゐ、三錢づつを、水一盞、酒半盞で七分に煎じ、鹽一捻を入れて溫服する。○宣明方では、陰疝の小腹腫痛を治するに、蒺藜子等分を加へる。○虛する者には、桂枝等分を加へて薑糊で丸にし、酒で五十丸を服す。【虛寒の腰痛】鹿茸を毛を去つて酥で炙つて微し黃にし、附子を炮いて皮、臍を去つて各二兩、鹽花三分を末にし、棗肉で和して梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に溫酒で服す。○夷堅

〔一四〕大觀ニ斗門方ニ作ル。

志には『時に康祖大夫が心胸を病み、數竅から一樣に漏して汁を流し、二十年の長きに及んだ。又、腰痛に苦んで歩行に傴僂のやうになり、身體、精神共に憔悴し、醫師も治療の方法がなかつたが、通判の韓子溫が治法を試みんとして聖惠方を調べ、この方を見出して服ませたところ、十日餘で腰痛が減じ、久服して遂に瘥え、心漏もやはり瘥えて、精力が平常に倍し、歩行も輕捷になつた。この方は元來腰を治するにかやうな效のあるものだ』とある。【元臟の傷冷】〔一五〕經驗方では、附子を炮いて皮、臍を去つて末にし、水二盞にその末藥二錢を入れ、鹽、葱、薑、棗と共に一盞に煮取り、空心に服す。積冷を去り、下元を暖め、腸を肥し、氣を益す。酒、食共に礙げなし。○梅師方では、二虎丸――元臟を補し、食欲を進め、筋骨を壯にする。烏頭、附子と合せて四兩を釅醋に三晝夜間浸して片に切り、地上に一小坑を掘つてその坑内を炭火で赤く燒き、醋三升と右の藥とを傾け入れて盆で密閉し、一夜置いて取り出して砂土を去り、青鹽四兩を入れて共に赤黄色に炒つて末にし、醋で作つた麪糊で梧子大の丸にし、空心に冷酒で十五丸を服す。婦人にも宜し。【痰のある胃冷】脾が弱つて嘔吐するものである。生附子、半夏各二錢、薑十片、水二盞を七

分に煎じ、空心に溫服する。ある方では、いづれも炮熟して木香五分を加へる。（奇效良方）【久冷反胃】經驗方では、大附子一箇、生薑一斤を細剉し、共に煮て麪糊のやうに研り、一錢づつを米飮に溶して服す。○衞生家寶方では、薑汁で作つた糊で附子末を和して丸にし、大黃を衣にかけ、十丸づつを溫水で服す。○斗門方では、長大な附子一箇を甎の上へ据ゑ、四面から火力をじりじりと逼り加へて生薑の自然汁に淬し、再三繰返して薑汁半碗ほどを淬し滲まして止め、研末して一錢づつを粟米飮で服す。三服に過ぎずして瘥える。或は猪腰子を切片して炙熟し、その末を蘸けて食ふ。○方便集では、大附子一箇を頭を切り離し、一箇の穴を明けて丁香四十九箇を入れ、切離した頭を合せて絲で括り、砂銚に入れて薑汁に浸し、文火で熬り乾して末にし、一日十數回、少量づつを掌の心に取つて舐める。毒物、生、冷物を忌む。【脾寒瘧疾】濟生方に『五臟氣虛し、陰陽相勝つて發した痎瘧は、寒多く、熱少く、或はただ寒して熱せぬものだ。七棗湯を主として用ゐるがよし。附子一箇を七回炮いて七回鹽湯に浸し、皮、臍を去つて二服に分け、水一碗、生薑七片、棗七箇を七分に煎じて一夜露らした湯で、發作の日に空心に溫服し、久しからずして再

び一服する』とある。王璆の百一選方には『寒痰には附子がよく、風痰には烏頭がよし。烏頭を用ゐるには、寒多き患者には火で七回炮き、熱多き患者には湯に七回泡け、皮を去り焙じ乾して上記の法の如くにして用ゐる。烏頭は性が熱だが多く炮けば熱が散ずるものだ』とある。〇又、果附湯――熟附子を皮を去り、草果仁と各二錢半を、水一盞、薑七片、棗一箇を七分に煎じた湯で發作の日の早朝に温服する。〇肘後方では、發作の時に醋で附子を和して背上に塗る。【寒熱瘧疾】重さ五錢の附子一箇を麪で煨き、人參、丹砂と各一錢を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを發作せぬ前に三服續けざまに服す。藥力が病に的中すれば吐く。或は身體麻木するならばまだ的中せぬのである。翌日再服する。（羅安常傷寒論）【瘴瘧寒熱】冷瘴で、寒熱往來し、頭痛し、身疼し、嘔痰し、或は汗多く、引飲し、或は自利し、煩躁するには、薑附湯を主として用ゐるがよし。大附子一箇を四片に破り、一片づつを、水一盞、生薑十片を七分に煎じて温服する。李待制は『これは極妙の方だ』といひ、章傑は『嶺南地方では、瘂瘴を最危急なものとしてあつて、一二日以內で死亡するものだが、醫師は、極熱に寒を感じたものと解釋し、生附子一味でこれを

治療するが、多くは癒える。これは熱を以て熱を攻め、寒邪を發散するのではあるまいか。眞に起死回生の藥だ』といつてある。（嶺南衞生方）【小便虛閉】兩手の尺脈が沈、微となり、利尿藥を用ゐても奏效せぬは虛寒である。附子一箇を炮き、皮、臍を去つて少時鹽水に浸し、澤瀉一兩とを用ゐ、四錢づつを、水一盞半、燈心七莖を煎じた湯で服す。直に癒える。（普濟方）【腫疾喘滿】大人、小兒、男子、婦人の積から發した腫で、積を取つても再び腫が作り、小便が利せぬものは、再び利藥を用ゐれば、性が寒なるために愈よ小便が通じなくなる。此に到つては醫師も多くは手を束ねるの外はない。蓋しそれは中焦、下焦の氣が升降して寒のために膈に痞するのだ。故に水が凝つて通ぜぬのである。これにはただ沈附湯を服ませれば、小便は自から通じ、喘滿は自から癒える。生附子一箇の皮、臍を去つた切片と生薑十片を、沈香一錢を磨つた水に入れて共に煎じ、食前に冷飮する。附子を三五十箇まで用ゐても一向害はない。小兒は三錢づつ水で煎じて服す。（朱氏集驗方）【脾虛の濕腫】大附子五箇を皮を去つて四片に破り、赤小豆半升の中へ入れて慢火で煮熟し、豆を去つて附子を焙じて研末し、薏苡仁粉で作つた糊で梧子大の丸にし、十丸づつを蘿蔔湯で服

す。（朱氏集驗方）【陰水腫滿】烏頭一升、桑白皮五升、水五升を一升に煮取り、滓を去つて銅器に盛り、重湯で丸にし得るまでに煎じて小豆大の丸にし、三五丸づつを服す。小便が利すれば佳し。油膩、酒、麪、魚肉を忌む。○又ある方では、大附子を童尿に三晝夜浸して逐日尿を換へ、布で皮を擦り去つて泥のやうに搗き、酒糊で和して小豆大の丸にし、三十丸づつを煎流氣飲で送下する。（普濟方）【大腸の冷祕】附子一箇を炮いて皮を去り、中心を棗の大いさほど取つて末にし、二錢を蜜水で空心に服す。（聖濟總錄）【老人の虛泄】禁ぜぬには、熟附子一兩、赤石脂一兩を末にして醋糊で梧子大の丸にし、米飲で五十丸を服す（楊氏家藏方）【冷氣洞泄】生川烏頭一兩、木香半兩を末にして醋糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを陳皮湯で服す。（本事方）【臟寒脾泄】及び老人の中氣、不足で久泄して止まぬには、肉豆蔻二兩を煨熟し、大附子を皮、臍を去つて一兩五錢と末にして粥で梧子大の丸にし、八十丸づつを蓮肉の煎湯で服す。○十便良方では、脾、胃が虛冷し、大腸が滑泄し、米穀の食物が消化せず、力乏しきものを治す。皮のままの大附子十兩、大棗二升を共に石器に入れ、水を絕えず兩指の高さにして一日間煮て取り出し、毎箇を三片づつに切り、

再び共に半日煮て皮を削り去り、切つて焙じて末にし、別の棗肉で和して梧子大の丸にし、三四十丸づつを空心に米飲で服す。【小兒の吐泄】注下し、小便少きには、白龍丸——熟附子五錢、白石脂を煆き、龍骨を煆いて各二錢半を末にし、醋麪糊で黍米大の丸にし、小兒の大小を量つて米飲で服す。(全幼心鑑)【霍亂吐泄】止まぬには、重さ七錢の附子を炮いて皮、臍を去つて末にし、四錢づつを、水二盞、鹽半錢で一盞に煎じた湯で溫服する。立ろに止まる。(孫兆祕寶方)【水泄久痢】川烏頭二箇を、一箇は生で用ゐ、一箇は黑豆半合と共に煮熟し、研つて綠豆大の丸にし、五丸づつを黃連湯で服す(普濟方)【久痢赤白】獨聖丸——川烏頭一箇を灰火で燒き、烟が盡きたとき地上に取り出して盞を蓋せ、良久してそれを研末し、酒で溶した麪で大麻子大の丸にし、三丸づつを、赤痢には黃連、甘草、黑豆の煎湯を放冷して呑下し、白痢には甘草、黑豆の煎湯を冷して呑む。もし瀉し、または肚痛するならば水で呑下す。いづれも空心に服す。熱物を忌む。(經驗良方)【久しき休息痢】熟附子半兩を研末し、雞子白二箇と搗き和して梧子大の丸にし、沸湯に入れて數沸煮て漉出し、二服に分けて米飲で服す。(聖濟總錄)【下痢欬逆】脈沈して陰寒するものには、

退陰散を主として用ゐる。陳自明は『ある者はこの病が止まなかつたが、この方を二服して癒えた』といつてある。方は前記の陰毒傷寒の項に記載してある。【下血虛寒】日久しき腸冷には、熟附子を皮を去つて枯白礬一兩と末にし、三錢づつを米飲で服す。○又、ある方では、熟附子一箇を皮を去り、生薑三錢半と水で煎じて服す。或は黑豆一百粒を加へる。(いづれも聖惠方)【陽虛吐血】生地黃一斤を搗いた汁に酒少量を入れ、熟附子一兩半を皮、臍を去り切片し、その中へ入れて石器で煮て膏にし、その附片を取り出して焙乾し、山藥三兩を入れて研末し、前の膏と和し搗いて梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に米飲で服す。昔、葛察判の妻がこの病であらゆる藥を悉く試み、この方を得て始めて癒えた。屢〻發するがその都度效果がある。(余居士選奇方)【尿の頻數、白濁】熟附子を末にし、二錢づつを、薑三片、水一盞を六分に煎じた湯で溫服する。(普濟方)【虛火背熱】虛火が背に上行し、火で炙くやうに內熱するには、附子末を津液で調へて涌泉穴に塗る。(摘玄方)【月經不順】血臟の冷痛であつて、この方が平易捷徑だ。熟附子を皮を去り、當歸と等分を三錢づつ水で煎じて服す。(普濟方)【斷產下胎】生附子を末にし、醇酒で和して右足の心に塗

る。胎が下ればこれを取り去る。（小品方）【折腕損傷】卓氏膏——大附子四箇を生で切り、猪脂一斤、三年の苦醋と共に三晝夜漬け、その脂を三回煎じ三回冷して日毎に摩し傅ける。（深師方）【癰疽腫毒】川烏頭を炒り、黄蘗を炒つて各一兩を末にし、唾液で調へて腫の頭部だけを殘して塗る。乾けば米泔で潤ほす。（同上）【癰疽の久漏】瘡口が冷えて濃水が絶えず、內に惡肉なきには、大附子に水を浸透して厚さ三分の大片に切り、それを瘡口に載せて艾で灸する。數日を隔てて一回灸し、五七回試みてから內托藥を服す。自然に肌肉が長滿する。研末を餅にして用ゐるもよし。（薛己外科心法）【癰疽の弩肉】眼のやうなものが出て斂らず、諸藥を用ゐても治癒せぬには、この法が極めて妙である。附子を碁石ほどに剉んで唾で粘し、弩肉上に貼つてその上から艾火で灸する。附子が焦げたときはまた唾で濕して再び灸し、熱を內部に徹らせれば瘥える。（千金方）【癰疽の肉突】烏頭五箇を濃醋三升に三日漬け、それで一晝夜三四回洗ふ。（古今錄驗）【丁瘡腫痛】醋で附子末を和して塗り、乾けば再び塗る。（千金翼）【疥癬の久しきもの】川烏頭を生で切り、水で煎じて洗ふ。甚だ效驗がある。（聖惠）【手、足の凍裂】附子を皮を去つて末にし、水と麪で調へて塗るが良し。

（談野翁試驗方）［足釘怪疾］兩足の心が凸腫してその上に釘のやうな硬い黒豆瘡を生じ、脛骨に碎孔が生じて髓が流出し、身體が發寒して顫ひ、ただ酒を飲みたがる病である。これは肝、腎の冷熱相呑むが原因だ。炮いた川烏頭末を傅け、韭子湯を內服すれば效がある。（夏氏奇疾方）

烏頭附子尖　主　治　［末にして茶で半錢を服し、風痰、癲癇を吐かす］（時珍）

發　明　時珍曰く、烏、附は、その尖を用ゐるはやはりその銳氣が直ちに病所に達する點を取るのであつて、外に意味はない。保幼大全に『小兒の慢脾驚風で四肢の厥逆するには、附子尖一箇、硫黃を黃棗大のもの一箇、蠍梢七箇を末にし、薑汁麪糊で黃米大の丸にし、十丸づつを米飲で服す。また久瀉の尫羸をも治す。凡そ烏、附を用ゐるには性の熱なるに固執してはならない。その手、足の冷の狀態を正確に見極めて、輕いときは湯を用ゐ、甚しいときは丸を用ゐ、重きものには膏を用ゐて、手、足が暖かになり、陽氣の回復が現れれば佳いのだ』とある。按ずるに、この方は和劑局方の碧霞丹の變法である。眞の慢脾風以外には輕輕しく用ゐてはならないものだ。故に初虞世は金虎・碧霞の戒を示してある。

【附方】舊二、新七。【風厥癲癇】凡そ中風痰厥、癲癇、驚風、痰涎の上壅で、牙關緊急し、上目をつかひ、搐搦するには、いづれも碧霞丹を主として用ゐるがよし。烏頭尖、附子尖、蠍梢各七十箇、石綠を研つて九回飛過して十兩を末にし、麪糊で芡子大の丸にし、一丸づつを薄荷汁半盞に溶して服し、更に溫酒半合を服す。須臾にして痰涎を吐出すること妙である。小兒の驚癇には白殭蠶等分を加へる。（和劑局方）【臍風撮口】生川烏尖三箇、全足の蜈蚣半條を酒に浸して炙いて麝香少量と末にし、少量を鼻に吹き入れ、嚏をしてから、薄荷湯で一字を灌ぎ込む。（永類方）【木舌腫脹】川烏尖、巴豆を研細して醋で調へて塗り刷く。（集簡方）【忍び難き牙痛】附子尖、天雄尖、全蠍各七箇を生で研末して點ける。（永類方）【奔豚疝氣】痛み、或は陰囊の腫痛するには、去鈴丸——生川烏尖七箇、巴豆七粒を皮、油を去つて末にし、糕糊で梧子大の丸にし、朱砂、麝香を衣にかけ、二丸づつを空心に冷酒、或は冷鹽湯で服す。兩三日に一服する。多く用ゐてはならぬ。（瀟寮方）【甲を割いて瘡となつたもの】連年癒えぬには、川烏頭尖、黃蘗等分を末にし、洗つてから貼る。癒えるを度とする。（古今錄驗）【老幼の口瘡】烏頭尖一箇、天南星一箇を研末し、薑汁で和して男は

左、女は右の足の心に塗る。二三回に過ぎずして癒える。

本草綱目草部第十七卷上　終

昭和五年六月廿五日印刷
昭和五年六月廿八日發行

頭註國譯本草綱目（第五冊）
非賣品

監修兼翻譯者　白井光太郎
　　　　　　　鈴木眞海

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彥

東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　木村諭吉

東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行